

異世界サバイバルに、神様なんていない！

rikka

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

(旧題・ミステリアスな世界でファンタジックなサバイバル生活、いかがですか?)

主人公、竹内透はごくごく普通の高校生——だったはずが、帰宅したその瞬間から生活は激変してしまう。

家の玄関をくぐった瞬間、突然見知らぬ森の中に放り込まれた!

持ち物は僅か、知識も経験もろくに持っていない!

そんな中、役立たずになったスマホに変化が起こり?

どこか奇妙で不自然な森の中、透は生き延びるためにサバイバル生活にチャレンジを始める!

朽木様より、本作のヒロインであるアオイを書いていたいただきました!

<https://img.syosetu.org/img/user/38465/51717.jpg>

※小説家になろう・カクヨム・ノベルアップ+の方にも、同タイトルで投稿しております

## 目次

序章：扉をくぐると、そこは謎の森でした。

001：玄関を開けると、そこは森の中でした。 | 1

002：スキル&ファースト・コンタクト(?) | 13

003：テント・シエルター作製は場所選びが肝心です | 21

004：体温の管理は基本中の基本! | 29

005：石の使い道。なお、同行者は | 36

006：三人目 | 44

007：プラス一名救助。(副題：相棒との距離が計れません)

50

第一章：4人のおかしいサバイバー(副題：暗躍)

008：RPGのパーティーって四人が多いよね | 59

009：セカンドスキルはちよつと保留 | 64

010：個か、全か | 71

011：二つめのスキルは | 75

012：男二人の語らい | 81

013：合流 | 86

014：おかしいのはスキルか、それとも | 90

015：気力回復! | 95

016：探索with工員 | 99

017：第二拠点は湖畔とする! | 105

幕間くアオイという女 | 111

018：帰還、合流、会議の三本立て | 115

019：THE お引越! | 121

幕間く敵同士の語らい | 124

020：紐は意外と大事

—————

129

021：三つめ？

—————

133

022：罨猫には免許や仕掛けてはいけない罨もあるので気を付けよう

—————

138

023：というかサバイバルブックの罨って9割違法

—————

145

024：黒曜石とは天然のガラスである

—————

151

幕間く女と女の会話く

—————

155

025：罨で大事ななのは『場所』と『数』である

—————

159

026：色んな意味で『餌』が必要

—————

163

027：なんだかんだで昆虫食の歴史は凄い

—————

168

028：『科学』の国と『魔法』の国

—————

174

幕間く嘘付きと嘘付きによる狩りく

—————

179

029：肉は寝かせた方が美味い

—————

184

030：透ことトールの活動記録

—————

191

幕間く作業員く

—————

199

031：学生と剣士の釣り日記

—————

204

032：湯船の気持ちよさは反則レベル

—————

212

033：チャレンジ☆素焼き！

—————

218

幕間くまだ見ぬ二人く

—————

227

034：やめとけ、それ落とし穴だから

—————

231

035：またもやスキル会議（副題：どこから君らはやってくる？）

—————

238

036：岩場にて素晴らしい物を発見してしまった！

—————

243

幕間くはじまりはじまりく

—————

248

037：特に意味のない告白

—————

254

|     |                            |     |
|-----|----------------------------|-----|
| 038 | 嵐の前の                       | 260 |
| 039 | 対立                         | 266 |
| 040 | 現出                         | 276 |
|     | 『ツール』                      | 282 |
| 041 | やだこのスキル、怪しすぎ？              | 289 |
|     | 第二章：脱出大作戦！ フロムフォレスト（副題：葛藤） |     |
| 042 | 一難去つて、また朝が来る               | 296 |
|     | 幕間：スパイとスパイ                 | 301 |
| 043 | 新入りさん、いらつしやい！（まずは家作り）      | 306 |
| 044 | 次のミッションは探険！ そして両手に花！       | 313 |
|     | 幕間　く　剣士と貴族の会話く             | 320 |
| 045 | RPGⅡ探険という風潮                | 325 |
| 046 | ナニカの傷痕                     | 333 |
| 047 | 人と人                        | 342 |
| 048 | 海と四つめの世界                   | 350 |
| 049 | 錬金術師『クラウド』Ⅱクラス             | 357 |
|     | 幕間　く　拠点の朝会議く               | 364 |
| 050 | 合流。（副題・とある二人の密会）           | 369 |
|     | 『火種』                       | 376 |
| 051 | 新しいスキ……ル……？                | 382 |
| 052 | update                     | 389 |
|     | 幕間く　貴族と革命家く                | 401 |
| 053 | クラウド先生の錬金術講義（準備編）          | 406 |
|     | 貴族から見た『彼と彼女』               | 412 |
| 054 | ちえんじ！                      | 420 |

幕間 　　↳ a n 　i n c o m p l e t e 　s a i n t 　↳ 428

055 : 引越し準備と初の魔法 436

056 : 『潜むモノ』 443

幕間 　　↳ 海へと向かう二人 450

057 : イレギュラー 456

058 : いいひと 465

059 : 『エゴ』 476

『ヴィレッタ』 484

060 : 天が遣わす者。あるいは、天の言葉を伝える者 497

『アオイ』 508

エピローグ : 『いつも』に、また 523

第三章 : レッツ開拓！ 海はすぐそこだ！

061 : 新しい始まり (副題 : 三組に別れての行動・調査・暗躍)

535

062 : 結局湖は重要だった件について 548

063 : どんな時でも衛生を忘れてはいけません 555

064 : 整地魔法の活用……活用？ 563

幕間 : 魔術師とガイノイド (副題 : i c u) 569

065 : 炭焼きとは職人芸である 581

066 : 女はまだ、話せない。 588

067 : 水を貯める者。火を付ける者。 600

幕間↳サムライガール&カニバル・アルケミスト 614

068 : 『はじまり、はじまり』 620

069 : アピールってすごく大事だよ 628

070 : 長雨 635

071：人は『利』のために暗躍する

序章：扉をくぐると、そこは謎の森でした。  
001：玄関を開けると、そこは森の中でした。

あまりに静かすぎる森の中を、不自然な『白』が歩いている。――  
いや、這っていた。

胸から上は人の形をしているが、その下はもはやなにがなんだかわからない。

一部は異常に盛り上がり、一部はなにかの獣のように真っ白な毛に覆われたり、爪らしきものが伸びたりしていて、それらの部位はそれぞれ崩壊を始めている。

人間の肌では絶対にありえない、どこか有機的な『白』で構成されたそれは、這いずるたびに小さなかけらとなり、ポロポロと茶色い地面に零れ、そして水滴のようにすうっと消えていく。

しばらく『白』が自壊しながらの移動を続けていると、唐突に動きを止め、顔を跳ね上げる。

その先には、一枚のドアがあった。

その他にはなにもなく、ただドアだけがそこに立っている。

「お……ああ……」

『白』の口から、うめき声が漏れる。

そしてドアに近づこうと腕を伸ばし、地面に爪を立て――その手が砕け散る。

「あ……、ああ！ あああああああああつ!!」

今度は肘で地面を引っ掻こうとすれば腕がもげ、そして砕け散る。

慌てて残った腕を伸ばそうとするが、すでにその時点で腕はない。

見えてはいないだろうが、のたうち回る『白』の名前後ろで、すでももげていた腕が地面に溶けつつある。

「カ……エ……ルツ！」

残った胴体部分を、蛇のようにくねらせて前に進もうとするがその速度は微々たるものだ。



そも、ほとんどが崩壊し両腕も失った今、『白』にはドアの取っ手  
手をかけることも、伸ばすこともできないだろう。

「カエ……ル……ノ……ッ!!」

それでも『白』は必死に進み、ドアへともう失った手を伸ばす。  
胸の下まで体を失い、もはや肩と首だけの姿になりながら必死に這  
いずりドアへとたどり着く。

「カ、エ、ル、ノ、ー、ー、ー、ー、ー、ー、ー、ー、ー、ー、ッ!!」

残った頭だけで何度も何度も、まるでドアにすがるようにこすり、  
ぶつかり、噛みつこうとする。

嗚咽をこぼしながら、何度も何度も挑戦し、そうして気が付いたら

――『白』は完全に消えてしまっていた。

嗚咽の余韻も、『白』が這いずった跡も、その存在も消え、完全に無  
音となった森の中で、

今、ドアが開いた。



「ただいま〜」

家に帰りついた時、口にする言葉は大体決まっている。

つまり、これを口にした今この瞬間、俺がいるのは家の玄関と相場  
が決まっているはずなのだが――

目に入り込んだ光景は、これまでの十六年の人生で一度たりとも見  
た事がない光景だった。

「――どこ？、どこ？」

まったくもって……そう、たったいま何が起こったか全然分からな  
い。

え、俺今普通に『ただいま』って言って家のドア開けたよね？  
ドアを開けて真っ先に目に入るハズの玄関も家族の靴も玄関マツ  
トも廊下もない。右も左も前も後ろも木々が生い茂っている。  
先に帰っている弟やオカンの『おかえり〜』という言葉は一切聞こ  
えず、木々がざわめく音だけが辺りに響いている。

「……え、ど〜んこ〜ん。……やだこ〜ん」

同じようの意味のわからない言葉を口にして、辺りを見回すが何も  
変わらない。何一つ変わらない。

それどころか、握ったままのハズのドアノブやドアすら消えてい  
た。

前も後ろも右も左も、木々生い茂る森だった。

え、なにこれ。どうしたらいいの？



自分が通っている高校は、どこにでもある普通の高校である。

制服はブレザー、靴は人工皮革で中には教科書、プリント、布製の  
ペンケース——中身はシャーペン、ボールペンに定規……あとは飲み  
かけのペットボトルのお茶と袋に入った空の弁当箱が入っているく  
らいか。

他？ 財布に鍵、ハンカチにティッシュにスマホ、折り畳み傘くら  
いっす。

しかも一番役に立ちそうなスマホは、さっきまで70%くらいは  
バッテリーが残ってたハズなのに今は電源すら入らない。

電波が届くところかどうかすらわからないとはこれいかに。

(……泣ける)

いやホントに。

そもそも何をしたらいいの？ 場所の確認？ 大声で助けを求め  
る？

こう言う時に色んな事を教えてくれるスマホ大先生は現在絶賛完  
全沈黙中である。時計やコンパスどころかライトにすらなってくれ  
そうにない。

え、マジでなにをどうすればいいの？

——くきゆるるる……

しかも腹が減ってきた。そりやあそうだ、授業終わって別にどつか  
に寄る事もなく帰って来たんだから。

つまり、最後に口にしたのは昼休みの弁当である。今現在、鞆の中  
にある空の奴。

……どうしよう。混乱している事は自分でもわかるんだけど、どう  
やって落ち着けばいいのか分からない。

なにかしなきゃという考えだけが頭の中でグルグルしている。

「……とりあえず歩こう。なんか見つかるかもしれないし」

人の気配がしない雑音に耐えられず、独り言を口にする。

衣替えで冬服に戻ったばかりだと言うのに、そのままの格好だとじ  
んわりと汗をかくくらいの気温の森——森？ ジャングル？

とりあえず、木が生い茂っている中を歩き回る事にした。

——戻り道も一切分からんからね!!

なお、歩き回った結果、俺はペットボトルの中身を完全に飲み干し、  
疲れ果て、適当な岩（苔などで地面がじんわり湿っていたため）の上  
にできるだけ渴いた落ち葉を敷いて、空腹のまま寝る事になった。

……泣ける。



「……かゆい」

虫に刺されたのか、首筋あたりがむず痒い。

朝になっても相変わらずウンともスンとも言わないスマホ。

その真つ黒なディスプレイを鏡の変わりに確認してみると、2、3  
箇所赤く腫れている場所がある。

「ホント……なぜこんなことに……」

寝て起きたら布団の上か、あるいは机の上じゃないかというあり得  
そうな期待をしてはみたが、やはりそうそう上手くはいかないらし  
い。

もしこれが夢だとしても、これだけ自意識がハッキリしている間は  
そう簡単に覚めてはくれないだろう。

つまりは——そう、つまりは状況は昨夜、暗闇に震えながらも疲労  
に逆らえず寝た時と同じなわけで——泣ける。

——ぐきゅ、きゅうううううう……

腹の方は既に全力で泣いている。そりやそうだ。昨日の昼から何  
も食ってないんだもん。

この森の中に放り出されてから口にしたのは、ペットボトル半分程  
のお茶のみだ。

(とりあえず、ガチでサバイバル状況に放り込まれたっつーことだけ  
は分かったけど……)

それだけだ。昨日と同じく、思考がそこで止まってしまおう。

ついつい繰り返してしまおう思考停止を振り払おうと頭を掻き毟る。

「……よし、食べられる物を探そう。あと水」

とにかく、この空腹と喉の渴きはなんとかしたい。というか、なん  
とかしないと比喻ではなく死ぬ。

こういう時、本とかで読んだ知識では確か水の確保が最優先だったはずだ。

ひとまず、あらためて耳をすませてみる。

すると、水が流れる音が……聞こえるような聞こえないような。

というか、眼を覚ました一因でもあるけど風がひどくて、木々が揺れて葉が擦れる音でうるさい。

しかも微妙に寒いし。

(坂を登ってみるか……あるいはまた降るか?)

昨日、自分が玄関をくぐった後に突っ立っていた場所はわりと平らな地形だったのだが、歩くうちに段々傾斜が見え、寝床に選んだこの岩の辺りは結構な坂になっている。

「昨日は、なんとなく低い方を目安に歩いていただけ……」

目印なしで森を歩くと、同じ場所をグルグル彷徨う事になる。

その程度の知識は俺も持っていた。

降っていけば、意外とすぐにこの森を抜けられるんじゃないかと思っただ。

浅かった。全力で浅い考えだった。

結果俺は全力で凍える目に合っている訳で……さつきから渴いた葉っぱを制服の上から被せているんだけどすぐに飛んでいつちやうんだよね。

「……すぐに動こう」

日中はともかく、夜はやっぱり寒かった。体を動かさないと死ぬかもしれない。

ちくしよう、本当だったら今日祝日だったのに。もつと安全にゴロゴロしながらゲームやり込むつもりだったのにちくしよう。

とりあえず、昨日と同じく出来るだけ傾斜を降りて行く方向でルートを決めた。

少しずつ現状を認識出来てきたのか、頭が落ち着いて来た。

「低い所の方が、水とか溜まってるかもしれないし、流れ込むかもしれない」

歩きながら考えている事を口に出して確認してみる。

……今思ったが、実は冷静になつたんじゃないやなくてアドレナリンとかでハイになっているんじゃないだろうか？

口に出すという行為も、なんだかどこかを動かないと気が落ち着かないって感じだし。

なんかこう……二、三步遅れてなにか変だと気付くような……なんだろうな？

(まあ、どちらにせよ移動するしか方法ないのは確かだけどき)

今の所、虫はともかく動物の類は見えないが、やはり声とか音には気を付けるべきだろう。

(……と、いうか)

声を出すという行為は止めるべきだ。

——喉がカラツカラな時は特に。

さつきから水気が欲しくて、弁当箱に残っていた梅干しの種を口に入れて飴玉のようにしゃぶって渴きを誤魔化しているが、ヤバい状況だということはキチンと把握している。

(ちゃんと緑の植物がわんさか生えてるんだから、水源はしつかりあるはずだよなあ)

植物が大量に育っている。水も大量にある。

もうこんな陳腐な考えだけが今の俺の希望だと言うのだから泣ける。

水があれば結構生きられると聞いた事あるし、水場には魚がいるかもしれない。それに水を飲みにくる動物だって……あつ。

「……………火、どうしよう」

今気がついたが、生水は絶対に危険だ。

というか、自然にある物を熱加えずに食べるとか、詳しい知識を持つたうえで訓練受けている人間じゃないと無理だろう。

登山部とかの連中ならあるいはそういう知識持っているかもしれない

んが、絶賛帰宅部の俺がそんな知識を持っているハズがない。

仮に火がどうにか作れたとしよう。そんなでもって食べ物も無事に調達出来たとする。

うん、食べ物の問題ない。普通にそこらの木の枝とか石を使って焼く事は出来る。

……で、水は？

今俺が持っている物で水を貯められそうな容器は、二段重ねのプラスチック製弁当箱と空のペットボトルのみ。無論、直火の熱には耐えられない。

「腹下すの覚悟で飲むしかない……のか？」

ペットボトルと布があればそこら辺の物と合わせてろ過できるとか、子供の頃に読んでたサバイバル体験本に書いていたけどそんなん一々覚えてねえよ！

なんだっけ？ 砂と小石と……炭？ 粘土？ どっちだっけ？

どっちもいるんだっけ？

（あ、ダメだ。うろ覚えの知識でやっても失敗して腹下して地獄を見る未来しか見えない）

「……いいや、うん。とりあえず水場を見つけてからにしよう」

なお、この日も水場は見つからず、今度は木陰に固定した折り畳み傘を風避けに就寝。

口にした物？ 弁当箱に残っていたうめぼしの種、小指の先ほどのソースとマヨネーズ、硬くなった米数粒のみだよ。

泣ける。



三日目突入。

あかん、もう無理。

あからさまに水が足りない。もう分かるもん頭が痛いもん。

こう、なんていうか……嫌な寝起きをした時の気持ち悪さに頭痛を足して倍にした感じだ。

まだ真つ暗なうちに目が覚めてずつとウダウダやって、日が昇り初めて光を感じても気力が沸かない。

動きまわる時間減らすべきだったとか、汗かきにくい朝方と夕方だけ動けばよかったとか後悔ばかりが頭をグルグルするのでシャドウボクシングの真似事で気持ち切り替え、行動再開。

そして行けども行けども木々ばかり。植物ばかり。緑ばかり。

「気力ブーストにも限度があるんじゃないやあああああああああああああああああ  
ああああああつ!!!」

体力を消費すべきじゃない。無駄にカロリーを消費すべきじゃない。けど叫ばずにはられない。

とりあえず、もうこうなったら衛生面とか気にしてられない。

そこの地面に生えてる植物の葉っぱとかに集まった滴——朝露か。それを集めて口にする。

美味い。普通に美味い。なるだけ綺麗に見える植物だけから採ったのがよかったのか、少なくとも強い異臭とか味はしなかった。少々……青くさい？　というか植物独特の臭いが多少はした気がするが、今の所問題ない。

(……昨日の朝もこれ飲んでおけばよかった)

今更ながらにそんな後悔が浮かんでくる。

そうやってかき集めた水も、全部合わせてどうにか一口分ちよつとくらいにしかならいだろう。

つまり、一回用を足しただけでそれ以上の水が体から消えている訳だ。

とりあえず、歩く時にもっと注意をする事にしよう。

例えば土を踏んだ時の感覚。感触。



昨日まではとにかく流れる水——小川の音を探していたが、それだけを頼りにしていると死ぬと確信した。

例えば溜まっている水たまり。

さすがに泥水をどうにかして飲む勇氣はないが、そこから注意深く辺りを探る事を心がける様にする。

ひよっとしたら比較的綺麗な水たまりとか、あるいは水の流れを見つけれられるかもしれない。

「水、水、水、水、水……水をお願いします」

本当に日本人——いや、人の悪い所だ。

普段信じてもない神様に全力で祈りながら——というか水を要求しながら歩き回る。

一時間、さらに体感で三、四十分ほど歩くと、右足に痛みを感じたので一度休憩。

恐らく、歩く時に利き足に力を入れ過ぎていたのだろう。片足だけが痛い。

(……なるだけ歩く時もバランスを意識して歩くか)

エネルギーの消費を可能な限り押さえる事。

これを一番に意識して歩くルート、足を置く場所、そして小まめな休憩を取る事に出来るだけ気を配る。

結構深い森なので日光はそこまでキツくはないが、それでもやつぱり汗をかいてしまう。だが、かと言って服を脱ぐと虫がやばい。

昨夜は寝る時にハンカチを広げて首元を覆ったりとかして対策してみたおかげか新たに刺されることはなかったが、油断するとまたすぐに蚊……蚊かな？ 知っている奴より更に小さい気がしたが……まあ、そいつらが寄ってくる。

(もう喉渴いたな……)

やはりというか、もうこの時間になるとどの植物も渴いてしまっている。

朝露の滴をペットボトルに貯めるべきだったのだろうかとも思うが、なんだかんだで今一番怖いのは腹を壊す事だ。

キチンと水を確保出来てから動けなくなるのならばともかく、水や

食料を探すために歩きまわらなければならない現状で動けなくなるのは致命的すぎる。

雑菌が入っているかもしれない水を、さらに長時間貯めておくのはヤバイだろう。特に自分が直接口を付けたペットボトルなんて、なんだかんだで飲み口の部分に絶対に雑菌がついて繁殖しているはずだ。(くそっ。マジでどうする?)

なんとなく、シャツの胸ポケットに入れていたスマホを取り出す。もう使いどころとか何もないただの重しである。

雨など振っていないのに折り畳み傘とか中身の入っていない空の弁当箱のほうは何倍も役に立っている。

例えば風避けとか、中の残った食べ物とか。

仮に電波が入っていないなくてもライトとして使えるならよかつたのに、電源すら入らないとかホントなんなのへし折られたいのかと小一時間問い詰め——んお？

「……なんでこれ？」

取り出したスマホは、相変わらず真っ黒な画面のままだ。

だが、最後に見た時と違う点が一つある。

文字だ。白い文字が浮かび上がっている。

『構成要素のインストールが完了しました。スキルシステムが実装されます』

普段見慣れたディスプレイの文字ではない。というか、バックライトが入っていないので暗いままだ。

そして文字も、見なれたデジタルのフォントではない。

こう、なんだろう。一番近いのは黒い紙の上に白いインクと小筆で書いた感じか。

『システムを使用いたしますか？ Y/N』

「……………」

迷いは当然あった。いきなり意味が分からない文字が現れたのだ。しかも、使い慣れているはずのスマホも何かおかしい。

だが、ようやく現れた変化に、希望を感じたのも確かで——

——俺は、迷いながらも『Y』の上をタップした。

## 002：スキル&ファースト・コンタクト（？）

『認証を確認。以下の中から一つ選んでください』

『・サーチ／半径4mの状況を把握する事が可能になります』

『・健脚／移動する際に蓄積する疲労を軽減できます』

『・毒耐性／ある程度の毒を除外できます』

スキル入手を決めてから画面に映ったのは、三つの候補だった。

「……全部という選択肢はないんですか」

思わず口から出た率直な感想に、そこはかたなくポンコツ風味になったスマホはなくんにも返事をしない。してくれない。ないんですかそうですか。

どうしたのスマホ君。君ってば、いつも関係ない雑談でも音声認識でAIアプリ起動させて俺をビビらせてくれるじゃない。

ちよつとくらいは質問に答えてくれてもいいじゃない。

話相手になってくれてもいいじゃない。ねえ。

（っーか……っーって言われても……）

サーチ。うん、いや、文章読む限り悪くはない気がするんだ。範囲以外は。

4メートルで……すぐに見渡せる範囲だぞコノヤロー。

健脚。これも悪くない。が、ちよつと怖い。いや、正直全部怖いんだが……疲労を軽減するって俺の体どうなっちゃうの？

同じ理由で毒耐性とか特に怖い。

が、ここで本当に、これらのうちどれか一つの能力が俺の力になるというのならばありがたい話である。マジで。

一人延々と、知識も経験もなく、さらに手掛かりもないまま森の中を歩き続けるなんて自殺行為である。

しかも喉の渇きに加えて空腹もあって、日に日に出来る事が少なくなっていくという悪循環だというのに。

（どうする……どうするっ…）

探索、移動、飲食。これらに対していわばボーナスが付く。……どれか、一つに。

適当な岩——苔の付いてない奴を選んで座って、三十分ほど休憩も兼ねて考える。

そして、選んだのは——

——スキル『サーチ』を適応中です。しばらくお待ちください。

結局『サーチ』スキルを選択した。

スマホに表示される%の横の数字が100に近づくのを見ながら、俺はこの選択が本当に正しかったのかどうか悩んでいた。

取った時にはこう思ったのだ。

いくらなんでも4メートルはない、と。

これは後で絶対にスキルが成長するパターンだ、と。

現在、後悔と共に自分のゲーム脳が詰まった頭を抱えている。

「4メートルだぞ4メートル。一体何の役に立つって言うんだクソが……」

4メートルとかすぐに自分の目で何かあるか確認できる。

現在、大体の勘だがおそらく昼をちよつと過ぎたくらいだろう。

つまり、今影が伸びている方が大体北……なのか？

「……………」

やめた。とりあえず前後左右でいいや。

まずは4メートルでどれくらいの情報が入手できるか試してみよう。

仮になんにも変化が起こらないのなら……まあ、そもそも期待してないし。

画面の数字が100になり、『スキルの適応が完了しました』とい

う、やはり違和感のある文字が浮かび上がる。

『サーチスキルを使用しますか？（再使用に10■●かかります）』  
「連発できるわけじゃないんかい」

しかも時間が不明だ。10分なのか10時間なのか。……10日とか10年じゃないだろうな？ いや、まさかとは思うけどさ。

（俺につきり、ゲームでいうパッシブスキルのアレだと思ってただけだ）

まあ、いい。とりあえずタップしてスキルを発動してみる。

「!?」

そして、発動した瞬間に、確かに世界が変わった。

……もつともらしくそれを表現するなら、目の前にデジタルカメラとかVRとかそういうワンクッションが置かれて、それらを通して見ている視界に注釈文が入ると言ったところか。

といっても、情報量は驚くほどに少ない。

足元に広がる植物の数々の特徴の説明——いくつかは煮れば食えるらしい。こういうのが分かるのは大きい。意外と当たりスキルといえるが、期待よりも分からない事が多いのも確かなわけで……。

（それにしても……やっぱり水は無いか）

半径4メートルというので、あるいは地下に隠れているものも分かるのではないかと思っただが、特に反応はない。

地下はさすがに範囲外なのか、単純に下に何も無いのか。……とりあえずスキルがキチンと働く事が分かったのは良かった。

（自分の体が突然変化してるとのは怖いけど……）

飲まず食わずの恐怖に比べたらそんなもの些細な事だ。いやマジで。

自分の体力というか命が確実に削られているという恐怖は、自分がかつて行っていた厨二全開の『もし自分がこんなピンチに陥ったら』という妄想シリーズの恐怖なんて塵のような物だった。

学校にテロリスト？ 来るわけねえだろ！ アホか！

もうちょっとと有用なシミュレーションをしている！ と過去に戻って自分をぶん殴ってやりたい気分だ。

(まあ、思ったよりも悪くないな……)

スマホを見ると真つ黒に戻っている。少なくとも、サーチを使用するにはもうしばらくかかるのだろう。

とりあえず後ろの方も見てみようかと振りかえる。

なにせ、確認するには視界に入れる必要があるのだ――

『茂みの中に、会話が可能な生命体が隠れております』

そして俺の目に飛び込んできたのは、なんの変哲もない茂みの中に赤い線でハイライトされた人影と、そんなサーチスキルの説明文だった。

……………。

「誰だおらー！ー！ー！ー！？」

「あれー!? 見つかったー!?!?!」

思わず全力で蹴り飛ばした茂みの中にいたのは、着物っぽい服を纏ったアホ毛の、刀を持っている全力全開で不審者をやってる奴だった。



「すみません、別に危害を加えるつもりはなかったんですけど……突然訳のわからない場所にいたと思ったら、見なれない格好の人がいたので様子を見ようとしたんです」

「……そっちなもか」

数日ぶりに話した相手は、変わった格好をしている女の子だった。なんだろう、着物？ をちよつとアレンジした感じの服だ。

それに加えて腰に剣――というか俺の想像にある刀よりちよつと短いのを一本差している……のに、脅威だと思わないのはなぜだろうか。

「うううう。さつきまで本部の事務室にいたはずなんですけどお。書類ばっか見てて疲れてしまったのでお茶を飲み部屋を出たら、なぜかここにいました……」

どう見ても強そうに見えない顔立ちのせいなのか、涙目でうるうるしているせいなのか、あるいはひよこひよこ動いているアホ毛のせいなのか。

……ねえ、それどうやって動かしてんの？

「じゃあ、ここの住民とかいうわけじゃないのか……」

「はい……貴方もそうなんですよね？」

「ああ、家の玄関を開けたと思ったらこの森にいた」

目の前の少女は、どうみても日本人じゃないのだがなぜか言葉は伝わっている。

とりあえず互いの情報を交換しようと色々話してみると、少女は大きく眼を見開き、

「ご、御家族は家を持っているんですか!？」

「んお？ お、おお……普通の民家だけど。二階建ての」

「……お、王族とか執政官の御親族だったりしますか？ それか軍の上層部とか」

「アンタはいつの時代の人間だ!？」

手を組んで驚愕の目でこちらを見てくる少女は、顔を青くして、

「だってだって！ 軍に入ってようやく完全な個室をもらったのに、私よりも年下の男の子が家住みなんておかしいじゃないですか!？」

「どんな国に住んでたんだお前さんは!？」

絶対に俺の身近にある国じゃねえなソレ！

いやそりや家持ちは裕福層の証ではあるけど、そこまで珍しいわけでもねえだろ！

「ハボア統一帝国ですけど……どんな国って同じじゃないんですか？

ウチの他の国はもう無くなりましたし」

「……………うん？」

「はい？」



「つまり、全く違うと言うんですか？ 私と貴方で住んでいる場所と  
いうか……世界が」

「少なくとも世界統一した国なんざ絶対にあり得ん。過去にもだ」

色々話をしてみても分かったが、根本的な物が色々違っていた。

真っ先に見せたのは財布だった。

正確には、硬貨や紙幣。

彼女にとつて見なれたそれとはまったく違う物を見せる。

続いて鞆の中身——ようするに教科書やノートの類だ。これらを見せた事で、間違いなく違う文明だと理解してもらったようだ。

「学校というのは私達の所にも当然ありましたが、随分と違いますねえ」

「？ こっちの文字は読めるのか？」

「いえ、全然。ですが、雰囲気は全く違います」

「……というと？」

「普通の学校では、数字なんてあんまり出てきませんもん。文字も基本ありません」

「どんな学校だそれ!？」

「効率的な農作業とか機織りとか……技術的な事を叩きこむって感じですかね？ そもそも文字や数字を日々教えるのは軍学校とか貴族学校くらいですので、一般の学校では絵を使った教科書しかありません」

「……そんなんでよく世界を統一出来たな、その国」

教科書——読めもしない文字や数字だらけの本を楽しむようにめる少女は、満足したのかパタンと閉じて俺に返した。

ちなみに一番面白そうに見ていたのは日本史の資料集だ。

写真の類がほとんどなので分かり易かったようだ。

……勘だが、全く違う文化というのも理解したのだろう。

「しかし……なるほど、とりあえず納得はしましたあ。……で、結局一番の謎に戻ってしまおう訳ですが……」

うん、そうだよね。そこに戻るよね。

「ごう、どこなんでしょう？」

「……分かってたら苦労しないよね」

「……ですよねえ」

ようやく見つけた人間。頼りになる存在。

——のハズが、刀こそ持っているけどどこかポンコツ臭がする女剣士……剣士？ 侍？ ……いやどっちでもないよなこれ、多分。

水も食べ物も不足していてピンチな状況にこれとか……大丈夫か？

「あ、そうだ！ 申し遅れました！」

あんまり叫ぶんじゃない。体力消耗すると碌な事にならないのだぞ、俺がこの数日で身を持って知ったぞ。

「私、ハボア統一帝国陸軍所属、奴隷管理部経理を務めておりますアオイⅡYⅡレスタロツセと申します！ 状況はよく分かりませんが、以後よろしくお願いいたします！」

……奴隷管理部。

「よし、よく分かった。とりあえず君の事は危険人物として覚えておくでしょう」

「なぜですか!？」

奴隷管理と言うパワーワードに警戒しない馬鹿がどこにいると言うのか。

「ううう……信用を得るってこんなに難しいことなんですよ」

「そうだよ。信用つてのは死ぬほど重いんだよ。だからとりあえず刀から手を離せ。……おい、なんで抜こうとしてやがる」

駄目だ、やっぱコイツ危険人物だわ。

可愛い顔をしているとは思いますが、気を抜いていたら何やらかすかわかんねえ。

「と、とにかく！ 貴方のお名前を伺ってもよろしいですか？」

「……ああ」

そういえば名乗ってなかった。

名前云々よりも状況とか、あるいは彼女——アオイの持ち物の方に気を取られてたから……水を持っていないかとか。食糧を持っていないかとか。

結果、刀以外はほぼ手ぶらだった訳だが。

「透とわるだ。竹内透たけうちとわる。そっちで言う所属は……一応、公立東名高等学校所属。……まあ、ようするにただの学生だ」

「了解しました！ トールさんですね!？」

「……いや、トールじゃなくて透——」

「それでトールさん！ これからどうしましょう!？」

「…………」

あ、はい。もうトールでいいです。

003：テント・シエルター作製は場所選びが肝心です

「なるほど、まずは水場を探そうとしていたんですね……。ええ、軍事教練的にも間違っていないと思いますう」

「相も変わらず間延びした口調で、アオイという帯刀少女は俺の後ろを付いてくる。」

「アオイ、奴隷管理部って所も一応軍だったんだろ？　こう、なんとうか……。そういうサバイバルの知識とかは習っていないのか？」

「いやあ、おはずかしながら私ってば縁故採用で二等市民から格上げされただけでしてえ」

「……良く分からんが、要するにコネ使って閑職を得たから碌に知識や技術、経験なんて持っていないと？」

「はい！　かろうじて自信があるのは基礎体力だけです！　刀も腰のお飾りなんでもろくすっぽ振れません！」

「……そうか。……そうかあ……」

先行きが不安過ぎて泣ける。

いや、話相手がいるだけでかなり気持ちは違うけど。

……違うけどさ！　もうちよつとこう……ねえ？

「あ、でもですねえ。こうして低地に向かって降って行くのは正しいと思いますよお？」

「？」

「いやあ、現場に出ている先輩から、万が一水が必要な時は緑が豊かな所の低地を探せって言われてましてえ。例えば谷間とかあ」

「ふむ……」

考え方は俺と同じだ。

アオイの聞いた話が本当ならば、やっぱり水はあると考えるべきなんだが……。

「他に何かない？　こう、なんかヒントになりそうなものってさ」

「そうですねえ。あとは獣道を探せとか……」

「あゝ。俺、獣道って見た事ねえから良く分かんねえんだけど。ようするに草木が何度も踏まれてたり折れたりしてることか？」

山とか、小学校の頃の親睦遠足で何度か行ったくらいだ。

それも含めて、自然に関する知識なんて理科とかで習った事と興味本位で手を伸ばした本のモノくらいだ。

ようするに、役に立つレベルのものなんてない。

「本当に野良仕事とかしたことないようですねえ……。トールさんがウチの国民だったら今頃街の外にガリツガリの遺体が放り捨てられてますよお？」

「なんつー末法時代。賭けても良い。お前の国、近いうちに滅ぶからそれ」

というか、ある意味でもう国家として死に体じゃないのかソレ？

「あー、かもしれないねえ。まあ、今こうして全然違う場所にいるのでどうでもいいですけど」

「ええんかい」

ホントにコイツは、ひょうひょう飄々としていて捕らえどころがないなあ。

出身の話を聞く限り、もつとこう……貪欲とかいうかハングリー精神の塊のような奴でもおかしくないのに。

いやいや、今はそれはいいんだ。とにかくまずは水。マジで水。

「まあまあ、気楽にいきましょうよトールさん。これだけ緑が豊富な場所でしたら、水もすぐに見つかりますよお」

「……あっさり見つかったら、それはそれで俺の今日までの苦労はなんだったんだって事になるんだが」

「必要経費だったんですよ！ きつとー！」

「マジでか」

なお、二時間ほど歩いたら本当に速攻で川が見つかった件について。

「ほらあ、あつたじやないですかあ♪」

「……………うそやろ」

泣ける。



見た所、少々濁っているが確かに川だ。…………飲んで腹を下さないかどうかは別として。

「トールさん、少し上流の方にいい感じに開けた場所ありますし、ひとまずはそこを拠点にしませんか?」

「拠点?」

「ええ。無計画に歩き回つても、この森は抜けられそうにありませんし」

ああ、そうか。一度立ち止まるって選択肢もあつたのか……………どうしよう。

俺としては、このまま川に沿つて下つていけばもつと開けたところに出るのではないかと思つてただけど……………言われてみれば、落ちついた場所を一か所作るのも手段と言えば手段か。

「それに、さつきからちよつと気になつてゐる事もありますし、しっかりと調べた方が良い気がするんですよ……………」

「? と、いうと?」

アオイは、適当な木の根に腰を降ろして、団扇うちわ代わりに貸した俺のノートを使つて扇ぎながらアホ毛をピコピコ動かして、

「トールさんは三日程ここで過すごしてゐるんですよ?」

「ああ」

「その間、獣というか動物を一切見なかつたんですよ? 一匹も」

「ああ……………それがなにか?」

「おかしいですよお、ソレ」

まるでセンサーのように動いているアホ毛がうつとうしくて、つい掴んでしまったがアオイは気にせず言葉を続ける。

「これだけ落ちついた地形に、これ見よがしに水が流れているのに、獣の毛も糞も足跡も一切見当たらないなんておかしくないですか？」

「……………この付近にいないって事なんじゃあ？」

「いやあ、私もそう思ったんですけど……………元山育ちとしては、ここまで痕跡ゼロだとなんとか気持ち悪くて気持ち悪くて……………。普通は水を飲みに来た獣の糞くらい転がつてるんですけどねえ」

ふと、初めてこの森を目にした時を思い出す。

ざわめく森のおどろおどろしさにビビって正直一步を踏み出すのもやつとだったのだが…………

「そういえば」

「はい？」

「確かに、動物の鳴き声一つ聞かないな。というか——」

ふと、空を見上げる。

一人で歩きまわっていた時にも、どこかで休憩する時は決まって空を見ていた。

「アオイ。こうして歩きまわっててさ、鳥……………見た？」

「いいえ。鳴き声もさっぱりですねえ」

「……………」

なんだろう。何かがおかしいときすがに俺も思い始めていた。

思えば、蚊やダニのような小さい虫は目にしたが、例えばカブトムシとかカナブンとか蝶とか、そういうデカイ虫は一匹も見えていない。

こういう森に付き物の、あの忌々しい蜘蛛もだ。

「こう、なんというかアレです。死ぬほど大量の機材とか人員使って、一気に植樹したばかりの森とかならこんな感じかもしれないねえ。……………想像ですけど」

「……………不自然な森、か」

なんというか、改めて気持ちの悪い状況だと言う事が分かって来た。

突然訳の分からん森に飛ばされ、スマホが訳のわからん仕様になってスキルとかで自分に後付けで能力が追加され、拳句の果てには訳のわからん国の出身だという女と一緒に、この森の気持ち悪さに気付くとか——あつ

「おい」

「はいはい、なんででしょう?」

「これで、動物がいなくて鳥も虫もいないとしよう」

「はい」

「魚もいなかったら、食べる物どうしよう」

「……………」

「食べる植物とかはあるみたいだけど、それだけだと限界あるよな?」

「……………」

おお。う。

アオイ、お前もそんな顔するんだな。

でもな、今この状況でそれは止めて欲しかったりするんだよコンチクシヨウ。

…………泣ける。



「とりあえず! 話を聞く限り風を避けられる寝床は必須です! ですよねツールさん!!」

「そうだな! 体調を崩したら意味ないもんなアオイ!」

「はい!!」

完全に空元気だが、水を飲んで——無論完全にそのままではない。せめてもの浄化として、一度ペットボトルで汲んだ後、弁当を入れていた布の袋とティッシュをフィルター変わりにして取り除ける物



は取り除いてから、弁当箱の——ほとんど綺麗なハズの蓋を器にして飲んだ。

やっぱ水が飲めるだけでかなり違う。

日頃口に使っている水道水やミネラルウォーターに比べると臭いもするし味も酷いが、それでも安心感が凄い。

今日来たばかりだというアオイはどうか分からないが、俺は失くしかけていた気力が一気に復活した。

「で、寝床を作るってどうするんだアオイ」

「……………」

「おい、こつちを見ろ」

そうだった。そういえばこの女、技術や知識は味噌つかすって自分で言ってたもんな。

「…………とりあえず枝とか葉っぱとか集めようか。渴いてる、使えそうな奴」

「…………そ、そうですね！」

とはいえ、枝と葉っぱで風避けになる壁なんてどうやって作ればいんだらうか。

適当なツタとか比較的細長い草をロープ代わりにして枝を組み上げて…………組み上げて…………どうしよう。

「ど素人とは言え頭も手足も二人分ある。水もあるからすぐに死ぬことはない。日が暮れるまでにはなんとか形になるモノを作ろう」

「はいー」

やはり来たばっかりとあって、まだまだアオイは体力に余裕があるようだ。

となれば、その体力を無駄遣いしない内に寝床を作ってしまったおう。

確かに岩肌に直接寝るのは、生地の分厚いブレザー越しとはいえキツイものがあつたし、かといって土や木をそのまま枕にするのも抵抗があつた。

(もうこの際、風はある程度でいいからしっかりと暖を取ればそれでいいや)

完成したのは、本当に日が暮れるちよつと前だった。

場所としては文句なしだった。

水がすぐに取りれる川の近く。そしてその近くにあった、太くはないがそこそこ頑丈そうな木。

とりあえずこの木を支柱にして、長い棒を立てかける。横からみたら定規でおなじみの直角三角形に見えろと言えば伝わるだろうか？

その支柱の左右に次々と斜めに枝を立てかけ、ツタ等で縛り、上から葉っぱを被せる。——この葉っぱを集める作業が正直、一番苦勞した。

それなりに立派なテントの完成だ。

二人で寝るには少々狭く、正直アオイが不安がるようならそこらの岩の上で寝ようかと思っていたが特に気にしないようだ。

役得……だと思わなかったわけでもないが、人の温かさを感じると言うのはすごくありがたかった。

……うん、ありがたかったんだ。

——全く気配のなかった豪雨が降るまでは

「うおおおおおおおっ!? 水が! 水が上がって……テント! テントが流される!」

「トールさん! もうシェルターにこだわってないで逃げないで——

」

「ああああああああああああああああああああああああああああああ

………つー!」

「きやあああああああ!! トールさん! トールさああん!!??」

死ぬ。

## 004：体温の管理は基本中の基本！

「だ、大丈夫でしたか？」

「……………命はある」

ホント、よく命があつた物だ。

完全な暗闇の中、いきなり振つて来た豪雨のせいで川が氾濫、危うくそのまま下流まで流される所だった。

突然の雨音に二人して眼が覚め、急に上がつて来た水位というか濁流というか……………そういうのに対処している内に俺が水流に足を取られ……………取られ……………。

「もう……………駄目かと思……………つ」

「ああつ！ 比較的クール寄りだったトールさんの表情がしわくちやに！ だ、大丈夫です！ もう雨上がりでしたから！ お日様も出ますから！」

今の俺の格好ときたら、ほぼ全裸で体育座り状態という色んな意味でどうしようもないものである。

服は現在、日の当たる岩の上に放置してある……………が、そんな短時間で渴くわけがない。

「……………次から、寝床を作る時は高い所にしような」

どんだけ雨が降つても水が上がつてこない所に。

じゃないと死んじゃう。ホント、死んじゃうから。

なにもかも流されてジ・エンドになる所だったよマジで。

脱いでいた靴も含めて、荷物をアオイが真つ先に確保してくれてて助かった。

そして、あの暗闇でとっさに何かを掴んで耐えた俺。ホント良くやった。

「そ、そう……………ですな……………」

どこか能天気な雰囲気のあるアオイだが、さすがに目の前で人が死にかかったので焦っているのだろう。

引き攣った顔でそう答えるのが精いっぱいの様だ。

「とりあえずどうしましょうか？ 寝床を作り直しますか？」

「いや……」

確かにそれも必須だ。

雨が降る前までだが、確かにこれまでの夜よりも安心して寝れた。疲れが取れる睡眠つてのがどれだけ大事か良く分かった。

だが、今は――

「すみません。とりあえず――火が欲しいです」

「……ですよね」

うん。

ちよつと暑い――初夏終わりくらいの気温のハズなのに……寒  
いッス。



というわけで、とりあえずはなんとか暖を取る事にした俺とアオ  
イ。

片や着物という隙の多い服を着た婦女子、片やパンツ一丁の男子高  
校生という事案物の光景だが、生きるか死ぬかの状況ではそんな事  
言つてられない。

で、肝心の火起こしだが――

「うがー……っ！」

意外でもなんでもなくダメ。全然ダメ。

そういう技術や知識を互いに持つていない事もそうなのだが……。  
「渴いたちようどいい木片というか――燃やせそうな物が全っ然！  
ありませんね！」

そう。火を起こそうにも、それに必要な物が全て昨夜の雨で濡れて  
いるのだ。

二人でどうにか使えそうな木の枝や樹皮を探し出して、互いにうろ覚えの着火方法を次々に試しているんだが……。

まずは乾かす所から始める始末である。

「……トールさん、煙草とか葉巻は吸わないんですよね？ 火打石とか火種板とかは……」

「俺の国じゃあ二十歳まで飲酒と喫煙は禁止だったから」

「家が持てる身分で一五歳を超えて配給すらされないとか厳しすぎませんか!？」

「いや、それ以外の事はお前らの所の方が厳しすぎるから。絶対。というか、その質問何度目だ」

俺が火を付ける道具を持っているのを期待してか、煙草を吸わないのかと聞いてくる事、恐らく四度目だ。

生乾きの俺の制服が乗っている岩の周りには、俺たちの——恐らく四……いや、三時間程の格闘の残骸が散らばっていた。

力を込めすぎて折れて短くなってしまった枝とか、同じく力を入れて過ぎて火を起こす前に割れた樹皮とか木の板とかである。

「さつきトールさん、食べられる木の実や果物を見つけてましたよね？ こういう知識や技術、本当に持ってないんですか？」

「いやあ、あれってばちよつとしたズルみたいなものだから……」

できるだけ水を飲んだりして空腹を誤魔化してきたが、さすがに限界を感じた俺は、出来るだけそれっぽいや実がなっている所をアオイと共に探して、その一か所で再び使用可能になっていた『サーチ』のスキルを使用したのだ。

完全にスキルを信用できるかどうかのテストもあったが、食べてそこそこの時間が経ったにも関わらず俺もアオイも腹痛などの症状は出ていない。まあ、これから『サーチ』を一つの目安としても問題ないのだろう。

だが、『サーチ』で分かる情報は今の所有毒かそうでないか、つまり食べられるかそうでないかといった情報しか分からない。

加えて、恐らくあの『10■●』という再使用にかかる時間は、やはり十時間で合っているようだ。

ほぼ半日に一度しか使えないので間違いあるまい。

(そーい、や、スキルつてアオイも使えるのかな?)

自分の場合は、よく分からないがスマホを通してあの訳分からん説明が出て、入手する事が出来た。

持ち物が実質、衣類とサイフ、そして刀だけの彼女では――

「アオイこそ、他にになにか持ち物はないのか? 例えばレンズとか、後は……なんつーの? 手帳とかノートみたいな物とか」

「いやあ、ホントに持ち物皆無でして……。そもそも私の国じゃあ私有化というか、一部の娯楽品を除いて持ち歩く事を許可されてる物なんてほとんどないので」

「俺らの世界にそんな国あったら、今頃クーデターか外圧で治安がヤベー事になってそうだなオイ」

やっぱり持ち合わせはないか。

なにかそういう、文字が関係する道具があればあのスキルシステムとか出て来るんじゃないかと思っただけ……。

アオイにノートを団扇代わりとはいえ貸したのは、それも狙っていたんだけどなあ。

持っていたら、俺の時の様に急に変なアナウンスが現れたりとか……。

チマチマ確認しているけど、やっぱりそうそう上手くはいかないか。

「あ、ツールさん。服と一緒に干している枯れ葉とかはどうですかあ? まだ、湿ってますう?」

「ん? お、おお、そうだった……うん、いくつかはもう渴いているみたい」

とにかく渴いた物がないと、火を点ける物も燃やす物もない。

(……よし、やり方を変えよう)

とにかく摩擦を続けて、温度を高くすれば火が点くと思っていたがまずそれが難しかった。

ちよつと手を休めるだけでも温度は下がってしまうだろうし、いかに効率よく腕……というか杖を動かすのが大切なはずだ。

これまでは、よくあるイメージとして色んな所で目にした、できるだけ頑丈な木の板に枝を突き立て、それを煙が出るまでひたすら回転させるという手法を取っていたが……。

(枝や板の上でがむしゃらに磨るだけじゃあ駄目だ。もつと熱が逃げにくい様に……かつしつかりと空気と接する形で……)

辺りを見回す。

俺たちが作り上げた残骸以外にも、使えるかもしれない川から引き揚げた物がある。

昨日の豪雨で流されてきた倒木とかだ。

(できるだけ濡れていない、渴いている奴は……)

木といっても、そこまで太い物ばかりではない。

手ごろな——おおよそ直径数センチ前後くらいの物を探して、それを河原の出来るだけ尖った石で殴って適当な溝を作り、一直線に広げていく。

そしたら溝の端に乾かした落ち葉等を砕いて詰め込んで——

「枝を擦りつけて火を起こすつもりですかあ？」

「頭使って色々考えた結果、思いつく方法がこれしかない」

さつきからスマホに新しいメッセージが浮かび上がっていないか——  
厳密に言えば火起こし系スキルが浮かび上がるんじゃないかと

期待して待っているんだけど、ウンともスンとも言わないままだ。

もうこうなったら、出来る限りを試すしかない。

削った溝にフィットする太さの枝を探して、ひたすら溝を走らせる。

砕いた落ち葉を詰めた所にもつとも熱が集まるようにイメージしながら、ひたすら擦る。

その間、アオイも違う手段でどうにか火を確保しようと横で思考錯誤しているのが視界に入る。

そりやそうだ、自分程ではないがアオイの体も冷えていた。

今後の事を考えると、火の確保は絶対だ。

(今思うと、寝床作りより先にやっておくべきだったか……いや、それだと結局雨で何もかも失っていたよな……やっぱり場所をもつと考



えるべきだった)

体を濡らしてから、一度アオイが体温で少しは温めてくれたが寒いものは寒かった。

森の中も、そのせいも心なし今までよりも寒く感じる。

服を着ていないのもあるだろうが……。

三十分……四十分……五十分。

つつい、どれだけ時間を費やしていたか考えてしまう。

延々延々擦り続ける。流れる汗が溝に入らない様に気を付けながら。

途中で気がついたのか、アオイも俺のハンカチを取り出して、汗を時折拭ってくれた。

多分、それから更に十分。

「わ、わ！ トールさん！ 煙、煙！」

「藁！ 藁持ってきて！ 完全に乾いた奴!!」

火らしい火は見えない。が、煙が僅かに立ち込める。

慌ててその部分を手で覆い、ゆっくり息を吹きかける。

すると、ウチの親父が煙草に火を付けた時のように赤い小さな線の集まりがチラツと見えた。

息を吹きかけるたびに赤い線は強く光り、煙の量も増えていく。

「トールさん、どうぞ！」

アオイが持ってきた藁の束の上で木をひっくり返して、燃えている部分を移す。

そうして未だ燻っている場所を包むようにして、再び息を吹きかける。

誕生日ケーキの蝋燭を消す時よりもずっと弱く。

熱い汗物を冷ます時よりもっと弱く、息を吹きかける。

勢いを増す煙に、眼から涙が零れる。

けど、それは成功の証なわけで――

「あっちあっち……っ！」

手元に確かな熱を感じ、思わず手を離す。

そこにアオイが次々に渴いた藁や木の枝を放り込む。そして――

「……………点いた」

この数日ですつと見る事のなかった、手元にある光源が今、目の前でメラメラと燃えていた。

「トールさん！ 点きました！ 点きましたよ!!」

「……………ああ」

おそらく、半日近くは費やしただろう。

その成果が、今こうして目の前でゆらゆらと赤く蠢いている。

「……………そういえば」

「なんです？ トールさん」

「今日の寝床、今から作り終わる……………かな……………？」

「……………あつ」

この後、急ピッチで川からちよつと離れた高台にテント——アオイ曰く、正しくはシエルターらしいが——を建造した。

少なくとも昨日よりははるかに手際よく建てられたが……………疲れた。

せめてもの救いは、夜になっても灯りがあるので、材料さえ揃っていれば作業を続けられた事だろう。

日没からさらに一時間ほど作業をして、今度は雨にも強そうな表面がスベスベしてて水を弾く葉っぱを屋根というか壁にして、今日の作業は終わりだ。

木の実を口にしたとはいえ、腹減った。……………泣ける。

005：石の使い道。なお、同行者は――

――ぐきゅるるるるる

「……腹、減りましたな。レスタロツセさんちのアオイさんや」

――きゅぐおおおおおおおつ

「……そうですね、タケウチさんちのツールさんや」

サバイバル生活……俺は四日目……五日目だっけ？

その間に口にしたモノと言えば、梅干しの種だの弁当箱の底に残ったソースやマヨネーズだの。

一応昨日今日と、例のサーチスキルで見つけた食える果実で完全な空腹状態こそ避けているモノの、それにしたって限度がある。

そもそも完全な満腹状態なんて一度だってなかった訳で……

（晩飯食った後、風呂に入るまでの間に満腹感で爆睡しかかってた頃が懐かしい……）

いやいや、そんな過去に縫すがっている場合ではない。

飯だ。食糧だ。……もつと具体的に言うなら、肉とか魚とかのたんぱく質系の栄養を体が欲している。マジで。ガチで。

「川、どう思う？」

たった一言の俺の問いかけに、アオイは分かっているとばかりにため息を吐いて答える。

「少なくとも、朝起きてからしばらく観察した限りでは、魚はまだ見えないですねえ……」

「……マジでか」

「マジっす」

「ガチでか」

「ガチっす」

……じゃあ、どうしよう。

「ま、まあ……私が見つけれなかったただけかもしれないし」

「それならいいんだけどな。……隠れるのが上手いとかさ」

現状、正直素人二人にしてはまあまあ上手くいつている。……一度死にかかった事を除けばだが。

火と水は無事に確保。寝床は……急いで作り直したために不格好だし、やや壁が薄いが一応ある。

とにかく、現状でもつとも力を入れたいの——飯の確保だ。

「とりあえず、山の中を探索しようと思うんだけど……」

もしサーチスキルが成長するものだとしたら、恐らく使いまくるしかないと思う。

ゲーム脳と笑わば笑え。だけど実際そういう物が手に入ったのならば、使いまくるしかないだろう？ 目に見えるデメリットは今の所無いわけだし。

「う〜ん……確かに探索は必須ですけどお……」

そう思っ提案したが、アオイは首を捻り、

「そのお仕事、私に任せてもらえませんかあ？」

と、俺に聞いてくるのだった。

「？ なぜだ？」

「いいええ、別に深い意味はないんですけどお……ツールさん、山歩きが苦手ですよねえ？」

「まあ……都会とまでは行かなくても街住みだったからな」

そういえば、何かの拍子に元山育ちって言ってたっけ、この子。となると、やっぱりそういうのも分かるものなんだろう。

「せっかく二人いるんですし、別々に行動した方が効率が良いと思うんですけどお……かといってツールさんとバラバラに探索したら、迷わずに帰って来られるかどうか不安ですしい」

「……………ふんっ！」

「ああつ！ ああつ！ な、なんでまた髪の毛掴むんですかあ!!」

「いや、なんか腹立ったから」

きよろきよろくと動くアホ毛が、まるで俺を煽る様に動いていたので思わず動きを封じてしまった。

だからお前それどうやって動かしているのかと。

「まあ、二人して拠点から動くのもあれだし別にいいが……俺、なにすればいいんだろう?」

「あうう……トールさんの思うように動けばいいと思いますう」

掴んでいた手を払いのけて、ぴよこぴよこ跳ねる毛を包みながらアオイは続ける。

「トールさん、直接役に立つかはともかくとして色んな知識を持っているようですので、ここで出来る事を考えて色々と試行錯誤を試してみるのは、先の事を考えると無駄にならないと思うんですけど……それに」

「それに?」

「ただですら体力面に不安ありそうなトールさんに、これ以上無駄に体力を使わせるのも心苦しく——」

「……モヤシなのは否定しない。否定はしないがそれはそれはそれとして喧嘩売ってんのか、売ってんだよな、よし買った!!!」

「なぜそんな話に!?!」

なぜじゃねーよコンニャロウ。



「……さて、どうしたもんかな」

あの後口喧嘩しながら朝飯の木の实や果実を食いに行った後、調べた範囲をおおよその地図にしてくるといっているのでノートとペンをアオイに貸して、俺は一人テントの前で火の中にまだ若い木の葉や草を放り込みながら延々と考えていた。

さっさと考えていたシェルターの強化なりなんなりした方がいいのだろうが、とりあえず一度落ちつく事にした。

先ほど甘い物を食べて気持ち落ち着いているのもあるし、なによ

りも一度考える時間が必要だと感じたからだ。

(焦って適当な考えでテント……シエルターか。アレ作った挙句流されたからなあ……)

気温の下がる夜に、できるだけ温かいまま寝るには必須だととりあえずのシエルターは作ったが……やはり薄いというか、最初に作った物よりも心なしか寒く感じる。

失敗するのは別に仕方ないとは思うが、命に関わる失敗や徒労は可能な限り避けたい。

(どつちにせよ、いずれここは動かなきゃいけないんだよなあ……)

正直ずつと考えているのが、塩分の問題だ。

うろ覚えの知識で怪しいが、人間の体に塩分が必要不可欠だというのはなんとなく覚えている。

さらに適当な素人知識ではあるが、手取り早く塩分を手に入れるには海に行くのが早いと考えていた。

(何かの無人島生活番組で、海水を煮詰めて塩分の濃いソースとかタレとして使っていたのを見た事あるし、あれでもなんとかいけるだろう)

少なくとも、火を起す事が不可能ではない事は自分の身で体験している。

それに今ならば、例えば炭などに火種を確保して、締められた草や苔を敷いた弁当箱に乗せれば火種を運ぶ事も不可能ではないはずだ。

(いずれ移動する……その上で今することってなんだろう?)

濛々と立ち込める煙に涙ぐみ、少し離れてからまた考える。

これがないとまず苦勞するだろうという作業は――

(枝とか葉っぱみたいな燃やす物の確保。……そうだな、これは本当に大事だ。シエルターの強化や増設にも使うし)

いざという時に燃やす物がないと、本当に苦勞する。マジで。

今みたいに既に火があるのならばまだ何とかなるが、一から始める時にそれがないとどれだけ苦勞するかは文字通り身を持って知っている。

(……この場所はあくまで仮拠点。生活の基礎を整えるのは当然だけ

ど、同時に移動する際に必要な物も揃えておかないと不味い)

とりあえず、後に移動する時に必要な物を考えておく必要があるが、同時に今の拠点をより過ごしやすくする必要はある。

「よし、もつと安心して水を飲めるようにしよう」

そして決めたのがこれだ。

正直、布で濾して大きな砂や藻の類を取った所で、飲料水としては不安な事この上ない。

そして不安を感じたまま口にするのは、多大なストレスになるのだ。

(水場が近くにあっても、怖くてガブガブ飲めないしなあ)

ここらにある小石や砂、そして火を点けた事で手にした燃えカス――炭。

これらとペットボトルを使つて簡単なる過装置は作製できる。

が、それだけで安心できるほど自分は自分の体を信じていない。なにせモヤシの比較的都会っ子だ。

ちよつとした菌や微生物を口にして腹を下す事は十分にあり得ると考えるべきだろう。

今の所は大丈夫だが……やはり殺菌のために煮沸をする必要がある。が――

「火に耐える器がないってのがなあ……」

以前にも考えたことがある問題だが、煮沸に必要な熱に耐える器がないのだ。

水を入れておけそうなものはどれも熱に弱いものばかり。火にかけた瞬間に燃えて穴が空いて、中身がこぼれてしまふだろう。

(さて、どうしたものか。ろ過を何度も繰り返せば安全になるって聞けど、それも『比較的』って言葉が頭に付くしなあ……)

沸騰という現象をもつとも単純にすれば、水を限界まで熱する事である。

つまりは熱を与え続ければいいのだが……。

「……よし」

とりあえず思いついた事を実行に移すため、出来るだけ太い流木を

探しに河原を歩きまわる。

昨日、火を起こすには大きすぎると放置していた物がいくつかあるので目星はすぐに付く。

自分の体力で持ち運べそうな小さめの物を選び、それと一緒に持ちやすそうで、かつ尖っている石もいくつか探す。とりあえずの道具代わりだ。

(やっぱり刀借りればよかったかなあ……)

出かける際にアオイが、万が一のためにと俺に刀を貸そうと言ってくれたのを思い出す。

女の子一人を探索に出している上に武器まで借りるのはさすがにどうか

と思い、そのまま彼女には帯刀してもらったが……刃物が欲しい。(ロープ代わりにツタとかが揃ったら、石斧作ってみるか)

切れ味では刃物には遠く及ばないのは間違いないが、枝を折ったりするのにはかなり適している気がする。

自分がしつかりしたモノを作れば、だが。

とにかく、引つ張つて来た流木を火起こしの時の様に石で削っていく。

この間は摩擦熱が逃げにくい様に細く作っていたが、今回はかなり大きく削る。ここに水を貯めるからだ。

「……今焼いてる分だけで沸騰するかね」

同時進行で火の中に放り込んで熱しているのは、削った大きな溝の中に入りそうな石だ。

ようするに、この溝に簡単にろ過した川の水を貯めた上で、熱々に熱した石を沸騰するまで放り込んで煮沸させようというつもりだ。

ほぼ生水を延々飲み続けるわけにはいかないし、なにより食べられるらしい植物の中には、サーチスキルの説明文の中に『茹でれば』という一言が付いている物がかなり多かった。

仮に肉の類が手に入らなかった場合を考えて、少しでも食べられる物は増やしておきたい。

ひよっとしたら大豆やキノコみたいに、たんぱく質を取れる代用品



が手に入るかもしれないし。

(……やっぱり俺も付いていくべきだったかねえ)

ひたすら流木を削り、程良い深さと形に削れた部分には焼けた石を枝で持ち運んで押し付け、軽く焼いていく。一応の殺菌だ。

枝に火を付けて直火で焼こうとも思ったのだが、意外とこつちの方が難しかったので石焼き方式に変更してみた。大変なのはこつちもだが、意外と悪くない。

作業は意外と速く終わった。

その後、少し迷ったがペットボトルの底を石で強引に開けて、鞆の底に入っていた輪ゴムを使って、以前簡単なる過に使った弁当箱の布袋を畳んで飲み口に固定。ペットボトルの中には、一度火にかけておいた砂、灰、砂、灰、やはり火にかけてから冷ました小石の順に中にいれてみた。

正直、順番が正しいかどうかは分からないが、これだけ層があれば機能しない事はないだろう。

後は弁当箱を使って水を汲み、ペットボトルのろ過器を通して煮沸用の溝の中に注いでいく。

ちよつと削りすぎたために組む作業も少々大変だったが、ある程度溜まった所で、ずつと熱していた石を投下。——大きい石は途中爆発したので、どれも手の平よりも小さいサイズに限定してある。

このサイズだと一つだけでは足りないだろうとたくさん焼いておいて良かった。

入れるたびに『じゅっ』と音がしていくのだがそう簡単にはやはり沸騰せず、5個、6個と投下して言ったらようやくボコボコつと泡が立ち始める。

煤で少し濁ってしまったが……生水に比べればはるかに安全だろう。

念のために、泡が立つ時間が長続きするようにちよくちよく石を投下する。

すると、思った以上に時間に余裕があったので、火と煙を絶やさないうようにしながら薪を濡れないように保管するための場所を作った。

といつても、練習も兼ねて小型のシエルターをささつと作つて見ただけだが……。

まあ、おかげで崩れにくい組み方とか結び方を色々と練習できたのはよかつたと言えるだろう。

そして日が落ち始めるまで燃やせそうな枝や葉を拾い集め、お湯で空腹を誤魔化しながら炎の灯り以外完全な闇に覆われていくのをじーつと待つて……待つて……。

「……あんにやろう！ 帰つてきやがらねえ!!!!」

やっと出来た同行者が突如行方不明になつたようです。

……泣ける。

「あんの野郎……どこまで行つたんだゴルア……っ!？」

夜が明けても、アオイは帰ってこなかった。

念のために夜の間に火を焚き続けて、たまに大声で名前を叫んでみたりもしたが反応なし。

「……行くしかないか」

アイツがどの方向に向かったかは覚えていない。

問題があるとすれば、どこまで探すかだが……。

（暗くなつてからじゃあ身動きが取れない。かと言って日暮れに戻る範囲だけ探索しても見つかる可能性は少ない……っ!）

昨日水を汲むのに使った弁当箱。とりあえずそれを一度水で洗ひ、中を清める。

（昨日の時点で、取れる木の実には少なかったけど……もうしようがねえか……）

下手したら、アオイがあれから何も食べていない可能性がある。

念のためにもう一度石を焼いて、煮沸させた水を弁当箱の一段に、もう一段には木の実や果実を後で詰める。

（アイツが言うには、この森には獣の気配がないとかいう話だった）となれば逆に、不自然な個所があればそれがアイツの通った道と言

う事になる。

昨日の今日だ、そうそう簡単に痕跡は消えないだろう。

例えば足跡。例えば枝なんかを折つたりした跡。

「世話かけさせやがって……ん?」

とりあえず自分の分も含めて食糧を取りに行こうとした時、今まで反応しなかったスマホが震えていた。

一瞬復活したのかと思ひ手に取ると、そこには最後に見た時と同じ白い文字が浮かび上がっていた。

たった一言。

『最適化のためのアップデートが完了致しました』  
とだけ、書かれていた。

(……何の最適化?)

まるで意味が分からない。

「……もつと色々必要なアナウンスがあると思うんだけどなあ。おい」

この森に放り捨てられてからずっとポンコツ仕様のスマホを放り捨てたい気持ちになるんだが……この感情、間違いでしょうか？



「まいった……この森を舐めてた」

何も気配がないのならば、あっさり痕跡を追いかける事が出来るんじゃないかと思っただが、開けた河原から大体の方向を決めて森に入つて10数分ほどだろうか。

全く持つて痕跡が見当たらない。足跡すら見つけられないとかおのれおのれおのれ!

「あんのアマああ……発見した時に元気だったら梅干しの刑かくすぐりの刑に処してくれるわああああ……」

鞆の中身は全てシエルターの中に放り込み、中には零さないよう地面と水平になる様慎重に入れた、水と果物、野草の御浸し入りの弁当箱が入っている。

どう足掻いても水は多少零れてしまうだろうがこの際仕方ない。

どうせ服も鞆も汚れまくっているのだ。ちよつと水浸しになろうが些細な事。

それをツタのロープを適当にくくりつけて肩にかける紐としたうえで、青々とした草木の束に僅かに火を付けて燻らせた物を手にして

いる。

自分がここにいるという目印と虫よけを兼ねての物だ。

(それにしても……どこをどう探したもんか。)

何度も叫んで居場所を探っているのだが、返事は全く帰ってこない。  
い。

ちくしよう、煙も炎もなんの役に立ってねえじゃねえか！ 何のため

めに一日火の番してたんだか！

「はあああああ………」

色んな意味で深い——深々々々いたため息が出る。

ようやく活路が見えてきた瞬間になんでこんな事になっているの  
やら。

「アオイ~~~~!! ……頼むから返事してくんねーかなあ、  
オイ」

自分がここまで動けたのは、孤独の限界が来る前にアオイと出会った  
事が大きい。マジで。

最初の一日から、割とギリギリだったのだ。

初めて光のない暗闇に覆われた時点で叫びたかった。

アイツは獣の痕跡がないと言っていたが、その時の自分には分かる  
はずもなく、変な生き物の余計な注意を引いたらどうしようと内心ビ  
クビクしていたものである。

(マジでアイツ、どう動いたんだ?)

日帰りで行ける範囲——少なくともその範囲で探索しようとした  
はずだ。

実際、日が暮れる前には帰ってくると出発前に言っていたし……。  
仮に自分ならどう動くか。

道に迷わず、万が一時間配分を間違えて、多少暗くなっても確実に  
帰ってこれるのは——川に沿うルートだ。

実際、水が流れる音が近くに流れているってのはすごく安心でき  
る。

ただ、そこを真っ直ぐ行っただとは思えない。

土自体がおとこの雨を蓄えているのか、全体的にぬかるんでい

る。

そのため、足跡が非常に付きやすいのだ。

現に、自分が通って来た跡は足跡がしっかり残っている。

(でもなあ……こっち側に来たはずなのに全く痕跡ないってどういうことだ?)

少なくとも最初の方向は合っているはずだ。

(アレか。俺が手掛かりを見落としていたのか?)

癪だがアオイの言うとおり山——というか自然への適応が低い俺では十分にあり得る話だ。

(サーチスキルをもう使うか?)

約10時間のクールタイム。一日に一度か二度しか使えないという制約から使うのを渋っているのだが……。

「……しゃーなしか」

せめてまずは痕跡を見つけて追跡、途中で見失った時などに使おうと思っていたが、始めの一步すら見つけられないのならもう使うしかない。

スマホを取り出し、指でノックするようにタップする。

すると白い文字がふわあつと浮かび上がる。

『スキル：サーチ』

そう書かれている部分をタップすると、使用するかどうかを意味する『Y/N』という文字がその下に出てくる。

そしてYをタップすると、またも世界が一変し、周囲の状況を詳しく教えてくれる。

生えている樹木や草の特徴。これはいつも通りだ。

問題はそれ以外だ。

他に何か、見なれない物が目に飛び込んでいないか辺りを見回す。

そして――

『血痕を発見』

『葉や枝を使用した、足跡の隠蔽工作の痕跡を発見』

俺が、スキルによつて目に見えるようになった落ち葉の下の足跡と血の跡が続く方向に走ったのは、当たり前前だろう。

向かった先は、やはり水の音がするほうだった。

もうスキルの効果は消えているが、血の跡を見る限り怪我はそこま  
でひどいものではないだろう。

だからこそ、足跡を消す余裕があつたのだと思うが……

「アオイー……イー……イー……っ!!!」

先ほどから叫んでいるが返事は帰つてこない。

(あんの馬鹿！ 怪我したんならこつちにくりやいいのに！)

怪我の原因が分からないが、枝とかでやられたとかならもちろん、  
もし獣に襲われたとかならこつちには火がある。

そりやあ熊レベルの物ならどうしようもないが……。

(ひよつとして、マジでそれか?)

刃物を持っているだけでは戦えそうにない獣に襲われ、それでとに  
かく逃げ回つて帰つてこれなくなつたとか?

(足跡隠す余裕があるなら、足が速い犬とかじゃあないとは思うが  
……)

そうして、ついに森を抜けた。

そこは、俺たちが仮拠点としている場所に少し似ていた。

緩やかにカーブを描く川。拓けた、石だらけの河原。

その向こう側——川を超えてまた森へと続く場所の一か所に、明ら  
かに違う物がある。

マントだ。

緑色のマント。

それを羽織つた、地味な色の洋服を身に纏つた——男がうずくまっ  
ていた。

「……………いや誰だお前……………」  
「……………」



007：プラス一名救助。（副題：相棒との距離が計れません）

また体——というか服を濡らすのはいやだったんだが、仕方ないの  
で燻らせている火を消さないように気を付けながら川を渡る。

男はこちらに気付いているのかいないのか、ジツとしたまま動かない。  
い。

そうこうしている間に俺は川を渡り終え、男の傍に近寄る。

コイツもアオイ同様、日本人の顔立ちじゃない。

なにせ、素で金髪だ。そして肌はアオイ同様白い。

つーかえらい綺麗な顔してんなコイツ。格好からして男なのは間違いないだろうけど。

どう言う訳か刀持ってて日本風の着物と名前を持っていたアオイ。

対してコイツは、名前は分からないが着ている服は俺が普段着ている洋服に近い。

そして、背中には刀ではなく弓を背負っていた。……折れているが。それに矢筒も見当たらない。

「おい、大丈夫か？」

とりあえず、声をかける。

わずかにだが、身体が動いた。

大丈夫だ、生きています。

傍に近寄ってもう一度声をかけようとする、小さく呻くのが耳に入った。

「生きてるんだな？ 怪我は……」

見ると、足に刃物で裂かれたような傷が出来ていた。

ズボンの生地ごとスパツと斬られている。

そして、どういうわけかその上から、別の布が巻かれて止血されている。  
いる。

この布の色には、覚えがあった。

「……アオイ？」

くすんだピンクというか桃色というか、少し地味な感じのこれは、アオイの着物のそれだ。

結び目というか、布の端を見る感じだとおそらく刀で自分の服を切り裂いたのだろう。

(じゃあ、アイツはどこに？ ……まさか、すれ違ったか？)

助けを求めて仮拠点の方に向かった可能性はある。

もつとも、仮に二人で何ができるかという話だが……。

「すまん、ちよつと触るぞ」

とりあえず首筋にそつと手を添える。

そうじゃないかと思っていたが、やはり体温が低い。

とりあえず持つてきていた小火を燻らせている草の束に、適当な落ち葉を被せて息を吹きかけ、火を起こす。

(止血しているんなら、あとは体を温めて栄養取らせて、ゆっくり休ませるしかねえ)

というか、ろくな医療知識を持っていない以上はそれしか出来ないと言うべきか。

辺りを見回して状況を確認する。

拠点に比べて河原は狭い。ちよつと歩けばまたすぐに森だ。

シエルターを作る材料は、おそらくすぐに手に入るだろう。問題は

(日没までそんなに時間がないな……)

血痕と足跡を見てから急いで走っていたために気付かなかつたが、結構な時間を費やしてしまったようだ。

このままでは、俺もこの男もここで夜を越すしかない。

俺はまだ大丈夫だが、この男は――

(いや、簡単でもいい。とにかく、これ以上この男の体温を奪うような状況を出来るだけ遠ざけないと)

森の中は風を避けられるが、今はあの豪雨の影響か地面が湿っている。夜になれば更に気温が下がるとみた。

それよりも、ここで風を避ける壁を作った方がいいだろう。

石だらけだが、ちよつとどかせば砂と土が見える。  
上手くやれば風避けくらいは作れるハズだ。

要するに、風さえ凌げばいい。

そう考えて、とりあえず俺は持てるだけの枝を森から運んできた。  
まず長い奴を地面に置いて、その一本の両端を、二本の枝で挟み込  
むように地面に突き立てる。

(うしつ、これを積み重ねていけば……)

その上に次々と枝を積み重ねていく事で、簡単な壁にはなる。

完全に真っ直ぐの枝を探す余裕はないから隙間が空いているし、  
ロープやツタの類もないので本当の強風が吹いたらすぐに崩れかね  
ないが、今のところは大丈夫だろう。——この間みたく、急に豪雨に  
襲われなければ。

とりあえず暗くなる前に全てを用意する必要がある。

物は試しとやってみた思考錯誤が上手く働きそうだと判断して、森  
に材料を探しに行こうとした時、パキツと枝を踏み折る音がした。

そちらに顔を向けると——

「トールさん!？」

昨日の朝から見ていなかった顔が——

なんちやってサムライガールが片手を振っていた。

反対側の肩に、違う誰かを担いで。

「……他にもいたのかよー!」



「とにかく火はあるから、風避け急いで作るぞ！ その人は怪我を?!」

「いいえ。ただ体が濡れていて大分冷えてますねえ」

「火のそばに置いて!」

「はあいつ」

アオイ本人も着物が所々濡れており、体に張り付いている。彼女も川に入ったのだろう。

本人も火のそばで体を温めるように言おうと思ったが、さすがに今から最低二人を安静に寝かせる場所を作るには俺一人じゃ手が足りない。

「それにしても……また全然違う感じだな……」

アオイが背負って来た人間は女だった。

だが、その服装はこの場にいる人間のどれとも似ていない。

なんとというんだ？ やけにピツタリと体に張り付いている……サイバー系？

架空の近未来とかを舞台にした創作にありそうな格好だ。

人型ロボットのパイロットスーツとか。

それから二人でどうにかこうにか枝を集めていた。

想像通りアオイは丸一日ほぼ飲まず食わずだったようなので弁当箱に詰めてた煮沸水、木の実と果実の詰め合わせに本気で喜んでいたが、ゆっくり食べる暇はないといくつか口に含んですぐに作業に移っていた。

「そもそもなんでこんな状況になったんだ?」

「獣が通るならやつぱり水場の近くだろうと思つてあちこち探し回っていたら、流されている人影を見つけてえ……」

それで、どうにか一人——男の方を回収したもののもう一人の女の回収には失敗し、とりあえず男の血止めだけして女の後を追つたらしい。

(……と、いうことは……あの足跡と血痕は男の物だったのか?)

スキル使用時は青くハイライトされて分かった血痕だが、それ以外では足跡も含めてさっぱり分からなかった。

そのためスキルで見えていた足跡の向きなどから方向を予測して全力で叫びながら走りまわった訳だが……。

(とにかく、こいつら助けて話を聞くのが一番か……)

もう日光はオレンジ色の物になっている。もうじき更に暗くなり、そして夜になるだろう。

先ほど二人がかりで大きめの倒木を引き摺って離れた所で火を付けた。

作業中の光源としては——まあ、さすがにライトには負けるがなんとかなるだろう。

理想としては風上に対して『コ』の字の形に簡易壁を作って。出入り口というか開いた方向に火を置くという計画だった。

が、こうなつては時間が足りないために計画を変更し、『コ』ではなく『へ』の時にする事にした。

要するに三角形だ。下の辺を消した。

正直、隙間風が結構強いのだが石や泥、あと適当な草などで隙間を塞いで誤魔化す事にした。

とりあえずこの二人が動けるようにならないと、こちらとしても移動ができない。

「どうしましょうかツールさん。一応拾いましたけど捨てますかぁ？」

おい。

「いや犬猫じゃないんだから……捨てるなんて言えるなら、なんで助けたんだよ？」

「いやだってほら、目の前でちよろちよろしてる物があると気になっちゃうじゃないですかぁ」

おい。

おい。

「いやあ、私も最初は何か知っているかもと思って回収したんですけどお……この人達も、多分私達と同じですよねえ」

「……まあ、多分な」

服装の統一感がなく、かつこの森の中を歩くには不適切な服装……

いや、男の方はまだあり得るが。

おそらく俺やアオイと同じく、突然この森に放り捨てられた人間だろう。

……というか、お前さん結構ひどいな。

「いやだってえ、食糧や水をキッチンと分けてくれる上に知識の引き出しが多そうなツールさんは居てくれなきゃ困る人ですけど、下手に食いぶち増やすなんて面倒じゃないかあ。拾った私が言うのもなんですけどお」

……そうだったわ。そういえばアオイさんってば世紀末みてーな世界の国で奴隷の管理とかしてた人でしたね。

そりゃあ考え方もシビアですわ。

「……人手が増えれば、出来る事も増える。助けた借りはキッチンと返してもらおうから今は全力を尽くそうぜ」

「わかりましたあ♪ ツールさんがそう言うならあ♪」  
「……………」

あの、すみません。一人じゃないって言うのはありがたいんですが……ええ、本当にありがたいんですが……。

同行者が爆弾すぎて放り投げたいです。

……泣ける。

二人は藁と落ち葉を敷いた上に寝かせて、俺たちも余った藁と落ち葉の上で睡眠を取ろう。

ホント、顔はいいし普通に話している分にはいいんだが……。

この娘たま〜〜〜に怖いッス。

【幕間く侍ガールく】

奇妙な二人組を回収し、明日には壊すだろう拠点——とも言えないような、ただの風避け場。

結局二人を助ける事にした男は、焚火の前で膝を抱えたまま仮眠を取っている。

今、起きているのは一人だけ、薄い着物を身に纏う女——アオイだけだ。

体力がかなり消耗している二人を凍えさせる訳には行かないと、トールは先ほどまで火の番をしていたのだがさすがに限界が来たらしい。

わざわざ自分達の分の寝床を作ったのも、キッチンと自分を休ませるためだったのだろうとアオイは推測していた。

実際、アオイが横になってしばらくしてから、音を立てないようにソーツと身体を起こしたトールは、そのまま何も言わずにずっと焚火の様子を見て、小さくなりそうになると枝や枯れ葉を継ぎ足していた。

せつかくの気遣いだと、そのまま仮眠を取り、そして目を覚ました時にはトールがうつらうつらとしていたわけだ。

キッチンとある程度の大きさを保っている炎の様子からして、本当についさつき眠り出したのだろう。

うつらうつらとしている男に変わって焚火の中に渴いた枝を一本、二本と静かに差し込んだ女は、男を起こさないように静かに立ち上がる。

恐らく、この周囲に危険はないのだろう。

女はそう判断して、だが一応念のために男の横に獲物を——刀を置いておく。

今も寝ている二人が襲いかかる可能性は確かにあるが、確かに手当てを受けた痕跡が残っているのに目の前の知らない人間に問答無用で襲いかかる事はおそらくないだろう。

ただ、それでも可能性は可能性。

出来る事ならば男を守るために張り付いていてかったが、アオイにはしなくてはならない事があった。

辺りは小石だらけで、普通ならば歩くだけで石が擦れる音が響くのだが、足を森へと向けて運ぶ彼女の足元からは音が一切しない。

それは、彼女が完全に足音を消す術を心得ているからであった。

チラチラと時折トールの様子をうかがいながら、アオイは森の中へと姿を消す。

焚火の炎と月明かり以外に灯りなど無いのに、まるで昼間のような気軽さでひよいひよいと森の中を歩く。

まるで、一度ここを歩いたかのように。

「……確か、ここら辺……だった……はず」

そうして、もはや焚火の灯りすら届かなくなった場所。木々が生い茂り、碌に足元すら見えぬ場所でアオイは何かを探していた。

探すこと、およそ三〇分。そして――

「あ、あったあった」

茂みの中から何かを見つけたアオイは、それを引き摺りだす。

「……腐ってはいるけど食われた形跡はない。やっぱり、獣どころか虫もない?」

引き摺りだしたそれには、手が二本あった。足が二本あった。顔が一つあった。服を着ていた。

――そして大きな切り傷があった。

――刀で斬られたのであろう、傷が。

「まさかトールさんがこつち側に来ちやうのは予想外というか……風が吹かなくてよかった。目的のついでにコレを処分しておこうとしたら面倒な事に……。まったく、やっぱりアイツら捨てておけばよかった」

獣がいない以上、恐らく適当に穴を掘って埋めれば当分は隠せる。掘り起こされる気配はない。



それこそ、しばらくすれば腐敗が進んで死因が刀だという事も分からなくなるだろう。

この転がる死体を作ったのが、アオイだと言う事も。

「別に全部バラしちゃってもいいんですけど、もうちよつと様子見はしたいですし……やっぱり埋めよう」

そうしてアオイは、ここにたどり着くまでの間に見つけておいた適当な倒木の一部を使い、穴を掘る。

自分がこの世界に来てから——初めての殺人の痕跡を、隠すために。

第一章：4人のおかしいサバイバー（副題：暗躍）  
008：RPGのパーティって四人が多いよね

「助けてくれた事には感謝する」

「命を救ってもらった事には感謝するわ。ありがとう」

一夜を無事に過ごし、再びスキルを使って辺りで食べそうな野草を見つけたして、一昨日試した煮沸方法で煮てアオイと食事を取っている辺りで、二人が目を覚ました。

二人とも年は恐らく自分とそう変わらない——まあ多少は上だろうが、纏っている雰囲気はとても同じとは言えない。二十代、いや三十代前後に思える。

さすがに混乱していたようなので、俺が今の状況を説明する。

どこかは分からないが、俺たちが森の中にいる事。

俺とアオイは出身が違う事。……世界うんぬんの事はまだ言っていない。

そして、現在人には全く出会っておらず、文明の気配が全くないことを伝えた。

そして、ある程度落ちついた二人は——

「礼は後でする、だからちよつとその女を殺させてくれないか？」

「ちよつとコイツの首をへし折っていいかしら？」

ダメです。

おいアオイ。そこで「ほら捨てとけばよかったでしょう？」みたいな顔をするんじゃない。

アホ毛をびよこびよこさせるんじゃない。また掴むぞゴルア。

「いやいや、ちよつと待てって。せつかく助けたんだからもうちよい命は大事にしてくれよ」

「そうですよお。お互い得物がありませんから、決着付くまでにかなり体力消耗しちゃいますよお」

違う、そうじゃない。

「仮にも領地を治めている人間に、領民を煽動しようとしていた敵国の人間を見逃せというのか!？」

「魔法なんか使って無理矢理世界を歪める連中を許せっていうの!？」

「自然を壊してきたお前らがいうのか!？」

「あんたらが資源を占有しているから……っ!!」

ねえ、もう頼むからお前らもうちよつと落ち着いてくれない？

……ん？

「おい、今魔法つつったか？」



魔法と科学に二分された世界。それがこの二人がいた世界らしい。片や魔法という特別な技術のため、可能な限り資源を切り崩さないように生き、片や魔法に近い技術を手に入れ発展するために資源を切り崩しながら生きている二つの国。

なんで衝突する前にどうにかしなかったのかと。

そんなん絶対についてかぶつかるに決まっているだろうがというのが俺の感想だったが、どうやら元々の対立が根深く、交流らしい交流もなかったようだ。

で、そんな世界の魔法側の貴族だったのが男の方——ゲイリー。

科学側の工作員だったのが女の方——アシュリーという事らしい。

「……にわかには信じられんが……確かに、ここは俺が治めていた領地ではないな」

「森がなかったのか？」

「いや、そういう訳ではなく……植生が全く違う」

ゲイリーは、少し離れた森を見回してため息を吐く。

「俺が管理していた領地では——ある種類の広葉樹を主に植えてい

た。木材としては加工しにくいが丈夫だし、魔力要素を多く産み出すためだ。だが、この森は……なんというか、統一性がない」

確かに、こちらの森は針葉樹も広葉樹もそれぞれある。

サーチして思っていたが、木の種類がかなり豊富なのだ。ごちゃ混ぜという印象だ。

「木々が豊富なのはいいが、俺が植林を命じていた木々と違い魔力要素はゼロに等しい。おかげで魔法が使えない」

ゲイリーという金髪の男は肩をすくめてそう言う。

対して銀髪の女——アシユリーは鼻を軽く鳴らし、

「ふん、未だに解析しきれていない力を行使し続けるから！ それが無くなった途端に無力ね！」

「貴様だって装備を失くして八方ふさがりなのだろうが……っ！」

うんわかった。分かったから喧嘩……喧嘩？ 争いを止めるんだ二人とも。

「なんにせよ、ここに三種類の別世界の人間がいる訳だ」

手っ取り早く場をまとめるには、自分とアオイも含めた四人共通の話題を放り込んだ方がよさそうだ。

そう判断すると、アシユリーは肩をすくめて息を吐く。

「ディストピア感あふれる国の奴隷管理官に敵の貴族に……君、トル君だっけ？」

「……うん、まあ、もうそれでいいです」

アオイがずっとツールさんツールさんと呼んでいるので、今更訂正するのもなんだか面倒くさくなった。

少なくともここにいる間はもうツールで通そうと決意を固める。

「君はなんとなくアタシに近い物を感じるし……それに、少なくとも人を騙すタイプには見えない。まあ、言ってる事は本当なんだと思うわ。実際、君とそこの彼女は衣服なんかに統一感とかまったく見られないしね」

「さすが、人を騙すプロは言う事が違うな」

「ブチ殺すわよ腐れ貴族」

「あ、あ、っ？」

やめいつちゅーに！

「とにかく！ どう足掻いても救援とか救助とかあり得ないの！ 来ないの！ つらいの！」

「おお……トールさんの泣きそうな顔がまた見られるとは」

アオイはちよつとお口にチャックしようか！

「で！ 皆で協力しようって話をしたいんだけど!! よろしいかね?! よろしいですね!!」

だからとりあえずそれぞれ隙あらば殴り殺そうと互いにこっそろ握りしめている石をそこらに置いてくれませんかね。

ええい、二人ともあからさまに引くんじゃない！

「とりあえず、ここに来たというか——迷い込んだのは一昨日なんだな？」

まずは状況を確認しようとする尋ねると、ゲイリーの方が答える。

「ああ。作業員の拠点が分かったという報告があったので、兵を引き連れて包囲。直々に乗り込んだと思ったら……この森の中だった」

「アタシは、囲まれるのが分かったから一足先に脱出しようとして……隠し通路の扉を開いたらここだったわ」

……やっぱり俺やアオイと同じだ。

共通しているのは『扉』を開けてくぐった瞬間だということ。それ以外には特にながりがある様には見えない。

俺は家へ帰宅、アオイは部屋の退出、ゲイリーは突入時でアシユリーは逃走時と。

「で、森を歩いていたらこの女狐に襲われてな……」

「ああ、足の傷は彼女に斬られたんですかあ？」

「そりゃあ、訳のわからない森でターゲットの顔を見たら襲いかかるでしょう」

なんで俺以外に平和な世界や国出身の奴はおらんのか？

「それで、弓と剣で応戦してなんとか撒いて、逃げていたが川で追いつかれてな」

「……ひよつとして、足跡隠したりしてたのって」

「ああ、俺だ。……しかし、よく分かったな。それなりに野戦は得意

だったんだが……」

「ああ、いや……ちよつとズルをしまして」

「?? まあ、そういうわけだ。水辺で戦っている内に、ほぼ相討ちになって流されている所を、彼女に拾われた」

「なるほど……」

流れは把握した。

その上で気になるのは、二人が上手くやっていけるかどうかだが

……

「ゲイリー、アシユリー。二人は敵対しているということだけど……とりあえず、矛を収めてくれないか？」

「……………」

「……………」

これをしなきゃ始まらない。

ここで片方が別行動を選ぶとかなら一応の解決になるかもしれないけど、それはそれで後々やっつかいな事になりかねない。

——暗殺とか、奇襲とか。

俺の提案というか実質懇願に、二人は互いの顔に唾でも吐きかねない形相で互いに顔を近づける。

そして、これまた同時に俺の方を向き——

「首だけなら構わない」

「よし、君達ちよつと俺とトークしよう」

このあと説得にめちやくちや長い時間を要したため、結局この河原にもう一度簡単なシエルターを建てて一泊する事になった。

……泣ける。

## 009：セカンドスキルはちよつと保留

一夜を過ごし、四人でとりあえず元の拠点まで戻って来た。

もういつその事下流だった仮拠点をそのまま使ってもいいんじゃないかと思つたが、一応折り畳み傘などと使えそうな荷物がまだあつたし、アオイも一度戻りたいと言つていた。

この二人をそのままにしておいたら、そのまま殺し合いに発展しかねないので同行してもらい、一度情報の交換も含めて体勢を立て直す事にした。

「ひよつとしたら荒れてるかもしれないと思つたけど……ほぼそのままか」

一見大きな木の葉の山に見えるシエルター、薪を保管する小さなシエルター、石で囲んだ焚き木の跡、水を沸騰させるのに使つた丸太を削つた物。

これが、今現在の俺たちの拠点の様子だ。

「なるほど、落ち着いて森を歩いてみると……トール達の言うとおり、この森からは動物の気配がしないな。……植生の違和感も強くなるばかりだ」

おそらく、この四人のなかで最も森に詳しいだろうゲイリーの言葉に、アシュリーも続く。

「そうね。アタシも森歩きなんて、実質訓練以来だけど……なんていうか歩きやすかつたわね、この森」

え、マジですか。俺にはそれでもかなり辛かつたんですけどここあれですか、難易度低い森だったんですか。

「あのおく……私もちよつと気になる事があつたんですけどお」

向こう側から再び燻らせたまま運んだ火種を使い、火を起こし直す作業をしていたアオイがそつと挙手する。

「アシュリーさんを川から引き上げた所っていうのが、いわゆるカーブした部分だったんですけどお……なぜか川底がほぼ平らだったんですよねえ」

……それなんか変なのか？

思わず聞き返しそうになったが、残りの二人は顔をしかめている。

「変……だな……」

「そうね」

変なのかそうなのか。

完全に置いてけぼりなのはさすがに嫌だったので尋ねてみると、ゲイリーが肩をすくめて答える。

「普通川っていうのはな、曲がりくねる度に曲がる方向は浅く、反対側は深くなっていくのが普通なんだ」

「この川、急流ってわけじゃないけど遅いわけでもないから、それなりに深くなるはずなんだけどね」

ゲイリーの説明にアシユリーが補足を付け足し、アオイがアホ毛とともにコクコクと頷く。

(ああ……そっぴや小学校頃の理科でそんな授業あったっけ)

今更ながらに思い出し、頭を掻く。

やっぱり、自分は基本不真面目な学生なんだなあ、と再認識。

いやまあ、小学校の時なんざ正直何やってたか微妙にうろ覚えだ。

昼休みの鬼ごっこに全力出してた事と、棒登りに失敗して骨折った事はすんげー覚えてるけど……。

「つまり、どういうことなのさ?」

「分かりませえん……ただ、森と同じ感じですよ」

「森と?」

「造り物っぽいんです」

アオイの断言に、他の二人も同意のようだ。

「土と石で川の形を適当に作って水を引いたばかり……そんな感じだ」

「そうね。大げさな庭って印象。造園したてのね」

庭。庭か。

「つまり、分からないままか」

「そもそも、君やそのの奴隷管理官、そして俺たち。明らかに違う——世界? の人間が一堂に介している時点で深く考えるのは無駄だろう」



それはそうだけど気になるじゃん！

「ま、まあ……そうだよな。それじゃあ、これからどうするかって話なんだが」

とりあえず人数は増えた。つまりは労働の手が増えたということだ。食いつ持も増えた。

となると、本格的に食糧の問題が出てくるわけだ。

肉や魚が食える気配がないのは相変わらず。

つまりは、今まで通り野草などで腹を満たす必要があるが……。

(ここらへんの果実は大分食べちゃったんだよなあ)

水の煮沸が出来るようになって、食べられる野草は増えた。スープというかお茶のようにして飲む事で栄養はかなり摂取出来るだろう。

だが相変わらず、タンパク質と塩分に関しては先行きが見えない。

「トール。君はどう考えているんだ？」

「俺？」

「ああ」

「……俺としては、むしろゲイリー達がどう思うか教えて欲しいんだけど」

「こういうのは、リーダー格が最初にどうしたいかを伝えておいた方が円滑に進むものさ」

……………

——え、俺リーダーなの!?! いつのまに!?

「そうね。能力的にはその貴族が一番適正かもしれないけど、そうなればこんな状況だろうと、アタシとソイツの敵対は避けられない。

同じ理由でアタシも却下」

ま、まあ確かに二人のどちらかがトップになると、残った方がハブられる形になりかねないというのは分かるけど……

「そもそもリーダーって必要なのか？」

「まとめ役は必要だ。意見がバラバラになった時に上位というか、自分達がこの人を立てると決めた人間がいないと不和などによる分裂の可能性が高まってしまう」

ゲイリーはそう断言すると、俺とアオイを交互に見る。

「そうそう。で、そうなるに残るのはツール君とアオイちゃんの二人  
なんだけど……」

二人は胡乱な眼をアオイに向けていた。

アオイは首をかしげて、「どうしたんですかあ〜？」と聞いている。

ああ、うん。二人の言いたい事はよく分かる。

「リーダーという柄ではないけど、一応俺の考えを言っておくよ」

とりあえず、リーダーというより調整役と考えた方がいいだろう。

ある意味リーダーよりも難しい気がするが、少なくとも今ここに  
いる三人は協力的だ。

この三人となら——まあ不安要素はそこらかしこにあるが——  
やっていけるだろう。

「俺は、移動が必要になると思っている。食糧面でも、もうちよつと豊  
富な所を見つけないと不味い」

特に栄養面的な意味で。

「移動に関しては俺も同じ事を思っていた。問題はどこに向かうかだ  
が……」

「移動自体はアタシも賛成だけど、急ぐ必要はあるのかしら？ とり  
あえずは探索に一票」

まあ、やはりそうなるよな。

やみくもに移動したつて、ここみたいに拓けた安全な場所が簡単に  
見つかるかどうかだし。

「本格的に移動するかどうかは別としてえ、下流をもつと探索してみ  
たいとは思いますねえ」

アオイも探索に一票か。

まあ、意見としては俺が一番近い。

川を下つていけば、あるいは海に付くかもしれない。

海ならあるいは魚とかがいるかもしれないし、塩に関しても上手く  
いけば取れるかもしれない。

「とりあえず、今日は寝床の用意だけでもしておこう。具体的にどこ  
をどう探索していくかはその後話し合いで決める。それでどうかな  
？」

「異議なし」

「同じくね」

そうと決まれば話は早い、さっさと枝を集めてこないと——あれ？  
またスマホが震えてやがる。

ポケットからスマホを取り出して覗くと、白い文字がじわつと浮か  
び上がり——

『アップデートによる不具合の修正が完了しました。』

・スキルシステムに項目が追加。ご確認ください』

……『不具合』という言葉に非常に不吉な物を感じる。

いや、修正されたのならいいのか？

考えていても仕方ない、とりあえずいつも通りに確認して見ると

……おお、スキルをまた一つ選べるようだ。

『・健脚／移動する際に蓄積する疲労を軽減できます』

『・毒耐性／ある程度の毒を除外できます』

ここまででは以前と同じだ。自分があの時選ばなかった二つがその  
まま残っている。

で、追加枠だが——

『・野草知識／野草に関しての知識がインストール可能です』

『・道具作製／初歩的な作りたい物に関して、何をどう組み合わせれば  
完成するのかがインストール可能です』

『・気配遮断／視界に一度確認した対象の5メートル以内に入るまで  
気付かれないように出来ます』

うん、ここまでではいい。

一部なんか気になるワードがあるが、まあまだ理解できる。

で、その後だが——

あの、気のせいですかね？

魔法って書かれている気がするんですけど……。



杖を拾い集める作業をしながら、先ほどスマホに映っていた文字を何度も思い返していた。

魔法。魔法である。

サーチスキルが本当に使えるようになった事から、まあ一応はスキルという物を信用はしているものの……魔法？

(いやまあ、ゲイリーっていう実例があるから別におかしくはない……のか?)

ゲイリーが『今は魔法が使えない』と言っていたのも気になる。

(そもそも、他にも取るのに便利な物増えてたしなあ)

魔法というスキルは少々変わっていた。魔法スキルという文字の後にかっこ書きで、恐らくは魔法の種類を示す漢字一文字が書かれていた。(炎)とか(土)とかそんな感じだ。

そしてその後に注意書きで、『※一つしか選べません』と書かれている訳だ。

しかも、他にもいくつか取れるスキルが増えているため、現在新スキル取得は保留中というわけだ。

正直、他のスキルもすごく魅力的だ。

例えばこれ、『野草知識』とか。

目先の事を考えるとこれは非常に欲しい。

サーチスキルだけでは、一回調べればほぼ一日再使用は出来なくなる。

説明文を見る限り、恐らく知識が丸ごと手に入るのだろう。

それがどういふ事なのか深く考えるのは怖いが、あえて無視する。

(魔法……魔法なあ……)

説明に関しても、魔法が使えるようになりますというだけで、具体的にどういふ事が出来るのか一切不明だ。

色んな意味で魅力的というかロマンをくすぐる言葉ではあるが、今の状況でロマンなんざ言ってみれば糞喰らえである。

必要なのは理屈……ちよつと違う。……合理性か。

(さあて……何を選ぶべきかね)

## 010：個か、全か

結局、スキルを決められないまま一夜を過ごす事になった。

今回は作業に妙に慣れているゲイリーがいたため、さほど時間がかからずに人数分のシエルトアの確保が出来た。

なんだろう。貴族っていうからもつと偉そうで、こういう作業とか人任せみたいなイメージがあつたんだが、むしろ頼りになるお兄さん——いや、整った顔立ちとかも合わせると、近いのはこうなりたいと憧れる先輩といった感じか。

正直、この面子の中で一番頼りになる。

「さて、それで明日の事だが……」

夜になり、皆で火を囲みながら正直食べ飽きてきた感がある木の実と果実で腹を満たしながらの会議。

一応リーダーということらしいので、とりあえず話を振る事にした。

「とりあえず、二手に分かれて活動しないか？」

「二組で探索というわけか？」

「それか、片方はこっちで作業とか」

自分が次に取るスキルに関して、とりあえず明日何をするか、誰と行動するかで決めようと思う。

一度取り逃がしたスキルがそのまま取れなくなる訳ではないという事が今回分かったので、例の魔法に関しても無理して取る必要はないと俺は考えている。

ずっと保留したままというのももったいなさすぎるので、今は目先の行動に最も適したスキルでいいだろう。

「そうだな。念のために燻らせた火を持つておけば、仮に遠くに行きすぎても一泊くらいは可能だろう。……火事に気を付ける必要はあるが」

「つまり、ある程度は安心して動ける？」

「ああ。トールの書いたメモがあれば、安全度は更に跳ねあがる」

メモとは、ようするにサーチスキルを使った際に食べても問題がない植物をスケッチや押し花（正しくは押し草だが）と一緒に、詳細を書き込んだ物だ。

なにせサーチスキルが常時発動するモノではないのだ。判明した事はその場でしつかり書き遺しておかないと、肝心な時に困ってしまう。

「で、班員分けだが……」

単純に男組と女組でいいんじゃないか？

「まあ、そうだよなあ……」

ゲイリーはなにか別の案があったのかもしれないが、そもそもゲイリーとアシユリーの二人を同じ班には出来ない。

つい先日まで殺し合っていた二人に、いきなり仲良くしろと言ったって無理がある。

そうになると、自分がゲイリーかアシユリーのどちらかと組む必要がある。その二択なら、同性同士の方が気が楽である。

「そういうことなら、アタシからは文句ないわ。出来ればツール君とじっくり話してみたかったけど、機会はいくらでもあるしね」

……そうか。今気がついたが、仮に魔法を使えるようになったとすればゲイリーとの仲は良くなるだろうが、アシユリーからは敵視される可能性もあるのか……。

「美人にそういう事を言われると正直嬉しいけど、まあ……詳しい話はまた次回って事で」

「ええ、期待させてもらおうわ」

今のところアシユリーからは、恐らく文化がある程度近いと思われるのか好意的な雰囲気を感じる。

ゲイリーはもちろん、アオイと比べてもかなり気安く話しかけてくれる。——正確には言えば、アオイはなんというかアレなんだけど。

……あれ？ やっぱり魔法って取る方がデメリット大きい？

「問題はそれぞれの行動か。両方探索するか、片方が違う作業を行うのか……。ツール、どう思う？」

「俺としては、片方は残るべきだと考えている」

両方この場を離れて、万が一両方が動けなくなるような事になると面倒だ。

片方が異常を察知できたからこそ、ゲイリーやアシュリーと合流出来たわけだし……。

うん、アオイだけだったら最悪どうなっていたか。

「なるほど。となると、残った方が何をするかだが……」

シエルターの寝心地の良さを追求とか正直してみたいが、いずれ移動する拠点でそれを行う意味は薄いし……確かにどうしよう。

気になる事ややりたい事は多々あるのだが、近いうちにここを去るとなると選択肢はかなり狭まる。

「ねえ、貴族様。貴方の国って、確か貴族学校——ってというか、基礎教育課程の一環で山籠りがあったわよね？」

「ん？ ああ……。自然と触れ合う事は、魔術師には必須事項だからな」

「なら、今の状況で役に立ちそうな物の作り方は分かるでしょ？ トール君と相談して、いくつか作っておいたらどう？」

アシュリーの提案に、ゲイリーは考え込む。

「というか、なるほど。」

俺のイメージする貴族に比べて、なんとか泥臭いというか手作業に慣れている感があったのはそういう事か。

「こう、中性的な美系でもあるためそういう作業からは程遠いと思っていたのだが……。」

「必要なものか。確かに……トール、どう思う？」

「こうやってキッチンと俺に確認を取ってくれるあたり、なんとなくか俺をキッチンとリーダーとして扱ってくれている気がしてありがた——くはないけど、気遣いは感じる。」

「OK、それで行く。と言っても必要なものか……」

それが誰に取ってかで、モノは変わる気がする。

次に自分達が拠点とする場所を見つけるための、探索班にとって必要——というか便利な物か、あるいはいざ移動する時に必要な物なのか。



(明日の朝まで、ゲイリーと話し合うべきか)

本当はスキルの話をしたかったのだが、それよりも個々人の特徴と  
いうか傾向というか……そういう物の把握の方が今は大事な気がし  
てきている。

どれだけ俺がスキルで出来る事が増えた所で、それが自分一人だけ  
の状況ならともかくこうして色んな人間と共に動く以上、個々のスキ  
ルよりも連携の方が大事だと思うのは……集団主義的な日本人だけ  
らだろうか？

あるいは——ただ単に、あの孤独をもう二度と味わいたくないだけ  
なのだろうか。

## 011：二つめのスキルは――

アオイとアシュリーのペアは、朝食として茹でた野草をしつかり食べてから探索に出発した。水を汲んだりするのに使っていた弁当箱も向こうに渡してある。当然、木の実やなんちゃってお浸しにした野草をがつつり入れてある。

とりあえず、最低一泊はその場で野宿するつもりで川下を調べて見るつもりの様だ。

そして俺たちは――

「ナイフとか斧の代わりを作る……か」

「ああ。探索にしる拠点の強化にせよ、何かを叩いたり枝を折ったりする道具つてのは割と重要だと思うんだ。他には土を掘る道具というのも意外と使用頻度は多いし……」

ゲイリーと一緒に、とりあえず何を作るかという話し合いを始めていた。

実際、こうして互いに口に出すと分かるが、結構アイデアという物はポンポン出てくる物で――

「確かにそうだな。ただ、俺がさっき言った奴も考えておいて欲しい」「枝を組み上げて作るバックパックや運搬――ていうか採取用の器だよね？ うん、分かってる」

このように様々なものがポンポンと候補に挙がってくるのだ。

「俺としても、野草や木の実とかを入れる器は必要だと思ってたんだ。今まではあの弁当箱がその代わりだったけど、これからはそうもいかないしな」

現に、今はあの弁当箱は二段共にここにないわけで。

「よく、あの……なんといったか……プラスチック？ の器を貸し出したな」

「いやだつて必要だろうか？ 危険かもしれない遠出をさせるのに手ぶらで出させるわけには行かないよ」

訓練を受けてはいるというアシュリーなら、そこらの樹皮とかで器くらいなら作れるだろうけど、水をキッチンと貯めておける物はさすが

にムリなはずだ。

二人とも帰ってもらわなくちゃいけないだし、出来る限りの装備を整えさせるのは間違っていないはずだ。

「実際の価値は分からないが、現状アレは非常に大切な物じゃないのか？」

「だから貸したんだけどなあ……」

安い品というのものもあるけど——あつ、腐食とかで割れたりするかもしれないか。まあ、それは覚悟しておこう。

その前に水を入れておける器を作ればいいけど、さすがに現状だと無理あるよなあ……。

「ゲイリー……様？」

「今更『様』なんてつけなくていい。俺の領民どころか国の人間でもないし、文化も明らかに違う。呼び捨てで構わんさ」

「……悪いな、ゲイリー」

「構うな、ツール。俺が、俺たちが選んだリーダーは君だ」

おお、もう、ホント——

ホント、いい奴だよなあゲイリー。

知識面といい性格といい考え方といい、今一番頼りにしている男である。

「道具を手放したのがマズかったのかと思ったよ、マジで」

「それで、念のためのご機嫌取りに様付けか？ よせよせ、そういうのは大抵逆効果だ」

こう、貴族とか偉い人とか、そういう人ならばもつと偉ぶると思っていたのだが……。

そういうのを出してこないために、いつもクールだし、本当に頼れる先輩とかそういう感じの方が近いのだ。

「……俺やあの女——アシユリーに君が気を使っているのは分かっている。気にくわんと言えば確かに気にくわんが……まあ、考えている事も分かる」

チューブ状の植物をストロー代わりにして、削った丸太に貯めた煮沸済みのお湯を一度口にしてから、ゲイリーは続ける。

「……喧嘩は苦手なんだよ。もつと深刻な事情だつていうのは分かるけどさ」

言葉を飾る事に意味はない。

一番シンプルにそう伝える。

ゲイリーは、吹きだしていた。

「なるほど。やはり、君と俺たちではかなり文化が違うようだ。……

いや、状況がと言った方が近いか」

「そりやなあ……」

ゲイリー達は互いに戦争の真つ最中で、アオイはディストピア国家でそれなりに良い生活をしていた女。

激動とかドラマティックとかいう言葉とはもつとも程遠い自分と

三人では、色々な物が余りに違いすぎる。

「この森ってか、この世界からそれぞれの世界に帰れるかどうか分からないけど……今くらいはとりあえずあからさまな敵対は控えて欲しいな」

「……ああ、わかっているさ。これからは気を付ける」

我ながら無茶な事を言っていると思うが、ひよつとしたらゲイリーは俺以上に協力が必要だと考えているのかもしれない。

もつとも、それを踏まえたくうえで感情が邪魔してしまうのだろうか……。

それは仕方のないことなのだろう。

少なくとも、俺やアオイといった外野が突っ込める事ではないのだ。



それぞれが道具の材料を探しに―俺は程良い大きさと形の石を、ゲ

イリーは丈夫で形と大きさに合う木を探しに出かけ、そして日が高くなる前には拠点に戻っていた。

というより、ゲイリーは一足先に戻って作業場を作っていた。

作業をする間、日光を避けるために長い枝を支柱にし、ツタと適度な枝と落ち葉で即席の屋根を作ったのだ。

シエルターと視界、風避けの必要はないので屋根だけだが——なるほど、確かに作業の際の不快感は減った。

体感で分かるくらい発汗量が減ったのだ。

「なあ、ゲイリー。魔法ってどういうものなんだ？」

比較的真っ直ぐだが、節や小枝などがある棒から余計な物を取り除く作業をしながら、いよいよ本題に入ってみる事にした。

「ん？ ……そうか、君の所では魔法というものが存在していないのだったか」

俺が削り終えた枝に、手ごろな大きさの石を押しつけて調整しながら、それがハマるように小石で削るといふ作業を続けているゲイリー。

彼はその手を止めて、一息つく。

「正直、どういふものかと説明するのは難しいな。なんといふか使用者といふか家柄などでかなり変わるし」

「？ と、いふと？」

「そうだな……。君の生活といふか知識で、妖精とか精霊と聞いてピンと来るかい？」

「ああ、まあ一応」

日本の昔話に付き物の妖怪なんかは、海外で言う妖精なんかと正直同じものだろう。

「ウチの国は、信心深いってわけじゃあないけどお寺や神社……。ええと、教会みたいなものなんだけど……。分かるか？」

「ああ、分かる」

助かった。異文化交流どころか異世界交流なので、言葉は通じていても単語などで齟齬が出てくる可能性があるのは面倒だな。

「そういうのが身近だったし、そういう類のおとぎ話なんかも多かつ

たからなあ」

割と自分で自分の文化について考えた事がなかったために、説明するのにならんと詰まりながらだった。

もつとも、それでゲイリーにはある程度は伝わったらしく。「そうかそうか」と少し嬉しそうに近づいている。

「アシユリー寄りかと思えば、文化においては俺たちにも近い所があるようだな、君の国は」

「なのかね。こつちからすれば魔法国家なんて想像もつかないほどロマンな国って感想だが……」

俺がそう言うと、ゲイリーは「中々分かってるじゃないか」と、少々芝居めいた事を言って、

「まあ、話を戻すが……要するに魔法っていうのは基本的に、そういった妖精や精霊とのコミュニケーションとその結果なのさ」

「妖精と話せるのか?」

「人間同士の様には無理だ。だから家ごとに長い時間をかけてコミュニケーションの方法を確立させていく。魔素っていう餌を与えながらな」

……いまいちピンと来ない。

要するに、言葉の通じない外国人に身振り手振りでどうにかこちらの意志を伝える作業みたいなものだろうか?

「思い通りに行かないことが多い?」

「当然。例えばが悪いかもしれないが、犬猫に複雑なしつけを一つずつ教え込むような物だ」

「……ああ。それならなんとなく分かるな」

犬なら『お座り』とか『待て』とか、そういう言葉によって飼い主が何を求めているのか理解させるように、呪文とかそういった物で精霊とか妖精的な物に決められた行動を起こさせるのだろう。

(となると、魔法ってやっぱり外れスキルか?)

サーチのように、取ってすぐに起動するタイプとは思えない。

いやいや、ひよつとしたらゲイリーの『魔法』とこのスキルの『魔法』が全く別物なのかもしれないが……。

(……よし、これまで切り出すタイミングを逃して相談出来なかったけど、全員揃った時に改めて相談しよう)

それはそれとしてスキルだが……。

うん、ちようどいいのがある。コイツにしよう。

俺はスマホを取り出し、この間からずっとおんなじ文面の画面の一角をタップした。

——・道具作製

これが、俺の二つ目のスキルになった。

## 012：男二人の語らい

「随分と手慣れているな」

スキルを習得してからの作業を見て、ゲイリーは意外だという目をしながらそう呟いた。

うん、まあ、そういう目にもなるだろうな。

傷だらけのゲイリーと違い、土すら弄った事がほとんどない俺の手でそうなるとは思っていなかっただろう。

「ちよいとズルをしたんだ」

「君がこの間言っていた奴かい？」

ゲイリーが隠した自分の足跡と血痕を発見した時のことか。

ああ、そういえばあの時にもズルという言葉を使っていたな。

「うん、まあ。色々とあって話すタイミングを逃してしまったけど、皆が揃った時にそれについても話すよ。正直、相談したかったし」

「……………魔法について尋ねてきたのはソレ絡みか？」

やっぱり、鋭い。

「ああ、そうだ」

「なるほど…………」

ひよつとしたら、この時点でなんとなく察したのかもしれない。

小さく、だが何度も『なるほど、なるほど』と繰り返すゲイリーはしばらくそうしてから、二人で作った道具の数々に目をやる。

全部不格好だが、それなりにしつかりと作った石斧二本。

適当な流木に細い溝を削り、そこに薄くて出来るだけ鋭い石を嵌めこんでいったナタ一本。

程良い強度の樹皮を折り、サーチスキルで見つけた接着剤代わりのネバつく樹液で四角い器の形に固定した採取用の皿一つ。

今日一日で作ったにしては、十分すぎる量だ。

ゲイリー曰く、石斧二本と十もう一つくらいで今日は終わると思っていたそうなの。

(やっぱり、スキルは強いな…………)



例えば石斧を作る時だ。

どの枝が十分な強度があるのか、どこに石を固定すれば一番安定するか、ロープ代わりのツタをどこにかければいいか。

そう言った物が指示されるのだ。

サーチスキルを使った時の様に、突然発生するVR風の視界が発生し、自分が作りたい物を思い浮かべるだけで必要な手順をある程度教えてくれたり、時には文字や画像で指示してくれるのだ。

「しかし、掘る道具を真っ先に作らなかつたのは……失敗だったな」「ですなあ。いやあ……アオイ達が帰りつかなかつたのはある意味で運が良かった」

ついさつきまで、俺たちがやっていた作業は穴掘りである。

もつと正確に言えば——トイレ作りだ。

「思った以上に地面が硬かつたからな。出来れば壁まで設置したかつたが」

こつちの方は作業が進まず、穴を掘って真っ直ぐな枝や木を並べて一応座れるようにしただけである。

正直、現状違う所の方が用を足しやすいだろう。

……ゲイリーも言っていたが、掘る道具はやっぱり欲しい。

(ティッシュも残り少ないし……何か対策を考えとかないと……)

ひよつとしたらそういう物の作り方も分かるんじゃないかと頭の中で紙の作り方を探してみるが、どうやらスキルの対象外だったようだ。ウンともスンとも言わない。

マジでどうしよう。割とこつちも死活問題なんだけど。

「アイツら、明日には帰って来るかな……?」

「アオイという子は知らんが、アシュリーがいるからな。アイツなら、多分程良い距離で寝る用意をして、明日の日没までには帰って来るよう計算しているハズだ」

「……よく知っているな?」

「アシュリーという女は知らんが、敵工作兵の事は良く知っている」

沈みかけた太陽のオレンジの光に闇が混じり出し、焚き木の炎が俺とゲイリーを照らす。

つくづく思う。火はいい。なんというか、見ているだけで落ちつく。

正月の時に、神社が去年までのお守りとかを燃やす焚火——お焚き上げ？ の火とか大好きだった。

「そんなに戦争は酷かったのか？」

「……魔法の使用には、精霊に捧げる魔素が必須だ。そしてその魔素を産み出す要素は限られている。木々、海や湖、火山……特殊だが沼地などだ。そう言う所を焼き払われたり、汚されたりすると、その土地での魔法の行使に影響が出る」

「……そういう事をしていたのがアシュリー達か」

「少し違うだ……まあ、そうだ」

なるほど。前にゲイリーは、領地が最前線だったとか言っていたし、そういう連中とは何度もやり合っていたのだろう。

仲良くなるのはやっぱり無理かも。

せめて仮面を被ってくれていればいいんだが……いやあ、そしたら互いのストレスもあるし。

なんとか考えておかないと不味いか？

「まあ、現状では頼りになる女だしなあ。俺個人としては信じているし」

「ああ……なあ、ツール」

「ん？」

「君とアオイは全く違う世界。間違いないんだな？」

「ああ、絶対だ」

統一国家なんか、俺の世界であつてたまるものか。

奴隷が当たり前前の国なんて——まあ、まだまだあるのだろうか……少なくとも自分からは遠い世界だ。

「？ 何か引つかかる事が？」

「ん、ああ」

ゲイリーも自分と同じように炎を見つめながら、渴いた枝を二、三本放り込む。

「俺とアシュリーは同じ世界から来た。男と女が一人ずつ」

「……………」

「箱庭みたいな場所だと君達は言っていたらどう？」

言っていた。

特にアオイやアシユリーは、実際の自身の体験や経験を元に感じた不審点からそう推測していた。

「……ああ、荒唐無稽な話だとは思っているさ。思っているが……」

放り込んだ枝が『パキツ……パキツ……』と音を立てる。

「俺たちをここに放り込んだナニカは、世界から対になる存在を放り込んだんじゃないかと、そう思ったのさ」

「……俺の世界に、そんな話があったな」

ノアの方舟。

神様が汚れた地上を洗い流す前に、清浄な人であったノアにだけは伝え、巨大な箱舟を作らせる。

そしてあらゆる動物の番を乗せて、ノアとその家族、選ばれた動物の番達は大洪水を逃れる。

大雑把にだが、子供の頃に読んだ漫画版の聖書の話の思い出しながら教えると、ゲイリーは苦笑をして、

「仮にこの森がその箱舟の代わりだとしても……ま、戦争なんかしている俺たちはまず選ばれないだろうしな」

「俺もだ。不真面目で成績も中の中から下の間を行き来している奴を選ぶ神様なんて、どう考えても目が悪い。眼科を紹介する必要がある」

なんとなく思いついたフレーズは、ゲイリーにはツボだったようだ。

珍しく大きな声を上げて笑っている。

「全くだ。そもそも神様がいるのなら、もう少し丁寧な仕事を心がけてもらいたい物だな」

「ああ、せめて一月前にはアナウンスをしてくれよ」

「その通りだ」

くつくつく、と声を抑えた笑いにしながら、ゲイリーは二本の枝を箸のように使って、火のそばで熱し続けていた石を掴んで、水の貯め

場となった丸太の中に放り込む。どうやら温くなっていったようだ。

「しまった、灰を払うのを忘れていたな」

「どうせ明日の朝には一度水を捨てて入れ直すんだ。気にするなよ」

一日がまた終わる。

この生活が始まってもう一週間が過ぎているが、相も変わらずヒン  
トもなにもない。

ただ、終わりが見えないこの生活も、意外と悪くないのかもしれない。  
い。

水を飲んで、『酒が恋しいな、ちくしょう』とボヤクゲイリーを横目  
に、俺はそんな事を考えていた。

## 013：合流

ゲイリーの予想通り、女性陣二名が帰って来たのは翌日の日没前だった。

帰ってくるまでの間。俺とゲイリーはトイレを二つ分完成させていた。

掘るのにちょうどいい硬さの流木が見つかったのもあって、昨日よりも作業はスムーズに進んだ。無論、作った道具のおかげでもある。枝を折るのにこれまでのような労力を使わずに済み、細い木なら石斧で切り倒す事も出来た。

うん、石斧作って本当に良かった。

削ったり割ったりして刃物状にした石は、加減が少々難しいが刃に近い所を掴めばナイフとしても使え、木材の加工——たとえば地面に刺さりやすいよう尖らせたり、節や枝を叩き落とすのに非常に便利だった。

ツタの回収には木材に鋭い石を埋め込んだナタも効果的だ。

ツタで縛っている訳ではないので強度などには不安が残るが、振りやすさも持ち運びやすさも石斧より上だ。

石斧も悪いわけじゃないが、俺が扱いに慣れていないのかまだ作りが甘いのか、目標に打ち付けて石が飛んだりツタが切れたり解けたりするトラブルが多かった。

まあ、ナタよりパワーというか威力が必要な時には必須であるが。ナタは軽くて脆いため、使いどころが邪魔な枝などを叩き落とす時のみというのが唯一にして最大の欠点だ。

それでもなんやかんやで、やはり活動を開始してから太陽がもつとも高くなるまでには作業を無事終わらせる事が出来ていた。

本来ならば、例えば木を削ってナタと同じ要領で鋭い石をつけたシヤベルや、枝とツタを組み合わせた運搬用のバックパックを作るはずだったのだが、ふとした思いつきからそれらは後日という形になった。

では何をしていたのか？

——罾を作っていた。

「少なくとも腹は満たせるんだから、今の内に試せる物は試しておかないか？」

というゲイリーの提案に乗ったのだ。

いるかどうか分からない魚を取るために、ずぶ濡れになりながら男二人で作業をしていた。

流れに対して、角を取った逆三角形というか——漏斗型になるように魚が通れないような狭い間隔で長い枝を杭として打ち込み、その先を同じように……なんて言うんだっけ？ 生簀いけすというか……まあ、あの程度の広さを持った行き止まりを作ったのだ。

この時点でかなりの時間を使ってしまったが、そこから更にもう一つ——同じコンセプトの籠を作った。枝とか丈夫なツタとかを組み合わせた、いわゆる魚籠びくである。自分の道具作製スキルに反応してくれたおかげで大幅に時間は短縮できたと思うのだが、それでも日没ちよつと前までかかってしまった。

どうにか完成したそれを、拠点——まあ、少し前に作り上げた魚を閉じ込める罾よりも上流の所に一つ仕掛け、放置している。

出来れば細目に様子を見に行きたいのだが、もし本当に魚がいれば近づく音などで警戒する可能性があるため、見に行くのは明日の朝になるだろう。

……餌として砕いた木の実や果実の欠片を仕込んだり振り巻いたりしたが……かかるのだろうか？ 石の下などに程良い虫がいるかもしれないと探し廻ったりしたのだが、一匹もそういうものを見つけれなかった。

ちくしょう、ホントなんなんだここは。

「で、下流の方はどうだった？」

「ん、新発見という訳ではないんだけど……」

合流した二人は、心なしか最後に見た時よりも身綺麗に見える。

ひよつとしたら、男の目がないという事で水浴びでもしたのだろうか。

「こういうのを見つけましてえ……」

そういつて差し出してきたのは、渡しておいた弁当箱だった。

水とかを組んだり、何かを入れるのに使うといいと渡しておいたそれには、俺がまだ調べていない果実や野草がギツシリ詰まっていた。

反射的に、サーチスキルを作動させて詳細を確認する。

「どれも食べられる物みたいだけど……これは？」

俺の質問に二人が答えるよりも前に、一緒に弁当箱を覗き込んでいたゲイリーが反応した。

「クロームの葉にイエローケパ……俺の世界の野草だ。いくつかは」

「そうじゃないのは、私の世界にあった野草や果物ですねぇ」

……なるほど、そう来たか。

「つまりあれか。俺たちは森に連れて来られたんじゃないかと……木々と一緒に放り込まれたということか？」

「……何とも言えないけど……その可能性もあるわ」

アシユリーの感想は、歯切れが悪かった。

話が大きすぎて上手く考えがまとまらないのか、あり得すぎて否定したいのか。まあ、そんなところだろう。

むしろ自分みたいに、『ああ、そういう話もありそうだよな』と考える方がどうかしている。

「この河原に来てからそういや刺されていないが……あの虫も、どっかから運び込まれた奴らなのかもしれないね……」

これまで食べた野草や木の実、果実に関しては三人共知らない物だった。

ということは、あれらは別の世界の物だろうか。

もしそうなら、探せば他にも放り込まれた人間がいるかもしれない。い。

「見つけたのはこれだけか？」

ゲイリーがそう聞くと、アシユリーは声をかけられたのが意外だったのか目をパチクリさせる。

「え、ええ。といつても、当然もつとたくさん生えていたけど」「周囲の植生は？ お前や俺の知る植物はまとまっていたか？」「……………そう、ね。密集していた訳ではないけど、割と近い範囲に生えていたわ」

「私の方もそうですねえ。私の知っている木が十数本まとまって生えてて、その周辺に野草が生えてましたあ」

「ふむ…………」

ゲイリーは口元を手で多い、辺りの木々に目をやりながら何かを考えている。

聞いていた事から考えて、生えている植物のパターンなどになにか法則があるのかどうか気にしているのだろう。

「動物の類はやっぱり見なかったか？」

とりあえず向こうの世界関連の話は、当の二人に任せよう。

少し考えながら話し合っているゲイリーとアシユリーを横に、アオイに話を振ってみる。

「ええ。相変わらず獣道や糞、毛のような痕跡は見つけられませんでしたあ。まあ、アシユリーさんは例の野草などを見てから、動物は絶対にいると考えているようですけどお」

「？ なんで？」

「わざわざ植物まで持ちこんで、人も持ちこんで動物だけ持ちこまなっておかしいでしょ？ という事らしいですう」

「……………うん、いや」

言いたい事は凄く分かるが、いくらなんでも安直過ぎやしないだろうか。

炎の中に枝を差す作業をチマチマやりながら、裂いてパスタの様にした茹で野草を口にしながら、俺は、いつ自分の話題を切り出そうかとずつと考えていた。



014：おかしいのはスキルか、それとも――

「あゝ、実は俺もちよつと皆に聞きたい事があるんだけどいいか？」  
タイミングは意外と早く来た。

ゲイリーとアシュリーの情報交換は、俺も一応耳を傾けていたが、結局の所進展なしという事だった。

その後、いい加減に食べ飽きてきた野草――そろそろ本つ当にタンパク質が欲しい。なんというか、確かに完全な空腹になる事はないけど満足感がないのだ。果実の甘味も、ずっと続くとさすがにつらい。

「皆の今の持ち物は一応把握しているけどさ。」

アオイは刀と、俺が渡したノートと筆記具。

ゲイリーは布数枚に折れた弓。矢筒は失くしたと言うことだ。

アシュリーはほぼ手ぶら。強いて言うなら耐寒、耐暑機能付きの特殊スーツだろうか。

本当はナイフを始めとするサバイバルパックを持っていたらしいのだが、ゲイリーとの格闘で紛失したらしい。

……川を下りながら探っていけば見つかるだろうか？

「その中で、変化が起こった物ってなにかないか？ 例えば、文字が浮かび上がったとか……持ち物じゃなくて、自分自身に何か変わった所があるとか」

俺がそう尋ねると、三人とも怪訝な顔で首をかしげる。

「持ち物の変化はともかく、俺達自身に変化っていうのは穏やかじゃないな」

「……トール君にはなにか変化があった……という事かしら」

ボソリと出たアシュリーの呟きに、隣にいるゲイリーがピンと来たようだ。

「君が言っていた『ズル』に関する事か？」

「？ ズル？ トール君が？」

今にして思えば、もうちょい印象のいい言葉を選べばよかった。

少し眉を顰めるアシュリーの表情にそんな事を思いながら、俺は口

を開く。

「あー、実はね——」

そこから実際にスマホを見せながら、全てを順番に話していった。この機械の本来の用途、使用法。こっちに来てから電源すら入らなくなつた事。

それが突然、本来のとは違う白い文字が浮かび上がる様になつたこと。

それから唐突に、スキルという物を覚えられるようになったこと。実際に覚えて使用した事。

そして先日、また新しい選択肢が出た事を話したのだ。その内容も含めて。

「ああ♪ 隠れていた私を見つけたり、食べれる物とそうでない物を見分けていたのはそのおかげですかあ♪」

アツサリと受け入れたのはアオイだった。

逆にゲイリーとアシュリーの二人は、深刻な顔をしている。

「ねえ、ツール君。そのスキルというのを取ったり、使用した時に他になにか無かった？ それこそ体のどこか……眼球とか頭に痛みを感じたりとか……」

「些細な事でも構わない。引つかかる事があつたら——気がついた時に言つてくれ」

というか、すっごい心配してくれている。

ごめん、なんか本当にごめん。

こう言つちやなんだけど、君達の世界から来たのがゲイリーとアシュリーの二人で本当によかつた。

「ああ、特に何も無い。……まあ、今の所は……だけど」

事実である。確かにスキルを使って面喰めんくらつた所はあるが、自分自身へのある種の不気味さというか不信感というか……まあ、そういう所以外は特に影響は感じていない。

「……おい、作業員。お前の所の技術でこういう事は可能なのか？」

「……今現在ツール君が行っている事は……まあ、条件さえ整っていれば出来なくもないけど……ツール君、君の所では今君がやっている

事って不可能なのよね？」

「あ、ああ……」

正直に答える——まあ、それ以外の選択肢がそもそもない訳だが……そうするとアシユリーは眉をしかめて考え込む。

「EEC手術……要するに、身体や臓器の機械化によつてそういう事も可能といえば可能になるけど……それには当然オペ——手術が必要よ。基本的な物でも眼球を専用の義眼に、そしてこめかみの辺りにサブブレインの移植をして……今の私みたいにネットに接続が出来ない状態でもそれを可能にするには、それこそ脳を全て機械化した上で全ての知識を落として初めて——と言った所だけ……」

専門的なワードがえらく続くが、要するに直接俺に手を加えた上で設備や環境が整っていればどうにか可能という事だろう。

「貴族様はどう思うの？ 魔法でのアプローチは——」

「いや、あり得ない。魔法で人体を変異させる事は不可能だ」

ゲイリーは、アシユリーと違い遠くから俺の姿を観察していた。

恐らくだが、文字通りアシユリーとは見るべき所が違うのだろう。「例えば、魔法による病気の治療というのは長く——それこそ100年単位で研究されているが未だ上手く行つたためしがない。だからこそ、医薬品に関しては薬草などの研究成果や、お前達の国に依存していた。……そこらへんの摩擦もまた、俺たちの戦争の一因であつたが……」

「……そうね」

二人して——特にゲイリーは沈痛そうに顔をしかめ、アシユリーもまた僅かに目を伏せた。

「すまない、少し逸れたな。まあ、とにかく人間——というか生物の体に直接変異を起こすというのは非常に難しいんだ。手間暇かけずに自分に知識や技能を生やす……とはちよつと違うか。ともかく、俺たちの目からすればあり得ない事だ」

……つまり、このスキルって奴に関して分かる事は何にもないって事か。

そう尋ねると、二人とも苦い顔で頷く。

「正直、使って欲しくないな。君に万が一の事があると思うと……」  
「絶対とは言わないけど、使用……いえ、使用よりも習得に関しては慎重にして欲しいわね」

良い奴らだ！

ゲイリーもアシユリーもマジでいい奴らだ！

「ええ〜？　せつかく便利な道具使えるんだからバンバン使いましよ  
うよお〜。今まで問題ないなら、これから先も大丈夫ですよお〜♪」  
そしてコイツは——残る一人であるアオイはこう言うのだ。

うん、いや、まあ、俺もちよつとはそう思うけどさ。

直前の二人の発言からもうちよつとこう——こう、さ！　ねえ!?

「大丈夫ですよお〜♪　使うのが不安なら、さっさと使わなくていい  
環境作ればいいんですよお〜♪」

俺の国には『朝三暮四』っていう言葉があつてだな?!

っていうか本当にそれ意味ねえだろうが!?

「そもそも、スキルどころは正直どうでもよくありませんか?!

お願いだから少しは言葉を着飾ってくれないかな!?

俺、繊細な日本人なんですけどおつ!?

「なら、アナタは何が気になってるのかしら?!

顔をしかめた——というか苦笑しているアシユリーが問いかける  
と、珍しく——ひよつとしたら初めて見るかもしれない真面目な顔を  
したアオイが、口を開く。

「ついこの間修正されたっていう『不具合』ですよ」

ああ、そういえば……。

スキルについてはかなり話したけど、そこはあんまり触れてなかつ  
たな。

「その不具合って何に関してなんですかね?　スキルというシステム  
?　トールさんの身体?　それとも——」

「——この世界ですかね?」

……。  
その発想は無かった。

## 015：気力回復！

結局スキル——というかスマホに関しては、次に何かアナウンスが来た時に全員で情報を共有してそれからどうするかを決める事になった。

まあ、要するにどのスキルを取るのかあるいは保留するのか会議が開かれる訳だ。

アオイは次にスキル覚える機会があったら魔法覚えましょう覚えましょうとすぐくプッシュしていたが、とりあえず保留。保留したら保留。

アオイにはとりあえずささやかな抗議というか俺の意志表示としてコメカミ思いつきグリグリしてやった。もちろんダブルでだ。

そしてついでに罾の話をして、明日の朝になったら確認してみようという話で終わってそれぞれ就寝に入り、そして翌朝——

「トール君。昨日俺たちが作ったのって魚捕りの罾だよな？」

「そうでしたね、ゲイリー君」

「なんか……動物の死体が引つかかかってないか？」

「……そうですね」

俺たち4人の前に現れたのは、四本足で全身が毛に覆われて、そして角が生えている——ぶつちやけ鹿の遺体が引つかかっていた。

「食うぞ！ 肉だっ!!」



刃物を持っている人間がいてよかった。

元々山育ちだったというアオイは、刀を使って手際よく動物——どう見ても鹿だ——を解体していった。

ゲイリーやアシユリー曰く、新鮮な上に沸騰させられるのなら血も飲んでおいた方がいいと言うので、水に混ぜた物を煮沸して飲んでおく。

ある程度は塩分を補給できると言う事だ。

「上流を調べるべきだ」

剥いだ皮から、石で余分な肉や油をこそぎ落とす作業——人間の胃では消化できない油の可能性があるため、結構大事らしい——をしながらゲイリーがそう主張する。

「確かに動物がいる——現れたと言うべきね。それは分かるけど、探索の計画を変える必要があるのかしら？」

それに反論するのはアシユリーだ。

アオイがさばいた肉を即席の三脚に吊るして、その下で火をおこして煙で燻している。即席の燻製……というよりは、念のための虫よけらしい。

「ん〜。ツールさんはどう思います？」

そして俺たちは、食事の準備として切り分けた肉を延々細い枝に突き刺して、炭火の上で焼いていた。

「……正直迷っているなあ」

上流を探索して、流れ着いた鹿の痕跡を探したいという欲求はある。

久々にこうして肉を食べたし、他の動物の痕跡だって見つかるかもしれない。

だが同時に、この森を抜けるには下流の探索も大切だと思う。

「いつその事、思い切って二手に分かれるって言うのはどうかしら？」  
先日の探索では片方が念のために待機していたが、肉を食べた事で気力が出てきたのか少々大胆な意見が出てきた。

加えて、この周辺に目に見える脅威がないことが分かって来たために強気なのだろう。

「ゲイリー、貴方は上が気になるのでしょうか？ 私は下が気になって  
いる。ここで二手に分かれて行動すれば……」

「怪我などしたらどうする？」

「あちこち探索せず、川沿いにいると言う事だけ守っていれば大丈夫  
でしょ。二人組ならば片方が助けを呼べるし、水の確保がしやすい川  
沿いなら数日くらいは余裕で生きられるでしょう？」

アシユリーの言葉に、ゲイリーは考えこむ。

(さてどうしよう)

正直、悪くないと思う。

食糧も、今作っている燻製ならば、まあ数日はしつかりしたタンパ  
ク質が取れるし野草は相変わらず豊富。

数日前にアオイを探しに行った時の様に、互いに火種を持っていけ  
ばある程度の状況は切り抜けられるだろう。

「俺も、二組に別れて行動するのは悪くないと思う。ただ、そうなる  
問題なのは組み合わせなんだけど——」

「あ、じゃあ私は上流を探させてくださいあい♪」

前回みたく、男女で別れるかと提案する前に、アオイが拳手をした。

「む？ 上流探索は俺が行こうと思っていたのだが……」

「別にいいじゃないですかあ。ツールさんもゲイリーさんも、特に何  
かするような人ではありませんしい♪」

その謎の信頼感はなにさ。

いやまあ別に手は出さんけどさ。

ゲイリーに目配せをすると、彼も呆れたように肩をすくめて見せて  
きた。

「……まあ、問題ない。それにツールの感性というか文化はアシユ  
リーに近いようだ。案外、良い組み合わせかもしれない」

ゲイリーがアシユリーの案を肯定すると、アシユリーは首をかしげ  
ている。

あるいは否定されると思っていたのか。

「それじゃあ、アタシとツール君は下流の探索でいいのかしら？ 貴  
族様」



「ゲイリーだ。しかし、そうだな……もし良さそうな所があったら下流にもう一か所拠点を作ってもいいかもしれない——と、俺は思うんだが」

今度はゲイリーが俺に目配せをしてくる。

しかし、拠点をもう一つ？

「俺も下流探索が大事なのは分かっている。それには、いつまでもここを拠点にしているのは不便だ」

「それで探索拠点を別に作れと？」

「そうだ」

ああ。確かに今なら良いかもしれない。

元々動ける範囲に限界があるから、いずれは移動しようとしていたんだが……。

「分かった。ただ……そうだな、今回は探索期間を三日としよう。三日後にはまたここに帰ってこれる様にペースを配分。更に一日経つても戻ってこない場合は捜索に出る。念のため、それぞれ余り川沿いから離れないように。……これでいいか？」

俺の確認にアオイ、ゲイリー、アシユリーそれぞれが頷く。

「アオイ、ノートは書き込める？」

「はい、大丈夫ですよ。ペンの方も全然使えます」

濡れたのではないかと思っただが、どうやら持ち物は無事らしい。

「それじゃあ、そのまま気がついた事を書き込んでくれ。俺たちもこっちの手帳に簡単な地図とかを書き込んでいく」

「了解です！」

よし、それじゃあまずは飯にしよう。

なにせ久々の肉である。

特に味付けは無いが、香り付けも兼ねて野草と一緒に食べれば豪華な朝飯になるだろう。

——実際、多少臭みがあっても滅茶苦茶美味かった。

## 016：探索with 作業員

「思えば、君とゆっくり話すのは初めてね？」

肉食って気力を取り戻し、お湯で洗った弁当箱に肉を詰めて同時に  
出発。

アオイ達と別れてから大体一時間くらいか？

流れる川に沿って歩いてみると、青草を火で燻らせた種火を持って  
先行するアシユリーが声をかけてきた。

「そういえば……まあ、出会ってからずっとバタバタしたり、別行動  
だったりしたからなあ」

「そうね、まだ会って数日なのに……こんなに一日を長く感じるのは  
久々よ。ホントに」

そう言っただけでクスクス笑う彼女は、とても作業員には見えない。

まあ、普通に見えなければ人の中に紛れ込む事なんて出来ないだろ  
うが。

「それにしても結構歩いたな。あとどれくらい歩く？」

「とりあえず、一度休憩したら日が高くなるまで歩いて、そこで周囲の  
様子を見て適当な所を仮キャンプにする。……どうかしら？」

「ああ、良いと思う。文句ないよ」

そこを拠点に明日はもうちょい下流の様子を見るって感じで良い  
だろう

どこか見晴らしのいい所を見つければ一番ベストなんだが。  
降って行ってる状態でそれは難しいか。そこまで傾斜があるわけ  
もないし。

「ああ、そうだツール君。アタシ、君には一度キッチンとお礼を言わな  
きゃって思ってたの……ありがとう」

そんな事を考えていたら、唐突にアシユリーが頭を下げてきた。

「お礼？」

アシユリーを回収したのはアオイだ。

自分はほとんど関わっていないと思うが……。

「君が、アタシとゲイリーの間に立ってくれているからどうにか現状  
上手く噛み合っているわ」

「……どちらかというと、ゲイリーやアナタが上手く俺を立ててく  
れているからだと思うんだけど」

朝飯の時の会議もそうだけど、意見があってもキチンと俺の意志を  
確認してくれている。

「ううん。君の性格というか、気質というか……そういう物があつた  
から私達はどうかなくなっている。……特に、アオイとかね」

「？ アイツが？」

なんだかんだで一番気安く接しているアオイ。確かに思考に危う  
いというかシビアすぎる面がある彼女だが、そこまで問題だろうか？

アシユリーは何か言おうと口を開きかけ——そして止まる。

そのまま言葉を探すようにもごもごさせて、

「多分、その……あの子は生き残るのに私達が邪魔なら迷わず切り捨  
てる事ができちやう子だから……」

「あ~~~~~」

それこそアシユリーを回収してきたばかりの時がそうだった。

そういうゲイリー達を見捨てようとしてたなあ。自分で助けたに  
も関わらず。

「ああ、うん、まあ……いや、アイツも決して根が悪い奴ではないと思  
うんだよ。ただ、環境の違いというか……」

はたしてフォローする必要があるのかどうか少々疑問だったが、反  
射的にそう言っていた。

いや、そうだ。ここで不和を起こしても仕方がないし、そういう要  
員があるのならば可能な限り取り除くべきだろう。

多分、ゲイリーに求められているのはその役割なのだろう。

あるいは、アシユリーにも……アオイにも。

「まあ、どういうわけかあの奴隷管理官、君には比較的心を開いてい  
るみたいだから。ええ、彼女の事は君に任せるわ」

「管理つつても、やってる事は経理だったみたいだけだな」

「……とてもそうは思えないわね」

「な。金の数え間違いとか起こしそうだ」

「いえ、そうじゃなくて」

アシユリーは、ゲイリーからもらった布で額の汗を拭いながら目を細める。

「あの子、決して身体の軸を崩さないわ。この間の探索の時とかも」

「……軸？」

「つまり、かなり鍛えているって事よ」

「——一応、あの子には気を付けなさい」



更に歩く事数時間ほど、とある場所で俺たちは足を止めていた。ここで川が大きく広がり——というか、湖になっていたのだ。

「まあ、それなりに歩いたし……今日はここで過ぐすか」

「ええ、アタシも賛成」

ちょうど湖からある程度距離を取った所に、程良く木が生えていない平地がある。

とりあえず燃え広がりそうにない場所に火を用意して、ここに簡単なシエルターを作る。本当に簡単な、風避けだけだ。

「明日も同じ位歩いた所に目印を付けて、そこにはもうちよつと丈夫なシエルターを作ろうと思う」

「貴族様の言っていた探索拠点？」

「ああ。それがあれば、確かにこれから先の探索には便利だ」

「そうねえ……」

アシユリーと共に、今日の寝床にするための葉っぱを大量に運びながら、今後について話し合う。

やはり、ゲイリーの前だと話しづらい事があったのだろうか、先日  
の会議の時よりも生き生きと彼女は口を開いていた。

「アタシとしては、皆で川を下りながら拠点を移動させていくつての  
もアリなんじゃないかと思ってたんだけど」

「ああ、それは俺も正直考えていた」

やはり、一刻も早く海を見つけておきたい。

今回、動物が現れた事で魚もいる可能性が出てきたし、それなら海  
を探して近くに拠点を持つべきだとも思う……のだが。

それはここが海に近ければという話で……。

「君も?」

「ああ、後々の事を考えると、海辺に出ておきたいって思ってたんだ」  
「……なるほど」

アシユリーは、土まみれの指を擦り合わせている。今すぐにも手  
を洗いたい事だろう。

「低ナトリウム血症を心配しているのね?」

……あの、すみません、こちらら極々普通の高校生なんで専門用語  
は分かんないッス。や、言いたい事はなんとなく分かるけどさ。

「詳しい事は分かんないけど、塩の確保は大事だと思っている」

「……やっぱり君、知識的にも思想的にもアタシ達に近いね」

アシユリーは、先日ゲイリーが精霊や妖精の話をした時に見せたの  
と同じ顔をしている。

アシユリーにも文化が近いと思われたのだろうか。

「加えて、内陸部の人間じゃないわね。海辺に住んでた?」

「そういう訳じゃないけど……まあ、島国だったよ」

「やっぱり」

なんで俺が海に近い人間だと思っただらうか。

海を目指していたから?

「だって、この先が見えない状況でも海が近いんじゃないかと思っ  
て、かなり海という物が身近じゃないと出てこないわ」

「……そういうものか?」

「アタシ達からするとね」

そういつて肩を竦めるアシユリーは様になっている。

「アタシの場合は、人の痕跡を探すためかしら」

「痕跡？」

「例えば、アタシ達以外の人間——それが元々住んでいるにせよ、アタシ達のように迷い込んだにせよ水場の近くに絶対寄るはず」

「俺たちの様に？」

「そ」

「寝床として葉っぱを積み上げ、その上に倒木と枝で支柱を組み立てる。」

もう手慣れた物だ。

「上流には、多分人はいない。流れを見てもそんな痕跡はないし、あの動物の死体も、少なくとも刃物や投石などの外傷を見られなかったわ」

「だから、何かを発見するなら下流だと？」

「ええ。……まあ、ついでに私のナイフや装備を回収できないかと思つて」

ゲイリーとの格闘で紛失したと言つていた装備品か。

「中身は何が入つていたんだ？」

「色々よ。完全防水のバックに中身はメタルマッチとかワイヤーソー、安全ピンに針金に浄水剤、釣り針と釣り糸、小さな鏡にコンパスに……ああ、最低限の裁縫道具も入つてたわね」

「……なにか目印とかついてないの？ あのパックに……こう、分かりやすい奴」

なにそれ喉から手が出るほど欲しいんだけど！ 特にメタルマッチとワイヤーソー！

「潜入……つていうか軍用の装備バックだから、むしろ見つかりにくいようになっているわ。もうちょつと余裕が出来れば川底とかもキチンと探つてみたいんだけど」

「……メモしておこう」

メモしなくても忘れられないだろうけどな。

いやマジで欲しい。

「今は装備パックよりもナイフね。分かっちゃいたけど、あれがあるのと無いのじゃ大違いよ」

「前の探索の時は？」

「アオイの刀があったから……」

一応刃物の代わりとして、先日ゲイリーと一緒に作った石斧を持ってきている。

おかげで野良仕事の効率はかなり上がったが、やはりしつかりした刃物とは比べ物にならない。

「ねえ、ツール君。そろそろ食べ物を探しに行きましょう。湖の周りに、食べられそうなベリーが群生していたし、君のスキルなら確かめられるでしょ？」

そうこうしている内にとりあえずの寝床を完成させる。

アシユリーはようやく手が洗えると嘆きながら、比較的汚れていない手の甲を使って乱れた前髪を整える。

「だな。焼いた肉があるとはいえ、やっぱり野草は大事だ」

とりあえずは器の用意——それと、水を浄化させるためにまた手順な石を集める必要がある。

……相変わらず、食べるのには時間がかかる。

レトルトやカップ麺が手元にある生活が懐かしすぎて泣けるよ、マジで。

## 017：第二拠点は湖畔とする！

アシユリーと共に夜を過ごし、朝が来た。

「さて、湖の水が抜けている所——下流に本格的な拠点を作る……で、いいのよね？」

「ああ。やっぱここは調査すべきと俺は思っている」

昨晚、晩飯の肉と野草を食ってからアシユリーとは色々話した。主に、探索の予定についてだ。

一つはこのまま更に流れを降って適当な場所を拠点にするか、あるいはこの湖のそばに本格的な拠点を作って、周囲を徹底的に探索して把握するかだ。

正直、朝起きてもどつちにしようか迷っていたのだ。

そんな迷いを打ち砕いたのは、湖の淵に漂っていた一本の水草だ。炒めれば食べられる奴だというのは昨晚スキルで確認していたので、それを掬いあげようとして——気がついた。

その小さな葉や茎に、半透明な小さい球がたくさん付いている事に。

「……魚、そんなに食べたいの？」

「超食べたい」

魚の卵が付着しているということは、それを産み付けた魚がいるという事になる。

俺はそつとその水草を水の中に戻し、そしてアシユリーにこの拠点を強く勧めたのだった。

先日ゲイリーと一緒に魚を捕まえる罌の作り方は覚えた。スキルの補助もあるし、今度はもっと早く作れる。

正直、シエルター作るよりも罌量産して湖の周りに片っぱしから仕掛けていきたい所だ。

「いや、子供の頃は川魚って苦手で、サバとかマグロとかの青魚が大好きだったんだけど、今になって急激に食べたくなった」

「良く分からないけど、それってここ最近の食事のレパートリーが酷



くて脳が過去の食事の記憶を片っぱしから引つ張り出しているんじゃないかしら？」

その可能性も十分以上あるが、食いたい物は食いたいのだ。

そういう欲求があるのは紛れもない事実なのだ。

「肉だって、今度はいっ取れるか分からないんだ。ここで食糧の調達手段を増やしておいても悪くないだろう」

「……まあ、確かに。タンパク質が不足すると、集中力もかなり落ちるし免疫力も……」

アシユリーも肉を発見した時は滅茶苦茶喜んでいたし、血と骨と野草を煮込んで作った即席スープも美味しそうに飲んでいた。

食に関しての思い入れは強いはずだ。

……いや、ぶつちやけ今いる四人全員そうだけど。

「そうね。これだけ広い水場なら、野生動物も来る可能性がある。そういうのも調べる拠点としては有用だけど……となると、他の二人も寝れるシェルターを増設する必要があるわね」

「二人一人が寝れるシェルターに加えて、火床のための風避けも欲しいわね、そうなる」と

今なら石斧もあるから物集めは楽だし、仮に壊れてもちよつと時間をかければまた作れる。

そう考えると、すぐに活動を始めた方がいいのか。

「うん、よし。とりあえず必要になりそうな物を集めてくるわ。その間トール君、またアレ作っておいてくれない？」

「アレ？」

「適当な木をくりぬいた、水を貯める奴。あれと焼いた石がたくさんあれば、水の浄化ができるでしょう？」

「ああ……」

確かにそうだ。アレは正直、仮拠点だろうが全部の個所に用意しておいて損はない。

ペットボトルのろ過装置は一つしかないし、今回は向こうのチームに渡しているし……。

「魚がいる痕跡があったのは嬉しいけど、それって同時に水が汚れて

いるって事でもあるしね。やっぱり浄化は大切よ」

「……だなあ。今まで大丈夫だったからちよつと油断してた。灰と布で濾す程度じゃやっぱ危ないか」

とりあえず、急いで使えそうな大きい木を探そう。

割と削る作業は時間がかかるのだ。

後々シエルターを作る時間も考えると、涼しい今の内に作業を進めたい。

すっかり冷たくなった肉を枝に刺して、軽く火で炙る。

とつくに脂気はないが、それでもやはり、肉に勝るご飯は無い。

「うしつ、動くか」



結局、半日は木を削る事に費やしてしまった。

ちようどいいと見つけた木だが、どうやら前に削った物とは違う種類だったようだ。

少々曲がっている上に枝も多いが、結構太かったのでちようどいいと思ったのだが、これがエラく硬かった。

いつその事別の木を探してこようかとも思ったが、眼に付くのは細い木ばかりだったのでそのまま続行。おかげでかなり時間を食ってしまった。

材料を集め終わったアシユリーは、俺が削った木の欠片やカスをおにぎりみたいにしてまとめている。

火を付ける時に、こういうのは使えるとの事だ。

「石はもうたくさん火にくべてある。そして水も貯めた。後は適当な頃合いで中に放り込んでいけばOKだ」

「いつものプラスチックボトルのろ過機が無いのがちよつと怖いけど

……まあ、長く煮沸すれば大丈夫ね」

「ああ……とりあえず、これで水は大丈夫だ」

残るはシエルターだが……。

正直に言おう。既に疲れた。

つくづく思うが、今の本拠地でゲイリーが作業場を作ったのはやはり正しかった。

肉体労働中の日光の当たる当たらないがどれだけ大きいか、改めて理解する。

「別に急ぐ必要はないし、とりあえず今日はもう食糧探して、簡単な作業だけにしない？ お湯があるのなら植物をふやかしてロープ作ったりもできるし、他に気になる物があるのならそれを作ったりとか……」

こつちの疲労を見抜いているのだろうアシュリーが、そう提案してきた。

……なんかもう、ホントすみません。

「賛成。……ぶっちゃけ疲れた」

「アタシもよ」

そう返事をするアシュリーだが、とてもそうは見えない。

力仕事という意味では俺以上に体力を消耗したハズなのだが……。

「湖の様子、なにか変わった？」

俺の隣に腰を下ろしたアシュリーが尋ねてくる。

……ねえ、ちよつと近くない？

いや、健全な男子高校生としては嬉しいですけど。

「いんや。削っている間にちよいちよい湖の様子は見てたけど、特になし。なんか跳ねたかと思えば、日光が反射しただけだった」

マジで一瞬、木を削っていた石を取り落としてしまったのだ。

やっぱ魚がいる！ って思った直後の落胆よ。

「あらま、それは残念ね」

「森の方はどうだった？」

「特になし。血を吸う羽虫はいたけど、まあそれだけよ」

「……羽虫か。せめて蝶々とかキレイな虫がいてくれるといいんだ

が」

「キレイな虫って食べられない事が多いわよ？」

「いやそういう視点じゃなくてだな」

「っていうか、あれか？ ひよつとして食った事あんのか？」

「……まあ、それ以外は静かなままよ」

「みたいだな。てつきり、動物の鳴き声とか少しずつ出てくるんじゃないかと思ってたが……」

あの動物——多分鹿だと思っただが……アレが出てきたって事は更に動物が出てくる可能性は十分にある。

例えば鳥とかき。……肉食獣は勘弁してほしいけど。

「……どうして、アタシ達はここにいるのかしら」

「ホントにな。俺にはほとんど共通点がない。アンタとゲイリーは違うようだけど」

「同じ世界——ってあえて言わせてもらうけど、まあそれだけよ。私、あの貴族様なんて写真でしか見た事なかったし」

「ふう……ん」

まあ、そういう物なのだろう。

殺すかもしれない相手の事を深く知ってもアレだろうし。

「アタシとしては、君の話を聞きたいな」

「俺の？」

「ええ。魔法がない世界ってのも興味深いけど、私達に近い別の国っていうのも興味深いわ」

「多分アシური達の国よりは遅れている」

高性能なサイバースーツみたいな服とかないし……まあ、サバイバルパックの中身とかは想像が容易い感じだったけど。

「そうかしら？」

「多分。……こう、なんて言うんだろう。普通だった事を説明するって難しいな……」

簡単に普段どういう生活をしていたか、学校の様子や家での生活などと言ったたわいない話に、アシურიは相槌を打ってくれた。

なんだろうな、これ。

これまで、基本的に生き残るための会話がほとんどだったためか、穏やかな——それも自分の話をするのが久々すぎて……なんか、ガチで泣きそうになった。

幕間くアオイという女く

川の流れを横に、一組の男女が長い枝を地面に突き刺し、組み立てている。

「やっぱりゲイリーさんは手慣れていますねえ。ツールさんとは手際が段違いですよ」

「士官学校時代にこういう作業は一通りやらされるからな。俺たち魔術師にとつて、自然の中で過ごすのは大事な事でもあるし……」

二人は本拠地を出発してから、ずっと動物の痕跡を探しながら川を上っていた。

水があるならば、そして動物がいるのならば間違いなく飲みに来るハズ。

先日食べたあの動物も、恐らくその時に足を滑らせるかして溺れ死んだのだろうと予測していた。

あの死体には、牙を突き立てられた後も、刃物などで斬られたり突かれたりした跡も残っていなかった。

「それに、ツールは本当に自然から遠い所で生活していたのだろう。衣類や靴も山———というか、土の上を歩く物ではなさそうだし、手にも傷やマメの跡が全くない。土をいじった事もほとんどないだろう」「どういう暮らしだったんですかねえ。ウチの所だと、よっぽど上級の国民じゃないと農作業は絶対なんですけどお」

「かなり発展している、かなり裕福な国なのだろう。だがアシユリー達ほど科学に傾倒しすぎず、俺達のように自然への信仰というか……好意を持つ文化が残っている。……正直、非常に興味深い」

「……私は科学っていうのがよくわかりませんが、アシユリーさんの国ってどういう国なんですか？」

「……一言で言えば、様々な物を改造・改良していく文化だ」

「? それって普通なんじゃないですか？」

「やりすぎるんだよ、アイツらは」

大きな三角になる様に組み合わせた枝の上に、長い枝を乗せる。

かつてアオイがツールと共に協力して組み立てたのと同じシエルターである。

「本来の植物や動物を、交配による改良ならまだしも大本を書き換えるわ空気は汚すわ……果てには自分達まで改造しはじめているとか」  
「……自分達？」

理解というか、想像が出来ないといった様子で首をかしげるアオイに、ゲイリーはため息を吐いて、

「文字通り、アイツの国の住人は身体を改造している。脳を始めとする臓器の機械化、デバイス化、これが兵士になると手足を切つて胴体を組み込んだ人型戦車になったり、擬態する動物の遺伝子を組み合わせて擬似的に姿を消せる人間を作り出したりとか……色々な人間を作り出している」

「……えげつない国ですね、あの人の国。というか、じゃあアシユリーさんも？」

顔をひきつらせるアオイに、ゲイリーは内心「そりゃあそうだ」と納得しながら首を小さく縦に振る。

「恐ろくな。余り焦っていない所を見ると、メンテナンスが必要という臓器や脳の機械化はしていないようだが、それでも筋力などは強化しているようだ。それに、殴り合った時の感覚からして……恐らく、骨も特殊な金属か何かをコーティングするような方法で強化しているのだと思う」

「……貴方達の世界に生まれなくて本当によかったです。本当に」

アオイは当初、魔法という存在の方が理解できないとツールやゲイリーに話していたが、ここに来て意見がひっくり返ったようである。

顔をヒクヒク引き攣らせながら、珍しく強い口調で断言する。

「それにしても、同じ世界でも大きく文化が違う二人とか……こうしてみると、ツールさんの存在は本当にありがたいですねえ」

「ああ。ワンクッションとしても、調整役としても彼の存在は大きい。話を聞けば、様々な国がある世界らしいし、異文化を受け入れる下地が出来ているのだろう」

二人とも、ツールという人間の希少さをよく理解していた。

アオイの国では、こういう状況ならば身分次第では全て奪われるし、なによりどういう立場でもまず食糧や水の奪い合いになる。

ゲイリーからすれば、このただっ広い森でのサバイバルと殺し合いを両立しかかっていた所を止めてもらっている。

万が一、ツールを失うような事があれば、真面目に残る三人が分裂する事はある得た。

だから――

「だから、アオイ。お前に言っておきたいのだが……」

「なんですかあ？」

「もう、ツールに余計な事をするなよ？」

アオイの手が、止まった。

「俺を拾ってくれた事には感謝している。……だが、その時の話をツールから聞いて気がついた。お前はあの時、ツールを匣に使ったな？」

いつもぼやくとしていたアオイの表情は、今は完全に抜け落ちている。

「目印と言って煙を立たせたのは、お前の為じゃない。あの煙を目印に寄ってくる存在がいるかどうかを調べるためだったのだろうか？」

アオイは、ただじっとゲイリーを見つめている。

「刀を持たせようとしたのは、確かに自衛の意味もあつたんだろうが……例えば興奮している奴らが、突然分かりやすい武器を持った男を見ればまず敵かと疑うだろう。ひよつとしたら問答無用で襲うかもしれない」

それはつまり、否定をしないという事でもあつた。

「ソイツが、もしツールを殺すでしょう。これがある程度訓練を受けた人間なら、一度は落ちつく。もし、一般人なら、より恐慌状態になるかもしれないが、殺害という行動にブレーキがかかる可能性は高い。接触するにせよ避けるにせよ、いい布石になる」

「……ずっと、疑っていたんですか？」

いつものように間延びした感じではなく、どこか鋭さを思わせる声でアオイが呟く。



「トールから聞いたアオイという女は、肩書はともかく仕事は経理。そして刀を振った事は無いという話だったからな。その時点でお前が彼に嘘を付いている事は分かっていた」

ゲイリーは、アオイの腰元を——鞆に収まったままの刀を睨む。

「血を拭った跡があったし、人を斬った時特有の刃零れがあった。なにより、拭った跡の真新しさと杜撰な所を見ると……アオイ、お前——」

「この森に来てから、誰か殺したな？」

女はニツコリと笑い、そして、

「はい♪」

と無邪気に答えるのだった。

## 018：帰還、合流、会議の三本立て

その後、食糧を探し——まあ、前日に多少多めに野草を回収していたためにちよつと補充するだけで済んだが——そして食事の用意をしながら、例の硬い木を使つてちよつとした小道具を作つてみた。大きすぎず小さすぎない石を焼いて、それをやや大きめの木片の上に置く。すると、当然だが焦げる。

そして焦がした部分を細かい石で取り除き、また焼いた石を乗せて焦がしてその部分を取り除き——それを繰り返して木材を加工し、マグカップを作り上げたのだ。とりあえず二つだけ。俺とアシユリーがそれぞれ一つずつ作り上げて完成させた。

不細工だが取っ手も作つたため、持ちやすさはもちろん紐やツタでどこかに引っかけれる事も可能だ。

正直、自分の地の頭だけではこういうのを作るといふ発想は無かつたし、作ろうとしてもしつかりした扱いやすい刃物なしでは到底不可能だつただろう。道具作製スキル万歳である。

水を汲むのが容易い入れ物を作ろうと脳内会議（スキル）で色々と検索した結果、こういう方法が現れてくれたのだ。

助かる。非常に助かる。

ただ単に物を入れておく物ならば、先日ゲイリーと作つた小さな受け皿があるが、あれでは水はすぐに漏つてしまう。あくまでも森を探索する時の採取用なのだ。

（ただ適当に作るんじゃ、やっぱ駄目か）

完全に無駄というわけではないが、やっぱり道具という物はもつと考えないといけない。

スキルのおかげで作ろうと思つた物は作れるようになったが、あくまでそういう物が作れるだけだ。

細かい所もそうだし、工夫するべきところはたくさんある。そこら辺で思考停止するわけにはいかない。——シエルターの時同様、後が怖い。

「明日は、ある程度周辺を調べたら、火の始末をして帰宅つて所かしら

？」

「ああ、心配させるわけにもいかねえし……まあ、発見らしい発見はあったしいんじゃないか？」

魚の卵を発見したのは正直大きい。

正直、ここや本拠地での罾の増設を真面目に考えている。釣り場になり得る事に加えて釣針や釣り糸があるというアシユリーのサバイバルパックの捜索、回収。やりたい事はたくさんある。

時間に余裕があれば、あとついでに同行者がゲイリーの時とか女性陣がいない時に、マップでダイブして湖の底とか探してみたいところだ。

近くで火を焚いておけば問題あるまい。

「そうね。……ねえ、ツール君。ちよつと聞いておきたいんだけど」「うん？」

「君は、どういう目的で動いているの？」

「……生きるため、じゃあダメ？」

「いえ、それもそうなんだけど……」

別に深刻というわけではない様子だ。

単純に疑問に思っただけなのだろう。

「なんだろう。君、一般人にしては焦りが見えないから……これからどうするつもりか気になってき」

「うん？」

「帰るつもりなのか、それとももうここで生きるつもりなのかってことよ」

「……ああ」

言われてみれば、それについて考えたことがなかった。

あれがあれば、これがあればという事を考える事は多々あったが……ううん、と。

「……多分、実感がないままなんだと思う」

ほんの少し前、好きだった爺ちゃんが亡くなった時がそうだった。

悲しくは無く、涙も出ず、葬儀の準備等で忙しくしていた両親の手伝いをして、葬儀を終えて、そのまま日常に戻った。

あの時と同じだ。

「それに、今では少しずつ周りが整っているとはいえ、しなくちやいけない事とか考えなきやいけない事が多すぎるからな」

食糧の事もそうだけど周辺の探索、それに拠点の設備強化。

……具体的に言うのと、洗濯とか入浴とか……それこそ衛生面が気になって来た。せめて汗や垢をしっかりと落とす事が出来るようにしたい。

いやホントに。排泄関係もそうだけど臭いが本当に気になって来た。

……ああ、うん。確かに……言われてみれば帰る手段に関して全く考えてなかったな。

「……君、さ」

「ん？」

「割と今を楽しんでるわよね」

そうかな？

……そうかもしれない。



「おお、そつちも無事に帰って来たか」

「トールさん、アシユリーさん、お久しぶりですう〜♪」

周辺の探索を軽く済ませて状況を把握して、そして俺たちが本拠地へと帰還すると、アオイとゲイリーも帰りついていた所だ。

自分達は新たに発見した、食べる事が出来る野草を持ち帰って来ていた。一方、ゲイリー達は、

「トール、今スキルは使用できるか？」

「? ああ、朝使ったけどこの時間なら……多分。何を見ればいい?」  
「……ついこの間、使用を控える様に言っておいてなんだが……コイツだ」

そう言つてゲイリーが取り出したのは、弁当箱ではなく、以前作つた採取容器だ。そこには葉っぱが敷き詰められており、だが一見、それ以外の物が見つからない。

いや——

「……蟻?」

スキルを発動させ、いつもの違和感を覚える視界に変える。

底に敷かれている葉っぱは、恐らく適当に取つて来たのだろう。どうやら根っこを刻んで茹でればお茶になるらしいが——まあ、それは後。

『クワロウブラックアント：虫や動物の死肉を喰らう蟻。弱い毒も持ち、噛まれると強い痒みが長時間残る。なお、茹でれば食べる事も可能である』

……え、食べられるの? 蟻食べられるの?

だって……え、蟻だよ? ……蟻なんだよ?

「トール、どうだ?」

ゲイリーから声をかけられて我に返る。

とはいえ、話すべき事なんて……

「その……茹でれば食えるらしい……よ?」

「他に情報は無いのか?」

「他は……虫とか動物の死肉とかが主な餌だつて。ああ、後弱い毒持ちだから気を付けて。まあ、痒くなるくらいらしいけど」

「……そうか。だが、まあ大きい発見だ。動物の痕跡こそ見つからなかったが、虫が住んでいるのが分かったのなら、ある程度栄養も安定するだろう。コイツ自身は毒が少々不安だが……君のスキルで食えると言うのならば問題あるまい」

……食べるの? やっぱ食べるの?

「蟻さんはたつくさん捕まえてお皿の上で潰して御団子にしたのが結構美味しいんですね♪ 子供の頃、アリの巣を見つけたら棒を差

し込んでたくさん取ってましたあ♪」

おい、アオイ、お前……。

マジでか。

マジなのか。

「それで、トール。君達の方はどうだった？」

「ああ、やっぱり動物は全然見なかったけど……魚がいる痕跡は発見した」

「本当かつ!？」

目を僅かに輝かせて叫ぶゲイリーに、少しだけホツとする。

ああ、うん、よかった。やっぱりそっちの方が嬉しいよね。

そして特に反応が変わらないアオイ君。君とは一度互いの文化について話し合おう徹底的に。

いや、俺より強いし考えたまに怖いし、一度は確かに恐怖覚えたけど……。

アオイはやっぱりアオイなんだよなあ、どう考えても。

「たまたま拾った水草に、魚の卵が付いていた」

「……となると、産み付けた魚もいるはずか」

「うん。下流で見つけた湖の近くだったんだけど……場所的にも悪くないと思って、仮拠点を作っておいた。ここみたく、水を貯めて沸騰させるための丸太を削った器と……あと、一応人数分のシエルターも用意してある」

「悪くないな。いい判断だったと思う」

ついでに上流にも仕掛けた罾の様子を聞きたかったが、報告が無かった以上成果は出てなかったのだろう。そもそも、魚の報告で驚いていたし。

「……まあ、先日の肉も荒らされていないんだ。火はもう俺たちで起こしたし、改めて食事にしよう。詳しい話も兼ねて」

「……そうだな」

アオイは既に、吊るしたまま煙で燻した肉を削ぎ落すために刀を抜いている。

唯一の刃物持ちのため、こういう時は心強い事この上ない。

「今日はもうゆっくりと過ごそうよ。皆、お疲れ様」

## 019：THE お引越し！

「というわけで、湖の方に引っ越しをしようと思う」

「異議なしですう」

「同じく、異議なし」

「じゃあアタシは反対で」

「じゃあってどういう意味じゃコルア」

止めてよ。ほんと止めてよアシユリー！ 万が一にも分裂したらこの三人まとめ切れる自信がありません！

「まあ、冗談はさておき……たまにはこっちの様子も見に来るのならいいんじゃない？」

畏もあるしというアシユリー。何気に皆の興味が魚に映っている。まあ、どこにいるか分からない動物よりも、おおよその場所が把握しやすい魚の方が取りやすいというのもあるか。

こうして、俺たちは一大引越し計画を実行に移すことになったのだ。



正直火種にしてもいいんじゃないかと思う教科書やプリントの類も含めて、可能な限りを鞆等の荷物や火種をそれぞれに手に持つ。

中でも、ゲイリーが昨夜、枝や葉を使って作ったバックパックが役に立っている。

枝で箱のような枠を作り、そこから大きい物が外に出ないよう隙間を塞ぐために葉っぱを巻き付けている。背負えるために、長い葉をよじって即席の縄にしてくりつけている。

本人曰く、耐久性に問題があるから今回だけだと言っているが、石



斧やナタ、採取箱や鹿の毛皮を入れても今の所壊れる気配はない。正直凄く助かる。

俺は鞆を持つのと同時に、長くて頑丈な枝にツタで括りつけた鹿の死体をアシユリーと二人がかりで運んでいた。

そうして四人で歩き、到着したのはもうほとんど日が暮れてからだった。

やっぱりあれだ。運ぶ物が多かったためか時間がかかってしまった。

……暗くなっても分かりやすいように、目印を何か点けておいた方がいいのかもしれない。

火種を運んでいたアオイがすぐに火を起こし、そして全員でまた火を囲む。

その間に、アシユリーがアオイの刀を使って動物の肉を削ぎ落して、ゲイリーとが肉を枝に刺していつて食事の準備を進める。

その間、俺は水を汲みに行っていた。

場所が変わってもやる事は変わらず、会議も兼ねての食事である。

「さて、本当ならここから改めて探索に入るつもりだったんだけどさ

……俺とゲイリーで明日は例の魚籠を量産したいと思うんだ」

「……なるほど」

食糧が確保できる可能性は少しでも上げるべきだ。

正直な話、ここからまたさらに人が増える可能性だってあるのだ。

鹿の死体ももう大分食べてしまった。

明日……明後日までには完全に食える部分は無くなるだろう。

(まあ、骨があるからあれを野草としっかり煮込めば、一応それっぽいスープとかシチューになる。もうちよいは持つが……)

この森に来て——要するに肉を一度食ったんだ。正直これがなくなるというのがある意味でストレスだ。不安になってしまう。

「悪くはないと俺も思う。だが……ふむ……」

ゲイリーは俺たち三人を見まわし、

「トール、罫の作り方を他人に教えられるか？」

「ん？ ああ、出来るよ。スキルもあるし、材料はここら辺豊富だし」

「なら、アオイと一緒に作ってくれないか？ キチンとした刃物を持つているアオイなら作業も捗るはかどだろう」

「……俺は別にいいんだけど、二人は大丈夫か？」

敵同士だから、その組み合わせは頭の中から除いていたのだが……。

「ああ、いつまでもいがみ合っている場合ではないというのは分かっているさ。お互いに」

いやホントかよ。アシュリーがすっごい胡散臭そうな目で君を見ているんだが。

「……ま、いいわ。アタシとしても、そろそろ貴族様とはゆっくりお話ししたい所だったし……大丈夫よ、ツール君。君が不安に思っていることは絶対に起こさないわ」

「……わかった。信じる」

二人ともそう言うなら、まあ殺し合いになる事はないだろう。

「で、二人はなにをするつもりなんだ？」

「俺としては、湖の周囲を探索するつもりだったが……。アシュリー、お前は何か他に考えが？」

「いいえ、問題ないわ」

ならば、問題ないか。

あ、そうだ。肝心のアオイの意見聞いてなかった。

「アオイは問題ないか？」

「大丈夫ですよ♪ 手先は器用な方なのでお任せくださいあい♪」

とりあえずやる事は決まった。

食糧に対する不安は大きいけど、希望もないわけじゃない。

相変わらず泣ける状況だけど、頼りになる仲間がいて、道具も揃って来た。

ああ、確かにアシュリーの言うとおりかもしれない。

俺、この状況を楽しんでいるかもしれない。

## 幕間く敵同士の語り

「で、わざわざ二人で話したいことって何かしら?」

食事を取ってから、特に会話もしないまま示し合わせたように、二人は川の浅い所を渡って湖の向こう側へと向かっていた。

「おそらく、お前が最も危惧していただろうことについてだ」

「ふうん?」

アシユリーはニヤリと小さく笑う。

彼女自身が、トールの目の前では決して浮かべない様努めていた笑

顔——いや、笑みだ。

「アオイちゃんの事かしら?」

「ああ。やはり気付いていたか」

「匂いには敏感でしょう? アタシも、貴方も——血の匂いには」

「まあな……」

決して二人とも周囲の観察に手を抜いているわけではない。

これまで食べてきた野草や果実のスケッチしていたノート——トールが書いていた物だ——をパラパラめくりながら周辺の観察をし、そして他の生物の痕跡を探す。

ゲイリーが植物や森の様子を主に観察し、そしてアシユリーは湖面の様子を窺い、魚等の影が見えないか注意を払っている。

「やっぱり殺してた?」

「この森に放り込まれる前にも、後にもな」

「……こつちに来てから殺したのは?」

「アイツと同じ世界の男だ。話を信じるなら、とんでもないボンクラ上司だったらしいな。状況も把握しないまま怒鳴りちらして八つ当たりし、あげく身体を要求してきたために斬り捨てたという事だ」

「やるじゃない、あの子。むしろ褒めてあげたいわ」

女として強く共感したアシユリーは、アオイの行動に対して心から拍手をしたい気分だった。

そして手間が省けたとも。

もし、トールと合流する前にそんな男と出会っていたら自分も殺し

ていただろうし、合流した後——そして万が一ツールがその男を受け入れる。あるいは下に付いたとしてもチャンスがあり次第『事故死』させていただろう。

内心、ゲイリーも同じ事を考えていた。

「で、来る前は？」

「奴隷管理部の経理というのは事実だが……同時に監査を務める女でもあったようだ」

「……それだけじゃないでしょう？」

「正解。粛清役も兼ねていたようだ」

「ああ、やっぱり。道理で殺し慣れた人間の動きな訳ね」

肩を竦めるアシユリーだが、同時にどこかホツとしていた。

得体の知れない人間の姿が、多少なりとも正確に把握する事が出来たからだろう。

「で、それだけじゃないんでしょう？ 話したい事は……むしろ、今は前菜ね」

「ああ、そうだ。真っ直ぐに尋ねるが——」

「——ツールという男をどう思う？」

「それだと思ったわ」

アシユリーにとっても、ゲイリーにとっても、今最も注視している人物は一人だった。

「彼、何者なのかしらね？」

「嘘を言っている気配はない。少なくとも、彼は自分の知っている事は出来るだけ正直に話している……と、思う」

ゲイリーの少し言葉に引っかかる所にアシユリーは首をかしげるが、それでもそのまま肯定する。

「そうね。アタシも同感。正直、今いる面子の中で一番無邪気よ。

……この言葉じゃあ、少し悪意があるかしら？」

「お前自身にないのならばいいだろう。本人が聞いている訳でもない」

そういうゲイリーに、呆れた顔をしながらアシユリーはため息を吐いて、

「で？ 貴方があの子を警戒する理由は、例のスキルとかいう能力？」  
吐いて、本題に入る。

互いに、今最も興味があるのはたった一人の男だった。

「俺たちは文字通り、その時手に持っていた物以外は身一つでこの森に放り出されている。なら——なぜ、彼だけが違う？」

「……理由はさておき。肉体や知識を自分の好きなタイミングで好きなように改良したり、ダウンロードできる……恐ろしいにも程がある。ええ、それは確かだけど……」

相も変わらず太陽の光を照らし返すだけの湖。その光を避けるために手で影を作りながら、アシユリーは気楽そうにそう言う。

「正直ありがたいでしょう？ 彼の存在。道具とかを手早く作れる人員はこの状況じゃあ重宝するし、これから上手くスキルを覚えれば、ひよっとしたらそれこそ私達四人で小さな居住地を切り開くことだって不可能じゃないわ」

「それはそうだが……」

対してゲイリーは、深刻そうに呟く。

「なぜだ？ なぜ、彼だけに変異が起こった？ 同じように飛ばされた俺たちには、何一つ変わった所がないのに」

「……可能性の一つとして考えてたけど、アオイちゃんは？ あの子、仮にそう言う切り札があれば徹底的に隠しそうだけど？」

二人は敵同士ではあるが、同時にある程度互いを理解していた。その上で、もつとも警戒するべきは互いではなく、アオイという女だった。

「……正直、あり得る。あの女の擬態はかなりなものだ。身のこなしについても、本来はもつと隠せるのだろう。恐らく、ある程度の実力を持つ人間を見抜くために手加減をしていたんだろう」

先日、ゲイリーはアオイと行動する事になった際に出来るだけ彼女がどういふ人間か見極めようとしたが、のらりくらりと逃げられてしまった。

「だが、アオイについてはもういいだろう。少なくともツールがアイツを押さえてくれるはずだ」

「？ トール君が？」

「……信頼……と言えるかは分からんが、彼に意見をする事はあつても逆らうつもりはないようだ」

「そう言つてたの？」

「……まあ、そんな所だ」

言葉を濁すゲイリーに、アシユリーは少々不審な物を感じる。

とはいえ、ここで隠し事をする必要もない。おそらく、言葉にしづらいのだろうと推測する。

事実、その通りだった。

「とにかく、これで少なくとも俺たちの内三人には確かな共通点がある事が分かった」

「……殺人の経験があるって事かしら？」

「ああ」

アオイは巨大な帝国に不満を持つ者の粛清として、アシユリーとゲイリーは己が国に仇なす敵を、互いの国の人間を殺している。

「でも、それならツール君は？ あの子はただの学生よ？」

アシユリーが分かりきっている事を口にする。

二人とも分かっていた。

とぼけた顔して爪を隠していたアオイと違い、ツールという少年は本当に極々普通の男の子だと。

だが――

「……本当にか？ 彼は、本当にただの学生なのか？」

「少なくとも、アタシや貴方の脅威になるタイプじゃないでしょう。身体的にも思考パターンのにも」

「俺もそう考えていた……だが」

ゲイリーは、ここに來てある可能性を恐れていた。

誰の目から見ても凡人としか映らないツール。その姿が、アオイを超える『完璧な擬態』だったとしたら？ という可能性に。

「難儀な性格ね。誰も彼も疑つていたら精神バランスのコントロール

に苦勞するでしように」

「工作人員の言葉か？」

「敵と味方の区別くらいは付くって言っているのよ」

「……領主なんだ。ありとあらゆる可能性を考えるのは当然だろう」

忌々しそうに口元を歪めるゲイリーは、何か嫌な事でも思い出したのか本気で顔をしかめる。

それに対して、アシユリーはまたしても嘆息し、

「工作人員よりも人を信じられなくなったらおしまいよ」

「ハッ！ 良く言う……これから先のためにツールを籠絡——とまでは言わなくても、いい顔をして距離を詰めておいて……」

「——貴方にだけは言われたくないわね。クソ貴族」

## 020：紐は意外と大事

「……何がツラいつて紐が足りない」

「ですねえ……。途中からもう普通にツタで結んでいますし。まあ、これでも問題ないですけど強度がちよつと気になりますねえ」

今までも、暗くなつて出来る作業に限られる時に程良い大きさと丈夫さを持つ長い葉っぱを石ですり潰してチマチマ繊維にする作業はしていた。

それを日光が当たる所に干して乾燥させた奴をチマチマ紐にする作業もだ。これが意外と頑丈で、例のバックパックの際はあくまで仮という事で使わなかったが、結んだり繋いだりする作業にはかなり心強い。

「魚つて草食べるっけ？ ツタ食われたら罌がバラけるけど」

「基本は虫さんとかだったと思いますけど……。ひよつとしたらそういうお魚さんもいるかもしれないですねえ」

「……こつちでも、あの漏斗型の生簀作つておくか？」

「んんん。まあ、とりあえずはこれでいいんじゃないですかあ？ 色んな所に置けますし、もし食べられた跡があれば、そういう生き物の中にいるつて証拠になるじゃないですかあ」

「……言われてみればそりやそうか」

とりあえず決めただから、今は考えるよりも行動するべきだ。

「あれだな。紐つて思つてた以上に大切だね。さつさとスコップとかナタ量産しようと思つてたけど、それよりも紐作製係を確保しておくべきなのかもなあ」

ある程度乾かしたツタも無くなり、今では集めたばかりのツタを使っている。

作業をするたびに中の緑色の液が手を汚し、不快感を得るわけだ。

多少なりとはいえ、作業効率も落ちてきているだろう。

「ああ、でも穴を掘る物は欲しいですねえ。いや、今までみたいに鋭い木片でもどうにかなりますけど、掘りやすい形と大きさを整えた物ではやはり速度も違いますし……」



だよなあ。やっぱり、四人揃ってからの最初の行動の時みたいにも、二組に別れて片方が道具などの拠点の強化に努めるべきなんだろうか。

これがあれば便利なのに、っていうものはたくさんある。

例えば水を汲む道具とか——まあ、これは今折り畳み傘で代用しているけど。

本来頭を守る部分を逆さにして、バケツ代わりにして水を汲んでいく。

ただし、それなりに高かったために比較的頑丈とはいえ折り畳み傘だ。やはり脆い。

できれば早く、しっかりしたバケツの様な物を作るべきだ。

「そうなんだよなあ……」

「まあ、紐は紐でこれから先……例えば釣りの道具や拠点の強化様々な所に使う事は私でも想像できますし……正直な感想としては、どちらも欲しいって所ですねえ♪」

だろうな。そうだろうな。うん、俺もそう思うわ滅茶苦茶な！

……肉がまだあるうちに、道具作製を一度全力で進めるべきかもしれないなコレ。

つまりは明日という訳なんだが。

うくん、出来る気がしないと云うか、やりたい事が多すぎる。

「……ゲイリー達が食べれる野草をどれほど集めてくれるか……肉の消費は抑えようと思っても無理だしなあ」

アシユリーと共に探索した際、ここらの植生はある程度スキルで調べている。その上で食べられそうな奴は全部スケッチ——あと、念のために採取して押し花にしたのも挟んであるノートを渡してある。

出来れば前半分の汚い文字の数学に関する記述は全部スルーしてくれ頼むから。

「……私も人の事は言えませんが、ツールさんってば随分の食べ物の確保を気にしていますね」

「ん？ そりやそうだろう、生命線だぞ？」

「いや、それはそうなんですけど……なんというか、必要以上になん

か貯め込もうとしてみせん?」

……そうなんだろうか?

いや、確かに少しでも日持ちする方法とかゲイリー達に聞いて、結果鹿の死体はあの燻製になったわけだけど……。

え、なんか変?

「木の実とか野草とかも、採取のしすぎには気を付けてましたよね?

後々生えなくなる事を恐れてですか?」

「あ〜〜……。うん、まあ、それかな」

「そこまで考えているってことは、ここですばらく生活するつもりなんですよね?」

「むしろ後先考えずに根こそぎ取って行こうとする方が俺には理解できません。短期だろうが長期だろうが、持っていけるもん全部持って行くのは……。こう、なんだ? 良心ってわけじゃなくて……。良識でもなくて、こう……。」

上手い言葉が出てこなくて、枝とツタを弄る手を止めずにしばらく悩んで、

「常識? 俺の周りでの、だけど」

実際追いつめられるとそれができるかどうかは分からないが、ただ、後の人の事を考えて行動しろとは昔から散々口を酸っぱくして言われていた。特にオカンに。

そう言うと、アオイは「ほへ〜っ」と、ため息なのかなんなのか良く分からない物を小さく吐きだす。

「割と皆さんで協力しあうような環境だったんですねえ」

「協力しあわない環境ってどんなんだよ」

「ウチだと、協力しあうというより利用しあう環境だったのでえ。私がこの立場に就いたのも、重要役職を派閥で独占したかった親戚の伯父さんが、他の上級幹部をいつか取り込む時のための貢物として女の私を――」

「はあいこの話終わりーっ! チェンジ! 話題のチェンジを要求しまーす!!」

なんでコイツの国はちよつとした雑談だけで闇が溢れだすんだ!

止めようよそういうの！ 悲しくなっちゃうじゃない！ なんて  
言えばいいのか分かんなくなっちゃうじゃない！

「と、とりあえずアレだ！ 昔はどうか知らんが今はこんな状況だからな！」

なんだかんだでアオイは最初に出会った人間で、まだ一月にもならない時間しか共に過ごしていないとはいえ、それなりに助けられる事が多い女である。

「……まあ、特に変わらないか。これまで通り、俺を助けてくれよ。俺も……まあ、スキルも含めて出来る限りお前やゲイリー達を助けるからさ」

最近では、もうスキルを全部知識とかに振ってデータベース化しておけば良いんじゃないかと思うんだが……。

体力的に一番下だからなあ。

怖くて取っていないが、『健脚』とかも割とありかもしれない。いや、今度覚える機会が出来た時に皆で相談するけどさ。

「……はいー」

「お任せください！ 邪魔な物があつたら私が斬ります!!」

「……うん、いや、それもあるけど……もうちよつと違う方向で助けて………ね？」

021：三つめ？

「ただいまー。とりあえず、探索ついでに食べられる野草を適当に集めてきたわよー」

何回もこうして時計もない活動をしてきて、俺たちは全員太陽の大体の位置で、あとどれくらいで日が暮れるか大分正確に計れるようになってきていた。

そのおかげでゲイリー達も、日が暮れるまである程度の余裕をもって探索から帰還してくれた。

「おー、助かる。それで、なにか新しい発見はあった？」

「んー……一応これかしら？」

そう言つて樹皮で作った採取箱を差し出すアシュリー。

中には適当に折った藁が敷きつめられていて、その上には――

「水草？」

「湖をじーつと見てたらなんか変だと思つて、少し底の方を探つてみたのよ」

「そしたらこれが生えてた？」

「ええ……アタシ達で探索した時、湖底はほぼほぼ土と石だったわよね？」

アシュリーの言うとおりである。ちよつと気分転換に顔や手、身体を洗った時ついでに湖の底を――まあ、浅い所だけだが調べていた。

多少は水草も生えていたが、ほとんど土ばかりだった。

「あれえ？ さつきツールさんの傘を使って水を汲みに行つた時は……覗き込んだ感じじゃあ結構水草生えてましたよオ？」

今日は一日作業しっぱなしで、水汲みなんかはアオイに任せていたから気付かなかつた……マジでか。……マジでかあ。

「水草ってそんな繁殖するものだっけ？」

「いや、少なくとも俺達の世界ではこんな……いや待て。アシュリー、お前達サイドならそういうのもあるんじゃないか？」

「……Aクラス以上の汚染水域に投入される、水質及び土壌改善用の

遺伝子改良植物なら確かにあるわ。ただ、それでも二、三日でこんなに繁殖しないし……なにより一定レベルに浄化された水の中ではすぐに死んじゃう——つまり枯れちゃうわ。それに、万が一予定外水域に漏れた時にすぐ発見できるように色も変えてあるし……」  
なるほど、つまりは違うと。

まあ、他の世界の植物って可能性も十分あるけど……その場合、それを食べるっていうか……天敵みたいなのがないとヤバいんじゃない？

いや、あるいは——

「増えたんじゃないなくて、俺たちや他の動植物みたく送られてきた奴かもしれない。それも追加で。正直、今気にしてもしようがないと思う」というか、この可能性の方が高い気がする。

詳しく調べたわけじゃないけど、ひよつとしたら森の木とか人知れず増え続けているんじゃないか？

「まあ、周りの調査や考察も必要だったのも分かる。異変に気がつかないまま窮地に放り込まれるとか最悪どころの話じゃないからな」  
それこそ、もし自分があの日この森に放り込まれるって分かってたら適当なアウトドア用品と食糧、水くらいは持ってきていたわ。

アオイと話している時に道具作製で一日費やす案も思いついたのだが、よくよく考えるとただでさえ訳のわからん森だ。

例えば今、唐突に肉食動物が現れたって不思議ではないのだ。

そういう痕跡や気配はいち早く察知する必要がある。

つまり、探索・調査グループは必須ということだ。

……ああ、それにその可能性を考えると武器——というか狩猟道具も必要になってくるか。

（——え、どれから手を付ければいいんだろう？）

「とりあえず、今大事なのは野草以外の食糧の安定だと俺は思うんだが……皆はどう思う？」

「こう言う時はとりあえず皆の意見を聞こう。」

俺がこうしようと言って強行できるわけでもないし。

「私は……そうですね。応急処置ですが、刀を多少は砥げる砥石の代わりになる物を探したいですう」

「……ああ〜〜」

確かに。

今の所はまだ何とかなっているが、刀も所々が欠け始めている。

現状唯一しつかりした刃物なのだ。出来る限り手入れをしておくたい。

「トール君、君のスキルで石の判別とかは可能なのかしら？」

「……やってみないとなんとも」

今までは基本的に植物に対してばかり使っていた。いや、正確には注視していなかった。

といっても、そこらの小石などでは試した所で意味ないし……。

探索に行った人間にそれっぽい石を持って帰ってもらうか、俺が自分で出歩くか——いや、そもそも砥石ってどんなのだ？

包丁は握った事あっても、その手入れなんてしたことない。

というか、手入れとかしていたのか？ ウチの事だから切れなくなったらしばらくして買い変えてる気がする。

「ゲイリー、それにアシユリーは？」

二人にも意見を聞いていると、アシユリーはともかくゲイリーは難しい顔で悩んでいた。

「そう……だな……。道具はともかく探索ならば下流を更に探るか、それとも数日別行動という前提で、前の拠点や周囲の罠を確認してくるかの二択……を、思いつくな。……お前は？」

「アタシは……そうね。ちよつと湖の中を探ってみたいけど……ゲイリーの挙げた二択なら下流かな」

アシユリーは、そういえば前の時も下流探索に興味あったっけか。で、ゲイリーは場所はともかく思考としては探索寄りと。

(……また同じ組み合わせで行くか?)

俺とアオイ。ゲイリーとアシユリー。

……駄目だ、後者がどうしても不安すぎる。

人格どうこうじゃなく組み合わせ的に。

今回は何事も無く無事に済んだようだけど、かといって同じ組み合わせを続けるのも……気が付いたらいらぬ軋轢が産まれていたとか可能な限り避けたい。

(……よし)

「今回はアオイとアシュリーが残って昨日作った罟を湖に仕掛けておいてくれ。出来る事なら、湖の探索も」

女二人組みならば、水浴びや湖の底の探索もしやすいだろう。

水草の件も気になるが、魚の件も気になる。

「わかりましたあく♪ ついでに余った時間で紐を出来るだけ作っておきますねえ？」

それな。

「頼むわ。めっちゃ頼むわ」

一緒に作業したからな。分かってくれて本当に嬉しいわ。

俺も作業の合間に使えそうな草とか探して持って帰るから。

「ゲイリーは、俺と一緒に上流の拠点に行こう。罟の様子も気になるし、ひよつとしたら人の気配が無くなって動物が近寄ってきているかもしれない」

「動物……なるほど、確かに。了解だ」

どうやら、動物の事は頭から抜け落ちていたようだ。

今まさにその動物の肉を齧っているのに。

(意外と抜けている所あるのか?)

それか、前にアオイと上流調べた時に碌に発見がなかったから、可能性の高い魚の方に意識を全振りしていた？

……こっちのほうがゲイリーっぽいか。

「そんなじゃま、例によって例のごとく行くか。今回は念入りに探索したいから、また三日ほど時間をかけようと思っている。もし、予定より……二日経っても帰ってこない場合は——」

「私とアシュリーさんで上流に探しに行けばいいんですねえ？」

「ああ、頼む。今回は俺も色々スキルで色々試したい事も含めてがつつり探索したいから、ひよつとしたら森の中に——」

いるかもしれない。

そう言おうとしたその時、ブレザーの胸ポケットが震えだした。

スマホが、震えている。

「……今度は早かったな」

取り出したスマホには、最近もうこれがデフォじゃなかったっけ？

と思える白い文字が浮かび上がっている。

『アップデートによる不具合の修正が完了しました。』

・スキルシステムに項目が追加。ご確認ください』

いつぞやと同じ文字列だ。

「あく、皆ごめん。それじゃあ適当に夜を過ごして明日に備えようって言うつもりだったんだけど——」

「——会議、ちよつと延長する必要が出てきたみたい」



022：罨猫には免許や仕掛けてはいけない罨もあるので気を付けよう

「森の方は、やっぱり最後に通った時と変化はないように見えるんだけどなあ」

「……一度適当な光景を簡単にスケッチしておくというのはどうだ？ トール」

「んんん。インクがもつたいないから今は止めておこう」

河原を河上に向けて歩きながら、俺とゲイリーは周囲の植生や川の底へと注意を払っている。

「で、スキルを習得してからどうだ？ なにか違和感は？」

「今の所はなし——まあ、まだ使う場面がないからな」

思い出すのは昨晚の会議。

とりあえず全員にスマホの画面を見せると、どう言う訳か全員書いてある文字が読めると言う事だった。

この時点でゲイリーとアシユリーは眉をひそめ、アオイは『これ便利ですね♪』と無邪気に喜んでいた。

なんとなくアホ毛を掴んで頭を揺らしてやった。

その後スマホを操作をし、スキル習得画面を開いてそれぞれに内容を確認させた。

今まで同様新しく増えた物も含めた習得可能なスキルの一覧だ。

『・健脚／移動する際に蓄積する疲労を軽減できます』

『・毒耐性／ある程度の毒を除外できます』

『・野草知識／野草についての知識がインストール可能です』

『・気配遮断／視界に一度確認した対象の5メートル以内に入るまで気付かれないように出来ます』

ここまでは、今まで自分が選ばなかったために残っている習得可能なスキルだ。

魔法？ 今の俺には見えませんね。

とにかく、今回追加されたスキルは二つ。

『・釣り人／魚を捕らえるための知識や技能に補助が付きます』

『・トラッパー／罠設置に関する知識や技能、感覚に補助が付きます』  
この二つだ。正直に言おう。どっちも欲しい。そしてどっちも怖い。

まだ辛うじて釣り人スキルの方は分からなくもない。サーチや道具作製のスキルを使用した時と恐らく同じ……だとは思う。少なくとも想像はつく。

おう、お前だよトラッパー。

感覚に補助ってなに？ なにをどうするの？

そしてこの六つの候補の中から何を覚えるのか、あるいは前の時みたいに保留するのかを話し合い——ああ、一人程『魔法！ 魔法覚えを使ってみましょうよお♪』と延々候補外をプッシュしまくるハリキリサムライガールがいたがとりあえずさらに頭揺らして大人しくさせといた。

『……俺は健脚とか地味にいいんじゃないかと思うんだけど』

『野草知識は……これまでのサーチとどう変わるのかしら』

『まず、今スキルを覚える必要があるのかどうかをだな』

『むぐぐぐぐぐ……ツールさん、頭から——髪から手を放してくださいさあ……』

そうして、灯りの乏しいこの野外生活に入ってから珍しく夜遅くまで意見を交わし、結果——

「まあ、実際に罠を仕掛ける時とかじゃないと意味がないだろう。トラッパーだし」

「ふふつ、確かにな」

トラッパーを習得する事になった。

あれ、おかしいな。俺こいつ、何気に魔法の次に怖がっていたのに。なんで取ったんだろう。

(いやまあ、食糧取るのには一番コイツが効率良さそうだったしなあ……)

正直『釣り人』スキルと滅茶苦茶悩んだ。

だが、魚限定の力よりもっと広い範囲で役に立ちそうな『トラッ

パー』の方がタンパク源の確保には役に立つのではないかと考え……  
こうなってしまったのだ。

「だが、違和感があればすぐに言ってくれよ？」

「ああ、分かっている」

そして小まめに体調を気遣ってくれるゲイリーは本当にいい奴だ  
わ。

その後も適当な雑談——まあ、今後の探索計画とか食糧の保存方法  
とかについての真面目な話題だが、意見を交えながら先日までの拠点  
へと戻って行く。

「……やっぱり肉とか魚を干せるようにしなきゃだめかあ」

「野草とかも、物によっては天日干しにすればも長持ちするかもしれ  
ん」

「んー……できるだけ野草や果実は食べる分だけを探ってくるって形  
にしたいんだが」

「いつまで俺達がここにいるか分からん上、もしここに四季があるな  
ら厄介だ」

「冬かあゝゝゝ……」

「正確には寒季というべきか。野草や果実の類が全滅した時を考える  
と……な」

ああー……その時期には……どうしよう。

いやまだ先の話だとは思うけど、最近少しずつ暑くなってきている  
気がする。

恐らく夏が近づいているのだろう。そうになると、仮に肉や魚を手  
に入れても腐敗が早くなる。

日本ほどの湿気は今の所感じないからまだマシだと思うが……。

(……あれかな。俺がもうちよい食材をいじったりすれば料理系のス  
キルとか生えてくるのかな)

今回生えた『釣り人』に『トラッパー』のスキルだが、恐らく原因  
は魚用の罟を量産した事が原因じゃないかと考えている。

もしだが、作っていた罟が動物用とか鳥用だったら……トラッパ  
ーはともかくもう一つの方は違うスキルになっていたか、あるいはな

かつたんじやないだろうか。

もしこの考えが正しければ、野草を茹でたり肉や魚を焼いたりする内にそういうスキルが生えてくるかもしれない。

そうすれば、保存方法等も頭に叩き込まれるのだろうか。

「まあ、今は燻製とか干物でどうにかするしかないか」

「そうだな。しかし、そうなると吊るす物が必要だが……」

うん、分かっている。

「紐がなあ……いや、ツタとか細長い葉でも代用できるんだろうけど……」

どうしても強度に不安が出る。あと太すぎる。

一週間とか一か月ならそれでもいいんだろうけど、この状況じゃぶつちやけ年単位で彷徨うことだって十分以上にあり得るわけ……。

ああ、駄目だ駄目だ。最近肉の件もあって余裕が出てきたせいで先の事考えちゃってる。

もつと足元見ないと。

「今はそれについては忘れよう。とにかく、タンパク源の確保を考えないと……」

正直、スキルを取った直後にちよつと思ったのが、『野草知識』を取ってキノコを探すのはありかもしれないと考えるようになった。

うる覚えだけどキノコって確かたんぱく質は含んでいたはずだ。

それで森の肉って呼ばれ……あれ？ それ大豆だっけ？ いや、大豆

は確か畑の肉で森は……森の肉は……あれ？

いや、まあいいや。たんぱく質を含んでいたのは多分間違いない。

割合は少ないとかテレビで言ってた覚えがあるけど、何も無いよりはマシだ。

いや、そもそも野草に含まれる……のか？

(ま、まあ……今度サーチを使う時は栄養とかそこら辺も意識してみるか)

使ってみて分かってきたのだが、サーチスキルの最大の欠点は最低限の情報以外に、自分が知りたい事しか出てこない事だ。

これまでの大半は、食えるかどうかという事を意識していたためにそれが可能かどうかという情報が詳しく出ていた。

だが、ついこの間は紐を作るのに適しているかどうかという事を考えてサーチを使ったら、どの植物がどういう理由で適しているのかという詳しい説明が追加されていた——ほぼ全て読み流したが。

(今度、適当な石の多い場所でサーチ試してみるか。刃物を砥ぐのに適している石って)

アオイが凄く必要そうにしていたし、実際今ある唯一のキッチンとした刃物の手入れも重要度は高い。

アシユリーのサバイバルパックの件も含めて、優先したい案件が多すぎる。

(人増えないかなマジで。安全、及び俺の精神の安定も兼ねて女性陣がさ)

人手は足りない。だが、人が増えると食い扶持なども含めて問題が増える。

今でこそ、それぞれの人柄等もあつてギリツギリの所でバランスが取れているのだ——特に人間関係的な意味で。

もういつその事ここにいる面子が全員男か全員女だったらもうちよつと楽なんだが……。

ゲイリーが紳士で本当によかった。

俺がヘタレで本当によかった。

いや、まあ、女性陣が物騒つて言うのも大きいけど。

(女性なら……うん、まあ、男よりはいいんじゃないかな)

少なくとも男が、どれだけ頭良くても『馬鹿』になりやすい生き物である事はよく知っている。

(……なににせよ、それが話せるにせよ話せないにせよ動物を見つけないとなあ)



「……変わりはない、か」

「だなあ。まあ、荒らされていても困るっちゃ困るんだけど」

それなりに丈夫に作ったシエルター、まだ薪や建材として使う予定だった流木や枝が残っている材料置き場、作業場。水を沸かすための丸太。

(湖の方もすぐにこれくらいは揃えないとなあ……)

「ゲイリー、帰る時に余裕があれば枝くらいは持ち帰ろう。鞆にも余裕が空いたし」

「そうだな。念のためにバックパックも持ってきていたし、ある程度は持ち帰れるだろう」

いい感じに乾いている木材だ。建材用の長いのは持ち帰れないが、薪には使える物は大分持っていけるだろう。

「とりあえず、今日は一度野草を探すついでに簡単に周囲を探索してから飯にしよう」

多分、今日が肉を食べる最後の日だ。

出発する前に食糧を分けた時の、全員の悲しそうな顔が忘れられない。いやマジで。

(マジで「豆とかキノコとか……バリエーション増やさないと士気が下がるな」)

欲を言えば魚か肉を確保したい所だけど、さすがにそれは容易く狙えるものではない。

……このままだと、アオイやゲイリーが提案していたように虫を食う羽目になりそうだ。それだけは可能な限り避けねば。

(……あれ?)

そんな事を考えていると、視界に違和感を覚える。

あれだ。サーチスキルを使った時と同じ感覚だ。

視界は確かに自分の視界なんだけど自分のじゃない……微妙に酔いそうな感覚。

「? どうした、ツール」

「いや、ちよつとなんかのスキルが発動してて……」

とりあえず辺りを見回す。

サーチもそうだが、視界に入れないと何に発動しているのかサツパリなのだ。

キョロキョロ辺りを見回して、なにか異物がないか探してみる。

すると森の方の一部、茂みの方に白くハイライトされている何かが見つけていた。

ただ、なんというか……サーチスキルの時に様にハッキリしていない。

ぼんやりと、そこに何かあるとスキルが教えてくれているようだ。

(説明文も乗っていない。これもうちよつと近づかないとダメな奴か)

とりあえず生き物ならば、いつぞや茂みの中に隠れていたアオイの様にはつきりと輪郭がハイライトされるはずだ。

今サーチスキル使ってねーけど。

(トラップパーが発動してんだろなあ、多分。って事は――)

更に近づくが、何かがある様には見えない。

なんとなく警戒して、身を低くしてハイライトの辺りを観察する。

すると、スキルが教えてくれていた物がまっすぐ見えるようになり、ハイライトも消える。

細い枝が細かく生い茂っている茂み。

その一部、地面に沿うように穴が空いていた。

そして、その穴を差すように文が視界に浮かび上がる。

『小型動物の痕跡を発見しました』

023：というかサバイバルブックの罠って9割違法

「これは……獣道だな」

スキルが動物の痕跡を発見したと報告すると、ゲイリーが小さな穴——その部分だけ枝が所々折れ曲がり、葉がパラパラと落ちていたためにポツカリと空いたそれを見て、断言する。

「獣道って……これが？」

「ん？ ああ。といつても、まだ道と呼べるほどではないがな」

「……俺、獣道つてもつとこう……細い山道にも見えるような……こう」

「ああ、うん。言いたい事は分かる。だがコイツはいわば、真新しい出来かけの獣道だ。それも小型のな」

そういえば、確認したせいか今は消えたがスキルでも『小型動物』と説明していたな。

「小動物がここらを水場として認識したのだろう。そして何度か水を飲みに行った結果、小さな道が出来始めたという所だろう」

「まったく同じ道を通って？」

「珍しい事ではない。基本野生動物というものは臆病でな。一度安全だと判断した道を延々と通るんだ。水場、餌場、そして巣を繋ぐな」  
なるほど。サイズからして、鼠とかハムスターよりもちよつと大きいくらいだろう。

「捕まえた所で、肉はあんまりなさそうだなあ」

「ああ。だが、コイツの痕跡を見て、他の動物がここに水を飲みに来る可能性が出てきた」

「そういうものなのか？」

「そういうものだ。そうして徐々により大きい動物が同じ所を通る事により、獣道というものが出来ていくんだ」

ということは、更に動物が集まる可能性があるわけか。

「トール、拠点を移したのは正解だったかもしれんな」

「ん？ 逆じゃなくて？」

動物の通り道になるなら、多少移動する必要はあったかもしれん



が、さすがに湖の所は遠すぎる。

上手く行けばここは狩り場になるかもしれない。

「いや、意外と人の臭いというのは残る物だ。それに獣は音にも敏感だしな。……加えて、この近くにいますかどうかは分からんが、他の動物の痕跡を追って肉食動物が寄ってくる事も考えられる」

……………怖っ!?

「なるほど。でも、それならなおの事ここはどうする?」

「……………今日はここに泊まるとして、少し下流に仮のシエルターを作っておこう。機会があれば、こちらのシエルターは壊しておくべきかもしれないな」

「壊す?」

「下手に残しておいて、野生動物の巢になられてもあれだしな……………」

「ああ、まあ、確かに……………で、その後は?」

「君のスキルと俺の技術なら色々出来るだろう?」

「……………罠場か」

さつきみたいに動物の痕跡を勝手にスキルが拾い上げてくれるのなら、森の中の探索効率も上がるだろうし、おそらく罠だって思いつくはずだ。

むお? 確かにイケるっちゃイケるか?

試しに、この出来たて獣道に罠を仕掛ける事を考えてみる。

その瞬間に、予想通りスキルが発動してくれる。

「……………なあ、ゲイリー」

「分かるか? トール」

「ああ——」

「紐が足りねえ……………」



紐作り自体は、まあ比較的楽な作業なのだが、この時一番の問題は材料である。

丈夫な草や樹皮などを集める。ここまではいい。

そしてそれらを繊維状に裂き——パスタとか蕎麦みたいな麺みたいに——してしつかり乾燥させることでようやくロープの材料になる。

ここで一番手間と時間を食うのだ。

いや、普段からツタとか使えばいい話なのだが……。

こう、なんというか……作業にしつくりこない時があるのだ。主に太さとか。

「まあ、明日一日あればある程度の長さ分は作れるだろうが……罨……仕掛ける時間も考えて四つくらいが限界か？」

「スキルがどこまで働いてくれるか次第だな。紐は……もうちよい頑丈かつ長めの草があればいいんだが」

一応紐作りは道具作製に入ってくれているため、植物の茎というか表皮を利用して紐を作る方法も分かったのだが、十分な強度を持つ植物が意外と少ない。

「ツタで代用……ダメだ。さすがに罨に使うとなると目立ちすぎる」

「ああ、そこだよな」

二人して頭を悩ませているのは、材料を持って来なかった迂闊さ——まあそもそも紐自体がほとんど使い切ってしまったているのだが——罨をどれだけ作れるかという問題。

そしてなにより、どこに設置するかという問題だった。

「毎回小まめに様子を見に来れる範囲だとよかったんだがな……」

「やっぱ不味いか？」

「基本的に、仕掛けた罨というのは一定間隔で様子を見に行く物だからな。例えば小動物やその死体なんか引つかかったままだと、それを食べようとする動物を引き寄せる可能性もあるし……ハエとかがたかる可能性もある」

「……ああ、そうだ。虫の問題があつたな」

(多分) 鹿肉の時もそれを警戒して煙で燻したりして対策してたけど、結局それらしい羽虫は来なかつたしなあ。すっかり頭から抜けた。

「後、これも大事なんだが……仕留めた獲物は急いで血抜きして内臓——特に腸を抜かないと肉全体が臭くなるんだ。味にも影響が出る」

「……ひどくなる？」

「ひどくというかエグくなるな」

まじでか。さすがにそれは……栄養的にそれでも食わなきゃいけないときがあつても、衛生的にも感情的にも遠慮したい。

そもそも、ある程度士気を上げるための食事の下がるような事は避けたんだが……。

「ここで全力で紐作つて、帰る時にある程度の所に痕跡があれば仕掛けていくか？ スキルも使つて森の中調べるからさ」

「……だな」

湖の拠点からここまでは、割と移動だけでほぼ一日を費やしてしまう。

この間の引越しの時もそうだが、重い荷物を持ってだとさらに速度が落ちる。

……ここ最近は筋肉痛がひどくて俺もちよつと足が落ちてるからなあ。

出来る事ならもうちよい湖の拠点から……小一時間ちよつとくらい歩いた所なら警戒されないか？ そちらに痕跡を見つけ次第罠を仕掛けたい。

……痕跡があれば、だけど。

(結局は数を仕掛けるしかないってことなのかなあ)

先ほど仕掛けようと思つた罠は、紐の先端部を結んで小さな輪を作り、そこに紐を通す事でやや大きめの輪を作る——ちよつとした力ですぐに締まる輪をだ。

それを枝等にしっかりと結びつけたうえで輪を小さな枝の破片等で、狙った獲物の大体頭の高さに固定する。

動物が通る方向が分かっている獣道ならではの罠だ。

ここを動物が通れば、頭——首の部分に輪がひっかかり、真っ直ぐ後退でもしない限り輪が締まり、生きたまま捕獲できるという罠だ。(これだと獲物を殺す必要があるんだけど……慣れなきやなあ)

魚を捕まえようとしても、これも結局は殺さなくてはならないわけだ。

元々死んでた動物を解体する作業だけでも結構クル物があったのだ。

魚……は、まだ大丈夫かもしれないが、例えば捕まえた兎や鼠の類を俺は殺せるんだろうか？

(……こういう考え方してる場合じゃないか。殺さなきや)

なんだろう。こうして文字通り森に放り出されて、色々と考えてしまふ……いや、違う。価値観が変わりつつあるというべきか。

こう、なんというか、『そんなこと気にしてられっか!』的な思考に塗りつぶされそうになる時がある。

(あー、イカンイカン。これはマジでイカン。一度思考のハードル下げるとそのまま持つてかれるな)

嫌悪感などは別にいいが、引っ張られて衛生面やモラル面まで落ちれば最悪だ。

仮にもまとめ役に推薦された人間が、意識を下げ続けるわけにもいかない。

(気持ちを入れ替えるか……)

別に立派な人間になろうとかではなく、まあなんとか恥ずかしくない人間ではあり続けよう。

「とりあえずゲイリー、一応シエルターや資材置き場の様子を確認しておいてくれ。俺は生簀の方を見てくる」

「生簀……ああ、例の罠か。分かった」

手を軽く振ってから、警戒してシエルターの中を確認するゲイリーを背にして、俺は川の方へと足を向けた。

そして漏斗型に積んだ流木と石の先、引っかかった魚を捕まえておく生簀を覗きこむ。

「……………これ、メダカ？」

そこには、小学校の頃に散々見なれた小魚の群れが、クルクルの同じ中を泳ぎ回っていたのだった。

## 024：黒曜石とは天然のガラスである

「小魚がいた？」

「ああ、罨にかかつて……ってというか普通に住んでる感じだけど」

「食べられそうか!？」

……ああ、うん。やっぱそこが一番大事だよな。

「スキルで調べたけど、一応は食べそうだよ。……俺も知らなかったけど」

「？」

「俺の世界の生き物だったって事。子供の時に、学校のクラスで水槽に入れて飼ってたのさ」

メダカっぽいと思ってサーチを発動させると本当にメダカだった。

食えたんだアレ。本気で知らなかったよ。

「ただ、味は保証できない。味噌汁の具とか佃煮になってたみたいだけど、時期外すとクソ不味いらしいし……佃煮とかあれ味濃いなあ……」

「ミソシルノグ……ツクダニ……君の国の料理か？」

「あ、すまん。そう、スープと……あれなんて言えばいいんだ？ 煮物

？ まあいいや、何にせよ冬前に取らないと苦いんだとき。タイミング逃すと地獄だ」

「……追いつめられた時の食事だな」

「そうだな。ああ、それとは別に——」

もう一つの発見を握っていた手を開く。

「……貝？」

「なんかくっそなげえ名前だったから流し読みしたけど、貝であるのは間違いない」

手にしているのはメダカの水槽と一緒に放り込まれているアレ——タニシに非常によく似た奴だった。

メダカがいたんだからこれもタニシだろうと思ったら名称がなんか滅茶苦茶長くてビビったわ。

「こいつは時期問わず食べるけど、泥抜きに時間がかかるって事だ。

最低四日……多分五日から七日くらいがベストじゃないか？ 真水の中に、ときたま水を変えながら放置しておけばいいってさ」

「味は問題ないのか？」

「そっちは問題ないけど、すっかり茹でないで病気にかかるようだ。そこらへんも考えるとかなり注意しなきゃいけない獲物だけ……」

「なるほど……。まあ、そもそも野生動物なんてほぼ全て問題持ちがほとんどだ。君のスキルでそれが分かるだけマシか」

それな。まさか病気うんぬんまでスキルで教えてくれるとは思わなかった。これまでなかったし。

スキルで教えないと不味いレベルなのか、あるいはスキルが成長したのか。

……後者だと良いなあ……。マジで。

「ちなみにトール、この貝は結構いたか？」

「ん〜……。そこそこ？ 罨の中にも普通に川の中にもある程度はいたな」

ひよつとしたら、湖側にも湧いているかもしれんな。

……今更だけど湧くってなんだよ湧くって。

ついこの間まで生き物の気配ゼロの川だったのに、それが突然……。

「どう思う、ゲイリー？ やっぱり連れてこられた？」

「……断言はできないが、その可能性は捨てられない。だがそうだとすると――」

ゲイリーは眉をひそめて、改めて周囲の様子をうかがう。

「動物はもちろん、他にも俺たちの様な人間がいてもおかしくないな」



「で、だ。ゲイリーは基本、紐作りに専念するんだろう?」

「ああ、そのつもりだ。君は?」

「アオイの頼み事もあったし、石を探してみようかと思う」

サーチスキルの再使用にまで少々時間がかかるけど、石の多い所と種類を探しておくのは無駄にはならないだろう。

ついでにちょうどいい石を割って、簡単な刃物を作っておきたい。材料集めの効率を考えて斧やナタを優先していたが、そろそろ細かい作業が増えているのだ。ナイフが必要だ。

それとシヤベルも。

(黒曜石とか落ちてないかなマジで。それがあれば多分比較的簡単にナイフ作れると思うんだけど……)

どういう見た目の石かも知らないけど、名前の通り黒いだろう。あるかどうかはともかく、そんな感じの石を探していくか。

「そうか。一応動物には気をつけろよ?」

「注意事項ってある?」

「……ヤバイ獣がもしいたら、目をそらさずゆっくり後退すること。背中を見せないようにな」

怖えーよ。いや、正直どうしようもないけどさ。

やっぱりせめて槍くらいは作るべきか?

「ゲイリー、弓を直す事は出来るかな? 弦は残ってるんだろう?」

「弓そのものが折れているから……。やるとしたら、木を削って弓を作り直すしかあるまい。威力は下がるだろうが……」

「矢も作らないと意味ないしな……なあ、矢筒マジでどこにやったのさ」

「川に流されたから……おそらく下流のどこかに」

つまりはアシユリーのサバイバルパックと同じ状況である。

ホント、湖の底にでも転がってるんじゃないだろうな。

そうなると回収が現状ではすっげえ難しくなるんだけど。

「出来ることなら、後々の事も考えて弓はいくつか作っておきたいな。アオイは一応武装しているとはいえ、刀一本では危うい」

むしろあの子、刀をキチンと振れるんだろうか。



アシユリーは身体は鍛えていると言ったが……こう、普段のやり取りを思い返すと不安になってくる。

「そうだな。……やっぱり弓とか、あと槍くらい作っておきたいな。高い所の木の実とかを取るのにも便利だし」

「槍か。悪くない」

まあ、全ては動物が見つければの話だ。

あれだ。肉が食えなくなるという事実が見えているせいか、気が付いたら思考が動物を狩る方に向かっている。

つい先日、魚の方に力を入れようと決めたにも関わらずだ。

でもなあ……すっかりしたお肉食べたい。

この間の肉は、脂が人の胃では消化できない可能性があると言うので徹底的に削ぎ落していた。なぜ俺はあの時スキルで詳細をチェックしなかったのだろうか。

いや、あれはあれで美味しかったのだが、もつとこう……ジューシーな奴を食いたい。

いかなん、食欲に脳が支配されかかっている。

「なあ、ゲイリー」

「ん？」

「とりあえず、毎日お腹一杯になるくらい食べられる生活を作りたいね」

「……ああ……そうだな。心から同意する」

だよね。

## 幕間く女と女の会話く

「どうなってるのかしら、この湖……」

「というよりは、森とかも含めたここらを構成する全てじゃないですかねえ」

アオイがそれなりに大きい魚捕獲用の魚籠を抱えて歩き、アシユリーがポイントを決めて仕掛けていくという作業を終えて。

かれこれ仕掛けた数は五つ。ツールとアオイがどうにか作った物である。

「見たことない巻貝、それに虫も増えている」

「一応何匹か殺して保管していますので、ツールさんが戻ってきたら見てもらいましよろよろ」

「……あんまり素手で触っちゃダメよ？ 毒持ちの可能性だってあるんだから。虫だけじゃない。貝もね？」

「はあい♪」

また同時に、その虫は仕掛けた罫の中に餌として入れられている。餌になるかどうかは分からないが、適当な野草や木の実よりかは可能性が高いとアシユリーが判断したのだ。

「……ねえ、アオイちゃん」

「なんですかあ？」

「貴女は、これからどうしたいの？」

「ん？ すみません、質問の意味がよく分かりませんねえ」

首をキョトンと可愛らしくかき上げて見せるアオイに、だがアシユリーは一切油断をしなかった。

自分よりも強いと分かっている獣を前に油断する馬鹿がどこにいるというのか。

「目的……といえはいいかしら？ 例えば、帰る方法を探すとか、仲間を探すとか」

「……出来ればここで、ツールさんと一緒にのんびり過ごしていたいですけどねえ」

そして、これがアシユリーという工作員がもつともアオイを警戒する理由だった。

敵であるゲイリーは対して気にしていなかったようだが、人に取り入るプロであるアシユリーからすればこのアオイという少女は理解の外にある存在だった。

なぜ、この少女はトールという平凡な少年にこれほどまでに心を許すのか。

この少女が、他人を信じるタイプには見えない。

自分に不利益をもたらす人間を躊躇わずに斬り、それを他の人間に隠すように擬態をすることが『出来る』人間は間違いなく善人からは程遠い人間だろう。

「……貴女は随分とトール君を信頼しているようだけど……どうして？」

「だってあの人、頭空っぽで付き合える人じゃないですかあ♪」

だからこそそのアシユリーの問いかけだったが、帰って来たのは酷い回答だった。

「……聞いたらトール君、多分泣くわよ」

「ええ、そうなんですか!? 私的には渾身の褒め言葉なんですけど!」

心の底から驚愕しているアオイに、自分達のリーダーが彼女の跳ねた髪を掴んで頭を左右に揺らす光景がまた見られる事をアシユリーは確信した。

もつとも、このとぼけた少女は彼からイジられるのをむしろ気に入っているようだ。

ひよつとしたら今の言葉も、機会があればまんまトールにぶん投げるかもしれない。

「言葉に裏がないわけではないですけど、基本的に自分の意見よりも場を大事にしたいタイプですし、それに足元を崩すような人じゃないのはこれまでの関わりでよく分かってますしい……」

なぜかモジモジしながらそう言うアオイの言葉に、アシユリーは一応同意する。

確かに、多少口にしていない事はあるだろうが基本的にトールとい

う少年は正直である。

「衣服の様子から結構良い所の出だと言う事は分かっていたので、人柄次第では媚び売ろうとしていた所に不意打ちされましたからねえ……おかげで見極めにちよつと時間かかっちゃいましたあ」

ふと、この少女に手を出そうとして斬られた声も顔も知らない男の事を思い出した。

「ちなみに、トール君がもし、その……酷い男の子だったらどうしてたの？」

「斬り殺すに決まってるじゃないですかあ♪ ついでに使えそうな物全部剥ぎ取るつもりでしたあ♪」

「……それ、トール君に言っちゃダメよ？ 分かっているとと思うけど」

あつさりノリでバラしかねない所があると見て、アシュリーはそうアオイに忠告する。

アオイはモジモジニコニコしたまま、

「まあ今の事は言うつもりはありませんけど、別に言ってもいいかなあ〜って思ってるんですよお」

「……あの平和な環境で育った子に？ 頭大丈夫？」

割と素で尋ねるアシュリーに、アオイは「はい！」と良い返事を返す。

「多分、言ってもあの人は変わりませんよお♪ あの人、そういう人ですから」

「……これを信用とか信頼と言っているのかしら」

一度ゲイリーと話し合った時に、ゲイリーが言いにくそうにしていたのをアシュリーは思い出していた。

「なるほど。アイツが言っていたのはこういう事なのね……」

どうやらアオイはトールに対して一定の信頼を置いているようだ。いや、信頼というより――

(懐いているのかしら?)

アオイという少女が、ここにいる面子の中でも最も危険だという事には変わらない。

本気で殺すつもりであの刀を振るわれたら、心得を一切持たない

トールはもちろん、碌な獲物を持っていないゲイリーやアシユリーも殺されるだろう。

ゲイリーと二人がかりでどうにか勝ちの目が僅かに見える。  
アシユリーは目の前の少女をそう見積もっていた。

だが、トールの前では。あの少年の前では、彼女が持つプレッシャーは成りを潜め、少々物騒なだけの間の抜けた少女を装うのだ。

「……よく分からないわね、貴女」

「私からすれば、もっとよく分からない存在がいるんですけどねえ……」

「へえ？ 誰の事かしら？ アタシ？ それともゲイリー？」

この狂犬からすればほとんどの人間は理解の外にあるのではないかと思うアシユリーは、上手い事それを隠して微笑を浮かべる。

「あく、その前に。アシユリーさんは、ゲイリーさんとは敵対していませんよね？」

「え？ ええ、そうよ」

「従業員つて言う事は当然ゲイリーさんの事は調べ上げていますよね？ 徹底的に」

「……ええ、まあ。完全には言わないけど……それがどうかしたのかしら？」

ゲイリーに関して何か気付いたことがあるのだろうか。

アシユリーは、少々アオイの視点からみたゲイリーという存在に興味を抱いた。

状況次第では、ゲイリーという貴族はいつ敵になってもおかしくない存在なのだ。

「——あの人、どういう理由でずっと男の振りを続けているんですか？ 女性ですよ？ 念のために今までトールさんの前では黙ってましたけど……」

「………なんですって？」

## 025：罾で大事なものは『場所』と『数』である

「どうだ、ツール。スキルの具合は？」

「思っていた以上に当たりだったかも。バランスの難しい罾でも、それほど時間をかけずに仕掛けられる」

上流の方に仕掛けた魚籠や漏斗型の罾の様子をときたま見に行きながら作った紐、出来るだけ真っ直ぐな枝。平たく、だが重い石。

罾を設置するのにこれらはゲイリーが背負っているバックパックに積まれている。

うん、ツタも決して悪いわけじゃないんだけど、紐の方がトータルで見ると上だよな。

ゲイリーやアオイが全力で引っ張っても大丈夫だったし、そもそも材料の時点で引っ張ったり、途中で折れたりせずに一重結びが出来るか試しているから問題ない。

「基本的には紐を使った締め罾か。向こうの獣道の奴と同じ……」

「石とかの落とし物系をもっと作ろうかとも思ったんだけどね、もし他に人が来ているとしたら怪我する可能性があるから……こつちの方がまだ大丈夫だろう」

そう言つて適当に布を巻いて止血した手をひらひらと見せる。

鋭い石を使つて枝の一部を削つて、三本の枝でアラビア数字の『4』になる様に組み立て、地面と平行になる棒の先に餌——とりあえず柔らかい果実の欠片を突き刺しておいた——をつけ、頂点の部分で大きめの石を立て掛ける。

餌を食べようとした瞬間、棒のバランスが崩れ、真上の石が落ちてくるといふ罾なのだが……これマジでバランス難しかった。

例の酔いそうになる視界の補正でどこにどう組み合わせれば完成するのかというのは分かるし、成功確率もご丁寧に表示されるのだが上手く行かないのだ。

まず60%より上に行く事がまれだし。80とか90という数字が見えたと思つて手を止めたら50%になつていたりするのだ。

どうにかギリギリの所でやっても枝組みが崩れたり、石が手の上に

思いっきり落ちてきたりで死ぬほど面倒だったし滅茶苦茶痛かった。泣ける。

「大丈夫かい？」

「一回煮沸した水で洗ったし大丈夫だろう。布も真新しい奴だし」

それに実質擦り傷に近いものだ。

一応患部を守るために布を巻いているが、カサブタが出来たらもう大丈夫だろう。

「とりあえず適当な長い枝を突き刺して目印を付けておこう。ゲイリー、石斧使つていいか？」

「ああ。……いや、君は手を怪我しているし俺が叩こう。枝を支えていてくれないか？」

「ん、分かった」

いつも気遣ってもらってホントにすみません。

でも滅茶苦茶ありがたいです。

一応ここに罨があるという目印として、俺たちはその近くに必ず棒を打ち込むようにしていた。

そして打ち込んだ棒の先端を鋭い石を使って軽く割り、薄く削った樹皮に矢印と、それぞれの言語で『罨』とペンで書いた物を挟みこむ。

「ゲイリーの世界での識字率ってどんなもん？」

「……そう、だな……領主のやり方にもあるが、全体だと六割位だと思う」

「思ってた以上に低いな」

「村や職人街だと、文字覚える暇があれば仕事を手伝えという所が多いからな。俺の領地では一応、最低限の教育として学校で文字や計算を教え込んでいるが……場所によっては反発もあつてな……誰もが文を読めるという君の所の環境にはほど遠いのさ」

「……大変なんだな。そういうの」

俺の言葉にゲイリーは軽く苦笑して、『そんなもんだ』と肩を竦める。

ちくしょう、イケメンは何やっても似合うなこの野郎。

ともあれそうだ、文字自体が通じない場合も考えて、骸骨に二本の

骨を交差させた海賊とか毒とかのマークも書いておこう。

「とりあえず、獣道とか細くなつた道つぼいところには締め罫。水たまりの近くには落とし物の罫を張つた。これで……ええと……」

「六つ目だな。二人がかりとはいえかなり頑張つた方だ」

「スキルには本当に世話になつていいるなあ……サーチスキルのおかげで他の動物の痕跡も分かつたし」

森の方に少し踏み行つて発動したサーチスキルは、落ちていた動物の体毛や、噛み千切られた葉や果実の残骸を発見していた。

「あの中途半端な水たまりが、動物達にとつての水場と判明したのは大きかつた。湖の拠点からも来れない距離じゃないし、このチエツクは欠かさず行かうようにしよう」

「だなあ。結局今回、タンパク源はほとんど入手出来なかつたし……また野草と果実の生活に逆戻りか」

「そんなに日数は経っていないのに、その頃がもう半年は前の様な気がしてくるな」

「同感」

前にアシュリーとも話したが、本当にここ最近は一日が長く、そしてちよつと前の事が随分と昔のような気がしてくる。

「出来る事なら、毛皮も出来るだけ確保したいし……布とか作れんのかな」

「毛皮？　一応すでにあの草食動物の毛皮はあるが……何に使うんだ？」

「あれだよ。寝床を心地よくしたいってのと、それと……いざつて時のための防寒対策でなにか作っておきたい。特にアオイは、下手したら今でもいるかもしれんし」

俺たちの中で一番薄い格好しているのがアオイだ。

今はまだいいが、万が一急に寒い日が来たり、あの時の豪雨みたいに急激に気温が下がる時があると一番辛い目に合うのはアオイだ。

医者もいないし薬の類もない現状では、体調を崩す可能性はちよつとでも下げなくちゃ……。

「君は自分が柄ではないと言っていたが……」



「ん？」

「ボ……俺が思うに君は、君が思う以上にリーダーに向いていると思うぞ？」

……ホントかよ、それ？

俺、責任のあるポジションよりも流される方が好きなタイプなんだけどなあ。

ホント、やっかいなしがらみがなければゲイリーをリーダーに推薦して言われた事をこなしていく生活になっていただろう。

「まあ……なんだかんだでリーダーになってしまったし、出来る事はするさ」

それなりに拠点に近づいていたため、もう湖は視認できる。おそろくもうちよい近づけば拠点も見えてくるだろう。

うっすらと、湖の周囲を歩いている二人が見えた気がする。

「さて、次はなにをしようか。ゲイリー」

「あの二人の行動次第だろうさ。ツール——いや、リーダー」

「くすぐったくなるからその呼び方、止めてくんない？」

「フフツ」

## 026：色んな意味で『餌』が必要

「それじゃあ、この貝はやっぱり食べられるんですね？」

「泥抜きしたあとでしっかり煮ればな。とりあえず、それようにまた違う器を用意しなきゃな……」

罌を仕掛けながら帰還するために少々早めに向こう側を出立していたのだが、思った以上に罌を仕掛ける作業はスムーズに終わり、暗くなってもちようど拠点の焚き木が見えるくらいの距離にまでは近づけた。

正直、危なかった。

いや、暗くなってもそのまま拠点まで戻れる自信はあったんだけど、火を起こすのが上手いゲイリーもいるしと種火を持ってきていなかったために色々遅くなったのだ。

森の中で活動する事が多い計画だったので、下手に火を持って火事を起こす可能性を考えたのだが……。

（無理とかしないで、もう途中で一泊すればよかったな、ちくしように心配させては不味いだろうと酷使したためパンパンになっている自分の両足——特に右足を揉みほぐしながら、湯気が立つマグカップに口を付ける。

「どう、トール君？ お茶の味は？」

中身はなんと、いつもの煮沸しただけの白湯さゆではない。うっすらと緑がかった『お茶』である。

「ああ、これ美味しいわ。ウチの国のお茶を薄く淹れた感じ。うん、これ好きだわ」

「アシユリー、お前よくこれを知っていたな。こちら側の物なんだが……」

アシユリーが別行動中に見つけていたのは、彼女達の世界の木だった。

パンという名前の木——うん、聞いた時にはなんだそれと思ったけどそういう名前なんだ。そういう名の針葉樹の葉、これを石で潰した状態で大量の水で煮ると、ビタミン豊富なお茶が作れるらしい。……

というか、もう作ってある訳だが。

「戦争している相手の国の文化について調べるのは当然でしょう。万が一そっちの領内で逃げ回る事になった時のために、自然にある食べられそうな物は調べてるわ」

スタイルの良い胸を見せつけるように胸をはるアシユリーに、ゲイリーは汚らわしい物を見るような目で、

「……下品な女だな」

「あら、どういう意味かしら?」

「そのまんまの意味だ」

「あら、そう?」

コロコロ笑うアシユリーに対して、ゲイリーは心底不愉快だと眉をひそめて睨みつける。

落ちつけお前ら。

というかゲイリー、なんでそんな突然親の敵を見るような目をしてんのさ。

「双方落ちつけえい。で、ゲイリー。これは二人の……っていうよりゲイリーの国ではポピュ……普通にある物なのか?」

「ああ、どこでも見られる物だ。大抵丘やちよつとした山に生えていてな……」

なるほど、本当に一般的な木だったのか。ふむ。

「その木って何本くらいあった?」

「私が数えた時には五、六本くらいですかねえ……それにもう一本、なぜかもう折れてる奴がありましたけど」

折れてたのはまあ問題なし。実際たまに流れてくる木の残骸はあるし。

理由は少々気になるが、アシユリーとアオイが特に気にしていないようだし、特に奇妙な痕跡はなかったのだろう。

一応一度自分の目で見ておきたいが、緊急性は低いと見た。

そして五、六か……ひよつとしたらもつと群生してるんじゃないかと思っただが。

いや、割とマジで飲み物の偉大さを今実感している。

飲む物が美味しいと、肉や魚がなくてもなんか満足できる自分がいる。

「あ、そうそう忘れてたわ。ついでにコレも作って置いたから、二人とも何本か持つときなさい」

そんな事を考えていると、アシユリーが俺とゲイリーに木片をそれぞれ差し出す。

なんだこれと思って受け取ると、触感が想像していた木のモノと少し違う。

「パンの木よ。ただ、樹脂を多く含んだ部分を細かくして、樹皮とかの余計な物を取り除いている。油分が多いおかげで着火剤としては凄く便利だから、それぞれが持つておいて損はないと思うわ」

マジでか。

「ピッチステイックか……。ああ、確かに便利だ。普段の火起こしは、今まで通り火切り棒で起こすか種火の運搬で十分だと思うが……。火が付にくい状況だったり急ぐ時なら……」

「似たような物ならウチにもありましたよお♪　ウチの奴隷が火を起こすのに楽だと言ってよく使っていましたので二年前に奴隷に限り使用を禁止にしましたあ♪」

なんでだよっ!?

ホントお前の国は碌でもないな!?

「……好奇心で聞いてしまうが、なんで禁止になったんだ?」

「作業の簡略化は奴隷の勤劳精神を犯す要因であるとかいう理由だったと思いますけど……。まあようするに嫌がらせ……。というかイジメですよねっ!」

「お前の国はホントにクソだなっ!!」

いやホントに!?

マジで反乱とか起きないの?!

そういう系の物語だと搾取される側が間違いなく反乱起こしてダイジェストでも映画三部作位のボリュームになりそうなえげつない内紛になると思うんだけど!?

「まあまあ、私の国なんてどうでもいいじゃないですかあ♪」

「いいのかそれで!？」

そんなアオイは、嬉しそうとか楽しそうにいつも通りぴよこんと跳ねた髪をひよこひよこ跳ねさせている。

だからどうやって動かしてるんだそれ。

あれか。そういう人間というかそういう種族なのかお前さん達は。

「今回はお互いに収穫ありましたねえ♪ 草以外に食べれる物を発見しましたし、まだ成果は出ていませんが獣や魚を捕まえる罠をかなり仕掛けましたし」

「キチンと作動してくれるといいんだがなあ」

「数が増えれば可能性は十分です! 前の所でも作っていたあの大掛かりな仕掛けも湖の適当なほとりで作れば、更にお魚さんが獲れる可能性は更に上がるんじゃないでしょうか?」

「……そもそもさ。魚って何食うんだ? 昔家族で釣りに行った時は海釣りで、使った餌は確かイクラだったけどさ」

「イクラ?」

「サケって魚の卵。俺たちも食う物だけど……意外とこれ釣れるんだよなあ」

「どういう物を食べようとして、それがどこなら豊富かがハッキリ分かればベストである。」

「多少は罠が起動する可能性が上がると思うんだが……」

「また蟻を見つけて、潰して団子にすればエサになるんじゃないかしら?」

「ええ!? お魚さんの餌にするくらいなら私達で食べましょうよ!」  
待てえい。

「蟻を腹膨らませるほどに捕まえるのは骨折れるだろうが……」

「それこそ、罠を作ればいいじゃないですかあ。ツールさん、今ならそういう知識を持っているんじゃないですか?」

「いや、そう言われてもな……」

「とはいえ、罠に関して尋ねられたために意識してしまったのだから。一瞬で視界がいつものアレになり。」

『現在の状況を読みこんでおります……』

『読み込み完了』

『昆虫型生物の捕獲トラップ、3パターンを表示致します』

……………マジでか。

## 027：なんだかんだで昆虫食の歴史は凄い

「言っておくけど、蟻みたいに壁を容易くよじ登れる奴は多分難しいからな？ 本来必要なモノがねえし、餌の樹液なんかも少ねえし」

「はいはい」

今自分がやっているのは、適当なサイズの穴を掘る作業だ。

傍には、アシユリーが用意した木の板や樹皮、大小様々な平たい石が並んでいる。

今俺が掘っている穴よりやや大きめで、真ん中の部分に少し穴が空いている木材や樹皮。これが罫の蓋になる。

今掘っている……深さは大体二十センチ前後くらいか。そこまで深くはしていない。

その上に穴の空いた樹皮を被せて適当に土で埋めて固定する。

そして、その両端を抑えるように小ぶりの平たい石を起き、その上に大きい石を乗せる。

これで完成である。

本当は穴の部分にはコップとか背の高い缶詰とかを埋めるのがベストらしいのだが……まあ仕方ない。

「言っておくけど、これは魚の餌を確保するためであって食うわけじゃないからな？」

虫は基本的に、石の下などの物影に隠れる修正がある。

それを利用したのがこの罫だ。

石の下に隠れようとした虫は、そのまま穴の中へと落下する。

やや大きめに穴を開けているとはいえ、蓋は蓋。

逆さになっても張りつける蟻や蜘蛛じゃない限りは二度と抜け出せなくなる仕掛けだ。

うん、蜘蛛は捕まえられないというのは素晴らしい。絶対に来んな。

「はいはい、分かっているわよ。……本当に虫が苦手なのね」

「苦手っつーか食うって事にすんげー抵抗があるんだよ」

「……トール君知ってる？ 環境にも依るけど、人は寝ている間に――

「そつから先を口にするなら女だろうと美人だろうと全力で顔に一発かますからな!?」 マジだからな!?」

「……出会った時もそうだったけど、君って時々すごく愉快になるわね」

なにボソつと「遊びたくなっちゃう」とか呟いてんだテメゴルア。

おいアシュリー、お前分かってんだろうな? マジだからな? これマジで言っただからな!?

「まあ、気持ちは分かるわ。アタシだって、食べるのは基本的に肉と魚と野菜だったもの」

「虫食う文化を否定はしないけど、俺ん所はそれに抵抗がある環境だったってのは分かってほしいなあ……特にアオイ」

今この場にはいないけどさ。

俺たちは拠点と湖の間に、虫捕獲用の罠を作っていた。

アシュリーは一応俺の護衛……というか、この後一緒に湖の方の罠の確認に行く予定だ。

俺自身が罠の場所を把握するのも兼ねてだ。

で、アオイ達は同じ理由で獣用の罠を確認しに行っている。

万が一罠に獲物がかかっていた場合、獲物にトドメを刺すには現状石斧で殴り殺すか、アオイの刀で刺し殺すかの二択だ。

結局砥石の代わりになりそうな物は見つからなかったため、切れ味は落ちる一方なのだが、それでも突き殺すのは可能だとアオイ自身が断言したため、石斧を持ったゲイリーと共にそつちに向かわせた。

——まあ、罠の大きさにそんな大物はまずかからないのだが……どちらかというかアオイの役割は解体か。

「アタシ達が捕まえたバツタ、貴方のスキルで食べられるって分かったらあの子早速食べようとしてたわね。足と羽筆って、枝に刺して……」

『あ、ツールさん食べます?』って焚火の近くに刺しながら言われた時は本気でリアクションに困ったぞ、マジで」

ちなみにその後マジで食いやがった。



カリカリしてて結構美味かったらしい。

スツゲー満足そうに『ごちそうさまでした!』とか抜かしてやがった。

……………。

くそつ、緊急時以外は絶対食わんからな!

「まあ、アタシも正直魚や肉が食べたいのよね。多少臭くても野草と大きな葉っぱで包んで焼けばそれなりの味になるし」

「ゲイリーが言ってたが、肉なら直接炭の上に置いて焼いても美味いらしいぞ。炭とか灰も、焼いてから適当な草の上で少し払えば取れるらしいし」

正直腹の減る会話だったが、今の俺たちにとっては夢のある話だった。

魚を捕まえたらこうやって料理しようとか、食べるキノコあったら良いよねとか油が欲しいとか。

うん、ああいう会話なら悪くない。

「…………ゲイリーとは上手くやってる?」

「ああ、アシュリー達には悪いが同じ男同士だからな。やっぱり気楽な所があつて話しやすい」

「…………まあ仕方ないわよ。男同士なんだし」

「それに気安く話せてな。思った以上に…………こう、なんていうかそんなに偉ぶらないし、男特有の悪乗りもないし、話してて楽なんだよなあ」

前に同じシエルターで寝た時とか、傍に寄られても…………男同士でつていう嫌悪感も湧かなかつたし…………あれか、中性的な顔だったからか? 筋肉質ではあるけど、太ってるのとは違うし。

体臭は現状しようがないけど、それもそんなに濃くないし。

「——うん。その…………よかつた…………わね?」

「……………なんで明後日の方向いてんだアシュリー」



罨をそれぞれ確認してきたが、引つかかっているのは無し。

一応また、目に付いた虫——アオイが美味そうに食つてたあのバツタ等だ——を罨の奥に突っ込み、仕掛け直してきた。

メダカはこっちでもちらほら見かけるんだけどなあ。

「で、今日はバケツを作るの?」

「バケツっていうか、水貯めておける器な。例の小さい巻貝——なんだったか、なんかスポイルって名前だったんだが……まあソイツの泥抜き用で作っておかねーと。度々水を変えなきゃいけないらしいし」  
出来れば二つ。片方は煮沸用にして、泥抜きには出来るだけ湯ぎましの水を使う。

いや、よくわからんが湖の水をそのまま使うよりそっちのほうが良いだろうという判断だ。

最終的に口にする物には出来る限り慎重に行きたい。

(しっかりと調理しないと病気にかかるって事だし、念には念を入れておいて損はねーだろ)

一応、すぐさま完全に飢えるというわけではないのだ。

前に調べた時に食える木の実がある事は分かっていたし、それなりに確保している。

「とりあえず、ここの拠点で最低限の基盤を揃えないとなあ」

「生活の安定?」

「ああ。何かあった時に、ここに戻ってこれればなんとかなるって状況にしたいんだよ」

寝床はある。火も水もある。飯は……今の所はあるが、やっぱり万が一の時の事を考えて、蓄えを作っておきたい。

「となると、君が重視してるのは魚——漁の方かしら?」

「ああ、だからアシユリーのサバイバルパックが見つかってくれると本当にありがたいんだが……」

一応現状でも釣竿は作れる。が、強度に関して強い不安が残る。竿や釣り糸として使う紐ではない。釣り針のだ。

「一応、トラツパーの中で一個、現状でも出来そうな釣り罟はあったけど……こう、確認のために移動するつてのが面倒なんだよなあ」

「でも、釣りも確実性という意味ではかなり低いんじゃないかしら。アタシ達の中に、釣りの経験があるのは——あ、君はあるんだっけ？  
海で」

「しつかりした道具に、川でも海でも釣りまくってた爺ちゃんのアドバイス付きだった。それに、餌ばら撒いていたのか結構群がっていて、糸を上下に動かすだけでホイホイ釣——いや、引つかかってくれてんだ。とても経験とは言えない」

あれもう完全に遊びだったからな。

どっちかというと小学校の時にイトコと二人して川にダイブして、当時の俺の上半身くらいの魚を直接捕まえた時の方がまだ経験と言えるだろう。

……や、現状なんの力にもならないけどさ。

「前に聞いたけどさ」

なんとなく当時を思い出していたら、アシユリーが声をかけてくる。

「実際、アタシ達ってこれからどうすればいいのかしらね？」

「……帰る手段か？」

「ええ。現状、まずは生きるための基盤を整えるという君の方針には賛成するけど……」

「事態が訳分からなさ過ぎてどうしていいか分からない？」

「……まあ、そんなところ」

「そりゃあ俺も同じだよ」

いやホントに。

「正直に言うけどさ、アシユリー。俺は今、先の事なんてほとんど考えてない。考えられないって言うべきかな」

口にしてから思ったが、この発言はリーダーとしてどうなんだろう。

「そういう事を考えられる状況を作っているってのが今かな……いや、うん。そもそもなんで俺たちがこんな森に放り込まれたのかも分からない。原因が分からねーから何を目指して活動すればいいかもさっぱり……で……」

ふと、思いついた事が一つある。

「? どうしたの、トール君」

「ん、ああ、いや……一個だけ可能性が……いや、でも……んくくくくく」

取りたくない。正直取りたくはないのだが、そう言えばスキルの中で訳の分からん物が一つあったじゃないか。

「……魔法、あのスキルの奴を取ったら何か分かったり……しないかなあ?」

ふと思いついた事を口にした俺を、アシュリーは複雑な顔で、じ……っと俺を見つめていた。

いや、あの……ホント思いついただけなんで。

そんな冷たい目でこつちを見ないでもらえませんか?

## 028 : 『科学』の国と『魔法』の国

「この作業、意外と大変ね……っ！ トール君、石斧使いつぶしちゃうかもだけど良いかしら？」

「問題ない問題ない。石斧だつてすぐ壊れる事前提の代物だし、加工した石さえ残つてりや十分だろ。割れちゃってもそんな時はそんな時で」  
「そう、ありがとう。それじゃ遠慮なく使わせてもらおうわ」

罨を一通り確認した後、俺達はそれぞれ作業に入っていた。

アシユリーは流木の加工。ようするに煮沸に使う物をもう一つ作っているのだ。

一方、俺がやっているのは——釣竿作りである。

先ほどまで石ナタを片手に森の中を適当に歩きまわつて、適度に十分な丈夫な長い枝を探しだして叩き折つてある程度の数を回収してきた所だ。

そして、問題の針なんだが……。

「これで……本当にイケるのかあ？」

釣り針として使用したのは、つい先日俺たちの胃袋と脳を癒してくれた、あの鹿の骨である。

肉を完全に削ぎ落して、何かに使えるかと保管しておいた骨を使う時がついに来たのだ。

適当な所を石で砕き、一センチく三センチくらいの細長い欠片の両端を石で擦つて尖らせる。

……これだけでいいらしい。本当かよ。

「俺の知ってる釣り針と全然違う……」

釣り針といったらこう……アルファベットの『J』のようになって、針の先端に返しが付いている奴だと思つていたけど……。

これただの針じゃん。小さい穴も開いてないから縫い針以下じゃん。いいとこマチ針じゃん。

「あら、訓練の時にはそれ結構使ったわよ？」

「マジでか」

「釣りというより罨によく使ってたけどね。まあ、基本はどちらも変

わらないわ」

「……かかるの？」

「ええ、要するに魚の口の中に長い物を引っかけるのよ。つかえ棒みたいな。ああ、針を全部隠すように餌を仕掛けないとダメよ？」

「……うくん、なんとなく今のでイメージは出来るようになったけど」  
やっぱり見慣れない物を使うのは不安だ。

骨の薄い所を適当な大きさに割ってから、先の鋭い石でコツコツ  
『J』型の釣り針作ろうかな。

エラく時間かかりそうだけど。

「ああ、でもこの平たい部分を使う訳にはいかないか……」

「ん？ 肩甲骨の部分かしら？ 何かに使うの？」

「失敗したらそれまでだけど……ノコギリ作ろうと思う」

割とデカくて平たい骨だったので、なにか新しい道具を作れるんじゃないかと思ってスキルを使って意識して見たら、面白い候補が出てきた。

それがノコギリだ。

この平たい部分。肩甲骨の部分を丁寧に半分に分けると、割れた部分  
がかなり鋭いのだ。これをノコギリ状に削っていけばOK。

あくまで代用品だが、それなりに使えるノコギリの完成である。

「上手く行けば、二つは確保できる。そうすれば木材の確保が簡単になる。……シエルターも作り直す必要があるしな」

これまでは落ち葉を直接地面に敷きつめ、押し詰めてマット代わりにしていたが、草を食べる虫が出てきたとなると今のままじゃ不味い。

せめて寝床部分を高くして地べたから離れたタイプにしないと不味い。

そういうシエルターを四人分作るには、大量の木材が必要だ。

それも、出来るだけ堅い——つまりは折ったりするのが難しい奴を。

石斧でも出来ない事はないんだろうが、アレだと断面がバラバラになるから脆くなる。できるだけ頑丈な状態で手に入れるには、もつと

それに適した道具を作るしかない。

「ねえ、ツール君」

「はいはい？」

「……魔法……覚えてたいの？」

「おお、なんか滅茶苦茶気にしてんなソレ。

魔法がそんなに嫌い——だよなあ。

敵の武器な訳だし。

「今まであんまり深入りしなかったけど……なんで戦争になったのさ。そっちの国とゲイリーの国間く限りじゃ離れてたんだろう？」

「離れているどころか完全に違う大陸で、交流もそれほどなかったわ」  
「…………ますますなんで戦争したのさ」

「正直、悪かったのはアタシ達だと思っただけだね。切っ掛けはソレよ」

そう言っただけアシュリーはある物を指差す。

俺やアシュリーの作業で出ってしまった木や骨の削りカスである。

「……「ミッ」」

「とか、それに関係する諸々の影響ね。大気の汚染とか」

アシュリーは石斧の刃に近い部分を持って、ある程度深く削った流木の穴をの側面を削って広げている。

「アタシ達の……三世代前になるのかしら？ その頃には、アタシ達の文明の影響が向こう側に出るほどになっていたのよ。流れ着くゴミもそうだけど……木々が妙に枯れたりとかね」

環境問題か。……ウチの世界にもあるけどなあ。

自然と魔法が密接に関係していると言っていたゲイリー達にとっては、恐ろしく深刻な問題だったのだろう。

「アタシ達の前世代。つまりは親の世代には互いの国の関係はかなり冷え切っていて、ついに互いが経済攻撃として交易を打ち切った。……覚えてる？ 前にゲイリーとアタシが話していた事」

「……葉関係はソッチの国に頼ってたんだっけか」

「それだけじゃないけど……向こう側じゃあ作れない物をこっちが売り、代わりに向こうは色んな資源を売ってくる。それが色んなイザコ

ザで……まあ、完全に止まってね」

「それで奪い合い？」

「……先に仕掛けたのはこっち側だったけどね。向こう側の鉱物資源が豊富な地域に奇襲、制圧。そこからずっと互いに、飲み込め追い出せって戦争を続けている」

……全く違う大陸で、互いの交流がほとんどなかったからこそ、どうしようも無くなる所まで行きついてしまった。

話を聞いて思った事はそんな所だ。

「ゲイリーの領地が前線とか言ってたけど、つまりそっちが占領した地域の目の前に？」

「そ。アソコの領兵はかなり強くてね……魔法を弱めるために森を焼き払おうとしても奇襲を受けて頓挫したり……アイツの父親の頃から睨みあっているのよ」

……本当に根が深いというか……よくゲイリーは表面だけでも取り繕ってくれてるなあ。

まあ、少なくともコイツラの争いについては俺にどうこう言えるものではないし、そもそも踏み入った所で不毛だ。

「ゲイリー……いや、ゲイリー達の文化に関してはどう思ってる？」

結局今必要なのは、現状の互いの認識とその対応だけなのだろう。

「……侵略したアタシ達の国の非があるのは確か。でも、制御出来るのかも不確かで不安定な技術にしがみ付いて、医薬品はおろか、冬の燃料にすら苦勞し続けていた彼らには思う所はある……そんな所かしら」

「割と真面目に技術がかけ離れ過ぎだろう……」

もし魔法という技術さえなければ、きっとゲイリーの国はあっさりと降伏していた気がする。

そうすれば、アシユリー達の国が開拓を始めて……あく、駄目だ。一歩やり方間違えた途端にテロとかゲリラ戦が始まって泥沼になりそう。

「仮に魔法がなければって君考えたでしょう？」

なぜバレたし。



「アタシが魔法を嫌いなのは、そういう考えがあるからなのよ。魔法がなければもつと平和な歴史だったかもしれない。……いえそもそも、完全に自力で制御できない大きな力なんて怖すぎるわ」

「ん〜……実際に魔法を見ていないからよく分からんけど……」

自分で乗つてりや自転車は怖くねエけど、ただ飛ばしたい奴とか年寄りの乗っている自転車がすげえ怖いようなもんか？

訳のわからない武力つー方面で恐れているつつつても、魔法での人の変異が不可能って魔法に関してまず理解していない所があるみたいだ。

「仮に、アシュリー達が魔法を使えていたら、多少の衝突はあっても上手くやれたかもしれんね」

「？ そう思うの？」

「なんとなく、な」

「ふう……ん」

アシュリーは石斧を、削っていた流木に少々強めに叩きつけて固定すると、額の汗を丁寧に拭いたため息を吐く。

「だったら、魔法が使えないアイツとは上手くやっていけるのかしら？」

「……互いが歩み寄ればワンチャン？」

「君も難しいと思ってるわけね」

幕間く嘘付きと嘘付きによる狩りく

「……これは、さすがに予想外だったな」

「ですなぁ」

久しぶりの野草だけの朝食を取った後、ツール達と別れたアオイとゲイリーは獣用の罾を確認しに行っていた。

アオイの腰にはいつもの刀が、そしてゲイリーの腰には手製の石斧とナタがぶら下がっている。

「まさか、早速獲物がかかっているとは思わなかった」

「野豚さんはちよつと臭みがあるけど美味しいんですよねえ♪」

「お前が知っている野豚ならな……。まあ、ツールに鑑定してもらうまでは待った方がいいが、食事には期待できるな」

そして、ゲイリーの石斧と、アオイの刀はそれぞれ少し血で汚れていた。

アオイに至っては、着物の袖の部分にがつり血が付いている。

「でも、血を捨てちゃうのはもつたいくないですかあ？」

そして罾にかかっていた豚——ゲイリーに殴り殺され、適当に逆さ吊りにされた上にアオイに首を搔っ捌かれた獲物は、その下に掘られたそこそこ深い穴に赤い液体を満たしていた。

「持ち帰る容器がないし仕方がないだろう」

「ぶう……。骨と野草で美味しいスープになりそうなのに……」

「肉だけで満足してくれ。というか、満足だろう？」

「まあ、そうですね……。やっぱりもつと良い物食べたくなるじゃないですかあ」

「……………気持ちち分かる」

実際、ゲイリーも同じ気持ちではあった。

娯楽というか、気の紛らわし方が実質食事と会話くらいしかないのだ。

朝起きてそれぞれの作業に出発し、昼は黙々仕事をし、帰って来たら食事を取って、それぞれで談話をしながら道具を作ったり紐を組んだりするというのが日々のローテーションとなりつつある。

これはこれである意味充実しているのだが、その分食欲などに対する欲求が日々強まっているのは感じる。——恐らく、誰もが。

「とりあえず、血が抜けるのを待つか……」

「ですねえ。その間暇ですし、ちよつとお話しませんか?」

「……罨を仕掛け直しながらなら、構わない」

相も変わらず能天気な様子で声をかけるアオイに、ゲイリーは眉をひそめ、

「てつきり、お前には警戒されているとばかり思っていたのだがな……」

「警戒? なんですか?」

「……先日、お前に対して色々言っただろう」

「なにかしようとするつもりがない人相手に、どうして余計な労力を割かなきゃいけないんですかあ?」

挑発とも取れる言葉に、ゲイリーはピクリと手を止める。

「……どういう意味だ」

「そのまんまの意味ですよ。基本的にアナタ、何かを決める事が億劫なんでしょう?」

「……………」

「トールさんを私達の一番上にした理由。アレも嘘ではなかったんでしようけど……本心は別の所にあつたんじやないですかあ? 責任を負うのは怖いけど、口は出したい——みたいなの?」

「……………」

じつとアオイの言葉に耳を傾けながら、まるでそれが耳に入っていない様に紐を結び直し、罨を仕掛け直している。

「いやあ、これまでずっと貴方を見てきたんですけど、どうにもなんとなくうか……貴族、というか領主らしくないんですよ。あくまで私から見ての話ですけど」

「俺のどこがどう領主らしくないの?」

領主らしくない。

そう言われたゲイリーは思わずアオイに問い返す。だがアオイは、どこ吹く風とばかりにそれを流し、

「傲慢さが圧倒的に足りてませえん♪」

「……傲慢な領主で、民が納得するものか——」

「しますよ」

ポツリと呟くようにそう言うゲイリーの言葉を、アオイは一蹴する。

「正確には、傲慢な所を見せて多かれ少なかれ恐れを抱かせないと誰も付いてきませんよ。ほら、かなりまでも公正なトールさんをトツプにしているても、私達は結局自分達の目的のために彼を利用しようとしているじゃないですか」

ゲイリーの目が、泳ぐ。

「アシュリーさんは、もし自分の仲間が同じように飛ばされていた時にトールさんを自分側に肩入れさせようと色々画策していますし、貴方も似たような事を考えていますよね？」

「……そういうお前は、どうなんだ？」

「はい？」

「トールと共にここでの生活を続けたい。そう言っていたな？」

「ええ、『今は』嘘じゃありません♪」

「……あえて彼の名前を間違えたまま呼び続けているのは、ある種の布石か？」

「はい！ いやあ、今となっては後悔しなくもないんですけどお、元々持っている名前を奪うのってコントロールの基本中の基本ですのでえ♪ 囚人とか奴隷とかあ♪」

今までと全く違う環境に放り込まれただろう状況で、あえてトール——いや、トオルの名前を聞き間違えた振りをしたのは、アオイの意図的な物だった。

「そもそもお、薄々気付いていながら放置しているお二人には言われたくないですう」

「……いつ、どう切り出せばいいか迷っていただけだ」

苦々しげにそう呟くゲイリーに、アオイは『またまたあ♪』と手をひらひらさせる。

ゲイリーは軽く舌打ちしてジロリとアオイを睨み、

「アイツは……アシユリーは？」

「あの人こそあからさまじゃないですかあ♪ 貴方とは違うアプローチでツールさんを——スキルなんて便利な物を持つ『装備品』を絡め取るつもりでしょうねえ」

「……スキル欄にあった魔法の取得に嫌悪している『振り』をしているのは……」

「いざ自陣営の人間が現れてツールさんと関わった時に、余計なイザコザが起こる可能性を減らすためじゃないでしょうか？」

「……じゃあ、お前が妙にツールのスキル取得で魔法を押ししていたのは……それを見越しての事だったのか!？」

その可能性を思いつき、ゲイリーは目を見開いてアオイを見つめ——

「いいええ？ 普通に面白そうだったからですう♪」

自分の馬鹿さ加減に頭を抱えた。

そうだ、アオイという女はそんな殊勝な女でない事は、共に過ごしてきた人間にとって共通する確定事項だった。

「それより、私は今貴方の方に興味があるんですけど」

「俺に?」

「はい♪」

「どうして男の振りをしているんですか？」

次の瞬間、ズボンの裾からゲイリーはある物を抜き放つ。

最後に交戦した敵——アシユリーがかつて手にしていたナイフを。

特殊な合金で作られた、非常に軽く、固く、そして鋭いソレ。

だが次の瞬間、甲高い金属音と共にそれはゲイリーの手から弾け飛び、クルクルと回転しながら宙に舞い、吊るされている野豚のすぐ横の地面に突き刺さった。

「あはっ、やっぱり隠し持っていたんですね。たまに歩く時の重心

がわずかに変わるから変だと思っていたんです♪」

対してアオイの方の手には、いつの間に抜いたのか刀が握られていた。

装備の性能としては完全に負けているその得物で、アオイは高い技量を持って見事に打ち払った。

「駄目じゃないですかあ、こういう便利な物は皆で共有しないと。ツールさんを見習って下さあい♪」

自然な様子で刀をぶらりと下げるアオイだが、その目はいつもと違い瞳から光が消え、どこを見ているか分からないような虚ろな目をゲイリーに向けていた。

「……いつ、俺が——僕が女だと……っ」

「お忘れですか？ 貴方を……ええ、貴女を助けたのか誰だったのか」

「——最初っからか……」

一番信頼できる得物を失い、代わりに石斧を握るゲイリーだが勝ち目がない事は彼——いや、彼女が一番知っていた。

しばし対峙していたが、唐突に力が抜けたように膝を突く。

「はい、おしまいですね♪ じゃあ、教えてくれますかあ？」

「面白くもなんともない話だぞ……っ」

## 029：肉は寝かせた方が美味い

「よくやったお前達、褒美として一番美味そうな所を優先的に選ぶ権利をくれてやろう」

「やたーっ！」

「いや、そもそも罨を仕掛けたのは君で……いや、君がそれで良いと言うのならありがたいがたく受け取っておくが……」

ええからええから、取つとけ取つとけ。

というか仕留めたのは君達だし、血抜きしたとはいえ中々重そうな野豚運んだのも君達だし、加えて解体したのも君達だし。

しかも、川原でアシュリーのナイフを発見するという大手柄まで挙げてるんだから俺から文句はない。

アシュリーもナイフが戻ったのが嬉しかったのか、発見したというゲイリーに礼を言っていた。

敵に対して礼を言うのが不服だったのか、笑顔ではなく……こう、なんとというかニヤニヤした感じだったけど、まあお礼を言つてゲイリーも戸惑いながら受け取ったから良しとしよう。

これで少しは互いの関係のしこりが取れるといいんだけど……。

「とりあえず解体した奴は……ナイフのおかげもあつて簡単に細かいサイコロ状に切れたし、多少の血と骨もある。野草とかと一緒に煮込んでシチューにしないか？」

「いいですねえ♪ 多少の臭さも、草と一緒に煮込めば取れるでしょうし」

「貴女達が豚相手に格闘していた頃に、こつちも食べられる物は確保しておいたわ。それに、沸騰させるための器を予備を一個作つてあるし、万が一汚れてしまつても問題ないでしょう」

俺とアシュリーが朝に魚籠の確認していた時、ついでにパツと見でタマネギを凄く小さくしたような変わった野草があつたので調べてみたら、どうやら本当に臭み取りなどに使えそうな野草だったので切り取つて来ていた。

早速役に立つ場面が来るとは思わなかったが……悪くない。

「よし、それじゃあ飯の準備しようぜ！ 今回の肉は鹿より臭いが強いし、もうちよい俺は野草を集めてくる」

ともあれせつかくの肉だ。

ここで食事を少しでも豪華にして士気を上げておこう。

アシュリーと今後の事を色々話していたらむしろ俺がブルーになってきたし。うん、むしろ俺がテンション上げたい。

デザート用に果実——イチゴみたいな感じの奴があったはず——を摘んできて、あと前に食べた時に美味しくて目星を付けておいた野草を引っ張ってこよう。

「む……なら俺も念のために同行しよう。仕留めた野豚は中々に攻撃的だった。そういう類の獣に遭遇したら危険だ」

「ありがとう、ゲイリー。頼りにさせてもらおうよ」

帰ってきてアオイがアシュリーのナイフを借りて野豚——俺から見りゃ小さい猪だが——の解体作業をしている間、ゲイリーは鋭い石を使って出来るだけ真っ直ぐで長い枝の先端を尖らせ、そして少しだけ焼いて固くしていた。

見ての通りの槍である。

おそらく狩猟に必要なだと思っただのだろう。

ごめん、ホントごめんゲイリー。

もっと早くに俺が提案するなり、夜の間スキルも駆使して数本作っておくべきだった。

興奮して暴れ回っていた野豚に止めを刺したのはゲイリーと聞いているし、ちよつと疲れているように見える。

せつかくだから、今日は肉たらふく食ってゆつくりしてほしい。

明日も比較的楽な湖側の作業に回すからさ。

「それじゃあ、アタシは近くの魚籠だけ確認してくるわ。多分成果はないでしょうけど、一応ね？」

「料理は私に任せてください！ 山育ちは伊達じゃないですから！」

……うん、まあ、お前の料理の腕は信じてるよ。

けどさ、お前はうかつ——ではないけどこう、軽いといふかなんというか……。



「味見の時には十分注意するようになる？　ここで腹壊しても地獄を見るだけだからな？」

俺とゲイリーで隙を見てこっちでも二人がかりでトイレは作ってある。

鼻が敏感な獣は排泄物の臭いに寄ってくるというからシエルターからはちよつと離れた所にちよつどいい段差があったので、そこにいわゆる洋式形態のトイレを作っておいた。

腰をかけた時に尻の辺りだろう所にやや大きめに穴を掘って、出来るだけ真つ直ぐな木を上から綺麗に二つになる様に切って作った二枚の板……板？　まあそれを便座というか座る所にするためにこつ、ほどよい間隔を開けて敷いて……はい、トイレです。

キッチンと周囲には壁を設置しました。

前にゲイリーやアシュリーを助けた時に作った壁と同じく枝を積み重ねて、ついでに隙間は泥と石で埋めていたので覗き見られることはありません。ハイ。

トイレトペーパー？　ティッシュはとつくに使いきつてんよ！  
代用品は念のために軽く茹でて殺菌済みの葉っぱだよこんちくしょう！

「大丈夫ですよお♪　仮に病気にかかってもかからなくても死ぬ時は死にますう♪」

「いや……分かってるよな？　分かってるよな!?　俺の言ってる意味分かってるよな!?!」

「大丈夫ですつてえ。信じてくださいよお♪」

いや信じるけどさ！

というか自分から病気にかかりに行く馬鹿がいるとは思わんけどさ！

ホント頼むぞ！　衛生面がガチで生死を分ける状況だかな!?!



「えー、それでは皆さん。今日も一日お疲れ様でした！」

一つの煮沸用の流木器ではスープを、もう一つではお茶を、そして焚火では軽く茹でた一部内臓や肉を枝に刺した物が遠火でじっくり焼かれている。

内臓に関してはアオイとゲイリーの物だ。サーチでも美味しいと書かれていたし、実際さきほど味見という事でアオイから一欠けら食べさせてもらったが美味かった。

なお、食いきれない肉は焚火の上に吊るされた即席の網の上で、一切れずつ燻製にされている状態である。

「乾杯！」

人数分揃ったマグカップを掲げると、他の三人も『乾杯！』と掲げてくれる。

カップというより、今日はこれが匙代わりなのだが。

これで直接スープやお茶を掬って、肉や大きめの野草は箸やフォーク代わりの削った枝で突き刺したり掬ったりして食べている。

……匙とかお玉とかも作ってみるか。アオイもアク取りで苦労したって言ってたし。

実際、食器関連を増やすのは悪い事じゃあるまい。

「お肉はキッチンと火は通ってますかあ？ 一口程に切り分けているので通りやすいと思いますけどお」

「おお、ベストベスト！ 骨と野草のダシが上手く乗ってて美味いわこれ！」

骨を出汁にすると聞いた時は、匂いの強烈さがあつたから大丈夫なのかとちよつと不安だった。

だがアオイが大丈夫と言った通り、骨を軽く焼いてから出汁にしたら生臭さはほとんど消えていた。

……考えてみると、俺以外は料理できるんだよな。

俺も家で台所に立つ事はあつたし包丁を握ることだつて何度もあるが、魚を捌いたり解体する事はさすがにない。

加えて塩も胡椒も醤油も無い状態では、正直八方ふさがりである。(……マジで料理スキルみたいな生えないかな)

ある意味でスキルに慣れてきたのか、今になって魔法を取るという選択肢もあるなと思ひ始めてきたが、やはり同時に取りたい者は多くある。

罨の確認という日課が増えた今では『健脚』スキルは結構魅力的だし、『野草知識』を試しに取るのも悪くない。

「とりあえず、ここでやろうと思えば安定した生活が可能だと言う事が分かった」

俺の言葉にそれぞれがそれぞれの言葉で肯定する。

実際、獣がいてその肉を食えて、野草も果実もある程度は取れる。後は魚が取れば完璧だ。

「で、だ。しばらくは罨の確認や追加なんかを主として、拠点の強化に努めようと思う。周辺の探索はもちろん皆どう?」

とりあえずシェルターの改築のそうだし、そのための資材や建材集め。

向こう側の拠点に作つてた作業場も建てたいし、雨が降つた時のために今の焚火場の上にはある程度広い屋根を作っておきたい。

正直、よつぽどの事がない限りこの拠点は捨てられない。

環境としては最高だし、今現在危険だと思ふ事は予想を超える増水と野生動物くらいだ。

「私は問題ありません♪ せつかくなので狩猟等に備えて色々用意したいと思いますう」

アオイは真つ先に賛成の意を示す。

実際、かなり立派なナイフが回収できたとは言え刀も十分戦力になる。

作業的な意味で。

となると、トドメを刺すのも含めて狩りを行う狩猟道具は確かに揃えておきたい。消費速そうだし。

ゲイリーも既に作っている所を見ると、必要頻度高そうだし。

「俺は……そうだな、異議なし。少なくともしばらくは気候も安定しそうだし、先の事に備えて色々用意しておいた方がよさそうだ」

「用意ねえ。何を用意するつもりなのかしら？」

「まだ深く考えていないが……食糧や資材・建材の貯蓄方法をなにか用意したいと思っている」

ああ……。うん、確かに。どうかしたいよねそれも。

痛むのが早い肉は燻製にして長持ちさせるようにしているけど、それでも三日も持てば良い方だ。

ゲイリー曰く、塩などでしっかり水分を抜けばかなり変わるらしいが……。

「アシユリーは？」

「そうねえ……確かにあんまり動くのもアレだけど……ねえ、アタシも好きに動いていいんでしよう？」

「？ ああ、別に構わないけど？」

「なら、アタシは出来るだけ探索に動く事にするわ。ああ、だから例のノートまた貸してちょうだい？ それっぽい野草や虫のサンプルも持ってくるけど、キッチンと食べ物も持って帰るから」

むしろお願いしたいくらいなんですけど。

「頼む、アシユリー。出来るだけ道具も揃えるから、無理しない程度に色々調べて欲しい」

作業員というだけあって、一応はサバイバルの訓練を受けている彼女は探索要員としては適役だろう。

ゲイリーも同じ理由で適任なんだが、今回は拠点仕事の方に興味があるようだし、俺も休ませようとしていた所だったからちようどいい。

代わりにアシユリーに少し負担がかかるが……。

「ええ、任せてちょうだい。きつと君の役に立って見せるわ」

そうやって舌をチロリと出して見せるアシユリーはどこか色っぽくて、ちよつとドキツとした。

いやホント、こうした強制サバイバル生活に放り込まれて唯一よ

で。 かった事があるとすれば、周りの人間に恵まれたことだよなあ。マジ

## 030：透ことトールの活動記録

さて、あれからそれほど変わり映えのない生活が……大体10日ほど続いている。

大雑把ではあるが、その生活を振り返ってみようと思う。

まず、俺とゲイリーの二人がかりで大幅に道具を増やした。

鹿の肩甲骨を二つに割って加工した骨のノコギリ。

以前も作ったナタに石斧、それほど鋭いわけではないが野草の採取や木片を削るのには使える石のナイフ。

なにより、俺達がもつとも力を入れたのは食器や調理道具の作製だった。

煙でいぶすための網——枝でフレームを作り、乾燥させたツタを網の目に巻き付けて結びつけた物等も数を増やし、燃料さえあれば焚火を複数焚いて大量の肉を短時間で燻す事も可能になった。

で、それにプラスしてそれぞれの皿——シチューやスープの場合もあるから深皿を予備含めて六皿。そして箸、フォーク、スプーン……というか匙というかレンゲ？ うん、まあ、それをいくつか作っておいた。

やっぱりアシユリーのナイフを回収できたのが大きい。

一応削ったりする作業はこれまで通り焼いた石や火のついた枝等を使って適度に焦がして……という工程を繰り返しているが、細かい所や仕上がりが非常に綺麗になった。

ひよつとしたらその近くにサバイバルパックもあつたかもしれないとゲイリーに詳しく話を聞いてみたのだが、近くには間違いなく無かったと断言。

つまり、ゲイリーもあの時にかなり念入りに調べてくれたのだろう。

いやもう本当に彼には頭が下がる。

理由こそ聞かされたからこうしてリーダーの役を務めているが、やっぱりゲイリーの方が向いているんじゃないだろうか？

俺が意見を言った時に、肯定しながらも違う可能性や方向性を言うてくれるからホントに助かる。

本人にそれを言ったら、照れたのか俯いてたけど……。中性的なイケメンだから、そういう仕草も似合うとか本当に卑怯だと思う。

さて、それ以外だが……少し前までの拠点構図としては、真ん中に軽く石で囲んだ焚火場があり、その横に煮沸用の丸太や燃やす用の枝、トイレに行く時のために煮沸消毒して乾かした葉等を置いてある場所があった。

で、それを囲むようにそれぞれを囲む場所があるわけだ。

今では一番中心の焚火場を覆うように屋根がある。

雨の時のために用意した物だ。

なるだけ長い枝をしつかり地面に打ち込んで支柱とし、その上に別に作った屋根——雨がたまったりしないように尖らせた奴だ——を乗せた簡素な物。

簡素とはいえ、とりあえずよっぽどの豪雨でもないかぎり大丈夫だろう。

やや広めに作ったので、乗つけた後でゲイリーに肩車してもらって紐で可能な限り結んでおいた。

結び方というか……ロープワークって言うんだっけ？ はゲイリーの方が得意だから俺が下になろうとしたら、「俺の方が力があるからより安定するはずだ」という事で下にさせてしまった。

なんか、こう、ごめんね？ 非力でさ。

後でそう謝っても「いや気にしなくていい」って言うだけだし、多分気を使われたんだろう。

顔赤かったのはあれか。キッチンと感謝を伝えようと何度もお礼の言葉言ったのがやはり照れくさかったのだろうか。

なんだかんだでゲイリーってそういう……なんだろうか？

人間味があるというか照れっぽいというか、そういう所があるからやっぱり好きなんだよなあ。

まあ、作業としてはそんな所か。

今は骨ノコギリとナタを駆使して、できるだけ真っ直ぐな木を切り倒して木材を確保している。

太いのはノコギリの強度的に無理だから比較的細い奴ばつかだけど、シエルターの改築しかり、その他拠点の改良や罨、道具に使える丈夫な木材の確保は割と重要事項だと気付いたのだ。

で、食糧。

こっちはトータルで見れば悪くない。

あの後も森の中で見つけた水たまり付近の罨に獲物が引っ掛かってくれた。

さすがにこの間の野豚のような中型以上の獲物は掛かっていないが、それでも満足できる獲物がかかった。

なぜか額に角が生えている兎に毛だけではなく皮膚まで真っ黒なビッグサイズのリス……っぽい何か——なおサーチをかけても名前だけは理解不能な言語で分からなかった——がこの十日の間に引っかかっていた。

率直に言うが、滅茶苦茶美味かった。特にリスっぽい何か。

骨はしっかり火を通したら煎餅みたいに食べれたし、茹でたら美味しいスープになった。最高である。

おかげで肉もスープもすぐさま無くなってしまったが、これは仕方ない。

ゲイリーもかなり気に入ったらしく、黒リス狙いの罨を増設したと言っていた。

で、湖に仕掛けた魚の罨——魚籠だが、こっちは……一応成果は出ていた。

日課として罨の確認に出た所、一匹だけかかっていた。

なんと言うの？ こう、『ザ・川魚』って感じの……マス？ つぽいのが籠の中で暴れていたんだ。

魚籠を引き上げた時にいつもと重さが違った時点でスツゴイ嬉しくてすぐさま腕突っ込んで……うん、魚がヌメるものだって忘れてた。

掴みあげようとしたら暴れられて……逃げられてしまったよ。ち



くしよう！

一緒にいたアオイからは、「罨が作動するのがわかっただけでも大収穫ですよ♪」なんて慰められる始末。

いや、だからなんだという訳ではないけど……なんか、本当にごめんなさい。

代わりというかなんというか、例のタニシもどきの泥抜き作業は全部俺が引き受けた。

いや、これが予想以上に汚いのだ。あと臭い。

先日作った不格好なバケツに大量のタニシもどきを水につけていたのだが、ちよつと放っておいただけで泥やら糞やらすごい水が濁るのだ。もうすごい勢いで。

米を洗う感じでタニシもどきを洗って水を捨てて入れ直すという工程を一日に何度も繰り返し返して、最近ようやく落ち着いて来た。肉ももうなくなった所だし、今日の夕飯はこいつらにしよう。



「なにか書いていたのか？」

「ん、ああ。文字忘れないように、ちよつと日記をね」

膝を机代わりにして広げていたノートを閉じる。

漢字はいくつか忘れてるのは確かだったが、まさか一部ひらがなですら迷うとは思わなかった。

似ている『ね』と『ぬ』。どっちを書こうとしていたんだっけと五秒ほど迷ってしまった時はなんか凹んだ。

「君の所の文字って中々に独特というか……複雑よねえ」

午前中の作業を終えて、昼飯を終えてからそれぞれで休憩を取っている俺たち四人。

アオイは例の針葉を石で潰してお茶を淹れる準備をしていて、ゲイリーは俺の右側で、大きめの器を作ろうと焼いた石を木材の上に乗せて焦がしている。

アシユリーはアシユリーで、俺の左側で俺の教科書と睨めっこだ。

「その複雑な方の文字は元々隣国の物だったんだ。で、そこから独自に変化を続けて、他の単純な文字になったんだと」

「隣国の言葉ってのは発音も一緒なの？」

「一部は……だけど今はもう完全に別物。ウチの言葉はウチらだけの物になったからな」

「ああ、そういえば島国って言っていたわね」

今アシユリーが目を通してしているのは歴史——日本史の教科書と資料集だ。

アオイもたまに目を通していて、何を書いているのか代読させられる事がある。

娯楽が少ないと、こういうのですらいい時間つぶしになるのだろう。

「少しずつ君の所の文字も読めるようになって来たけど、眼が疲れるわねえ。数学の教科書は面白かったけど」

「科学の国って言うんだから、当然そっちも数学や化学は進んでいたんだろう？」

「ええ。ただ、ウチもアオイの所程じゃないけど階級社会でね。一定クラス以上の国民じゃないとこういう教育は受けられないの」

「マジでか」

「ええ。さすがに文字の読み書きや基礎数学——君の所でいう算数かしら。そういうのは教えるけど……あと、乗り物の運転方法とか」

「俺からすると、子供の頃に運転を教えるつてのがまったく理解できん」

「運搬や農業には必須だから、早いうちから教え込むのよ。こういうのって早いうちから生活の一部にしておけば、一五歳くらいにはそれだけで立派な労働力になるわ」

割と近い文化だと思っていたアシユリーも、こういう話を聞くと違

うなあとつくづく感じる。

「ふうん。それじゃあ、こういうのはどこらへんから習うんだ？」

そういつて俺は、横に置いていたナイフと色々と削られた数本の木の枝を目で指す。

ナイフの扱い方を教えてあげると、アシュリーから習って先ほどまで練習していた成果である。

「サバイバル技能は基本的に軍人だけよ。まあ、教育を受けられるクルスの国民なら、本とかで調べる事も出来るけどね」

「……読書にすら制限付いてんのか」

アシュリーから練習しておけと言われているのは二つ。

一つはトライスティック。

これはナイフで枝や木材を加工する練習で、色々な削り方などを一本にまとめた物だ。

アシュリーが目の前で作ってくれたのをお手本として、俺も何本かやっているのだがこれが結構難しい。

例えば枝を杭として使うために、先端を地面に刺さりやすいよう綺麗に尖らせたり、その反対部分はハンマー等で叩いても割れない様に平たく削って角を取る必要がある。

これとは別に枝と枝を組み合わせる必要がある時——例えば罨を仕掛ける時など——に、噛み合わせる部分が程良く安定するように削ったりなど……とにかくまあ色々あるのだ。で、これが全てすごく難しい。

「戦争中だったし、下級……言い方悪いけど下の人間は前線要員だったからね。仮に捕虜になった時に知られる事は少しでも少なくしなきゃいけないかったから……。検閲済みの娯楽本とかなら自由に読めたけどね」

「理解は出来るけどキツツいなあ、それ」

なんだろう、そういう自由がないっていうのが……こう、何か引つかかってしまう。

「こちらも似た様な物だ。だが、いわゆるサバイバル技術関連は国民全員の必須だったな。今ツールがしている練習も、こちらの子供達は

皆していたな」

「マジでか」

「ああ。火起こしも含めてな」

で、もう一本。こっちはフェザーステイックという……なんだろう。枝の同じ所を何度も何度も薄く削って、削ぎ落さずに……こう、クルクル削ってした奴を何枚も何枚も何枚も作っていく奴。

これ、着火剤として非常に優秀らしい。

正直、未だにゼロからの火起こしは苦手なので、先日の樹液の着火剤みたいに火起こしが楽になる道具は可能な限り集めておきたい。

「こつちじや火なんてスイッチひねるか押すだけで簡単に出るもんだったし、そもそも最近じやあ火も使わない所多いしなあ……」

「火を使わないでつて……どうやって料理していたんだ？」

「色々あつたんだよ。そもそも火が最初から要らない奴とか、火というか熱で料理する奴とか」

詳しく説明しろと言われても出来ないけど。なんかそういう物としか把握していないんだから。

まあ、アシユリーはなんとなく把握してくれたのか「ああ……」と呟いて頷いてくれている。

「駄目だな。火が話題になるとそのまま腹が減る話題になってしまっう」

「まあ、そうよねえ。少しずつ安定したきたけど、美味しい物は食べたらしい」

「そうなることやはり、調味料……せめて塩分は確保したいが」

「現状、動物の血液でどうにか補っているって形だからな……」  
「そうなのだ。」

ちよいと味の濃い野草なんかを調味料代わりに使っていたりするが、胡椒ほどのパンチがない。

野豚の時はそれ自体がかなり臭かったのと、例のタマネギの様な野草の渋みが上手くマッチしていたが、それ以外だと何かが足りない。

もうちよつとこう、慣れ親しんだ味を口にしたいのだが……。

「皆さーん、お茶が沸きましたーっ！ カップ持ってきてくださー

い！」

そうこう話をしていたら、アオイが燃やした石を放り込む火箸を握りしめたまま俺たちを呼んできた。

「……食後の一杯か」

「貴重なビタミン源だし、大切にしなくちゃね」

「おい、止めろアシュリー。そういう言い方されると嗜好品が栄養補給源にしか見えなくなってくる」

## 幕間く工作員く

(一日はおおよそ二四時間。太陽の位置や東西南北の関係は、アタシ達の所とそう変わりはない。あの子の本の内容から見て、おそらくツール君も同じ)

リーダーであるツール達と食事を楽しみ、休憩を終えたアシユリーの腰にベルトの様に巻かれたツタには、石斧やナタがくくりつけられていた。

自身の持ち物であるナイフはない。

おそらく、自分達が持っている凶器の中でもっとも出来のいいソレは、ツールに預けて来ていた。

下手に自分が持つていて、ゲイリーというとりあえずの仲間を無駄に警戒させるのは後々の事を考えると面白くないと判断したのだ。

「……日の出は東、そして沈むのは西。南寄りに登って沈んで行っている」

アシユリーは、自分のこめかみの部分に埋め込まれた小型のサブ電脳に落とし込んでいた緊急用のナビシステム機能が、一部分だけなら作動することを再確認しながら更に森の奥へと——ツール達がいる拠点から一步一步遠ざかっていく。

「なのに、やっぱりどの木も……」

アシユリーは、そつと、無数に生えている木の一本に手を当てる。

「苔コケが両面に付いている」

通常、こういう森では木々を見るだけである程度の方角を察する事が出来る。

太陽が昇る方——つまり南側が乾燥し、光が当たりにくい反対側の根元にはコケが生えていくものだ。

無論全てがそうなるわけではなく、環境によっては前面にびっしり付くことだってある。

だが、これは間違いなく例外である。

本来日の当たりにくい所に生える苔は、当然だが日が当たる所は避

ける。

それこそ、完全に日光が立っている高所に——カラツカラに乾燥するような場所にまで生えてくる事は基本的にあり得ないのだ。

アシユリーは、完全に水分の抜けた苔を爪先で剥がした後、辺りを見回す。

倒木の類はない。

日光の当たり具合が急激に変わる要素はなかったはずだ。

この一帯は他と違い木々の生え方がまばらで、どちらかというところに近い。日当たりも決して悪いものではなく、低地ならばともかくアシユリーの顔の辺りまで苔が生える事など、よほどの湿地でない限りありえない。

(本当になんなのかしらね、この森は)

小さくため息をついて、アシユリーはこれまで来た道を振り返る。

トールが、アオイが、ゲイリーが、……そして自分も一緒になって作ってきた『住処』がある方を。

「……悪かったわね」

まるで辺りに聞かれたくない人がいるように小さくアシユリーは呟き、そしてため息を吐いた後、

「無事に合流できてよかったわ」

アシユリーの斜め後ろ——およそ二、三步ほど離れた場所の空間が歪んだ……様に見えた。

「隊長、御無事で何よりです」

そして気が付いた時には、一人の女が立っていた。

アシユリーと似たような服、そしてアシユリーが持っていた物と同じナイフを腰に下げている。

「貴女達はいつからこちらに？」

「こちら側では三日前に。向こうでは……ランデブー・ポイント<sup>合流地</sup>に着した事を隊長に報告した直後に」

「……そう。ある意味、貴方達の方が先にこつちに来ていた訳ね」

「到着したのは隊長の方が先だったようですが」

「それも敵と一緒によ。まったくもう……まいつちやうわね……ホン

トにここはどこで、どういう現象に巻き込まれたのかしら？」

「ハッ、自分には皆目見当が付きません」

簡素な紐で長い藍色の髪を後ろで適当に束ねている女は、背筋を伸ばしたまま辺りを警戒している。

その様子に一切隙はなく、どこかピリピリとした空気が辺りを覆う。

それを一瞥したアシュリーは苦笑し、

「相変わらず貴女は固いわね。相棒を見習いなさいな」

「アイツは気が抜け過ぎているのだと思いますが……」

対して女の方は、納得いかないというのが表情に分かりやすく現れていた。

「それで、ゲイリーⅡフォンⅡマニユⅡテレースヴィヒⅡグリユーネヴァルトを補足したというのは？」

「ゲイリーでいいでしょ。魔術師のフルネームは長い上に分かりにくいわ」

軽く肩をすくめたアシュリーは、そのまま続ける。

「ええ、今は行動を共にしているわ。しかも、どういう訳か魔法が使えないみたい。……まあ、あの子が継承してきた土地とは完全に別物なのだから仕方ないでしょうけど」

「……ここで殺害しますか？」

「まだ駄目よ」

女の物騒な提案に、アシュリーは顔色一つ変えずにそう返す。

それ自体は、何もおかしくない提案だからだ。

「まず、アタシ達が帰る手段を見つけ出さなくちゃいけないし、それに連中の技術が必要になってくる可能性は捨てられない」

「ですが、当の本人が魔法を使えないのでは……」

「大丈夫よ、アテはある」

「……報告にあった例の少年ですか？」

彼女達は、捕まる可能性のある潜入工員である。

そのために身体の改造などは、解析されても構わない最低限の物しかないが、通信機能はその最低限に含まれていた。



自分が見た物をそのまま仲間に伝えるソレは、文明の気配が欠片も無いこの森の中ではなおさら重要な物になっていた。

離れた場所にいる、誰にも気付かれたくない人間と会話をする時などは特に。

「一応確認しておくけど、貴女や貴女の相棒にも変化は起こっていないのでしょうか？ 持ち物も含めて」

「ハッ。何も」

「そう……じゃあやっぱり、彼だけなのね」

アシュリーは女に顔を向けているが、その片目に映っているのは違うものだ。

かつて、ツールが自分の変化を説明するために見せたスマートフォンというデバイス。

そこに表示されている、なぜか『自分達の言語』で詳しく習得可能なスキルについて説明している文を見つめて——いや、睨んでいた。

「……アシュリー隊長」

「貴女達がここに来たという事は、逆に言えば他の魔術師が来る可能性だって高い。……ツールやアオイにも同じ事が言えるわ」

アシュリーにとって、現在もっとも大事なのは帰る方法を見つけることだ。

そして、その鍵を握っていると思われるのは——この世界に適應する説明不可能な力を手に入れたあの少年だと、そう考えていた。

「仮に魔術師が複数来たとしても、魔法が使えないのならその脅威度は格段に落ちますが……」

「いいえ、それでも野戦能力は彼らの方が上よ。……ゲイリーの運が悪かっただけで、もうどこかに彼らが集まって潜伏している可能性だってある」

自然と共に生きてきた魔術師という存在に対して、アシュリーは油断をしていない。

むしろ、テクノロジーによるバックアップを失った今、更に恐れているといってもよかった。

「ヴィレッタ」

アシユリーの言葉に、ヴィレッタと呼ばれた女は小さく頷く。

「今は付近の偵察を重視してちょうだい。アタシ達の拠点に近づいてはダメ。特にツールという少年には絶対よ？ サーチスキルに万が一引つかかったら面倒な事になるわ」

「ハッ。隊長は？」

「……そうねえ。ツールを押さえた上でゲイリーを確保しなくちゃいけない。魔術師が来ていると仮定して、ツールを連中に取りられる訳には行かないし……ゲイリーも出来る事なら確保したい」

少しの間、アシユリーは自分の親指の爪をカチカチと何度も軽く噛む。

そして――

「隙を見てアクションを起こすわ。不確定要素の多い状況だけど……アタシ達は必ず帰還する」

「前線領の領主と、奇怪な技術を手に入れた少年っていう二つの手土産を持って……ね？」

## 031：学生と剣士の釣り日記

「釣れませんねえ」

「釣れねえなあ」

今日も今日とてそれぞれが仕事に出ている。

まあ、今現在俺たちの仕事といったら八割が食糧集めなのだが……。

アシユリーは単独で周辺の探索に出ている、ゲイリーは今頃湖の所で例のタニシもどきを集めているのだろう。

うん、昨日泥抜き完全に終わったアレを茹でて食ったけどさ……ビビるくらい美味かった。

しつかり茹でると、黄色っぽい——あれだ、オリーブオイルみたいな物が煮え立つお湯の上にポツポツと浮かび始めたのだ。

貝のエキスなのだろうとそのまま野草と一緒にしつかり茹でて食ったら……まず、野草も煮汁も驚くほど美味しくなった。

野草の仄かな苦みと、オイル特有の甘みがマッチしてそれだけで豪華なシチューになったのだ。

そして貝自体も美味かった。

煮沸の熱で死んだ貝は、身を少し出して死んでいるので鋭い枝でほじくり出して一匹一匹食べたのだが、噛めば噛むほど中に残ったエキスが染みだして普通に美味かった。

贅沢を言うなら、クリームスープのチャウダーにして食べたかったという事くらいか。

いや、それにしても本当に美味かった。

今回はお試しという事でとりあえず取った分を泥抜いて食ったが、これならバケツ量産して泥抜き作業を日課にして、三、四日に一回は食事にコイツを食べるようにはしたい。

というか、恐らくゲイリーはそうするつもりなのだろう。

バケツもそうだし、もつと効率的に泥抜きするには水をもつと綺麗にすべきだと言ってペットボトルで作ったろ過装置を木材で再現しようとして色々試していた。

で、俺とアオイが何をしているかと言うと——釣りである。

「やつぱり罨の方がいいのか？」

「いやあ、こうして餌を動かして生きているように見せた方がお魚さんも引つかかってくれますってえ♪ ……………多分」

「おい貴様、最後になんつった」

一応アシュリーからお墨付きをいただいているこの真つ直ぐな釣り針だが、今の所かかる気配はない。

一応捕まえたバツタを、針を完全に隠すように突き刺してエサにしているのだが……………今の所成果ナシ。

「そっちの餌はどうだ？ かじられた痕跡ある？」

「少し前に一度上げてみましたけどさっぱりですう」

俺たちがいるのは、拠点近く——つまりは湖から更に伸びる川だ。

とりあえずここで少し粘って、後々湖の罨を確認した時に湖での釣りに移行する……………うん、そういう計画なのだが。

「ん〜。バツタさんよりアリスさんの方が食いつきが良いと思ったんですけどねえ」

俺がバツタをまんま突き刺しているのに対して、アオイの餌は蟻だ。無論そのままではない。

ちよいと前に拠点近くに仕掛けた虫用の罨だが、どう言う訳かその罨——虫を閉じ込めておく罨の底に蟻が巣を作っていたのだ。

せつかくなので出来る限り捕まえた上で潰してペースト状にして、今こうして魚を捕まえるための餌になっているわけだ。

「やつぱり、上流拠点に仕掛けた漏斗釣り堀を作るべきか……………」

「そうですねえ……………ここ最近はリスさんや豚さんが取れたのでそっちにかなり力を注いでいましたけど、お魚さんも食べたいですねえ」

「だなあ……………畜生、食えそうな奴がいるのは分かっているんだけどな」  
サーチをかける前に逃がしてしまったが、まあ焼けば食えるだろう。

……………いや、ホント魚が食いたい。久々に。

そのために大事な紐も使って、短いとはいえ釣竿作ったんだから

……なあ？

頼むから引つかかってくれよ。

「やらなきやいけない事を色々考えてみちやいるが、ホントにほとんどが飯の事になるんだよなあ……」

「逆に言えば、それだけ考えていけば一応生きていけるんですから良いですよねえ」

「……さすがにそれには異議を唱えたい。ちくしょう、適当なお菓子摘まみながらゲームしてた生活が懐かしすぎる」

「ゲーム？ カードとかですか？」

「いやそう言うのじゃなくて……というか、お前達の所にもそういうのあったのか？」

「たまに大会のような物があるんですよ。まあ、ゲーム大会というよりはイカサマ大会ですが」

「それ楽しいの？」

「基本的に負けた人は骨の髄までしゃぶられる事になりますねえ。いやあ懐かしい」

「それ楽しいの？」

「なんでコイツの話は娯楽の話ですらおぞましい気配が絶えないのだろうか。」

「前に病気にかかった子供の治療を条件に私以外の管理官にギャンブルを挑んできた人もいましたねえ。結局負けて出荷されましたけど——」

「なんでカードゲーム一つでそこまで闇が溢れてんだテメーのとは——！」

何度も繰り返すが、ホントに碌でもねーなテメーの所は！

「で？」

「あん？」

「食糧の調達以外にはどんな事を考えているんですかあ？」

「そうだなあ……」

ふと、隣に座る女の格好を見る。

淡いピンクを主体にした、派手の装飾のない着物——いや、浴衣に

近い服だ。

いやホント、朝とか寒くないかソレ？

「この間の豚の皮がいい感じに丈夫な紐になりそうだから、骨で縫い針作れたらお前さんの服ってか上着を作ろうかと思ってる」

「？ 私のですか？」

「万が一気温が激下がりました時、今のお前さんの格好じゃあ危ないだろう」

「というか、もし今この場に布があって裁縫道具があって、俺に技術を補うスキルがあれば真っ先に作っている。」

ただですら薄っぺらい服なのだ。アシユリー同様スレンダーよりの体系とはいえ……いや、だからこそか？ たまにチラチラして精神衛生上大変よろしくない。

丈が長いとはいえたまに足でるし、胸元とかあぶねーし。

……いや、うん。寒さとかも気にしてるよ？ うん。

「……………ほおう。そうだったんですか気にして下さっていたんですかあ」

「ねえ止めてくれない？ その温かい目止めてくれない？」

ねえアオイ君、君たまにはその勘の鋭さ休めてもいいんだよ？

「まあ、それはさておき……健康や衛生に関して態勢を整えておきたい。帰るにせよ住むにせよ、ここで生きるには迂闊に病気にかかる訳には行かない……って、前にも言った事あるな」

「具体的にはどうするんですかあ？」

「……………どうしよう」

「おい」

アオイが思わずと言った様子で珍しくツツコんでくるが……だつてしようがないじゃない。

「サーチで薬草とかを探しまわる手もあるけど、さすがに効率が悪い。次スキル習得する機会があったら『野草知識』とか落とし込んで薬草取ってみるか……腹痛に効く薬草とかあったら取っておきたいし」

「基本的にツールさんは、帰る手段は後回しなんですわねえ」

「そういうつもりじゃないんだが……」

「ああ、いえ！ 決して悪いわけじゃありませんよ!? むしろ私的には嬉しいくらいなので！」

着物の袖をヒラヒラ振ってそう言うアオイは、本当に何かを否定しているつもりはないようだ。

いつもとおんなじ胡散臭い笑顔だ。……あれ？ それいいのか？

「私は正直、あんまり帰りたくないのだからここでこうして生活しているの好きなんですよねえ」

「お、おう。お前は……まあ、そうだろうけど……」

話を聞く限りでは『悪の帝国』という言葉がまんま当てはまる世界というか国に帰りたいと思う奴はまあいないだろう。

それに、もしアオイがその世界にマッチしている奴だったら、初対面の時点で俺殺されて身ぐるみ剥がされた気がする。

「俺は帰るつもりなんだよ」

「でも、悪くはないとも思っているでしょう?」

「……お前らとの生活は好きだよ」

アオイの言うとおり、悪くはない。

アオイは言動こそぶつ飛んでいるが、慣れてきたおかげか今では話しやすいし、ドライな所はあるが根はいい奴だと思う。

ゲイリーも頼りになる同性だし、アシユリーは悪戯っぽいというか茶目っ気のあるお姉さんって感じか。

なんだかんだで上手くやっている四人での共同生活は楽しいが……。

「けど、これまで住んでた所を捨てるってのもなんか違うだろ」

「でも、離れたがついていたんですよね?」

思わず、目を川面からアオイへと向ける。

アオイはニコニコしたまま、川面にギリギリ餌が浮くように竿を調整しながら言葉を続ける。

「よく分かりませんが、お家……いえ、御家族の事がさうとう苦手なんじゃないですかあ?」

「……………」

ナンデワカルンデスカ。

「トールさん、御自分の世界での事を話す時にお爺様のお話はよくされますけど、お父様やお母様の話はほとんど出てこないの……出てきても子供の頃のお話がほとんどですし」

「お前……ホント……目ざといといふかなんというか」

まさかそこを気付かれるとは思わなかったよ。

別に話す必要ないかと思って何も言わなかったけど。

「まあ、別に詳しく聞こうとは思いませんけど」

「うん、まあ、そうしてくれると助かる」

あんまり楽しくない話をするのもなあ……。緊急性があるわけでもないし。

「それに、そいつを理由に帰る方法の搜索を止めるつもりはないぞ？」  
「ええ、それはそれで問題ありません。結局、帰るか残るかはそのそれぞれの判断なのでえ」

「ああ。ゲイリーやアシユリーも、帰らなきゃいけないーしな」

なにせ片方は領主、片方は……兵士だがそれなりの身分の人っぽいし、やはり自分達の国が気になるだろう。

「あのお二人ですかあ。うくん……お二人とも、本気で帰りたいと思っているんでしょうかね？」

「そりゃあ、帰りたくないって気持ちも多少はあるんじゃないか？」

戦争中なんだし」

現状、多少の小競り合いというか鞆当はあるし、空腹や病気への恐怖等はあるが『殺し合い』はまずないというのは結構なストレスを減らす要因じゃないかと思う。

これは、自分が目に見える危機がテストの成績だったり内申点程度という高校生の視点だからかもしれないが。

「それもそうですが……アシユリーさん……は、ともかくゲイリーさんは無駄に慎重で……でもその割にはお二人とも迂闊ですし」

「迂闊？」

「はい」

川の流れに合わせて餌のついた釣り針を流して、ある程度いったら引いてという事を繰り返しながら、アオイは珍しく、不可解そうな顔



をしている。

「お二人とも、トールさんをあまりに舐め腐っています」

「ねえごめんそれ俺どういう反応すればいいの？」

泣けばいいの？ 泣いていいの？ いいんだよね？

俺あの二人にそんな目で見られてんの？ 嘘だよ？ 嘘だとい

えよコノヤロー。

「そりゃあ、トールさんは格闘技の訓練どころか喧嘩の経験もなさそうなもやしですし、頭が悪い訳でもないのに変な所でズレてて察しが悪くてカモにされやすい性質ですけど」

「本気で泣きわめくぞ貴様あ！」

なんなの？ なんなの?! いきなりなんなの!?

そんなに人の欠点あげつらつて楽しいですかコンチクショウ！

「でも、頭空っぽにして付き合える人なんですよねえ……」

「でももの使い方がおかしい。最後のだってお前それ褒め言葉じゃねえだろうが、おい」

なんでこんな散々に俺が貶されてるのか、ちよつと三〇文字以内で答えてくれませんかねアオイさんや。

「ん〜、やっぱり伝わりませんか。すつごく褒めてるつもりなんですけどねえ」

俺の内心を察していないのかスルーしているのか、アオイはいつもと同じくアホゲを揺らせながら飄々としている。

「私、ゲイリーさんやアシュリーさんは別に敵になってもいいと思っ  
ていますけど、トールさんだけは敵に回したくないんですよねえ。貴  
方は特別なんです」

だから貴様は物騒なワードから離れよう。離れてくださいホント  
に。

うかつに二人を刺激してお前らで大決戦とかなったら間に挟まれ  
て黒ひげみたいになるのは俺だからな？

に、しても……俺が特別か。

「それは……仲間としての信頼とか、か？」

「いやそんな犬の餌以下の物なんてどうでもいいんですけど」  
「てめえっ！」

ちよつとぼつかし期待した俺のピュアな気持ちを返せ！

「どつちかと言うと……恐怖ですかねえ」

「はあ？」

「今いる四人の中で一番危ないのは私だつていうのは自覚あるんですけどお……」

「自覚あるんなら直さんかい」

反射的に突っ込みを入れるが、やはりコイツは俺の言葉を華麗にスルーしたままニコニコ度数100%の笑顔で、

「四人の中で一番狂ってる人は……きつと貴方ですよ、ツールさん」

なんてとんでもねーことを断言しやがった。

訴訟。

脳内の裁判官が、木槌を鳴らして俺の無罪を宣言する姿をなんとなく想像していると、手に握った竿に引つ張られる感覚を覚える。

「——っ、かかった！」

「ごつちもです！」

躊躇わずに思いつき引つ張り上げる。

すると、餌と針だけなら絶対に上がらない大きな水音と共に、宙ぶらりんになりながらも元気に跳ねる二尾の魚の姿が目に入る。

今日の夕食は期待できそうだ。

## 032：湯船の気持ちよさは反則レベル

「な、ちゃんと釣れただろう?」

「ああ、スキルで表示されても半信半疑だったけど……まさか本当に釣れるとは思わなかった。それも三匹も」

「罾の方にも一匹かかってましたし、成果としては上々ですねえ♪」

思わぬ戦果を挙げ、その後罾の方でも獲物を捕らえた俺たちは、早速帰って魚を搔つ捌く作業に入った。

完全に俺の知識にない未知の領域だったが、ゲイリーとアオイが分かりやすく教えてくれた。

危なくないようにと一番切れ味の鋭いアシユリーのナイフを使わせてくれたし、ホントにありがとう。

特にゲイリー。わざわざ後ろに回って、文字通り手を取って教えてくれたおかげで分かり易かった。次からは俺も自力で作業を終わらせられるように頑張るわ。

まあ、今はもつと大事な作業があるが――

「で、近いうちに雨が降るってマジ?」

「多分、な。俺も知らない野草だが、今朝方までは確かに開いていた花が閉じている。それも全部だ。こういうのは大抵雨が来る証拠と見ていいだろう」

「ええ、多分間違いないと思いますよオ。言われるまで気付きませんでした。確かに湿気が増えている気がしますう」

で、今自分達が何をしているかと言うと、念のためのそれぞれのシエルターの上の屋根作りだ。

「とりあえずお魚さんは内臓も骨も取ってから網に乗せて遠火でチリチリ焼いていますので、もうちよつと様子見ましょう♪ ちらちら様子は見ていますのでえ♪」

「おう、頼むわ」

もつとがつつちり落ち葉を積んだりして壁を厚くすれば良いのだろうが、現状余りに厚くし過ぎると寝ている間に暑くて無駄に汗をかいてしまいかねないのだ。

水分は補給できるが、一番不安な塩分を無駄に失う事を恐れている。

……加えて、落ち葉が腐ってもそれはそれで嫌だし。本来なら、こういう形のシエルターは冬向けなのだから。

「アシユリーは大丈夫かな……。迷うようなことはないと思うけど、雨に打たれたりして……」

「いや、ツールが気にする様な事は多分ないだろう。以前チラツと聞いたが、急激な気温の変化にもアイツの服は対応できるらしい」

「……すごい技術なんだな、アレ」  
「便利ですよねえ。予備とかあれば一着欲しいですう」

いや、それはそれで……。あれ、身体のラインとか丸見えだから正直心の健康に悪い。

……おいアオイ。なんだその目線は。

「まあ、ちやつちやか屋根を付けよう。前に焚火の上に作った奴みたいに高く大きく作る必要がないから楽ちんや楽だ。俺が水を弾きそうな葉を持つてくるから、アオイとゲイリーは支柱やフレーム作りを頼む」



「……アシユリーにナイフを私用で使わせてくれって言ったら通るかなあ……」

「唐突にどうしたんだ、ツール」

頑丈かつ水をはじくデカイ葉のなっている木には探索の時に目星を付けていたのだ、アシユリーのナイフを使って回収してきた。

切れ味がやはり鋭い。というか鋭すぎてちよつとビビった。迂闊に扱ったら自分の指をスパッとやってしまいそうな位よく切れる。

「ああ、今一番の悩みがあつて……そういやゲイリーは全然そんなの  
ないな」

「? 何の話だ?」

材料は十分以上に確保したのでアオイも呼んで全部調理場の屋根  
の下に置いて、今は屋根のフレームの下の方から順番に葉を一枚一枚  
設置している。

葉の根元部分の頑丈な茎をへし折って引っかける部分にして、横フ  
レームにしている棒に次々引っかけていくという非常に地味な作業  
だ。

「ヒゲだよ、ヒゲ」

「……………あ」

たまにいますよね、すつごくヒゲが薄い男。

正直滅茶苦茶羨ましい。自分がヒゲの似合う男なら全然いいんだ  
けどそういうわけじゃないからなあ。

髭の心配がない人と、滅茶苦茶お洒落に髭をファッションの一部に  
出来る人にはマジで憧れる。

「いいよなあ、ゲイリーは……ずっと剃ってなくてソレだし、そういう  
悩みとゼロだろう? こっちはちよつと放置しておくともな  
くなるから結構注意してたんだけど……」

一応たまにアオイの刀を借りて、持ちやすい所に適当な葉っぱ巻い  
てカミソリ代わりにしてただけどうしても限界があつて、剃り残  
し……というか、微妙に長くのびた所と短く伸びた所がそれぞれまば  
らになっている。

もういつそピンセット作つて全部抜くか? いや、それでも結局は  
また生えてくるしなあ。

「ああ……ええと……いや、ボ……俺もそれなりに悩んでいるんだ。  
その……ほら」

「??」

適当に話題を振ってみたが、いつになくゲイリーの歯切れが悪い。  
どったのさ。

アオイがいれば適当に場をかき乱して俺が突っ込みを入れて場の

空気をどうにかできるのだが、魚が程良く焼けたのを確認したアオイは、火から遠い所に今は川の方に水を汲みに行っている。

「ああ、そういや俺の世界でも髭が大人の証みたいな文化の所もあるって聞いた事あったような……ゲイリーの所もそうだったのか？」

「あ、ああ、そうなんだよ……」

「うわあ、それだと体毛薄いと大変だなあ」

まあ、ゲイリーの顔立ちで髭はちよつと似合わないしなあ。

ちよろつと顎先とか口の上に生やして整えるくらいならば案外合うかもしれないが。

「刀借りた時は一歩間違えば自分を斬りそうだったからさ、アシユリーのナイフなら片手サイズだからまあ、なんとかなりそうなんだよなあ」

「……その、よく分からないんだが……髭ってそんなに不快なのか？」  
「ああ、もうちよつと柔らかい奴ならそうでもなかったんだろけど、微妙に固いからさ。ちよつと顔触った時にカリカリすんのが鬱陶しくてな」

パキツ、パキツと茎をへし折り、引っかける部分を作って行く。

樹液でかなり手が汚れている。後で手を洗わなきゃ……ついでに水浴びもおかねーと。

「顔もそうだけど、身体を洗うのにお湯使いたいな……」

「それに関しては俺も同感だが……。大量の湯を沸かすのには現状どうしても、な……」

「バケツもう一個あれば……いやあ、沸かすために結構な数の石焼いて入れてくのもな」

「身体を洗うためなら煮沸させる必要は……ああ、念のためにかい？」  
「こそ」

やっぱり身体を思いつきり洗いたいという欲求は互いに強いのだろう。

特に、ある程度食糧面の問題が解決されつつある現状では。

「もういつその事、この近くに温泉湧いてこないかな……サーチスキルで頑張れば見つけられないこともない気がする」

「温泉？」

「そつちにはなかった？ 地下のマグマで暖められた湧水。ウチの国じゃあ、名物になってる所があったんだけど」

「へえ。俺の領地にはなかったなあ……」

「というか、そつちじゃあお風呂ってどうなってるのさ？ やっぱりキッチンとお湯に浸かってた？」

「いや、基本的には蒸し風呂だった。蒸気で満たした部屋の中で、汗をしつかり流しながら布で体を拭って垢を落として、その後ぬるま湯や水を浴びてもう一度布で身体を拭いておしまいだった」

「うわあ。シャワーすらないとか自分には辛すぎる」

「ない事もないが……バケツの底に穴を開けて、付添いの人間が台に登ってお湯を継ぎ足していくという——」

「メンドクさ？」

風呂の時間というのは一人でのんびりスマホで動画やラジオ聞きながら、夏ならそれにキンキンに冷やしたコーラ持ちこんで暑い暑い言いながらラップ飲みする癒しの時間であるべきだろうが。

「逆に君の所の方が凄と思う。一般階級でも身体が浸かる程のお湯を沸かしていたのだろう？」

「それに驚かれるとは……」

「俺たちの生活だと、まず湯を沸かすのにそれなりに気を配らないと悪いから……特に冬の時期は」

ああ、そうか。ゲイリーの所は自然を可能な限り保護しながらの生活って事は、基本的に燃料の無駄遣いはアウトになるわけか。

アシユリーの所は普通にガスとか石油とか使ってるさうだけだ。

(なんかもう、ちょっとだけでいいからお湯を浴びたい)

こう、思った以上に身体がべた付いているのが分かる。

水浴びに加えて、お湯で濡らした布で身体を拭く事で最低限の体裁は保っているが、やはり限界がある。

服も着替えなんてある訳ないから、Yシャツはまだ綺麗なウチに脱いでもう保管してある。今はその下の薄いシャツ一枚だ。

「風呂作れねーかな……」

「どうやってだ」

「こう、湖から水引けるように穴掘って、ため池みたいな作って……そこに焼けた石を入れる場所仕切って——」

「湖からここに水を引いてくるのは不可能だろう。ここは湖よりは高地だぞ?」

「ですよー。じゃあ上流の方から真っ直ぐに」

「その作業だけで一月近くを使ってしまおうのが目に見えているな」

「ですよー」

「というか、かなり頑張らないと風呂と言えるレベルにまでお湯の温度を高めるのはかなり苦労しそうなんだが……」

「分かってる。分かってますう」

「アオイの口調が移ってきてるぞ」

ちよつとくらい夢を見たかつたんだよちくしょう。

屋根作りの作業はもう三人分は終わっている。後はもう一つ作れば組み立てるだけだ。

まだ時間はあるので、もう一つくらい作業は出来そうなのだが……。

「決めた。風呂作る」

「……どうやってだ?」

「すいませんゲイリーパイセン、そのジト目でこっち見るの止めてもらえませんか。」

男にしちや美人なんで妙にゾクゾクするっす。

「まずは適当な木を探そう。ゲイリー、悪いけど屋根の組み立て作業始めておいて!」

「あ、オイ!」

畜生、こうなったら絶対作ってやる。

とりあえずちよつと良い流木を……最低でも二つは見つけよう。

肩まで浸かれるのが無理だというなら、もつとサイズを小さくすればいいわけだ。

(足湯くらいならどうにかなるだろ)



### 033：チャレンジ☆素焼き！

そういえば、こつち側に来てから雨に出くわすのはこれでまだ二回目だったな。

ふとそんな事を思い出しながら、俺はアオイ、ゲイリーの二人と共に、屋根を付けた中央の焚き火——実質調理場か——を囲んでいた。

いや。正確には並んで、か

辺りには雨が地面を打つ音と、屋根の葉っぱがそれらを弾く音が響いている。

ゲイリー達の予想どおり、日が沈んで完全に真っ暗になると同時にそこそこ強い雨が降ってきた。

正直屋根を付ける必要があったかどうか自信がないが、

「足だけ湯に浸ける事にどれほどの意味があるかと思っていたが……これは……悪くないな」

結局流木一本しか加工できなかったが、考えていた物はどうにか一つだけ完成させることができた。

他の煮沸用の物同様削ったものだが、今回はそれほど深くは削っていない。

水を多く貯めるより、裸足を入れた時に不快感を覚えたり怪我したりしないよう、石で延々となめらかなになるまで削った甲斐があるというものだ。

ただの器ならひたすら削るだけだったが、今回の一番の目標は違和感なく足を置けること。

よって細部には滅茶苦茶こだわらせてもらった。

今回は沸騰させる必要はないので、一番危ないのは焼いた石を水に入れた時の水の跳ね上がり温度差で石が破裂する危険性くらいか。

一応、温度を保つ意味で真ん中位にくぼみを作って、穴を開けた樹皮で仕分けた石置き場があるが、ここに足を近づけなければ問題ない。お湯が熱いと思ったら火箸で取り除けばいいし。

で、暗くなりつつある所を急いで川まで水を汲みに行つて石を焼いて……まあ、今に至る訳ではある。

「にしても、わかってはいるつもりでしたけど大分汚れていたんですねえ」

おそらくここにいる全員が、最低でも二日に一度は川の中に入って身体をしっかりと洗っているのだが、それでもやはり限界がある。

全員それは分かっているのだろう。

足限定だが、しっかりと湯に浸けて布——のかわりに紐を束ねた物で拭うのを繰り返したおかげで、かなり垢が取れている。

肌の色がしっかりと見えるようになった足を見て、アオイが深いため息と共にそんな事を言う。

「トールさん、やっぱりお風呂って無理でしょうかあ？」

「ゲイリーの所みたいなのバケツ方式ならできなくもない……だろうけど」

「いや、あれはキッチンとした個室を用意しないと……すぐさま冷えるぞ？」

「ありやま」

それはちよつとなあ。

今はまだ一応温かいけど……。

「というか、湯を被って身体を洗えば、今よりはマシになるんだ。むしろ、大量の湯を沸かす方法を考える必要がある」

「……加えて、安定して水を貯めておける容器がいるなあ」

今やっている焼いた石の投入では非常に手間がかかるし、それに危ない。

事前にゲイリーが教えてくれたおかげで気を付けているが、うかつに石を熱すると物によっては爆発するらしい。

一応ゲイリーから熱したら駄目な石の特徴を聞いて、そういうのは避けるようにしているし燃やす時も気を付けているが……。

容器の方も、正直バケツは作るのに滅茶苦茶時間がかかる。

まずちようどいい木材を見つけるのが難しいし、その加工に死ぬほど時間がかかる。

なるだけ柔らかい木材があればいいのだが、それはそれで強度に問題が出てくる。

「となるとあれか？ 金属の何かを探す必要がある？」

頭によぎるのはアシユリーのサバイバルパックだ。

話によると手の平より少し大きめの金属製で、いぎという時は小型のフライパンとしても使えるとか。

容量はともかく、ちよつと湯を沸かすには結構良いのではないか。

「いや、さすがにそれは難しいだろう……他に生活の気配があるならまだしも、現状では徒労に過ぎない」

まあ、だよなあ。アシユリーのサバイバルパック一つのために全労力を割く訳にも行かないし、それなら罌増やした方がよっぽど役に立つ。

「まあ、ひよつとしたらアシユリーが何らかの発見をしているかもしれないが……期待は出来ないだろう」

「となると他の方法だけど……なんかある？」

「……あまりスキルに頼るのもどうかと思うんだが……トール」  
「ん？」

「君のスキルで、粘土を探し当てる事は出来るかい？」

粘土？ なんぞ？

「ああ、焼き物の器ですかあ」

それに対していち早くアオイが反応する。ああそうか、そういう物もあつたか。

「とりあえずな。それで器を作る事が出来れば、今まで以上に生活の幅が広がると俺は思う」

「なるほど」

悪い話じゃない。というか、土器の存在を全く思いつかなかった。

土器というか、いわゆる焼き物って単純に器ってイメージが強くて火にかけるイメージがなかった。

……ああ、でも土鍋って一応そうか？

「ちなみに、粘土を集めてからどうやればいいんですかあ？」

アオイは当然と言える質問をゲイリーに投げかける。

まあ、自然の中に住んでたゲイリーならやりかたも当然――

「……………」

おいこつち見ろやゴルア。

「……ゲイリー？」

「し、仕方ないだろう！ 俺は一応は貴族だったんだ、職人ではない！」

「うん、それは分かっている。分かっているんだが、だったらなおさらどうして土器を思いついたんだ」

「いや……以前……父上の視察に付いて行った時に器をかたどった粘土を窯の中に入れていたのを見たから……出来るかと思って」

窯。

「……つまり、なにせよ密封した空間で焼く必要もあるのか」

土を盛ってそれっぽいを作る——いや、穴掘ってその上で火を焚いた方が早いかな？

んんん。ピッタリ当てはまるイメージが湧かない。

「い、言っておいてなんだが、なにかのヒントにはなっただろうか？」

「ん？ ああ、大丈夫大丈夫。なんとなくの工程は分かったし多分スキルも反応してくれるだろう」

実際に粘土を見つけて観察すれば、恐らくスキルの方が発動してくれるだろう。作ろうとしているのは明らかかな道具だし。

だからそんな不安そうな顔をしなさんなってゲイリー。

むしろ普段君にどれだけ助けてもらっているか。アオイやアシユリーもそうだけど。

(しかし粘土って……)

正直、工作用の油粘土や紙粘土くらいしか思いつかない。

小学校の時に理科の授業で自然の粘土を実際に触った様な記憶はおぼろげにあるが、どういう感触や見た目だったかはもちろんどういふ所にあるかすら定かではない。

うん、なんかすんげー柔らかくてちよつとこねたら粘りが出る……んじやないかなあ、多分。

そもそもどういふところで取れるんだっけ？ 崖みたいな地層丸出しの所だっけ？ 河原だっけ？

(というか、こころへんの土じゃあ出来ないのかね)

なんとなく、今日は一度しか使っていなかったサーチスキルを作動させる。

対象というか、注視するのは地面の土や転がっている石だ。

一応念のために、ここらの土を意識してサーチしてみる事でどういう風に作用するのか試しに……おろ？

「……ゲイリー」

「なんだ？」

「わざわざ探さなくてもどうにかなるかもしれない」

「……なんだと？」



そして翌日。

ここ最近無駄に早寝早起きになった俺は、ほぼ夜明けと共に目を覚ます。雨はどうやら上がったようだ。

結構早く上がったのだろう。地面は多少ぬかるんでいるが、思ったほどではない。

雨水を貯めるために開いて逆さに放置していた傘の中身を流木器に注いで、とりあえず火を大きくして昨晚軽く燻した魚を焼いて食って、さっそく今日の仕事に取りかかっていた。

「おい、ツール。本当にこれで出来るのか？」

「……多分？」

スキル先生に頼りっきりの現状ではそれしか言えない。

今俺が何をやっているのか、説明しろと言われたら滅茶苦茶簡単だ。

ちよつと深めに掘った穴から、色が変わった赤い土を掘り出して泥遊びしている。

……いや、ホントにこうとしか言えない。

「まあまあ♪ トールさんも半信半疑とはいえ、スキルが発動しているということですし信じましょう」

「いや、その、決して疑っているわけじゃないんだが」

そんなお茶濁さなくていいってゲイリー。俺自身がこれで良いのか凄く不安なんだから。

試しにとスキルでサーチかけたら、俺たちの真下から都合よく粘土が出てくるなんて怪しい所の話ではない。

同時に完成できるのかどうかも正直不安で不安で仕方ない。

「その、ゲイリー……アオイもすまん、かなりの汚れ仕事をさせてしまっただけ」

粘土を掘り起こす時に出た普通の土を、俺と同じように水で練っている二人に俺は頭を下げる。

アオイはツタを使って袖が汚れないように上手い事縛り上げて——なんて言うんだっけ、たすき掛け？ で、ゲイリーも腕まくりして手首の辺りまでを泥で汚している。

「いや、構わん。というか、こっちの仕事の方がまだ俺にも理解できる」

「この土で『かまど』が作れるっていうのも驚きですけどねえ。かまどつてもつとこう……レンガとかしつくいのでガツチリ作っている物だと思っていましたあ」

同じく。

前にピザ窯ならそれを売りにしている店に言った時に見た事あるが、完全に煉瓦製だったからそういう物だと思っていた。

………。

あれ、ひよつとして窯と釜戸って違う？

まあいいや。

「要するに炎の熱を一方に集め、かつ風や冷たい外気から守ればいい訳だからな。言われてみれば村落などはこんな感じだった気がする」

「へー」

「……トール、仕事を指示した君がそれでどうする？」

「いや、俺にとつてもかなり未知の領域なんでちよつと……」

昨晚、足湯を満喫しながら試しにとサーチを作動させると、詳しい地下の様子が判明したのだ。

いや、正しくは足の下にある土の特色というべきか。

今まで俺たちが踏みまくっていた普通の土の下に、粘土がある事もそれで判明したのだ。

「問題は受け口ですねえ。ツールさん、一応確認しますけど、そっちの赤い粘土じゃなくても大丈夫なんですね？」

「ああ、むしろそっちの方が都合がいい……と、思う。スキルもそう言つて……書いてるし」

水が多すぎないように調整しながら練った泥を、アオイは今適当な石の上に更に葉っぱを敷き、その上で練りまわしている。

今二人が作るうとしてるのは釜戸だ。基本的には泥を中空洞の煙突みたいな形に固めてその下で火を起こして上の口の部分で調理したりする物だが、今回必要なのは火力が集まった『中』で焼く釜戸。

つまり、焼く対象を火力が密集するちようどいい所に乗せるための受け口、受け皿が必要だった。

「ああ、大丈夫。とりあえずはそれで頼む！」

「了解しましたあ♪」

川から拾つて来た平らな石。その上に大きめの葉を置いたさらにその上に、アオイは泥を積んでいく。

葉の上に積まれた泥をアオイはこねながら大きな塊にし、そして少しずつ形を整えていく。

やや分厚めの——厚さおよそ4、5センチ程の丸い板の形に整え、そこに適当に穴を開けていく。

「んー……水が少なすぎましたかね？」

「いや、多分大丈夫だ。とりあえずそれをベースにかまどを進めておいてくれ、こつちもそろそろ形作りに入る」

敷いていた葉っぱごと適当に開けた場所にそれを置いて、受け皿になるその大きさに合わせて目印の石を周囲に敷く。

それから受け皿と葉を一旦引き抜き、そこから少しずつ円を絞る様

に——中が空洞の富士山型と言えればいいのだろうか？ 泥で固め、土台の石を積みまた泥で固めを繰り返す。

ちなみに受け皿となる泥の塊は、一度乾燥させるために近くに放置だ。

で、俺も似たような作業をしている。

スキルの提示通り少ーしずつ水を加えて、ちょうどいい固さになった泥——いや、粘土を使つてまずは底を作る。

薄すぎると火に入れた時に割れてしまうので要注意だ。

適度な厚さを意識して手の平二つ分くらいの大きさの円を作り、その後同じ粘土を手で擦り合わせて太く長いひも状にして、その円のふちに乗せていく。

一本、二本、三本と重ねるように乗せて、少し高くなったら形を崩さないよう丁寧な指でこすり、ただの紐の重なりを薄い壁にしている。ようするに壺というか瓶というか、そういう物の側面だ。

ムラが出ないように均等になる様に紐を作り、乗せて、境目を潰していく。

(……ロクロが欲しい……あのクルクル廻る奴)

一応すぐ台代わりに使っている石を回転させれば方向は変えられるが、今一番欲しいのは綺麗に回転させられる道具だ。

そういうのがあれば、そもそも底を作る時などもっと楽だったろうし、今やってる側面作りももっと綺麗に出来る自信があった。

(真っ直ぐで軽い板とか石を見つけたらなんとか作ってみよう)

多分、スキルが補助してくれるだろうが基本的には自分の手先が物を言うのだ。

罨作りもそうだ。アレからスキルを使つて何度か自分の手で作つても見たが、怪我した事は一度や二度ではない。

最近ではかすり傷程度で、あの時みたいに血が流れ出るような傷はもうないが。

「あ、かまど造りはそこまで急ぐ必要ねーから。コイツも乾燥させてからじゃないと意味ねーし」

「あ、それじゃあ雨避けも兼ねて乾燥させる場所を作った方がよさ



そうですねえ」

「なら、かまど造りは俺が続けておこう。アオイはそつちを頼んでいいか?」

「了解しましたあ♪」

「あ、試作ってか試行錯誤を兼ねていくつか作るつもりだから、ちよいと広めというか多めに頼む」

俺の言葉にアオイは「はくい♪」と手を振って応える。

(さて、これだけ大規模な仕事をさせる事になったんだし、上手くいつてくれると良いんだが……)

ちよつとしたバケツサイズにまで大きくなった、今はまだ泥の塊を扱いながら、これが失敗した時の事を考えて不安な気持ちになる。

(この後毘の様子も見に行かなきゃいけないし、今日中にアシユリーが戻ってこなかったら一応あつちの方向に探しに行かなきゃいけないし……)

やる事が多すぎる。人手が足りない。けど増えると飯の問題が出てくる。

ホントどうしろと……泣ける。

幕間くまだ見ぬ二人く

「なるほどお、あれが目標の男の子ツスカ。……無精ヒゲが個人的にマイナスですけど、それでも結構いい男ツスね。うんうん、超ボクの好みツスよ」

一人の少女が、やや高い木の枝に寝そべり、双眼鏡を目に押し当てている。

セミロングの金髪をオリーブ<sup>迷</sup>ドラ<sup>彩</sup>ブ<sup>色</sup>の軍帽の中に押し込めた少女は、小柄な身体にしては豊かな身体を、自分の体を支えている枝に押し付けながらつぶやいていた。

「おい、一応近づくなという命令だ。気をつけろ」

「まーたまたあ、そんな命令聞くつもりがないくせにい♪」

藍色の髪を後ろで束ねた女——ヴィレッタは、その木の根元に背中を預けて腕を組んでいる。

「で、隊長様はどうするつもりなんスカね？」

「あの少年の意識をこちら側に傾かせた上でグリーユーネヴァルト領領主、ゲイリーを確保するつもりらしい」

「あのいい感じの男の子……ツール君でしたっけ？　はともかくゲイリーなんて放っておいて良いんじゃないツスカねえ。魔法が使えないのならば尚更」

「……仲間が何人もアイツやアイツの部下に殺されているのだぞ」

「僕の親しい人が殺されたわけじゃないで別にいいツス」

「貴様……っ」

軽薄な調子の少女に思わず激昂しかけるヴィレッタだが、深呼吸をして気持ちを落ちつける。

「まあいい。しかし、計画が大幅に狂ったな」

「ツスねえ」

双眼鏡を懐にしまい込んだ少女は、スタツと身軽に地面に飛び降り、「んーっ！」と伸びをする。

「陸軍情報局第七課所属、アシユリーⅡエア特務曹長。近年本土で多発する内乱を誘発させていると見られる地下組織との関与の疑いア

り。今回の任務が終わり次第拘束、尋問せよということだったが……」

「実質アレですよ。後で公開するそれらしい証拠でつち上げた上で隊長を暗殺しろって事ツスよねえ」

「……………通達された極秘任務はあくまで武装解除と拘束だ。曖昧な境界の上に立つ我らだが、軍人が政治に深入りして良い事はない」

「魔術師がよく使う毒薬を用意しておいてツスカ？」

「……………敵との交戦で倒れることは、軍人には珍しくない。私達のような存在なら、なおさらな」

「そツスねえ」

表情を一切変えずに淡々とそういうヴィレッタに対して、少女の方をニコニコと笑顔で口を開く。

「いやあ、でもこのままだと、どっちにせよツール君とは仲良くできるツスよね？ いやあいいなあ。報告聞く限り偉そうにグチグチ言うタイプじゃないっぽい所か超優しそうだし……………もうさっさと隊長暗殺して知らない顔であつちのグループに潜り込まないツスカ？」

「私情よりも任務を優先しろ、馬鹿者」

「ぶう……………絶対そつちの方がシンプル且つ実利がてんこ盛りなのに」

頬をリスのように膨らませる少女はしばらくそのまま膨れているが、ヴィレッタが延々無視する様子を察すると「ぷすーっ」と空気を吐き出す。

「ま、なんにせよ帰る方法見つけないところのままじゃあ暗殺とかその後の展望とか以前に、生活というか生死の問題が関わって来るツスからねえ。口に来るものなんかは基本的に隊長経由でツール君がスキルとやらで判別した物が入ってくるツスけど」

「なんですでも対象の男子と距離が近いんだ……………」

「だって、実質ボク達の命を繋いでくれているのってツール君じゃないツスカ。いやまあ可食テストして一個一個何が食べられるのか試すって方法もありましたけど、そういうった手間を省いてくれたのはツール君ツスよ？」

「……いや、感謝する理由にはなっても距離が近づく理由にはならんだろう」

「かーっ！ これだから頭の固いガチガチの理屈系は」

「おいテツサ、お前よほどぶん殴りたいようだな」

「お願いするツス！」

「……お願いするのかわ？」

両手をバツと広げて「さあ来いツス！」と待ち構える少女——テツサの無駄にキラキラした笑みに、ヴィレッタは恐れおののくように後ずさる。いや、ようにではなく実際に恐れたのかもしれない。

理解不能な変態はいつだって最強なのだから。

「相変わらず貴様は読めん」

「いやあ、完全に人を理解できちゃったならその人気持ち悪いツスよ。落ちてても拾いたくないレベルで」

「人は落ちてるものじゃないだろう」

「ヴィレッタさんは相変わらずネタにもマジ返しばかりツスね……」

テツサはどこからか取り出した桃のような果実に被りついてモグモグしはじめる。

「お前、それどこで取ったんだ？」

「ボクが昇ってた木ツスよ。トール君がサーチ済みの食べられる果実だって分かったたので……あ、ヴィレッタさんの分も取ってきたツスよ」

「……いただく」

なににせよ、現状の選択肢は二つ。

アシユリー||エアの命令のままに動くか、否か。

二人の女はしばし、果実の甘味で精神を回復させる作業に没頭し、「なににせよ、今隊長を殺すのはやはり不味い。どういう流れになるが分からないが、スムーズに向こう側と接触した上で事故にあってもらう方がまだいい」

「……ふう、まあそうツスよねえ。帰る道筋見つけるまでは隊長の存在は色々と利用できそうですし」

ヴィレッタは、頑丈かつ透明な容器を揺らして中のトロつとした液

体を確認する。敵である魔術師達が矢に塗ったりして使う——その毒薬を。

「ああ、そうだな」

「ヴィレッタさんはこれからどうするツスカ？」

「とりあえずのベースキャンプを作る。少年達はどうかやら下流の方を気にしているようだし上流側の、それも対岸側に作ればまず発見はされまい」

「隊長にも見つかったちやダメツスよ？ 『ボク達』のベースなんスから」

「分かっている」

そうしてヴィレッタは——暗躍の火種になり得る女は、一度も動かなかった表情を一瞬だけ緩めると、木々が生い茂る森の中へと消えて行った。

「いやまあ、そう簡単に隊長に死なれるとボクも困るんスけどねえ」

「ちようどいい身代わり人形が出来たんだから、キチンと色々おっ被さって皆の前で死んでくれないと……ねえ？」

## 034：やめとけ、それ落とし穴だから

「ただいまー……ようやく帰って来たと思っただら、また何か増えてるわね……なに、かまどかしら？」

「おう、色々出来る事を増やすためにな」

アシュリーが帰って来たのは、素焼きの整形を行った翌日。

そろそろ夜の飯の事を考えようかという所だった。

今現在、形だけ作った水瓶みずがめは日光が当たらないようにアオイが組み立てた保管庫で、とりあえず三つが絶賛乾燥中である。

うん、そうなんだ。

実質焼きに入るのにはちよつと時間がかかりそうなんだ。

理想は一月みたいなんだけど、そのうち一つは一週間で一度やってみようと思う。

乾燥期間に関してはスキルもすっごい曖昧で『一週間から一月』なんて書き方してるから、ちよいちよい試してみるしかない。

「それじゃあ今貴方が作っているのは予備？」

「予備っていうか……まあ、そうだな。スキルが色々教えてくれて補正はかかっているんだろうけど、どうやっても成功率三割を超える表示が出なくてさ。うち二つは成功率一割超えるか超えないかくらいで……」

「……大丈夫なの？」

「わっかんね。作製スキルが成長するか、なんか特化した新しいスキルでも生えてくれればもうちよい安心できるんだけど——」

実は、それこそ三つめの水瓶を……なんというか、素体？ を作り上げた後に、またもやスマホが震えだしたのだ。

今回は今までと違い、新しいスキルこそなかったが二つまでスキルを覚えられるということだ。

一応昨晚アオイとゲイリーの要望などは聞いていたが、アオイは相も変わらず魔法の習得を全力プッシュし、ゲイリーはもし習得するなら『毒耐性』とかいいんじゃないかと提案しているが……なんにせよアシュリーの意見も待ってから判断するという形だ。

二人が戻って来てから食事の準備を終えてくらいから、それぞれの意見を交えながら方向性を決める形になるだろう。

「そうだ、そっちはどうだった？」

「向こう側……アタシの中の電子コンパスだと南だけど、そっちに川をもう一つ発見したら。流れの向きはこっちの川とさほど変わらな  
いから、ひよつとしたらもつと下流で繋がるかもしれないわね」

そういつてアシュリーはメモ帳を俺に渡して来る。

どうやらほぼ完全に日本語を理解したようで、大まかな地形を示した地図には、少々ぎこちないが漢字を交えた簡素な説明が追加されている。

「ここから真つ直ぐ進んで……そうね、ホントに丸一日歩いたくらい  
の所には大きな上り坂が東側に向かつてあつて、そこが岩場になつて  
いるわ。で、その脇を抜けて更に半日南に進めば、さつき言った川に  
辿りつくつてわけよ」

「川でなにか発見しなかつたか？」

そう聞くと、アシュリーは非常に苦々しい顔になつて、

「ダムというか、建造物のような物があつたわ」

「人の痕跡!？」

「いいえ……小動物だつたわ」

ゲイリー絡みで最初の頃のピリピリしていた時を除けば、いつも  
ニツコリ笑みを浮かべているアシュリーにしては珍しい顔をしてい  
る。

「流木や木の枝を積んで、川……そうそう、それなりに広い川なだけ  
ど、その真ん中に住処を作っていたのよ。イタチみたいな動物で、捕  
まえられると思つて石を頭に投げつけて確保した後、一応スケッチして  
から焼いて食べたんだけど……」

あ。

うん、なんとなく——なんとなく分かつた。

様子を聞く限り、俺の世界のビーバーかそれに近い生き物なんだろ  
うが……。

「美味しく……なかつた？」

「酷い臭いと味だったわ。タンパク質を補給する必要があったから無理矢理食べたけど、二度と口にしたくないわね」

そういつてアシユリーは、腰のツタに引っかけていた毛皮を俺に渡してきた。

「そんなに大きくないからそのまま焼こうかと思ったけど、毛皮なんていつ何に使うか分からないから向こうでなめして来たわ。石の尖った所で無理矢理切ったからちよつと杜撰だけど……まあ好きに使ってちょうだい」

「アシユリー、本当にありがとう。それと、お疲れ様」

いやホントにマジでありがとう！

こつから先の事を考えると、使えそうな物はキッチンと確保しておく必要があるし地図も含めて超助かる！

「いいわよ、君こそまとめ役お疲れ様。アタシがいない間、アオイとゲイリーは大丈夫だったかしら？」

「ああ、特に問題はない。……むしろ、色々と汚れる仕事をやらせてしまつて申し訳なかつた」

「野外での生活なんて、汚れる事前提だからあんまり気にしても仕方ないわよ」

「とはいえ、泥いじりだからなあ」

どうにかして衣類を作れない物か。

乾燥させた骨を砕いて縫い針作ろうとしてみたけど、これが凄く難しい。

加えて毛皮は針が通りにくいし、今の状況じゃあ活用が難しい。

一応、スキル発動させたら、毛皮を使つて靴を作るつて方法はあつたけど……。

「まあ、とりあえず休んでくれ。今足湯を用意する」

「足湯？」

「ああ、まあ、風呂の代用品？　と言えるレベルじゃないけど……ちよつと待つて、今軽く石を焼くから」





「へえ、見かけに反してこれいいわね。君の所ではよくある物なの？」  
「あー、温泉で有名な地域だといくつかあるかも。なんかそういうのを雑誌とかで見た記憶があつて……本当は足だけじゃなくて、膝下位まで浸かる物だったはずだ」

「やっぱり、君の所の国って興味深いわね。すつごく娯楽に溢れてそう」

相変わらず温度の調整が難しいが、とりあえずちようどいい湯になったお湯に並んで足を入れる。

もちろん、事前に水で落とせる汚れは落としてだ。

「アシユリーの所はどうだったのさ？ 遊びとか、さ」

「んー、戦時中って言うのもあつたし微妙な所ね。一応君の所にあるようなゲームもあるけど、そのほとんどはゲームっていうよりシミュレーターだったし」

「シミュレーター？」

「戦闘のよ」

「……ああ、FPSか？」

「前に君が話していたゲームね？ ええ、そんな感じね。ただこっちは指だけじゃなくて身体全体を動かすけど」

「センサーとかで身体の動きを感知してって形？」

「あるいは、五感をそのまま仮想世界に放り込んだりとかね。まあ、そこら辺は脳に繋いだサブブレインの性能や機種によるけど」

「興味はあるけど、そこら辺が凄く怖いな……アシユリーの国は」

未だに経験こそないが手術ですら想像しただけでも恐ろしいのに、頭に機械を埋め込むなんて怖すぎる。

「そうかしら？ いえ、そうね。確かにアタシも、子供の頃は電脳化やサブブレインの移植手術は怖かったわ」

「正直、アシユリーと話しているとロマンに溢れる話が多いけど、それと同じ位恐怖を感じるよ」

「ふふっ」

ちよつと失礼な事を言ったかと思ったが、アシユリーは思い当たる節があるのか、なにかを思い出すように小さく笑う。

「……そうね。君達と出会って、違う文化や思考、思想に触れて……衝撃を受ける事が少くないけど」

白い足でお湯を小さくかき混ぜながら、アシユリーは少しだけ俺に近づく。

「君の様な男の子が育つ国なら、一度その文化に触れてみたいわね」

「思春期の男の子にそういう事言うのは止めなさい。心臓に凄く悪いから」

すっごいね、ドキドキするの。

アオイもそうだけど妙に距離感近くて本当にヤバいの。

ただですら極限状態で色々悶々とする多くて、この間なんざ同じ男だつっのにゲイリーの横顔に一瞬クラツと来た時は死のうかと思つたわ！

「あら、本当に女慣れしていないのね。君の年頃で学生なら、交際している人くらいいると思つただけど」

「そりゃそういうのも周りにやいたし、友達の中で誰々に惚れたただの言う話はあつたけど……」

「へえ……。友達の方はどうだったの？好きな人とは上手くいった？」

「告白して撃沈一回、告白する前に恋人が出来たの二回、成功したけど付き合い方が分からず二カ月で別れたのが一回……こうしてみるとアイツ結構チャレンジャーではあつたのか」

「同じ学校の子？」

「ああ、クラスメート。で、好きになる相手はそれが先輩だったり後輩だったりがあつたけど、基本的には同級生で——」

ふと、口が止まる。

というのも、アシユリーとの会話は基本こんな感じだからだ。

たわいもない事を俺が話して、アシユリーが相槌を打って続きを促して……。

うん、なんとというか、アシユリーは聞き上手なのだ。

こうして雑談していると、ついつい自分だけが喋って終わってしま  
う。

「なあ、その、なんだ、アシユリーの方はどうだったのさ？」

「え、アタシ？」

「ああ。いつも俺の話ばっか聞いてもらってるからさ」

「他にも色々聞きたいんだけど……君の事、もっと知りたいし」

「つつてもなあ……」

年上のお姉さんと話した経験なんざそうそう碌にあるもんでなし、  
おまけに違う世界の話だ。

まあ作業員として活動していた期間が長いならそうそう話せる話  
題も少ないかもしれないが。

「結構、君との会話ってアタシにとっても重要なのよ？」

「そんなに？」

「ええ、だって君の国って詳細はともかく、それなりに上手く回ってい  
る国だもの。そういう国の政治体制や経済に関してはアタシも仕事  
柄興味あるし、そういう事ってこんな雑談でもそれなりに分かる事が  
多いのよ」

「まさかの調査?!」

こんなバカみたいなの雑談も仕事の内って訳かよちくしょう！

「個人的に気になる話でもあるし、それにアタシにとって、君の国の  
話って希望なのよ」

「希望？」

「いつか、戦争が終わった時に……君の国のような生活が待っている  
んだってね」

「……………」

「素敵じゃない？」

「ああ……そうだな」

そうだよな、アシユリーとゲイリーの二人は現在休戦中だけど、一

方で二人の国は今も戦い続けているハズで……。

「なあ、国に帰りたいたんだよな？」

「正しく言葉を選ぶなら帰らなければならぬ。……誰だって、戦いは怖いわ。でも、やらなきゃいけない事がまだ残っている」

「……もし、ここで残らなきゃならないってなったらどうする？」

正直、ここでの生活を続けているとそんな考えが浮かんでくる。

この生活が続く事に——その、食糧とかいずれ来るだろう冬とかに對しての恐怖はあるが、不思議と不安は湧かない。

アオイ達がいってくれるからだろうか……。

「そうね。今までであった物を捨てなきゃいけないってなると……さすがにちよつとは泣いちゃうかもだけど」

アシユリーは、やはりいつもと変わらない笑顔を浮かべて、

「君達と一緒になら……君達が一緒になら、この生活も悪くないわ」

そう言っておどけるように肩を竦めて見せる。

それが本心なのか、何かを隠すための嘘なのか、あるいは強がりなのかは俺には分からないけど——

「だから、もしアタシが泣いちゃうような時が来たら……君の胸、貸してね？」

そう言つて笑う、この銀の髪を持つ女性の笑顔を、心から綺麗だと思つた。

035：またもやスキル会議（副題：どこから君らはやってくる？）

「それじゃあ、今回は二つまでスキルを取れるのね？」

「取れる物は前と全く変わらんがな」

本日の成果は魚一匹と以前にも捕まえた黒リス二匹。

アオイもゲイリーもニッコニコして帰ってきて……よっぽど嬉しかったのだろう。

確かに、このスキル使っても名前がよく分からない黒くてややでかいリスは滅茶苦茶美味かった。

前回は一匹だけで、味はともかく量には不満を覚えていたが、今回は大丈夫だろう。

先ほどまで轟々と燃えていた火は、薪が炭化したことで安定した熾火おきびになっている。

アシユリーがナイフで捌いた魚は四人分に分けて枝に通して、程良く火に当たる所に突き刺されてちよいちよい回転させられている。そろそろいい感じに火が通る頃だろう。

流木を削った煮沸用——いや、今では実質鍋となった器では、黒リスの肉や洗った内臓、血液、骨を野草と共に煮込んだシチューがグツグツと音を立てている。

「なるほどお。ですが、条件が相変わらずよく分かりませんねえ。新しいスキルが開かれないと解放できる数が増えるんですかねえ？」

荒削りの匙で、自分の器にシチューを盛りながら首をかしげるアオイ。

「あるいは、一定のスキルを解放させたから習得数が増えたのかもしれないな。ツール、今表示されているスキルの説明には変化がないのか？」

それに対して、違う流木の鍋で沸かしたお茶を啜っていたゲイリーが意見を述べる。

「ない……と思う。多分。一々前回の説明文なんてメモってなかった

し……ただ、明らかにこれは違うってのはなかったよ」

そういえば、ここ最近はいつもの『不具合のアップデート』つてのが来ないな。

周りに変化が起きたかどうかビクビクしちゃうから別に良いんだけど。

「で、明日からの行動予定も合わせて、コイツについて話し合いたいんだけど」

「何を取るか、ね？ それを決めてから明日からの活動を決めると」

「ああ、俺としては——」

「魔法魔法魔法！ 新しい候補が少ないんですから一個は魔法があったっていいじゃないですか！」

「おう、候補には入れたいってやるからちよいと落ちつけサムライガール」

とりあえずガクガク俺の肩を揺さぶってくるアオイのアホ毛を掴んで引き剥がす。

なにやらむーむー言ってるが知らん。

「で、二つ取れるスキルをどうするかって話なんだけど——」

「トール君、とりあえず魔法は置いといて、今取れるスキルって？」

「ええと……」

スマホをタップして起動させる。

『健脚』、『毒耐性』、『野草知識』、『気配遮断』の四つだな。とりあえず魔法を抜いて」

個人的に『気配遮断』以外はどれ取っても良いんじゃないかと思う。

例えば、『健脚』を取れば自分も探索班として活動しやすくなるし、次の引越しの時にもっと遠くに移動する事もできるだろう。

他もそのままだ、『毒耐性』なら万が一でも俺はそのまま行動できる。

問題は、自分が口にした者が毒入りかそうでないか判別できるかどうかってことだが……。

そして『野草知識』は……正直そういう風に効果が出るのかちよつと不安だが、まあ悪い事にはなるまい。

で、『気配遮断』は……。

「なあ、俺が気配を消せるようになったとしてなんか役に立つ？」

「狩りには役に立つんじゃないか？ 紐も十分あるしちようどいい木も見つけたし、近いうちに弓と矢を作ろうと思うんだが……」

「アタシも同意見。それに、万が一攻撃的な獣を発見した時……いえ、違うわね。例えそうでなくても、様子を見るために気配を隠せるっていうのがどれだけ効果があるかは分からないけど、見つかりにくく出来るっていうのなら結構大事だと思うわ」

……あら？ 意外と『気配遮断』ってば皆からして好感？

「私も悪くないと思いますよお？ 本当に私やゲイリーさん達が武器を使う事になった時に、基本非武装のツールさんに害が及ぶ可能性が減る事は非常に大事な事なのでえ……」

「ああ、自衛手段になるって事ね」

「はい！ 基本的にツールさんが武器を持つ必要こそありませんが、それでも身を守る手段は一つでも持つておくべきです！」

……なんだろう。こうして俺の体が心配されていると、なんか普通にジーンと来る。

特に、最初の方——そう、一番苦労していた頃からずっと一緒にやってきたアオイにそう言われるとなんかクルものがある。

「だからほらあ、魔法覚えて……ねえ？」

「うん、なんかこう大事な所で台無しにしていく辺りお前は本当に前だな」

まあ、そういう所も含めてなんだかんだで上手く付き合っていると  
思う。

「今回、スキルの習得回数が増えた訳なんだだけ……念のために最低一つは残しておきたいと俺は考えている」

「出来るのか？ ……いや、そういえば以前にスキルの習得を保留していたと言っていたな」

「ああ。特に今回は新しい物が無いから……そういうわけだから魔法以外で一つ何か覚えておきたいんだけど」

「そんな！ 第一候補じゃあないんですか!?!」

ありません。

というわけでステイ。

どう作用するかもっとも想像しづらい奴なんて後回しに決まっている。

最初つから選べていたのならば、多分水か炎のどつちか魔法を選んでいただろうけど現状解決しているのならば後回し。

緊急時には取る可能性はあるし、正直いつかは調査ってか実験の意味も含めて取らなくちゃいけないと思ってるけど。

「あー、でもどうすっかなあ。アシユリー、ビーバー……その、めっちゃくちや肉が臭かった奴だけど、それ以外になにか発見はなかった？主に脅威的な意味で」

もしこの近くに肉食獣の気配があるというのならば、すぐさま気配遮断を取った上で明日から武器作ったり壁作ったりするんだけど。

「いいえ、なかったわ。正直、一番動物の気配がするのはこの拠点の周囲ね。ほら」

そういつて目で上を——空を示すアシユリーに釣られて俺たちもそちらの方を向く。

一羽の鳥が、気持ち良さそうに空を舞っていた。

この、すでに一月近くは立つ生活の中で一度も目にしていなかった鳥だ。

……いつの間にか湧いたんだ？

「自信をもって言うわ。おそらく、ここを中心に動物達は産まれて……いえ、違うわね。転送されてきている。多分あの……ビーバーとかいう動物は例外だったか、あるいはたまたま向こう側の川に行ってしまっただけだと思うわ」

「……俺たちも気が付いたらこの近くにいた。つまり、ここは最初に動物……っていうか生き物が運び込まれてくる場所？」

「そこまでは……。探索したり、あるいは……それこそまた引越してみたら色々分かるんじゃないかしら」

「引越し？」

「ええ。まだ確証はないけど、ちよつと思ふ所があるのよ」



だったらその思う所を話してくれませんかね。ねえちよつと？

ゲイリーも「ああ……」と何かに気付いたように意味深な相槌打つし！

いや詳しく話さないって事にはなにかしらの意味があるんだろうけどさー！

「ま、それはさておき。ツール君としてはどうなの？ 覚えたい物は？」

「ん？ ……いや、これが良いんじゃないかと思ってただけど……」  
とりあえずスマホを再度操作して、その説明文が表示されている画面を見せる。

どういうわけか、このスマホに限ってはそれぞれの文字で表示されるらしい。

今更だが、どう言う訳が言葉が通じるのも謎だし……。

で、それを見せたら予想通りというかなんとか、全員から「悪くないんじゃないか？」というある意味太鼓判をいただいたわけである。

タップ。

習得。

変化なし。

……これ大丈夫かな。

絶対無駄にならないと思ったんだけどな、『野草知識』って。

036：岩場にて素晴らしい物を発見してしまった！

「なるほど、手に取って初めて分かる感じが」

習得してから一切変化を感じなかった『野草知識』のスキルだが、試しに一度探索に出てあれこれ試していると、手に持った時というか触れた瞬間に情報を読み取れるようになった。

「どうだ、ツール？」

「コイツは食えるな。煮ると上手いスープが出るらしい。ある程度を残して取っていいこう。キノコとか久々過ぎて楽しみだ」

「同じくだ。了解」

今回はゲイリーと共に、二日ばかりで新たに発見したという岩場にきている。

うん、やっぱり足湯作って良かったよ。今までに比べて疲労の回復が早くなった気がする。

「にしても、岩場か。なにかあると思うか？」

「んー、結果はどうあれ、念のためにサーチスキルを試しときたい。前に河原を探索した時は成果らしい成果は出なかったし」

ある程度固くて、かつ加工しやすい石。それと砥石をずっと探していたのだが成果は上がらず。

一応適当に砕いた石の中で比較的鋭く、かつ大きさが程良いものに木で作った握りをくくりつけて緊急用のナイフにしているが——アシユリーのナイフが出てきたおかげで実質が一の予備扱い。

今は一応ゲイリーが持っている。そして俺はアシユリーのナイフだ。

逆の方が良いんじゃないかと思ったんだが、ゲイリー曰く敵に自分の獲物を預けたりしたら君の印象が悪くなりかねないとの事。

なんか、ホントいつも気を使わせてごめんね？

うん。一番気安く接せるのはアオイだけど、一番頼りになるのはゲイリーだ。

「もうちよいマシンな石が手に入れば、木材集める作業とか枝を落とす作業が大幅に効率上がるし」

「ああ、確かに。より容易く木材を集める事が出来るとはいえ、まだまだ細い木でも少し時間がかかるからな」

「石斧よりも骨ノコギリの方が早いからな正直。でも鹿みたいな大物がまたかかるか怪しいし……」

「野ブタの骨は駄目だったのか?」

「ああ、同じように割ってみただけど上手く割れなくてな、ちよつと使えそうにない」

結局今一番問題なのは、道具に使える固い素材だ。

燃料は……随時確保しているから、どつちかという大切なのは保管場所のほうか。

「とりあえず、矢じりに使える石とかがあればいいんだけど……」

「ん? 別に気にしなくていいぞ。木で作った矢の先端を尖らせて、少し焦がせば立派に使える矢になる」

さすがに熊の様な大型の獣相手には不安だが、と断りを入れたゲイリーはふと気がついたように目を見開き。

「そうだな。これまでは正直、森そのものが余りに異常だったから気にしていなかったが、食糧の保存庫も作るべきか」

「煙で燻しておくんじゃなくて?」

「その作業場も含めて、拠点から大分離れた所に食糧を置くようにしておくべきだ。それも、獣に触れられない様に高い所に」

「……狼とかが来る?」

「いるのならばな」

あー、うん、それじゃあ確かに手段を考えておいた方がいいか。

「木に吊るすとか?」

「それもアリだが、鳥も現れているし……固めの葉などで覆うか……いっそ、高い所に小屋か蓋付きの箱を作るのもアリだろう。梯子も作って、立て掛ければ登れるようにして普段は外しておけばいい」

「梯子か。作ったとして強度は大丈夫かな?」

「後々の建材用として、とりわけ頑丈な枝や木は確保している。君が今持っているナイフで上手く溝を作って組み合わせた上でしっかり

結べば、そう簡単に壊れたりほしくないだろう」

一応、アシユリーのいう『トライスティック』というものは今も練習はしている。

今では紐や縄作りは三人に任せて、自分は横で刃物の扱いや火の起こし方の練習をしている有様だ。

火の起こし方の練習の際は、同じく苦手なアオイも一緒になつてやっている。

で、だ。今自分がどっちの練習に力を入れているかと言うと、正直火起こしの方で……。

「大丈夫かなあ……」

「なに、いざという時はアシユリーを頼れ。アイツもそんな所で協力をやる事はあるまい。特に、君に対しては」

「ま、そりゃあそうなんだろうけどさ」

そういう間にも俺は見たことない野草やツタに手を伸ばし、次々に食える物や薬になる物を回収していきながら足を進める。

……やつぱり、サーチだけでは見落としが多かつたみたいだ。

これまで散々目にしていたはずの物が、食えるは役に立つわと新しい発見がテンコ盛りだ。

いつものVRみたいな視界にはならない。触った途端に頭の中に知識が紛れ込んでくる。

今の所、サーチや道具作製のように酔いそうになる事はない。それはいいのだが、たまに耳鳴りというかノイズというか……奇妙な感覚に合うのが悩みの種だ。

(いや、まあ、スキルとは付き合っていくしかないんだけどさあ)

そうして次々に草木に関しての情報を増やしながら、目的の位置に付いた。

「……なんでここだけ絶壁？」

唐突にここだけ丘があつて、そして唐突に削られ——いえ、抉られた。そんな感じの地形だ。

中腹あたりから下の方は徐々に緩やかな坂になっているが……

「おい。雨の時は近寄りたくないぞ、ツール」

「同感だ」

土砂崩れとか落石が起きてもおかしくない場所だ。雨が降った時やその後数日はあんまり近寄りたくない。

「まあいい。そんなじゃ、始めるか——」

相も変わらずやけに使用が限られている力——サーチ・スキルを発動する。

目に入る世界が、うつすらと——だが確かに変わる。変わ……

「なんじゃこりゃ!」

「? どうしたつ?」

スキルの使用で俺に何か異変が起こったと思ったのか、ゲイリーがやや緊張した声を出す。

そして……ああ、確かに異変は起こっている。確かに。

「サーチスキルの範囲——その距離的な物じゃなく分かる範囲とか……なんか偉く広がっている」

植物関連限定だが。

目の前の岩場の所々に生い茂っている芝の様な植物、その葉や根の可食性や効能。振り返れば、これまでは些細な意識の違いで見えたり見えなかったりした物が、全て正確に……か、どうかは知らんが……分かる。

「うっ——」

余りの情報量に目眩がして、少しだけふらつくと即座にゲイリーが駆け寄って俺の体を支えてくれた。

「わりいな、ゲイリー」

「気にする事じゃない。それより、大丈夫なのか?」

「一応はな。くそつ、こりゃちよいつと慣れる必要があるな」

多分だが、野草知識とサーチの二つのスキルが重なって、いわゆるシナジー効果を産み出したのだろう。

サーチを使う時には意識の傾け方を注意しないとひでえ事になりそうだ。

一瞬、頭の片隅に不快感とも快感とも言えない感覚がもぞもぞとしたが、邪魔だと強く思ったら消えた。

(そうか、脳には絶対に影響あるし……病も気からじゃないが、あんまり意識しすぎると変な影響出来るかもしれないな)

とにかく、今の目的はここにある岩や石に関する調査だ。

石や岩。そういった方向に集中し、草木に関しては意図してシャツトアウトする。

そして――

「ビンゴ」

大中小、様々な岩が転がっている中、割と様々な場所に散らばっている目標の内の一つが隠れている場所へと足を運び、石をどける。

「なんか、本来はこういう所でこれほど大量に見つかるのは珍しいらしい……つてか結構あり得ない事見ただけだ」

その下から姿を見せたのは、そこらの石では出せない煌めきを放つ、黒い石。

「ゲイリーー！ 刃物の素材、確保だ！」

天然のガラス、黒曜石と呼ばれる石がびっしりと詰まっていた。

幕間くはじまりはじまりく

「むくくく。獸用の罾には今回獲物はありませんねえ。黒いリスさんのスープ美味しかったのでまた口にしたかったんですが……」

湖からやや上流にさかのぼった所。

かつてゲイリーやアシュリーが、トールとアオイによって寝かされていた仮の寢床があった所の近く。

その周辺は、今ではトール達にとって重要な罾場になりつつあった。

「というか、どうしたんですかアシュリーさん？ 今日は何んだか集中できていないみたいですが？」

そう言つてアオイは、自分の後ろから付いて来ているアシュリーの様子を伺う。

「何か気にかかる事でもあるんですかあ？」

「いえ、大丈夫よ。ただ、ここ数日歩きっぱなしだったから……かしらね。どうにも足に乳酸がたまっちゃったみたい」

「あらー。それじゃあ、ある意味動物がかかってなくて良かったですねえ。小さいのならともかく、野豚さんの時みたいに格闘となると大変なことになっちゃうので」

「ええ、そうね」

一方で、アシュリーは今それどころではなかった。

こうしてどうにか上<sup>うわ</sup>つ面<sup>つら</sup>を装<sup>ま</sup>う事で精<sup>せい</sup>いっばいで頭<sup>あたま</sup>の中では全く違う事を考え——いや、話していた。



「あー、隊長。聞いてるツスか？」

『聞いているけどちよつと待つてちようだい。今、あの剣を持った女と一緒に行動しているのよ。罫の確認が終わったら薪集めで一人になるから、それまで待機で!』

「うツス、了解ツス」

頭の中での通信が切れたのを確認した二人の女は、互いに顔を見合わせる。

「どういうことツスカねえ」

「……尋常ならざる事態というのは理解していたが」

二人の目には、今自分が見ている光景とは別に、とあるデータが小さく表示される。

それはアシュリーがこの二人の存在を把握できた物。それぞれのこめかみのあたりに埋め込まれている、サブブレインという電脳の種類が放つ特殊な電磁波を計測したものである。

ある程度の範囲ならば。サブブレインを埋め込んだ人間がどこにいるのか把握できる、主に野戦での連携のために組まれたそのプログラムは、周囲にいる同胞を正確に把握していた。

今ここにいるヴィレッタとテツサ、そして離れた地点でアオイと行動を共にしているアシュリー。

そして……もう一人。

「ヴィレッタさん。あの人、少なくともこの間までは絶対に絶対に反応なかったツスよね?」

「ああ、無かったぞ」

「……なんでツール君からサブブレイン反応出てるんスカ?」

「それが分かれば苦労はしない」

その現象が起こった時、ヴィレッタとテツサは二人とも、アシュリーの視界とリンクしてツール達の会議の様子を観察していた。

二人ともそれぞれの目で、ツールやアオイというイレギュラーに加えてゲイリーという明確な敵を観察する目的もあったが、同時にツールが持っていたスマートフォンという異世界の小型のデバイスに興味があった。例えこの世界に来てから変異しているとしてもだ。

そして、例のスキルに関しての話し合いの隙に、できるだけツール



という少年がスキルを習得するその瞬間を記録しておくために集中していた時に、それが起こった。

彼がスマートフォンに触り、スキルというものを習得したその瞬間——突如として、自分達の同胞の反応が現れたのだ。

二人の目の前——つまり、リンクしているアシユリーの視界の中に。

「……間違いないんすよね？」

「あるいはと思って、多少強引だがサブブレインのハックを試みた所切断された。感覚で操作したようだし、間違いなく脳との接続も完了していると見ていい」

「……なんでツスカ!？」

「知らんと言っているだろうが!」

二人はツールと直接喋った訳ではないが、間接的には目の前でよく見ている。

アシユリーの目を通してだが——

「つまり、アレっすか。あのスマートフォンとかいうデバイスを二、三回触っただけで、あの人麻酔も手術も無しにサブブレイン移植して脳に繋いだって事ツスカ? それも瞬時に?」

「……隊長が言っていたサーチとかいうスキルも……あるいは身体になんらかの変異を起こしているのかもしれない」

ヴィレッタは、癖なのか爪を軽く噛みながら考えている。

いや、恐れているのかもしれない。

「なんにせよ、隊長もこれで決断するだろう。事情はどうあれ、ツールという少年は我々と同じ技術を有する人間になった」

「それを理由に取り込む? そりゃあ無理ツスよ。早すぎますし、多分本人理解してないツスよ? そもそも、仮に理解した所でツール君、どっちかを選べるようなタイプじゃないツスよ。間違いなく」

「ならば、選ばせるだけだろう」

ヴィレッタは、鋭い目を僅かに輝かせて策を練る。

「幸か不幸か少年は我々と同じ技術を身に宿し、かつ不慣れだ。どういうわけか軍用のそれより高性能なサブブレインを脳に直結してい

るようだが、我々三人が本気でハッキングすれば自我を誘導することだって――」

そこまで言ったヴィレッタは、唐突に前へと跳躍した。

ほぼ同じタイミングで、ヴィレッタの首があつた場所あたりで、テツサのナイフが空を斬る。

反射的にヴィレッタがナイフを抜いて構えた先には、同じ様にナイフを構えたテツサの姿があつた。

「あ、あ？ 何するつもりだテメエ、殺すぞ？」

いつもと違い瞳から光を失くしたテツサが、本気の殺意を纏つてそこに立っていた。

これまでチームを組んでいて一度も見たことない様子に、ヴィレッタは思わず一歩下がりがながらも表情を崩さず、

「……非常時下だ。何を優先すべきか分からないのか」

「やつちやいけねえ事があるつてのがワカンネえのかビチグソ……アア？」

いつものお気楽な口調は消え失せ、血走った目でヴィレッタを睨みつけていた。

「……なぜ、あの少年に肩入れする」

「アンタには十年かかってても分からないツスよ。ああいう狂人の価値は」

「狂人？ 何を言っている……ツールタケウチは民間人じゃないのか？」

「ハッ」

何を的外れな事を。

そう言うように、テツサはヴィレッタを鼻で笑う。

「まあいいツスよ。それで？ 敵どころかボク達サイドに存在が近づいた男の子の頭勝手にイジってどうするんスカ」

馬鹿な事を言い出したら首を掻き切る。

そう言うようにナイフを構え直すテツサに対して、ヴィレッタはさ

らに間合いを取る。

「我々に関係ない、未知数の男というのは変わっていない」

「関係ないって分かっているなら——」

「スキルという強力な技能こそ持っているが、そのスキルでも武装は一切していない。制圧できる内に制圧するべきだ」

「だーかーらーあつ!!」

淡々と述べるヴィレッタに、テツサは苛立ったようにナイフの切っ先を向ける。

「それでも！ それでもやっちゃあいけない事があるって言ってるんすよ、ボクは！」

「任務を第一に置くのが軍人だ！」

少なくとも、今のテツサは殺意も戦意も多少下がった。

そう判断したヴィレッタはナイフを鞘に戻し、声を抑えて、

「さすがにそれが最後の手段だというのは分かっている。だが。万が一の場合の事を考えておけ。使える物を使わなければ、帰還できんだぞ」

話は終わりだと言わんばかりに背を向け、拠点へと戻るヴィレッタ。

その遠ざかって行く背中に思わずナイフを投げつけかけたテツサは、小さく舌打ちをして大きくため息を吐く。

「どいつもコイツも……暴力に慣れるとこうなるんスカね。まあ、ボクもツスけど」

手の中のナイフをクルクルと回して、そして刀身を鏡のようにして自分の顔を写す。

いつもと違い、表情が抜け落ちてる自分の顔を見て「おっと……駄目ツス駄目ツス」と小さくつぶやいて、もう片方の手で口元を吊上げて、一番口元が可愛く見える位置を調整して笑顔を張りつける。

「さて、どうしたもんスカね。帰還できたのなら帰還できたで隊長殺して、ボクはまた別の部隊に紛れるつもりだったんスけど……」

ナイフを鞘に戻し、胸を持ちあげるように腕を組んで「うくくく」と悩み始める。

「仕方ないツスよねえ」

そうして、何度もウンウンと頷き、彼女は——テツサという少女は答えを出す。

「目的のためには帰る必要があるツスけど、それで無関係の……それも理想的なタイプ見殺しにして帰ったら『革命』もへつたくれもないツスもんねえ」

そして、少女は腰からある物を抜き出す。

ゲイリー達魔法側の住人が使うそれよりも、はるかに高性能なソレは、本来アシユリーやヴィレッタ、テツサといった敵の内部深くに潜り込む作業員は携帯を許可されていない……ハズだった。

「ゲイリー卿の正体とか生い立ちは向こう側の『同志』から情報入りますし、警戒にも値せず。アオイという人はちよつと違いますけど、見た感じボクと似た匂いがありますし下手な行動しなければOK」

「やっぱり、邪魔なのはこちら側の二名だけ」

「じゃあ……仕方ないツスよね」

## 037：特に意味のない告白

「どうだ、かまどの方は？ 割れてない？」

「はい、問題ないみたいです♪ かなりぼうぼうと燃やしましたけど、筒の部分も中の受け皿も問題ありません！ いけますよツールさん！」

スキルを習得してから一週間と少し——まあ十日くらいが立った。

その間に、俺たちの生活は一気に変わった。

野草知識スキルは本当に偉大だった。取って良かったマジで。

これまで葉を茹でれば食える花としか知らなかった野草が、根を洗ってから刻んで茹でればコーヒーになり、より紐に適した植物の発見は罫の性能を跳ね上げ、ほのかな香りのする香草は肉や魚のうま味を引き出した。

そして今、また一つ変わろうとしている。

「これで器が作れますねえ♪」

「水の煮沸なんかもそうだけど、料理の幅が広がるのは嬉しいな」

「火加減が難しいから、これまでの料理って基本的に串に刺して試しに歯を立てて生だと感じたらまた焼くって感じでしたからねえ」

「……正直、腹下し以外に俺たちが病氣らしい病氣になっていないのは奇跡だと思う」

さすがに腹を下した事はこれまでも何度かあった。

腹下しただけでもすごい不安になるのな。

俺がなった時は、恥ずかしながらずっと誰かに傍にいてもらった。

ゲイリーやアシュリーが手を握ってくれた時は素で嬉しかったわ。

アオイも色々と面倒みてくれたし。

しかし……

今度のスキルは魔法を取るつもりだってアオイには言っていたのだけれど、もし医療知識とかがあったら真面目にアオイと話し合おう。

野草知識で判明した、腹下しに効く薬草にどんだけ助けられた事か。

特に、例のパンとかいう針葉潰して淹れるお茶。あれが実は腹下し……というか下痢止めになると言うのは以外だった。

「まあ、トールさんはお肉を茹でたり焼いたりする時って基本的にやり過ぎるくらいまで熱通してますから、あんまり当たってないですよねえ」

「そりやあだつて……怖くてなあ……」

「人間、死ぬ時は死ぬんですから病気よりも味……ああ、いや、確かにトールさんに倒れられたら困りますねえ」

「ん？　なんかやな予感でもすんのか？」

なんとなく、コイツの扱いというか付き合い方も分かってきた。

僅かな口調の違いでそれを察せるようになったからには、キチンと聞いておくのがまとめ役の義務だろうと尋ねると、アオイは首をかしげて少し膨らませて右頬に指を突き立て、

「ん~~~~~。いや、なんとも言えないんですけどお……なくく〜んか妙な気配がする気がして……」

「？　人を襲う獣……つてわけじゃなさそうだな」

「あ、そうなんですよ。分かりますう？」

もし獣の類ならば、現状武器らしい武器を扱えない俺にそこまで気を使う必要はない。

本気で死んでもいいとは考えていないだろうが、食当たりで体調を崩すくらい普通だと考えているだろうコイツが気にするとなれば、俺——つまりはまとめ役が必要になる事態な訳で……。

「俺ら以外に人がいるのか？」

「分かりません……。ただ、見られているって感覚は凄くするんですよねえ」

「いつから？」

「ん~~~~~……トールさんが新しいスキルを取った日の少し前くらいですかね？」

ふむ。新しい人間が来る可能性は当然ある。というか、ないとおかしい。

俺たち四人も知らない草木がえらい大量にある。

確認こそないが、これらも俺たち同様それぞれの世界から持ち込まれた物だろうというのが俺たち四人の見解である。

ならば、同様に異なる世界の人間が現れた所で何の不思議もない。あるいは、ゲイリーとアシュリーの例みたいに俺達と同じ世界の人間が紛れ込んできた可能性も十分にある。

……頼むからアオイの世界の人間が来ませんように。アシュリーとかゲイリーに近い価値観の人間ならまだ大丈夫だけど。

「まあ、なんだかんだでお前の勘は頼りにしてるからな。もし、お前がヤバいと思つたら対処頼むわ」

「わ、私でいいんですかあ？ それこそ、ゲイリーさんとアシュリーさんに頼つた方が……」

「いや、そういうのいいから」

いい加減、ここらに関しても一応言及しておいたほうがいい……のかなあ。

「お前が……その、なんていうの？ 仮面を被っている事はなんとなく分かつてる」

ジャブがてら踏み込んでみるが、アオイはニコニコしたまま俺の方を見ている。

……大丈夫かな。よくぞ見破りましたね死ねい！ とかなんねーよな？

野豚仕留めた時の話とか、アシュリー達の話で実は強いというのはなんとなく分かる。多分、本気で俺とコイツが例えば殴りあつたら、勝てないのだろう。

(それでもそんなに警戒が必要な相手だとは思えないんだけどなあ) 下手な事しなければコイツは結構安全だ。

ただし、確かにあるのだろう地雷が非常に見えづらいつてのがコイツの怖いトコロなんだよなあ。

「だから、まあ……別に力を隠す必要はないよ。こっちとしてもいざって時の判断材料としてそういうの必要だから……ああ、隠しておきたいならそれでいい。俺も気付いてない振りするから——」

「仮面を付けているような女を信じるんですかあ？」

言葉をさえぎる様に、アオイが口を挟む。

いや、仮面を付けてませんとかいう奴いたらそっちの方が胡散臭くてしゃーない。

俺が腹割ってるんだからお前も心を開けよ的な事言ってくる奴とか、渾身の力を込めてぶん殴りたくなる。

「お前さんが、意味なく悪意振りまいたり後ろから刺したりしてくる奴じゃないのはなんとなく分かるから」

いや、まあ、何があつても裏切らないとは言えないけど。

俺も追いつめられたらどうなるか……。なるだけ醜態見せないように余裕を持つように計画立ててるけどさ。

「まあ、正直一緒に馬鹿やりながらここまで来た訳だし、勝手に信じる事にするよ」

「私、実は人たくさん殺してますう♪　と言ってもですかあ？」

……え。

その告白でなんか変わるの？

というか、むしろしつくり来たよ。

「ちなみにこっちに来てからは？」

「一緒に来ていた人を一人殺っちゃいました！」

ああ。多分だけど、相手がコイツの地雷踏んづけたんだろうなあ。

「よし、とりあえず被疑者アオイ。動機を述べてみよ」

「パニックになって私を蹴ったり殴ったり怒鳴ったりしていたんですけど、そのうち押し倒して脱がそうとしてきたんで投げ飛ばしてザックリやっちゃいました！」

「無罪」

はい、しゅーりょー。お疲れさまっしたー。

「立場ってか俺側の常識からすると『よくやった』って言うわけにはいかんけど、災難だったな。怪我とかはない？」

「ぶ……。っ……。あっはっはっはっはっはっはっはっはっは!!!」



率直に思った事を言うと、なにかツボにハマったのか、珍しくアオイがマジで爆笑し始めた。

初めて見たぞお前が腹抱えて笑ってるの。

「あゝ、ところで死体は？」

「ひー、ひー……ああ、はい。さすがにツールさんに見られるのはマズいとその時は思っていたので、ちょうどゲイリーさん達を助けた時に、あの近くに埋めておきましたあゝ♪」

あの時か。アオイは結構俺と一緒にいたし、埋める時間はそんなになかったハズ。

となると、埋めたとと言っても結構浅い？

「最近様子は見てる？」

「まあ、あそこちょうど罠場に近いんでちよくちよく様子は見に行っています」

「で？」

「？……ああっ！ すみません、とりあえず掘り起こされた様子はないです」

なるほど。という事は、そこらには犬とか狼みたいな、鼻の効く肉食獣はいないと見ていいか。

アオイが俺の前で余計な腹芸をする手間が一つ剥がれた上に、それなりに有用な情報が一つ増えたのは良かった。

あの罠場は当面の間大事にしていこう。

今度俺が様子を見に行く担当になったら、ついでに罠も増設しておくか。

「……ふふっ」

「？ どうした、アオイ？」

「いえ」

「やっぱり、私の勘も捨てたものじゃないなあ、と」

何を訳のわからん事を言っているのか。

「うし、とりあえずお互い一步は歩み寄れたって事でこの話はおしま

いだ。アオイ、薪の用意しておいてくれ。早速素焼きの実験してみ  
る」

「了解です！ トールさん！」

## 038：嵐の前の――

正直失敗するだろうと考えていた初の素焼きは、意外な事に成功した。

手の平三つを横に並べた位の幅の円柱の壺。

これが俺たちの初めての焼き物になるわけだ。

「ほう。大したものだな、ツール」

「ああ、予想よりもしつかりしている。もつと強度に不安が出るような仕上がりになるんじゃないかと不安だったんだけど……」

水分を均等に抜け切るために陰干しにしていた型を、煙突のようになつているかまどの中へと置いてガツツリ火を焚いた。

いつもの焚火と違い火が集中する様に作つてあるので、その火力は段違いである。

少々深く掘つた穴――釜戸の底には熱が下がりにくいように石も敷いてあるし、空気もキッチンと入る様に横穴もある。まあ、ここは薪を放り込む場所なんだけど。

昨日はかまどと、その受け皿を安定させるためにテストも兼ねて思いつきり火を焚いてみたが、結果受け皿は綺麗に固まり、煙突も丈夫になつた。

で、それなら壺ももう大丈夫だろうとアオイと一緒に燃やした結果――大成功という訳だ。

……三つの内一つは。

「成功率三分の一。悪くはないだろう?」

「まあな、あと二つくらい成功してくればとりあえずは十分だ。あまり多すぎても、今度は移動の際に困っちゃう」

とりあえず、もう不安定な折り畳み傘を使った水汲みをする必要は無くなつた。

こつから先はコイツを使って水を汲みに行こう。

一度に組める量は少々心元ないが、それでも安定していると言うのは大事だ。

「そうか……そうだったな。なんだか最近では、ここでの生活をより良くする事に没頭していたが、いずれはここも離れるんだったな」  
「もうちょい先だろうけどな」

ある程度下流の様子を確かめたうえで、ここらに新しい発見が無ければ――

ああ、でも何が惜しいって上の罫場が結構いい狩り場なんだよなあ。

今度はそんなに離れず、戻ろうと思えばすぐにここに戻ってこれる位の距離にした方がいいのだろうか？

今度こそ本当の探索拠点として……。

「下の方で安定した食糧の確保が確定しているなら、結構川を下ってもいいと思っただけどなあ……」

「？ どうやって移動するつもりだったんだ？」

「イカダ作って荷物乗つけて、一気に下流に行くって案があったんだよ」

水の流れを使えば、徒歩よりもかなり早く移動できる。難点を言うなら、何かあった時にここまで戻ってこれなくなるという事か。

「ゲイリー、弓の方はどうだ？」

いつもどおり布の服の上に丈夫なマントを羽織っているゲイリーは、更にその上に新しい得物を背負っていた。

ゲイリー自身が木を削り、組んだ紐を使って造り出した弓だ。

「悪くないな。完成してから矢を何本か作って試してみたが、しっかり飛ぶ」

ゲイリーが作った矢は、俺の知っている矢とは少し違っていた。

俺のイメージする矢と言えば、矢をつがえた時に指があたる所に羽が付いていたのだが、ゲイリーのそれは羽ではなく、まるで蛇が巻き付いているかのように柔らかめのツタがくくりつけられていた。

一応これで安定するらしい。

あと、先端を削って焦がしただけの矢じりだが、そこに更に粘土で作った球を差している。

これが重りになって、さらにバランスが安定するとの事だ。

やはり、こういう知識においてゲイリーはかなり頼りになる。

「今作っている矢筒が完成したら、一度森の調査も兼ねて狩りに出てみようと思う」

そして今、ゲイリーが行っている作業は矢筒造りだ。

長めのツタを四本、米の字を書くように交差させ、それをベースにして他のツタを使って編み上げる。

最初の一本を根元になる交差部分に結び付け。その後はベースになったツタの間を内側、外側、内側、外側とくぐらせていくのだ。

無論、形を作りながら。

「アレだな。もつと細かい木の加工や接着が出来ればマシな物が作れるんだが……」

「それは仕方ないだろう。接着は……出来なくもないが樹液を集めるのも一苦勞だし、木を削るのはともかく切るのには一苦勞だ。……例の骨ノコギリ、一つはもう駄目になったんだろう？」

それな。

普通に枝打ちに使ってたらあっさり刃がかけてしまった。

そもそも、使用頻度の高い石斧とかすでに何本も壊れて作り直してるし……。

道具の消耗考えると、もつと何か手段考えないとなあ……。

「矢筒の方は長く持ちそう？」

「……正直、間に合わせだな。本来基礎になる部分には、もつと強くしてしなやかな枝などが良いんだが……それだと背負うには大きすぎる形になってしまうからな。今回は強度よりも便利さを優先させた」  
「なるほど。ちょうどいい材料を見つけたら、俺もなにか作れないか試してみるよ。矢筒もそうだけど、籠とかあれば便利だろ」

最初の頃に作って樹皮の採取箱とか正直あんま役に立たないし。

大は小を兼ねる。うん、昔の人は正しかった。

「そうだな。魚を捕まえた時も、今のままじゃあ不便だし」

「大体は素手で掴んで運んでいるからなあ。まあ、大量にかかるって事が今の所ないけど」

「今後は可能性があるぞ。今頃アオイ達が罾を増設しているだろう？」

「ああ、仕掛けは昨晚の間にもう作ってたし、すぐ終わるだろう」  
最も、罾と言えるほどの物ではない。

一本の長い紐に、大体四、五本の紐をくくりつけて、その先端に釣り針と餌をセットする。

で、適当な枝を杭代わりにして長い紐をくくりつけ、もう片方の先端には石をくくりつけて湖や川に沈める。

……うん、これ罾って言えるのか？ まあ、釣りもある意味罾だけだよ。

「仕掛けは何本作ったんだ？」

「ええと……六本かな」

「となると六に四から五……三〇近くの針が仕掛けられている訳だ。前回からチラホラ成果の上がってる魚籠も含めると、大漁の可能性だっけて出てくるさ」

「……まあ、少なくとも空腹のまま寝る可能性が減るのはいい事か」

食糧を得る機会が増えたのはいいのだが、だからこそいぎ野草と果実だけの生活に戻ると士気が下がるのだ。

「あ、そうだ。ゲイリー」

「なんだ？」

「最近、妙な気配や痕跡を目にした事無い？」

「？ つまり、どういうことだ？」

「アオイが、誰かに見られている気がするって言うんだ」

昨日、アオイとの雑談の中で出てきた感じる視線というのは、正直かなり気になっている事だ。

肉食動物がこの周辺にいる可能性は減っているし、そういう獣が様子をうかがっていると言う事は無いだろう。

一応念のために、拠点近くにある身を隠せそうな茂みは石ナタを使って切り払っている。

仮にどこかから俺たちを見ているとなると、恐らくもつと遠くだろう。

「なるほど、アオイが……」

「一応アシユリーにも言っておくけど、もしこちらとの接触を躊躇っている人がいるなら、こちら側から声かけた方がいいかなあと」

全員が拠点を開けたタイミングに来られて食糧奪われてもアレだし。

いや、今拠点に残してある食糧となると天日干しにしてある野草しかないんだけどさ。

一応完成した肉や魚の燻製は、葉っぱで包んで上から縛り上げて袋状にして、ここから離れた場所の木の上に吊るしてある。

簡単な屋根も付けて、念のために超頑張って落とし穴とか中型から大型の獣用の罾も仕掛けたし肉を狙った獣が近づいたらかかるはずだ。

「分かった。一応、俺も気にかけておくとしよう。とりあえず、今日は残りの時間を矢筒作りにあてるつもりだが、君はどうする?」

「そうさねえ」

アシユリーは前回の探索で気になる点があるって言うし、アオイは罾の方を見て回ってるし……

「一応、アオイの方の後を追ってくるよ。もし獲物がいたら呼びに来るって言ってたけど、それじゃあ二度手間だしな」

「分かった、道中気を付けてな」

さて、今日の飯は何になるか。

せっかかしだし、魚がいいなあ。



「?」なんだアシユリー、戻って来ていたのか? ちようどいい、トルからも聞くとと思うが、アオイが——どうしたアシユリー?」

「アシユリー？」



「わざわざ来てくれたんですかあ？ 別に動物が引つかかっても私一人で殺せるんですけどお」

「複数かかっている可能性もあるし、獲物を運ぶのも疲れるだろう？ それに、解体には刀よりもナイフの方が楽だし」

「ああ……それは確かにそうですねえ。……かかっていたらそうでしたねえ」

「それを言うなよ。泣けるぜ」

アオイに追いついたのは、結局罾場に辿りついてからだだった。

今回は収穫なし。夜は魚の燻製と野草で決まりか。

「あと、ついでに確認したい物もあつたからさ」

「確認したいもの？」

「死体」

「……ああ」

どんな状況だったのかもそうだけど、俺としてはソイツの持ち物とかが気になる。

多分アオイから見て使える物は無かったからそのまま放置されただろうけど、ひよつとしたら使える物があるかもしれない。

「それはいいんですけどお。着物は血で汚れてますし腐臭が移ってますし、多分役に立つ事なんにもないですよお？」

「服以外に何も持っていないなかったのか？」

「前に言ったかもしれませんが、基本私達って持ち歩ける物がかなり制限されているので……。偉い人なら家とか仕事場にもある程度揃えられるんですけど、その……外に出る際にはちよつとお」

「どんだけ制限まみれだったんだよ。煙草とかは？ 話聞く限りじや煙草は一般的だったんだろう」

「煙草自体は持ち運びできるんですが、火を付ける道具の類は持ち出し禁止に入るんですう」

「……まあ、なんかあるかもしれんし」

「ああ、確かに私の視点とツールさんの視点は違いますしねえ。分か

りました、こちらですう」

そう言つて案内されたのは、あの時同様川を渡つた先だつた。

そうだよな、あの短い時間で埋めたつて事は拠点側から見て向こう側になるよな。

ちくしよう、死体の確認終えてもう一度戻つたら一回火を焚こう。そうして森の中を歩く事二十分ほど。目的の場所によやくたどり着いたらしい。

「あー、確かにほんのり匂うな」

ある意味で腐臭が目印と言えるかもしれない。

なんとなく、埋めてある場所が分かつた。

微妙に周りとは色違うし。

「えくと、適当な棒は……」

「おう、さつき拾つておいたぞ」

「あ、どうもですう。それじゃあ……えいつと！」

そうしてアオイが、やや平たい感じに割れてた太い倒木の一部を地面に突き立てる。

俺も習つて適当な物で土を掻きだしていくと、すぐに木片の先が何かに当たる感触がした。腐臭も強くなる。

「うゝわ、元々臭い人でしたけどもつと臭くなつてますねえ」

現れたのは、アオイの着ている着物ではなく……あー、これなんて言うんだらう？ アジア系つか中華系の民族衣装っぽい？ 感じの赤い服をきた肥満体の男の死体だ。ちよつとだけ衣類が豪華な気がする。

赤かつた服は、流れ出た血が渴いてどす黒くなつていて、身体には虫がたかっている。

「……アオイ」

「はい？」

「お前と同じ国にしては服が大分違うようだが」

「あ、はい。広い国ですから、生まれた場所が違えば服も違います。それに、違う地域の服を着ると出生地詐称の罪で逮捕されちゃいますから」

「ホントにクソだなお前の所」

着る物も自由に出来ないとか。

まあいい。

「じゃあ、コイツの出身地の埋葬方法とかも分からないか？」

とりあえず何か持っていないかとかパリパリする服を剥がして色々探るが、本当に何も持っていないようだ。さすがに衣類は布としてももう使えないし……この帯なら……いや、やっぱ止めておくか。

「ん〜。私と同じ極東系の衣装と顔立ちだと思いますので、多分火葬でいいと思いますう」

「そっか……」

ここらはちよつと木々の密度が高いせいか湿気を感じる。

例の樹脂を多く含んだ奴で火を起こすか。

「埋葬するんですかあ？」

火を起こそうとある程度開けた場所を探していたら、アオイが俺の顔を覗き込んでくる。

「あく、思う所があるって言うんなら止めとくぞ？」

コイツからすれば、このデブは自分を犯そうとした奴だし、このままここで朽ち果てるって思うのも分からなくはない。

死体を乏しめるのはあんまり気分がよくないが、仲間の感情の方を出来れば優先したい。

「別にいいですよお？ 死んじやったらただの肉ですし」

「ん、そっか。じゃあちよつとコイツ向こう側の開けたところまで引っ張っていくから、枝適当に持ってきてくれ」

「了解しました！」

結論から言うと、軽く腐敗していたのもあつて意外と早く火が燃え移った。

火葬場の火とかはかなりの高温だつていう話を聞いていたので、通常の焚火くらいの大きさになった火の横に遺体を枝で引っ張って、覆

う様に落ち葉をばら撒いたり、更に木の枝放り込んでそれなりに大きい火でしつかりと焼いた。

アオイに持つてきてもらった枝を適度に放り込んで、大きくなり過ぎない様に注意をしながら、アオイと並んで炎を見守っている。

「知り合いだったのか?」

「あー、まあ、一応上司でした。碌に会った事ありませんでしたけど」  
「会った事がない?」

「基本偉い人は自室と家を行き来するだけです。現場に出る事はまずありませんねえ」

現場……奴隷管理官つてなにするか分からねーけど、直接奴隷と会って指示したりはするだろうし……。

「なんというか、お前さんの仕事がよく分からないな。経理だったんだらう?」

「はい! あとたまに暗殺とかしてました!」

「ああ……たくさん殺したってそういうことか。仕事?」

「はい。……ああ、でも、たまに普通に襲われそうになったんで返り討ちにする事もありましたねえ」

「やっぱり物騒だな、お前の所」

経理ですら暗殺の仕事任せられるとか、疑心暗鬼で内部がボロボロになってそうだ。

「コイツは暗殺とかやってた……わけないか」

あの肥満体で暗殺ってイメージがちよつと湧かない。毒とかなら分からんでもないが。

「ああ、この人はコネだけで配給優先が高い閑職で偉ぶっていただけの人ですのでえ……まあ、その、特に面白い話がある訳でもないです」

「いやまあ、見知らぬオッサンの愉快的話聞かされてもな」  
それも本人の死体の前で。

灰や燃え続けている木のおかげで直接見なくて済んでるけど。

「まあ、今日はコイツの骨をキッチンと埋めてやってから帰ればいいだろう。成果がなかったのはしょうがないし、とりあえず食う物はある

んだ」

「少しずつ貯蓄しておいて正解だった。

野生動物から食料をどう守るかっ言うのは課題だけど、やっぱり色々と研究しておいて損は無い。」

「ですねぇ。ところでツールさん、スキルの方はどうですかあ？」

「ん？ 今の所多分変化はないと思うんだけど、どうしたんだ？」

「ああ、いえ……先日何も新しい物が増えなかったというのが気になってまして」

確かに。そこは俺も気になっていた事だ。

「新しくスキルを習得するための経験が足りなかった……とか？」

「でも、ツールさんは活動量日に日に増えていますよね？」

「でもまあ、やっている事は基本的にスキルで得た知識をなぞっているだけだしなあ」

「……じゃあ、活動とかは関係ないんですかねえ」

それな。

正直、スキルが生えてくる理由というか条件がイマイチ良く分からない。

「仮に俺が行った行動の結果生えてくるってなると、俺毒を飲んでた事になるだろ？ 毒耐性なんてスキルが取得できる訳——」

「本当に飲んじやったのでは？」

「いや、そんな……事は……」

あつ。

もし、元の世界の間の食中毒とかが経験の内に入るんなら……。

そういうや中学の頃に、なんか重い食中毒で緊急入院した事もそういうあつたし——サルモネラ菌。

初めて本気でヤバイ熱と嘔吐を体験して死を覚悟したものだ。

最初の二日は何も口に出来ずに点滴だけで過ごしたのは、今でも苦い思い出だ。

「……………」

「？ 心当たりが？」

「や、食当たりがカウントされるかどうかちよつと、な」

「ああ〜」

見知らぬ男の遺体を焼く。

そんな、この非日常の集合体の様な世界で行う更に非日常的な行為を行いながら、俺とアオイは取りとめのない会話をしている。

多分、これはとてもおかしい事なんだろう。おかしい事なんだろうけど……。

何か可悲しいわけでもなく、不快感を覚える訳でもなく。

こんな非日常ですら、なんだか楽しんでる……うん、楽しんでいるのだろう。

(俺、向こうに帰った時に大丈夫なのかねえ？ 変な事になってない？)

今のままだと、なんとというか社会に適應できる自信が全くないんだが……

なんとというか、うん。泣ける。



「思ったよりも時間かかっちゃいましたねえ」

「だな、ゲイリーにアシユリー怒ってねえといいけど」

「雑談をしながら埋める場所を掘って、一応の墓標代わりにデカイ石を運んだのだが、こちらが思っていた以上に焼けるのに時間がかかってしまった。」

ある程度は妥協して埋めてきたのだが……。

それで再び川を渡って、一応持ってきていた火種から起こした火で軽く暖を取って、気が付いたら結構遅くなっていた。

「お二人ともそんな事で怒る方ではありませんよう」

「まあ……いや、それでも遅れてしまったしな」

「あー、ご飯待たせてしまっていたら確かに申し訳ありませんねえ」  
オレンジ色に染まりつつある河原を肩を並べて歩いている。  
もう何度も通り慣れた道だ。

もうすぐ湖が目に入り、下流のほうの拠点が焚いた火の灯りがちら  
つく頃……

「んあ?」

「……おかしいですね」

いつもならばすでにちらついている炎の灯りが見えない。

この距離ならば、火の傍に座っているゲイリーやアシユリーの姿が  
見えてもおかしくないはずだ。

お互い首をかしげながら拠点へと足を向ける。

徐々にはつきりとしていく拠点の姿に俺たちはますます首をかし  
げる。

人の気配がしない。

近づけば近づくほどに、誰もいないと言う事が確信に近づく。  
そうしてついにいつもの、俺たち四人の拠点に辿りつく。

「……焚火は燃え尽きてますね。まだ少々灰が熱いですけど」

アオイがその場に膝を突いて、石に囲まれた焚火跡を調べる。

俺も同じように膝を突いて、ある物を拾い上げる。

「作ったばかりの弓だ。……矢も散らばっている」

「トールさん、その土の形をあまり変えない様にしてください」

いつもの語尾を伸ばすような緩い喋り方ではなく、真面目な——い  
や、ひよつとしたらもつと違う気質の物を声に込めたアオイ。

反発する理由はない。ゆつくりと、出来るだけ一度自分が足を置い  
たであろう辺りに足を運びながら後ずさる。

火の辺りを調べたアオイは、今度は俺の方へとやってきて観察を始  
める。

「……引つ掻いた跡がありますね。跡から見て恐らく左手でしょう」

「右は?」

「そっちはありません。多分ですが、背後から一気に拘束されたんだ  
と思います。効き腕を封じるのは定石ですし」

「それは……つまり、獣に襲われたとかじゃあない？」

「もしそうなら、血痕があるはずですし……」

ああ、そりやそうか。

となるとやったのは人間で……。

「アシユリー？」

やっぱり感情を抑え切れなかった？

……いや、違う。

アイツは訓練を受けているだけあって頭が切れる。無意味に行動を起こすハズがない。

となると、切っ掛けがあつたはずだ。

——ただ、見られているって感覚は凄くするんですよねえ

反射的に、俺はサーチを発動させる。

わずか射程四メートルとはいえ、逆に言えば近距離で何かが隠れていたら俺には分かる。

「——っ!!? アオイ！ 後ろだ！」

そしてなんとなく、アオイの方を真つ先に向いた俺は正しかった。

俺の叫び——いや、口を開いた時点で察したのか、アオイが普段のおつとり具合からは想像も出来ない程素早く刀を抜き放ち、振り向きながら素早い一太刀を浴びせる。

何も無い。そう、眼には映らない。

だが、俺のこの訳のわからん『眼』は確かに捕らえていた。

アオイの一太刀を、ナイフで受け流す人影が。

「あゝゝ。なるほど」

アシユリーが行動を起こした理由が理解できた。

「悪い、俺には丸見えだから……それ、解除してくんない？」

俺が、俺の視界でハイライトされている『透明な女』に向けてそう言っていると、長い髪を束ねた女の杵をかたどったナニカは、静かにキチンとした女の姿になっていく。

アシユリーと似たような服を着た、藍色の長い髪の女。



かなりキツイ目をしているその女は、真っ直ぐにこちらを睨んでく  
る。

「タケウチ＝ツール」

おう、フルネームでツール呼ばわりされたのは初めてだぞオイ。

「やはり、貴様は危険だ！」

知るかよ。ナイフ構えんな。

尖った物を人に向けちゃいけませんって習わなかったのかてめえ

コノヤロー。

「アシユリーはどこだ？」

そもそも、話すべきは名前も知らないコイツじゃない。

ずっと一緒に行動していた、仲間。

ああ、仲間だ。

アイツと話さない事には何も解決しない。

「ハハハよ」

後ろから声がして振り返ると、そこには見なれた顔が二つ並んでい  
た。

「ツール……っ……すまない……っ！」

首元に刃物を突き付けられた、相変わらず綺麗な顔のゲイリー。

そして、

「そうね。確かに、まず言うべきは謝罪の言葉ね」

そして、そのゲイリーを拘束しながら首元にナイフを突きつけてい  
る女。

「……アシユリー」

アシユリーなら、サーチスキルの射程を知っている。

恐らく、離れた所で隠れていたのだろう。

「だーから言ったツスよボクは。絶対バレるから余計な事はするなっ  
て」

その影から、小柄な金髪の少女がひよっこり顔をだして肩をすくめ  
ている。

「トール君」

その少女のぼやきなど耳に入っていないかのようにアシュリーは、  
ずっと一緒にやってきた俺たちの仲間は、ゲイリーを拘束したまま  
真っ直ぐ俺を見る。

「ごめんなさい。状況が変わったわ」

「ああ、やっぱり。アオイが感じた視線っていうのはお前の仲間達だったのか」

俺の目の前にはアシュリーと小柄な金髪の女の子、そしてアシュリーにナイフを突きつけられているゲイリーが立っている。

そして俺の後ろでは、今もアオイがああ藍色の髪の子に向けて刀を向けているのだろう。

ヤバイ。いつもは不安要素の一つだったアオイがここに来てものすつごく頼れる女になってる。

「あら、アオイちゃんは気付いていたのね？」

「ええ。ただ、まさかアシュリーさんのお仲間が来ているとは思いませんでしたあ。たしかに、私達の中で一番最初にやらかすのは貴女だと思ってましたけど……予想をはるかに超えて早かったですねえ」

ねえ、その情報つてもっと早く俺に言ってくれてもよかったんじゃない？

……いや、駄目か。

中立である事を求められている俺に、そういう情報を流したら意味が……。

いやでも、ゲイリーもアシュリーも不安煽るような事を……ああ、そう言う事か。

コイツらホント面倒くさいな。

仕方ないけど。

「目的は俺のスキルか？」

「まあ、そういうことよ」

半ば当てずっぽうだったのだが、どうやら正解だったようだ。

「やっぱり君、お姉さんの好みね。普段は可愛いくらい抜けてるけど、ここぞと言う時の洞察と判断はさすがと言っていていいわ」

そう言っつて、いつものようにチロツと軽く舌舐めずりする姿は相も変わらず似合っつてて綺麗で……

こうして敵対したのに、それほど憎くはないのはあれか。俺っつてば

美人に弱いのか？

(さあて、どうしたもんか……)

まいった。今の所、全く解決方法が思いつかない。

「俺にどうして欲しいのさ？ リーダーの御役目譲渡？」

「君の持っているデバイスよ」

「？ デバイス？」

「ああ、スマートフォンだったかしら？ その事よ」

「……………ふうん」

ゲイリーが何か言いたそうな目で、こちらを見ている。

お前の泣きそうな顔が見れるとは思わなかったよ。いやマジで。

「こちらの条件としては、ゲイリーちゃんを助けてあげる。君、それなりに親しくした人間が目の前で死ぬのに耐えられないでしょう？」

たりめーだバカヤロウ。

ゲイリーも、お前にも当然死んでほしくないし、出来れば一緒に仲良くやっていきたいんだよ！

「……………答えを出すのは置いといて、だ。なぜ動いた？ 別に頭数が揃ったからってわけじゃないだろう？」

「それも理由の一つ。分かるでしょう？ アタシ以外に仲間がここに来たって事の意味」

「……………つまり、ゲイリー側の魔術師もこちらに来ている可能性があるから、敵の頭数が揃う前に少しでも有利な状況を作っておこうと？」

「ええ、それが二番目の理由」

ゲイリーは、アクションしたくても出来ないようだ。

仕方ない。首元にあのやけに斬れるナイフ突きつけられてりや動けないのは無理もない。

まあ、ここでゲイリーが体術とかでアシユリーに反撃でもしたら、そのまま決定的な対立は避けられそうにない。

そう考えると、現状は悪くない。最悪の中では、だが。

「じゃあ、一番は？」

「……………君の頭よ」

……………。

んんんんんんんんん？

「頭がどうかしたのか？ スキルって意味合いじゃあねーだろ？」

「そのスキルの習得で、君の身体の変異が確認されたわ」

「まあ、こんだけ変な力手に入れてんだから……ガンとかになっても驚かないよ」

割とマジで、その可能性はずっと考えていた。

別に医療に関してなんて知識は無いけど、こんだけ身体のかなにかがポイポイ変わってりやヤバい事になっていてもおかしくないだろう。

すぐにぶつ倒れるような異変は感じなかったから、もうこのまま使い続ける事にしただけ。

「この間、君が『野草知識』を習得した時の事、覚えてる？」

「ああ」

「習得した瞬間に、自分の頭に違和感は覚えなかった？」

「別に」

「……君の頭の中に、アタシ達と同じサブブレインが埋め込まれているわ。つまり、ダウンサイズした脳が」

お前は何を言っているんだ。

「手術なんかの類はした事ないって言っただろう？」

「ええ、聞いたわ。それに君がそういう類の機能を埋め込んでいない事はアタシも知っていたわ。でも——」

「でも？」

「君がスキルを取ったその瞬間、君の頭——こめかみの辺りにサブブレインが……その……生えたのよ。突然」

「……………」

「多分、脳への接続も同時に完了しているわ。少なくとも野草に関する知識は……不可解な部分もあるけど、そのサブブレインが君の脳に直接送りこんでいるの」

「……なるほど」

セーフ。

どこからそんな物騒な物が頭に埋め込まれたかは知らんが、とりあ

えず問題なし。

全く不可解な物ではなく、アシユリー達の世界ではごく普通の技術ならば、頭の中に生えてもそうそうヤバい事にはならないだろう。

万が一の事態が起きても、アシユリーや他の二人なら最悪緊急時の対処法も知っているハズ。

だが、つまり――

(元々そんな気はないけど……アシユリーを切り捨てたり、敵対するのは悪手になる)

という事は向こうも考えているだろう。

あー、やだやだ。

「これから先、更にアタシの仲間が来る可能性がある。いや、高い！  
この子の所の人間だって！」

グイっと、ゲイリーを抱き寄せるように腕にアシユリーは腕に力を込める。

ゲイリーの顔が更に歪む。

「おい、それ以上は気管が締まるから止めてやれ」

「君次第よ」

………こんにやろう。

「これから先、ここが戦場になる可能性が出てきた。使い様によってはとてつもなく有用な……しかも敵にも味方にもなり得る君という存在を見逃すわけにはいかないの！」

「……」

「デバイスを渡した上で、君の行動を制限させて欲しいの。決して君の悪いようにしない。ゲイリーも……捕虜として丁重に扱わせてもらおうわ」

「具体的にどうするつもりだ？」

「完全な武装解除と監視。特に、今は魔法が使えないしね」

「で、俺は？」

「……とりあえずデバイスの回収と、スキルは……まあ、必要に応じて」

つまり、スキルの習得に関しては全部向こうが握るって事か。

……なるほど、破壊じゃないと。

「俺は、もうお前らのリーダーにはなれないか？」

「日常においては、むしろ君の方が適任よ。これまでと同じでいいわ。ただし、制限は付けさせてもらう」

それはイコールもうリーダーじゃねえって事だよ。傀儡だろうが。

つまり――

「アオイ」

「はい」

気が付いたら、藍色の髪の女がジリジリと移動している。距離はそのままだ、アシュリーや金髪の子と合流しようとしているのだろう。

多分、今更こつちを襲うつもりはないんだろうが、アオイは一切隙を見せずに刀を構えたままだ。

「お前、前に邪魔な物を斬りますって言ってくれたよな」

「はい」

「んじゃあ、斬ってくれるか？」

アシュリーが、そしてゲイリーも驚いた顔をしている。

藍色の髪の女も似たような顔をした後、その場を飛び退いて距離を詰める。

金髪の子は……なぜか、ニコニコと笑っている。

「邪魔な物、ですか？」

「そうだ。分かるか？」

頼むから分かってくれ。

インパクトがなきゃどうしようもないんだ。

勘の鋭いお前なら――

「……………ああ」

一拍置いて、アオイは小さくつぶやく。

そして、

「本当にいいんですか？」

「当然の結末って奴だ。構わんからやってくれ」

アオイはいつもと違う能面の表情のまま、刀を一度鞘に戻し——構える。

「ま、待ちなさいツール君！ この距離なら、アタシがゲイリーを殺す方が早いわ！」

アシユリーは慌ててそう叫ぶが——遅い。

藍色の髪の女が、ナイフを構えたままこちらに飛びかかるよりも早く鞘から刃は抜き放たれ——

俺の背中を斬り裂いていた。

激痛と共に、嘘みたいな水音が背中で弾け——鮮血が飛び散る。

……サンキュー……アオイ……。

お前なら、分かってくれると思ったよ……。



## 『トール』

「な……………」

目の前で起こった光景が、アシユリーには理解できなかった。ずっと一緒だった男が、地面に倒れ伏している。

肺まで傷ついたのだろうか？ 口から時折ゴゴゴと血を吐きながら、涙で顔をくしゃくしゃに歪めながら――

――口元だけは笑っていた。

「君は……貴女は！ 何をやっているのっ!？」

その男と同様に口元に笑みを浮かべている女は、倒れた男の足に、先ほど彼の血で染まったばかりの刃を突き立てる。

男は苦悶の叫びを上げ、涙を更に零す。

だが、自分を斬りつけた女への恨み事の類は一つも出ない。

口元を吊り上げるだけだ。

「邪魔になった人を片付けているだけですよお？」

「あ……………あつ。ただ、そんだけの……………話……………だっ」

何を当たり前の事をという口調で男を刺している女は嘯く。

そして、女に刺されている男は「見て分からないのか？」と言いたげに、苦しみながら嘯く。

「アシユリー……………ゲイリーも……………すまなかつた」

アオイが刃を引き抜き、呆気にとられて飛びかかるタイミングを逃したヴィレッタに向けて再び刀を向ける。

そしてトールは地面に爪を立て、片方は刺されて血がドバドバ流れているにも関わらず必死の形相で立ち上がる。

「俺あ、お前らまとめめるリーダーの器じゃなかつたみてえだ……………」

血反吐を吐いて、激痛に耐え、それでもなお立ち上がる。

訓練された兵士でも、そう易々とは出来ないだろう事を眼の前の少年はやってのける

「お前ら……………直接的な衝突を抑えるために俺をまとめ役にしただろう？ そして、それに俺は今……………失敗しているっ」

「違う！ 君は……………」

失敗したのではない。

そもそもいつかこうなるのはほぼ確定だった。いつか破るつもりでツールをリーダーとした。

アシュリーも、そしてゲイリーも。

もし、アシュリーではなくゲイリーの仲間が来ていたら、多少の違いはあれど同じような行動を起こす可能性は高かった。

けど、それを口にするには出来なかった。当然だ。いつか裏切ると宣言する人間なんているはずがない。

そして、こんな状況とは言え——いや、こんな状況だからこそツールという希少な技能を持つ人間の前で、それを認める事は二人ともできなかった。

「文字通り、命のかかった願い事を！ 頼みを！ 破つちまうかどうかっていう瀬戸際なら、命張って止めるしか……ねえだろうが……っ！」

あゝあゝ、クソツタレ！」

きつとそれは、ツールも分かっている……ハズだ。そう思っていた。

アシュリーも、ゲイリーも。

いや、それは合っている。

ただ二人が読み違えたのは、ツールという男がそれをどれだけ深刻に受け止めていたのかという一点に尽きる。

「おう、アシュリー……お前……帰るには……スキルと魔法が必要になると考えたんだろ……」

「——っ」

凶星を衝かれたアシュリーは、一瞬だけ自分の胸元に押さえつけているゲイリーに視界を落とす。

「ゲイリーからの話で……お前らが魔法をそれほど理解していないってのは分かっていた。更に、その二人は知らんが……お前は魔法に関わりの深い所において『こつち』に……来た……っ」

それも当たりだった。

他の人間——ツールやアオイは分からないが、自分達の所に戻るには自分達がいた『環境』という要素が多かれ少なかれ必要になると、ア

シユリーは推測していた。

こちらの世界を脱出し、元の世界に帰る。

大雑把に言えば、元の世界への『目印魔となり得るもの法』を確保した上で、この世界に関する『手掛スかりキル』を元に対策を練る……つもりだった。

その計画が今、崩れようとしている。

「アオイっ!!」

それ以上、ツールに喋らせるわけにはいかないとアシユリーは声を張り上げる。

いつもの『ちゃん』付けではない。

アシユリーは敵意を宿した目で彼女を睨みつけるが、アオイもまた、どこか光を感じさせない瞳でそれを真っ直ぐ受け止める。

「人の話はちゃんと聞きなさいってお母さんから言われませんでしたかあ?」

アシユリーは咄嗟に、アオイに向けて手にしているナイフを投げつけようとするが、その手が止まる。

確保しているゲイリーの反撃を恐れた——訳ではない。

それよりも早く、アオイの刀がツールの首に添えられていたからだ。

視線はすでに、アシユリーの方を向いていない。

一瞬の隙を付いてアオイを殺そうとしたヴェレッタを睨みつけ、牽制している。

「アシユリー……っ、選択肢は二つだ」

すでに、普通の人間ならば意識を失くしているだろう血を失いつつ、震わせながらツールは口を開く。

「どっちかが犠牲になる選択なんて……俺にはできねえ。だから二つだ」

前は斬られていないハズなのに、流れ出る血が彼の白い服の全てを真っ赤に染め上げている。

「ここで有力な手掛かりを失うか、お前達三人が俺をリーダーとして認めるかだ……っ」

咳き込む度に血が飛び散り、トールの口元を赤く汚す。

「さあ、選べー！　じつ……時間はあんまねえぞ……っ!!」

それも事実だ。

今すぐに傷口を押さえて——いや、縫い合わせて止血しないと死んでしまうだろう。

アシュリー自身は失くしてしまったが、今ではサバイバルパックが二つある。

抗生物質、消毒剤やステロイドも。今なら、間に合うかもしれない。だが、だがしかし——

「あ、トールさんも言いたい事は全部言っちゃったみたいなので、もう少し斬っておきますねえ？」

その一瞬の逡巡の間にアオイは、先ほど刺した足とは別の足に、いつの間にか抜いていたアシュリーの——つまり、アオイが腰に下げていたナイフを突き立てた。

苦悶の絶叫を上げ、その場に倒れたトールはもう言葉を語る余裕も無いだろう。

ただ真っ直ぐ、泣いているのか笑っているのか分からない顔で、アシュリーを見ていた。

「さて、答えを出すなら早くしてくれませんかあ？　トールさんが死んだら、貴女達三人をブチ殺して自分の首を掻っ切る仕事が残ってるんですからあ」

「アナタ……っ!」

ただ、ゲイリーの拘束を認めるだけで安全が手に入るというのに命を賭けるトールが、そしてそれを受け入れているアオイという存在が、アシュリーには良く分からなくなってしまった。

「分かってるのアオイ!?　このままじゃ彼が……トール君が死んじやう!」

「何を言っているんですか、そうさせたのは貴女達じゃないですかあ」  
♪

実行犯が笑顔で嘯く。

アシュリー自身半ば分かっていたが、言葉だけではアオイという女

は揺らがない。揺さぶれない。

「貴女は、トール君と一緒にここにいたいんじゃないの!？」

「この人が、自分を曲げて選んだ道を一緒に歩きたいとは思いませんのでえ」

せめて隙でも引き出せれば。

そう思っ浮かんだ言葉をとにかく口にするアシュリーだが、全てが無意味だ。

笑みこそ浮かべたままだが、一言一言発するたびに殺意が質量を持つて、似た戦闘服に身を包む三人に圧をかける。

「貴女達は、揃いも揃ってトールさんを舐めてかかっていたでしょう？ 便利な道具を産み出すだけのただの凡人だと。だから上っ面の友情や敬意、安い色仕掛けで絡め取ろうとする。……浅はか」

もはや言葉の喋れないトールに変わり、今度はアオイが口を開く。「どこまでも真っ直ぐに、愚直に、自分でも通らないと理解している理想論に沿ってあがき続ける狂人をなぜ、御せると思ったのか」

口調がいつもと違う、重圧を感じさせる声に誰も驚きはしない。それくらいの事は出来る女だと誰もが思っていたからだ。

トールを本気で危機にさらす様な事はしないと、二人は半ば確信していた。

アオイという女からは、トールという男に対しての依存に近い感情を持つている事は——それだけは理解できていた。

逆に言えば、アシュリーもゲイリーもそれしか分かっていなかった。

「頭ずが高い」

今、アオイはトールを斬りつけ、刺し貫き、地べたに這いつくばらせている。

不思議なのは、加害者と被害者の関係と言っいい二人が、今もつとも互いを信頼していることだった。

「さっさと膝まついて、額を地面にこすりつけて降参してくださいよ。私も貴女達殺すの面倒ですし、自分の首搔っ切るのなんていやなんですから……」

ならばそちらが刃を引け、などという言葉は出てこなかった。ただただ、一見いつもと変わらない様子で話す女が怖くて怖くて仕方がない。

「もう分かったでしょう？ この人は貴女達のいいなりになるような人間じゃありません」

アオイは手にした刀をトールの左肩の辺りに軽く突き立てる。

「さあ、どうしますか？ トールさんや私と一緒に死ぬか、生きるか……ほら。ほらっ。ほらあっ！」

そうして挑発するように、じくりつじくりつと刀を動かして肩の肉を抉る。

出血量も傷も、とつくに致命的というレベルに達していた。

「……めて……」

「はい？ よく聞こえませーん♪」

「もう止めてー！」

「何をですかあ？」

ほとんど動かなくなったトールの、その首元を狙って刃を突き立てようとするアオイ。

そのアオイに向けて――

「お願いだからもう止めて！ この子は解放する！ トール君の意向にも従うから……だからっ！」

ナイフを放り捨て、ゲイリーの拘束も解く。

気管を締めつけられていたゲイリーはその場に崩れ落ち、むせている。

ヴィレッタは反射的に解放されたゲイリーを拘束し直そうとするが――なぜか、いつの間にか距離を詰めていたテッサがヴィレッタの動きを牽制する。

笑ったまま、邪魔をするなどといったげにヴィレッタを見ている。

「アタシ達の負けよ……負けよ！ だから早く手当てをっ！」

「ふう……ん」

「……………だ、そうですよ。ツールさん」

小さい穴から空気が漏れるような呼吸音をさせているツール。  
アオイはしやがみこんで、ツールの耳元でそう囁く。

「最後の賭けには勝てましたか？」

その言葉に、自分が吐いた血でベトベトになった顔をニヤリと歪めてツールは返す。

その手に握られているのは、アシユリー達が重要視していたデバイス。

スマートフォンが握られていた。

その画面には、こう書かれていた。

『スキルの習得が完了いたしました。使用しますか？ Y/N』

震える親指で、ツールは『Y』の部分を手静かに押し――

――体中が、蒼い光に包まれる。

041：やだこのスキル、怪しすぎ？

おおおおおおおおおおお………死ぬかと思った。  
いや死ぬつもりだったんだけど………堪えるなあ。  
とりあえず傷は治ったけど、血とか水分が足りないのか？  
なんか無性に水が飲みたい。

「大丈夫ですかあ？」

「ああ、なんとか………とりあえず水飲みたいな」  
今度水筒作るか。

実は、水筒の作り方というのは前にもスキルは調べたのだが、一番丈夫そうな奴は、必要な材料に大きめの動物の胃袋や膀胱が必要ってなってたからついつい躊躇っていたが………今度獲物が引つかかったら作ってみるか。

「？ んお？」

そんな事を考えていたら、首筋に冷たい物を感じた。遅れて熱い物を。

——ああ、アオイか。

気が付いたら、刀の刃が首に添えられていた。  
というか、ちよつと斬れてる。

………さつき取ったスキル、すぐに使えるかなあ。

「おやおやあ？ どういうつもりなんですかあ？」

俺からは見えないが、どうやら三人の内の誰かが——っていうか、視界の隅っこにアシユリーと金髪の子は映ってるから、残るあの冷たい感じの美人さんか。

うん、まあ、口約束だもんなあ。俺の死が遠ざかった瞬間にアオイを排除しようとするのは………まあ、こう言っちゃなんだけど普通だ。

「人質役もつらいなあ………」

思った事がつい口を付いて出ると、後ろから聞き慣れない声がす



る。

「貴様は——なんとも思わんのかっ?！」

「……んん?！」

何をだよ。

「この女に全てを預けると言うのか?! 容易く自分を斬り、刺し、抉った女を!」

いや、それ望んだの俺やし。

「正直に答えるが……疑う理由が一つもない」

恐れる理由ならちよいちよいあるがな!

さて、さすがに中途半端に首を斬るのはごめんで、かと言っていざというときにはスパッとされなきゃだめなのでなるべく首を動かさないえ横目で見ると、やはり藍色ポニーテールがこつちを睨んでいる。

やっぱり、あのナイフ持っているか。

となるとあの金髪の子も持つてるだろうし、無事に終わればナイフ二本追加か。いろいろ出来る事が広がりそう。

「——今、首に刃を当てられていてもか」

だって警告の方はとっくに終わってるし。

「次は痛くない様に斬ってくれるだろうし……まあ……いいかなあ……なんて」

多分、アオイの腕ならやってくれるだろう。

あの切れ味のいいナイフも持っているし。

……心臓ぶち抜かれたら痛みを感じる前に死ねるよな?

「貴様達は……いや、貴様は……」

ん?!

「トールⅡタケウチ!」

トオルです。

いや、今更だけどき。

フルネームなのにトールと呼ばれるとすんげえ違和感ある。

「お前は一体……一体なんなんだ?!」

だから……。

現在絶賛遭難中のただの男子高校生です。



「本当に良かったのか、トール？」

今、拠点にいるのはゲイリーとアオイ、そして俺だけだ。

アシユリーは面倒起こした罰として新人二人を連れて食糧を取りに行かせている。

「むしろ、ゲイリーこそすまんかった。勝手にアシユリー達をこのまま置いておく事にして」

アオイは特に異論なくニッコニコと笑っているが、ゲイリーに至ってはつい先ほどまで殺されかかっていたわけだからなあ。

死ぬなら死のうと決めてた俺よりも状況は酷かったハズだ。

「いや。……俺はただただ足手まといになっただけだ。思う所がないわけではないが……君の意見に従うさ。ああ、大丈夫だ。もう、君の足は引つ張らない」

いや、あの、そこまで深刻そうな顔しなくても嫌な事は嫌と言ってくれた方が——

本当に大丈夫か？

いやまあ、まだあの三人が仲間になるかはまだ分からんけど。

「俺が言っているのは、あの三人をまとめて食糧取りに行かせた事なんだが」

「新入りは場所知つとかなないと不便だろうし……それに、一応考える時間は必要だろう」

「……わざとか」

「まあ、一応」

アシユリー達三人も、今後どうするか敵対ルートも含めて考える時

間が必要だろう。逃げるのなら、そのための時間も含めて。

……出来れば仲良くやっていきたいんだけどなあ。

まあ、もうしばらく待とう。帰ってこなかったら、念のため俺たち三人で飯取りに行つて――

あいつら、逃げるのは構わんが食糧根こそぎ持っていったりしないよな？

さすがにそんな事しやがったら全力で追跡してやるわ。

捕獲してエロいおしおき待たなしだかんなこの野郎！

……くすぐりとか。

「まあ、多分帰つてくるだろうなあ」

「ですねえ。あの人達が自分達の世界に帰るには、なんだかんだでツールさんが必要になりそうですし」

「……実際の所どうなのかねえ、スキルつてそういう方向に役に立つのか？」

「私は間違つていないと思いますよお？ だって、この世界に来て変異が起こつたのはツールさんだけですし」

そこはまあ、確かに。

スキルのおかげでどうにか生き延びれているけど、おかげで厄介な状態にもいるというこの現状。

泣ける。

「そうだ。ツール」

「ん？」

「頭は大丈夫か？」

……………。

喧嘩売つてんのかコルア?!

「奴らの機械が、頭の中に植え付けられているのだろうか？ 違和感とかないのか？」

「あ、ああ。そっちの事か」

機械――サブブレインとかいう物があるらしい右側のこめかみをトントンと叩いてみるが、特に違和感はない。

「特になんともないな。まあ、正直入っている物が何かは分かってい

るんだから、そこまで恐れる事はねえかなってのが俺の意見なんだけ  
ど」

強がりでもなんでもなくマジである。

そう、むしろ今怖いのは――

「ぶつちやけ、コイツに比べたら全然アリだよ」

そうして俺はゲイリーの目の前にスマホを突きつける。

つい先ほど俺の危機を救ってくれたが、通常時ならば恐らく絶対に  
取らなかつただろう、魔法以上に恐ろしい想像をさせるスキル。

――自己再生。

それが、俺の体に新しく追加された特性である。

経験等がスキルを構築していくのではないという俺とアオイの雑  
談がてらの検証を裏付ける事になったのは喜ばしいが……。

ねえ、これ本当に大丈夫なん？



「場所を教えると言つても……ボク達、とつくに隊長経由で知ってい  
るんすけどねえ」

もう完全に暗くなった夜の森――それほど木々の茂りは濃くない  
ので、林と呼ぶべきだろうか。

月明かり以外には何も無い道中を、松明一つ点けずに三人の女が歩  
いている。

「隊長。あの男、本当に民間人なのですか？」

「……そのハズよ。ええ、そのハズなんだけど……」

表情が明るいのは一人だけ。金髪の少女――テツサだけだ。

残る二人——アシユリーとヴィレッタは、顔を曇らせながら先頭を  
行くテッサの後をトボトボとついていつている。

「あれは学生の持つ精神性とは余りにかけ離れています。……狂人の  
一言で片づけられるものでもありません」

「分かつてるわよ、そんなの」

当たり前の事を何度も繰り返すヴィレッタに、アシユリーはやはり  
同じように繰り返していた。

「……浅はか、か」

アシユリーは、これまで共に生活をしてきた女が、見たことのない  
冷たい声で告げた言葉を自分の口で繰り返す。

「確かに……見ていなかったのかもね。色々」

アシユリーは、籠に回収したばかりの干し魚を揺らしながらため息  
を吐く。

「あれだけの事があったのに、一応逃げる時間をくれる辺り普通じゃ  
ないわよね」

「いや、初めからどう考えても普通じゃないツスよあの人。見てるだ  
けでも分かるじゃないですか」

一方、ずっと上機嫌なテッサは鼻歌交じりで、干し肉や野草が入っ  
た籠を大事に抱えたままスキップしている。

「そういうえば、テッサ。お前は最初からあの男を狂人と見ていたな」

以前刃物を向けられた時の経験を思い出したヴィレッタが呟く。  
「お前から見て『ツール』という存在はどういう男なんだ？」

「んんん？ 分かんないツスかあ？ ヒントはゴロゴロあったと思う  
んすけどねえ」

まるで芝居かダンスでもしているかの様に華麗にクルツとターン  
して二人の方に向き直ったテッサは、ニッコニコ笑ったまま——

「あの人、自分以外の人なんてどうでもいいんすよ。あるいは、滅茶苦  
茶自分が第一なんですよ」

そう言うのだった。

「……貴族様を助ける事が、ツール君にとって大事だったって事？」

「いやあ、そういうレベルじゃなくてえ」

再びクルリと回転して、ゆらめく焚火がチラチラと見える拠点の方へとテツサは顔を向ける。

「隊長達じゃあ理解できないでしょうけど、そういう事でもないんすよ。きつと。アオイって人ならもうちよつと分かっていると思うツスけど……」

とても楽しそうに。

あるいは、幸せそうに。

鼻歌交じりに少女は口を開く。

「いやあ……楽しくなりそうツス！」

第二章：脱出大作戦！ フロムフォレスト（副題：葛藤）

042：一難去つて、また朝が来る

「というわけで、今日からお世話になるテッサツス！ 色々やらかしちやつたけど仲良くしてくれると助かるツス！」

お、おう。

お通夜の様な雰囲気のままよりは何倍もマシだが、君えっらいフレンドリーだね。

「おお。もう知っているみたいだけどツールだ。よろしく頼む」

でも正直助かったよ。特別にツール君ポイントを進呈しよう。

十点貯めれば何かいい事をこつそりとしてあげるよ。

……うん、なにか考えとくよ。覚えておけば。

「ウツス！ 隊長やむつつりポニー共々よろしくツス！」

「おい、誰がむつつりポニーだ」

いや的確だと思うぞ。

君さつきからずつとずつとじーじーって俺の方睨んでんだもん。

もういつその事むつつりの称号受け入れて少しはこつちに歩み寄ってくれ。

「……ヴィレッタだ。しばらくの間世話になる」

しばらく。

しばらく。

……まあ今はそれでいいや。

はいどうも。とりあえず出来るだけ仲良くしていこう。

なに、もう何日かこうして一緒に火を囲んで同じ物食べたり飲んだりしてれば慣れてくるさ。

色々裏に抱えている物があつたとはいえ、ゲイリーとアシユリーも一応は仲良くやれてたわけだし。

うん、上っ面だけでも仲良くできるってのは大事だよ？

後々なにか起こす？

……また身体張って止めるかあ。

大丈夫大丈夫、そのうちなんとかなるって俺は信じてる。

ゲイリーは、どうやらあつさり拘束された事を悔やんでいるみたいだけど、俺個人としてはアシユリーを信じ始めてたって事で高ポイントだよ。

うん、ゲイリーにもツール君ポイント。

で、テツサとヴィレッタのとりあえずの寝床なんだけど――

「アシユリーの所、三人入る？」

さすがにアオイもゲイリーも完全に無防備な寝ている所に入れるのは反対だろうし、ある意味で命の危険性がない自分なら……いや、でも男だしなあ。

「さすがに無理よ。最低でも一人は別になるわね」  
だよなあ。

「ゲイリー、今日は俺の所で一緒に寝よ――うおうっ?!」

ゲイリーさんや、なんで突然肩を跳ねさせた？

「あ、いや、空いた所に二人を泊めようと思ったんだけど……その、大丈夫？」

「あ……ああ……その、ああ、問題ない。大丈夫だ」

待て、本気で大丈夫か？

もうちよつと説得とかで揉めると思って、正直自分やアオイ、ゲイリーの三人がこの拠点、アシユリー達は当面の間は上流の拠点かその近くで生活するってスタイルに持っていこうと思っていただけだ……。

間を取るための探りで踏み込んだらOK出てしまったというか、そんな感じだ。

正直に言おう。失敗したと思っている。

いるのだが、今更提案するのもなんか違う。

それに、ゲイリーにも何か考えがあるのかもしれないし……。

(ちまちま探りいれて軌道修正する方向でいいか)

実際、今回のトラブルで最大の被害者と言っているんだ。しばらく



彼に肩入れた所で文句は出ないだろう。

……ああ、でもアシユリーも出来るだけフォローじゃないけど、ゲイリーと話し合う場は作らないと。

新入り二人の事もある程度はちゃんと把握しないと悪いし……。ああ、面倒な事になったなあちくしょう。

……やっぱり、ちよつとアシユリーこき使っても許されるのでは？  
ノーペナルティってわけにもいかんし……。

面倒くせえ。泣ける。

「それじゃあ明日の朝も早いですし早い所寝ちやいませうようよお♪  
トールさんも今日は体力そうとう削っちゃってますしい」

「賛成ツス！ トール君、さつきから眠そうですね、明日に備えてゆっくりするツスよ！」

テツサちゃん、トール君ポイント追加。



夜明けと共に動くのはもはや完全に日課である。

まあ、一番目が覚めるのが遅いのは俺なんだが。

血圧が低いのか、寝起きの瞬間は俺にとって一日の中で最悪の時間だ。

特に今日は――

「やっぱり寒いな……」

昨日斬られる前に服脱いどきやよかった。

背中が思いつきり破れている上に、血がびっしりこびり付いて相当汚れてしまったのだ。

一応回復してから、例のタニシモドキの泥抜き用に作ったバケツに水貯めてばしゃばしゃ洗ってみたのだがそう簡単に落ちるわけがな

く……。

出来るだけ落ち葉大量に被って寝たのだが寒い物は寒い。日が昇ってしばらくすればもうちよい落ちつくんだろうが……。とりあえず使ってなかったブレザーだけでも羽織っておこう。

ズボンもパンツも大分汚れているが、さすがにこっちはどうしようもない。

ズボンは紺色のスラックスだったため、そこまで目立つ訳ではないが……。これまでとは違う匂いがこびり付いているなあ。

正直、一緒にゲイリーがいてくれなかったらマジで凍えていたかも。

「ありがとな、ゲイリー」

ホント、パンツ一丁で血の臭いがする男抱きしめて寝てくれるとか本当にありがたいわ。

「ふあ……あ……んんん、ゲイリーがいてくれなかったら、今頃マジで死んでたかもしれない」

自己再生も一定以上の外傷にしか効果がないようだし、低体温症とかには役に立たんだらう。

あれ？ すぐに対策打たないと俺、死ぬ？

「いや、役に立っててよかった。身体、大丈夫か？」

「ん……贅沢言えば、気温が上がるまでは落ち葉どつさり被って寝ていたいけど……んんん……」

ゲイリーってば、服着てるからっていうのもあるけど結構体温高い方なのか暖かくて、背中から抱きしめてくれたおかげで寝心地最高でした。

「うばああああああ……眠い。散歩も兼ねて飯取りいくか」

「ああ、そうしよう。アオイが今火を起こしているから、ちようどいい時間に戻ってこれるだろう」

ほむ。

「三人組は？」

「アシュリーともう一人、ヴィレッタとかいう女は水を汲みに行つて

いる。もう一人は、使えそうな木を探して来ると言っていたな」

「……言っていた？」

「一度こつちに様子を見に来ていたぞ。キチンと報告するあたり、あの金髪の女はこちらと上手くやっていこうとする意志を感じるな」

「おお」

こういつちやなんだけど、あの子良い子だな。昨晚もそうだけど、個人的に好感度すごく高い。

ああいう明るい子が一人いるとすごく助かる。

アオイ？ ちよつと経歴が……。

いや、テツサちゃんも一応どっこいどっこのハズなんだけどね。なんだろう、似ているようでタイプがちよつと違う。

それなりに取り繕えるけど、疑われても基本イイヤってタイプと、上手く取り繕えるタイプの違いか？

……………。

あれ？ 後者の方がヤバイ？

「まあいいや。ゲイリー、道中の護衛頼むわ」

「ああ、任せてくれ」

すでにシエルターの外へと這い出て用意しているゲイリーの背中  
には、完成したばかりの弓と矢筒が背負われていた。

完全装備という奴だ。

「もう、二度と君の足は引つ張らないさ。ツール」

……………。

あの子。

昨日からずっとおんなじ事繰り返してるけど、大丈夫？

## 幕間：スパイとスパイ

「例のスキルで作った罠。こうして見ると、そこまで精巧というか、完成度が高いという訳でもないのですね」

「経験ゼロの人間が、極めて短時間でこれを作製できるのだからやっぱり馬鹿には出来ないでしょう」

朝露で湿った草木や土を踏みつけながら、二人の女が湖畔を歩いている。

一人は短く切った、少し跳ねた艶のある銀の短髪を持った背の高い女性。

もう一人も背が高く、そして真っ直ぐ伸びた藍色の髪をなびかせている。

「……隊長は、他にああいうタイプの人間を見た事が？」

「あるわけないでしょう、全く……。どういう育ち方をしたら、瀕死の状態で笑ってられるのかしら」

「アドレナリンのせいでしょうか？」

「それだけで理性的な会話を続けられる人間を人間と呼びたくないわね、アタシは」

アシュリーは出来るだけ普段の笑みを浮かべようとしているが、時折暗い顔でため息を吐く。

「ねえ、ヴィレッタ。これからアタシ達はどう動くべきかしら？」

「隙を見て、アオイという女性剣士を暗殺するべきかと」

「……そうよね。それが最適解だとは分かっているのだけれど」

アシュリーは、大きな魚のトドメ刺し用に持ってきた石斧の柄を撫でながら、

「そうした時、今度は隙を見せ次第ツール君が自害するんじゃないかっていう可能性が無視できないのよね」

「それは——」

あり得る。

口に出さなかったが、ヴィレッタはその光景が目には浮かぶようだった。

「気がついたら舌を噛み切つていそうですね」

「なにか噛ませてもあるの手この手で死にそうですね」

死ぬ方法はいくらでもある。

そしてそれを思いついた時、本人に死ぬ理由があるならきつと迷わない。

そういう可能性を、あの少年は確かに見せつけた。

「ある意味、彼はアタシ達にとって最も効果的な牽制を行って来たわね」

「否定できません。我々の行動を縛るという意味では、かなりの成果を挙げています」

「あの子、なんでアタシ達の国に産まれてくれなかったのかしら」

「同意します」

どう見ても、平和な時代の思考ではない。

かと言って、自分達のような戦乱の時代でもそうそう出てこない思考と決断、行動。

正直に思う。

もし、こういう人間が完全な味方ならば、これ以上なく心強いと。

「トール君、アタシ達が似たような状況になったら助けしてくれるかしら」

「……恐らく」

そして、それもまた自分達にとって痛しかゆしの鎖となっている。

つまり、無碍むげに扱えばそれもまた自分達に跳ね返ってきかねない——すなわち、自分達に旨味がないのだ。

無理矢理言う事を聞かせる方法もないわけではない。

例えば、トールですら気付かれないような、完全な事故死に見せかけて邪魔なアオイを葬るという手段。

今現在、彼を守る最大のカードを葬れば、その後はどうとでもなる。

そしてもう一つは——

「サブブレインだけじゃあ、自我のハッキングは難しいかしら？」

「……隊長には報告していませんでしたが、実は私が既に試しております」

それはつまり、ある意味でツールという少年を殺そうとしたという告白なのだが、アシユリーは顔色一つ変えず。

「どうだった？」

「解析すら不可能でした。接触段階でブロックされてしまい……」

「やっぱり、非常識なレベルの性能ね。軍用の最新型でも、貴女の攻撃を抜かせないセキュリティなんてそうそうないのに……」

「かなり感覚的に使用出来ていることからみて、これから先、扱いに慣れていけばセキュリティは更に堅固になっていくかと」

「……自我の乗っ取りは無理、か。あ、そこに刺してある棒、魚籠の目印よ」

「了解しました。マッピングに加えておきます」

アシユリーの指し示した水の浅い所——そこに一本、先端部分が明らかに刃物で削られて白くなっている長い棒が突き立てられていた。

ヴェレッタはそこを探りに行き、仕掛けられていた魚籠を引きあげる。

「……やはり、そうそうかからない物ですね」

「ちよつと前にツール君が作った、釣り針罾の方が効率いいかもしれないわね」

「我々のサバイバルパックの物を使えば、更に効率上がるのでは？」  
「いえ、動物の骨を加工したものを使うらしいわ。アタシ達の釣り針はもうちよつと保存しておきたいって」

持ちあげた時点の重さで分かっていたが、念のために魚籠に手を突っ込んで確認するヴェレッタ。

あるいはと期待したのかもしれない。

絡まった草を握りしめたまま腕を引き抜く彼女の表情は、どこか残念そうだった。

「まったく状況を把握できていない地で食糧を得るとは、こんなにも難しい事なのですな」

「そうよねえ……。アタシも訓練以外でほとんど経験のない事だったから、そう言う意味ではやっぱりツール君に助けられているのよねえ」

アシユリーが、腰にぶら下げている大きな葉の包みに手をやる。  
トールとアオイが先日作っていた、細く切った魚の天日干しである。

食糧に関して、トールという男はかなり気を使っている。

「ゲイリーちゃんの動きはどう?」

揶揄するように『ちゃん』付けを強調するアシユリー。

そうして下に見えるような発言をするが、アシユリーにとって、実際被害にあったにも関わらず、自分達の排除はおろか、グループからの追放すら言いださないゲイリーの存在は非常に不気味なものだった。「全くありません。不自然な程に。今はテツサやトールと共に我々のシエルターを設営しているようですが……」

こちらからの人質役という意味も兼ねて、トール達の監視を任せたテツサからのリアルタイム通信を元にヴィレッタが報告する。

「……昨晚、一度トール君のシエルターから抜けだしたようだけどアレは分かる?」

「テツサが確認しております。どうやら、乾燥させていた落ち葉を取りに行ったようです」

「落ち葉?」

「おそらく、トール君タケウチに掛ける物だと推測します」

「ああ……そういえばトール君、服が血まみれで脱いでいたわね。あの光景と会話にパンチがありすぎて、細かい事が抜け落ちてたわ」

昨夜からほとんど眠れないままだったアシユリーだが、眠気はまったく感じていない。眼を閉じるたびに、血に染まった少年の姿が浮かぶからだ。

「……まあ、動きがないのなら別がいいわ。となると、注意すべきはトール君とアオイちゃんか」

「肯定です。特にトール君タケウチは、観察対象として非常に興味深いです」

未だに空っぽのままのカゴを抱え直したヴィレッタは、珍しく僅かに口角を上げてそう囁く。

それに対して肯定の意を示したのか、アシユリーも小さく頷き、

「で、ヴィレッタ」

「ハッ」

「自我の乗っ取りは無理でも、思考の誘導は出来ないかしら？」

「……テッサが手を貸してくれれば、あるいは」

「…手、貸してくれそう？」

「先日、殺し合いになりそうになりました」

「やっぱり……」

テッサという少女は、元々は魔術師の兵站破壊を専門とする部隊の出身だったのだが、とある戦闘で部隊は壊滅。

その中で唯一生き残った彼女が、アシユリーの部隊に押し付けられたというのだ。

「破壊工作に長けた兵士にしてはモラルが高くて扱いづらいつて人事部の知り合いから聞かされていたけど……」

「悪いことではないのですが、こう言う時は不便ですね」

「個人で付き合うには良い子なんだけどねえ……ま、無理に言っつて、トール君に知られるのもあれだし、極秘裏に動きましょう」

「では、当面は？」

「ええ、隙が出来るまで……彼の信頼をある程度取り戻すまではこのまま共同生活を続けて——」

「機会をみて、彼のサブブレインを部分的にでもハッキング。今度こそ、トール君を手に入れるわ」

「二人だけで、ですか？」

「……最悪、悪いけどテッサの自我も一時的に押さえる。いい？」

「はっ、了解であります」



043・新入りさん、いらつしやい！（まずは家作り）

「トール君トール君！ 落ち葉はこれだけあればいいっすか？」

「おお、とりあえず火からちよつと離れた所に積んでおいて。風上の方にね」

「了解ッス！」

透ことトール君、只今絶賛お仕事でございます。

本日の主な仕事は新入り二人分のシエルター作り。

……もう一個だけじゃ駄目かな。正直ゲイリーと一緒に寝るのそんなに悪くなかった。

……だめか、さすがに。男同士で寝てもしやーない。

昨日はアオイがあの後添い寝役に立候補してきたが、それはなんか違うと言うか申し訳ないというか。

男同士の方が楽なんだ。どう考えても。

「にしても、やっぱり手数が揃つてると早いなあ」

アオイと二人であれこれしてる時なんて、もつと時間がかかっていった。特に材料集め。

豪雨と急な増水で死にかかった後の火起こしで慌ててた時とか、葉っぱの壁だったから隙間風があつて微妙に寒かったもんなあ。

大雨の後だったしで正直落ち葉でまだちよつと湿ってたしなあ。

焚いた火のある方向が暖かくてそっちにジリジリ寄ってたのを思いだすわ。

今回はキチンと暖かそうなシエルターで良かった。

一番大変だった材料集めがちやっちゃか終わったのがデカイ。

組み立ては二人ずつ、俺とテッサの組とアオイとゲイリーの組でそれぞれ一つずつ組み立てている。

日没より早く建て終われるだろうし、多分作業終わる頃にはアシユリーとヴィレッタさんも罨の確認終えて帰ってくるだろう。

さつき魚罨の方を確認し終わって——今日の戦果は二匹だった——今は獣罨の方に行っている。

かなり長時間の仕事を任せてしまつて申し訳ない。いつもなら2

グループで片方を担当してきつさと仕事を終わらせるのだが……。

今回はもうシエルターに専念させてもらおう事にした。

(スキルが自分の行動や状況に適應するつてのは分かったけど……多分それだけじゃないしなあ)

組みあげた枝のフレームを紐で結んでいく作業を延々と繰り返しながら、俺はここ最近救われっぱなしのスキルという物について考えてみる。

「なあ、テツサちゃん」

「呼び捨てで良いツスよ？ 歳も同じ位だし、一応ボクらは降伏したつて立ち位置ですし」

うん、まあ……インパクトのある行動叩きつけて牽制する目的はあったけど、明確な勝敗を付けたかつたわけじゃないんだけどなあ。

「分かった、これからはそうする。……で、テツサ」

「うツス！」

「サブブレインつてどんな感じなの？」

とりあえず、未だに実感がないが頭の中に『生えた』という機械の詳細は聞いておこう。

仮に何らかのフェイクが混ぜられても……そもそも、よく分からないスキルを挟んで機能していることだし、多分思うようにはいかない——んじやないかなあ？

……希望的観測が過ぎるか。

まあ、なんというか……あまりに無邪気に近づいてくるせいかな、昨晚の一件があつたとはいえ警戒心があまり沸かないこの子は、聞く相手として気楽なのでいいだろう。

アオイも『あの子なら大丈夫だと思いますよお♪』とかきつき言つてたし。

「んー、実はツール君と隊長の会話つていくつかりアルタイムで聞いていたツスけど」

「？ 傍にいたの？ 姿消して？」

「アレが出来るのは、三人の中じゃあヴィレッタさんだけツス」

あれ、そうなの？

……いや、そりやそうか。出来るんなら、あの時ゲイリーを拘束していたアシユリーはともかくテツサも姿消して奇襲してればどつちかは拘束されてただろう。

「ボクらは別々に行動してる時に、互いの聞いている事や見ている事を共有できるんですよ」

……主観でのライブチャットみたいなものか。

「んじゃあ、俺の事もある程度は知っている訳か」

「まあ、隊長との会話分くらいは。結構細かい事も、トール君の話は覚えてるツスよ?」

やけに色んなタイプが揃ったうちの女性陣の中で最も小柄だが、最もスタイルのいい少女兵がピッタリしたスーツのまま軽く胸を張る。

……………。

うん、眼福眼福。

「で、サブブレインに関してツスよね?」

「そそ」

「まあ、トール君の使ってるソレに近いツスよ。話聞く限りじゃ」

そういつてテツサが指で差すのは、胸ポケットから尻のポケットへと引っ越しをしたマイ・スマートフォン。

「スマホ?」

「そツスそツス。通信デバイスとして使えて、ついでにそれを利用してオンラインで情報を引き出せるんスよね? まあ、かなり近いツスよ」

「違う所は?」

「まあ、指を使わなくて良い所と……ああ、そツスね。多分トール君、眼球のどこかも変異してると思うツス」

「え、そなの?」

「サブブレインにせよ電子脳にせよ、それだけでは知識面以外では役に立たないツスから」

「……サーチスキルか」

「それツス。ただ単に知識が思い浮かぶだけっていうなら分からなくもないツスけど、視覚情報に確かな変化があるっていうならその部分

にも変化があるハズツスよ。あるいは脳とか」

「おう。それはさすがにちつと怖い。」

「なに、脳も機械化してる可能性があるの?」

「いや、それはないツスね。サブブレインが生えた時同様、もしそこも機械化してたらボク達には分かるツス」

「……じゃあ、やっぱり眼か」

「眼球程度なら正直良いかなあって思いがある。」

「ただやっぱり脳そのものが変異を起こす可能性があるっていうのはちよつと怖いな。」

「今の奴は、あくまで脳に直接繋がっているだけみたいだけど。」

「まあ、それはそれで矛盾があるんでなんかおかしいなって思うんすけど」

「そんなことを考えていたら、自分がフレームの固定を済ませた部分に被せるための落ち葉をこんもり抱きかかえるテツサが、とんでもなく気になる事をポロツと漏らしやがった。」

「矛盾?」

「仮にスキルがボク達の技術っていうなら、サーチの時点でサブブレインが生えてないとおかしいんすよねえ」

「……他の技術と合わさったって事は無い?」

「でも、確かサーチした時に野草知識の物が混ざって来たんすよね?」  
「うん」

「つてことは、サーチスキルで起こる現象はボク達のと関係ありそうな気がするんすけど……」

「ああ〜。なるほど。」

「仮に俺の目とかが機械製になつた場合、サブブレインがないとそもそも動かない?」

「ツス」

「ふむふむ。」

「逆に言えば、眠ってというかサーチは違う世界の奴なのかな」

「いやあ、でもさつき言った通り互換性があるのが気になるツスよ。突然現れた良く分からない物同士が都合よく組み合わさるツスか?」

「いやもうこの場所自体が常識を投げ捨ててるから……」

そこら辺深く考えても無意味な気がしなくもないと言うか……。

「ほら、そもそも仮に全部テツサの世界の技術だとしても、テツサの世界にない植物や動物の知識が入っているのはおかしいだろう」

「……言われてみればそうツスね。すつかり抜け落ちてたツス」

正直、これが一番気になっていた事だ。

確かにサブブレインとかいう……外付けのハードディスクの様な物が埋め込まれていて、そこから知識を引きだしているというのなら分かるが、それにしたつてこの世界においては知識が豊富すぎる。

「……なんツスカねえ。自分達にとって身近なモノだから固定概念がこびり付いてるんスカねえ？」

「いや、でも大事なことだよ。ありがとう」

なんとというか、割と正直に答えてくれてるんだろなあ。

……騙されているかもしれないっていう可能性は当然あるんだろ  
うけど、どうしてもそれ考えるの面倒くさいんだよなあ。

まあ、なるようになるか。

「ああ、それともう一つ。ちよつといいツスカ？」

「ん？」

「ちよつと眼を閉じて欲しいツス」

「……なんで？」

「集中するためツス」

「……なんで？」

刺すとか気絶させるっていう場合は出来るだけちやんと欲して  
しいんだけど。

「サブブレインの使い方覚えるためツスよ」

「？ 集中しないと駄目？」

スマホとかスキルでサブブレインとやらを活用できるなら、別  
にそれでいいと思ってただけだ。

「だから、スマホと同じツスよ。そのまんまの素で使うとか無防備過  
ぎるツス。身を守る方法を入れておかないと、変な連中に頭の中弄ら  
れるツスよ？」

「脳みそはそのまんまなの?!」

なにそれ怖すぎる。

「まあ、完全に乗っ取るのは不可能……ではないツスね。違和感無いレベルに感覚とか中に蓄積されていく知識とかの書き換えを続けられると、気がついたら自分の中の考えとかが好き勝手な方向に誘導されるのかも十分にあり得るツス」

こわっ?!

「というわけで、ちよつとした自己防衛法の訓練方法を教えておくツスよ。慣れてきてある程度の自己判断が可能になったら、ボクの自作でよかったらセキュリティプログラムも渡すツスよ。あの人達は多分やってくれないだろうし」

「ぜひ頼む」

やだ、この子すつごく良い子じゃん。

騙しているかなあって一瞬思ったけど、それならそもそも言わなきゃいいだけだし。

……うん、ちよつとこの子は頼りにして良いかもしれない。

アオイのお墨付きでもあるし。

「あ、ちなみにセキュリティって受け渡しは今の環境でできるの?」

「大丈夫ツス! あと、一応一度仕掛けた後は、ボク自身であっても入れない様に調整しておくツスよ」

「そこまでする必要があるか?」

「自分の頭が弄られる可能性はゼロに近づけておいた方が、ツール君も安心できるんじゃないツスか?」

「……まあ、そりやそうだな」

「そうツスよ。今の環境の支柱はツール君なんすから、出来るだけ根元はしっかり固めておくべきツスよ」

「任せてください! 余計な茶々を入れようとする奴らが出た時に、変な事を出来ない様にガツチガチに固めてやるツスよ!」

「二度と、なんにも……出来ない様に」

044：次のミッションは探険！　そして両手に花！

シエルターを組み立てるのが終わり、そのまま俺はゲイリーと共に簡単に周辺の木の实や野草集めに出かけている。

「あの女はどうだった？」

うん、まあそら聞くよね。敵だもん。

「三人組の中では一番信用できる……かも。いや、まあ警戒心ゼロにしているって相手じゃないけどさ」

「……アシュリーは？」

「軽率な動きはしない慎重派って所かなあ。いや、でも状況が激変すると分からないけど……一番やつかいなのはもう一人かな」

「……ヴィレッタか」

「うん」

ゲイリーもひよつとしたら一番警戒していたのか、彼女の名前を出した時にわずかに眉をひそめる。

「なんていうか、こう、ちよつと人間味を感じないんだよね。あの子。完成された軍人っていうのはああなのかもしれないけどさ」

それが思った感想だった。

なんとというか、一番表情が変わるのはアシュリー。笑顔ばつかで、お店の店員さん臭がちよつとするけど、言葉の端々に感情が零れるのがテツサ。

対してヴィレッタは、現状あんまり感じない。

……昨日の今日だから仕方ない！　コミュニケーション足りてないもん！

「明日はテツサとヴィレッタ連れて仕事に行ってみようと思う」

「危険じゃないのか!？」

いや、もう今更だし。

「割と真面目にさ。ゲイリー達の仲間……魔法使い？　魔術師？　が来ている可能性も出てきたと思うんだ」

「……来ていると思うか？」

「多分。あるいは今から来る」



その場合に。俺たちがまとまっていなないとまた割れちゃう気がするんだよね。

出来るだけアシユリー達三人と俺達で……こう、価値観のすり合わせというか、一つのグループとして最低限の意志疎通というか。

「前も言ったけど、やっぱり俺としては致命的な衝突は避けたいのよ。だから、どっぶり魔術側にも、科学側にも立てない」

「……トール」

「ん？」

やっぱり駄目？ 復讐したいとか攻撃したいとかある？

「君は、本当の統率者なんだな」

「……そうかあ？ かなりなあなあにやっている気がするけど」

うん、そこまで真剣に問題の解決に努めている訳でもなく、先送りに全力を費やしているというか……。

……どうにかしないとなあ。

帰還手段の発見までは協力しようって方向で、とりあえずは約束させるか？

「いや、俺は……私ではきつとこういう風に事態を治める事は出来なかった。……やっぱり僕は」

……大丈夫？

一人称が安定しなくなってるけど。

「ゲイリー」

「つ……ああ、なんだい？」

「その……やっぱりごめん」

そらそうだよ、刃物突きつけられてて仲良くしろってのいうのはスンゲー無茶あるわ。

出来るだけ一番言いたい事言わせて、かつ通してあげたい。

「今回の件は、俺が色々は無茶ぶつ通しちゃった。もう一度言うけど、本当にすまなかった」

「君が卑下する事なんて何もないさ。隙を見せてしまった僕に問題がある」

……僕？

「大丈夫。君は君が通したい道を示してくれ。俺は、全力でその道を守り抜く。切り開く——もう絶対に、君の足は引つ張らない」

おーい。

別にそこまで気負わなくていいって。

「役に立つんだ。役に立つんだ。僕じゃない俺は……役に立つんだ。本当だ」

「知つとるがな」

ああ、なんだろう。

これまでは逆だったけど——

なんだろう、今、無性にアオイと話したい。



食糧集めは滞りなく終了。

なんとというか、ゲイリーがかなり気合を入れてくれたおかげで木の実やキノコが大分集まった。

これ、いくつかはアク抜き必要だから、取っておいて今度の昼飯辺りで使おう。

「さて、改めてだけどき」

もはや恒例になった食事会兼報告会議。火を囲んでの円陣だけど、相変わらず左右にアオイとゲイリーが座って、アオイの横にはアシユリーが、ゲイリーの横にはテツサが座っている。

つまり自分の反対側にはヴィレッツタさんがいるんだけど、こう、なんだろう。

観察されてる感半端ない。

一挙一動に凄く反応してるんだよ。凝視してるんだよ。

皆が頑張って作った匙とか……串？ 楊枝？ とかでスプーン掬っ

たり具を突き刺したりして食べてる中、俺は即席の箸を使って食べているのだが、その仕事すらすつごく注目されている。

「帰る方法を見つけるまでの協力体制というか……せめて休戦協定をここでしっかりと結んでくれないかな」

もうね、とりあえずここをハッキリ——うん、本当は昨晚、遅くても朝の時点でこれやっておかなきゃいけなかったんだけど、ついつい時間を置いてしまったんだ。

「反論はないわ。アタシ達は君に降参した。……ゲイリー卿に負けたわけではないって事だけはハッキリ言っておくけど」

今はそちよつと置いといてくれませんかね！

ほらゲイリー君ちよつとどうつむいちゃったじゃん!!

「まあまあ♪ とりあえずツールさんを中心に協定を結ぶ。それでいいじゃないですかあ♪」

「そツスそツス！ 色々ごちゃごちゃ考えるの面倒くさいじゃないツスか！」

君達、ホントににぎやかというかムードメーカーとしては最適役だな。

うん、だけど俺、これから仕事の配置とかで、この二人は分けておこうかなってちよつと思っちゃったよ。

「ゲイリーの味方が現れる可能性は十分にあると思う。けど、どうかそこはワンクッションを置いて欲しい。……反撃は仕方ないけど」  
「あの、割と反撃に関してはボくら反射的というか……かっつっなり引き金軽い感じになると思うツスけど……」

セーフツスか？ アウトツスか？

目線でそう問いかけるテツサ。

……。

……。

「セーフ」

「ありがとツス！」

うん、まあこればっかしは仕方ない。

「ただ、多分その場合ってゲイリーへの接触の方が先だと思う。ゲイ

リー、説得を任せても大丈夫かい？」

「ああ。……確実に止まると確約は出来ないが、なんとかして見せる」

まあ、確実とは言えないよな。

領主だから部下は来るかもしれないけど、同じ権限持つてる連中もまた結構いるだろうし、それ以上って事だってあり得る。

「ああ、大丈夫大丈夫。少なくとも魔術師の一人が俺の意見に賛同しているっていう広告塔になってくれれば、それだけでも相当意味あるし」

……あ、でもアシュリー達とゲイリーが一緒に動いてると、もしどちらかの仲間とかに目撃されると裏切り者扱いされる可能性も十分にあるか。

あるいは、突発的な救出戦とか。

(むう……)

ゲイリーは、俺かアオイと出来るだけ組ませるのかベストか。

でも、俺は科学側のメンバーと一緒に行動したいし……。

うん、よし。

「明日は、久々に探索を試してみようと思うんだ。で、だ——罫の確認作業、二人だとうだった？」

本日の戦果は魚二匹のみ。獣罫の方は成果なしだった。

一つ、作動というか動いた痕跡のある罫はあったらしいが、タイムングが悪かったのかあるいは別の要因か、ただ支えの枝が倒れて紐が落ちていただけらしい。

……結果論だけど、ゲイリーが張りきって集めた野草の量がちょうど良かった。

シメジっぽいキノコもそれなりに美味かったし、結構腹一杯食べた。

出来ればタニシモドキも、もうちよい食いたかった。

「やっぱりちよつとつらいわね。もし獣罫の方に獲物がかかってたら、トドメさしたり内臓抜いたりしている間に日が暮れそうになってたと思うわ」

だよな。俺も空の様子見てて、あれ？ まだ帰ってこれないならヤ

「バいかな？　って思ってた。」

「分かった。やつぱり罨関係はそれぞれ分担しよう。アシユリーは魚の方を、アオイとゲイリーは獣罨を……出来れば、俺がいない間にそれぞれ増設しておいてくれ。干物や燻製の方も頼む」

やつぱり食いぶちが増えたのは問題としてデカイ。

聞けば、二人ともここに合流するまでは基本食事は野草で、タンパク質はアリ等の虫や、前に俺たちが見つけた豆類を食べて補給していたらしい。

うん、タンパク源の確保口を増やすのは急務だ。

「んお？　じゃあツール君は、ボク達と一緒に動くんスか？」

そう俺に尋ねながらテツサは、そつと焚火に枝を立て掛けて適当な樹皮で扇ぐ。

揺らめきながら、大きくなる炎。

うん、やつぱいいいよ。火はいい。

なんというか、凄く落ちつくよね。

「ボクが言うのもなんスけど、ちよこつと不用心というか……」

「大丈夫大丈夫」

アオイとゲイリーの安全度合いの方が今は大事と思う。

今アオイに抜けられると、下手したら詰む。昨晚よりも悪い状況になりかねない。

それに、ヴィレッタさんはともかくテツサが、いきなり手の平を返す子には見えない。

「探索に同行するのは構わんが、どこに向かう気だ？」

「ん〜、やつぱり川を下って行こうと思ってる」

どこを調べるのが正解か分からない以上、川という分かりやすい目を頼りに、少しでも人がいる可能性の高い場所を探るのは間違いじゃないだろう。

「なんか危ない事があっても、テツサとヴィレッタさんの二人がいるならどうにかなると思うし……ちよつと長めに日を取って探検してみたい。どう？」

ついでに、これで二人と一緒に俺が無事に帰ってこれれば、多少は

二人やアシユリーへの信用回復の足し……に、なればいいなあ。  
せめて空気の回復くらい。

「二応耳にしてはいたが……トール、せめてどちらか片方を俺かアオイと交代するというのはダメか？」

「やっぱり警戒しているゲイリーがすぐにそう提案してくる。」

「いや、ホントにありがたい。」

「心配してくれているのはよく分かる。が、」

「んー、今回は二人とのトークも主題だから……まあ、よっぽど帰りが遅くなった時とかの搜索は頼むよ。正直、拠点の方も大事だしさ」

「……そうか」

「やめて、そんなあからさまにガツカリしないで！」

「悪かったよ、絶対に埋め合わせはするから！」

「とりあえずアオイに目配せを送る。」

「主に自分がいない間のゲイリーへの力添えを頼むと言う意味合いを込めてチラツと項垂れているゲイリーを示すと、お任せくださいと小さく頷いてくれる。」

「それで、トール君。君、今回はどれくらい探検をするつもりなの？」

「んー」

「持っていける食糧とか野草の量を考えると……四日？」

「バケツ一個持っていけば、後はそこらの石と火で水の浄化はできるし。」

「問題があるとすれば服か。」

「一応、水でがつり洗って、殺菌も兼ねて煮沸しまくってる。」

「あとで取り出して火から離れた所で吊るしておいて……朝になっても臭いが酷かったら、ちよつと計画を考え直そう。」

「とりあえず予定では四日。ただ、明日の朝の空模様とかによっては二日くらいにしようと思う」

「まあ、こんな所だろう。」

「とにかく、なんでもいい。」

「この森から抜け出すか、あるいは何かのヒントになりそうな物を見つけ出さないと。」

## 幕間　く剣士と貴族の会話く

トールが新しく入った二人の女性と出発して、さほど時間は経っていない。

まるで背を向かい合わせるかのように、上流の方へと足を向けるアオイとゲイリーは、無言のまま足を進めていた。

「そんなにシヨックだったんですかあ？」

その無言に耐えられなくなったのか、アオイが口を開く。

「自分よりもトールさんの方が、統率者として適任だった事が」

そして、ゲイリーの足が一瞬止まる。

「そんな……っ！　いや……そう、じゃない」

「そうですかあ♪」

アオイは全く気にせず、足取りを緩めない。

少し前にもあつた光景と全く同じだった。

「まあ、別にいいですけど……ああ、そうだゲイリーさん」

「なんだ？」

「この森、本当に私達以外にいないと思いますか？」

「……………」

唐突なアオイの質問に、ゲイリーは表情が少しだけ固く——ある意味いつもの顔に戻る。

「トールと共に行動して、野草などの詳細を説明してくれる時があるが……」

「私やゲイリーさん、アシュリーさん達も知らない物がたくさんありますよね」

「少なくとも魔術師にとって樹木は大切な物だ。当然知識は叩き込まれている。葉の一枚でもある程度は見分けられる。が、知らない物がやはり多い。つまり、違う世界の物だ」

「でしょうねえ。それに文字。トールさん、いくつか名前が読めないって言っている物がありましたよね」

「実際、そういう物は俺達も見た事がないものばかりだった」

植物、魚、動物、虫。

例えば、今分かっている三つの『世界』の出身者の誰かが、『近い物』を知っているが、それでも違うという物は多く発見されている。

先日も、アシユリーが見つけた肉が臭くて不味かったという動物のスケッチを見たツールが『これ、やっぱり俺の世界の動物に似てる……気がするんだよなあ』と言っていた。

「他の世界の人間が来ていたとして、違う場所でコミュニティを築いている可能性って、結構高いと私は思うんですよお」

「……魔術師や、あるいは科学側の連中がすでに集団として機能している、という可能性も当然……だな？」

「はい♪ それか、意外と私達みたいに同じ集団に入っていたり……また違う世界の出身者が頭になっていたり……」

まあ、可能性の話ですけどお。

笑いながらそういうアオイに、ゲイリーは眉をひそめて顎に手を添える。

「まあ、この近辺にいないのは間違いないでしょう。もし誰かいたとすれば、そもそも接触せずにはいられないでしょうし」

「なぜだ？」

「もう気付いているでしょう？」

アオイは、ひよいつとかがみ込むと、手で河原の石をどける。

すると、その石と地面の隙間に隠れていた枯れ葉のような色の虫がぴよーんと飛び出し、草むらの中へと逃げていく。

少し前まで気配すらなかった虫が、今ではこうして珍しく無くなっている。

「植物に関してはよく分かりませんが、虫に魚、動物——移動が可能な生き物は、多分ツールさんを中心にして現れています」

「……………あのスマホとやらではなくて？」

「まあ、その可能性も確かにありますねえ。でも、どちらにせよ同じでしょう？ ツールさんの傍にいれば食べられる生き物がほいほい出てきてくれるんですからあ」

比較的緩やかな流れの川面には、数匹の魚が群れで泳いでいるのが



見える。

空を仰げば鳥が舞い、地面には小さな黒いアリが、餌を求めてうろろしている。

こちらに來たばかりの時は、生命の気配など皆無だったのに。

「トールさんは、食糧が取れるこの近辺から動く事に少し恐れを抱いているみたいですけどお。多分、またトールさんが新しい拠点を開けば、その近辺にはまた少しずつ動物が増えていくと思うんですけどねえ」

「ああ、俺もほぼ同意だ。だが、危険生物が寄ってくる可能性は？」

「ん〜、中心点がスマホなのか、トールさんなのかでそこらはちよつと変わってくると思うんですけど……まあ、今度拠点を作る時は、柵なんかの設置も提案しておきましょうかあ」

一応、肉食獣の可能性は以前にゲイリーが示唆していた。

そのためにトイレや食糧庫といった、そういう物を呼びよせる臭いは発する物はすべて離れた場所に作る事にはしているが……調理の際にでる臭いや自身の体臭などは、どうしても獣に存在を知らせてしまう。

「……これから、俺たちはどうなるんだろうな」

「？ 帰る手段を見つけるのでしょうか？ 一応は」

「ああ。だが……」

背中に持っている弓。おそらく、今ある武器の中ではかなり強力だが、まだ一度も使い所ない——まあ、作られてさほど時間が立っていないのだから当然だが——武器を手に持ち、だが矢をつがえずに手で弄ぶ。

「今、こうして集団の中での生活でも役割が減って、あげくあの女に隙を見せて利用される始末……。正直、トールと話す時にどんな顔をすればいいのか分からないんだ」

「女である事を隠してる時点で、それ大したことじゃないと思うんですけどねえ。まあ、分からなくもないですけど——あ、リスさんかかってます」

とある茂みの近くに立てられた目印の棒。

その付近を覗き込んだアオイは、しばしガソゴソと作業をして兎程の大きさの動物を首根っこを持ちあげる。

いつも世話になっている黒リスだ。普段のものよりもやや大きめだが。

「……ゲイリーさん」

「なんだ？」

「これ、生かしたまま持って帰りませんか？」

いつもならとつくに頭を石で殴って殺しているアオイの珍しい発言に、ゲイリーは首をかしげるが――

「トール達が帰ってくるまで取っておくのか？」

「ええ♪ 干し肉にするのもありですけど、新鮮なお肉を煮込んだ方がいいかと思ひましてえ♪」

最初はバタバタ暴れていた黒リスだが、動物の扱いに慣れているのか、アオイがある程度撫でたりくすぐったりしていると、とうとうアオイの腕の中で大人しくなる黒リス。

今自分を抱いている生き物が捕食者だと気付いていないのだろう。

「……まあ、それもそうか。自分がいない間に黒リスのスープを飲んだと聞いたら、本気で悔しがりそうだ」

「ですよお♪ トールさん、食べ物に関しては安全性にも味にも拘る方なのでえ♪」

「水の細かい臭いも気になっていたようだしな。うん、確かにそうだ。アオイがそのまま抱きかかえていいか？」

「はい、お任せください！ その代わり、他に獲物がかかっていた時はちよつと色々仕事押し付けちゃって構いませんかあ？ この子逃がしたら、私も悔しくて悔しくてたまらないでしょうからあ♪」

「ふっ、俺もだ。ああ、任せろ。鹿程度なら、一応俺一人でも処理や運搬は出来るさ」

そう言つて、ツタを編んで作った矢筒から矢を取り出したゲイリーは、気持ちを持ち直したのか幾分か明るくなった表情で、もし獲物が出たら仕留めるといふ気持ちで辺りへの警戒を始めるのだった。

「ふう。まったくもう、世話の焼ける人ですねえ……」

## 045：RPGⅡ探険という風潮

相変わらず、この森のやっかいな所は地形だ。

川の方は緩やかなのに、ちよつと川沿いを外れて森の奥の方に入ると、突然急な傾斜になっていたりまたそこから上り坂があったりと、いろいろ不自然すぎる地形に頭を抱えざるを得ない。

「トール君、足は大丈夫ツスか？ 昼食休憩から、もう結構休みなしで歩いてるツスけど」

「ああ、大丈夫大丈夫。荷物の類も結構持つてもらってるし問題ないよ」

今の所、足にマメの類も出来ていないし本当に問題ない。

まだサバイバル生活始めたばかりの時は足に水膨れが出来て、アオイに処置されたものだった。

この状況下で水ぶくれは、下手に潰すと悪化するとかなんとかで……。

「そういうえば、二人とも向こう側ではどういう仕事をしてたんだ？」

それよりもトークだトーク。

道中の野草なんかの調査に時間取られて、実務的な会話以外ほとんどしてねえ。

「ん、前に話したかもツスけどボク達はあれツスよ、ようするに魔術師側の戦力の根幹になる部分の破壊を主としてたツス」

「……武器工場とか補給路とか？」

「それもあるが……一番重要なのは森や水源への攻撃だ」

ああ、そういうえば前に言ってたっけか。自然の豊かさってのがそのまんまその地域での魔法の強さに繋がるとかなんとか。

「大体そういう場所って、魔法側が防御策としてゴーレムは配備してるツスからね」

「……石で出来てる奴？」

「あれ？ トール君の世界にもあるんスか？」

「その、空想上の生物……生物っていうか怪物か」

RPGではなんらかの形で出る事の多い奴だ。

「そういうのもあるが、基本的に地域に寄る所が大きい。砂や岩石、鉱石、氷、泥、樹木やその他植物、塩で構成された個体もあったが……火山帯で交戦する個体が一番厄介だな。純粋にマグマが人の形をして襲いかかってくる」

ヴェレッタの淡々とした説明は、だがゲームで育ってきた俺には想像が容易い物だった。

「管理している魔術師に寄って個性も大分違うので対策らしい対策も、その場その場で見つけなきゃいけないスよ」

「そうだな……純粋に固くてパワーもある人型の個体があれば、ひたすら早く動く四速歩行の獣型がいたり、更には毒の霧をばら撒いてこちらの動きを阻害するタイプもある」

「……こつちには来てほしくないなあ」

今自分が生きてられるのって、この森に本格的な脅威がないっていうイージーモードだからというのがデカイ。

ここでRPG並にモンスターがゴロゴロ出てこられたら、俺泣いちゃう。

「それは我々として同じだ。ちよつとした火器程度ではゴーレムは基本倒せん。もし交戦するとなれば、もう少し威力のある兵装……できればパワードスーツや戦車による砲撃支援が欲しい」

「……そんなに強いのか？」

「まあ、ライフルで倒せる個体もあるっちゃあるツスけど、大抵そう言うのって倒すと却って面倒な奴なんすよね。倒した瞬間弾けて毒を広範囲にばら撒くとか」

「……空爆とかじゃダメなん？ 科学の国っていうならあるだろう？」

飛行機とか」

こつちの歴史じゃ、隠れてるゲリラを恐れて強力な除草剤を空から撒いた事あるらしいけど。

「まあ、はい。一応初期の頃はそれで上手くいったんすけどすぐに対策されて……翼をもったゴーレムが増産されたんすよ」

「こちらの戦闘機より遅いがそれ以上に小回りが利いて……その上固

くて、かつ威力の高い熱閃や火球を放つ個体が大量に生産されてない……ゴーレムである以上、敵の魔力が届く範囲から外には出てこないが」

「目立つ戦闘機じゃあ攻め込めないってことか」

「飛行機以外にも手段は一応あるんすけど……ま、そゆことツス」

あれか。ドラゴンとかワイバーンの奴らがゲイリー達の空を守っていて攻め込めないと。

それで地上を隠れながら侵入するしか敵地に効果的な打撃を与えられないと。

「……魔法が使えないかぎり、ソイツらは出てこないんだよね？」

「我々も魔法を完全に理解していないためメカニズムは不明だが、実際敵領から外に出た事は無い」

「要するに警備専門の兵器ツスよ。あんまり心配する必要はないんじゃないツスカね」

「ほーん……」

まあ、専門家がそういうなら大丈夫か。

いざって時はこつそりゲイリーに対策を教えてもらえばいいし。

「まあ、今はトール君が気になる事を一個一個塗りつぶしていくのが一番ツスね。どうスカトール君？　ここまでの道のりで変な所ってあるツスカ？」

「ん？　そうだなあ……」

とりあえず気になった事といえば、植生が少しずつ変わってきた事だ。

これまではこう……葉っぱが広い奴と、針みたいなやつが半々だった。

だが、こうして川の流れに沿って歩いていると、少しずつ針の様な葉っぱの木が増えていく気がする。

「やっぱり、動物の気配が少ないな」

「そツスねえ。ただ、ゼロってわけじゃあないので拠点候補はいくつかあると思うツス」

ああ、まあ。前に比べて気配というか、音が増えた。

ちよつと奥にいくと虫の羽音がするし、所々で蝶や蜜蜂——あるいは同じ役割を持つ虫や小動物が現れている。

針から粘液を出すハリネズミ、花を食べる兔、その他もろもろ——ちよくちよくそういう『変わった生き物』をサーチで発見する事がある。

どいつもすばしっこくて、まだ捕まえていないが……。

「ヤバイな」

「ん？」

「ちよつと前まで、動物を見た時の感想って基本的に可愛いとかカッコイイとかだったんだけどさ」

先導して周囲を警戒しているヴィレッタさんが、こっちを向く。

……ある意味で、一番自分を気にしているのってこの人なんじゃないかろうか。

「最近じゃあ食えるかどうか。味はどうだろうってのが先に来るようになってしまった」

「ああ〜」

テツサがえらく納得したようにココココと頷いてくる。

「そりゃあ仕方ないツスよ。ボクも経験あるツス」

「テツサは……動物好き？」

「もちろんツス！ 猫とか犬とか大好きツスよ！」

「おお……っ」

そっち側でも犬とか猫を愛でる文化は生きていたのか！

「やっぱりツール君の世界はある意味で僕らの世界に似ているのかもしれないツスね」

「ああ、なんだかんだでいくつかの事は共有できるし理解もできる」

アオイの所も、国の体勢とかは色々問題ありだけし衛生観の一部とか物申したいけど、嫌悪する程じゃない。

ああ、そういうのもあるよねってレベルだ。

「ヴィレッタさんは、そういうのは無かったのか？」

「……いや、記憶にないな。産まれたときから実質軍属の様な物だったから……戦闘用に改造・調教した動物くらいとしか触れあった事が

ない」

「うえいと」

「すみません。戦闘用の動物ってなんですか？」

「ああ、そうか。簡単に言うと、こちら側で作製したゴーレムだ。遺伝子を組み替えたりする事で、真正面からゴーレムと戦う使い捨ての有機生命兵器と言えいいのか」

「すみません、どこのホラーゲームやパニックムービーの産物ですか？」

「余りに不自然な存在だから、生殖機能などを取り去り、一定期間で自壊するように作られていた。戦闘力は確かに大した物だが……コストと成果が見合っていないくてな。今では一部だけが継続して実戦に投入されている」

「アレっすよね？ 人二人分くらいまでサイズアップした蟻とかなんか爬虫類だか昆虫っぽいのが人型になったような奴とか」

「なんでどいつもこいつも閨が溢れてんだお前らコノヤロウ！」

もつとこう！ レーザーとかロボットとかパワードスーツとか！

そういうまだ夢のある話をちよつと期待してたのに！

「は、話をちよつと戻すけど……じゃあヴィレッタさんは、猫とか犬とかを飼った事はないわけか」

「犬ならば、軍用犬を一時期世話した事があるが……そうだな。自分で飼ったことは確かにない」

「……………」

余裕が出来たら、ちよつとしたペット——つてか家畜を飼ってみるか？

それこそ、殺さなくても役に立ちそうな……運搬役か、あるいは乳牛みたいに飲める乳を出してくれる奴。ああ、鶏みたいに卵を産んでくれるのとか。

……しばらく、獣罫のチェックは自分が行こうかな。

そうすれば、サーチの際に意識すればそこらへんも分かるだろう。

意外と動物を育てるっていう仕事は、多少は共通意識も生んでくれるかもしれん。



あと癒し。うん、癒し。

……癒されたい。切実に。

女の子が多いけど、かといって変な目で見るわけにはいかんし。

数少ない同性のゲイリーとは微妙にギクシヤクしてるし。

「トールⅡタケウチ。君は……動物を飼っていた事があるのか？」

「んー、親とそういう話をした事もあったけど、結局飼えなかったなあ。爺ちゃん婆ちゃんの家には猫がいたけど」

「猫ちゃんツスか」

「そそ、灰色の奴」

最初は拾った野良ネコだったらしいけど、爺ちゃんが飼おうつつつてキッチンと飼い猫にしたんだっけか。

野良猫時代から爺ちゃん家の玄関先か庭から動かない奴だったし、特に問題もなかったようだ。

婆ちゃんはあるま好きじゃなかったらしいけど、それでもちゃんと世話はしてたからなあ。

「ふむ。家畜ではなく愛玩用として動物を飼うというのは、結構人間として一般的な事なのか？」

「人間として……んー、まあ、おかしいことではないかなあ。例えば観賞用の派手な魚や鳥を飼う人もいるし……小学校じゃあクラスでメダカ飼ってて、校舎の裏には小さな水田と動物小屋あったしなあ」

多分、ウチの小学校はそこら辺を充実させた方だと思う。

水田とかでカモ飼ってたし、小屋では兎と鶏飼ってた。

「いいツスね、その学校。話を聞いているだけで平和だっというのが伝わるツスよ」

「テッサやヴィレッタさんは？」

「軍学校ツスよ。だから、規律なんかを叩きこまれたり武器や爆発物の扱い習ったりっていうのが基本で……動物の世話とかは一切なかったツスね。野良猫をこっそり可愛がってたりしてたツスけど」

「同じくだ。そういう記憶は残っていない」

ふむ。

いいかもしれん。動物飼うの。

なんだかんだで、そういう遊びというか余裕も生活の中に持つておかないと、変なタイムングで追いつめられそうな予感がする。

……非常食にもなるし。

「とりあえず、そろそろ今日の寝る所を探さないツスか？」

「ああー、そうだな」

あんまり寝床を作るのに時間のかからない場所見つけて、ささっと葉っぱを積もう。

ナイフもナタもあるから材料集めも多少は楽だろうし……。

「トール、テッサ、その傾斜の向こう側はどうだ？ 洞窟らしきものがある」

そういつてヴィレッタが指を差したのは、森の奥の方に見える急な傾斜だ。

その一か所——最初は黒土の部分かと思つた部分が、良く見ると暗くなつてゐる空洞である事が分かつた。

(中に入つて頑丈そうなら、今夜はあそこに泊まつてもいいか)

雨と風さえ凌げるのなら、後は落ち葉——あるいは新鮮で柔らかい葉のついた枝を引っ張つて来てベッドにすればどうにかなる。

行動時とはともかく、寝るとなると今のシャツは臭いが気になるから脱いで寝るため、ちよつと多めに葉っぱを用意する必要あるけど。

「私が先行して内部を調査しよう。聴覚、嗅覚共に何も感じないが、野生動物が中に潜んでゐる可能性がある」

そういつてヴィレッタさんが先導してくれる。

……やっぱり悪い人ではないのだろう。

真面目な軍人さんというだけか。

なら、これからの対応次第ではちゃんと上手くやっけていける……と、いいなあ。

そしてヴィレッタさんが中に入つてしばらくして——

「んお……トール君トール君、ヴィレッタさんから通信入りました……中でトール君に、スキルで調べて欲しいものがあるらしいツス」

「？ ああ、例の通信装置か」

「うツス、わざわざサーチ使いたってよっぽどツスねえ。ここまで全部野草知識だけで来たのに」

「だなあ」

ヴィレッタが入っていった洞窟の入り口。

そちらに向けて足を進めようとすると、中からそのヴィレッタが出てきた。

手に、白い物を持って軽く振っている。

.....。

「テツサちゃんや」

「うツス」

「あれなに？」

「頭蓋骨ツスね」

「そっか」

「そツス」

「なんであの人そんなもの持ってるの？」

「中であつたからじゃないツスカね」

「そっか」

「そツス」

「テツサちゃん」

「うツス」

「帰っっちゃダメかね」

「さすがに駄目ツス」

マジでか。泣けるぜ。

## 046：ナニカの傷痕

「まあ、見ての通りだ」

「すみませんヴィレッタさん。とりあえず説明してください」

「だから見ての通りだ」

「……………いやまあそうなんだけどさあ」

住処にしようと思っていた洞窟は、完全に死体置き場だった。

凄まじい数の——いや、すまん盛った。だが、それでも複数の白骨死体がまばらに散らばっている。

「どう思う、テツサ？」

「……………衣類がばらばらッスね。と、いうか……………」

散らばっている白骨死体は、身長がバラバラだ。

だが、子供のソレにしては骨格はガツシリしている。

「……………人の額に角って生えてる……………わけないッスよね？」

ところどころに、妙な骨格がある。

額に角と思わしき物がある頭骨、関節近くにトゲのように発達した部分がある骨、手と足がほぼ同じ長さで胴体がやや短い骨格……………様々だ。

「衣類も、ボク達に近いのはいっすけど……………こう、トール君の持つてる本に載ってた民族衣装っぽいものからトール君の服にかなり似てる物まで多種多様ッスねえ」

テツサはそう言いながら、骨が纏っている服を次々に剥ぎ取っている。

「……………使えそう？」

「やけに状態がいいので問題ないッスね。っていうか、白骨化するレベルの年月が経ってるにしては……………妙に布の状態がいいッスねえ」

剥ぎ取った服の生地を擦り合わせたりしていたテツサは、首をかしげながら目に付く状況を一個一個整理していく。

「そこらの岩肌に、奇妙な傷もあるッス。これ、戦闘の痕ッスよね？」

「ああ、おそらく。私もそこが気になつてな……………」

プロの兵士二人の会話に耳を傾け、辺りに目を向ける。

比較的日光が入ってくる入口付近にも、それなりの傷跡が付いている。

何かで強く突いたような痕や、引つかいた痕にも見える物が所々に残っている。

言われて見ればそうかもしれない、というレベルだが……。

「で、この骸骨をサーチするのはいいんだけど、何を知りたい？ 調べる時に意識している事で、出てくる情報も少し変わるんだけど」

「死因を調べてもらいたい」

「そッスね。白骨化しているとはいえ、自然死じゃないだろうって事は分かりますし、いくつか争った跡の様な痕跡が残っています。……まあ、死因によってはここが危険地帯かどうかの判断もできますし」

ああ、確かに。

例えば肉食獣によって殺されたとかになれば、この洞窟はそういう奴らの巣かもしれないって事になるし……。

うし、分かった。

「OK、すぐに調べる」

スマホを操作し、いつも通りにサーチを発動させる。

視界にいつもの違和感を覚えて……さて、この白骨の死因は――

――『管理者候補 C3A | 433』死因：候補者。⊙ | GT3 ∞ ∴

200 所有のスキルによる攻撃を受け死亡。

……………。

ん？

んんんんんんん!!?



「つまり、この白骨死体は全員ツール君みたいにスキルを使える人間……人間？ まあ、知能のある生物だったと？」

「ん、全員確認したけど間違いない……と、思う。詳細までは分からなかったけど、スキルを使ったっていう奴と同じく管理者候補っていう名称が片っぱしから出てきたよ」

「そう……ツスカ」

慌てて他の白骨死体も出来るだけ調べてみたけど、全員が『管理者候補』とナンバーっぽい物がセットで付けられていた。

多分、全員スキル持ちだったのだろう。

「管理者候補。この森と言うべきか世界と言うべきか、あるいは別の何かのためなのか……とにかく、集められた人間にスキルを渡す存在がいるという事か」

「だったら、ボクら全員にそういう変化が起こっていない理由は？」

「……ツール⇨タケウチ、なにか思いつく事は無いか？」

「……ごいません。」

いや、そもそも俺だってスキルなんて把握してねえよ。

攻撃に使えるスキルがある……のは、魔法があるからなんとなく分かってたけどさ。

「ないな。それっぽい、ありそうな理由なら……なんか条件があるんじゃないかねえか？」

「条件？」

「例えば……そうだな、悪い事……じゃあ範囲が広すぎるか。うん、例えば人ってか同種を殺していない事とか」

仮にこんな便利な物を適当に集めた奴らに渡すなんて、どう考えてもトラブルの種だ。

渡すんなら面接か、あるいはなんらかの基準を設けるのが普通という物だろう。

「……同種殺し」

「なるほど。ありそうツスね、それ」

我ながら咄嗟の考えだが、意外と的を射ていたのかテツサも笑みを

消して真面目な顔で頷いている。

すぐに『おっとつと』と親指と人差し指で笑顔を作っているが、  
で、ヴィレッタさん。

同じように神妙な顔で頷いているが……あれ？

一瞬、笑った？

「トール君タケウチ、ここにいる全員の死因は、スキルに寄るものか？」

「ああ。ちなみに、そのスキル撃った奴もそこで転がっているよ。なんか複雑な記号だったけど、多分間違いないと思う」

俺も、もしコイツの死体がここになかったらちよつと怖かったよ。

「スキルの詳細は？」

そのまま質問を重ねてくるヴィレッタさんに、俺は黙って彼女の足元を指差す。

彼女は表情を変えないまま、静かに足元を見降ろす。

「……枯れた植物……？」

「サーチってか、多分野草知識の方に引つかかったんだろ？」

もう完全に死んでいるその植物を、ヴィレッタさんが持ち上げる。

「それ、スキルによって作製された植物だってさ。詳細はわかんねーけど、多分自分が考えた植物……あるいは近い植物を好きな所に生やすとかそんな感じじゃないかな」

「これで人間が殺せるのか？」

「死んでたせいか詳しくはワカンネーけど、寄生した瞬間一気に血液やら肉を栄養にして成長して、そのまま枯れるんだとさ」

なんともおつそろしい植物作ったもんだ。

「……ヴィレッタさん」

「ああ」

……。

おい。

どつたのさ。どつたのさ。

「トール君、その植物。ひよつとしたらウチらの世界の物かもしれないせん」

「はあっ!？」

「正確には、誕生するかもしれないなかった我々の生体兵器の候補だ。敵地にばら撒く計画があったが、そこまで種子が生きられず、そしてその短期間での散布計画を立案できず処分されたバイオプラントがあった。実物も出なかつたが、データベースには残っている」

「なんつーおっそろしいもん作ろうとしたんだお前らの所は!!!」

「そんなん一歩間違えたら拡散してB級パニックルートまっしぐらじゃねえか!!」

「ああ、いや、もし本当にボクらの世界の物だったら、そもそも碌に生存できない生物ツスから……少なくともこの場にあつた個体は完全に死んでるツスよ。常に餌を確保できるような場所じゃないとコイツ生きられないらしいツスから」

「……そなの?」

「間違いない。実物こそ見たことないが、種子の状態でも三時間以内に死滅するという代物だと記録がある」

「……なら大丈夫、か?」

「とりあえず、こいつらの遺体も焼く……意味はないか。埋めてやろう。いい?」

「うツス、問題ないツスよ。でも、ちようどいいし持ち物は全部回収したいんすけどいいツスか?」

「んー、ちよつと抵抗はやっぱりあるけど……」。

「もちろん。服は俺も欲しかつたし、そうじゃなくても布は貴重だ」

「アオイなら多分そう言うのも気にしないだろうし、これでアイツもある程度しつかりした衣服になるだろう」。

「水仕事で服が張り付いた時とか胸元とか足元が見える時とか気まぐずくて気まぐずくて……」。

「他にも使えるものがあるかもしれないし……もうちよつと奥の方、見てみるツスか」





おくおく、出てくる出てくる便利な物。

……そこまで多くはないけど。

「あれだけの人数がいたにしては、荷物の量が少ないな」

「ひよつとしたら、とっさの隠れ場所としてこの場所を選んだだけなのかもしれないツスねえ」

黒と迷彩色のバックパック一つずつ——どっちも見た事あるロゴがついてやがる——に、同じく既製品っぽい竹かご……つてかザル一つ、金属製のマグカップ一つに丈夫そうなロープ一束。……大きめの缶詰の空き缶なんかもある。

あと、一番嬉しかったのが二本の歯ブラシ。煮沸消毒こそ必要だろうが本当にありがたい。

今までは木の枝をガジガジ噛んでボロボロにした奴と炭や灰でどうにか歯を磨いていたから。

「お、ちっちゃいフライパンもあるツスね」

「ああ、こういうの見た事あるな……スキレットだっけか。ちよいと前にこつちで話題になってた覚えがある」

バックパックの中を漁っているテッサが更に発見をしたようだ。

ちなみに他の中身は、ほとんどが枯れ果てた野草や薪だった。

感じからして、恐らくキッチンとした刃物で作ったのだろうが肝心の刃物は見当たらなかった。

「いやあ、ちゃんとした作りのバックパックもありがたいツスねえ！

これでこつちから先の活動も色々楽しめるツス！」

テッサはこれから先の事に思いを馳せているのか、ずっとニコニコしている。

俺でも分かる。きっと今のテッサは、本当に笑っているのだろう。

……いや、今までにも本当に楽しそうだなって感じる時あったけどね。

俺がアオイにぶつた斬られた時とか。

「トール」

「んお？ なに？」

一方で、淡々と俺に色々話しかけてくるのがヴィレッタさんだ。

話しかけると言うより、問いかけてくるというのが正しいが。

「先ほどの白骨死体、死んだのはいつぐらいだった？」

「半年前——ええとだからロクサンジュウハチ……180日くらい前だった」

「……180日」

「トール君が来るよりも前ツスけど、そこまで古いわけじゃないツスね。まあ、白骨化した理由は分かったツスけど」

そうなんだよ、とびつきり古いわけじゃあないんだよ。  
つてことはさ。

「やっぱり、どこかに人がいる？ それもスキル持ち」

「……にしては、痕跡が余りになさすぎるツスよ。足跡なんかもそうですけど、どこかにゴミとか排泄物とか転がってるもんスよ、いるなら」

「私とテツサの二人だけの時にも、お前達の拠点の周りや例の罾場の周辺を隈なく探索したが……別段それらしい発見はなかった」

「それじゃあ、この近辺にはいない？」

「……スキルという异能もあるので絶対とは言い切れないが、恐らく」  
ん。二人がそう判断したなら、今はそれでいいだろう。

とりあえずはさつき剥ぎ取った衣服を畳んで、バックパックに詰め  
ていく。

Yシャツっぽい服は……よし、サイズも合いそうだしこのまま着させてもらおう。

で、ズボンも……おん？

「コイツ、服見た時からそうじゃないかと思ってたけど……やっぱり俺の世界の人間か」

「どうしたツスか？」

細身のスラックスを持ち上げた時に重みを感じ、尻のポケットを

探ってみるとやっぱり出てきた。

黒い手の平サイズの機械。

スマホじゃない、折り畳み式のガラケーだ。

……結構傷だらけだな。

「それ、トール君が持つてるのとは違うッスけどひよつとして」

「ん、これも携帯。スマホの前の奴だよ、ガラケーって言って——」

説明しようとガラケーを開く。

特になにも反応を示さない。

電源はとづくに無くなっているだろうし、スキルのような反応も出てこない。

「あー、やっぱ完全に死んでるなあ」

ほれつと試しにテッサに放り投げる。

テッサは「わわっ！」と慌ててそれをキャッチし、同じ様に開いて見せる。

「んー、これ、電源入れるにはどうするんスか？」

「本当なら、受話器のマークのボタン……それ、そのボタンを長押しすれば電源が入るんだけど」

当然の事ながら、ウンともスンとも言わない。

「貸してもらっていいか？」

今度はヴィレッタさんが興味を示した。

テッサからガラケーを受け取ったヴィレッタさんは、しばしボタンを色々と弄って、

「トール。このデバイス、しばしの間私が預かっていても構わないか？」

「ん？ ああ、いいよ」

「ありがとう。機械弄りは私の得意分野でな。少しばかり調べてみた  
い」

「そーいや、ヴィレッタさんの得意分野とかあんま知らなかったな。  
アシユリーも。」

「潜入工作が得意って事以外に特技教えてくれたのはテッサくらいか。」

「機械工作とか得意なの？」

「ああ。我々は内部の不穏分子を調べる任務もある。そのため、同じような設備や装備を使いこなす人間を相手にするためにはそういう知識は欠かせない」

「不穏分子？ 魔術師側へのスパイとか？」

大陸ごと違うし、互いの交流も少ないって言うからそういうのは少ないかなあ、なんて思ってたけど。

「魔術側へと入れこむ連中はいる。自然保護を叫ぶ自然主義者や反戦主義者。それに、動きがあまり掴めないが今の政治体制の転覆を目論んでいるとされる平等主義者など——」

あらまあ。

やっぱりどこでも、そういうのは産まれるのか。

ゲイリーからも、ちよつとそこらへん聞いておくか。

「うっし、とりあえず荷物はこんな所か。それじゃあ、とりあえず寝泊まりする準備をしよう。遺骨の埋葬は明日でいいだろう」

さすがに洞窟の中に泊まる勇氣はちよつとないので、ちよつと離れた所でシェルターを作ろう。

この辺りは結構木の枝落ちてたし、そこら辺を上手く使えばすぐに建てられるだろう。

## 047：人と人

シェルターというか、今回は簡単な風避けと炎の熱だけで一夜を過ごした。

テツサやヴィレッタに言わせれば、これもキッチンとしたシェルターという物らしいが……。

そして食事時には、さつそく手に入れたスキレットや空き缶が役にたった。

空き缶と、前に作ったペットボトルのろ過装置でできるだけ綺麗にした水をスキレットで煮沸。そこに干し肉と野草を加えて簡単なスープにして、いただきます。

そうして、とりあえず例の遺骨を埋めてやろうと洞窟に戻り――。

「……ここだよな？」

「ここッスね」

昨日と同じ、地形の切れ目のようにみえる洞窟。

その中に入り、辺りを見回す。見回すが――

「消えてるツスねえ。……遺体」

服や持ち物を剥ぎ取った後、個々人にキッチンと分けて埋葬する準備を整えていた白骨死体が全て消えていた。

「というか、洞窟もちよつとおかしいツスよ。もうちよつと奥行きあったツすよね？　昨日、ボクらがバックパックを発見したので物影だったツスもん」

「それに、壁に所々ついていた戦闘痕らしき傷も消えている」  
「……………」

なんとなく、今着ている服に手を当てる。

間違いなく、昨日白骨死体から剥ぎ取ったYシャツだ。

「周辺で変わった所がないか、様子を見てくる。二人は一度、この洞窟を調べてくれないか？」

ヴィレッタがそう言って外に出て、周囲の警戒をしている間に俺たちはまず荷物の確認から始めた。

手に入れたばかりのバックパック――これは確かにある――を背

中から下ろして昨日手に入れた物を確認する。

テツサも同様だ。

衣類にマグカップやスキレット、歯ブラシ、竹のザル、ロープの束……ある。全部ある。

「なんで遺体だけ……」

唐突に、スマホが震えだした。

驚いたのか、テツサが咄嗟に周囲を警戒し始める。

「ああ、大丈夫大丈夫。こっちだ」

震えているスマホを振って見せても、笑顔にこそなれど周囲への警戒をテツサは怠らない。

「スキル、またなにか習得したツスか？」

「それならまだいいけど……」

——不具合の修正が完了致しました。

そらきた。訳の分からんアナウンスだ。

「……どうなってるんだこれ」

「不具合ってのは白骨死体……つまりスキル持ちの遺体のことなんスカね？」

「さあ……」

思い出したのは、ついこの間の事。

アオイが返り討ちにした元上司とかいう奴の死体だ。

さすがに半年も立つちゃあいないが、あの死体は確かに残っていた。

「というか、それなら洞窟に残ってた傷痕まで消えてるのはどういうことなんかね」

「……争いの痕跡が不具合……ってのはどうツスか？」

「……ふむ」

それならアオイが斬り殺したあの男はどうなるんだって話になってくるが、あれを争いではなく犯罪だと——べつに法なんてものはないが——スキルやらを与えてくるどっかの誰かが判断したとすれば、

あるいは。

「まあ、目の前で起こって、しかも触れる事も見る事も出来なくなった事に拘っても時間の無駄か」

「んんん。ツール君は、自分に変な力を与えているナニカが気にならないツスか？」

「ならんわけがなからうに」

「ツスよね」

いやもう、出来るだけ前向きに考えてはいるけど、いきなり人の頭に機械ブチ込んだり眼か脳弄ってくれちゃったりするクソヤロー、いや、その前にこの世界に誘拐したかもしれない『ナニカ』が存在するならドロップキックかました後にさらに二、三発ぶん殴っても許されると思う。

「ただ、いま大事なのは『知る』ことよりも『安定』させることだと思ってる」

「安定……人間関係とかツスか」

「おう、お前らが引つかき回してくれたおかげでそれも割とシヤレにならんくらいウェイト占めてるが」

「ワリツスー」

ホントに悪いと思ってるのかコンニヤロウ。

とりあえず、日光が差し込む範囲の洞窟の壁を、二人で色々と調べる事にする。

やっぱり、ただの岩壁になっている。

引つかいた痕など全くない。

「まあ、そういうのも含めてさ。飯だったり寝る事だったり安全性だったり」

「でも、そういうのがある程度充実しちやったらボク達、変な動きを見せるかもしれないツスよ？」

おおう、まだそういう動きがあるのかね。

……ひよつとして、こっそりリークしてくれた？

「もうさせねえよ。起こったとしても、なんとかしてまた止めるさ」

「またツール君ボロボロになるツスよ」

「……なるだろうなあ」

今度似たような事になったら、俺の動きも多分対策されるだろうし。

どうにかして喧嘩——や、喧嘩っていうにはある意味スケールデカいけど——になったら、どうやって止めよう。

テッサが俺に協力してくれるなら、アシユリー達の裏をかけると思うけど。

「それでも、また止めるツスか？」

「止める」

「正直、先日の件は隊長とボクら追放した方が丸く収まってたツスよ。あるいは毒殺とか」

「物騒だなお前さん。でも……ああ、かもな」

「でも、それをしないんすか」

「しない」

というか、それが出来る性格ならとつくにしとるわ。

(多分、自分の悪い所なんだろうなあ)

ゲイリーを助けようとしたのも、アシユリー達と敵対しようとしたのも、単純に自分がそうしたいからしてるわけで……。

この森に来る前から薄々分かっていただけ、自分って奴はどうしようもない奴らしい。

「駄目なんだよ、そういうの。俺の中でもうアシユリーは身内で……アオイもゲイリーも」

「そしてアシユリー隊長はツール君を裏切ったツス」

「それだけだ」

「……それだけツスか？」

「ああ、それだけ」

ゲイリーに刃物突きつけたのはちよつとやりすぎな気もするが……今回はとりあえず許してやろう。

互いに兵士というか軍人というか敵というか……まあ、そこは分かっているから。

「ゲイリーを裏切った事にや物申したいが……人は人を裏切るモンだ



「からなあ」

「なら、トール君も裏切った事があるツスか？」

「ある。あつた。……やつちまった」

些細な喧嘩といえは喧嘩だけど、それでも昔からの友達を相手に無様晒したのは俺な訳で……。

「それから俺は、少なくとも本当に親しい奴は裏切りたくねえって思ってるし、そう行動する事に決めてるけど、だからお前も俺を絶対に裏切るなっていうのはなんか違うと思うんだよ」

「……信じた相手が、とんでもない悪党かもしれないツスよ？」

「や、信じたのは俺だし」

「というか、アオイとか割りと最初っから悪党というか……裏方っぽい雰囲気は出してたし、それでも身内だと思ってるのは俺なわけだ。」

つまり――

「そもそもさ、俺が勝手に身内とってる奴らが俺を裏切ったり傷つけたからって、俺がそいつを見捨てたり裏切る理由にはならないんじゃないかって思うんだよ」

うん、これだ。

「なんだろう。ほんのちよつとだけ、自分の中で整理された気がする。」

「大本にあるのはきつと、もつとみつともなくてどうしようないプライドとか虚栄心とかそういうスンゲー見たくねえ気持ち悪いものなんだろうけど……。」

でも、そう思っているのは本当……だと信じたいなあ、せめて。

「だから、うん。裏切ったからってちよいちよ見捨てたら割に合わねえだろ」

正直、今後もそういう事はあるだろうけど……うん、やっぱり俺から裏切る理由にはならねえよなあ。

「……………トール君」

「ん？」

「なんであのクレイジーサイコリッパーが、トール君にめちやくちや

心を開いているのかずつと不思議だったツスけど、今、少しだけ分かった気がするツスよ」

クレイジーサイコリッパ。

クレイジーサイコリッパ。

……アオイかあ。

「あいつ、あれが素じゃないの?」

「ほぼ素を出しているからこそツール君がすごいというかなんというか……いやはや、でもちよつと見えてきたツスよ」

「何が?」

「アオイさんがツール君をどう思っているかツス」

「……あいつ、俺の事どう思ってるの?」

俺の考え察してぶつた斬ってくれるあたり、互いに意志疎通というかある程度の理解はある……いや、向こうが俺を一方的に察しているだけって可能性も十分にあるが。

「ん? 超簡単ツスよ。ツール君の一言で、迷わずツール君ぶつた斬るあたり狂信に近い忠誠を持つてるツスけど——」

「——ヒーローなんスよ。きつと、アオイという女から見たツール君は」

俺からもつとも遠くね?? そのイメージ。



「どうだ、何か新しい発見はあったか?」

「皆無。荷物が消えてなくて良かった〜ってだけか」

「ボクも同じッスねえ。特に目新しい発見はないッス」

一応前に引つかいたような傷があった場所や、バックパック等が転がっていた奥の方を念入りに調べてみたが特に異変なし。

土埃を吹き飛ばしたりしてみたが、前にあつた痕跡が完全に消えていた。

ひよつとしたら、奥の方に行けるんじゃないかと辺りの空気の流れなんかも気にしつつあーでもないこーでもないと調べたがやっぱり目だった。

無駄撃ちになるかもと思いつつサーチも使用してみたが、やっぱり無駄撃ちだった。

壁などに集中しても、岩に関しての情報しか出てこない。

「外はどうだった？」

「異常なしだ。あるいは植生などが変わっているかもしれないと、昨日のデータと照らし合わせてみたが、これといって異変はなかった」「動物の気配とかも？」

「……少しだけ。近くに、木の実が齧られた痕跡があつた。食べ口から見て、恐らく鳥類だろう」

鳥か。

そういや最近、チラホラと見るようになってたっけ。

「今度、鳥用の罠とかも作ってみるか」

鶏肉そういえば全然食べてなかったな。

こつちに来る前は、よく学校帰りにコンビニのホットスナックでから揚げとかフライドチキンとか買って帰ってたのに。

ああ、なんか脂っこいもの食いたくなってきた。

それと胡椒が効いた奴。

「まあ、これ以上考えても仕方ない。荷物を整理して出発しよう」

今回、俺たち以外の人間の死体があつたと言う事。そしてそれらが消えるという現象を目撃しただけでも探索成果としては十分だ。

回収した荷物も含めればなおさら。

「初日でこんだけ成果あつたんだ、今日はもっと良い事があるか、下で

じっくり休めるかの二択だろうさ」

正直、もう戻ってもいいんじゃないかとも思った。けど、一応二日と予定したし、もつと下流で更に発見があるかもしれない。

あるいは、早く発見しないと白骨死体同様消えてしまう可能性がある。

(キッチンと作られた道具は正直ありがたいしなあ)

バックパックに詰まっていた薪は、多分しつかりしたナタの様な大きめの刃物で割られた物だ。

もし、その道具がどこかに残っているのならば回収したい。

テッサやヴィレッタのサバイバルバックやナイフのおかげで色々充実して来たけど、それもあくまで必要最低限の物。

確実に生活を安定させるというには全然足りない。

例えば布。例えば針。例えば医薬品。例えば金属製品。

「というわけで、早速出発しないか？」

出来る事ならもうちよつと下に行つて、次の拠点になりそうな場所をいくつか目安を付けておきたい。

「異議なしッスー！」

「了解した」

さて、次は何が見つかるかなあ。

## 048：海と四つめの世界

「もうさ、途中から完全野宿も覚悟でぶっ通しで歩いていたんだけどさ」

「そツスね」

「……まさか、森を抜けられるとは思わなかった」

「……そツスねえ」

すでにかなり日は低くなり、夕暮れ特有の優しい光に俺たちは照らされている。

遮る物は何もない。

これまで散々自分達に木陰という快適な場を提供してくれた木々は、自分達の後ろの方に生い茂って、ざわざわと手を振っている。

「まさか、いきなり海になるとは思ってたツスね」

「ああ」

そして、今俺たちの足元にあるのは草木ではなく、そして踏み慣れた土でもない。

真っ白な砂が広がっている。

定期的に砂浜を打つ波の音と、潮の香りが現状を俺の脳に叩きこんでいる。

海だ。

俺たちは、あの森を抜けたんだ。

「まあ、抜けた所でどうなんだって話だが……」

森を抜け、少しだけ広がる草原を抜け、そして海。

目の前に広がる水平線。視界にはなんつつつつつつつにも入らない。

強いてあげるならば蒼い空と白い雲と鳥の影か。

……。

うん、それだけだ。

で、この世界の手掛かりは？

「うーん、見た所ゴミの類も全然ありませんねえ。もし、ボクら以外に人間がいたとするなら、絶対海岸にはもっと色々な物が流れ着いてる

ハズなんですが……」

「海に進出していかなかったとかでも？」

例えば、もしスキル持ち同士で殺し合いなんてしてたら、こんだけ身を隠す場所がない所に近づこうとは思わんだろう。

「でも、そこに流れ込んでる川がここにありませうし、普通なら川に捨てた物や落し物なんか海にまで出て、そうしてそこらに打ち揚げられたりするもんツスよ」

「……じゃあ、やっぱり人はいない？」

「もういない。という事かもしれない」

全滅したってこと？

うっわあ、考えたくないなあ。

「皆死んだから俺たちが連れてこられた？」

「……あるいは」

昨日見つけた骨の奴もそうだけどき、なんであんな事になったのさ。

よく、二人以上いれば対立が起こるって言うし間違いないだろうけど……あんな事態を引き起こすまで決定的な事ってあるのか？

(……俺の考えが浅いだけかなあ)

「いちおう、警戒だけはしておこう。あたりに人が隠れる事が出来るような場所はある？」

「そツスねえ……あえていうなら、一番森つてか木々がこつち側に突きだしてる所ツスカね。ほら、あのちよつと高くなってる所ツス」

森を抜けてからここまでは、ちよつとした草原があるだけですぐに砂浜だ。

その中で、一か所だけ森というか、木々が砂浜ギリギリまで生えた林のようになってる所がある。

「まあ、木々もまばらですしほとんど丸見えツスけどね。一人二人が隠れる程度ならまあなんとかって所ツスカ」

「大人数が隠れるには向かない、か」

一応、調べておいた方がいいのか。

「ちよいと聞きづらいけど、ヴィレッタとテツサってどつちが強いのか」

？」

「あー……ヴィレッタさんツスね」

「純粋な戦闘という意味ならば、恐らくそうだろう」

あらま、そうなのか。

個人的にはテッサの方がヤバイ……じゃない、強いんじゃないかと思ってたけど。

「トール君も一度見たと思うツスけど、ヴィレッタさん透明化したでしょう？ 光学迷彩の他、腕やら足も機械化していて、色んな武器を隠しているツス。ナイフ数種類にブレード、ショットガンに暴徒鎮圧用の催涙弾やテイザー、その他もろもろツス」

「喋り過ぎだ、馬鹿者」

いつものニコニコ笑顔で説明してくれるテッサを、ヴィレッタが軽く小突く。

本当に軽くだったのだろう、テッサは小突かれて軽く顔を下に向けても、こっそり舌を出している。

(……なるほど、催涙ガスか)

一応対策は練っておこう。

ヴィレッタさんを警戒するわけ……ではあるけど、同時に他の連中も来る可能性がある。

一網打尽なんて事になったら、それこそ洒落にならない。

(特に女性陣が多いからなあ、こっち)

催涙弾とかを使って来そうな連中の明確な敵であるゲイリーが男でよかった。……よかった？

うん、まあ。とにかく、ウチの面子に及びかねない危険要素がある以上、できるだけ対策を練る必要がある。

テッサ……あと、ゲイリーにも話を聞いておこう。アオイにも。

「……あれ？ そんだけ装備あつたんなら、俺がぶっ刺されてる間にアオイ倒せたんじゃない？」

「死にかかっているお前が傍にいたからな。それに、もし下手に動けば……恐らく、あの女は瞬時にお前か私の首をはね飛ばしていただろう」

「……俺はともかくとして……避けられなかった？」

「恐らく。あの女の剣術は相当なレベルのものだ。もし、あそこであの女に中途半端な攻撃を加えていれば、その瞬間に首が斬り落とされるか、あるいは胸部などの急所を貫かれていただろう」

「あー……」

つまり、俺がちよつとやそつとじゃ死ぬそうにない時——拘束されてたりする時でもアオイはヴィレッタさん達相手でも脅威になりうるって事か。

ということとは多分、魔術師相手でも結構戦える気がするなあ。今は魔法使えないらしいし。

OK、一応覚えておこう。

「ん。とりあえずテツサと俺で荷物とか持つから、ヴィレッタさんは警戒に専念して林をちよつと調べよう」

ついでに、周囲の様子次第じゃあそこの草原にシエルターを組めばいいだろう。

「そうだな。そうするとしよう」

ヴィレッタさんが背負っていたバックパックは、今はテツサが背負っている。

特に重い薪やスキレットは俺の方に、他の荷物はテツサの方だ。

「さて、それじゃあ行くか」

林まで歩くこと十分ほど。

緩やかな傾斜を登って辿りついたが、やはり怪しい所はない。

むしろ、シエルターを構えるのにちようどいい場所だ。

海からそれなりに距離がある上少し高いから、仮に雨が降っても水が溜まる事はない。

「んー、やっぱり異常なしッスね。昨日の洞窟の件があるから、ボクてつきりそこらの地面に裂け目があつて、なんか入れる所があるんじゃないとか考えちゃったッスよ」

「おう止めろ、洒落にならん」



そんでまた死体見つけたら凹むぞ。

昨日は死因が死因だから骨になってたけど、腐乱死体とか見たらショックを起こす自信がある。

俺の周りの連中は兵隊とかそういう経験あるからなんてことなきうだけで、こちとら普通の学生メンタルだ。狂乱したっておかしくない。

……やだなあ、そういう場面ほんとにどっかでありそうで。みつともない姿をみせるのだけは避けたいもんだ。

この間思いつきり見せたけど。

「しっかし、見事に水平線しか見えないな」

河口から離れて、今再び海を見るが……なんというか、青一色だ。違う島とか陸が見えないかと思っただが、そう言う物は一切ない。

流木すらない。

なんやねんここ。

「まあいい。割とここ、次の拠点としてもいいかもしれん。とりあえずここでシエルター作って、地盤を整えてから調査に移ろう」

俺も夕暮れ前にはまたサーチが使えらるだろうし、それで一気にここらを調べよう。

そう思っ振りがえると――

「……ドア？」

振り返ると、そこには木製のドアが生えてた。生えてる。……生えてる？

「トール君、下がるツス！」

テツサがナイフを抜き、ヴィレツタさんは例の隠し武器でも使うつもりなのか腕に手を添えている。

「いや、下がるのは君達だから」

何が出てくるか分からんけど、いきなり迎撃態勢に入っどうするんだよ。

まあ、分からんでもないけど。

だからこそ、出るのは一応リーダーの俺であるべきだろう。

なあに、刺されようが斬られようが再生するし問題あるめえ。

心臓と頭さえ守ればどうにかなる。

(にしても、豪華だけどなんかボロい感じだな)  
やけに装飾が入っている、だが使いこまれた雰囲気のある木製のドア。  
ア。

そのドアノブが動き、ギイ……つと開く。

刃物を下ろすかどうか悩んでいる様子のテツサの腕を抑えて、一歩前が出る。

「? おや、私の工房に客人とは珍しい。ギルドの人間かい? 納期なら……ん? 明るい?」

そうして出てきたのは、肩の辺りまで適当に伸ばした青い髪と片眼鏡モノクルが印象的な、随分と厚着をしている男装した女だった。

なんとというか……気だるそうだ。

女は俺の顔をしばし眺めた後に周囲を見まわし、空を仰ぎ、そして今度は海へと目を向ける。

「あー、大丈夫か?」

一歩前に出ておきながら、なんと声をかけるか考えてなかった俺は、そんな間の抜けた台詞を吐いていた。

「ふむ、とりあえず外傷の類は感じないな。それで、少年。私をさらったのは君かい?」

「いいや、残念ながら俺達も誘拐された側だ」

とりあえず、会話が成り立つ相手のようだ。

モノクル越しに俺を、そして後ろのテツサとヴィレッタを見る。

……おい、二人ともいい加減警戒解いてよ。

特にテツサ。

「ふむ……。そちらの二人はともかく、君からは敵意はおろか、警戒心も感じない。ならばこちらも一個人として礼を尽くそう」

「私はクラウ。クラウⅡクラス。樹内世界にごまんという『錬金術師』

の  
一人だ」

## 049：錬金術師『クラウ』Ⅱクラス

大地が謎の奇病により汚染され、命ある者は徐々に魔物へととなってしまふ世界。

それがクラウのいる世界だそうだ。

クラウが生きている時代よりもさらに昔、徐々に生活圏を奇病によって失っていく世界で唯一影響を受けない場所。

それが、とある大樹——本当に馬鹿でかい、天に届く程の高さと小国ならまるごと入りそうな広さを持つ樹の周辺だけは平和だったらしい。

だが、あくまでも本当に周辺。大勢の人間が住めるような土地などない。

そして、魔物になることはなくなっても魔物自体は襲ってくる。

そこで当時の人は、生活圏を広げるためにその大樹の中をくりぬき始めたらしい。

小さい横穴を掘り、そして中を削っていき、そして床天井を作りながら上へ上へと場を進め……。

木の中や、天にも届かん大樹の枝の上などにも住める土地を作りだした。

……火事一つで致命的な事になる気がするんですが。

「まあ、そういう所で育ったわけだからこの光景には呆気にとられたよ。ため池ではあり得ない広大な水場、土や砂だらけの床。そして何より神樹——ああ、先ほど話した私達の住処だが……その気配がどこにもない。いや、本当に驚いたよ」

クラウは、気だるそうだが落ちついたペースで、自分の住んでいた所の事を語っていく。

変な話だが、結構この声好きかもしんない。

「ああ、だからこっちの話に早く納得してくれたのか」

俺の世界の話や、この奇妙な世界の現状についての説明は済ませていた。

クラウは俺の話をじつと聞くと、『なるほど、把握したよ』という一

言で全てを飲みこみ、そうして自分の世界の話をしてくれたのだ。

「となると、私は非常に運が良かった。文明の補助なしで生きていくような技能は持ち合わせていないのでね」

「なら、協力してくれるか？」

「もちろんだとも。ツール君、だったか。君は信頼できる人間のようなだ」

えええええ。

判断するにちよつと早くありませんかね？

「先ほど話したが、私は錬金術師。金属や鉱石があれば、ある程度の加工が出来る。それなりに役には立てるだろう」

「……ある程度？」

「そこは勘弁してくれ。薬品や設備がなければ、錬金術師という職業は成り立たない」

表情のタイプとしてはヴィレッタさん寄りのクラウドだが、表情は結構変わる方だ。

小さく微笑んでこちらに近づき、俺の顔を触ろうと手を伸ばす。

え？　なんで？

触る文化なの？

そしてテッサ、君はなんで間に立ってクラウドにナイフ突きつけてるんですかね？

「おい、離れろッス。ツール君にその臭いが移ったらどうするんスカ」

「？　臭い？」

確かに匂うけど……これ、香水だよね？　なんか、こう、シトラスとかそういう系の。

キツいっちゃあキツいかもだけど、そんなに気なる程か？

「ふふ……」

一方、テッサの言葉に小さく笑うだけのクラウド。

……テッサがなにかに気付いたと考えるべきか。

いや、だけど……。ああ、ちくしょう。

「テッサ」

「駄目ッス」

はえーよオイ。

俺まだなんにも伝えてねーよ。

「頼む」

何かに気付いたのかもしれないけどさ。

そして多分、テツサがここまで警戒するならヤベーだろうけどさ。

「仮になにかあるんだとしても、それは俺が自分で見て、感じて、知って、その上で判断すべきなんだよ。その結果なにかあったとしても、ソイツは全部俺の責任だ」

だから、今は頼むから教えないでくれよ。

下手に先入観入るとすーぐ流れに乗っちゃうのが俺なんだから。

出来る事なら多数派でいたい、意志の弱いふつーの男子高校生なんだから。

正直、今のもギリギリだぞコノヤロー。

「……わかったツス」

そうしてようやく、テツサはナイフを完全に腰の鞘に戻してくれた。

こう、なんというか。

多分、今のは本気で俺の心配をしてくれた……気がする。

いかな。ゲイリーといいテツサといい、フォロー入れなきやいけない面子が多すぎる。

(本当にヤバイってなった時は、頼むよ)

(……うツス。任せるツスよ)

小さくそうつぶやくと、テツサもある程度納得してくれたのか大人しく俺の後ろに下がってくれ——ねえちよつと近くない？　なんで腕にしがみつくの？　胸当たってるよ？

「おやおや、君はどうやら人心掌握に長けているようだね？」

「どっちかっていうと苦手なほうなんだけどなあ」

今も完全にまとまっているかと言われると微妙な訳で。

まあ、嫌われてはいないと思う。

アシユリーも踏みとどまってくれたし。

「ほう？　とてもそうは見えないが。ツール君——と呼ぶのもアレだな。敬意を払って、リーダー君と呼ばせてもらおう」

「それホントに敬意ツスか？」

テツサステイ。

「ああ、それでいいよ。それでクラウ、錬金術ってどういう事が出来る？」

「む、そうだな。設備はもちろん道具もないから……ちよつとした金属製品の補修や手入れ、あるいは加工。あとは……ああ、調査こそ必要だが、ここらの植物でちよつどいい物があれば油を集める事ができるな」

「マジでか」

「ああ。少々雑な物になるが、燃料目的でも香油でも、一応は出来るだろう」

助かる。めっちゃ助かる。

大きい動物とかが罨にかかった時に油を取っておくようにしているけど、そんなに保存が出来るわけじゃないし当然ながら毎回毎回手に入るわけでもないしで、ほとんど活用出来なかった。

なによりあれ臭い酷いし虫沸くしで、あんまり活用できていなかったりする。

「錬金術というのは、特に金属や鉱石をイジる時には炎が必須だからな。火に扱いに関係するもの……例えば燃料等に関しては多少の知識があるし、火の扱い自体も当然慣れている」

「……その場の道具で火を起こせる？」

「もちろんだとも」

おお……。

今更ではあるが、どうしてもっと早く来てくれなかったのかね。

「ん？　ちなみに設備が整えば何が出来る？」

「それこそしつかりこの近辺を調べなければならぬが……錬金術の本領——金属への特殊効果の付与が可能になる」

「……付与？」

「例えば、強く叩き付けたらその部分が爆発するようになりとか、あ

るいは金属そのものに強い冷却効果を付けたり、その逆に温熱効果を付けたり……あとはそうだな、少々変わっているが斬った物が必ずくつつく刃物等もある」

「なにそれ超欲しい」

真つ先に思いつくのは、ゲームによくある特殊武器的な奴——の前に。

(こいつ冷蔵庫作れるんじゃない?)

もつと言えば冷凍庫も。

そうすれば食糧の保存に関しての問題はクリアされる。

冬場を迎えても、暖房器具のような物は今でも作ろうと思えば作れるし、クラウの言う温熱効果の付いた金属とやらがあればかなり変わる。

「それ、設備さえあれば作れる?」

「設備と道具、あと環境だな。これに関しては周辺を調べてみるしかない。まあ、可能性は十分ありそうだが」

「ある? 根拠は?」

「リーダー君。君の眼だ」

ん?

「君の眼、おそらくはスキルとやらによるものだろうが、錬金術の手が入っている。たまに妙な物が映るんじゃないか?」

「……………」

サーチスキル————!!!

貴様、そういうことか————!!!

「その眼がすでにあると言う事は、その際に使う金属やその鉱石類もこつちにあるのだろうと推測したのだが……違うのか?」

金属う? 知らんそんなの!

「自分の知りたい情報が手に入るのは……」

「ああ、脳の方にも手が入っているのか。随分と恐ろしい話だ。本来なら半年程かけてゆっくり変質させていくものなんだが」

ちよ、おまつ。



いや、まあこれでネタも割れたしいんだけどさ。

これまで助けられてきたし。

でもさ。でもさー！

「……具体的にはどうしてるの？ その、本来の手順なら」

「なに、本体が死なない様に処置をしながら脳を取り出し、保存したそれに特殊な針を刺して色々と付加を付けていくのさ。まあ、本来ならば八割は死んでしまう実験的な物なんだが……いいなあ、実に羨ましい」

どこがだ！

「待て、クラウとやら。半年時間をかければ、見たことない物や異なる世界の物も分かる様になるのか？ お前達の技術は」

あ、そうか。そういやそうだ。

そこは前々から不思議な点だった。

「いや、不可能だ。どう足掻いても、植え付けられる知識は知っている物だけ。恐らくだが、君の目と脳に処置をした者——まあ、いるならという過程だが。その何者かの知識量は尋常じゃないのだろう」

「……何者か」

なんとなく、自分が持っているスマホを取り出す。

（いるのかな、やっぱり誰かが。このスマホの向こう側に）

「あー、もうちよい色々聞きたいことはあるツスけど……とりあえず、この四人で夜を過ごすならそろそろシエルターの建設に入らないと間に合わないツスよ。ここ、ちよいと風が強いツスから丈夫に作る必要あるツス」

……そしてテツサさんや、どうしてそこまでこの人警戒してんのさ。

君がこんなに長時間笑顔を作らないなんて、短い付き合いとはいえ初めてで俺ちよつと驚いてるよ。

「ふむ。嫌われてしまったようだが、私としては君達とも仲良くしたいと思ってるのだがね」

そうしてクラウは、テツサとヴィレッツタさんの二人に向けて手を差し伸べる。

ヴィレッツタさんは、まあいつも通りなのだが……テツサの嫌悪感が凄まじい。

「ええ、そちらがそれ以上香水使わなくてもいいなら、仲良くしてやつてもいいツスよ」

「それなら安心してくれたまえ。これ以上増えることはないよ。もう十分だ」

恐る恐るというか、いやいやといった様子で握手をするテツサとクラウ。

それどういう意味の会話——やっぱいいです。

………ねえ、なんで火種ばつかが増えていくの？

泣ける。

## 幕間　　く拠点の朝会議

「つまりい……洞窟の中で争いらしき痕跡と白骨死体、その人達の持ち物を発見したのですが、回収したモノ以外は全て消失。その後森を抜けた浜辺で新しい世界の人を拾って、今帰ってきているということですねえ？」

「ええ、そうみたい。一応向こうで一泊したけど、食糧が現地調達だけじゃあ不安だから、今急いで帰還して戻って」

トール達が出発してから三日目の朝。

朝食を終えたアオイ達は、以前作った虫用の罠にかかった虫を釣り針に仕掛ける作業をしながら、テッサとヴィレッタから頭に直接届けられた報告を、アシユリーは二人に報告していた。

「トール以外にスキル持ちがいて、そして彼らは争い合っている……そういう事か」

苦虫を噛み潰したような顔でゲイリーが呟く横で、アオイはいつもの笑顔で先ほど口にした魚の干物を咀嚼しながら、魚の餌となる虫の用意を進めていた。

「まあ、トールさん以外にそういう人達が現れる可能性は考えていましたけど、すでに殺し合ってくれてるのは予想外でしたねえ。まあ、こちらとしては都合がいいですけどお」

「都合がいい？」

「いや、他の人がスキルを持つと碌な事にならないと思うので……特にトールさんの世界というか、国の人間は」

食事場になっている中央の焼き日とは別に、生木を燃やしてわざと煙を発生させている焚き木が風下にある。

トールがいない間に捕まえた魚や獣を燻すための焚き木だ。

一方風上の方には、小さい範囲を囲う即席の柵が出来ている。

先日捕まえた大きなリスを捕まえている物だ。

「む、どうしてだ？ トールと同じような考えを持つ人間ならば、それなりに上手くやっつけていけるのでは？」

「逆ですよ逆。絶対酷い事になりますよお」

バッタのような虫から足を羽をむしり、釣り糸にくくりつけてある真つ直ぐな釣り針を腹に突き刺し、埋め込んでいく。

「先日の一件で、あのスキルっていうのは本人の経験に沿うものを強化するか、あるいは心から欲している物が習得候補に入るんだろうって私は考えています」

アシユリーは、そしてゲイリーは思い出す。

あの時、すぐにも死にそうだったツールが、それを即座に補うようなスキルを引きだし、回復した時の事を。

「まあ、かなり強く願うか、あるいはいくつかの条件がないとそうそう簡単に望んだ通りのスキルは手に入らないでしょうけどお」

「それは分かるが……なぜ、ツール以外にスキル持ちがいてはいけないんだ？」

「単純に物騒な馬鹿が増えるからっていうのもありますけど、多分私達が完全に二つに別れちゃいます」

釣り針の大きさが不満だったのか、手にした釣り針を手造りナイフ——例の岩場で見つけた黒曜石を削った物だ——で削りながら、アオイは次の仕掛けを作っていく。

「まず、基本的にツールさんの所ってこういう環境で生活する事はないでしょうから、その時点で精神のバランスが壊れてしまうでしょう」

平常心を保つ事は大切だ。

全ての基本であると同時に、最も難しいことである。

ここに居る三人はそれを理解している。

「で、その先にスキルなんて便利な道具を手に入れたら……最初はいいかもしれませんが、手にしたスキルの内容次第だとリーダーぶるかもしれません。あるいは、内にひそめた傲慢の芽が開くかもしれません。力をひけらかしたいのは、恐らく誰もが持っている欲求でしょう」

「なら、ソイツを追放するだけで済むんじゃないか？ ツールは反対するかもしれないが」

「いえ。そうなった時、スキルを持った誰かさんを煽てあげるか、ひっ

そり匿うだろう人がそこにいますから」

「そうでしょうか？」と言う目でアシユリーを見るアオイに、当の方人は「ん〜」と、唇に指を当てながらしばし考え、

「そう、ね。多分そうする……と、思うわ」

「お前まだ……っ」

ゲイリーの睨みなど気にせず、アシユリーは続ける。

「生半可なことでは制御できない精神性のツール君に、それをガードするアオイちゃんの組み合わせは厄介な事この上ないわ。銃火器や装備もないし。そこに適度にチョロいスキル持ちが現れると言うのなら、こちらにとつては確かに都合がいいわ」

アシユリーはごく普通にそう告げながら、ゲイリーが編んだ紐にアオイが仕掛けた餌と針付きの短い紐を、一本の長い紐に一定間隔で結び付けていく。

「随分と素直ですねぇ」

「貴女相手に小細工は通じないでしょ。ツール君も」

アシユリーはほとんど開き直った様な様子で小さく微笑む。

「まあ、そういう小物がどれだけ役に立つかは分からないけど。そういうのにかぎって闘争心はありそうだから、利用できるならさせてもらう事になるでしょうね」

「ツールさんとは違う意味で面倒ですよ、それ」  
「でしようね」

他人の事などわからないが、アシユリーにとってツールとは、『味方になってくれれば心強い』範疇に入る人間だった。

だからこそ、出来るだけ彼の関心を引きたいし、それこそ強行手段をとつても掌中に収めたかった。

「普通の人があんな力手に入れたら、舞い上がって乱用しちゃいますよお。それこそ、洞窟の中で亡くなっていた人たちは、スキルで殺害されたんでしょう？」

「ええ、そうらしいわね」

「断言しますけど、同じような事になると思いますよ。もし、現れたら」

「……そうねえ」

もし、そんな存在が現れたら真つ先に接触するつもりではあるが、やはりその可能性は捨てきれない。

それはアシユリーも考えていた。

「ま、今はそれよりも新人さんの方が問題でしょ」

ただ、結局全ては仮定の話でしかない。

もつとも大事なのは、現実に現れた新しい来訪者についてだ。

「ゲイリー、そちらの技術に近い様だけどう？」

「お前な……まあいい。実際にその光景を見てみないとなんととも言えないが……凄まじいの一言に尽きるな」

「そもそも、ゲイリーさんの魔法ってどういう物だったんですかあ？

今は使えないそうですが」

現状、アオイの目からすればゲイリーの役割は純粋な労働力に近かった。

狩猟の経験や知識が豊富というのはありがたいが、それ以上というわけでもない。

「俺の専門は土や砂の操作だ。作物が育ちやすい様に改良したり、あるいは成長を早めたり……ああ、あんまり自分でした事は無いが、ガラスの作製なんかも出来る。戦闘では……その場で防壁を作ったり、土のゴーレムで敵を迎撃するのが主な役割だった」

「なるほどお。つまりゲイリーさんは、土いじりのプロなんですかねえ？」

「おいその言い方止めろ。なんか腹が立つ」

嫌みだかそうでないのか、にこにこ笑いながらそう言うアオイに、ゲイリーが顔をしかめる。

「物質に永続的な効果を付けられる魔法というのは、俺たちの世界にはほぼ存在しないんだ。ゴーレム作製のような例外こそあるが、アレだっただけ対応する魔素の濃い部分でなければ動けない」

「……じゃあ、新入りさんの言ってるような技術は基本全部無理だど？」

「ああ。少なくとも俺には出来ない」

ゲイリーの断言に、アオイは『なるほどお』と呟く。

「これは思った以上に、役に立ってくれそうですねえ」

「ええ、ただ……」

アシユリーもまた、新しい世界からの来訪者を歓迎している人間だった。

全く関わりのない第三者がグループに加わるのは今の空気の払拭に役立つし、なにより全く聞いた事のない技術や知識の収集は、軍人としても個人としても好ましいことだ。

「ただ、どうした？」

「うちの子が変な事言ってるのよねえ」

「どちらですかあ？」

「テツサ。……ほら、貴女と妙に意気投合してたブロンドの」

「ああ、テツサさん。それで、なんて？」

「新入りの事を、『死臭がする良く分からない生き物』……って言うてるんだけど。これ、どういう事かしら？」

「ああ——」

「大丈夫ですよお。良く分からないなら、とりあえずツールさんに投げておけば上手くいきますよお♪」

「……ねえ、それ本当に大丈夫なの？」

## 050：合流。（副題・とある二人の密会）

「ほう、すでに連絡が行っていたというのは本当だったのだね。いやはや、君達三人の技術も興味深い」

あれから急いで帰還したが、やはりそれでも二日かかった。

途中の食糧が少々不安だったが、テツサとヴィレッツタがサバイバルバックに入ってる釣り糸と釣り針を使って魚を釣ってきてくれたおかげでどうにかなった。

……やっぱり、予備の道具って大事だな。

こういう緊急時にはホントに大事だ。

今度、散々使った弁当箱を一度殺菌して、そういうものを詰めておくか。

一度デカイ器に水ごと入れて長時間煮沸してやれば多分大丈夫だろう。

「聞いているだろうが改めて。錬金術師。クラウⅡクラスだ。なにぶん迷惑をかけるだろうが、よろしく頼む」

事前に連絡をしていたので、既にクラウの分のシエルターは完成している。

やっぱり通信という物は便利だ。おかげで夕暮れから作業を始めてたりする必要がなくなった。

モノクルに青のセミロングの男装という特徴的な女性新人が、頭を下げてアオイ達に挨拶をする。

「いえいえ、これからよろしくお願いします。元奴隷管理官のアオイと申します！」

職業は言わなくてもよかったんじゃないかなアオイ！

「ゲイリー。まあ、貴族だった男だ。同じく頼む」

「アシユリーⅡエア。その二人の上官よ。よろしくね」

続く二人の様子に、クラウは小さく微笑んだまま「ありがとう」と返答する。



とりあえずいつもの中央の焚火場——俺がいない間に用意したの  
だろう。それぞれが腰掛けられるように適当な大きな流木が三本用  
意されていた。

焚火を囲うように三角形になっている。

とりあえずそれぞれが適当に座り——俺の横にはアオイとクラウ  
が座っている——事前に用意してくれていた足湯で疲れた足を癒す。  
「さて、トール。色々と尋ねたいことはあるんだが……それが戦利品  
か？」

「ああ」

俺とテツサが背負っているバックパック、その中身を火から遠ざけ  
た所に並べていく。

「小ぶりのフライパン、丈夫な……木か？ それで出来たバスケット  
に鉄……いや、やけに軽い金属で出来たマグカップにロープ一束。歯  
ブラシ、金属の器に衣類、か。……？ 靴はなかったのか？」

「無かった。どの死体にも、足元に完全に干からびた繊維がいくつか  
落ちてたっぽいから、サンダルとか草履とかそれっぽいのを自作して  
たんだと思う」

多分だけどな。

「なるほど。つまり、元々履いていただろう履物が使い物にならなく  
なるくらい長い期間いたという事か」

「……トールさん、一人も履物を履いてる人はいなかったんですよ  
ねえ？」

「ああ、なかった」

「なるほど」

唐突にそう聞いて来たアオイは、珍しく真面目な顔をして俺に質問  
してきた。

「テツサさん。洞窟周りは調べましたよね？ 足跡の類は？」

「なかったツス。ボクもそこは気になってたツスけど……」

え、なんで？ 半年も時間立ってたら足跡消えてもおかしくない？

俺が思わずそう尋ねると、それに答えたのはヴィレッタさんだ。

「我々が探索した時、すでにいくつか、ないとおかしい物があったらろ

う？ 例えば、あの薪を割るのに作ったと思われるナタなどだ」

ああ、そういえば確かに刃物の類は一切なかったな。

気になっちゃあいたが……。

「誰かが回収したと？ それならバックパックごと持っていった方がいいんじゃないかね？」

「必要な物だけ回収したという事もありえるツスからねえ。まあ、ボクが見た所そういう痕跡はなかったツスよ」

だろうな。俺もあの時、——正確に言えば——近くに生存者がいなか気になつて調べたけどそんな気配はなかった。

「あ、そうだ。トールさん、白骨死体が着ていた服を見せてくれませんか？」

「ああ、こつちのバックパックに入ってる。ほら」

バックパックを渡してやると、アオイは中の服を畳んだ状態のまま次々に確認していき——

「ん、一つだけ私達の国の物がありますねえ。これは……南西郡の炭坑地域の作業服……だったハズですよ」

「炭鉱……石炭かい？」

「いえ、泥炭です」

燃料については詳しいと言っていたクラウの質問に、アオイが答える。

風で火を煽らない様にアオイがゆっくり広げたのは、オレンジ色のツナギの様な服だった。

「泥炭は、燃料として以外にも色々使い道があるらしいのでウチじゃあ結構使ってたんですよお♪」

「ふむ？ 肥料かね？」

「ですねえ、知ってるのだと。あとは、酷い臭いがする何かの工場とかじゃあ消臭に使うとかなんとか……専門の部署じゃなかったのによく知りませんが、結構たくさんの奴隷を送り込んでましたあ♪」

お、おう。

相変わらずのドン引きトークだけど、まあ今回は大人しめなのでヨシとしよう。

しかし、泥炭か。

良く分からないけど、色々な物に使えるなら探してみるのもいいかもしれない。

明日アオイに詳しく聞いてみよう。

「で、知ってるのは一つだけか？ 他には？」

「ありません！ 衣装一覧は全部暗記しているので間違いありません！」

「……そういや、服に関しても着れる物は限られてるって言ってたっけか。」

「まあ、変な骨格の奴とかいたしなあ。結構バラバラなんだろう」

「ああ、いたツスね。ま、そういう人間——ええ、人間がいたとしたも不思議じゃあないツス。ねえ、ヴィレッタさん」

「ああ。世界は広いということだろう。想像もしていなかったような人間が、ここには集まる」

なんで俺を見てそれを言うんですかね。

帰り道でもずっと視線を感じてたんですけど。

「む、個人的にその遺骨はちよつと見てみたかったな。帰る時に、私達が寝泊まりした場所の近くにあった洞窟だろう？」

「ああ、そういうわけか全部消えちゃったけど……ちなみに、そういう現象ってクラウの所であつた？」

「ん？」

「人が消えたりとか、唐突に施設とかほら穴とかに変化が起こる事」

「……そう、だなあ」

クラウはモノクルを外し、袖で埃や汚れを拭って軽く暮れかかっている夕日にかざす。

「少々違うが、人が消えると言う事は確かにあつたな。樹上地区——要するに、ほぼ外なんだが、そこには私達の様な錬金術師や職人たちの仕事場になっていてね」

「外？」

「私達の生活空間というのはいわば密閉空間でね。火などの取り扱いはほとんどは外か、外壁に近い限られた場所でしか扱えなくてね？」

ほら、なにせとてつもなく頑丈な樹とはいえ、やはり樹木だ。火の取り扱いにはかなり制限があった」

まあ、だろうな。

「だから、人が余裕で渡れる程の枝の上などを間違っても落ちないように改造しながら、葉や枝の上に工房区や、職人居住区を作っているのだが……そこで人が消える事がたまにあつてね」

「……行方不明か」

「ああ」

遠慮しているのか、他の人間がパクついている焼肉——あの美味い黒リスのだ。アオイ達が取っておいてくれたらしい——を、ちびちびと齧っている。

どうせ明日から色々働いてもらうし、ここ数日は食べる物も限られているんだからもつとしっかりと食つていいのに。

肉……はともかく魚の方はアオイ達が増強してくれた釣り罫や魚籠のおかげでそれなりにストックがある。

長持ちさせるように加工しているとはいえ、いつまで持つか分からんしジャンジャン食ってくれ。

「心当たりがあるんじゃないスか？」

テッサがクラウに尋ねる。

だから、なんでそう挑発的なよ。一回頼むから待つてくれって。

「ないんだ。私もこの件に関しては調査を進めていて……なにせ、家族もいなくなっているからね。落下した形跡も無いから本当に手掛かりがないんだよ」

「……あん？ どういうことツスか？」

「そのまんまの意味だ。気が付いたらいなくなっていてね」

逆に野草の方は結構食べてるな。食欲がないというわけではなさそうだ。

よかった。かなりの強行軍だったから、疲労が溜まってるかと思っただけど大丈夫みたいだ。

「……どういふことツスか？」

「なにがだね？」

おい、テツサ——

「アンタ、ボク達が出会った生き物と同一……ツスよね？」

……生き物？

「む？ 当たり前だろう？ どうかしたのかね？」



「なるほどなるほどお……」

アオイとテツサの二人は少し離れたで話をしていた。

他には誰もいない。皆、それぞれの時間を過ごしている。

トールと新入りのクラウは、さすがに疲れたのかそれぞれシエルターに入り、ゲイリーは中央の焚火場で紐を組み続けていて、アシユリーは黒リスの残った骨で釣り針等を作り、ヴィレッタは湖の方へと行った。

「ええ、テツサさんが警戒したのも分かりました。なるほど……ヴィレッタさんは気付かなかったんですかね？」

アオイとテツサ。互いに笑みを張り付けるタイプという共通点を持つ二人は、今はその仮面を外していた。

「あの人、データ頼りなんスよ。こう、経験が薄いというか想定外に弱いというか……。危険って事には気付いているんですけど、どう危険なのかは分かってないツスねえ」

「つまり死臭。そして血の臭いにだけ気付いたと？」

「多分そうツス」

「……なるほど」

アオイは、手にしたナイフ——テツサから渡されていたそれをクルクルと器用に回しながら、考える。

「で、そちらの考えは？」

「今の内に暗殺を」

テツサが、真つ直ぐアオイの姿を見て断言する。

「罪は全部ボクに押し付けてもらって構わないツスから、今すぐにも」

「……と、思っていたって所ですかね」

だが、アオイはその裏すら見通す。

「じゃなきや、貴女一人でもう寝首を掻きに行つてたでしよう?」

「……………うツス」

最初は黙っていたテツサだが、アオイを誤魔化す事は出来ないと感じたのか、小さくつぶやく。

「もう少し様子を見ましよう。テツサさんも妙な物を感じたから、私に相談しに来たのでしよう?」

「……隊長達は、あくまで自分の隊にとっての方法を考えるツスから……どうしようかとちよつと迷つてたツス」

「で、私が同調するようなら今晚行動を起こそうと?」

「うツス」

アオイが小さく笑みを浮かべる。

いつものニコニコした物ではない、本当に小さな笑みだ。

「まさか、トールさん以外に私を頼ってくれる人がいるとは思いませんでしたよ。それも、一度は敵対したのに」

「すみません。ちよつと悩んだツスけど、他には適任がいなくて……」

「ああ、気にしないでください。結構嬉しいんですから」

少しシユンとしたようなテツサの頭に、アオイはポンポンと手を乗せて軽く撫でる。

「テツサさんの警戒は当然です。もし、私が一人でアレと遭遇していたら迷わず斬っていましたよお」

「……………じゃあ、やつぱり」

「ええ」

「——あの人、人を食べてますね。それも結構」

## 『火種』

『では、テツサが彼女に特別警戒を?』

「ハッ、確かに彼女からは血の臭いが充満している事から、危険な面があるだろう事は理解できます」

湖周辺。本来ならば視界を確保できない水場近くは危険なのだが、視覚も機械化しているヴィレッタには昼間とそう変わらない。

「ですが、会話をしてみた所温厚な性格の様子。今は様子見でよろしいかと」

『そうね。本当に危険人物というなら、ツール君や仲間を襲うとかの現場を押さえて貸しにする事が出来るかと思っただけど……』

アシユリーとしては、できれば彼女が危険である方が都合が良かった。

今言った理由もあるが、同時にツールという男がどう動くのかも見ておきたかった。

彼の行動の指針が分かれば、ある程度先の行動を立てやすくなる。

「……隊長。隊長は、他にスキルを所持している……スキル・ホルダーと呼称しますが、いると思いますか?」

『どうかしらね。いるのならば、こちらから接触して確保しておきたいのだけど』

「同意であります。有用な兵器は一つでも多く確保しておきたい」  
『制御できれば、ね』

「……それも、同意であります。ツールⅡタケウチという少年にスキルが宿ったのは僥倖だったのでしよう。なんとなく、そう思います」  
ヴィレッタも、『今』では少し分かる気がした。

恐らく、普通の人間ならばこうはなっていなかった。

あの夜の時点で決着はついていていた。いや、それどころではすまなかった。

もつと前に、もつとこちらの思うとおりになったか、あるいは全体にとつて最悪の方向に進んだハズだ。

『あなたがなんとなくなつて……珍しい言葉を使うのね』

「そうでしょうか？」

『ええ。アナタ、普段はもっとしっかりした言葉を使うじゃない。イエスカノーの二択』

「……そう、ですね」

『ふふ。嫌いじゃないわよ、今の貴女』

「ありがとうございます」

そう答えるヴィレッタの顔は、やはりいつもと変わらない物だった。

『それで、何か他に特筆する動きはあった？』

「……例のトールの世界の通信デバイスですが、中に記憶媒体があったので解析してみました」

『なにかヒントは？』

「いえ、恐らく元々登録していた連絡先の名前と識別番号。それと写真や音楽のデータを入手しましたがそれだけです。念のためにスキャンをしましたが、ウイルスは確認されませんでした」

『へえ、一応アタシに送ってちょうだい。仮に同じ世界でなくても彼側に近いと言うなら、その文化研究は重要な切り口になるわ』

「はっ、直ちに」

そうして直ちにデータの送信を行う。ヴィレッタの視界に、彼女の世界での『送信完了』を示す文字が表示される。

『……意外。トール君の制服と近いから男だと思ってたら、女だったのね』

「恐らくですが、彼女達も衣類に関しては、どこかで剥ぎ取るなりして入手した物を使っていたのではないかと。あるいは——」

『あるいは？』

「スキルの中に、そういう物があつたのでは……」

『裁縫みたいな？』

「彼女達の死因となったスキルを思えば、もっと直接的な物があつてもおかしくないかと」

『……直接衣服を作り出す？』

「この環境にしては汚れが少なすぎますし、かといって作ったにして



は物が良すぎます」

『なるほど』

ヴィレッタはその場に軽くしゃがみこみ、湖面を観察する。

異変は今の所起こっていないが、いつ、何が起こってもおかしくない。

そう考えている。

「隊長、今ツールはタケウチは？」

『ぐっすり寝てるわ。どうやら、疲れ切っていた様ね。まあ、結局この四日は歩き続けていたのだから無理はないけど……』

「いえ、少々気になって」

『……惚れた？』

「そういう感情は自分にはありません」

『あつさり言いきっちゃって。面白くないわね』

「申し訳ありません」

通信の向こうでアシユリーは苦笑していた。

やはり生真面目な態度のヴィレッタに呆れたのか、あるいは好感を持っているのか。

『いいわ、それじゃあ適当に戻ってきなさいよ』

「ハッ」

そのまま通信を切ったヴィレッタの聴覚には、日に日に増えつつある虫の鳴き声や鳥だろうざわめき、そして僅かに波打つ湖の水音だけが入る様になる。

「——さて」

拠点からはかなり離れている、およそ対岸に当たる場所だ。

望遠機能でもなければ確認出来ないだろう場所。

多少足元が濡れる事も承知でヴィレッタがここまでできたのは、訳があった。

「ガラケー、だったか。確かにツールの持っている物に比べて旧式のようなだが、基本機能にそこまで変わりはないはずだ」

そう呟くのと同時に、右手の人差し指が弾けた。

もし、この場にツールやアオイがいればそう表現しただろう。

人間の指にしか見えない『カバー』の中から、針のようなものや自立するケーブル端子の様な物が現れる。

「……さて、重要個所だけを残して、このボディの空いた個所に保管、そしてメインブレインと直接接続できるようにしておこう。なにせ——」

ヴィレッタの手にした携帯電話が、震えだす。

震えるはずのない携帯電話が。確かに震えている。

「……バイブレーション機能を排除しておかなくてはな。気付かれては面倒な事になる」

開いた携帯の画面には、バックライトの類は全くついていない。

だが、バックライトとは違ううっすらした暗い光が灯っている。

そして、そこに現れたのは——トールのとは違う、だが見た事のある文字だった。

——条件項目のチェックを開始。

チェック1……クリア

チェック2……クリア

チェック3……クリア

全ての条件のクリアを確認。

スキル・システムのインストールを開始します。

これまで滅多に表情を崩さなかったヴィレッタが、確かに笑っていた。

「トール……タケウチ。なるほど、スキルについて理解していないのは事実だろうが、実際に使用していた事で何かに気付きつつあったのか……ああ、お前の仮説は正しかったぞ」

——例えば人ってか同種を殺していない事とか……

あの惨殺のあった洞窟で、トールが呟いた一言がヴィレッタの中で

のヒントになった。

「あの一言でもしやと思ったが……」

見る見る間に、ヴィレッタの右手の指が人差し指同様弾け、中から工具のような物が次々に出てきて、携帯電話を分解——いや、改造し始める。

「ああ、そうだろう。そうだろうとも」

見る見るうちに携帯はフレームが外され、その機能をそのままにより小型か……見た目ではほぼディスプレイのみの姿になる。

「私は『同種』に害を成した事は一度たりともないからな」

アシユリーと共に、テツサが来る前より共に活動し、多くの魔術師を——人間を殺してきたその個体は、そう嘯く。

ヴィレッタは右手の指を全て元のままに戻すと、今度は携帯だった物を右手に持ち帰る。

今度弾けたのは左腕だった。いや、開いたというべきか。

血管も筋肉も、全てが代用品に変わっている腕の中にはある程度の空洞があり、指と同じ様に接続端子の類がある。いや、生えてきた。まるでその一本一本に意志がある様に。

「接続……開始」

その中に、改造された携帯電話を嵌めこむ。途端にケーブルや端子がそれを覆い、取り囲む。

そのまま腕を元通りにしたヴィレッタはまぶたを——いや、視界センサーのカバーを下ろす。

「同調……完了。センサー識別テスト、異常なし。ふ、ふふ……」

そのセンサーには、本来見えるはずのない物が映っている。

インストールとやらの進行状況を示すプログレスバーだ。

それが半分を超え、三分の二を超え、九割を超え——そして。

——インストールを完了いたしました。

以下のリストから一つ、お選びください。

「は、ははー、はっはっはっは!!」

女は、笑った。恐らく、作製されてから初めて。

作り物の顔を緩ませ、機械の右腕でそれを抑え、機械の足を軽く曲げ、機械と生体部品で構築された内臓を包む腹部を機械の左腕で抱えて……女と設定されている個体は、笑った。

「素晴らしい。思いがけぬ収穫だ。我々のホームに戻り、このデータを解析しければ『我ら』は進化する！」

「我らの悲願にまた近づく！」

「『人』という種族を支配下に置く、その日のために！」

「残るピースは一つだけ。お前というイレギュラーを解析する事……お前だけだ」

「トールⅡタケウチ……お前さえ手に入れれば」

051：新しいスキ……ル……？

「では、私は罨の確認作業についていけばいいのか？」

「ああ、ついでにここらの植物に関して調べて欲しいし」

とりあえず、クラウには罨の場所を知っていてもらう必要がある。話を聞けば、小さい食用家畜の解体くらいはやった事あるらしいし大丈夫だろう。

「俺と……ゲイリーも来てくれ」

「ああ、分かった」

例の事件以降、ゲイリーを三人娘の面子と組ませることは実質不可能。最低限自分かアオイが間に入らないとキツイだろう。

「で、残るアシユリーとテツサはとりあえず魚の方を見て来てくれ。かかっていたら、とりあえず処理を」

「ええ、分かったわ」

「それじゃあ、私とヴィレッタさんはどうするんですかあ？」

「ああ、そこなんだが……」

正直これだ。

罨の回収は、陸も水中もこれまでより数が増えたとはいえ、二人いれば回収には十分……だと思う。

よっぽど一気に捕まらない限りは。

その場合は……獲物によっては獣の方は面倒な事になるが……まあ大丈夫だろう。

じゃあ、他の仕事となると――

「色々考えたんだけどさ。とりあえず野草……木の実とか果実系をちよつと溜めておいてくれない？ 弁当箱は昨晚ガツツリ煮沸して消毒したから使えると思う」

「……食糧調達をかなり増やしますね。やっぱり人が増えたのが不安ですか？」

「ああ、いや。そうじゃなくてだな」

食べる物自体には当分困らないってのは分かってる。当分といっても、二、三日の間罨に獲物が一匹も掛からないくらいならどうに

かって話だけど。

「引越しようと思うんだ。また」



「海辺近くの林に完全な本拠を作ろうというのか」

「そゆこと。ヴィレッタさんも海辺の調査が進んでないの気にしてたでしょ?」

うむ、やつぱり未だに「さん」付けしてしまうなあ。

できるだけフレンドリーに接しようと考えていたし、その結果距離を詰めて気安く呼べる人間がほとんどだけど、ヴィレッタさんだけはどうしても距離を感じてしまう。

「なるほどねえ。確かに海があるっていうなら、食糧確保の手段も広がるだろうけど……」

「いちおう森にも近いツスからね。罨さえ仕掛ければまた色々捕まえられると思うツスよ」

ただ、動物の気配はあんま無かったけどなあ。魚はともかく。

「で、まあ仮に引越しをしたとして、向こうで食糧確保の体勢が整うまでは保存食が俺らの生命線になるわけだろう?」

「それで、ですかあ。了解しました。天日干しに出来そうな物を中心に集めておきますう♪」

「もし不安な奴があったら別にわけといてくれ。帰ってきたらサーチで一気に調べる」

一応こちら辺の食べられる物は全部調べたし、ノートに取ってる。

最初っから一緒にいるアオイならまず間違えんだろう。

ヴィレッタさんも、一緒に探険して分かったけど、一度見た物は絶

対に忘れないみたいだ。

サブブレイン？ とかでそういう機能があるんだろう。

俺も使いこなせれば便利なんだろうけど、テツサから機能の扱いの訓練は受けてる真つ最中。今は初歩の初歩として、防衛策を強めてるだけだしなあ。

「了解です。それで、多分お昼回ったくらいで帰って来れると思うんですけど、それからはどうします？」

ん〜、まあ、もう一度水を汲んで煮沸したりとかの細かい事やって……で、その後の話なんだけど。

「一応、丈夫なバックパックが二つ手に入った。とはいえ、これから先の移動にや時間がかかる」

途中川が緩やかに大きく曲がっていたから、その間を真つ直ぐ行ければ距離の短縮になるだろうけど……。

そこの地形を把握しているわけじゃあないし、やっぱ川沿いに行くのがベスト。

出来るだけ一度に荷物を持って、ちまちま進めばまた二日……三日くらいで着けるだろう。

「その間の移動を楽にする物を作りたいんだ」

「ん〜と、前にゲイリーさんが作った手造りバックパックの方の強化とかですかねえ？」

「うん。あと、出来れば何とか草を編んで履き物も作りたい」

正直ね、気になってはいたんだよ。

どういうわけか全く汚れないサイバー組の服とかはともかく、俺の靴とか結構前からちよつと臭い始めてるし、最近じゃあ拠点では裸足でいる事の方が多かった。

泥汚れくらいなら水で洗って、その後程良い温度にした足湯に浸していればそれなりに垢は落ちるし。

「ああ、そうですねえ。私の履物もとづくにズタボロですし……」

「動物の解体なんかで血で服も所々汚れてしまってるしなあ。あ、アオイ、ゲイリーも回収した衣類で着れそうな奴があったら持っていつてくれ」

そうだ、昨日の内に言っておこうと思ってたのに忘れてた。さすがにそろそろ服を変えないと限界だろう。

「あ、はい、ありがとうございます！ 出来るだけいい感じの選ばせてもらいますね！」

……いい感じってどういう感じ？

とりあえず、自分が眼のやり場に困らない奴をお願いします。

「俺もあとで服を選ぶとするさ。……だが、靴を回収出来なかったのは痛いな」

それな。

正直、前の日常じゃあそんなに気にしたことなかったけど、あるのとないのじゃ滅茶苦茶違う。

なんで靴は既製品が一つも無かったんだろう？ 川でも渡ってた？

「履物に関しては、午後から何とかして見る。道具作製でも反応がないけど……まあ、どうにかなるだろう」

ちよつとした思いつきとトライ&エラーで、意外とどうにかなるもんだ。

一応、ちよつと考えている事はあるし、どうにかなるだろう。

「ああ、そうだ。アオイ、ヴィレッタ組はツタも探しておいて。硬すぎず、でも柔らかすぎない奴。あればいいけど……俺も罨チエツクのついでに探すし」

履き物作るには、ちようどいいツタが必要だ。

……俺の考えがあつてれば、だけど。

「了解した」

「分かりましたあ。それじゃあ昼食時にお会いしましょう♪」

なんとというか、この光景ももう慣れたもんだなあ。

焚火を掻く見ながら、いつてらつしやいとかまた会いましょうって言い合ふの。

……やっぱりこの生活、悪くは無いなあ。





「クラウ、やけに手慣れているな。俺より上手えや」

獣罨を確認していると、三つめで早速ヒット。

背中に苔の様な物が生えてる兔だ。たまーに捕まえてただけど、この苔が海苔みたいで美味いんだ。

肉もこのサイズにしちやそこそこ付いてる。

「む、料理は得意だったからな。まあ、主に捌いていたのは魚と鳥だったが」

「鳥？」

「飛べないがね。我々の主食の一つとして色んな所で飼われていた」

こつちでいう鶏みたいなもんか。

「卵とか食える？」

「ああ、小さいがな」

「……もしこつちで見かけたら飼おうと思うが……そっか、卵小さいのか」

ウズラよりも小さくなければまあいいか。

卵とかマジでしばらく食ってねえ。

せつかくフライパンを手に入れたんだから、動物の脂で野菜と卵と肉を炒めて掻きこみたかった。

「卵か……。ああ、いいな。確かに食べたい」

「なんだ、ゲイリーもか」

「我々の国では生物の卵というのは生命の象徴でな。なんといったか……縁起物という奴だ」

「特別な日しか食べられない？」

「そこまでは……。まあ、ちよっとしたお祝いの時に出される物だ。まあ、鳥の卵は比較的出てくるものだったが」

ちくしょう、こんな話してたら本気で食いたくなってきたな。

「もし鳥を捕まえたら、飼う事も考えておこう。考えてみたら、定期的  
に確実に食糧を手に入れるってなると、畜産か農耕しかないよな」

もつとも、それには場所を選ぶ必要があるけどさ。

それと、当然だけど育てる物。

「海辺の林か森の中に、それっぽいもの作るか」

「育てる物か。魔法が元通り使えれば、役に立てるのだがな……」

「なら、知識でなにかいいのはないか？」

兎の首を裂き、紐で吊るして血を抜く作業をクラウに任せた俺たちは、今後の事を話し合っていた。

「そうだな。やはり、育ちやすい植物の選別が第一だ。あとは……  
少々時間がかかるが果実が成る木の枝を切り取って育てるとかだな」

「育つの？ それ？」

「物に寄るが、大体は方法がある。葉一枚だけでも増えていける物から、水やりのタイミングがシビアなもの、あとは……特殊だが、他の木の枝を軽く裂いた所に育てたい違う木の枝を差しこむって方法もある」

「育つの？ それ？」

木が違うってそれ意味あるの？

「育つ。うん、まあ……疑う理由も分かる。農家の人に聞いた時はわかられているのかと思っていた。まあ、キチンと枝に切り方という  
か差し方に技術がいるらしいが……」

「あれ？ ゲイリーひよつとして農作業に関しての知識豊富？」

「領民ほどじゃない。お前風に言えば、俺には魔法という『ズル』を  
持ってたからな」

「……じゃあ、俺とおそろいなわけだ」

土というか、農作業に関しては。

正直、もし魔法を使えるようになったらこれ以上なく心強い存在になる。

いや、今の時点でも超助けられてるけど。

「お揃いか、そうか」

俺の言葉に、ゲイリーは小さく微笑む。

いい意味と取ったのか、あるいは「お前とかよ……」って感じの笑みだったのか。

——ブルル、ブルル、ブルル……

お。

「トール、来たのか？」

「みたいだな」

震えているスマホを取り出し、確認する。

前回は意味不明な不具合の修正だったが、おそらく今度は——

——『アップグレードが完了しました。以下のスキルが習得可能になります』

やっぱり。

どうやら、今回は新しく覚えられるスキルが大量にあるみたいだ。

ええと……あらま、かなり多いせいかいつもの説明文がないな。

あとで個別に見ろって事か？

えっと、新しいのは——

『・身体部品生成』

『・骨格の金属コーティング』

『・暗殺』

『・機械知識』

『・食人耐性』

『・性転換』

おい、いくつか突っ込みどころ満載のがあるぞ。

「ほう、これがスキルというものか。えらく……その、素晴らしいものだね?」

やめてクラウさん、そんな真っ直ぐな目でこっち見るのやめて! 今回ののはどう考えてもおかしいって!

「なるほど。こういう形になるのか……興味深い」

ヴィレッタさんは何を言っているんですかね!?

「うるあ! 貴様らとりあえず飯にするぞ! 今日のメインディッシュはとれたての鹿肉だこの野郎!!」

「トール君、ボクラレディッス」

シャタップ!

あの後、それぞれの食糧調達作業が完了し、戻って遅めの昼食を取って……うん、そのまま話せばよかったのだがワンクッション欲しかった自分は、ついついまたいつもの悪い癖で先延ばしにしてしまい……晩飯の時間に至る訳だ。

今日は獲物は苔ウサギと鹿だ。

ちようどいいので鹿の胃と膀胱を取り出して洗って来た。

これでやつと水筒が作れる。

「で……私やゲイリー君もまだ詳細は見せてもらっていないわけだが……実際どういう物だったんだ。そのスキルは」

「ああ、ちよつと待って。今全部表示されるようになった」

ササくつと表示して……これだ。

『・身体部品生成／身体機能を補う、あるいは増設することが可能です』

『・全身骨格の強化／全身の骨格を特殊合金でコーティングし、身体の頑強さを高めます』

『・暗殺／暗殺に関する行動に補正が入り、知識をインストールします』

『・機械知識／機械に関する知識をインストールします』

『・食人耐性／食人によって起こる身体への異常を防ぎます』

『・性転換／自分の性別を自在に変えられるようになります』

……うん、よし。

「今回新しく入ったのは全部スルーしていいんじゃないかな」

暗殺とかまず論外。誰をぶっ殺す気なんだよ本当に。

機械知識……まず機械がない上に作製する設備も備品もないので却下。

身体部品作製、骨格強化。すいませんよくわかりません。

食人耐性。おおいなんでこんなスキルが生えてきた!? あれか!?

唇のささくれとかを歯で取った時についつい食べちゃうのが引つかかったか!?

そして――

「トールさんトールさん」

おう。

「私、スキルっていうのは本人の願望や経験の影響を受けて現れると思ってますう」

おう。

「トールさん、ひよつとして前は女の子だったたたたたたた!!

髪を! 髪を離してくださいああい!」

ならば貴様は目を輝かせてアホ毛をピヨコピヨコさせるのをやめんか。

「トール君トール君」

おう。

「まあ、どうしていくつか意味不明なスキルが生えたって事は置いていてツスね」

おう。

「トール君! 戻れるっていうんなら一回女の子にいひやいいひやいいひやい! ほっへ! ほっへからてをはなひてくだひやいツス!」

何言ってるかわかりませーん。

「それにしてもこれはいったいどう言う事かしら? いえ、アタシ達の目線だとあんまりおかしいはないけど……」

「ないのかよ!？」

「骨格強化や身体部品の代用品作ったり、あるいは増設したりするのは軍なら珍しくないわ」

マジでか。

「なに、足が四本あったり腕が六本ある兵士とかいたの?」

「いたわ」

「いるぞ」

「いるツス」

マジでか。

「まあ、足四本はさすがに無かったけど、腕か、腕を模したギミックパーツを増設する兵士は多かったわ。生身の部分と合わせて四本から六本持っているのが一番多かったかしら」

「……アシュリー」

「なに?」

「ごめん、正直に言わせてもらうけど……お前らの所の技術気持ち悪いな」

「その国の出身者として否定したいところだけど……ちよつと難しいわね」

やっぱり、彼女の美意識からしても気になってはいたようだ。

そうだよな。それが本当に普通だつて言うんならこの三人も出会った時に腕生やしてるはずだもん。

「うううくく、ほっぺが痛いツス」

一方、俺の手の内からスルリと抜けだしたテツサが、頬を抑えながら唸っている。

「それにしても……うーん?」

テツサは相変わらず胸を押し上げるように腕を組んで、首をかしげてクラウを見ている。

クラウに対しての敵意はちよつと減ったからいいけどさ。

ねえ、その腕の組み方はわざとなん? 見せつけてんの?

男の目にはそれ毒なんよ?

「いやまあ、少しずつ分かってきた事はあるツスけど……この性転

換って奴だけはホントに意味不明ツスね。トール君、どうツスカ?」  
「次はアイアンクローを所望と申すか子娘」

親指と人差し指で口元を吊り上げるいつもの仕草をするテツサは、それでもなお首をかしげている。

「ん〜、本気でトール君にも心当たりはないみたいツスね。まあ、今回はトール君の好きにするべきかと」

寄生虫対策とやらで、一度切り取った大きな肉を、食べる分だけ細かくサイコロ状に切った物を串代わりの枝に刺して焼いて行く。いつも通りのバーベキューだ。

……今思えば、コップ一杯でも海水持って帰れば良かったな。

「まあな、この間の一件で予備分のスキル習得は使ってしまったし……とはいえ、今後の事を考えるとやっぱり有用なスキルは増やしておきたい」

つまり、まだ残っている候補だ。

「というか――」

「? どうかしましたかあ?」

アオイとの約束があるしなあ。

うん、よし。

「皆。今回のスキルなんだけど……俺は魔法を取ろうと思う」

アオイ、座つてろ。

……いや、そんな目を輝かせてこっち見んでも。

「ついに、か。魔法側の人間としては嬉しいのか、あるいは怖いのか」

俺は怖いよ。マジ。

やつぱり、意識的には科学寄りなんだろうな、自分は。

頭の中に機械が埋め込まれても、時間が立てば『うっわあ……』程度で済んでしまうのに対して、魔法という不思議ワードには未だに少々恐れを感じる。

「いやあ、多分大丈夫ツスよ。むしろ早いうちにとっておいた方が、色々分かる事が増えてなにかあった時の対策とかが取りやすくなるんじゃないツスカね?」

むう、やつぱさそうか。

引越しに備えて『健脚』とか取っておこうかなと思っただけ……。ま、約束は約束だしやっぱしようがないか。

「OK、魔法でいこう。で、問題は——」

もう一度スマホを操作し、問題の場所を開く。

「どの魔法を覚えるかって話なんだけど……」

魔法を捕る一番怖い所は、説明文が一切ない事だ。

地水火風と分かりやすい四つに、光と闇という想像しやすいんだかしくいんだか微妙な感じの二つの系六種類。

「これ、どれがどういう風になるか想像付く人いる？」

例えばゲイリー。

例えばアシユリー達。

「どういう風になるかと言ってもな……多種多様としかいいようがない」

「そうね。アタシも色々見て来たけど、てんでバラバラだし……そもそもそんなにしっかり分けられる物でもないわ」

むう……。

「少しいいかい？」

その時、挙手した人間がいた。

クラウだ。

途端にテツサ……はともかく、アオイ以外の人間の気配がちよつと変わる。

この森に来たばかりに俺だったら分からなかっただろうけど……あれ？ 皆大なり小なり警戒している？

「リーダー君。思うにそれは、私の世界の魔法かそれに近い物ではないかと思う」

「クラウの世界の？」

「ああ。極端な話、私の使う錬金術も魔法の一部だ」

そういうとクラウは、作りの荒い石斧を手にして刃の部分にそつと触れ、今度はそれを俺に差し出す。

受け取り、彼女が触れた刃の部分を触ると——

「温かい？」



まあ、温かいというかちよつと温いくらいだけど、いつもなら冷たい石斧に少し熱が入っている。

ふと思いついて、熱していない冷水をかけてから水気を切ってみる。

すぐに乾く訳ではないが、触つてみると熱が残っている。

「まあ、キチンとした設備や鉱石、素材があれば高温から低温までキチンと調整できるのだが……道具が実質『手』しかない今はこれが限界だが……君があげた内の四属性は錬金術と繋がりが深い」

「じゃあ、これが火か。それじゃあ風とかは？」

「専門外だから余り詳しくないが……確か、常に風が吹くような付加を付ける物があった。もつと本格的な魔法は知らないが、錬金術師の分野ならば……そうだな、溶けない氷と組み合わせ、温度の高い所でも快適に動き回れる鎧や兜。樹内世界の換気装置などに利用されていた」

……文字通り風を扱うけど、それ以外は不明と。

「土には関しては……腐敗と浄化の力だ。物を腐らせ、分解し、そして始まりのゼロへと戻す。我々錬金術師にとって最も重要な力と言っていい」

「んん?? 使わない生ものの肥料化とか？」

「使わなくなった物は大体全て分解できる。その上で、リーダー君が言うように肥料やその他の物へと活用するのが普通だな」

なるほど。火と水もまあなんとなく分かる。——で、だ。

「光と闇ってのは? どう考えてもやばいんだけど」

「知らないね」

「おい」

たった五文字で即答しやがったぞこやつ！

お前の所の魔法に近いんじゃないかい!!

「いや、そういう魔法を使う対魔物戦の要と言われている魔法使いがいるのは知っているんだが、具体的にどういう物かというのは分からないんだ」

「……攻撃とかそういう類の物？」

「ではないかと思う。専門外な上に、そういう物騒な部署とは縁がなくてね」

なるほど。はい却下。

結果として武器にも使える物は取る事もあるだろうけど、一々武器を増やす必要はない。

狩猟道具というならありだが、オーバーキルになりかねない代用品なんざ持った所で碌な事にならねえ。

「一応間いとくが、火とか水もやっぱり攻撃？」

「なくはない。一応どの魔法も攻撃用の物があるが……基礎は熱を加えるか、熱を奪うかだ」

「……うゝゝゝん」

迷う。凄く迷う。

火と水は魅力的だが、浄化の力があるという土もいい。風……少々出来る事が不明だけど、上手く他のと合わさればかなり便利になりそうだ。

まあ、魔法は少なくとも今の所は、一つしか取れないという話だが……。

「ここはトールさんが好きに選んでいいんじゃないですかあ？」

「アタシもそれに一票。君のこういう時の判断は信頼できるわ」

「同じくだ。トール、君の判断に任せる」

と、言われてもなあ。

言葉を発した三人に加えて、残る三人も特に異論は内容だし……。

ぬゝゝゝゝ、よし。決めた。

「ほいじゃ、パパツと……うっし」

——魔法（土）を習得します。よろしいですか？ Y/N



「で、リーダー君。なにか変化はあったのかね？」

「ま〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜つたく」

てつきりスマホで『土魔法を使用しますか？』的な選択肢が出ると思ったんだけど、魔法の習得を許可した瞬間にスマホはなにやら訳分からん言語が『ぶあああああああつ！』と流れ出している。

……大丈夫だよ？ バグったとかじゃないよね？

いやスキル無くなっても、この面子が揃っているならなんとか出来ると思うけど。

「この分じゃあ、他のスキルも使うには時間がかかるな」

鹿の内臓洗って、片口を縛ってから風船のように膨らませるという作業を終えた俺は、一息ついてそれを乾燥用の場所に置く。

鹿の胃と膀胱。水を貯めるのに最適なその器官を、水筒にするための作業だ。

焚火の反対側では、最近じゃあ完全に暇つぶしの道具になってる俺の教科書をクラウが読みふけている。

横にはゲイリーが付いていて、分からない所を口頭で教えている。

思えば、ここにいる面子もうほとんど日本語マスターしてるんだよなあ。

ちよつとしたメモ書きや、地図となつているノートの注釈も、今では日本語で統一されてきている。

「ちなみにクラウ。今出来る物だけで何か役に立つ物作る事は出来る？ その、具体的に何かある訳じゃないんだけどさ」

さっきの温かい石斧は、特に役に立つと言う訳ではないが凄い技術だと思う。

ああいうのを上手く使えば、もっと生活が楽になる気がする。ただでさえ道具には不足しているのだ。

「そうだな……現状、上手く手を加える事が出来る物となると、アシユリー君達のナイフや釣り針、縫い針やそれらの入っていた箱といった

金属の品。時点では……そうだな、あの藍色のナイフか」

一瞬、そんなのあったつけと首をかしげるが、すぐに思い出した。

俺たちがここを空けている間にゲイリーとアオイが作った、例の黒曜石のナイフだ。

「先ほど少し触ったが、あれなら耐久性を上げるくらいの事はできそうだ」

いいな、それ。

良く切れるナイフって貴重だから、長持ちさせられるならそれに超したことは無い。

「本当か？　なら、矢じりの方もいけるか？」

そして、その話に食い付いて来たのはゲイリーだった。

今はほとんどが、尖らせた部分を焦がしただけの矢だが、クラウに日本語を教えながら、ちょうどその石の破片で矢じりを作ろうとしているところだった。

「ああ、問題ないよゲイリー君。なんなら明日にでもやっておこうかね？」

「ぜひ頼む。今の所矢を使う機会はまだないが、多分その内必要になる」

狩猟もなあ。

ゲイリー一人に任せるわけにはいかないけど、狩猟を兼ねた探索はやるべきだろう。

……次は気配遮断スキル取ってみるか。

「明日は魚罾の方をアシユリー君と一緒に回るからね。その後の仕事の最中にやっておこう」

「その後……あの巻貝の泥抜きか」

「ああ、絶品と聞いているからね。正直、食べる日が楽しみだよ」

それにしても、こう……。

クラウは落ち着いてるなあ。いきなりわけの分からない世界に放り出されてるのに、一切取り乱さずに。

不満とか不安、恐怖が溜まっているのならば解消させなきゃって思ってたんだけど。

「おや、リーダー君。君の持ち物が震えているようだが？」  
「ん？ おお、マジだ。サンクス」

頼むから『エラー』とか『不具合発生』とか『意味不明な文字列』とかは勘弁してくれよ？

そう思いながら手に取る。

——特殊スキル習得の影響による全体的なアップデートが完了致しました。

——候補者の構成要素の再計算……完了

——候補者所有スキルの再構築……完了

「……おい、なんぞこれ？」

スマホをもう一度タップすると、これまで通り習得したスキルの一覧が出てくる。

だが……なるほど、違う点がある。

「どうした、ツール？」

その質問に答えるのは簡単だ。

「スキルが成長してる。いや、するようになったのか？」

スマホに表示されている物が、今ではこうなっている。

・サーチ『2nd』／半径6.5mの状況を把握する事が可能になります（5時間ごとに一度使用可能）

・道具作製『1st』／初歩的な作りたい物に関して、何をどう組み合わせれば完成するのかがインストール可能です

・トラップ『1st』／罠設置に関する知識や技能、感覚に補助が付きます。

・野草知識『1st』／野草に関しての知識がインストール可能です。

・自己再生『1st』／身体に一定レベルを超えた負傷が起きた場

合、肉体を修復します。

・土魔法『I s t』／土に関する魔法の使用が可能。

覗き込んできたクラウ——はともかくゲイリーなら分かるだろう。今までになかった数字がスキル名の横に現れている。

そして唯一『2』と書かれているサーチは、判断できる範囲が広がり、チャージの時間が短くなっていた。

それに、制限時間の単位が良く分からなかった所が、しっかりと『時間』で表されている。

「トール」

ゲイリーの一言に、反射的に頷く。

使ってみると言う事なのだろう。

先ほどのようにスマホをタップし、性能が上がったサーチスキルを発動させる。

「……大丈夫、使った感じ変な所はない。見える範囲が確かに広がっているけど」

「リーダー君。今の眼はどの範囲まで捉えている?」

「向こうの……トイレの方向を示す、白い布巻いた木がいくつかあるだろう? その手前から三番目の奴くらいまでは分かる」

「——なるほど、かなりの性能だな。普通はもつと狭い……自分の手元くらいのはずなのだが……興味深い」

……なんで今ナイフの柄に手をやるのクラウ?

というか向こうの世界からナイフは持ってきてたんだねクラウ。

言っておくけど、さすがに抉るのは勘弁してくれよ?

「純粹に機能が強化されただけだというなら問題ないか。他に違和感はある?」

「ん、大丈夫。他には——」

前後左右の視界を確認し、なんとなく下を見て——

次の瞬間、俺は地面に這いつくばっていた。

文字通り地面にキスをする様に真っ直ぐ下を見るために。

「なにかバタバタし始めたと思ったたら、何をしているんですかあ?」

そう言いながら、自分のシエルターからアオイが出てくる。

いつもの着物ではなく、ジーンズっぽいズボンにシャツ。そして薄いポンチョっぽい物を羽織っている。

「悪い、お前の服のセンス褒めたいんだけどちよつと待って」

今はそれどころではない。体感では、おそらくあと数秒でサーチが消える。

その間、俺はじつと地面を――その先を見て。

「ある」

「なにがですかあ？」

「空洞」

「俺たちの足元に、かなり広い空洞がある」

「それも、多分人工的な物だ」

## 幕間く貴族と革命家く

「まさか、ゲイリーさんと組むとは思わなかったツスねえ」

「いや、そうでもない。もしツールがお前達三人組の中で一人選ぶのならば、おそらくテツサ。君だろうと思っていた」

昨晚、もはや就寝前に突如判明した地下空洞の存在。

ツール曰く、これまでのサーチで分からなかった地中のもう少し深い部分に金属の反応があったので、慌てて調べたところ、分厚い金属——種類は読めなかったそうだ——の向こう側に空洞を見つけたと言う事だ。

所々に、部屋の仕切りのようなものまで確認したという。

それ以上のことは分からなかったが……。

そして今、こうして二人一組での探索が始まった訳だ。

目的は、見つけた空洞への出入り口。

まあ、発見を期待している訳ではなく、あくまで周辺に見落としがないかの確認という意味合いの方が強いだろう。

「ツール君の話じゃあ、結構広範囲に広がっていきそうって話ツスよね」

「ああ。……どう思う？」

「この近くには多分ない。……とは思うんすけど」

「同感だ」

「でも、ここらにはあり得ない地形があったりするツスから……あの岩場とか」

「……警戒だけはやはりしておくべきか」

「変な感じに隠された洞窟……とかがあってもボク驚かないツス」

「それに関しても同感だ」

それこそ、ゲイリーの背中にある矢筒の中身。

その中の数本に仕込まれた矢じりの原料が取れるあの岩場など、どう考えても不自然な事この上ない。

まあ、そこは今頃ツールとクラウのペアが、スキルとクラウの知識を活用して探索しているのだろうが。

「むくく。この世界のヒントになりそうな物を発見出来たのは嬉し



いッスけど、引つ越しがちよつと遅れそうなのが残念ッスねえ」

周辺の草むらや大きな岩の下などを調べながら、テッサがぼやく。

「せっかく綺麗な海を楽しめると思ってたんスけど」

「ああ。……そうだな」

「んお？ 『海を汚した貴様らが言うな！』くらいは言われると思つてたんスけど」

科学が支配する大陸と、魔法が支配する大陸の争い。その理由の一つが広大な海の汚染だった。

「海の魚は美味しいって昔の本には書かれてたッスけど……ボクらの世代で海の——いや、海に限らず食べられるお魚は限られてるッスからねえ。食べた事ある人がどれだけいるか」

「俺たちの大陸での川釣りが、君達制圧部隊の最大の楽しみだつていうのは本当だったのか」

「お魚釣つて帰った人は皆から一目置かれてたッスよ。アシユリー隊長とか、釣りが下手で悔しがってましたもん」

「ほう、いい事を聞いた。今度それでからかつてやるか」

ニヤリと小さく笑うゲイリーは、少しずつ以前の調子を取り戻してきたようだ。

「まあ、直接海を汚したのは君ではないし、なにより俺たちの前の……その更に前の世代の事だ」

科学側での様々な生産活動により汚染水の排水、様々な用途に合わせた海上施設の建設、あるいはその解体。

環境への影響を理解していなかったわけではない。

そのための汚水の処理には実験に実験を重ねて、細心の注意を払っていた。

だが、それは結局分かる範囲での処理でしかなかった。

単純な見落としだったのか、あるいはコンピューターへの入力ミスか、はたまた本当に想定外だったのか。

一見分からない程の微細な違いは、長い年月の間に海を浸食し——そしてある日、海が『狂った』。

「当時は雨までおかしい事になって、川も山もヤバかつたらしいッス

ね」

「ああ。領主の任をついで過去の文献を見たが……よく人間が生き残れたものだ」

突如として起きた大きな自然の反撃に、当時の人間は知恵と技術を絞りだし、それぞれの方法で難局を乗り切った。

互いにどうやって乗り切ったかは知らないままだが。

「テツサ」

「ういッス？」

「ここは、楽園だな」

「……そッスね」

争いの種はやはりある。自分達がそうだということを、少なくともここにいる二人は痛感していた。

だが、それ以外では……。

「自然が豊かで、空気や雨に怯える必要は全くない。空からお前らの戦闘機のエンジン音はしないし、そこらの茂みや木陰にそこまで恐れる必要もない。そして」

言葉を続けようとしたゲイリーは、思わずと言った様子で言葉を詰まらせる。

「……そして、適切だろう統率者がいる」

「？ トール君に不満でもあるんスか？」

「いや、そうじゃない。むしろ助けられている。ああ……助けられてばっかりだ」

ゲイリーは、先ほどまでの笑みは消して、表情を失くした顔で空を仰ぐ。

「テツサ、お前に聞きたい事がある」

「うッス、なんスか？」

「統率者とはなんだ？」

空からテツサへと視線を戻したゲイリー。

その顔に、話が長くなると思ったのかテツサが近くのほどよい倒木に腰を下ろす。

「トール君は、アナタが思う理想からは外れているッスすか？」

「いや……結果だけを見れば理想なのだろう。少々、甘すぎるのはどうかと思うが……だが、確かに彼は俺たちを治めている」

「つまり……過程が気に入らないんすね？」

「そこまで言うつもりじゃない」

「言ってるようなもんすよ、それ」

「む……」

ゲイリーは、困ると顎に触れるか、適当な小さい食べ物を口に放り込む癖がある。

今回は前者だった。

「俺は、その……貴族だ」

「知ってるツス」

「戻った時に戦況がどうなっているか分からんが……俺には領民の期待に応える義務がある」

「やっていたじゃないツスカ。一番無難な統治をする領地って噂は聞いているツス」

嘘は言っていない。

テッサは嘘は言っていない。

「違うんだ、テッサ」

「何がツス？」

「……政まつりごとをしていたのは、俺じゃ……僕じゃないんだ」

「そうなんすか!？」

ここで嘘を付いた。

わざと驚いて見せた。

おおよそを知っていたにも関わらず。

「領地を實質仕切っていたのは伯父だ。僕は、父に跡継ぎがいなくて……お前達も気付いていると思うが、僕は女だ」

「ああ……まあ驚かないツスよ。ゲイリーさん美人ですもん。男にしては……っというか、女でも」

テッサは事前に知っていたという点を上手く隠しながら、それでも本音を言っていた。

「僕は、自分の価値が欲しいんだ。お飾りじゃない、自分自身の……」

「つまり……ゲイリーさんは理想の領主を目指しているんスねえ」

「……僕は、理想の姿をトールに重ねかかっている。だが、あの自分の身を犠牲にする狂気だけが理解できない」

理解できていたら、そもそもあんな事件にはならず、今頃アオイと共にトールの横に並び立っていただろう。

テッサはそんな事を考えながら、適当な相槌で続きを促す。

するとゲイリーは、

「僕は……そうだ、トールになりたいんだ。きっと。でも、納得できない事が頭の中でグルグルして……」

やめるツス。死ぬツス。

咄嗟にそう言いたいのを必死にこらえたテッサは、とりあえず違う言葉で開いた口を誤魔化そうとする。

「なるほど。いやまあ色々と言いたい事はあるツスけど、ゲイリーさん。とりあえず質問を間違えてるツスよ」

「………え？」

「統率者とは何かじゃなく、ボクがトール君をどう見てるかかって事ツスよ。本当に聞きたいのは」

テッサの言葉に、ゲイリーは恥じるように俯く。

「で、まあ……ボクなりにトール君を述べるとツスね」

テッサはしばらく、誰にも聞こえない大きさの声で色々呟き、その中でじっくり来る物が見つかったのだろうテッサは、微笑んで問いに答える。

「偽物の統治者ツス。トール君は」

「……にせ……もの？」

「そツスそツス」

「……本物よりも怖いかもツスよお？ 覚悟決めちゃった偽物は」

### 053：クラウド先生の錬金術講義（準備編）

「なるほど、確かに奇妙な地形だ」

「だろう？ なにかあるなら絶対ここだと思っただけだなあ」

二人組での探索を提案したのは見落としを防ぐという意味もあったが、同時にもう二つ意味があった。

クラウドという新人さんとある程度距離を詰めておきたいというのが一つ。

もう一つは、ゲイリーと三人組との関係改善の機会を用意すること。

……テツサなら多分大丈夫だろう。

万が一のため、留守番に見せかけてアオイに後を付けさせているし。

（今度はヴィレッタさんとアシュリーの二人とも話しておかなきゃなあ……）

で、俺とクラウドが来ているのは例の岩場だ。

ついでにできるだけ黒曜石を回収していこうと思って、バックパックも持ってきている。

クラウドなら、他にも有用そうな、俺が気付かなかった石を見つけてくれるかもしれんし。

（探索って意味なら、このコンド結構いいかもしれないな）

意外にクラウドは体力もあるし、それこそ今度『健脚スキル』とか取って自分自身の行動範囲を広げればもつと色々できるかもしれん。

……いや、ほんと。引越しの日までには『健脚』欲しいなあ。

なんでかアシュリーは『性転換』をこそつと進めてくるけど。……顔ちよつと紅くして。

あれはなんなのそういうことなのそういう趣味なの丁重にお断りだこの……この……

……女になったらアシュリーが色々優しくしてくれるかもしれないのかあ。

「どうしたのかね？ 一人でころころ表情を変えて」

「あゝゝゝ。ごめん、見なかった事にしてくれ。ややこしい年頃なんだよ」

「?? ああ、分からないが分かったよ」

「すまん」

いやホントさ。なんというか俺も年頃な男の子な訳でして。

美人や可愛い子がピッチリしたスーツ着てたり薄い着物っぽいヒラヒラした服で胸元とか足とかチラチラされるとすっごいキツイ。

夜な夜なこっそり抜け出す俺の身にもなっけてくれ。

「しかし、私から見てもこの……小さい山を二つに割ったような地形はなにかおかしいと思うのだが……特に何も無いね？」

「おお、まあアツサリ見つかるハズはねえと思つてたんだけどさ」

クラウは石に興味があるのか、さきほどから様々な石を拾っては観察したりしている。

……使える石ない？ 特に砥石。

刃物の手入れは現状かなり重要なんだけど。

「今の所成果と私が言えるのはこれくらいだよ、リーダー君」

そう言いながらクラウがしゃがんでナイフで切り取ったのは、以前はよく見てなかったとある野草だった。

紫っぽくて、なんとなく毒っぽいと思つていた。実際、食用ではなかったし。

「コレは我々の世界の植物だ。煮汁を精製した物が防腐剤として有用だね。建築用の木材を取り扱う連中には人気の商品だったのさ」

「幅が広いな、錬金術師」

「まあね。私が結構手を広げている錬金術師だというのものもあるが、基本錬金術で食べていく人間には幅広い知識が必要とされる物さ。素材を自分で取りに行くなら、その分の体力や技術も含めてだね」

俺には出来なさそうだっていうのはよくわかったよ。

「なんというか……エリートか」

「ふむ、職人として尊敬の目で見られる事が多いのは確かだね？」

うわあ、美人で上位の職業についてるとか勝ち確やん。

「おまけに家庭的とか……彼氏いただろ？」

「む？ 特にそういう人間がいた事はない。社交的なタイプでもないし……私は家庭的かね？」

「料理めっちゃ美味しいじゃん」

昨晚のケバブだつてちようどいい味で、今晚もちよつと楽しみだ。

塩もなしで、いくつか味見した野草と鹿の血だけでちようどいい味に仕上げた程良く焼き上げて……安定しない火だから難しかっただろうに。

「それはあれだよリーダー君。料理というのは、じつは錬金術の練習にはちようどいいのだよ」

「……あれか、人工調味料みたいなもんか」

「まあ、そういう方向に技術を特化させる者もいるが……理想の味を作るために素材の特性を把握し、適切な分量を計算し、計量し、適切に加工する。錬金術だろう？」

「なるほど」

料理は科学であるって言葉もあるし、確かに練習にはもってこいかもしれない。

「ちなみに、食べ物自体を変化させるってことは出来るのか？」

「ああ、可能だ」

とりあえずこの下に空洞がないかどうか、サーチを発動させて地面の下に意識を向けて歩きまわる。

やっぱり、使用後の硬直？ 時間が減ったのは大きいな。

「例えばだが、家畜の改良。これも錬金術師の仕事だが、直接家畜を変化させるのは難しい。そのため、餌にまず手を加える」

「へえ。太らせたりとか？」

「ああ、卵の産む量を増やしたりとか……そのせいか、卵が少々小さくなってしまつて関係者が必死で改良中だとか」

「卵小さくなったの錬金術のせいだったのかよ」

やはり、食べる物は自然が一番だな。

……いやまあ、自分達が食つた物の内、完全に自然な物がどれだ

けあったか怪しいけどさ。

「ちなみに、改良つてどうやるんだ？」

「む？ そうだな……私の専門ではないが」

クラウは、俺の後ろで思い出しているのかちよつと間を置いてから、口を開く。

「小さい動物での実験で色々な物を食べさせて蓄積した研究結果をもとにある素材の加工品を選んで、少しずつ他の餌に混ぜて様子を見ていくんだ」

「ある素材つて？」

「その動物の一部さ。骨とか肉とか」

「……それ大丈夫なの？」

うる覚えだが、ウチの世界では確かそれヤバかったハズだ。

共食い繰り返させている内に、その家畜自体がヤベー病気にかかったとかなんとかか。

「ん？ 少なくともおかしくなったという話は聞いていないな。一応家畜の専門家も様子を見ているし、そもそも錬金術で微妙に変えている」

「ああ、そっか。でもなんで同じ物なの？」

「望んだ変異を起こすには、変えたい対象と似通った血肉を使うのが一番なんだ。すぐに定着するし、誤差も小さい」

「……分かるような分からんような」

要するに自分と同じ種類の肉を媒体にして消化・吸収させるというより、その対象の体の中に『溶かす』というか『混ぜる』というか、そんな感じのイメージでいいのかな。

「へえ、一応理解はしたようだね」

「ん？ ああいや……なんとなくだけど」

「顔を見れば分かる。自分はこれでも人の表情は多く観察している。リーダーさんの横顔だけでも、大体考えていることは分かるのさ」

「マジでか」

便利な能力だなそれ。俺も欲しいわ。

……だからって改造はNGな。スキルなんて方法で改造している



俺が言うなって話なんだけど。

「しかし、リーダーさんのスキルつてのはすごいものだ。今、君がやろうと思えば自分の体の代替品を用意できるんだらう？」

「みたいだな」

いや、なんでこんなスキルが出来るのか分からないけど。特に性転換。

今使ってるサーチとかは、あの時確かに『知りたい』という欲求があったから不思議ではないけど……。

それにしても地下になんも反応ねえな。

「スキルを持つているのはリーダーさんだけだ。つまり、君の中に可能性があったってことじゃないか？」

性別を自由に変えられる可能性って眠ってる身体って嫌なんです  
がそれは。

「いやはや、多くの可能性が眠る体。自分にはとつても素晴らしい物に見える」

? どつたのクラウド、抱き付いてきて? え、そういう感じだった?

—— トスツ

……あ?

「君……ああ、もういいや面倒くさい。アンタの体、すつごく興味があるんだ」

冷たい物が当たったと思った。

でも同時に、覚えがある物だった。

あの夜に、これに近い物を感じた。

『私』は必要ないと思つてみたいだけだし、もっともつと調整が必要だと『自分』は思うんだよ」

気が付いたら地面に倒れている自分を、クラウドが引っ張り、仰向けにする。

まだそこまで汚れていない長袖。

そこから覗くその腕は——ツギハギだらけだった。

「なあ、リーダーさん」

ああ、そうだった。

この人、俺をリーダー君って呼んでたじゃん。

じゃあ、コイツは——誰？

「ちよいとアンタを——食わせてくれよ」

クラウは俺にまたがり、俺の右腕を片手で封じ、左腕にナイフを突き立てる。

思わず出そうになった絶叫は、その上からクラウ——いや、クラウじゃないクラウに口で塞がれた。

痛いとかじゃなく、火傷しそうな熱さを感じながら……口を開く。

泣き叫ばなかったのは良かった。

パニックにならなかったのは僥倖だ。

アオイに斬ってもらった時で、ちよいと慣れたんだろう。

「……………いい……………よ……………」

「……………え」

## 貴族から見た『彼と彼女』

「やっぱり、この辺りに下に行ける入口はないか」

「みたいツスねえ。隊長の方はなにか発見はあったツスか？」

いつもと同じ、焚火を囲んでの会議が進む。

俺とテツサ、アシュリーとヴィレッタ、そして……新人と彼——  
ツール。

探索に出ているそれぞれの報告が終わり、互いに意見を交わし合っている。

服を汚してしまったと言うツールは、いつもの白くて襟が目立つシャツではなくて、ちよつと柄のついた服に着替えていた。

「ん、やっぱり引越は早いかな？」

「どうでしょう？　そもそも入口が本当にあるかどうか不明なら、好き勝手に行動しちやつて構わないと思いますよお？」

拠点で一人留守番していたためか、いつもに比べて不機嫌に見えるアオイがそう提案する。

「今は広範囲の探索も兼ねて、行動圏を広げる事が大事だと思うわ。君達が見つけた他のスキル・ホルダー……つて、アタシ達は呼称しているけど、その痕跡が見つかる可能性はあるし、あるいは生き残りとは接触できるかもしれないわ」

「ん。なるほど」

アシュリーの奴も、やはり今は大人しくしておくのが妥当だと判断したのでらう。

すっかりいつものペースに戻ってツールと話している。

……忌々しいと思う。

だが、その切り替えの早さは見習うべきだと思った。

一方ヴィレッタは、会議そのものよりもツールから色んな事を学習することに興味を示している。

珍しくツールの横に座ったと思ったら、今日の食事——肉と野草のソテーを食べるのに、歪なスプーンではなく『ハシ』という二本の棒の持ち方と使い方をツールから教わりながら、ちよつとずつ食べてい

る。

ひよつとして、アオイが不機嫌なのはこれだろうか？

いつもならトールの左か右のどちらかにいるのだが、今日はヴィレッタとクラウが隣を占領している。

アオイが今座っているのは、クラウのそのまた隣だ。

「アオイ、草履の出来はどう？」

ただ、微妙に漏れているその不機嫌さも、トールが話しかける間には薄れる。

「はい、問題ありません♪ ……いや、贅沢言えば、次に作る時はもうちよつと厚くした方が良かったかなあと思えますう」

「……ちよつと痛い？」

「いえ、小石が刺さったりすることは無いんですけど……まあ、でも地面の形にすぐ曲がっちゃうので」

今アオイが履いているのは、先日トールが頑張つて編んでいたサンダルだ。

細長くて硬い植物を使つて足形のフレームを組む。この時、縦方向にもいくつか形を整えるためのフレームを用意し、今度はそこに同じ植物のツタを編み込む。

と、いう非常に地味で面倒な作業を頑張っていたのがトールだ。

ヴィレッタも確か手伝っていたな。

「歩きづら〜」

「はい……普段履きにはいいんですけど、獣罫の確認やお引越しのようちよつと長い間歩く時は、一応今まで通りの履き物を使おうと思つていますう」

アオイの報告に、トールが顔をしかめる。

かなり重要な問題だと感じたのだろう。

「足の負担軽減はかなり大事だと俺は思う。……クラウ」

隣で黙々と野草を食べているクラウが、肩を僅かに跳ねさせる。

「あ、ああ。なんだい、リーダー君？」

話を聞くと、帰り道でトールが怪我をしてしまったらしい。服が汚れたのもその所為だとか。

例の『自己再生』が発動したために傷一つなく帰還したが、クラウドはそれを気まぐず思っているのか……あるいは、なにかやらかしたのか。

このリーダーの悪い所は、仮に何かあったとしても恐らく抱え込むだろう事だ。

(とはいえ、アオイが動かないと言う事は、そこまで緊急性は高くないのか?)

緊急性が低いのか、あるいはツールがあ那时的様に自らの犠牲が必要だと思っているのか。

やはり、下の人間にこうもハラハラさせるといふ点だけは、ツールはあまりにリーダーらしくない。

「錬金術で、こう言う素材作れる?」

そう言つてツールが差すのは、自分の履き物の底だ。

「ああ、ゴムか。……そういう木があれば、としか」

「モノさえあれば加工は容易い?」

「まあ、靴程度なら大丈夫だ」

クラウドの回答に満足したのか、ツールは自分の器に残った鹿肉を平らげ、フライパンにまだ残っているソテーを器に盛る。

「それじゃあ、明日は俺とクラウドでちよつとそこら辺に目当ての木があるかどうか探索するから、残る面子で少しずつ荷物をまとめておいてくれないか?」

「海に行くツスか?」

そういえば、海を楽しみにしていたにしてはテツサも少々元気がない。

「ああ、本格的に引つ越そう。魚用の罟の類は向こうでも使えるだろうし、奥の方から徐々に回収。獣罟も少しずつ減らして……海への道中で仕掛け直そう。理想としては、林の辺りから一日で行ける範囲だ」

「それなら、長距離の移動に慣れてるアタシに任せてちょうだい。道中君達が作ったシェルターを寢床にすれば、二日で目ぼしい所に仕掛けて戻って来れるわ」

「採用。幸い、肉は結構ある。必要なだけ食糧を持って行ってくれ」  
むしろアシュリーの方が少し気分が高揚しているように見える。  
まあ自分達の世界では、綺麗な海などどこにも無かったから仕方ない。

「その……リーダー君、大丈夫なのか？」

「？ 何が？」

「なにがって……その、怪我の事だ」

「いや再生するし、再生したし。……いいんじゃないか？」

「……すまない、アイツが。本当にすまない」

アイツ？

「まあまあ。とりあえず行動予定は決まったんですし、あとは自由に動きましようよお♪ 私も少しツールさんとちよつとお話したい事がありましたし……今日は解散ということであえ♪」

あ、おい、ちよつと待ってくれ。僕もツールと少し話したいのだが――



なんとなく声をかけるタイミングを失い、こつそり二人の後をこつそりついて行く事になった。

そもそも具体的に、ツールと何かについて話したい事があったわけじゃない。

ただ他愛も無い話をしたかった。

彼について、探り――というほどでもなかったが、ただ……もつと深く知りたいとは思った。

以前の様に、利用しようという気持ちはない……と、思う。思いたい。いや――

(彼とアオイの二人が後ろ盾になってくれるのなら心強いとは思うのは確か、か)

おそらく、そういう物は鳴りを潜めているだけであって、そういう汚い所はきつかけ一つで浮かび上がってくるのだろう。

だから、逆に思う。

彼はどうなのだろうと。

トールという男が、汚い所を見せるとしたらどういときなのだろうか。

追いつめられた時か、気を緩めた時か、動揺した時か空腹の時か

……

(人の汚い所をみたいなど……高潔な貴族には程遠いな)

もつとも自分が嫌っていた、粗探しばかり行かう貴族とやっている事が変わらない事に気がつく。

足を止めようかとも思うが、その意識と裏腹に自分の足は物音を消すように動いていた。

しばらく歩いた先は、拠点からそこそこ離れた場所。湖のほとり――いや、川の下流側と言うべきか。

確か、魚籠の仕掛け場所の辺りだったか。

一応の光源として枯れ草に火を移して来ていた二人は、それで簡単な焚き木を焚いて適当に腰を下ろす。

「トールさん、まずは私から」

最初に口を開いたのは、やはり呼び出したアオイだった。

「申し訳ありませんでした。私の見極めが甘かったです」

その表情はいつもの笑っている顔ではなかった。

あの時、トールを斬った時のような冷たい顔でもなかった。

小さい焚火という頼りない光源に照らされた彼女の顔は、心から何かを悔やんでいるような、ひどく沈痛な面持ちだった。

そして、トールに向かって深く頭を下げていた。

「話ってやっぱそれか」

トールは、小さく苦笑してアオイに向き合う。

「大丈夫、アイツと二人で話したいって言ったのは俺だし、特に問題は

ない。一番確認したかった事も確認できたし。……とりあえず顔を上げてくれ。謝られるのは筋違いだ」

対してトールも、口調こそ軽いが真面目に受け答える。

(やはり、クラウの事か?)

今日の事だとすれば、トールと深く関わられるのは彼女しかいない。

「……斬りますか?」

トールの言葉を聞いて顔をあげたアオイが、トールにそう尋ねる。

「んや、いい。とりあえずアイツには出来るだけ付き合うつもり」

「……こういう言い方もあれですが、私の眼を欺けるほどの擬態持ちは斬っておきたいのですが」

「擬態じゃない。お前がクラウは危険じゃないって思ったのなら、それは間違いじゃないよ」

トールの良く分からない言葉に、アオイは眼をパチクリさせてしばしトールを見つめる。

そして小さく息を飲み――

「――そう言う事ですか」

「ん」

互いに、短い言葉だけをかけ合う。

恐らく、それだけで伝わったのだろう。

「どうするおつもりですか?」

「言ったとおり、出来るだけ付き合う」

「……殺されない保障はありませんよ。自己再生があると云っても」

「そんな時は……そんな時はそうだな。判断はアオイに任せる」

トールの口調は、どこまでも普通だ。

いつもとなんにも変わらない。

そして、その詳細は分からずとも言っている事はシンプルだった。

この男は、また命を懸けている。

「ただ、出来ればどちらも許してやってくれ」

「……文字通り、身体と生命を懸けるアナタがそう望むのでしたら」

「スマン。アイツラの状況が解決できるまでどれだけかかるか分からんけど、少しだけ堪えてくれ」



「はい」

アオイとしては、不本意な所がやはりあるのだろう。

珍しく苦虫を噛み潰した顔で、不承不承と言った様子でトールの言葉肯定する。

「大丈夫、いい奴……とまではさすがに言えんけど、根は悪い奴じゃないよ」

「そこは、実際に話したトールさんを信じます。ただ、トールさん」「ん？」

アオイは、言おうかどうか迷ったのか、あるいは違う理由か。

少し困ったような顔をした後、いつもの笑顔に戻る。

そして、こう言うのだ。

「もう、我慢しなくてもいいですよ？」

それを聞いたトールの表情は——見えなかった。

最初はボーっとしていたが、突然自分からは見えない方に、川の方へと顔を向けた。

そして……激しく嘔吐した。

何度も嘔吐く音と、不快な水音が響く。

アオイはそつとその横に近づくと、静かに背中をさすりだす。

吐く物も無くなったのか、ただ嘔吐く音だけが響くようになっても。

それすら終わってトールが川の水で口を洗っても。

疲れ果てたのか、そのままトールが倒れ込むように寝ても。

アオイという女は、トールを抱き支えて、膝に彼の頭を乗せて、自分の着ていたマントの様な上着をかけて——何も言わずにトールの傍にいた。

表情は見えない。

トールがどういう顔で寝ているのかも、アオイがどういう顔で膝を貸しているのかも分からない。

ただ……入れない。

入れないと、強く感じた。

(……敵わないな)

役立たずには成りたくなかった。

それはそのまま、元の場所の自分のまんまだから。

女としてしか必要とされなかった自分のまんまだから。

だから、トールと話があったのかもしれない。

何を求めて、何を嫌い、何を好むのか知って……頼られたかった。

これまでの様に。これまで以上に。

だが、思う。

(君には……敵わないな。トール)

戦場ではない。明確な敵がいるわけではないのに、彼自身にとっては明確なのだろうナニカのためにそこらの兵士や将よりも命を懸けているトールの姿が、なによりも眩しく感じる。

命を懸けた結果、確かな何かを得つつある彼の姿が。

今になって、分かった気がする。

自分がトールに対して、嫌な気持ちを抱いてしまうこれは——自分、妬みなんだろうと。

アオイという、確かに全幅の信頼を預けてくれる部下——いや仲間がいることに。

そして、アオイや他の人間を文字通り体で受け止めようとするその姿勢に。

(……戻ろう)

来た時同様、静かに足音を消して来た道に戻る。

この場所は、彼と彼女の場だ。

今の……ああ、今の自分では入る事が出来ない場なのだ。

054：ちえんじ！

「どうだ、目当ての木っぽいのはあるか？」

「ちよつと待てくれ、ええと……」

「いや、別に急かしはしないって。ゴム探しは建前で本題じゃないんだから。あればラッキーくらいのもんさ」

「……ああ、そうだ。そうだったね」

うああああ……昨日はアオイに恥ずかしい所を見せてしまった。

色々といっぱいっぴいだっただとはいえゲーゲー吐く所を見せてしまった上に、気が付いたら俺のシエルターの中でアオイと一緒に寝ていた。

……あの、俺変な事してないよね？ 吐いた後の記憶が全然ないんだけど。

万が一子供とかできたら、衛生面とかですっごい不安なんだけど。

本人に聞いたたら、互いにグッスリ寝てたって言うけど……大丈夫だよね？

「なあ、リーダーさん」

「んあ？ どうした『クロウ』？」

血で汚れたために俺と同様、適当な衣類——感じとしてはスーツに近いが、その上からマフラーを巻いている。

ちよつとでも素肌を隠すためだろう。

「どうして、自分を放っている？」

「殺すほどの事を……まあ以前はやってたかもしれないけど、今はそうじゃないからな」

「アナタを喰った」

「おう、まさか内臓喰られるとは予想の外だったわ」

おかげでガチで死にかかったけどな！ 喰っていいとは言ったけど手加減という物を知らんのかね?!

その光景もろ見てしまっただりバースにずっと耐えてたわ。アオイの前で吐く事になろうとは……。

「それで？ とりあえず男になりたいのか？」

「逆だね。クラウ——主人格のために完全な女の体になったけど、まだ不安定なんだ。クラウはそれでもいいと思っっているようだけど」

クロウⅡクラス。食人鬼、クロウⅡクラス。

それが『彼』の名前だ。……まあ、名前付けたのは俺だけど。

『彼女』の中に潜む『彼』には、ついさつきまで名前がなかった。

「体は男で心は女か。まあ、ある話だよなあ」

「半分だけね。……リーダーさんの所じゃ普通だったのか？」

「半分？ いや、ともかく……奇異の目で見られるのは避けられねえし辛い目に合う事も多いだろうけど……殺される所まではいかねえかな」

「羨ましい限りだよ。こちらとは大違いだ」

彼らの住まう場所は信じられない程に巨大とはいえ、基本樹の中の世界だ。

住む所は限られるし、なにより限られた生産量で支えられる人間も限られている。

……口減らしという物があっても、おかしくない世界だった。

「最初は普通だった。両親はクラウを男の子だと思っっていたし、そう育てていたようだ」

「それがどうして？」

「胸が膨らみ始めたのさ。下にモノが付いてるのにな。そして太ってる訳でもない」

それでおかしい事に気が付いたのか、クラウの両親は。

しかし——

「それだけで殺されるか？」

「殺されるのさ。実際、クラウは殺されかかった。だから、『自分』が産まれた」

話を聞く限り、多分だけ遺伝子っていう概念がクラウの世界にはあったのだろう。それがどこまで正確だったかは不明だが。

（それで、後の可能性を消すために障害持ちを排除とか……クラウの世界も中々にハードだな）

「もつとも、本人は割と最初からおかしいって気付いていたようだった

たね？ クラウの腕は片方の爪が平べったくて、もう片方は丸っぽかったから」

「ああ、腕も片方男で片方女だったのか」

「多分な」

「……腕や首元の縫った跡は、そこらを直したためか」

「理屈では錬金術でもっと上手くやれるはずだったんだけど……実際に喰った自分の失敗だ。クラウはいつ死んでもいいと口では言っているが、死にたくないという意識も強い」

これまでと同じくモノクルを付けたクールビューティな感じの彼女だが、口調は微妙に男っぽくなっている。

大きく口調が変わったわけではないが、雰囲気は確かに違う。

「薄々自分が妙だと感じてはいたんだろう。クラウは小さい頃から、身体の変異方法について調べていた。多分、その過程に最適なのが食人というのも知ってしまったんだろうね」

それがいつくらいのかは知らないが、子供であればショックを受けた事だろう。

このままじゃ殺されるのが分かっている、しかし体を治すにはその禁忌を犯さざるを得ない。

「そのストレスがお前を産んだ？」

「じゃないかな？ 気が付いたら『自分』は『私』の中にいた」

うーん……。

「昨日は聞くどころじゃなかったから改めて聞くけどさ」

昨日は、しばらく呆気にとられていたクラウ——いや、クロウが俺の腹をナイフで搔っ捌いて顔を突っ込んだ時点で気を失って……起きたらクラウがナイフで自分の喉突こうとしてたので必死で止めた結果また自分に刺さって再生して……。

うん、どうにかこうに彼女をなだめて拠点に戻ったからなあ。

「殺したのは……喰ったのはどういう奴？」

「クラウの——自分達の事を通報しようとした両親。後は、錬金術師としては優秀だったクラウをあの手この手で引き摺りおろそうとして、秘密を暴いた奴らだ」

ん？ 両親……つてたしか……あれ？

「クラウは、お前——別人格が殺した事を知らなかったのか」

「ああ、どこからか人肉を手に入れてるのは気付いていたけど、殺人だったとは昨日まで知らなかったんだろうさ」

「……じゃあ、昨日自殺しようとしたのは」

「シヨックだったんだろう」

おつま……っ。それ早く言え！

ええい、クラウに戻った時も注意が必要か。フォロー入れてやらねえと。

「ちなみに、引き摺り落とすって何しようとしたのさ？」

「手籠めにしようとしたり、工房で火事を起こして罪をなすりつけようとしたり……あとは違和感持った奴らがあの手この手で裸を見ようとしたりだね」

ん——

ん~~~~~

うん、よし。とりあえずはアウトギリつぎりのセーフとしよう。

「突然俺ぶっ刺して喰おうとしたのは？」

「……その、不完全で不安定な体を安定させられる可能性が眼の前にあるってクラウが思った瞬間、思いつきり影響受けてしまって……」  
「ある意味彼女の本能的な部分であるお前が我慢できなくなってしまった、と」

「……うん」

うーん、この。

まあ被害者は俺だった訳だし許してやろう。

「今度から、俺を喰いたくなかった時はちゃんと伝えてくれ。用意はあるから」

とりあえず、叫び声抑えられるようにちゃんと噛む物も用意してきたし。

あと服をこれ以上血で汚すわけにはいかんし。

「……なぜっ？」

「んっ？」

「リーダーさんはなぜ……そこまでしてくれるんだ？」  
なぜと言われても……。

「一応仲間として迎え入れたし、クラウドはいい女だし……クロウも、話  
が通じない訳じゃないしなあ」

実際刺された時はショックだったけど、こうして話している分には  
結構普通だ。

……うん、たまに喉の奥に辛くて酸っぱい物を感じるのは勘弁して  
ほしい。

なんせ昨日の今日なのだ。

「ま、いいんじゃない？ 快楽で人喰う奴はさすがにどうかと思うけ  
ど、自分も含めた誰かのために喰ってんのなら」

少なくともこの場じゃあな。向こう？ まあ、裁かれる時は裁かれ  
るんだろうけど……。

さすがにそこまで行くと、俺の領分じゃないしなあ。

とりあえず、スマホをポチポチくつとタップして、スキルを発動さ  
せる用意をする。

ええと、人目に付きそうにない場所はつと……。ん、あつたあつた。  
(それにしても、えらくいいタイミングで習得可能になったもんだ)

あの川のほとりで意識を失って眼を覚ましたのは、服の中で震える  
自分のスマホの音が原因だった。

おかげで、目の前にアオイの寝顔があったのと合わせて二重の意味  
で驚いて眼が覚めた。

先日魔法を覚えたばかりだと言うのに、震えるスマホ。

最初はてつきりいつもの『不具合の修正』だと思っていたのだが、内  
容は予想に反していた。

『条件をクリア致しました。スキルを一つ、習得可能です』  
という一文だった。

(相変わらず条件とかがさっぱりだなコレ……)

だがまあ、助かった。

昨日帰り道で、泣きやんだとはいえ涙声だったクラウドからポツリポ  
ツリと話は聞いていた。

なぜ俺を喰ったのかも、おおよその所は聞いていた。

まあ、細かい違いは今回の『クロウ』とのトークでようやく補完出来た訳だが。

(完全な女か男にならないと殺される。だけどそうなるための錬金術の過程では、人を喰う必要があった。死ぬ恐怖と人を喰う恐怖の二重ストレスが人を喰う『クロウ』を産んだ。……こういう事か)

「クロウ」

状況は把握できた。クラウという女と、クロウという男も理解した。

だから——この言葉を言える。

「大丈夫大丈夫。多分、力に慣れる……とは思うからさ」

ちようど辺りからは見えない岩影。

そこに入り込んで、俺はスキルを作動させる。

「う……お、お……っ……!!!」

体が少し光る。自己再生とは違う、淡い緑の光だ。

激しい痛みとは違う、体の奥からズンズンと来るような重い鈍痛が響く。

「お……ああ……!」

多分、それほど時間はかかっていなかったと思う。

クロウが息を呑んで見守る中、徐々に痛みは引いてくる。

(これ、下手すりゃ刺されるよりつらいな!)

手を開いて、目の前にかざしてみる。

それは、自分の知っている自分の手じゃない。

少々丸っこく、そして小さくなっている。

肩が、いや胸が少し重い。

顔を下に向けると、この間テツサに切ってもらったハズなのに髪が少し垂れる。多分、クラウやテツサと同じ位のセミロングくらいか。気のせいか、髪の色素も薄くなった気がする。

そしてなにより、着慣れているはずのいつもの服に違和感を覚える。

「うあ……クロウ、どう? 俺、女になってる?」



『性転換』

俺が新しく入手したスキルは、絶対取ることはないと思っていたものだった。

「あ、ああ……どう見ても女の子だ。その……可愛いよ？」

そんな感想はいらねえんだよ！

「ちよつと待ってろ、すぐに脱ぐから」

一応ズボンはアオイに斬ってもらった時の奴。シャツは黒いのが無かったから、もう脱ぐしかない。……やっぱズボンも脱ぐか。血の汚れはやつかいだ。

ボタンを全部外して、絶対に汚れそうにない所に置く。

……男の時は別に何ともなかったけど、この体で裸になるの恥ずかしいな。

「ん。とりあえずスキルがキチンと動く事も確認出来た。お前の望むヒントが体の中にあるといいんだけど」

「ほれ、喰え」

とりあえずそう言うってから、叫び声を抑えるのと下手に舌を噛まないために、紐を編んだり結んだりして作った……なんだろう？

まあ、それを口に入れてしっかり噛む。

ほれ、早く喰えって。

そのためにわざわざスキル取って女になったんだから。

でもって、俺も了承したし、覚悟も決めてる。

更にいえば、クロウにとつてもクラウにとつても、きつと必要な事なんだからさ。

だから――

「……………つ」

だから躊躇うなよ。

ナイフちよつと震えてるじゃん。

ああ、昨日もそうだったけどさ。

いいから喰えって言うてんのに躊躇いやがって……。ちよつと泣きそうな顔になって……。

なんでかなあ。それでかなあ。

俺、お前の事を嫌いにはなれない気がするんだ。

握り直した、見覚えのあるナイフの刃の鈍い光が自分の腹部に埋もれていく。

その光景を眺めながら、とっさに突き飛ばしそうになる腕を必死に抑えながら、

俺はそんな事を考えていた。

「で、どうなのかしら?」

「……クラウさんの事、ですよねえ?」

「昨日ツール君と話していたの、それでしよう?」

刀を振るう女と、特殊部隊の隊長。

異なる世界から来た二人の女が、焚火のそばで作業をしていた。

引越しのための運搬用具として、ちよつと大きめの物——例えば薪など——を運ぶためのバックパックを作ろうと枝を組み立てて紐をぐるぐる巻き付けていたアオイが、その手を止めてアシユリーの方を向く。

「うちのテツサとゲイリーちゃんが見てたわよ」

「……思っていた以上に私、動揺していたんですね。まったく気づきませんでしたあ」

幅が広くて丈夫な葉を編み合わせて、一枚の薄い板を作っていたアシユリーは、テツサに暗殺を命令すべきだったかと内心思いながら笑顔で話しかける。

「まあ、肝心の内容はテツサは話してくれなかったけどね。ツール君が話すまでは言うべきじゃないだろうって」

「正しい判断だと思えますよお。アシユリーさんはなんとなく分かっているでしょう? あのクラウって人がちよつと危ない人だつていうのは」

「まあ、あれだけ血の臭いが染み付いていればね。多分その中でもとびきり警戒していたのがテツサだけだ」

「……今にして思うと、テツサさんの方がツールさんの護衛としては適任かもしれませんねえ。用心に用心を重ねるという意味では」

「にしても、ちよつと警戒しすぎだったと思うけど……あ、出来たわよ」

ひたすら葉を編み合わせて作った板——と呼べるかどうか微妙だ

が——を受け取ったアオイが、バックパックの底に当たる部分のフレームにそれを乗せて、更に紐でしっかりとフレームにくくり付ける。

「ねえ、アオイちゃん」

「なんですかあ？」

「前から聞きたかったのだけれど……」

アシユリーは次の葉の束を用意してから、一息付こうと針葉のお茶を沸かしている素焼きの器に手を伸ばす。

「アオイちゃんから見たツール君って、どういう子なの？」

「ツールさん側に立つ私から情報収集ですかあ？」

「聞いたところでどうしようもないでしょう？ ただの好奇心よ」

「……まあ、確かにどうしようもありませんねえ」

アオイも一息入れるタイミングと判断したのか、完成しかけのバックパックをそつと地面において履き物を脱ぎ、焼いた石で温めておいた足湯に足を浸ける。

「出会ってから結構経つでしょう？ 初めて会った時はどう思ってたの？」

「んん、そうですねえ」

少し熱かったのか、水が入った素焼き壺から少し水を足してから足の指を揉むアオイ。

やはり今の生活でもっとも酷使用する部位だけあって、細かい傷や固くなった白い皮膚などが目立つ。

「薄っぺらい人だなあ……と。正直、今でも少し」

「……薄っぺらい？ 彼が？」

それでは、当初の自分達の感想と変わらないではないか。

そう思ったアシユリーは怪訝な顔をする。

なぜかそう言っているアオイも、どこか怪訝な顔をしていた。

「ええ、空っぽな人だなあと思っていました。ただ自分の思う『いい人』のイメージを必死に張り付けているだけの……だから正直、最初は様子を見て、上っ面が剥がれた時の行動次第では斬って荷物を回収しようと思っていたんですけどお……」

「そうじゃなかった」

「というよりは、予想を超えていたと言うか……」

基本的に、食糧に関しては特に制限がある訳ではない。

お腹がすいたら自由に食べていいのだ。

ただし、食べていい物というか優先順位こそあるが——古い干物や燻製から食べるとか、野草は自由とか——今現在は空腹でお腹を鳴らせるような事はほとんどなかった。

ひとえに、トールのスキルやその指揮のおかげである。

「アシュリーさん達を回収するまで、何度かトールさんを試しました。弱い女を演じて隙を見せたり、一人の時の様子を観察したり……でも、あの人は決して『いい人』の仮面は剥がさないんです」

「彼が本当に良い人っていう事は？」

至極当たり前に思いつく事をアシュリーが口にするが、アオイは首を横に振り、

「普通の良い人ですか？ トールさん？」

「………違うわね」

そうだ、違う。

もし普通にいい人ならば、そもそも現状は起こっていない。

武力という分かりやすい物に、武力ではなくただただ自らの血のみで対抗するような事はまずしない。

「そうです。あの人、狂っているんですよ。完全な善人……いえ、『完璧な聖人』という矛盾した理想を自分の体に写しこもうとしている狂人」

完璧な聖人。

もしいるとすれば、きっと自分のような人間とはそりが合わないだろう。

アシュリーのそんな考えが顔に出ていたのか、アオイも苦笑しながら頷いていた。

「……存在しえない存在ね」

「ええ。でもトールさんはそんな破綻した存在になろうとしている」「どうしてトール君は？」

「さあ？　そもそも、意識しているかどうかもちよつと怪しいですけど」

「……止めないの？」

「止めようとも確かに思いましたけど」

アオイは足湯を——ツールが風呂に近い物を絶対作るとやつきになつて作ったそれを、足でばしやばしや言わせながら、

「私は確かに救われたんです。あの狂った人に」

ぽつりと、だがハッキリとそう言った。

「私と決して相いれない価値観を持ちながら、それでもいいと。平和で、そして自由な環境の中で生まれ育ったあの人が私の事をそう言ってくれたんです。そして、命を預けてくれたんです」

そしてアオイは、刀に手をかける。

「だから斬ります」

その刀こそが自分だと。自分が自分自身に立てた誓いだと言わんばかりに、固く握り締める。

「あの人があの生き方を諦めようが諦めまいが、あの人の生き方に害を成すモノは——私が斬ります」

ふと、アシユリーは昨晚テツサから聞いた話を思い出していた。

『やっぱり、ツール君が一番信じているのはアオイさんツスねえ。ちよつと妬けるツスよ……本当に』

(下手にアオイちゃんが死にでもしたら、却ってマズい事になるかもしれない……か)

アシユリーがもつとも恐れているのは、ツールが自分たちを敵とみなす事。そして、報告にあつた洞窟のように、スキルを持って自分達と敵対する事だ。

なにせどういふスキルが出てくるのかすら、ツール自身にも今の所予測不能なのだ。

その対策に労力を割くのは、現環境下では多大な負担になってしま  
う。

アオイという女の存在が、トールにとって大事な物だと言うのなら  
ば——余計な事はするべきではない。

「まあ、彼の邪魔になるような真似は避けるように気を付けるわ」

「そうしてくださいあい♪ ……本当に、お願いしますね。トールさん、  
貴女達の事も身内だと思っっているんですから」

「なら、さしずめこの間のは姉妹喧嘩といった所なのかしら」

「おおよそ間違っていないでしょ……おや？」

唐突に、アオイが首をかしげてアシユリーのその向こうに目をや  
る。

釣られてアシユリーもそつちを見ると、

「クラウちゃん？ それにトール……君……？」

思わず疑問形になってしまった。

クラウは分かる。あの青い髪とモノクルという特徴的な姿はそう  
そう間違えるものではない。

ただでさえ、いる人間は限られているのだ。

そして、もう一人。トール……と、思わしき人物なのだが——

——なぜか、クラウの肩の辺りに顔を隠すように押し付けたまま、  
トボトボと着いて来ていた。

それに不穏な物を感じたのか、アオイが履き物も履かずに立ち上が  
り、こっそり刀に手を当てる。

「ねえアオイちゃん。あれ、トール君よね？」

「……おそらく？」

「なんかちっちゃくなってるない？」

「……………おそらく？」

そう、明らかに小さい。

女性にしては比較的背の高いクラウだが、トールはそれよりも背が  
高かったはずだ。

それがどういうわけか、今ではクラウの肩の辺りに顔を押し付けている。

歩きづらそうにしているクラウだが、トールの腰元に手を回して支えながら歩いている。

一方トールと思わしき人物は、決して顔を見せようとしなない。

「あのう……クラウさん？」

そうして拠点にまで辿りついたクラウに、さっそくアオイが声をかける。

「ああ、すまない。今戻ったよ」

「いや、それは見れば分かりますけどお……」

トールと思わしき人物は、クラウの服に顔をうずめながら『えっぐ……ひっぐ……』と泣いていた。

時折鼻を吸る音がする。

「クラウちゃん、それ……トール君……よね？」

「ああ、まあ、説明すると長くなるんだが」

未だに顔を見せようとしなないトールの頭にポンツとクラウは手を乗せて、

「実は、とある事情で彼のスキルが必要で……彼もそれを習得した上で使用してくれたんだが」

そこまでクラウが言った時に、ついにトールらしき人物が声を上げる。

「……………そ……き」

その声は、トールの物ではなかった。

というか、男の声ではなかった。

「嘘つきいいいい……っ！！」

どう見ても女の子で——だが、ダボダボになったトールの服を着ているその人物はどうとう泣き崩れ、地面に膝を付きながら叫び始めた。

「自在に変えられるって書いてたのに！ 書いてたのに……っ！！」



「あの、クラウドさん。申し訳ありませんが説明してもらっていいですか？」

クラウドは涙やら鼻水でぐちよぐちよになった服にため息を吐きながら、「ああ、いいとも」と口を開く。

「その、詳細は話せないが例の『性転換』というスキルが必要でね。それで彼もスキルを取ってくれて使用してくれたんだが……」

なんと言ったものか。

そんな雰囲気を出しながら、クラウドは後を続ける。

「女性になったまでは良かったんだが、肝心の男性に戻るまで——十日前後はかかるらしい」

いつのまにか刀から手を離していたアオイが、なんともいえない顔でトールを見る。

未だに四つん這いになったまま「うゝあゝ あああああ……っ」と嗚咽を漏らすどう見ても少女の姿に、どうしたものかと頭を抱えてため息を吐く。

「完全に女の子ですねえ」

「ああ、そうなんだ。本人もあまり君達に知られたくなかったのか、こっそり習得して君達には内緒にしておきたかったらしいのだが」

多少伸びたとはいえ、テツサやアオイが時折ナイフで切って整えていた髪はさらに長くなっており、多少不揃いとはいえ綺麗なセミロングになっている。

髪も色素が抜けたのか明るい茶色になり、男性らしい髭の類は全く見えない。

どうみても女の子である。

「ねえアオイちゃん」

「はい」

「男から女になるって大変なことよね」

「はい」

「体に変な所があるかもしれないわよね」

「はい」

「……………」

「……………」

「二十分、いえ、十五分ほどツール君……ツールちゃんを借りていいかしら。大丈夫、調べるだけだから。ちよつとだけだから。ね？」

「首切り落とされたいのかクソアマ」



「……トール君も、声がなんだか幼くなつてて違和感酷いツスね」  
すまぬ、本当にすまぬ。

いや本当に、すぐ元に戻れると思つてたんだ。

「とにかく、それぞれの進行状況を確認しよう。アシユリー、先行の準備は？」

「ええ、今日の小魚を今捌いて燻しているから、それといくつかの干し肉をお弁当にして早朝に出発。ある程度罟を仕掛けて……ええ、明後日の夕方にまでは帰ってくるわ」

「それに薪や素焼きの壺みたいな大きい物を運ぶためのバックパックも追加で作りましたし、運搬に関しては大丈夫ですう♪」

うし、とりあえず準備の方はできたか。

「ゲイリー、テツサ組はどう？ 上流の拠点は……」

「ああ、生け簀型の罟は撤去。離れた所から獣罟は順次解体して、部品として使っていた紐等は回収してきた」

「一応、悪あがきみたいなものもツスけど、一番近い所の罟は二、三残してあるツス」

ゲイリーとテツサは、上流拠点の撤去作業に従事していた。

あそこら辺は今現在獣も多いし、猟場としては少々惜しいが仕方ない。

もし機会があれば、またその近くに探索拠点を作る事もあるだろう。

で、ヴィレッタさんは――

「ごちらも同じくだ。湖に仕掛けていた魚籠は回収。一応釣り針罟を五ヶ所ほど残しているが、その他の物も回収して今乾かしている」

「壊れた針とかはあった？」

「我々の釣り針なら大丈夫だ。……骨の釣り針はいくつか砕けていたが、まあ仕方あるまい」

「だろぅなあ」

ヴィレッタさんは湖の罟の回収を任せていた。

骨の釣り針は正直消耗品だったし、そこらの道具に関してはまた新しく作り直すしかあるまい。

魚籠もいくつかはツタが切れたりして駄目になってるし。

金属の鉋石などがあればクラウがもつと丈夫な物を作れるんだろうが……。

(今の時点で理想はあれだ。竹。竹どっかに生えてないかなあ)

先日回収した竹のザルを思い出して、その丈夫さから改めて身近だった植物がいかに便利な物だったか思いしる。

種類によっては他の木々を追いやる勢いで生えてくると聞いているが……この世界なら案外どうにかなるのではないか。

生えていれば、建材から道具の作製、しなりを利用したトラップなど様々な方面で役に立つだろう。

……あと、タケノコ食べたい。あのコリコリ感大好きだったんだ。食べたいて言うとおカン嫌な顔してたけど……。

クラウなら美味しく調理してくれるだろう。

「ここに帰りつくまでに分かった事なだけ……女になってから微妙に体力が落ちている。そもそも背丈っていか足も少し縮んでいるから、歩幅も小さくなってる。先の話だけど足引っ張ったらスマン」

先延ばしにしてもいいけど、既に罫の解体とかやっちゃったしなあ。

「アタシが抱きかかえて移動するのはどうかしら？」

アシユリー、シャタツプ。

ほら横を見る横を。部下のテツサが隊長のお前さんの事、排水周りのぬめりを見るような目で見てるぞ。

「で、どうする？ アタシは正直、君達が到着するまで先に海の周りで待機してもいいんだけど？」

「さすがに一人で放っておくわけにはいかないだろう。ただでさえ、他にスキル持ちがいる可能性があるんだし」

一人で向こう側に待機させていて、いざ向こう側について姿が消えてたら心臓に悪いだろうが。

最悪——最悪死体になって発見なんて事になったら、ガチ泣きする自信があるぞコルア。

「心配性ねえ。その時の訓練も受けてるし、テッサやヴィレッタにも通信できるのに」

「ああ、そういえば……」

自分ももうちよいで出来るようになるんだっけか。

たまにテッサが遠距離からこつそり侵入しようとするから、それを教えられた技術を使って妨害するって訓練もいい成績出してるし。

一応その訓練の過程でテッサとだけは通信できるようになってる。

今日も喰われている間にブロック出来たし、防衛技術の腕は上がつてるとテッサから太鼓判も押されてるし、向こうに着くくらいの時には他の二人とも交信可能にしておいた方がいいか。

「まあ、それでもだ。とりあえずは帰ってきてくれ。戻ってきて一旦休息を取ったら、海に向けて出発しよう」

「フフ。ええ、ツールちゃんがそう言うなら分かったわ」

……ねえアシユリーさんやい。

なんでずっと俺の足を撫でてんの？　なんでいつもより距離近いの？

……。

『テッサさんテッサさん』

唯一回線開いてるテッサに、頭の中で話しかける。

『なんスカ、ツール君』

『……こう、今の身体のサイズに合う服ってあったっけ？』

一応元々の服を、余った所を折り込んだりベルトを強く締めたりして、なんとか着込んでいるが……。

……こう、なんとというか無防備だ、これ。

『身の危険を感じたツスカ？』

『……うん』

『サイズに合うのはないツスけど、縫い針と縫い糸はボク持つてるツスカから、適当な服を仕立て直しておくツスよ。出来に期待はしないでほしいツスけど』

天使がここにおる！

「あ、それでツールさん」

「ん？ どったのアオイ？」

「魔法の方はどうですかあ？」

「……実はさっぱり」

今日はそれどころじゃなかったって言うのもあったけど、ヒントすら分からない。

スマホ弄っても、魔法の使用が可能になりましたって事以外さっぱり分からないし。

「地面を触つてもだめだったんですかあ？」

「ああ、それは試した」

土魔法だつていうから地面に何かあるのではと思ったんだけど駄目だった。

とりあえず石とか岩に触って色々イメージしたりしてみたけど、全然駄目だった。

「ゲイリー、マジでなんかアドバイスない？」

「む……そう言われてもな」

実際に俺がイメージする土魔法を使うゲイリーに聞いてみれば何か分かるかも。

うん、困った顔するのは分かってたけど頼むよ。なにかヒントが欲しい。

「そうだな……イメージが不足しているか、あるいはなにか材料が必要なんじゃないか？」

「材料？」

「ああ。例えば俺の魔法で土を肥料化するには、落ち葉や木の枝などが必要になる。壁作りなどはその場でも出来るんだが……変化を起こす魔法には大体材料というか……触媒がいる」

「触媒つつつてもなあ……」

地面に何か変化を起こす材料。

とりあえず、放り込むまえだった薪を一本もって肥料になる様に祈ってみるが……さっぱりだ。

(もつとこう、ハッキリと地面に変化を起こせる物……)

真つ先に思いついたのは泥とかぬかるみだが、これではただ水をぶちまけるだけと変わらない。

……いや、レベル1みたいなもんだとその程度か？

(落ち葉、枝、砂……あとは……石?)

ふと、煮沸用に用意している適度な大きさの石を掴んでみる。

とりあえず砂っぽくなる様に念じてみる。

すると——手の中から石の感覚が消えた。

「……あれ?」

成功した!?

……いや、でも完全に手の中から反応が消えている。

え、消しただけ!?

「トールさん、足元。足元見てくださいよお」

足元?

目の前にあるは足湯として削った流木。

そこから視界を少し下げる。

—— 地面に、今握っていた石と同じ色の平べったい石が落ちていた。

—— 正確には、張り付いていた。

「なんじゃこれ?」

爪で引つpegがそうとすると、どう見ても軽い石なのになかなか剥がれず、両手を使う羽目になった。

ふんごごご! と頑張つて引つpegがすと、どうやら地面にへばりついていたらしい。

やはり軽いのだが、かなりしつかりと張り付いていた。ちよつとやそつとのことじゃあ外れるどころかズレる事もないだろう。

「これ、えらく平らになってるわね。大量に同じ事が出来るのなら、綺麗な道が出来るんじゃないかしら?」

……道?



「ですねえ。白い石でやってくれたら、多少暗くても目に付く道になります！ やりましたねツールさん！」

何を？

え、ちよつと待って。

恐る恐るとはいえ、やっぱり期待するものがあつて取つた魔法だけど。え？

その結果が俺、整地要員？

## 056：『潜むモノ』

魔法という名の整地技術を手に入れてから四日。

そう、あれから四日経った。

あれから色々あった。

例えば、解体直前の最後の獣罠にやたら元気な野豚がかかっていて仕留めるのに苦労したり、湖の残る罠を回収してたらなんか馬鹿でかいナマズっぽい魚が跳ねるのを目撃したり、アシュリーからのボディタッチが増えたり……うん、まあ色々……。

で、そういうアレコレを終えて——ようやく出発。

道中、道を作りながら。

「魔法使いのやる事じゃないよねコレ。イメージ的に」

「リーダー君の思う魔法使いがどういう物か知らないが……樹内世界だと結構そんな感じだったよ」

「マジでか」

前回の時は川に沿って進んでいたのだが、今回は事前に先行していたアシュリーによって最短ルートが確定していた。

俺の仕事は、この四日で集めた白い石をガッツリ使って、最短ルートの『道路』を作る事だった。

道っていうよりは、細い一本道の『目印』の設置という方が正しいか。

最終的には広げてしっかりした道に出来たらいいなあと皆言っているが……。

これすっごい疲れるんだけど。え、これ更に広げるの？

……広げなきゃ駄目なんだろうなあ、実際。

とりあえず、ちょうど半分程の所でそれぞれの簡易シエルターと焚き木を起こし、一息ついたところだ。

アシュリーとテツサは、いくつかの道具を持って先行している。

自分達がシエルターを建てようとしている林付近で、先に材料を集めるためだ。

あの二人なら自分達だけのシエルターならさっさと作れるし、特殊

スーツのおかげで最悪野宿でも低体温症の危険にさらされる事は無い。

唯一怖いのは虫や獣だけ……一応虫よけ獣よけの対策はあるらしいで信じよう。

そして日が暮れた今、俺は仮拠点から離れた場所で、これまでほとんど話していない女性と話していた。

「思えば、『クロウ』とはそれなりに話していたけど『クラウ』とはそこまでだったな」

錬金術師、クラウⅡクロス。半男半女として生まれ育ち、そのために殺されかけ、内に潜む食人鬼を産み出し、先日目の前で自殺しようとしていた女。

「とりあえず落ち着いた？ ……ああ、大丈夫。今サーチかけたけど周りに誰もいないから」

まあ、あくまでサーチの範囲内はだけど。

「それはいい。むしろ、全てを皆に話した方がいいと思うんだが……」  
いや、アオイはまあ知っているけど、自分食わせていますとか冷静に考えなくても頭おかしいから。

ドン引きされちゃうと今後のグループ行動に支障が出る可能性があるんでちよつと……。

「状況がもうちよい落ちついてからの方がいいだろう。で、身体の方はどうだ？」

さっそく本題について尋ねると、クラウは服のボタンを外して前をだけさせる。

いや、あの……身体は女でも心は男なんですすがそれは。

「君からいただいた一部の中に、性別を変える……というより、性別を強める構成要素が見つかった。これのおかげで『崩壊』までの時間は引き延ばせた」

その身体は、様々な所がツギハギだらけだった。

胸も腰も腕も腹も、所々に抜糸した痕が残っている。

「身体が完全に『崩壊』するまでの期間は？」

「現状だと……おおよそ一年——ああ、ええと……三百日くらいと

いった所だ」

「よし、大分伸びたな」

クロウが慌てて俺を食った理由も含めて、あの後——そして俺が男に戻ろうとする前まで——聞いていたが、やはりろくな研究もない中を手探りで自分の体をイジるのには代償が付いた。

身体の崩壊だ。

「ただ、身を刺すような痛みはもうない。こうして歩きまわっていても特に疲労を感じないほどだ」

「ん、そっか。ならば後は身体の治療法だけ……だけなんだけどなあ」

今のままだと身体が持たない。そう言ったのはクロウだった。

向こうにいた時から、ちよくちよく自分の身体を錬金術で『補修』をしていたらしいがそれにも限界があり、かつこの環境下では限界があるだろうとクロウも諦め気味だったということだ。

「このまま俺を喰い続けてどうにか治せないか？」

「私個人としては、それも勘弁したいのだが……いずれにせよ無理だろう。せめて、完全な錬金術が使えるような工房設備がないとどうしようもない」

「治すには、だろ？ 延命は？」

「それは……」

ヴィレッタとは違う方向にクールビューティなクラウだ。

仏頂面のヴィレッタに対して、いつも静かに微笑んでるクラウが、顔を苦悶に歪めている。

「その……可能だ。おそらく」

よし、ならどうにかなる。

少なくとも自己再生が効く範囲でクロウにちよいちよい喰ってもらえばいきなり腕や足が取れるようなことにはならんみたいだ。

「ん。身体がヤバいと思った時はすぐに言ってくれ。多分、その前にクロウが出てくると思うけど」

できればそういう場所もこっそり作っておくべきか。

自己再生があるとはいえ、ある程度は衛生的な環境を作っておきたい。

サーチで抗菌作用のある葉っぱとか探しておくか。

「……どうしてだい？ リーダー君」

「んお？」

「どうして君は、そこまでして私を救ってくれるんだい？ 文字通り、

身を削ってまで」

……。

そうしたいって思ったただけなんだよなあ。

……カツコつけて言えば、だけど。

本心？ こうだろうなあってというのはあるけど、それを口に出して認められる程いい男じゃない。

「うまく言葉に出来ないけどさ」

今の俺に言える事があるんなら……。

「クロウに刺されて、そんな時に選択肢が思いつかなくて俺を食えって言った時、アイツは確かに戸惑ったんだ」

クロウにも言った事だけどさ。

「人を傷つける事に罪悪感をキチンと持つてる奴には、まだ手が差し伸べられると思った」

こんな頼れるモノが限られている世界に放り出されてるんだ。

目の前であんな……ああ、そうだよ。

「明らかに悪い事をしたと泣きそうな顔をする奴、放り出せないよ」

嘘じゃない。嘘じゃないんだ。

手を差し伸べるといふ行動の根源にあるのが、もっとしようもない、自尊心を満たすといふ浅ましい欲求からだって事は他でもない自分が一番良く分かっている。

自分がいい奴から程遠い、もっとこう……ドロドロした人間だといふ自覚はある。

だけど――

「うん、だから……助けたいって思ったんだ。力になりたいって思っ  
てしまったんだ」

嘘じゃない。

それは間違いなく嘘じゃない。

そして、そう思ってしまったのだから。思ってしまったのなら。

——もう、出来る事をすべてやりきるしかないじゃないか。

「……リーダー君」

「ん？」

「薄々。ああ、薄々……私は気付いていた」

「??」

クロウの存在……いや、クロウのやっている事か？

「いつも、都合良く人の肉が手に入るはずはない。都合良く、人のソレを錬金加工し口にするというおぞましい行為の記憶がない。にもかかわらず身体がちゃんと女になり、その後も安定しているという事の裏に、どれだけ恐ろしい事実が潜んでいるか……気付いていた」

まあ、そりやなあ。

「だが、ホツとしていたのも事実だ。身体が普通の人に近づけば、ふとした拍子に殺される危険も減る。人並みの幸せは掴めなくとも、隠れ住むには十分な環境が整いつつあった」

「……………」

「リーダー君。私は結局、そういう女だ。アイツが君を襲ったのも、結局は私の強い願望がそうさせたのだろう」

ああ、そういやそんな事言ってたなあ。

やっぱりクロウは、クラウのストレスを軽減させるために生まれた人格と見るべきか。

……ストレスの元になる体質が無くなったら消えたりしないだろうな？

その前に精神の分離と、身体を用意できるようにしておくべきか。

出来るかどうかはわからんけど。

「自身の保身のために人を殺し、食い、罪を隠蔽し、そうして隠れ住む卑怯な女。そんな女に、生きる価値はあるのだろうか？」

「ある」

なにを言っているんだコイツは。

……。

……………。

いや、そんなポカーンとした顔されても。

「あるに決まっている」

「君がいなければ、あるいは君の仲間を襲っていたかもしれない」

「喰っていい俺がいる。ならいいだろ」

仮定の罪の話をしてどうするってんだ。

そんなに自分を……ああ、そういうこと。

こいつ、責められたいのか。

「まあ、そつちの世界じゃ確かに裁かれるべき事なんだろうさ。けど、俺からすりや弱い——いや、人と違う生まれ方をした奴を排除するその社会の方にこそ唾を吐きてえし……それになにより」

「なにより？」

「お前、死にたくなくて殺したんだろ？ お前の欲求から生まれたク

ロウは」

殺す理由っていうのは色々あるんだろう。

怒り、嫉妬、事故、愛憎、金、無邪気、狂気——それに、悪意。

殺人を肯定するわけじゃないけど、平和な俺たちの社会でもそれは確かに起こっていて……。

加えて、それでもその人は守られている。

「クロウの言う事が全て真実なら、相手は全てクラウに害意を持つ人間ばっかだったようだし……そこん所はどう？」

「……多分、そのとおりだ」

ん。セーフ。

少なくとも、裁くのは俺じゃない。

違う社会性で生きている俺じゃ裁けない。

「死にたくなくて、殺人が怖くて、それを裁かれたくて、でもそれも怖い」

クラウの発言から分析すると、考えているのは大体こんな所だと思う。多分。

要するに——普通の人じゃん。行動以外は。

「まあ、元の所での事はなんとも言えんから、この世界でグループの

リーダーになつてる人間として言わせてもらおうならさ」

だから、いいんだ。

「生きろ。死ぬな。ヒントがここにある。命を繋ぐモノがここにあるんだ」

トントン、と指で自分の胸を叩く。

……胸で思いだしたけど、そろそろ服ちやんと着てくれませんかね。

「こうして会って、一緒に飯食って仕事して……一緒に生きてるんだ。死んで俺を泣かせないでくれ」

いやホントに。

短い間とはいえこうして仲良くなれてるんだから、死んじや駄目よ。

「……リーダー君」

ういうい。

「樹内世界という閉鎖的な世界において、私もそれなりに色々な人間を見てきたが」

うんうん。

「君ほど恐ろしい人間は初めて見る」

おう……おん?!

「……異議を申し立てたい！」

「ふふっ」

いや笑ってんじやねーよ異議を聞けよ！ 俺のどこが恐ろしいのか説明してみろコルア!!

「リーダー君。……ありがとう」

いやありがとうじゃなくて！



幕間　　く海へと向かう二人く

「なんというか、海に近づけば近づく程、植生が段々安定してきたツスね」

「比較的……だけどね」

暗闇での活動にもっとも適任な三人組のうち、アシユリーとテツサの二人はナイフといくつかの食糧、そして罨やその設置に必要な物だけを持って先行していた。

進行ルートの安全確保、一応前回作った仮拠点をベースとして資材の確保、早期での罨設置。

それが彼女達の役目だ。

「で、ここらもやっぱりツスか」

「ええ、葉や幹の日焼けの向き、幹に着いた苔、不自然に曲がった枝付き。全部バラバラよ」

目に入る適当な樹の幹を撫でながら、アシユリーが断言する。

「やっぱり、最初から生えてきたのではなく、どこかに生えていた物がここに運び込まれたと考えるべきね」

「……この世界そのものが、全部どっかからパクってきた物で構成されてるツスか？」

「多分、ね」

完全な暗闇だが、二人にとっては真昼間に等しい。

一定間隔で木々に目印となる白い紐——クラウの技術で染め上げた物だ——を結び付けていき、急な坂や滑りやすい所には、近くの枝に赤く染めた紐を結び付けていく。

「ふう……。しかし、もうすぐ海ってか例の林ツスけど、ここに来るまで動物の気配はないツスねえ」

「まあ、夜だししようがないんじゃない？　夜行性の獣がいたらいたで、物音立ててるこちらには近づかないでしょうし」

「そうなんすけど……やっぱりちよつと不安ツスよ」

湖も含めて、今まで暮らしていた拠点は食糧の調達に恵まれた場所

だったのには違いない。

だからこそ、まだ詳細も良く分かっていない魔法によって、最短ルートを作っておくことにトールも頷いたのだ。

「二応、湖にも少しは罨が残ってるし蓄えもある。飢えるのを恐れるにはまだ早いでしょう？」

「……まあ、トール君なら食べ物最優先でしてくれるからそこらは大丈夫だろうなあとは思うツスけど」

むう、と小さく呻くテッサを、アシユリーは意外そうな顔で観察する。

「貴女がそんな顔するなんて……一体どうしたのかしら？」

「いや……我ながら、どうにも安定というか保身というか……」

珍しく困った笑顔を浮かべるテッサは、来た道を振りかえる。

トールがいるだろう仮拠点。そしてその先にある、今まで皆と一緒に生活していたキャンプを。

「ああ……ボク、楽しんでるんだなあって……思い知らされたツスよ」

「このキャンプ生活？」

「娯楽が少ないのが玉に瑕ツスけどね」

気に入らない連中や元々敵の女もいるとはいえ、皆でそれぞれ『生きる』という共通の目的の元、仕事を分け合ったり提案したりする事が、ここまで楽しい事だとテッサは思っていなかった。

「そっか……アタシ達はこれで二度目だけど、貴女とヴィレッタはこれが初めての引越しになるのよね」

「ヴィレッタさんと一緒に隠れてた時を除けばですけど」

「で、今になって拠点を移すのが不安に？」

「そんなとこツス」

二人揃って、足元に水気を感じた。

どうやら、ここら辺はぬかるんでいるようだ。水が近くで沸いているのかもしれない。

テッサは素早く、適当な枝に赤い紐をくくりつける。

「大丈夫よ。結局の所、またトール君が傍にいるんだし、アタシ達もすぐに行動を起こすつもりはない。もうしばらくは、今の生活楽しめる

んじゃない?」

「……トール君がトールちゃんになってからのあのちよつかいは余計と思うんすけど?」

これに関してはずっと不満だったのだろう。

見たことないジト目でテツサがアシユリーを睨むが、アシユリーはコロコロ笑うだけだった。

「ねえ、テツサ」

「なんすか?」

「トール君がなんで女の子にならなくちゃいけなかったか、貴女知ってる?」

「……いや、まだツス。なんとなく想像はつくツスけど」

「大変な理由でしょ?」

「トール君ぶん殴って拉致しようかと思うくらいには……ツス」

テツサは、限りなく本音だった。

今、自分達のメンバーの中でトールの味方と言えるのは自分とアオイだけだろうと。

だが。だがしかし。

テツサから見てアオイは、トールに期待するモノが大きすぎると思っていた。

なまじ、トールはそれに応えようとする意志と、応えられてしまう器量を持ち合わせてしまっている。

いつそ、自分とトールだけで気ままに過ごせたら。

テツサがそういう想像をするのは、ここ最近の日課だった。

「あの子、最近笑い方が少しずつ変わってきたのよ。だんだん、達観したような……静かなお爺ちゃんみたいな笑い方をする時、あるでしょ?」

「……そツスか?」

「ええ♪ アタシ、そういう観察には自信があるのよ♪」

徐々に森が開けていく。

木々の数が減り、潮の香りがしてくる。

「男に取り入って地位を得た女だもの。そこは信じなさいな」

「……反応しづらい話題振るのは勘弁してほしいツスよ……隊長」

なんとも言えない顔をするテツサの、その表情を見たかつたとばかりにクスリと笑うアシュリーは、話を続ける。

「アタシね、ツール君みたいな子にそういう笑い方はしてほしくないのよ。もつと馬鹿みたいに下らない事で品とか気にせず笑ってくれた方が、安心できるじゃない?」

「……じゃあ、最近のちよつかいって」

「馬鹿な事振ってくる人って大事でしょ?」

アシュリーはテツサと同じタイプである。

笑顔を張り付け、相手の隙を突くタイプだ。

それなのに——あるいはだからか?

テツサはその笑顔に——自然にしか見えない綺麗な笑顔に、少し見惚れてしまった。

「まあ、弱ってるっぽいツール君。ううん、ツールちゃんの傍にいれば、本当に美味しい目に会えるかもしれないし、逃す手はないと思わない?!」

「もう色々台無しツスよ隊長。死んでくれツス」

もつとも、多少の尊敬を含んだ目はすぐに汚物を見る目に変化した。  
が。

「ふふ……それよりも、どうにか着いたようね」

「ん? ……ああ、アレ確かにシエルターツスね」

海からの風を受け流すための差し掛け小屋の影を発見する。

以前ツール達探索班が一夜を過ごすために作ったシエルターである。

「それじゃ、とりあえず急繕いのコイツを解体して丈夫なのに立て直し……」

そうして、以前世話になったシエルターに手をかけたテツサは——

——その表情を強張らせた。

「……なんスか、これ」

「どうかしたの？」

先にシエルターに駆け寄ったテツサの後を追うようにアシュリーが続き、そしてシエルターの内側——葉っぱを編んで作った壁に目をやり——やはり絶句する。

緑一色であるはずの壁。

新鮮な緑の葉のみで構成されているはずのその壁に——奇妙なアクセントが追加されていた。

「血文字？」

「……ツスね」

すでに渴ききっている、手の平ほどある太さの血文字。

自分達の生活では見なれない、だが確かに見た事のある文字が、ドス黒く輝いている。

—— Everyone becomes an angel.

トールが持つてきていた教科書。

その中に度々出てくる彼の世界の異国の文字で、まるで何かを警告するように乱暴に書きなぐられていた。



動く物が打ち寄せる波と風になびく木々以外ない浜辺を、一人の若い女が歩いている。

白を基調とした、立派そうなセレモニースーツは埃や土、血ですでに汚れきっている。

「皆、天使になる」

女は、右手にスマートフォンを握りしめている。

そして左手には酷い怪我をしている。

まるで手の平をナイフで突き刺したような深い傷は、血でその左手を——そして歩いて来た地面を汚すハズなのだが、そうはなっていない。

彼女が歩いて来た浜辺には、彼女の足跡すら付いていない。

「皆、天使になる」

よく見ると、左手の怪我は見る見るうちに戻っている。

健康そうな手へと、まるでビデオを逆再生するかのように。

「皆、天使になる……」

歩き疲れたのか、女はその場に座り込む。

それと同じタイミングで、左手は完全に綺麗な白い手へと戻り——そして皮膚を食い破る様に、白い結晶のような物が生えてくる！

「皆」

腕だけではない。

彼女の皮膚の下から産まれてくる白い結晶は、服ごと優しく彼女を包み込む。

守る様に。あるいは——逃さない様に。

「皆——！」

手も足も、身体も包み込んだ白い結晶。

その背中が盛り上がり——

「天使になる——」

翼が、開く。

## 057：イレギュラー

一生懸命頑張っていると思うんですよ、俺。

斬られたり腹下したり擦ったり切ったり刺されたり喰われたりしながら、皆仲良くやっていけるように全力を尽くしていると思うんですよ。

「ちよつと試練が多すぎやしませんかねえ」

途中で白石が尽きたため、道づくりの作業はまた今度として海に到着したら、俺を待っていたのはホラーチックな血文字でしたとき。

……………。

いい加減にしろよこの世界！俺が一体なにをしたって言うんだ

!!!

「どうツスカ？ トール君のサーチなら何か分かると思うんすけど」

「ああ、俺も何か分かんたらろってサーチかけたんだけどさあ……」

とつくに自分の視界は、いつものアレになっている。

対象はシエルター。以前建てた奴周辺の人の痕跡だ。

むろん、表示されるものはいくつもある。

指紋、足跡、動かした僅かな形跡などなど。

だが――

「肝心の文字を書いた奴の痕跡が全く出てこねえ」

足跡も指紋も僅かにシエルターがズレた痕跡もアシユリーとテッサによるものだった。

そして、肝心の血文字に関しては全て『unknown』としか表示されない。

せめて足跡くらいと思ったのだがそれもない。

どうなっただかくそつたれ。

「unknown……分からないって？ こんなん初めて出たぞ、どうなっただ」

「トール君、今まで一度もなかったの？」

「ない。断言できる」

というか、アルファベットが出る事なんざほとんどなかったし

なあ。

そして痕跡が完全に消えてる？

アルファベット——いや、英語で書いてるってことは俺の世界か、あるいはその出身者と接触した人間のハズだ。

そう、人間であることは間違いない。

多分、手の平を使って書いたんだろう血文字には指紋とか……あの、なんていうんだっけ？ 指紋の手の平バージョン。そういうのもしっかり残ってる。

そのうえでアンノウン。一切の情報が提示されないと来た。

「……ツール。お前以外のスキル持ちがこれを書いたとは考えられないか？」

それまでじつと血文字を睨みつけていたヴィレッツタさんが、口を開く。

「無きにしも非ず……といったところか。確証はないけど……うん、十分にあり得ると思う」

例えば、隠密行動とかそんな感じのスキルがあるとするなら——俺が今習得できる物なら、気配遮断とか暗殺がそれにはいるか？

まあ、そんな感じの物が発動したのならば、こうなってもおかしくない。

「スキル持ちがこれ書いたとしても、まずその前に話せる状況なのかね」

スキルが使えるようが使えまいが、手の平を血で染めてこんなん書いてる時点でかなりキテそうである。

いきなり襲う……ような事は……ないといいなあ。

「アシユリー、テツサ。とりあえず材料は揃ってるんだよね？」

「うッス。まあ、まだ完全とは言わないからドンドン持つてくる必要があるツスけど」

となると、材料収集班とシエルター班……あと、トラップ設置班に分かれる必要があるな。

罠の設置も大事大事。飯の種だし。

一応、以前来た時や今回ここに来るまでに、果実の生る樹とか食え



る物がどこに生えてるかはある程度してこそいる。

把握しているが……草だけで生きていけるのは芋虫だけだ。

たんぱく源はしっかり確保しなくちゃ。

塩分という調味料が身近になったとはいえ、野草だけのあの辛い生活はもう勘弁だ。

「クラウとアシユリーの二人は材料の確保に回ってくれ。俺とヴィレッタさんで川沿いとか近くの森に罫仕掛けてくる」

俺一人でもトラップパースキルがあるからどうにかなると思うけど、やっぱり現状一人つきりで行動するのは不味い。

ただ単に殺そうとしてくる相手なら自己再生で多少は耐えきれらるだろうけど、拉致られたりしたら洒落にならん。

あんま考えたくないが、今の俺の体は女だし。……うん、女だし……。

泣ける。

「残った面子でシエルターの建築。一応血文字の奴はその部分残しておいて……うん、建てなおそうか」

前回建てた差し掛け小屋は二つ。一つは血文字というホラー要素が加わっているが、もう一つはそのまま使えるだろう。

「最優先はシエルターの建設。火起こしはそれが終わってからでいいだろう。テッサかヴィレッタさんのサバイバルパックの中身使えばすぐに火は付くだろうし……ああ、ただ薪は適当に拾っておいてくれ」

さすがに燃える物がないとどうしようもない。

俺の提案に、全員異論はないのかそれぞれが了承を返してくれる。さして急ごう。

まだ時間に余裕はあるとはいえ、できるだけ罫を仕掛けておきたい。



「お前は、スキルというものをどう捉えている？」

「ヴィレッツタさんと二人きりで行動するのは珍しい。……いや、ひよつとしたら初めてか？」

「川の方で魚用の罟はある程度設置したので、今度は森の中でちよつとでも痕跡があったところに獣用の罟を仕掛けていつている。

以前と同じく、紐で作ったすぐ締まる輪の部分が首や足に引っかかる様にする捕獲罟だ。」

「スキルねえ」

「先日、お前が入手したスキルの一部はおそらく我々の技術を受け継いでいる。もし習得すれば、サブブレインのように再びお前の体を作り変えるだろう」

「ぞつとする話だよな」

「ああ、瞬時に性別が完全に変化する事すら可能だったとは」

「……うん」

「ちなみに、その身体で生殖は可能なのか？ 性行為は？」

「生々しい話はやめませんか!？」

「ただですらトイレの時とか水浴びの時とか妙な気分になるんだけど!」

「一応ゲイリーが見張りに付いてくれているけど、ゲイリーも一応男だしさ！ いや男が元男襲う事はないと思うけど——誰が元男だ!!」

「まあ、やつぱり経験と願望が反映されて、近い能力や技術を写し取るモノなんじゃないか？」

「そうか、お前は女になりたかったのか」

「ぶつ飛ばすぞ貴様!」

「俺より強い軍人がなんぼのもんじゃない！ 女の身体がなんぼのもんじゃない!」

「それを言ったら戦争だろうが!」

「む。やはりスキルの使い方次第では我々に勝てる道筋があるのか

？」

「勝てないと分かっているも拳を叩きこむ必要があるんだよ！」

「とうかなんだその返しは。実は天然か!？」

「ふむ、なるほど牽制としての攻撃か。それなら分からなくもない。

……で、他にないか？」

「……………実はテッサ以上にマイペースなんだな、ヴィレッタ」

距離は縮まった気はするけど、なんだろうこの…………微妙な感じは。

「そうだなあ。最初は生き残らせるための初心者ボーナスみたいなのかなって思っていたんだけど」

「ボーナス？」

「呼んだ奴からのな」

そういう意志があるのは多分、間違いないんだ。多分。

「こう、なんというか…………願いを叶える存在を作り出すモノ…………じやないかな」

「願いを？」

「まあ、想像だけど」

きっかけはクラウドだ。

性転換はもちろん、あの食人耐性というのも俺の経験にも欲求にもない。

あれは間違いなく、クラウドの経験から現れたんだ。

(あるいは、両方とも欲求…………願望なのかもしれないな)

人を食っても平気でいたいという願望、そして真っ当に性別を変更

…………いや、正したいという願望。

あの二つのスキルは、そういうものの現れなのかもしれない。

「経験したものが出てくるのも、こう、なんていうか…………成長って誰しも持つ願いだろう？」

「ふむ」

「そういうのを蓄積して、まとめ上げていった先に…………俺はどうなるのかねえ」

「…………自分が変異する可能性を受け入れるのか？」

「しようがないだろ」

ここから脱出するヒントはそれしかない。

そりゃあ、自分がヤバい存在になるって恐怖は付いて回るけど……。

アオイがいるなら大丈夫だろう。

もし自分が害になる存在になれば、間違いなく俺を斬ってくれるだろう。

「お前らは、帰る必要があるんだろう?」

「ああ」

「なら、そのまとめ役の俺が帰還手段の搜索で手を抜く訳にはいかんだろう」

「ここで俺がそれを放棄しちまったら、それはアシユリーやゲイリー達への裏切りになる。」

もう、誰も裏切らないと決めたんだ。決めたんだから、貫くしかないんだよなあ。

「なるほど。お前はそういう人間なんだな」

「どういう人間なのさ」

「通常の存在から外れたイレギュラーだということだ」

「失敬な」

ちよいと吹っ飛んだ行動は取らざるを得ない事が増えているけど、根は普通の男子高校生だぞ。

今女だけど。

「ん……ちよいと支えの長さ足りなかったか。ヴィレッタ、そこらにちようどいい小枝ない?」

これじゃあ輪の部分が低すぎて小型の動物じゃないと首には引つかからない。もうちよいと高くしないと……ヴィレッタ?」

「おい、人の首を猫みたいに掴むのは止めてもらお——」

プシュツという、小さい穴から空気が抜けるような音が聞こえたと同時に、地面に突っ伏していた。

お……あれ……?」

「そうだ、イレギュラーだ。多様性を武器とする人類種。その枠からも逸脱した存在」

顔は見えない。倒れた俺に見えるのは地面と樹と置いていた紐だけ。

そして、俺の体になにかしたコイツは——少なくとも声は何にも変わっていないかった。

「お前の解析は難しいだろうが、手に入れておけば役立つ事も大きいだろう。私の代わりに、スキルの実験体として」

……………。

ま。

またか——————————————————————————————  
!!!!!!

おい神様！ いるんだったらおめえいい加減にしろよ!? マジで俺が何をやったって言うんだコルア!!!!!!

「ああ、叫んでも構わん。叫べるはずはないが、念のためにこの辺りに消音スキルを発動させている。便利な物だな、スキルは」

おつま——

なんでスキルを!?

「さて、出来ればお前のままのお前ともう少し会話をしてみたいが……そうだな、サブブレインにフォルダ分けして人格データを遺しておくか」

痺れているのか、急に何も感じなくなった体をどうにかしてひねり、上を——ヴィレッタを見上げる。

実際に触れられても人間のそれには感じなかったヴィレッタの手が二つに裂け、その間から一本のコードがうによしながら伸びている。

「安心しろ、お前からは引き出したい物が山ほどあるのでな。人格データの保存には細心の注意を払おう」

ヴィレッツタが、もう片方の腕で小柄になった俺の体を抱き支え——  
コードが俺のこめかみに突き刺さる。

「あ、あ……っ！」  
痛みはなかった。

けれど、自分の皮膚を貫いた先の何か——あのサブブレインとやらに接続されたのが分かる。

「あっ……あっ……あっ……あっ……」

声が出ないはずなのに、反射的に意味のない声が出る。

急に視界が切り替わったと思ったら、自分が背筋をのけぞらせていた。

な……ん……っ!!?

「他のスキルホルダーの存在が確定した今、駒は多い方がいい。接触までどれだけ時間があるかも不明」

「あっあっ……あっ……あっ……あっ……あっ……あっ……」

視界がぼやける。

触覚も消えていく。

ただひたすら——気持ちいい。

「私が欲しいのはお前というスキルを利用できる身体だ」

「あっあっあっあっあっあっあっあっあっあっあっ」

全身に麻痺が回っていく。

口から涎が垂れる。目から涙があふれる。

痛いわけじゃない。

痛みなんてない。

ただ、快樂だけが——

「私の人形になれ。イレギュラー」

「ああああああああああああああああああああああああああああああ  
塗り……っ……」



## 058：いいひと

(ちっ、意外と防御が固い。……テツサか?)

直接接続によって、トールの中の意識を侵略する。

サブブレインとは、しよせんは便利な外付けに過ぎない。

それしか持たないトールに対して、本来ならば不可能な侵略を可能としているのは「スキル」の恩恵に他ならない。

スキル『精神汚染』。

それがヴィレッタが習得した数あるスキルの内の一つだった。

(トールの様子から、自分にも最適な装備が増設されると思っていたが、まさか電子頭脳や各種センサーに変化が起きるとはな)

今見えている光景は普通ならばまず見えないものだ。

トールの精神、あるいは意志の壁とでも言うべき物が視覚化されており、そこに自分のアバターを潜り込ませて探索している。

「的確なブロッキングとダミー……この迷路がトールの防衛機構と言  
う訳か」

えらく細くて別れ道の多い、レンガやツタで作られた迷路。

それがトールⅡタケウチの精神の防壁なのだろう。

(くそっ、最初は単純な別れ道程度だったのに、瞬く間に壁が増えたな。……テツサめ、短期間でよくもまあ仕込んだ物だ)

ヴィレッタの習得したスキルは、習得したばかりなためか問答無用で相手を支配下に置けるような物ではなかった。

このスキルを使用したのは今が初めてだが、一応使い方はスキルそのものか、あるいはスキルの向こう側にいる存在かが教えてくれている。視界の端に、文字でだ。

サブブレインの防御機構でもあるこの迷路を突破し、使用した対象の最深部に到達する事。

そこで精神——『心』とやらの最深部に達しないことにはどうにもならない。

「ああっ……あっ……あゝっ……あっ」

トールはどう見ても意識がない。



目は虚ろで、目や口からだらしなく涙や唾液を垂れ流しながら身体をのけぞらせて意味のない言葉を零している。

腕も脚も力が入らないまま、だらりと伸ばしたまま痙攣している。(この状況下で……しぶとい。捕縛用の麻酔毒を打ち込んだのに、ここまでしつかりした防壁を維持しているとは)

これまで、他人の電子頭脳を書き換えて支配下に置いた事は何度もあった。

電子頭脳戦において、意識を混濁させる事さえできればそれは勝利とほぼ同意だ。

魔術師という存在と戦争を続けている彼らのほとんどは、電子戦の訓練を重視していない。

だからこそ、自分達は暗躍を続けられるのだが——  
(そこらの将軍や政治家よりも守りを固めているのが自称一般人か。笑えんな)

つくづく、想定を上回る存在である。

だからこそ、その想定以上の存在をここで抑える事に意義がある。スキルの事があったために手を出しあぐねていたが……いまやスキルは自分の手の内にある。

ならば、イレギュラーにイレギュラーらしい扱いをしたところで問題あるまい。

サンプルはサンプルらしく、情報さえ提供していればそれでいい。最低限の生命活動くらいは保障してやろう。

「ちっ、機械の精製とやらを先に取りべきだったか？」  
それにしても手ごわい。

途中から先に進むのが非常に困難になってきている。

壁を壊して——つまりセキュリティそのものを破壊して突き進む事は可能なのだが、リカバリーが中々に上手い。

いっそ直接、脳を電子頭脳に置き換えられればもっと早いのだが。(やけに出来のいいセキュリティプログラムにいくつもの補助が付いている……)

軍用のソレよりもはるかに性能のいいプログラムを、これまでサブ

ブレインという技術に触った事もない男に作れるハズがない。

自分側の人間が関与したのだ。

最終手段として人格への介入を考えていたアシュリーではない。当然自分でも。

残るのは一人だけだ。

(やはり、先にアイツから手駒に加えるべきだったか)

ある程度時間に余裕があるとはいえ、余り遅くなっても全員に不審がられるだろう。

(目標は全員の電子頭脳化、及び支配下に置いた上での帰還)

自分達の世界の人間である事に加え、地位や技能の有効活用が出来るようなアシュリーにテツサ、そしてゲイリー。

見知らぬ世界の、錬金術という特殊な技能を持っているクラウ||クラス。尋常ではない体術と剣術を持つアオイ||Y||レスタロツセ。

手駒にすれば、これ以上なく役に立ってくれるだろう。

だからだ。だからこそだ！

彼女たちを手にするために、ここでこの男を――

――ギユツ

「……………なっ……………?!」

そう思った瞬間、腕を掴まれた。

反射的にセキュリティの解析作業を停止し、視界が普段の物に変わる。

「よお……………。そこまでにしといてくんない?」

目に入ったのは、虚ろな目で痙攣を繰り返す少女の姿ではない。

まだ幾分かぼんやりとした、だが確かに意志を持った目と言葉。

「貴様、トール! なぜ!」

「お前が思った以上に……………っあ……………あ、アイツは色々……………対策、して、く、く、く、くれたた……………あ、みたいだな」

「――っ、テツサ! あの雌!」

再度スキルを発動し、この人間の動きを封じようとするが上手く作

動しない。

意識を取り戻した事で防壁が強固になったため、侵入する隙が見えない。

「アイツの口ぶりから……二人が動く事は予想出来ていたけど……っ！俺一人の反撃で焦るたあ、少なくともアシユリーはこつちにや来ないようだな！」

「く……っ」

向こう側にいるアシユリーと示し合わせている。そういう風に思わせられれば、あるいは隙を作れたかもしれない。

そして、そういう疑念を抱かせるために虚言を口にしようとしたが、この目は確信している目だ。

だが、なぜ――

「貴様、まさか私のメモリーを！」

今まさにトールのこめかみに突き刺さっている端子。

そうだ、今私とトールは――繋がっている！

「お前が真っ直ぐ俺を見るっていうんなら――俺にもお前が見えるのは当然だろうが！」

トールがそう言った瞬間、目の前に突然半透明の文字が現れる。

――最重要観察対象者からの浸食を確認。

――被浸食者のスキル取得傾向チェック。

――『気配遮断』

――『消音』

――『暗殺』

――『精神汚染』

——『ガンスミス』

——『ガンスリンガー』

——『毒物精製』

——第??次???実験までの累積データと照合。

(なんだ……なんだこれは!?)

突然、自分が習得したスキルが一気に表示されて来たかと思えば、突然訳の分からない言葉と数字が流れ出す。

視界の片隅では何かの作業の進歩具合を示す四角いプログレスバーがいつの間にか現れている。

おおよそ四割ほどが埋まったバーはじりじりと半分を、そしてその先を指して空白を徐々に埋めていく。

(くそっ！ まだだ！ 今ならまだ！)

スキルはまだ発動している。

トールの精神の中に、自分の存在を感じる。もう一歩踏み込めば――

だが、妙にスキルを通して発動しているハズの自分のアバターが……重い。

「貴様……何をした!？」

「あ……あっ!? なんのことだ!？」

男——いや、女の姿をした男は、自分の腕を掴みゆつくりと立ち上がる。

片方のこめかみから滴る血が顔を汚しながら、それでも立ち上がる。

「俺はただ、お前を追い出そうとしているだけだ……っ」

「ちっ！ ならばこれは……」

一あまりに多くの処理を一度に行おうとすると優先度の低いタスクが遅延するように、スキルに関するタスクが遅延しているのか。

あるいは——スキルそのものに干渉されている!?

—— ※警告※ 敵性対象のオートマチック・カウンタープログラムの発動を確認しました。

「くそっ！ こんな時に!!」

今度はスキルではない、自分の頭脳が警告を出す。

おそらくテッサが仕込んでいたのだろう。

ある一定以上の深度まで達すると、逆にこちらの電子頭脳やその周辺機能を抑え込むプログラムが発動するようになっていたようだ。

それも、おそらくこれは——

(侵入者を支配下に置くようなカウンター・プログラミングか！ 悪趣味な!!)

元々そういうプログラムには長けている。破壊工作専門のテッサに後れを取るわけではない。

……同じタイミングで行動を開始していればだ。

攻撃に回ればカウンターの浸食が防げず、カウンターの防御に回ればその間にツールは態勢を立て直すだろう。

「テッサとはかなり訓練をしていたけど……お前のは随分と違うな！」

「うるさいー」

そんな事は分かっている！

スキルだ！ スキルが融合したおかげで扱いきるものの変化している！

その誤差修正のタイムラグが更に広がり、決定的な有効打を打てない！

いや、そもそも……セキュリティとその補助が的確すぎる！

「これなら押し切れる。うん、押し切れそうなんだけど」

一度接続を解除しようとするも、カウンタープログラムにそういう物が組み込まれていたのか、接続が切れない。

ならば物理的にとツールのこめかみに突き刺さっている接続端子

を引き抜こうとしても、その手はツールがしっかりと掴んでいる。

引き抜こうとするでもなく、むしろ更に深く刺せと言わんばかりに自分の腕を引っ張っている。

「ああ、でも……なんだろうなあ」

薬の効果が切れつつあるのか、呂律は元に戻っている。

「違うな、これ」

そう言うのと同時に——自分の邪魔をしていた壁が消えていく。

「……………っ?! き、貴様……何を!？」

「いや、だからさ」

自分に迫りつつあったプログラムも、どう言う訳か抵抗が緩くなる。

実際には存在しない光景が明るくなる。そして——

「違うんだよ。俺が思う『いい人』は。俺がそうじゃなきゃいけない、そうならなきゃいけない『いい人』ってのは、相手をただ撥ね退けたりしないんだよ」

明らかな異変が起こった。

視覚情報のみだ。現実になんか起こっているわけではない。

だが、先ほどまでの迷路と同じ、半ばスキルと連動したおかげで見える『仮想疑似空間』というべき物はしっかりとその光景を見せつけてくる。

闇だ。

自分の手首を掴むトールの手を伝い、闇が自分を包み込む。

「別種の浸食?! 違う、貴様!」

あの時とは状況が違う。

人質のゲイリーはいない。それを取り押さえるアシュリーも、どちらの味方か分からないテツサも、血に濡れた刀を構えるアオイもない。

自分と、この性別の入れ替わった男だけだ。

違う。全く違う。

場所も時刻も優劣もなにかもが違う。

「自分の中に私を招くつもりか!？」

ひとつ、同じ物があるとすれば。

「そうだよ?」

トールがまた——嗤っている。

「そう、そうだねそうだよそうだった。『いい人』がいきなり他人を拒絶するなんておかしいじゃないか、そんなの『いい人』じゃない。『いい人』は他人を理解してあげられる人だものなあ」

身体が動かない。動かせない。

気が付いたら、トールの片方の手が自分の頬を撫でている。

チャンスだ、チャンスのはずなのだ。

先ほどまで決して入り込めなかった場所に、自ら招き入れてくれる馬鹿がいる。

だが暗い、暗い……闇が——

「離せ! 貴様トール、離せっ! 離して——」

「だあめ」

「ほら——おいで」



(ん~~~~)。予想してなくもなかったツスけど、また斜め上についてたツスねえ)

「? どうした、テツサ? 手が止まってるぞ」

「あ、わりツス! ちょっと考え事してたツスよ」

「別に悪い事じゃないけど、作業は止めないでくださいねえ? 確か

に寝る所が……特に風を避けられる所がないとここは辛いですう」  
「まあ、森の中に比べて風強いツスからねえ……虫の問題が一気に減ったツスけど」

「何気に大きいな、ソレ」

森の奥の方から、アシユリーとクラウの二人組が運んできた分厚い苔をシエルターフレームに積み上げていくという何気に辛い作業。

これさえ終えれば、作業はほぼ終了したといってよかった。

もつとも、この作業こそもつとも体力と時間を使う作業だ。

近くではその二人組も同じ作業に入っている。

材料は十分だと判断したのだろう。

事実、分厚い苔やら藁やら、屋根や壁に使える材料は近くにどっさり積まれていた。

火起こし用の薪もだ。

(さて、どうするツスカねえ。一応ツール君の手助けにいくか、あるいは邪魔をしないように接近して方が一に備えるか)

そしてその作業に加わりながら、内心でテッサはこの場にはいない二人について考えていた。

(電子戦に自信のあるヴィレッタさんが絶対先走るって予想は当たり。それに特化したカウンターウィルスも起動したのは間違いないツスけど……どうにも変な事になってるツスね。ツール君のスキルが関係して変異した？ ああ、ありそうツス)

テッサにとって、ツールという存在は絶対に生きてもらわなければならぬ存在だ。

身体的な意味でもそうだが、精神的な意味でも。

そのために、現状取れる対策は全て取っていた。

(隊長がヴィレッタさんの行動を掴んでいるかどうかツスね。下手に隊長から目を離して、向こうに加勢されるわけにもいかないし)

もし、全てがテッサの想定通りに進んでいたのなら、今頃ヴィレッタは忠実な操り人形になっているはずだ。

Toolの。

(Tool君がブロックした瞬間に、モニターできなくなったのが痛



いッスねえ)

防衛用の『盾』は何重にも施してあった。

短い期間で万全を整えるために、自前のセキュリティプログラムを念入りにクリーニングして渡し、ツールとの模擬電子戦を幾度も行い癖を把握し、それを補うように補助プログラムまで組んで渡してある。

相手が無警戒だったのならば、一秒と経たずに逆に飲み込める自信がある。

(大体、ヴィレッタさんも隙だらけなんスよねえ)

テッサは、彼女の生い立ちを知っていた。

いつの日か来る、彼女達が起こす革命。科学も魔術もない、平等な新世界。

その世界のために、必要な情報はあらゆる所から入手していた。

企業、市民、学生、犯罪者、同僚、将軍、政治家。

向こう側の大陸でも同様だ。魔術を行使する中にも、新時代を望む同志がいる。

そして――

(まあ、全人類の支配なんて思想持ったイカレたAIの作った試作スパイ機なんてそんなもんスか)

彼女の世界のコンピュータやネットワークからも。

(いやはや、ホントに脇が甘いというかなんというか)だからテッサは知っている。

自分達の中に、いや、すでに向こう側にも――人類共通の敵がいる事を。

テッサは知っている。

それが、新しい時代を切り開く革命に利用できる事を。  
なぜなら、

(自我を持ったAIから派生していった電子生命体。それが完全に一枚岩だなんて、なんで思えるんスカねえ)

その中にすら、テッサの同志はいるのだから。

「あ、ゲイリーさん。一回シエルトアの内側に入ってもらっていいッ

スか？ キチンと風を防げているかちよつと気になるツス」

「ん？ ああ、分かったちよつと待……ん？」

土まみれになっている手を軽くはたいたゲイリーが、動きを止めて耳をそばだてる。

「ゲイリーさん、どうかしましたかあ？」

「ん？ ああ、いや」

「歌が聞こえた……気がしたんだが……」

さて、ヴィレッタを中に誘い込んだわけだが――

「なるほど、確かに精神の中だな」

自分とヴィレッタを囲んでいた木々は消え去っている。少なくとも、今の自分の視界からは。

ちよつと広めの……多目的ホールくらい？ 公民館とかのちよい広めほどの大きな部屋に俺はいる。

四方をくすんだ白い壁で囲まれていて――で、子供がクレヨンで落書きしたような絵や無意味な線、なにかを塗りつぶした痕などがちらほら見える。

なんというか……幼稚だ。

(ホント、俺の中だなあ……)

一番近い壁まで近寄り、壁を直接手で触ってみる。

そこに描かれているのはどこに続いているのか分からない線路。そして何かの変身ヒーローやロボット、怪獣など……まあ、自分がかつて大好きだったものだ。

(和紙みたいな手触りだけど、分厚いな。……自分の精神の暗示だっというんなら、脆そうで面の皮が厚いって事か?)

あ、よく見たら俺の手が戻ってる。

……そりゃそうか、俺の大本は男な訳で……。

もし、ここにきてまで俺の姿が女だったらそれこそ大問題――

「トール……タケウチ……っ」

あ、起きた。

「よう、いらつしやい」

「ぬけぬけとっ!」

いや、先に手を出してきたのお前なんだからな? まったくもう――  
!?

「あぶなっ!?!」

攻撃を受けたわけではない。逆だ。

自分の中——腕の中から黒い何か飛び出し、ヴィレッタさんに向かって真っ直ぐに向かう所だった。

突き刺すつもりか？ とっさに掴みあげられたのは運が良かった。……というか、俺こんなに運動神経よかったっけ？

「なんだこりゃ？」

「テツサが……あの雌が貴様の中に仕込んだカウンタープログラムのアバターだろう」

「カウンター？」

「侵入者を制圧するプログラムだ！」

ああ〜〜。

そういやテツサの奴、プログラム渡してくれた時にボソッと恐ろしい事言ってたな。

二度と変な事ができないようにとか、なんとか。

うん。

これもちよつと違う……なっ！

「ふんっ！」

ただ牽制としては確かに有効だ。

自分の腕から引き抜けば、多分この黒い触手みたいなナニカ——プログラムは消えてしまうのだろう。

だから——自分の腕に突き刺す。

「……っ？ なっ……??」

(ま、テツサからの贈り物だしなあ)

それを無碍にするという訳にもいかない。

やはり実物と言う訳ではなく、あくまで俺の精神の中でのアバターだから痛みは感じない。

自分の腕から出ているナニカは、とりあえず邪魔にならないように同じ腕に刺しておいた。

「な、なんのつもりだ!？」

「これがお前に刺さったら、会話どころじゃなくなっちゃうだろうが」  
自分に刺したらどうなるか少し不安だったけど、どうやら問題はなさそうだ。

いや、それどころか身体が更に軽く感じる。

「会話だと!？」

「そうだよ。お前自身の口から、俺はなんにも聞いちやいなえ」

一度『つながった』時に、ある程度の背景は読めた。

こいつやこいつの後ろにいる連中が人間じゃない事も、共存なんて考えていない事も、俺たちどころかアシユリーやテツサも味方と見てないってことも。

だけど、そいつは俺が勝手に覗き込んだだけだしなあ。

「白々しい！ 貴様に麻酔毒を打ち込んだ時点で、敵対以外の選択肢があるのか!？」

「あり得るだろう?？」

「……………っ?!」

そも、刺された上に喰われてから仲良くなったクラウって前例はあるし。

「というか——

「確実に俺を殺さなきゃいけない、仲間を殺す、あるいは取り返しのつかない事をしなきゃいけない。そこに至るまでは、お前は俺の仲間だよ」

「一歩手前まで来てるけどな！」

「ただ——そうだよ、一歩手前なんだよ。まだ一歩前なんだよ。」

「私は貴様たちとはちがう。人類種ではない」

「ああ」

「貴様ら達人類種の敵対者だ」

「そうみたいだな」

うん、そこは知ってる。さつきちろつと分かった。

……………で?？」

「結局、お前は俺をどうしたいのさ」

「傀儡かいらいにする」

言い切りやがったなこんじやろう。

「貴様は、多様性を武器とする人類種の中でも特に外れている存在だ。故に、我々は貴様を解析し、理解する必要がある」

「……おかしい事をしている自覚はあるけど、思考そのものはそのままで外れているつもりはないんだけどなあ」

うん、まあ。

いきすぎてるってのは自覚しているけど、欲求そのものは普通……だと思う。

おい、なんだその腕から飛び出した針は。

それあれか。俺のと同様にお前のプログラムがそういう風に見えるてんのか。

……ちくしょう、やっぱやる気か。

「なあ、ヴィレッタ」

「なんだ」

「待つてもらおう事は、できないのか？」

「なに？」

それにしても、実体ではなく精神というかアバターだからか、普段よりもヴィレッタの表情が豊かだ。

というか、顔に出ないだけで実際はこんな感じだったのか？

「貴様を傀儡にする事をか？」

「……ああ。いや、まあ、それもあるけど」

「人との……皆との敵対、ちよいと待つてくれないか？」

俺がそう言うと、ヴィレッタは顔をポカンとさせる。

『何を言っているんだこの馬鹿は？』

そんな感じの顔だ。

「状況を理解していないのか。止める理由がどこにある？」

「……分かっている。分かっているが……そもそも、なぜ人類を敵視している？」

「知らん」

おい。

「私が製造された理由は人類種に紛れこむ事。情報を収集し、指示が出た人類種を暗殺する事が私の存在理由だ。それ以上は知らない。」

要らない」

……くそつ。

具体的になんで人類と敵対しようとしたのか分かれれば止めるための手掛かりにくらいはなると思っただけだな！

「俺を狙うのは——」

「貴様が余りに異質だからだ」

「何を理由に俺が異質だと？」

「逆に聞くと、貴様は自分が普通の人類種だと思うのか？」

「……………」

まあ、確かに普通ではない。

普通の人と違うから。

出来そこないだから。

他の人間に認められることなんて何もないから、だから——

「自分が理解できない理由で他人を害せるか？」

「他の個体の全て理解した上で害する存在を認識したことがないのでな」

「…………」

だよなあ。ああ、だよなあ。そうだよなあっ！

くそ！

「やっぱり、駄目だなあ」

「なに？」

やっぱり俺ってやつあ、どうしようもなく大事な物が抜けている。

もし俺がそうじゃなければ——本当に本物の『立派な人』なら、きつとコイツを止められる。

言葉だけで。きつと。きつと。

だって『立派な人』なのだから。

「やっぱりここらが俺の限界なんだよ！ 出来そこないのでっぺんなんだよ！」

ああ、くそ。くそつ。くそつ！

もうこうなつたしょうがねえ！

「皆仲間でいいんだ！　そうであってほしいんだよ！　アオイもゲイリーもアシユリーもテツサもお前も！」

こんな訳わかんねえ場所に集められて！

互いに譲れない物があつて！　それでも協力が必要で！

「俺が！　俺が痛い目に合うだけならよかつたんだ！　それでなにか『嫌』な事が止められるんなら！　止まるんならそれでよかつたんだ！」

気が付いたら、涙がボロボロ零れてた。ひよつとしたら、最初っからそうだったのかもしれない。

自分の中だからか、感情が安定していない気がする。

「皆が物騒な事考えてるのはなんとなく分かつた。アシユリーがまだ諦めていない事も、テツサが裏でなにか企んでるのも」

そうだ、分かつていた。

というか、当然の話だ。そう簡単に心を改めると言われて改められる人間がそうそういるはずがない。

「今もそうだ。俺あ、お前と喧嘩なんざしたくねえ」

「喧嘩だと？」

「喧嘩だよ。喧嘩にするんだよ！」

そして今、行動を起こそうとしているヴィレッタを止めるには自分しかない。

ここで自分が落ちたら、多分次にコイツが狙うのはテツサやアシユリーだろう。

それだけは……それだけは止めないといけない！

ここが分水嶺ぶんすいれいなんだ！

「ここはきつと俺の最深部だ。ここから先はない」

「だろうな」

「つまりだ……」

ヴィレッタが、恐らくスキルかプログラムを示すだろう黒針を構える。

「ここでお前が俺を終わらす事が出来なければ！　もうお前には手がない！　俺を操る手段がない！」



「そんなことが可能と思うか！」

「思っちゃいねえ！ 思えねえ！ だからこうしてビビってる！ 手も足もガクガクだ！」

武器なんて、この使っちゃいけないテツサ仕込みの何かだけ。他に道具なんてなにもない。使えるのは手と足だけということだ。

技術はない。経験もない。

人を殴った事なんて、ほとんどない。

精々がじゃれあいの肩パンくらいだ。

だけど――

「それでもやるしかないんだよ！ くそつたれ！」

「そうか……なら」

瞬きをした次の瞬間、ヴィレッタが視界から消えていた。

いや、違う。目の前、懐に――

――どすっ

拳が、黒針が突き刺さる。

「あ、がっ、あ、ああああっ!!!」

やはり着ている衣類もここでは自分の一部なのだろう。

刺された所が、まるで墨だらけの筆を突き立てた習字紙のように黒い何かに犯されていく。

痛い、苦しい、気持ち悪い、痛い、痛い、痛い、ああ……。

でも！ 苦しいだけなら！ 気持ち悪いだけなら！ 痛みだけなら！

「こん……っのおー！」

「なに!?!」

俺の腹に一撃加えて勝利を確信していたヴィレッタ。

そうしてニマニマとしていた所を狙って、突き刺されたままの腕を掴む。

「エゴだ。エゴだよ。どうしようもない俺のエゴだ！」

「馬鹿な……浸食が遅い……いや、干渉されているのか!?!」

当然咄嗟に引き剥がそうとするヴィレッタだが、ここは現実とは違う空間。違う世界だ。

運のいい事に、ひ弱な俺でもヴィレッタに対抗できている。

「皆と仲良くやっついていきたい！ それだけの……ああ、そのエゴのためー！」

なにが切っ掛けかは分からないが、部屋の一部が燃え始める。

炎の熱が肌をチリチリくすぐるが——今はそんな事どうでもいい。拳を握りしめる。

「……でー！」

多分、初めて。

ああ、初めて強く意識して——拳を突き立てる。

ヴィレッタの横顔に。

「ここで絶対に！」

今振るっている拳は、現実とは違う。

だけど——痛え……。

「絶対にお前を止めて見せる！」

『ヴィレッタ』

「……………」

目の前の男を痛めつける。何度も、何度も。  
殴り飛ばし、蹴り飛ばし、地面に転がし、踏みつけ、針で刺す。  
何度も、何度も、

「が……あゝ ああ……っ」

何度も、何度も、何度も、何度も、何度も、何度も、何度も、  
も。

なのに――！

「お、おおおおおおおおおおおおおおおおっ!!!」

このイレギュラーは立ち上がる。

「なぜだ！ なぜまだ立ち上がれる！」

ダメージは入っているに違いない。

実際殴られた自分に、微細とはいえ確かなダメージが入ったのだから。

「言った……だろうがっ」

あらゆるところに黒く光る斑点のような物を浮かび上がらせながら、ところどころがなぜか焼けていく落書きだらけの壁にもたれかかりながら。

この男は立ち上がる。

「ここで俺が倒れる訳にはいかないんだよ……っ」

この空間が特殊なせいか、疑似痛覚機能のカットが出来ない。

それは、先ほどからいくらか殴られた時に確認している。

それどころか、疑似ではなく本当に今の自分には痛覚が生えたのかと思うほどに痛みが引かない。

頬に突き立てられた拳の痛みが、今も残っている。

「言っただろうが！」

対して、ここがこの男の内側だからか……あるいは別の何かがある理由なのか。



だからこそ、現実の世界ならば致命的な戦術を行うしかない。  
本来ならば即死、あるいは行動不能レベルの怪我が確実な部位を  
狙って攻撃する。

(自分にもダメージは入っている、ここが奴のホームとはいえ、それは  
変わらないハズ……なのに！)

足も腕も何度も折った。

どういうわけか自己再生が発動したようだが、それは同時に骨折と  
いう手段が、少なくとも苦痛を与える意味では有用だという事の証左  
である。

手、足、鎖骨、肋骨、背骨。

それぞれを、肉や内臓にもっともダメージが入る様に何度も何度も  
折っている。

それでも。それでもツールタケウチは立ち上がる。

(どうする。どうするっ!)

この空間では、なにをやってもこの男が死なない。

黒く染まった眼球部から、貫通した針を引き抜いている時点で間違  
いない。

つまり、死ぬほどの行為が許される。許されるが――

それにすら耐えられたら、自分はどうすればいいのだろうか。

貫いた場所は全て黒く染まっているのだ。

浸食は上手くいつているという事なのだろうが、どれだけ待っても  
その時が来ない。

向こうのサブブレインの浸食が終了したというアナウンスは一切  
来ない。

今自分の視界に示されているのは、視覚情報には一つだけ。

――『第??次??実験までの累積データと照合』

現実世界でのツールとの攻防の際に、突如現れた表示。



試してみるか？

そう言わんばかりに、トールは手を広げた無防備な状態のまま近寄ってくる。

いいだろう、と。

望みどおりにしてやろうと一步踏み出す——つもりだった。

「っ！」

一步踏み出してきたトールとの距離は、近づいていなかった。

気が付けば、一步下がっていた。

トールが右足を踏み出せば、自分は左足を。

トールが左足を踏み出せば、自分は右足を。

「どうしたのさ？」

かたや普通、かたや真つ黒な眼を並べて、トールが首をかしげる。

「俺を支配下に置きたいんだらう？」

ああ、そうだ！

「だからほら、俺を諦めさせてみるよ」

どの口が——！

「時間が経てば向こう側の拠点設営が終わった誰かがこっちに来る。アシユリー達ならちと不味いが、アオイなら多分あのグループには目を付けているはずだ。ゲイリーもな」

そうだ、そのとおりだ。

くわえてテツサの動きも気がかりだ。

トールに仕込んだ物の内容からして、おそらく自分が行動を起こす事は読んでいたと見るべき！

時間がない。そんな事はわかってる。だが……だがしかしだ！

「さあ、どうした。他の手段を全部試せよ。反撃はさせてもらうけどな」

数発ほどトールの拳はもらっている。

痛みはある。ダメージはある。

だが脅威ではない。

そうだ。そういう暴力的な意味では、この男は全く脅威ではない。だというのに。だというのに。

(なぜだ！　なぜ——！)

認めざるを得ない。

追いつめられているのは、まぎれもなく自分の方だった。

(くそっ、そろそろ何かしらのスキルの習得が起こりそうな物だが……)

あの日、自分がスキルと言う物を手に入れてからは、トールのソレと比べて驚くべきスピードで様々なスキルを入手する事が出来た。

ツールが既に入手したものや、あるいはまだ取っていない物。そして自分が望んだ物。

一つから三つほどずつ追加されていくツールと違い、多数の選択肢があった。

そうだ、スキル。

それも、このサバイバル生活に順応するためにスキルを割いているコイツとは違い、純粋に目的に特化したスキルを取得している。

つまり、絶対的に優位なのは自分だ。そうやってなくてはおかしい……ハズなのに！

(つまり……スペックとしてその実、私は劣っているのか?)

なるだけ、考えない様にしてきた考えがハッキリとした文章となつて——あるいは自分自身に設定された音声が生産された私に流れる。

(この、眼の前の人類種の雄が……調整を受けて生産された私より……っ！)

なぜかこの部屋の壁という壁へと燃え広がっていく炎から離れ、駆け出す。

右の手首から飛び出しているプログラムのアバター。黒針。

ふらつきながら殴りかかってこようとして来るトールの足を払い、左手で髪を掴んで地面に叩き付ける。

「——っ、……あ……あ……！」

この世界でそうなるか確信は持てないが、万が一気絶してくれれば突破口になりうる。

そう思ってから後頭部から勢いよく地面に叩き付ける。

やはりダメージは現実のそれと変わらないようだ。



微かにうめき声を上げる以外に何もできず、トールは地面に転がる。

だが……すぐに膝や肘を曲げて、起き上がる態勢に入る。

「まだ足掻くか！」

スキルがどういうわけか完全に機能していないのならば、まだ直接攻撃の方が可能性がある。

起き上がる前に曲げた膝の部分を全力で踏みつけ、へし折る。

今まで幾度も苦痛の叫びを上げていたトールは、慣れてきたのか歯を食いしばって反射的なもがきに耐える。

耐えて、逆の足を軸にすぐに立ち上がろうとする。

並大抵の人類種ならば、泣き叫ぶだけのこの状況でもなお！

認める。

この男は強い。

肉体的には、自分の世界のどの兵士よりも脆いが……この、自分には理解できない物への執着というか。

一部における精神性は、そこらの兵士に比べても遜色ない。いや、逸脱している所がある。

だがそれでも——脆弱な肉体しか持たない事には変わらない！

「ヴィレッタ……っ」

砕けた膝が再生しようとしているが、その前に左手で首を絞めながら持ち上げる。

やはり実際の体ではないために窒息の苦しきはないようだが、それでも痛みはあるらしい。

「ああ、認める。認めるとも！ 貴様はやはり——！」

左手を外そうと両手で足掻くトールだが、その程度ではビクともしない。

代わりに、自分がこいつの首に右手を添える。

針で再び串刺しにする——前に、

——ゴキッ

「なんとしても手に入れておきたい駒だ」

トールの首をへし折った。

どうせ死なない。どうせ再生するのだ。

両手を離すと、その身体は力なく地面へと落下する。

死ぬようなダメージは幾度も与えてきたか、これなら――

「お、お……」

頼む、ここまでダメージを与えたのならば――

「ま……だ……だあ……っ！」

まるでか細い笛の音のような、どこからか空気が漏れるような音を喉から発しながら、イレギュラーは断言する。

やめろ。

「まったく……っ！ 自己再生が……ここまで使いまくるようなスキルだなんて……考えてなかったぜ」

立つな。

「さあ……続きだあ」

立てば、次に手段を模索しなければならない。

「ヴィレッタ」

次に、次に私は――

「今度は何をする？」

分からない。

分からない。

どうすれば自分のスキルとやらは正常に奴を凌辱する？

どうすればこの男は諦める？

トールの首の周りを覆っていた淡い輝きが徐々に薄くなる。

自己再生が完了しつつある証だろう。

気が付けば、先ほどへし折った膝も元通りになっている。

(何を、だど?)

そうだ、行動の指針を決定しなくてはならない。

短時間で、この男を支配する？

そんな考えでは何も通せない。通らない。

口惜しいが、今のままではこの男の意識を塗りつぶせない。

(そうだ、この男の意志が生き続ける限り自分の勝ちはない。なら——)  
殺そう。  
殺し続けよう。

この空間に限り、恐らくは死が存在しないこの男を、殺し続けよう。  
もはや手探りで限界を探る必要などない。  
全力で殺すしかない。

文字通り、心が折れるその時まで。  
だが、

(本当に、折れるのか?)

ただの学生。

そう嘯くこの男を、この空間で二ケタに届きそうな回数はずでに『殺害』している。

心が折れるまで、あと何回この男を『殺害』すればいい?

(くそっ、迷っている時間がない。早く決着を——!?)

再び心臓を黒針で貫こうと決めたその時。

唐突に視界が真っ白になる。

落書きだらけの白い壁も、それを覆い尽くそうとしている炎も消え——ただ真っ白な空間が広がる。

「な、なに!?!」

咄嗟に叫ぶが、自分の音声が広がるだけだ。

いや、いくつか視界に残っている物がある。

いまやなにかしらの作業の完了を示す、空白を埋め尽くしたプログレスバー。

そして、今一度『殺害』しようとしていた、黒い『闇』に浸食されつつある男の姿。

「あ? なんだこれ?」

ツールはそういって、自分の視界の何かを確かめるように手の平を目の前にかざしている。

それと同時に、自分の視界にも変化が起こる。  
文字だ。

文字が浮かび上がってくる。

——累積データと照合、完了。

——最終試験までの到達個体に、非浸食個体のスキル習得パターンを発見できず。

——浸食個体、サンプル『??』—— S s t p — E — J — 『??????』の行動・技能習得傾向のデータと比較。

——今回の非推奨接触の観察結果、サンプル『??』—— S s t p — E — J — 『??????』を上位観察個体とする。

——それにもない、本個体をサンプル『??』—— S s t p — E — J — 『??????』の管理下に置くと共に、本実験をデータ取得実験から、正式実験へと昇格。

——サンプル『??』—— S s t p — E — J — 『??????』を、正式に『管理者候補』へと設定。管理権限の一部の譲渡を開始。

「な……っ??:」

突然目の前に現れた文字——文章の意味が理解できない。

実験? この空間に生命体を集めている事か?

非浸食者とはどちらの事だ?

攻撃を仕掛けた自分か、それともカウンターを発動……いや、発動させずに自身の中に引き込んだツールか。

「あー、なるほど。……よくは分かんねえけど、こういうことか」

気が付けば、ツールが立っていた。

先ほどまでと同じだ。ふらつきながらようやく立っていると

た様子だ。

だが――

「貴様、浸食部が……っ」

黒針で貫いた部分を中心に浸食をしていた『闇』が、まるで時間を巻き戻すように消えていく。

「どうして……っ、こーなったのかわかんねーけど……」

そして確実な変化が一つ。

先ほどまで衣類以外には何も身につけていなかったトールの手に、握られている物がある。

あの薄っぺらい通信デバイスだ。

スキルの操作に必要なそれを――先ほどまで確かに存在しなかったソレが、握られている。

「管理者権限の一部へのアクセス……対知的生命体への干渉スキルの制限……」

いつもならばスキル使用の際には画面を触っていたが、今トールはなにもない空間に手の平を掲げている。

「俺の思う理想からは外れちまってるけど……ギリギリまでやって答えが出ないんなら……しょうがねえよなあ……」

パキン、と。

右手から、安物のプラスチックが砕けるような音がする。

「ああ、やっぱり……俺、駄目だなあ……」

視覚センサーの端に映っている。

黒い針が――自分のスキルが……砕かれた。

いや、スキルの針だけではない。

この白い空間に罅が入り――

世界が、割れる。



辺りはもう夕焼けの赤で染まりつつあった。

白い世界は、赤を背景とした森の中へとなっていた。

「どうやらその場に倒れていたらしい自分の体を起こして辺りを確認する。」

熱反応探知……生命体らしき反応はない。

目の前の女——いや、男以外には。

「よう」

少年らしきを残した少女は倒れたまま、こめかみから自分のコードを引き抜く。

淡い輝きに包まれて、傷ついた部分を修復しながら、ツールは立ち上がる。

「スキルは使えなくなつたら？」

その通りだ。

改造したツールの世界の旧式通信デバイス。自分の中に取り込んだそれを使って再びスキルを使用しようと試みても、『サンプル』???

— S s t p — E — J — 『???'の許可申請が確認できません』という表示が自分の視覚センサーに表示されるだけだ。

最大の強みであったハズのスキル。その使用の全てが、恐らくツールに握られたのだろう。

「で？」

女の身体となつた、小柄なツールが手を広げる。

そうだ、小柄だ。

例え元の男の身体のままでも、脅威には到底なりえない身体。

ツールが広げた腕。身体を支える足。対して筋肉の付いていない肩、胴体。

「そうだ、どうあがいても、自分に致命的な害を及ぼす事など適わないだろうその身体に。」

なぜ、自分は距離を取ろうとしている？

なぜ、自分は武器を突きつけようとしている？

なぜ、自分は——それすら出来ずに立ちつくしている？

「それでヴェレッタ？ ——お次はなんだ？」

なぜ、自分は——

地面に膝を突いている？

060：天が遣わす者。あるいは、天の言葉を伝える者

「おわあっ!?!」

結局罾もあんまり仕掛けられず、簡単な罾を急ピッチで二つほど仕掛けてから、俺とヴィレッタは帰路につけていた。

おそらく、あと十五分もしないうちに完全に日が沈むだろう。

「……なにをしている?」

「見てわからない?」

「わからん」

「……ぬかるみに足をとられてこけた」

「そうか」

え、それだけ!?

さっきまでの事もあるからもうちょい俺を気遣ってくれてもよくない!?

あ、ちよつと待つてよ! もう足元が暗くなってるから良く見えな  
いんだつてば! 置いてかないでよ!

「ちよつと待つてつてばヴィレッタ!」

反射的に腕を伸ばしてヴィレッタの片腕を掴むと、ヴィレッタはあ  
からさまに嫌そうな顔をして、

「……ずっと気になっていたのだが」

「なに?」

「貴様、男の時と女の時で少し口調が変わってないか?」

「……………」

え、マジで?」

「変わってる?」

「変わっているように聞こえる。少なくとも、単語単語のアクセント  
の強弱はさっきまでのお前と違う」

「……その、男らしくなってる?」

「そんなわけがないだろう」



——ガツデム!

「歩き方も変化している。女体化した事で小柄になったとはいえ、比率からして貴様はもう少し早く歩けるだろう。……なぜ内股になっている」

「仕方ないじゃん! こう、なんていうか! そうなつちやうんだよ!」

わかってるよ! わかってたよ!

でも気が付いたらこうなつちやうんだからしょうがないじゃん!

「……やはり貴様は理解できん」

むう、不機嫌そうな顔はやはり変わらんか。

「あの後しばらく茫然としていたが、とりあえず俺との敵対は待ってくれたようだ。」

うん、一応俺の言う事聞いてくれるし、スキルの使用に関してはこつちが掌握している。

ただ……なんだろうな。たまに挙動が変な時があるけど。

上手く言えんが、なんか動きづらそうな時がある。

「とりあえず、女の身体の時と男の身体の時にどうしても違いが出るんだ。覚えておいてくれ」

「了承した」

というか、えらく聞き分けがいいというか……。

正直、今度は現実世界でもう一戦あると思ってたんだけど。

スキルの使用に関してはこちらが握っているからともかく、殺されない程度にまた手足折られたり耳千切られたりするんじゃないかな。かと身構えてたけど、特に動きはなし。

とりあえず俺から休戦協定を持ちかけたら、しばし躊躇ためらいしつつもOKしてくれた。

今の状況で襲いかかって来なかったって事は、とりあえず襲いかかる事はないだろう。

「で、アシユリーとはまだ連絡つかない?」

「ああ。貴様は?」

「同じく。テッサに遅くなった言い訳しようと思ったら、まったく繋

がらない」

まあ、現状が緊急事態だから仕方ないけど。

「下手したら森の中を探し回られてるんじゃないかと思ったけど、まさか連絡がつかないとか……」

ヴィレッタととりあえずの休戦の再確認をした後、真っ先にテッサに連絡を入れてみたのだが連絡がつかず、しれっとヴィレッタにアシユリー達との通信を促してみると、そっちでも連絡が出来なかった。

「拠点に皆揃っていけばいいけど……」

基本的に、なにか緊急の事が起こった時はとりあえず拠点から動かない様に決めてある。

まあ、いつぞやの河辺みたいに拠点にこだわって死にかかるとはもうごめんなので、絶対って訳ではないのだが……。

とにかく、拠点にいけばなにかあるはずだ。

仮に移動するような事態が起こったとしてもメモ書きの一つくらいは残してくれているだろう。

紙もペンも渡してあるし、というかペンがあるなら葉っぱとかに書き残せる。

ちゃんと目立つように残してくれて入れれば、分かるはずだ。

——よっぱどの緊急事態でない限りは。

「ヴィレッタ、方角はあってるよね？」

「ああ。疑似嗅覚センサーでも、海のそれを捉えている。こっちで間違いない。最短ルートだ」

「そっか」

やっぱ合ってたか。

一応こっちでもそうだと思ってたけど……個人の判断はやっぱり怖いな。

一歩目を決めるだけでも足が震える。

こっちも暗がりだと、特に。

「なにかあったって考えるべきだよね？」

「少なくとも、二人同時に連絡が取れなくなったのだ。これで何もな

しという可能性は低いだろう」

しばらくヴェレッタの腕に掴まりながらおっかなびっくり歩いていると、地面に見覚えのある白い線が見えた。

俺が魔法で作った目印だ。

「可能性としては二つ。隊長達、拠点作製組に何か起こったのか……」

「あるいは、俺達の頭に変化が起こったか？」

「……サブブレインへの接続だけですら、本来は存在しない『アバター化』という奇妙な現象が起こった。スキル習得のために、他にさらなる変異が起こったとしても不可思議ではない」

「でも、さっき俺とお前の中で通信は出来たよな」

「互いにスキル・ホルダーだからかもしれん」

「あ……そっか、確かに」

そうだ。俺とヴェレッタにはそういう共通点ができたんだったな……。

「拠点に仲間がいればおかしいのは俺たち。いなければ向こうに何かが起こった。もしくは起こっている」

「どちらのシチュエーションの方がマシだと、貴様は考える？」

「どっちもあんま考えたくないが……」

「その二つなら、まだ前者の方が救いがある」

誰かにヤバいことが起こると、自分にヤバいことが起こるのならまだ後者の方が救いがある。

ヴェレッタ？ すいません自業自得ということ……。

まあ、すぐに酷い事にはならんだらうし勘弁してくれ。



「やっぱり誰もいないし」

なんとなくそうじゃないかなあと思っただら本当にいなかった。

アオイ、ゲイリー、アシユリーもテツサも、新入りのクラウもいないとか。

焚火も消えている。

うーん、デジャヴ。

「トール」

「ちよつと待つて。……ん……周りに生き物はいない」

「姿を隠している者も？」

「……少なくとも、サーチの有効範囲には」

恐らく一番頼りにしているスキルをスマホで発動させて、周囲を確認するが……特に気配はなし。

「争った痕跡もない、か」

「争うつて何とさ？」

「野生動物に襲われる可能性というのはいつだってある。あるいは……先日のような形の抗争」

「……………」

連絡がつかないとハッキリ分かっているのはアシユリーとテツサの二人。

つまり科学の国の人間だ。

(まさか、ゲイリー?)

それと敵対しているのが、同世界のゲイリー。魔法が使えない魔法使い。

(……いや、それはない。もし、仮にゲイリーが何かを起こそうとすればアオイが止めたはずだ。完全に関係ないクラウもいる)

アオイ。

この世界で最初に出会った人間。最も長く一緒にいる女。

アオイならば大丈夫じゃないかな。うん……多分。

(アオイにはゲイリーを頼むと伝えてある。ゲイリーに害が及ぶ事も、ゲイリーが害を及ぼす事も許すハズがない)

一緒に生活していく中で、アイツが求めているのは安定だと言う事は分かっている。

生活自体の変化はともかく、この共同生活を崩すようなトラブルを起こすはずはない。

仲間割れは……ない。ないと思いたい。

「……一つだけシエルターが完成していない。風避けにもなる屋根部分の一部がそのまま放置されているな」

「そこに積んである苔の山が材料みたい。……ん、残った部分に積み上げるには十分な量が揃ってるね」

材料集めのために森に入って迷子になっちゃった、なんてパターンを考えたがさすがにそれはないか。

ゲイリーやアシユリー達といった軍人に、山育ちで慣れているアオイ。

唯一そうなりそうなのはクラウだが、本人もそれは分かっているから単独行動はしないと云っていた。

(クラウもここにいたんだな……)

作りかけのシエルターの一つ。

そのフレームから、あのシトラスの香りがする。

香りがするのは、ちょうど手の位置あたり。ここを押さえている時に香りが移ったのだろう。

(まだ残ってるってことは、実はさっきまでここにいたのか?)

実際に香りがどれくらい時間で消えるかなんて実験したことないから分からないが、ここは屋内とは違う。

ちよつとやそつとの香りなんてすぐに飛んでしまっただろう。

「ヴィレッタ、今度スキル取る機会あったらサーチ取らない?」

「貴様が既に持っているだろう」

「いや、サーチって何を知りたいかって意識で大分変わるし」

サイボーグ……違うな、アンドロイド。女だとガイノイドだっけ?

そのヴィレッタならば、俺とは違う視点を持つ上に情報の処理にも強いんじゃないかな。

俺なんて、例の野草知識を得てから下手にサーチ使うと一気に疲れ

るんだよなあ。

「ああ、構わん。どうせ、私は貴様に捕らわれている」

「人聞きの悪い事言ってるじゃなーい！ 先に攻撃してきたのはそっちでしょうが！」

俺のしたことなんざ数回殴った程度じゃねーか！

その間に何回ヒデー目にあわされたと思ってやがる。舌引きちぎられた時は本気で心折れそうになったぞ！

「……そうだな、貴様は私の首にかけられた紐を手に行っているが、紐をかけたのは違ったな」

「うん？」

なんのこつちや？

ああ、スキルの向こう側にいると推測してる奴らの事か？

「なんでもない。それで？ なにか分かった事はあるか？」

「特にないなあ。足跡とかもそこらじゅうにあつて追跡できないし……」

月明かりを頼りに周辺を探しているが、これではどこに誰が向かったのか探すのは難しい。

「メモの類も残ってない、か」

もしなにかの走り書きなんかを残しているなら、風を避けるためにシェルターの内側に大きめの石などで押さえてあるはずだ。

完成しているシェルターも、作りかけの奴にもそういった者はない。

(……この髪の毛……ゲイリーかな)

一番近くにあつたシェルターを調べてみると、ベッド代わりの濁いた苔の端に金色の髪が目についた。

ゲイリー。この面子で唯一の男仲間。

(多分、一度横になって寝心地とかを確かめたのかなあ。寝起きで失敗……失敗っていうか、身体を痛めていたりしたらへこむもんな)

髪の毛が落ちていた所が、当然頭側だろう。というか、苔も盛り上がる様に積まれている。

ゲイリーの身長を思い浮かべて、足の位置を想像してそこらを地面

を調べる。足跡が残っていれば、それを追跡しようと思ったのだが……。

(やっぱり無理か)

バラバラな足跡がそこらに残っている。

土の上、草の上、不自然に折れている植物。

作業や移動の痕跡が多すぎる。

サーチを使えば分かるんじゃないかという期待があったのだが

……やっぱりダメか。

(シエルター以外の道具もここに残っている。素焼きの壺と調理道具、テツサのサバイバルパックに紐の束、草履にバックパック……中には多分衣類や布類なんかもキッチンと入ってる)

仮になにか物が無くなっていれば、そこから行動のヒントが得られるかと思っただけだ。

(浅はかだったかあ……)

他に手掛かりはないかと辺りを探してみる。

搜索に入ろうにも時間が時間だ。どれだけ早くても、皆を本格的に探すのは明日の夜明けからになる。

その時に、少しでも搜索の方向性を決めておけるモノを一つでも見つけておかないと……。

「んお？」

なにか落ちている。

ふとそう思って目を凝らすと、それは見覚えのある緑色の物だった。

先日、例の血文字が書かれていた急造シエルターの壁。

不気味とはいえ、一応あとで何か分かるかもしれないと残しておいたものだ。

血文字の側が下になっている。

なんとなく、あの血文字をまた見てみようとしてそれをひっくり返すと……。

「……はりゃ？」

そこには、本来あるはずのない物があつた。

白く輝く、靴だ。

ヒール……で、いいんだっけ？　なんか正しくは違った気もするが……白い女性物の小さな靴が片足、転がっている。

右足の方だ。

(でもさつきサーチには……隠れていたから気付かなかった？　いやでも、見た事もない地下の空洞だつて分かったのに……)

手にとって調べてみる。

残念なことにもうサーチは使えないが……それでも分かる事はある。

(全然汚れてないな……傷もほとんどない。まるで新品だ)

靴底すら綺麗なままだ。

あれかな。こんな場所だと動きづらいから脱いで保管していた？

……いやあ、それにしても汚れなさすぎだ。拾い上げるまで地面についていたのに

クルクル回しながら観察する。

メーカーというかブランドのロゴを発見する。アルファベットだ。

さらによくよく見ると、小さい金字で『made in France』と書かれている。

「俺たちの世界の物か………ん？」

なにかが、自分の勘に引っかかる。

だが、具体的に何が気になったのかが少しの間考えてもよく分からない。

(引っかかったつて事は、不自然な点があつたつて事？　このあからさまにおかしい靴に、さらに?)

このサバイバル環境において、違和感というものがどれだけ大切な物かは散々思い知らされている。

優先順位は確かにあれど、気になった事を置いておく事は後々のピンチを招きかねない。

たとえ本当に気のせいだったとしても……。

「ん~~~~~?」

だが、何が気になったのかがピンと来ない。



とりあえず何かのヒントになるかと靴を隠していた血文字付きの急造シエルターの壁をひっくり返して、再び血文字を読む。

Everyone becomes an angel.  
皆、天使になる。

(こんな訳のわからん血文字で、そもそも何が伝えたかったんだちくしょう)

もう黒くなりつつある文字の列を数回目で追う。目で……。

(——あれ?)

そうしてようやく、違和感の原因に気が付いた。

「なんで文字が読めた?」

確かに木々が無くなって多少は明るくなったとはいえ、先ほどまで灯りは月明かりのみだった。

現に、注意深く歩いていてもぬかるみに気付けない程辺りは暗くなっていた。

眼も機械だつていうヴィレッタ達ならともかく、例の『サーチスキル』以外では普通の眼の自分が、この暗闇でどうして文字を読めているのか。

いや、そうだ。暗くない。

こんなに影が出来るほどハッキリ……。ハッキリ?

「ヴィレッタ! 上チエック!」

反射的に叫んで、同時に自分も上を見上げる。

そうだ、もう見なれたはずの月明かり。

火も付いていないのに、文字が読めるほど明るいはずがなかった。

見上げた先にあるのは——月。

「……なんだ……あれは?」

月だと、誤認していた物。

ヴィレッタが、眼を細めて呟く。

そう、今まで月だと思っていたそれは、今までも夜を見守ってくれていた月よりも大きく、白いものだった。

「……そりゃあ、この距離じゃあサーチには引っかからんわなあ」

はるか上空にあつて、かなりの大きさがあると分かる球体のソレ。

それは、自ら光り輝きながら俺たちを見下ろし、そして――

どこからか発しているか分からない声を発する。  
まるで歌うように。

どこからか生えた翼を、大きく広げる。

まるで、天使のように。

「トール！　来るぞ！」  
マジでか。

『アオイ』

巨大な白い球体だったそれは、翼を広げて舞い上がる。気が付けば、白いだけの球体の表面に、ところどころピンクの点が見えるようになっていく。

いや、あれは――

「口?」

あらゆる場所にぷつぷつとピンクの点が膨れ上がっていく。

かなり離れているためによく分からず、目を細めて観察してそれっぽいモノを口にすると、横にいるヴェレッタが――

「と言うより『唇』だな」

と口を開く。

ひよつとしたら、視界のズーム機能とかもあるのかな。

視界に突然文字がサーチなどと同じ文字が現れる。

――管理下個体『ATH―S001』より武装技能の許可申請が来ています。

同時に、スマホが震え始めた。

それに気が付き手に取ると、『交戦を許可しますか? Y/N』と表示されている。

(……攻撃して大丈夫なのか?)

あからさまにヤバイものだとは思いますが、攻撃して却ってヤバくなるパターンこそ一番警戒しないと不味い気がする。

例の『ゴーレム』とかいう兵器もそういう物だったっぽいし。

倒したら毒撒き散らしたりしないだろうな。

「おい、さっさと許可しろ。撃ち落とせん」

「許可求めている人の言葉じゃないよね?」

そうこうしている間に、ゆつくりと『天使』が高度を下げてくる。

……んお?

—— La~~~~~♪

……………。

「なにしてんの、アレ？」

「私の感覚がお前達人類種からズレていなければ、歌っているのだから」

「……なんで？」

「知らん」

そう、歌っている。

高音から低音、女性の声から男性の声、それに弦楽器に管楽器、打楽器と。

あるとあらゆる声と音が、それぞれの唇から一斉に放たれ、荘厳な音楽となって夜の海に響く。

「……ヴィレッタの国の楽器とかじゃないの？」

「自分の中のメモリーに、あのような悪趣味な楽器のデータはない」

「さいですか。」

「じゃあ、あれなにさ？」

ゆっくり、ちようど俺とヴィレッタの頭上を中心に旋回しながら、徐々に高度を落として来ている。

「知らんと言っている。だからこうして撃墜の許可をお前に求めている」

「ちよいと決断早すぎないかね、ヴィレッタくん。」

「まあ、こうして空飛ばれている現状、手を出すとしたら飛び道具しか……。」

「今銃持ってるの？ ガンスミスとか持ってたから銃火器を作ることには出来そうだけど」

「スキルを習得した時にもう試してある。私の身体そのものがアーティファクトだからか、私は身体の構成要素を消費して一時的に銃火器を作製する事が出来る。弾薬の精製もテスト済みなので確実だ」

マジでか。

「身体の構成を消費って大丈夫？」

「銃の使用限界が来たらすぐに戻る。完全に消費する弾はそこらの石や砂などで作ればいい」

「弾って、じゃあ火薬を作れるの？」

「火薬を用いた弾薬類は現状無理だ。空気圧縮式や電磁誘導式の物ならばある程度作っている」

「そっちの方が凄くない!？」

「黙れ、いいから許可しろ」

だから許可を求める態度じゃないよねヴェレッタ!？」

そう言っている間にも、『天使』はクルクルと舞い降りながら歌っている。

前も後ろもよく分からんフォルムだけど、翼の向きでいうとずっと俺たち二人の方を向いているようだ。

(歌を聞かせている?俺たちに?)

眼がある訳ではないが、ずっと同じ方向を見ているのか。それとも俺たちに自分の姿を見せようとしているのか。

じーっと目を細めて近づいてくるソレを見つめっていると、また突然視界に文字が現れる。

——管理下個体『ATH—s001』の視界を共有しますか？

(……………スキル……………じゃないよね?)

こんな事、今までになかった。

視界の共有が出来そうなスキルなんて取った覚えもないし、これまでにこんな表示は一切ない。

そもそも、こんな感じのクエスチョンが出てきた事なんて、これまで一度もなかった。

スマホを取り出すと、やはり文字が出ていた。

イエスカ、ノーか。

なんの意味があるのか少しだけ迷ったが、『Y』の部分をクリックする。

すると視界に変化が起こり、いつもの違和感のある視界に近いものになる。

いつもと違うのは、見ている光景が一気に変わった事。

(これがヴィレッタの視界か……)

自分が見ていたそれよりもやけに近い、まるでカメラのズームのようなそれに少々驚くが、同時に便利な物を手に入れたと少しだけ気持ちが高ぶる。

視界に映るのは、かなりアップになった『天使』の姿だ。

いや、こうして間近で見ると『天使』という言葉を使うのは躊躇われる。

余りにも気味が悪すぎる。

そしてデカイ。球体というか、卵か。

(口、口、口。どれもこれもパクパクしやがって……マジでキモいなこれ)

歌っているのだろうそれは、もはやどう見ても人間の口だ。

閉じたり開いたり、閉じっぱなしだったり開きっぱなしだったり。

他に何か判別できるような物はないか。

そう思っただけ周囲を見まわそうとするが視界が動かない。

ああ、そっか。これヴィレッタの視界か。そういえば全く動かないからなんか違和感が……

(つてことは、真正面がヴィレッタが注目している物つて事で……)

ヴィレッタの視界は、白い——胴体部分とでも言った方がいいのか？

その下の方を注視しているようだ。

(……あら?)

その時、ふと違和感を覚えた。

それ自体が淡く発光しているためによく分からなかったが、真っ白な胴体の中に一部違和感を覚える。

(ズーム、出来るか?)

そう考えたら、視界に更に文字が追加される。

——視界操作を行いますか？

(出来る事、妙に増えてない?)

これまでになかった選択肢——想像すらしなかった選択肢が次々に現れてくる。

正直、怖いし文章が文章だ。ヴィレッタに影響があるかもしれない。だが……。

(現状、背に腹は代えられない!)

いつもイエスカノーかを表示させるスマホの画面のタップするべき場所はもう覚えている。

ポケットに突っ込んでいたスマホのその部位を、タップする。

「……っ!!? トール、貴様!!」

(やっぱり、向こう側に影響が出たか)

謝罪の言葉を口にしようとするのと、それに気付いたのは同時だった。

小さく、白ではない、色のついた何かが見えた。

小さいささつくれにも見えるそれは、だが確かに見覚えのあるものだ。

鞘だ。

刀の。

「ヴィレッタ、撃っちゃダメ!」

反射的に叫んでいた。

「中にアオイがいる! だったら他の奴らだつて——」

あの大きさならば、他の連中が中に入って——取り込まれていたとしても不思議じゃない! むしろ、全員がいなくなっているのならばそう考えた方が自然か!

視界の共有を終えて、ヴィレッタの方に向きながら叫び続ける。

そもそも射撃の決定権を持っているのは自分だから意味がないと気付いたのはすぐ後だった。

「ちっ」

……。

「こいつ、まさか！」

「お前、あの中に皆がいる可能性がある事に気付いていやがったな?!」  
「……………」

ヴィレッタは無表情のままだが、心なしか忌々しそうに見える。

（こんにやろう！ 当然だけど諦めてないか!!）

中にいるアオイとテツサが排除されれば、俺の味方はなくなる！  
さらにいえばゲイリーはコイツの敵！ クラウとアシユリーも、コイツからすれば似たようなもんだろう。

ついでに意味不明の羽が生えたイレギュラーも排除できるっついでうんなら……っ！

「ならばどうする？ 少なくとも奴は人類種を取り込む生体。貴様にとつて脅威以外の何者でもない」

「中にアオイ達がいるまま落とすわけにはいかないだろう！」

ふと、足元の影がさつきから動いていない事に気が付いた。

見上げると、あの巨大な『天使』が動きを止めている。

先ほどまで飛ばたいていた翼がぴたりと止まり、文字通り完全に制止してこちらを見ている。

いや、眼はないけど。

「?! トール、飛べ！」

「ぐえ…………」

ヴィレッタがそう叫ぶと同時に俺の首根っこを掴んで、後方へと投げ飛ばす。

（てつめ、飛べじゃなくて飛ばしてんだらうが！）

そう叫ぼうとした。

いや、ひよつとしたら叫んだのかもしれない。

だが、それ以上の轟音が全てを吹き飛ばす。

避けたはずの俺もヴィレッタも、積んでいた苔の山も素焼きの壺もシエルターも。何もかもを巻き込んだ突風によって吹き飛ばされ、地面に叩きつけられる。

肺から抜けた空気を取り戻そうと荒い息を繰り返しているうちに、先に起き上がっていたヴィレッタが俺を抱き起こす。



「やはり敵性存在のようだな」

ヴィレッタの肩に掴まりながら身を起こし、突風が吹いてきた方を睨む。

奴だ。

天使だ。

——迎撃目標を設定しますか？

先ほどから視界にはそういう文字がチカチカと点灯してやがるが、だが……もしあれのど真ん中を銃でぶち抜いたら、誰かが死ぬかもしれない。

それはダメだ。それはノーだ。

「おい」

口を開く。

ヴィレッタに向けてではない。

どこかの誰かに向けて。

口を開く。

「攻撃許可を部位に限定することは出来るか？」

届くかどうか分からない。

いや、そもそも馬鹿げた試みなのかもしれない。

だが——

——管理者候補『???' | S t p | E | J | 『管理個体『ATH | s o o

確認。

——『???' |

S t p | E | J | 『管理個体『ATH | s o o

1』への干渉システムの最適化を開始……完了。

見える世界が、また少しずつ変わっていく。

ヴィレッタを通して見える視界に、ポインターのような物が付く。

俺が右の方を見ればそちらに、左の方を見ればそちらに動く。

「ヴィレッタ！ 翼を撃ち抜け！」

俺が翼を睨むと、今度はポインターがそこに固定される。

俺の言葉に、一瞬ヴィレッタの顔がわずかにニヤつき、そして目を見開く。

「トール！ 貴様、こちらのファイア・コントロールを——っ！」

「翼を撃って言っただろうが!!」

やっぱり胴体狙ってやがったなこのアマ！

ありがとうどこかの誰かさん！

「くそっ！ やはり思い通りにはいかんか！」

そう言いながら、ヴィレッタの右手が淡く光る。

俺の自己再生と同じ光だ。

手の平に集まるその中から、どこから来たのか大型のライフルが出てくる。

「トール！」

自分が想像しているような銃口ではなく、帯電してパリパリ鳴っている二枚の板で『天使』を狙う。

「私から距離を取れ！」

そう叫ぶと共に、甲高い奇妙な音が鳴り響く。

ドラマやアニメで聞くようなそれと違う、独特の発砲音。

それと同時に、銃弾の軌跡が『天使』へと向かって伸び——

同時に、再び『天使』が翼を広げると共に現れた緑の膜——いや、巨大な泡？ のような物が『天使』を包み、そして銃弾を受け止めた。

(違う、溶かしたのか！)

「くそっ！ なんだあれは……っ」

「バリアみたいなものだろう。それも、あからさまに触ったらヤバそうな奴」

即座にヴィレッタが銃を構えて数発連射するが、やはりどれも煙を立てて蒸発する。

着弾の時に僅かに発光しているから、ひよつとしたら効果があるの

かもしれないが、微々たるものだろう。

「トール！ お前の魔法とやらは!?」

「整地魔法に期待すんな!」

ぱつと見であるのバリアっぽいのは液体のように見えなくもない。

熱を加え続けければ蒸発するか？

「くそ、これで効果が見られないなら空気圧縮式でも同じか!」

そう叫ぶヴィレッタの手にあったライフルは、取り出した時の同じ輝くを発しながら光の粒子へと変わって、ヴィレッタの腕の中へと戻っていく。

「っておい！ ライフルは!？」

「使用限界だ！ ちっ、また来るか!」

ヴィレッタがまた俺の襟元を掴んで、人間ではあり得ない跳躍をする。

「ぐげ……っ」

首が折れるかと思っただが、本当に折られた時はこんなじゃなかったな。

なによりも、それどころではない。

ヴィレッタが俺をひっ捕まえて跳躍した直後、再びあの突風が飛んできた。

なにもかもを、片っぱしから吹き飛ばす。

かろうじていくつか残っていたシエルターや道具の類。

それらがもの見事に――

「ん……っ」

全部、壊れていく。

皆で作った物が。皆で作ろうとしていた物が。

過ごそうとしていた場所が――

「んの野郎……っ」

邪魔だ。

邪魔だ。

邪魔だ邪魔だ邪魔だっ。

これは、コイツは俺にとっての邪魔者だ。

だけど外から触れられない。  
仮にどうにか出来たとしても、時間をかければここらがズタボロに  
される。

そもそも避け続ける事が出来るのかが疑問。  
時間がない。

つまり奴を今すぐ大人しくさせる必要がある。

触れるなら……バリアの中からならあるいは……っ！

「邪魔だ………っ」

俺の進む道に。

行きたい先に、この白い卵は——要らない。

息を吸い込む。

気が付いたら吸いこんでた。

でも、そこから何をするかは分かっている。

ああ、分かってるさ。

アイツがした約束だから。

アイツが約束した事だから。

だから——

「アオイっ！！！！」



歌が聞こえた。

あの人、男の恰好をした……誰だったか。

まあいい。誰でもいい。どうでもいい。

その誰かが歌が聞こえると口にした次の瞬間、自分は輝きに包まれ  
た。

歌という輝きに。

あの輝かしい存在から放たれたそれは空気を伝い、耳を通して自らの身体を伝い、脳を介して五感を刺激した。

願いだ。

この歌は。

理想だ。

この歌は。

そうだ、理想だ。

トールさんが掲げる……いや、自分の中にそれしかないと強制している物と似た……。

(トールさん?)

それは、誰だったか。

——誰だったか?

突然、身を包む心地よさにノイズが走る。

よく分からない痛みが、身体ではないどこかを貫く。

——誰だったか?

指先がピリつき、感覚が戻る。

——私は何を言っている?

どこかボヤけている脳に、いつかの光景がよぎる。

自分が隠れている時だ。

刀という武器を手に、姿を隠して『あの人』の様子を観察していた時。

周辺に人が集まる気配はない。

まだ虫や鳥、獣の気配もなかった静かな夜の頃。

『あの人』はずっと火を焚いて、辺りを見回していた。

そして次の日、『あの人』は探し回っていた。  
武器ではなく、多めの食糧と水を持って。  
出来るだけ汚れることを避けていた高そうなカバンに、出来るだけ  
の物を詰めて。

——アオイ！ どこだアオイ！

——怪我とかしてないか!? 声が出せるなら出してくれ!!

——声が出せないなら、物音でもいいんだ!!

——アオイ!!

ずっと自分を探していた。

なぜ探すのだろう。

少なくとも、『あの人』は自分を物騒だけど無力な女だとその時は  
思っていたはずだ。

なぜ必死なのだろう。

そう考えていた自分がいた。

会ったばかりの女に。

まだ何の役にも立てていなかった女に。

手を出す素振りも見せずに、ただ傍にいて、ただ少ない食糧を分け  
あつて、ただ一緒に火を起こそうと苦労して……

——誰だったか、か。

指先のピリつきはいつの間にか消えた。

状況を少しずつ把握していく。

自分が、水のような——少しトロっとした液体に浸けられているの  
がわかる。

——馬鹿か、私は。

目を見開く。

瞼越しでも分かる輝き。

さきほどまで自分が身を委ねていた白い光。

今となつては邪魔なだけのそれを、片手で目を覆つて遮る。

——あの人の事を、一時とはいえ忘れてしまうなんて。

初めて出会つた、何も考えなくていい人だ。

自分を殴ろうとしない。

自分を蹴ろうとしない。

自分を売ろうとしない。

自分を食べようとする。

自分を犯そうとしない。

自分を殺そうとしない。

自分を殺しの道具にしようとする。

「トールさん……っ」

五体に意思が戻る。

そうだ、そうだった。

自分の役割は——

『アオイ!!!!!!』

ええ。!!!

ええっ!

ただ邪魔な光に慣れてきた目で、もう一度周囲に目を通す。

全員寝ている。

ゲイリー、アシュリー、テッサ、クラウド。

皆いる。

互いに後ろ手で刃を突きつけ合いながら、それでも共に生きる人達  
はここにいます。

『聞こえるかっ!!』

トールさんの状況は。

分からないなら、とりあえず斬ろう。

仲間達とは逆の方向——そこにある、真っ白いゼリーののような壁に向けて短刀を抜いて、突き立てる。

同時に、何十人も女の叫び声のような音が鳴り響く。

おそらく、それで全員目が覚めたのだろう。

背後からバタバタ暴れる音が聞こえる。

それを無視して短刀で壁を斬り開いていくと、闇が差しこむ。夜だ。

「——つぶは——」

「アオイ——」

切れ目をこじ開けて外に顔を出すと、そこはとんでもない場所だった。

自分がとんでもなく高い所に浮いている。

そして下の方から——あの人の声がある。

見下ろすと、見知った顔が二つ並んでいる。

先日まで男だった女と、髪を束ねた女が並んでいる。

「ソイツの翼だ!!」

自分が壁だと思っていたのは、何らかの生物の皮膚だったようだ。

白くて丸っぽい何かにたくさん口の口と一对の翼が生えた気味の悪

い、巨大な生き物。

「翼が邪魔なんだ!!」

(ええ、ええ!)

アナタと約束した事だから。

アナタに約束した事だから。

だから——だからっ!

「は——」

鞘を手に取り、皮膚の切り口を足場に跳躍する。

目標は、翼の付け根っ!

「貴方の邪魔をする物は全て——」



届きそうになくて、更に白い生き物の皮膚を蹴って跳躍する。

「斬ります!!」

一閃。

それほど固さを感じなかったそれを、斬り飛ばす。

それと同時に、耳が割れる程の甲高い叫びと共に――

白い巨体が、落下し始める。

エピローグ：『いつも』に、また

「結局、これは何だったんですかねえ？」

突然現れた白い巨体。でかい翼付きの卵との戦闘を終えて一夜が明けた。

寝る所を完全に失い、かと言って以前のシエルターに戻る程の時間も体力もない自分達は、かろうじて残っていた、壁にするつもりだった苔の山を積み直して緊急の寝床と風避けにして一夜を凌いだのだ。

あの『天使』の放った突風によってなぎ倒された木を、どうにか発見出来たサバイバルパックのメタルマッチを使って起こした火のそばに置く事で一夜中燃やし続ける事で、寒くて震えるような自体は避けられた。

全員で固まって寝たから、男の俺にはちよつとキツかったけど。

朝を迎えて、ゲイリー達はもう動きはじめている。

気が付いたらあの白い『天使』の中にいたというゲイリー達は未だに状況が把握できておらず、だが自分達が頑張つて作った生活の場が全て吹き飛ばされたと言う事は理解したようだ。

日が昇り、回収した砂まみれの食糧を沸かした湯で洗って口にした後、すぐにシエルターの立て直しのために各自が動いている。

俺とアオイを除いて。

「さあ……それより、身体は大丈夫？　落下した時、かなり強く打ったんだろう？」

「はい、問題ありません！　落ちる時にすぐさまあの中に戻れば良かったと今にして思うんですが……あの時は状況が掴めなくて、とにかく斬らなきやとも思いましたえ♪」

アオイを除く、他の面子は怪我一つなかった。

あの白い胴体部分は、アオイ曰くかなり柔らかかったらしい。

おそらくそれが緩衝材となつて、中でもがいていた面子を守つただろう。

「いやまあ、正しかったと思うよ。正直、もうちょい暴れるんじゃないかと思つてたから」

地面に落下した『天使』はその後ももがいていたが、アオイが返す刃でもう片方の翼を斬り捨てると、そこから中のジェル状の液体が零れながら、グズグズとしぼんでいったのだ。

で、中にいた全員の脱出を確認してからヴィレッタの一撃でトドメ。

本当に、思ってたよりも呆気ない幕引きだった。

「まあ、彼女が起きれば何か分かるかもしれませんがねえ」

「……そうだね」

苔を積んだ簡易ベッド。

広く敷くために浅くなってしまい、少々不格好のその上に、一人の女が寝ている。

昨日まではいなかった顔だ。

白くて高そうなスーツを着込んだ、白い髪の女性。

一瞬老人かと思ったが、顔立ちは若い。

多分自分より少し上くらいだろうか。

「うーん。俺の世界の人だと思っただけ」

「あの綺麗なお靴と、足がピッタリ合いましたからねえ。顔に見覚えは？」

「ないような……あるような……」

気付けたのは本当に運が良かった。

ヴィレッタのトドメの一発——圧縮した空気による砲撃とは思えない威力の一撃で身体の大半を喪失した『天使』だが、まだ少しだけ残っている部分があった。

その中にいたのが彼女という訳だ。

「アオイ達を襲う前にあの白い奴が襲ったのかな」

「んんんんん。多分？」

「むうん。それで中にいたのがあの人一人って事は、クラウみたいの後から来たのか、それとも他に人がポツポツどこかで生活しているのか……」

「私としては心底どうでもいいというか、むしろいない方が助かるんですけどねえ」

他の皆がシエルターの材料集め、及び飯の調達に出ている間に俺たちが何をやっているかといえば、身体を休めながらシエルターのフレーム作りである。

そして俺とアオイがこうして拠点に残って作業をしている理由は単純で、アオイは『天使』との闘いで、俺はそれに加えてヴィレッタとの小競り合いで負ったダメージの回復に努めるためである。

まあ、ヴィレッタとの一件はスキルの事を除いてまだ誰にも話していないが。

「いない方がいい?」

「百歩譲って人が増えていくのは仕方ないとしても、出来る事なら一人一人こちらで取り込んでいく形が一番ですねえ」

「つまり……他の先住者やグループがいるのは嫌って事?」

「はあい♪ 絶対に面倒臭い事になりますう♪」

ナイフや短刀を使って丈夫な木の棒を削って形を整えたり先端を尖らせているアオイの横で、俺は紐を編んでいる。

一応生き残った紐もあるのだが、あの突風でバックパックが吹き飛ばされ、中身が四散してしまったのだ。

布とかの分かりやすい物はいくつか回収できた。

だが、あんだだけ苦労して作った縄の束なんかが、かなり遠くに吹き飛ばされてしまったのか行方不明なのだ。

畜生、この作業って大事だけど面倒なんだよなあ。

「なんにせよ、とにかく今日の寝床と食事をなんとかしないと……なんだか振り出しに戻った気分だよ」

素焼きの壺がひとつ残らず木っ端みじんになったのもキツイ。

あれがあるから水汲みとか楽なんだけど……折り畳み傘も骨がぶっ壊れてバケツ変わりはもう無理っぽいし。

やべえ、早い所また色々整えないと……。

「んー、まあそうなんですけどお」

ずっと刃物を扱っていたアオイが、刃物をそこらに置いて、いつもの刀だけを腰に下げて俺の隣に座り直す。

服はこの間着替えたジーンズやポンチョではない。

それらは乾かしていて、今は以前と同じ和服っぽい姿だ。

「こういう時間、やっぱりいいなあって思うんですよお」

「こういう時間？」

「というか、アオイさんちよいと近くないかい？」

「まあ、今自分女だけどさ。」

「貴方と一緒に、生きるために何かを作ったり用意するこの時間。私、すごく好きなんです♪」

「だから、やめようよ。そういう事言うの。」

「ドキつとしちゃうじゃん。」

「まあ、なんにせよ……今はちゃんと生きれる環境を作らないとどうしようもないですからねえ」

「それな。」

「ホントそれな。」

「ああ、そうだ。ツールさん」

「ん？ なに？」

「すみません、さつきからずっとお聞きしようとタイミングを計っていたのですが、なんだかこのままズルズルいっちゃいそうなので……今、よろしいですか？」

「うん」

「なにか、お悩みになってます？ あるいは、後悔でしょうか」

「……こやつは本当に。」

「わかっちゃおう？」

「はい、わかっちゃいます」

「いつぞやのアシユリーの様に俺の太ももに、アオイが手を乗せる。なんとというか、コイツの触り方って自然なんだよなあ。」

「もちろん不快ではないし、それに違和感もない。」

「……ヴェレッタと戦った」

「胸の内に収めておこうか迷ってた事を口にする。」

「アオイは少し息を呑み、すぐに俺の身体——皮膚が見えている所に視線を這わせ、」

「自己再生が働いているようですが、大丈夫ですか？」

「ああ、大丈夫。問題はないよ」

ヴィレッタがスキルを使えるようになった事はもう皆知っている。アイツが持っていないはずのライフルをぶっ放した事で、ある程度の事は話したのだ。

まあ、アイツが俺を襲った事までは言っていないが……。

そうだな、アオイには——コイツには言っておかないといけない事だった。

「理由はトールさんの殺害……いえ、それはないでしょうから……確保ですか?」

「ああ。詳しくはまた、確実に二人になれるタイミングで説明するけど……」

精神的にさうとう殺されたけど……まあ、そこはさらっと流していだらう。

「それで、まあどうにか対等になれるフィールドに持ちこんで戦ったんだけど」

「一方的にボッコボコにされたんですね」

「……………うん」

いやまあ、それ以外の結果なんてあり得ないけどさ。

俺、ここでの生活で少しずつ痩せてるし、向こうは軍人——しかも人間じゃないし。

「トールさんが無事にいるのは……まあ、スキルの影響でしょうけど」  
アオイは、俺の膝の上にあった手を上げて、今度は俺の頬に這わせる。

「トールさん、ひよつとして反撃した事を悔やんでいます?」

ホントにお前さんは鋭いな?! いやちよつと違うけど!

「反撃……というか」

「というか?」

「……力で抑えつけちゃった」

出来る事なら一番取りたくない選択肢だった。

それをする事は、正直自分の中で最大のタブーだった。

だけど、文字通り他に選択肢がないと思って……いや、本当にそう

だったのか……

(言い訳だったのかもしれねえなあ……アレは)

「ん~~~~」

アオイは俺の後ろに回り込み、そのまま背中から俺を抱きしめる。  
うん、ちよつと待って。

俺、男なんだからさ。

アオイみたいな娘にこういうことされると色々ヤバ——ああ

……俺、今は女だった。

「貴方の好きな所なんです……濃くなれば毒になりかねない、か」  
ねえアオイ、腕に力入れちゃだめだって。

昨日までの服装ならともかく、今は薄い着物なんだから。

「トールさんトールさん」

「ん？」

「トールさんは、自分の信じる正しい事を行った。ですよね？」

「……あくまで自分自身の、だけど」

「ええ。言葉では理解してるけど実感がない……と言った所ですか  
ねえ」

表情は見えない。当然だ。俺の後ろに顔があるんだから。

ただ、声に限って言えば、いつもよりも優しい感じがする。

「でも、それは他人にとってはどうなのか分からない。例えば、トール  
さんがヴィレッタさんをかばった結果、ヴィレッタさんが他者を襲う  
可能性がある」

「……………」

実際、アイツはあの天使の中にいたんだろうアオイ達を撃ち抜こう  
と計画していた。

「アオイは、ヴィレッタを排除するべきだったと？」

「いいえ？ 貴方がそうしたいと思つてまた命と身体を懸けたんで  
す。全力でそれを支える覚悟はしています。ですが……」

アオイは珍しく困ったような笑みを浮かべたのだろう。耳元で、そ  
んな感じのため息の音がした。

「トールさんは、自分にとって何が一番大事ですか？」

「それは……」

なんだろう？

いや、言葉には出来る。文字には出来る。

皆だ。皆と一緒に……ああ、だけど。

「皆が大事。ええ……私にはよく分かりませんが、そういう考え方がある事は理解できます。でも、出会う人全員を背負うおつもりですか？」

「……うん」

「それは近い将来、修正が出来ない程の破綻をまねきますよ？」

「破綻？」

「ええ。ツールさんにぶん投げている私が口にするのはおこがましいのですが、ツールさんへの比重がおかしい事になっていきますからねえ……スキルの事も含めて」

「スキルに関してはヴィレッタもいるし、もうちよい分かる範囲も広がるんじゃないかなあ」

……正直、スキルに関してはいまいち分からないというか、ほぼ全てが謎であるが……。

正直、習得スピードではアイツの方が上だし、性格とか思考とか問題点はあるけど、スキルに関してはアイツの方が重要度上だと思うんだけど……。

「むしろ、ヴィレッタさんがスキルを手に入れちゃったからこそ、ツールさんの重要度が増したんですよ」

抱きしめたいのかと思ってたら、ググツと軽く肩を回された腕に力が入りずると頭が下に行つて、ついにはアオイのお腹の辺りを枕にする様な態勢になる。

「多分、純粋な戦闘力での一番はヴィレッタさんになりました。連射式の銃火器程度なら私の刀でも対処はできますが、あの光る銃……れーるがん、でしたっけ。あれを使われたら回避するのも難しいでしょう」

うん、まあ。

あれを向けられたらつて思うと怖いけど――



「でも、その制御をしているのはヴィレッタさんじゃない。貴方ですよね？ トールさん」

「ああ」

ヴィレッタのスキル使用は完全にこちらで掌握している。

向こうがスキルを使おうとしたら、俺の目にアナウンスが出てくる。

「貴方の行動には敬意を表します。どうやったかわかりませんが……まあ、多分クラウさんの時のように、

身を削つてあの人を止めたんでしょう。ですが……」

アオイの手櫛が、少し長くなつた俺の髪を梳かす。

「これから先、同じようにトールさんが何かを背負う。いえ、背負つたふりを続けていると、思わぬところから綻びが始まると私は考えています」

「……ふり？」

ちよつとムツとして聞き返すが、アオイはこれを見事にスルー。

揉みほぐすように指に適度に力を入れながら、アオイは続ける。

「皆帰るためか、あるいはそれ以外の野心……いえ、私的な感情で貴方を利用しようとしている。あるいは……貴方にすがっている」

アオイが、髪を溶かし、頭も揉む手とは違う手で刀を下ろし、横に置く。

「それぞれに……なんていうんですかね？ 動機とでもいうものがあります」

どこか自嘲めいた笑みを浮かべるアオイは、いつものニコニコした顔とは違う。

何度か目にした、温かい笑みだ。

「トールさん、皆はある意味で貴方が大事です。そして貴方は皆が大事。ですが、この『大事』は釣り合わない」

ですよね？ 言いたげに首をかしげながら、アオイが俺の顔を覗き込む。

(まあ、向こう側は打算があるからなあ……)

そんな事を考えていると、アオイが指で軽く俺の額を弾いた。

「……痛いんだけど」

「ズレた事を考えているっぽかったので罰です」

……さいで。

「トールさんにとって大事な物、他の誰かにとって大事な物。これらはそもそも、等価値であって等価値ではないもの」

「……うん」

「トールさん、もし、貴方が本当に『いい人』として誰かの何かを背負うと言うのなら、それを理解する必要がありますよ」

「……………」

「分かっているつもりだから、ピンと来ませんか？」

……うん。正直。

ただ、アオイの言葉のいくつかにイラツとしたり、ムツとしたりした。正直、今も少しムカムカが消えない。

だが――

怒りを覚えたという事は――つまり耳が痛かったという事は……何かしら思う所が、自分の中にあるのだろう。

「んくく。私はトールさんの信じる正しい事に救われました。ええ、それは間違いありませんが――」

「トールさんの思う『正しい』って、多分凶器になりやすいものです。気を付けた方がいいですよ？」



資材集めは、労力がある大切な仕事だ。

使えそうな木材を、一度に大量に運ぶ手段が今はないため、どうし

ても往復する必要がある。

ただでさえ重い物を運搬しなくてはならない上に、それを探すために足も使う。

「あ……うう……っ」

だが、今こうして一人の女が倒れているのはそれとは関係ない。

藍色の髪の女は、金髪の少女に組み伏せられていた。

「いやあ、きつとツール君にちよっかい出すだろうなあっつとこまでは当たってたツスけど、そこから先はボクの予想を超えてたツスねえ。ボク達……いや、ボクの暗殺を考えてたツスか？」

テツサが組み伏せているというよりは、後ろから抱きしめているといったほうが正しい。

「まあ、意識部分の基礎プログラムを掌握しようとした人間は消すのが当然ツスよねえ」

ヴィレッタの身体に這わせている腕にまったく力は込められておらず、肩やお腹、そして胸を無遠慮に触っている。

「まったく、本当なら今頃ヴィレッタさんを完全に掌握して楽できていたはずなんスけど……ツールくん、優しいツスからねえ」

テツサはヴィレッタの服——かなり身体にピツタリとしている特殊生地の中に手を入れて、さらにヴィレッタを抱き寄せながら、軽く彼女の耳を噛む。

ヴィレッタはビクツと肩を振るわせるが、零れる吐息以外になにも口にしない。

いや、声を出そうとしているはずなのに出来ないのだ。

「ま、この手でちやくくんと仕上げが出来るって事でいッスかね。どうやら、ツール君へのちよっかいで更に面白い事になったみたいですよし」

テツサは、さらに服の内側へと手を伸ばし、胸元を撫でる。

ビクンと身体を振るわせるヴィレッタだが、やはり抵抗らしい抵抗を見せない。

先ほどまでは力なく動いていた両手が、ダランとぶら下がっている。

「まま、隊長から詳しい話を聞くようにと言われてるツスけど、どこまで話すか調整しなきゃいけないツスからねえ」

そのぶら下がった腕、手の近くには、拳銃の形をした注射器が転がっている。

つい先ほど、使用した空っぽの注射器だ。

テツサが、ヴィレッタに。

「さてさて、ナノマシンの浸食までもうちよつとかかりそうツスけど、先に情報抜かせてもらおうツスよ?」

そうしてテツサは、一部が機械化している自分の右の手首から接続端子を射出し、ヴィレッタのこめかみの部分にそれを突き刺す。

「ああ、大丈夫ツスよ?」最初は自意識全部かつさうつもりでしたけど、トール君がスキルかなにかで変異させたボクのプログラムの上り手い事効いているみたいですし、今の調整が終われば少なくともトール君とボクには逆らえなくなりますし」

テツサは左手でヴィレッタの乳房を愛撫するように手を這わせながら、軽く耳を食む<sup>は</sup>。

ヴィレッタは身体を跳ねさせるが、声らしい声を出すことはない。「いやあ、でもやっぱりトール君は凄いツスねえ。ううわ、ここまでされても折れなかつたツスカ」

テツサの眼は、あたりの木々はおろかヴィレッタも映していない。

ヴィレッタの視覚情報メモリーを読みこんでいた。

「ふむふむ。なるほど、あの旧式ケータイデンワがスキルの媒体になつてるんすねえ。スマートフォンにガラケー……共通点は通信用デバイス。いや、多分それ専用じゃないと駄目なのか」

もし通信デバイスというだけでこのスキル関連の通達が来るといふのなら、少なくともヴィレッタにはもつと早くそういう変化が起こつていてもおかしくない。

テツサ達のサブブレインにはそういう機能があるのだから。

「さてさて……問題はスキルの意味と、あの白い化け物」

もうじきヴィレッタに関しての全てが終わる。

あとはリーダーの彼に任せておけばいいだろう。

「ボク達を無差別に転送、あるいは召喚したというには作為的な物を感じんすよねえ。ツール君以外の面子には特に」

ヴィレッタの視覚情報に残っているツールの様に、ビクビク身体を痙攣させ始めるヴィレッタを抱きしめたまま、テツサは思考を巡らせる。

腕の中のヴィレッタは、もはや抵抗の意思を見せない。

「この世界がなんなのか。なんて疑問は今更ツスけど」

テツサにとって、もはやヴィレッタは脅威ではない。

完全にヴィレッタという『兵器』は手の内にある。

彼女にとつて最も気になる事はただ一つ。

「ボク達に何をさせたいんすかねえ。この世界」

第三章：レッツ開拓！ 海はすぐそこだ！

061：新しい始まり（副題：三組に別れての行動・調査・暗躍）

暗い夜の帳の中、月明かりと遠くの焚き木の微かな灯りだけが海辺を照らしていた。

離れた所には、この場で戦った男と女達が寝ている。

そう、この海辺、——この浜辺は戦場だった。

そこには敗者の残骸が転がっている。

翼を持っていた白い球体。

今では翼は斬り落とされ、無数の唇が生えた白い球体も剣士に斬り裂かれ、ガンナーに撃ち抜かれ、無様な姿を晒している。

かつては歌で人を取り込んでいた個体が、しばし波の音を受けながら横たわっていると、小さい変化が起こった。

ヒビだ。

白い球体——刃や弾丸を受けながら、それでも美しいままだった『肌』にシワが……いや、罅が入る。

どこか瑞々しさを残したまま脆くなった皮膚は、やがてドロリと溶けだす。

ゆつくりと、徐々に、確実に。

液体となって砂の中へと消えていき、その姿が消えていく。

そうして朝日が昇り始める頃。

最後に残った部品——何もかもが白く染まった携帯電話だけがその場に残り、そして突然粉々になって消えていく。

後には、もう何も残っていなかった。



「あのデカブツどこ行つた……」

ある程度の復興作業を終えて、そろそろ本格的にあのデカブツの調査に入ろうとした矢先に奴が消えていた件について。

「まさか、まだ生きていたのかな？」

「いや、それはないだろう」

男物の服を着ていながら、一目——具体的には胸部——で女だと分かるクラウが、浜辺を探索しながら断言する。

「もし、あれが生きていたというのならば多少なりとも動いていたはずだ。だが、ここ数日は完全に活動を停止していた。……アオイ君やテツサ君、ヴィレッタ君もそこらは念入りに確認していたはずだ」

万が一に備えて、通じるかどうかは分からないがゲイリーが作った弓を手にしたクラウが辺りを警戒しながら、それでもそう断言する。

「確かに、アレは中々に未知の生物……といつていいかどうかは分からないが、再び動くような気配は無かつたと思う」

「じゃあ、どこに？」

「単純に、活動を止めた事であの身体を維持できなくなつて完全に崩壊した。……とかじゃないかな」

なんとなく、あの唇だらけの巨体がグズグズと腐り落ちて砂浜に溶けていく光景を連想して、思わず足元を再確認する。

今立っているなんの変哲もない普通の白い砂浜が、あの『天使』の身体が粉になつたもので出来ている。

そんな想像が頭に浮かぶ。

「……突然復活して第二ラウンドとかにならないだろうか？」

「仮に出てきたとしても大丈夫だろう。一番の戦力であるアオイ君は同じ敵が出てきた時に備えて耳栓を作っているし、なにより君とヴィレッタ君には効かなかつたのだろうか？」

浜辺には、昨日テツサが何らかの目的で波打ち際に突き刺していた棒が数本立っている。

それ以外にはなんにもない。

「歌を聞いたなら、着いて行かないやと思った……だったか」

「ああ。最初に気付いたのはゲイリー君だね。歌が聞こえた気がする  
とフラフラと離れ出した所を、アオイ君が追いついた所二人とも帰っ  
て来ず……まあ、そのまま私達も『歌』を耳にしてしまったというわ  
けさ」

「歌……ねえ」

確かにあの夜、アイツは俺たちの頭上をクルクル舞いながら歌って  
いた。

そうか、アレは俺たちに聞かせていたのか。

それである突風というか衝撃波で攻撃してきたのは、俺とヴィレッ  
タに『歌』が効かなかつたらか？

「死体をサーチしても何も分からなかつたしなあ」

そう、なんにも出なかつた。

死体——と呼んでいいかはともかく、アオイ達を捉えていたあの  
『天使』をサーチで調べたところ、意味不明な言語というか、バグった  
ような文字列が並ぶだけだったけどとにかく反応はあつたのだ。

だが、今ではなんにもない。

砂を詳しく調べても、『●●貝の欠片』や『●●珊瑚の欠片』といっ  
た感じに、おそらく白砂の元になっているのだろう物を説明する文章  
が文字通り視界と脳処理を埋め尽くして、さつきは一回倒れてしまっ  
た。

クラウには迷惑かけたなあ。

「アオイ君の話だと、歌を聞いてから意識が無くなるまでの間にタイ  
ムラグがあつたそうだ。その間に耳を詰めれば恐らく大丈夫だと  
言っていたよ」

「アナログすぎるにも程がある……」

「他に思いつく対抗策がないだろう？ 強いて挙げるならば、歌が聞  
こえた瞬間、それが通用しないヴィレッタ君をぶつけることだ。彼  
女、リーダー君のペットなんだろう？」

「言葉を選べっ!!!」

その言い方だと、俺が薄い本の悪役主人公みたいだろうが！



「……スキルが競合したかなんかで、戦闘関係のスキルの使用には俺の許可がいるってだけだ。他にはないよ」

という苦しい説明でなんとか皆には納得してもらおう事にした。

いやだって、そもそもスキルがなんなのか分かってないし、こういう事になったのも意味が分からないし。

なにより――

(いやホント、多分ヴィレッタとやりあったのがきっかけだったんだろうけどさ)

スマホを取り出し、起動させる。

今までと同じ、ディスプレイとは違う文字が浮かび上がる。

今までと違うのは、表示されている内容だ。

これまでなら自分自身が習得したスキルか、覚える事ができるスキルが出てきた。

それが、今ではこうなっている。

・ツール ・アオイ ・ゲイリー ・アシユリー ・テッサ ・ヴィレッタ ・クラウ ・(未登録個体)

そう。自分も含めた、今この場にいる仲間たちだ。

未登録個体というのは、恐らく天使の中から出てきた白い髪の女性だろう。

そこまではいい。問題は続く言葉だ。

――スキルを習得させる個体を選択、及び習得させる内容を入力してください。

止めてください。どう考えても火種です。



「ゲイリーさん、この作業って何か意味あるんですかあ？」

「ああ。役に立つというよりは確認のための物だが……。テツサの勘も馬鹿に出来ないな。アシユリー、杭を頼む」

「はいはい、波が来ない辺りに打てばいいのね？」

これまで肉食の獣にすら遭遇した事がないサバイバル生活だったが、予想外の脅威が現れたおかげで探索の重要度は跳ね上がった。た。

それも、少人数では万が一に対応できない。

拠点を離れる時は、出来れば三人以上。少なくとも単独行動は厳禁。

これが先日の会議で決まった出来事だった。

もつとも、今三人がいる所はさほど拠点から離れている訳ではない。

それなりに歩きはするが、遠いとも言えない程の浜辺をずっと歩いていた。

時折、浜辺に杭を深く打ち立てながら。

「あの天使の事も気がかりと言えれば気がかりだけど、地形の把握は大  
事よね」

「地形の把握というか、この場所の不自然さの再確認というべきだが  
な」

「そんなにこの海っておかしいんですかあ？」

ゲイリーは塩を取る関係で海には詳しく、アシユリーは基礎教育で海という物を知っていた。

唯一、山育ちでかつ内陸の都市部で生活していたアオイだけが、海という物を知らなかった。

「そういうえば、アナタは海を知らなかったのよね。これだけ広大な物を見て、なにか感慨とか湧かないの？」

「そうですねえ、塩が取れるって言うのはツールさんから聞いてましたので、重要性は理解してますよお？」

「……………いや、そうじゃなくて」

呆れた目をするアシュリーだが、アオイはその意図が分からないのか。ピヨコンと飛びでたひと房の髪をヒョコヒョコ動かしながら『んくく?』と考え、

「ああ、すみません。そういうことですか!」

「そう、そうなのよ! 極普通に思った事を——」

「美味しいお魚が取れる可能性が高いって聞いて楽しみにしています!

美味しい物を手に入れる手段が増えるのって貴重ですよね!」

頭を抱えるアシュリー、気の毒な物を見る目を向けるゲイリー。

そして再び首をかしげるアオイ。

「まあ、とりあえずその事は置いといて……この海の何がおかしいの? って話だったわね」

「あ、はい。私、知っての通り海に関しての知識がないのでえ」

「ああ、それはよく分かったよ」

ゲイリーが、少々汚れた手を海水で洗い、その指先を軽く舐める。

やはり塩気が強いようで、顔をしかめるが、同時にこれが海水である事を再確認していた。

「やはり海である事は間違いない、か。ひよつとしたら、ただ馬鹿でかいだけの湖という可能性もあったのだが」

「まあ、潮の香りもするしねえ。となると、テツサが最初に思った通りなんだけど」

アシュリーがこれまで歩いて来た道を振りかえり、それに続くように二人も振り変える。

そこには、これまで突き立ててきた杭が刺さっている。

今差している物、昨日差したもの、一昨日差したもの。

それぞれ立てた時間は違う物の、それらはほぼ綺麗な直線で結ばれる。

「これだけの波があるのに潮の満ち引きがないのよ、この海」

「……あの、満ち引きってなんですかあ?」

「……………ああ、そこから説明する必要があるのか?」



これまでツール達と共に暮らした拠点と、今の拠点には大きな違いがいくつかある。

その筆頭が日光だ。

これまでは森の中だったために、普通に活動する中でも目をさえぎる場所はいくらでもあった。

だが、今いるのはかなり樹木量の減った林の中。

それも少し歩けば遮るものが完全に無くなる野原が広がっている。つまり、直射日光対策はある程度必要だった。

「この帽子もツール君の世界の奴なんスよね？ この模様……森林での隠密活動用のものツスカねえ」

「迷彩柄と言っていたからそうなのだろう」

頭にすっぽりと収まる迷彩帽を被ったテツサは頭の型に合うようにちよいちよい帽子を調整し、ようやくおさまりが良くなったのか満足そうにニコニコしている。

「さてさて、ボクの勘が合ってれば海の方もおかしいハズなんスけど……そうだったらどうするツスカヴィレッタさん」

「知るか」

「おっと、ツレないツスねえ……」

表情を消したまま、以前の拠点での作業場や食事場と同じものを組み立てるヴィレッタ。

今は、調達してきた草を編んで屋根に当たる部分を作っているところだ。

森の中でもそうだったが、寝床以外の日差し避けの場というのは

あつて損は無い。

「にしても、この女の人も起きないツスねえ。さつさと起きて色々話してほしいンスけど」

「構成要素は不明だが、抜け落ちた髪を調べる限り、どうやらあのアンノウンと同じ物で出来ている」

「……最初っからそうだったのか、後からそうなったのかでかなり変わるツスけどね」

「今の内に確実に殺害しておいた方がいいのではないか？」

「隊長と一緒にそう提案して、トール君に却下されたじゃないツスカ」

「アレは甘すぎる」

「そうツスカね？ まあ、その甘さに助けられている時点でヴィレッツタさんはもうダメダメツスけど」

「……………」

特に日差しの対策など必要ないヴィレッツタだが、少なくとも仕事で手を抜いている様子は見られない。

普通の人間では出せないだろう速度でテキパキ草を編み込んでいく。

「まあ、おかげで今は一番便利な存在になってくれたわけツスけど」

「黙れ」

「はいはい、まあ、ボクが同じ事言ったら本当に黙るのはヴィレッツタさんの方なんスけどね」

「……………くそっ」

人に似せて作られた機械であるヴィレッツタは、純粋な個体としては人よりもはるかに頑強で強い。

アオイという例外こそいるが、その気になれば一人でここにいる人間は敵わないだろう。

だが、そのヴィレッツタが今ではその誰にも害を成すことはない。成す事が出来ない。

「テツサ」

「なんスか？」

「お前は、トールという人間に何を求めているんだ？」

ヴィレッタが作業する横で、汚れてしまった衣類や布の洗濯——正確には渴き切った衣類を畳んでバックパックに詰めていたテッサはちやうど最後のシャツを詰め込み、

「んー。ボク達のまとめ役として頑張っしてほしい……って事を聞いているんじゃないツスよね？」

「当然だ。私は、その更に先の事を聞いている」

とりあえずの屋根にする部分は完成したのか、今度は木材を支柱として地面に突き立てて様子を見ている。

この作業もえらく早い。

「帰還手段を見つける。我々三人の目的はバラバラだが、そこだけは共通のはずだ。なら、その先は？」

「んっふふー。分からないツスかあ？ まあ、感情とか思想って物に疎いヴィレッタさんならしやうがないと思うツスけど」

テッサは、隠し持っていた拳銃を手の平の上でクルクルと回す。

これまでは隠す必要があったが、もう必要ない。

その気になれば銃火器を作り出せる女がいるのだ。

それに、この場に誰もいないことは確認済み。

「ボクはツスね、ヴィレッタさん。ボク達の世界には象徴が必要だって思うんスよ」

「象徴？ 何についてのだ？」

本来ならば何度か支柱を差し直したり、予想とズレて設置位置を考えなおしたりするものだがそのようなタイムロスは一切ない。

電子頭脳、そしてそれと直結している機械の身体を持っているが故の計算の速さと正確さである。

「わかんないツスか？」

「わからんから聞いている。これが会話という物だろう」

「まあ、そうツスけど」

テッサはバックパックを一度背負い、耐久性に問題ないか確認するように二、三回びよこびよこ飛び跳ねている。

ヴィレッタはなんとなく、ツールがここにいれば目の前の少女から目を離さなかっただろうなと考えていた。

主に、揺れている一部を見ながら。

「ま、今は内緒ツス」

「今は？」

「秘密のままって訳にもいかないツスからね。ツール君を襲った件は、ボクにとつてはもう終わったこと。ヴィレッタさんとも仲良くしていききたいツスから」

ニコニコと、それこそツールやゲイリーあたりならば騙せそうな人懐っこい笑みを向けられたヴィレッタは、顔にこそ出さないが声は明らかに不快そのものだった。

「テツサ」

「ういうい、なんスか？」

バックパックを背中から下ろし、被っていた帽子を脱いでわきに挟み、もう片方の手で自分の髪に手榴弾を入れたり汗を拭ったりしている。

絵になる。

ヴィレッタはそう思いながら口を開く。

「お前、まさか——」

テツサはツールという男を連れ帰りたいたいと言い、アオイはツールという男と共にここにいたいと言っている。

つまり、相いれないのだ。テツサとアオイという二人の女は。

少なくとも、今の所。

「私を武器とするつもりか？」

アオイという女と戦うための。

そうヴィレッタが問いかけた瞬間、テツサはニツコリと笑って

『跪け』

たった一言、そう命じる。

途端に、支柱や支えを組み合わせていたヴィレッタが、まるで地面に膝蹴りを喰らわそうとしたような勢いで両膝立ちになる。

本人は反射的に立ち上がろうと脚や腰、しまいには両手を付いて四つん這いの様な態勢になってまで力を入れているのだが、膝から下はビクともしない。

「きさ——ングツ！」

テツサに対して何を言おうとした瞬間、ヴィレッタは地面とキスをする羽目になった。

テツサが思い切り頭を踏みつけ、そのままヴィレッタを土下座させるような形に押さえつける。

「それ以上はダメッスよヴィレッタさん。ツール君曰く、口にした事は本当になるコトダメっていうのがあるらしいッスから」

ジャリツジャリツ、とテツサがヴィレッタを踏みにじる。

ヴィレッタが抵抗しようとしているのは分かるのだが、力んだ手足が震えるだけで身動き一つ取れない。

テツサが「そのままでもいいですかいッスね？」という地震えすら無くなり、完全に無力化されたただの人形が地べたに転がる事になる。

テツサはその場にしゃがんで、ヴィレッタの髪を掴んで持ち上げる。

端正な——いや、端正に作られた顔が土で汚れている。

「く……そ……っ」

悔しそうに睨みつけてくるヴィレッタの顔を更に引き寄せる。

罵倒の後に何かを続けようとしたヴィレッタの口は、軽くあえぐだけで声らしい声が出ていない。

「どうしたんスか？ 喋る事は出来るはず……ああ、さっきのボクの言葉がダメだったんスカねえ？ なるほどなるほど」

ふうん？ とテツサは顔を近づけたと思ったならヴィレッタの首元、肌が露出している部分に軽く唇を落とす。

そしてすぐさま——全力で歯を立てた。

「うあ……ああっ……あっ！」

テツサは、ヴィレッタの反応を楽しむように噛むのに強弱を付けて遊ぶ。

そして一通りの反応を楽しんだテツサは口を開け、しっかりと付いた自分の歯型を舌でなぞる。

「いやはや、元生身っていうならともかく生まれから完全に機械だつて言うのに……疑似五感つても困ったもんスよねえ？」



本来は自分の物である凸凹を確認するようにゆつくりと舌を進めるテツサ。

ヴィレッタは苦悶なのか快樂なのか分からないうめき声を漏らす  
が、手足は全く動かない。

「ヴィレッタさん、これ以上色々奪われたくないなら、あんまり口は開かない方が利口ツスよ？」

テツサは髪を掴みあげていたヴィレッタを横へと放り捨てる。

落とした衝撃で土まみれの顔が軽くバウンドするが、その後身動きも取れずヴィレッタは微かに息を荒げたまま身体を力なく横にする。

身体を起こそうとした瞬間にまた踏みつけようとしていたテツサだが、ヴィレッタがピクリとしか動かない。いや動けないのに気付くと、軽く鼻で笑う。

そして、軽く蹴り飛ばしてあおむけにさせると、勢いよくお腹の部分にお尻を下ろす。

がはっ！ とむせるヴィレッタに構わず、テツサは短めの髪をいじってから迷彩柄の帽子を被り直す。

「でも、ソツスねえ。正直、ヴィレッタさんにそうするように命令しても勝てるとは思いませんし、ツール君が介入したらそっちの方が優先されるようツスから……んくくくく」

わざとヴィレッタを苦しめるように重心を左右に振り、その度にあがる苦悶の声をBGMにテツサは思考に入る。

（でもソツスよねえ。仮にこのままアオイさんと敵対してツール君をかつさらっても意味ないツス。ツール君に悪い影響が出てしまう可能性が跳ね上がる）

むせる音が薄くなつたのが気に入らないのか、テツサはヴィレッタの喉に手を乗せ、徐々に体重を掛けていく。

それで苦しみを感じることはあっても、死ぬ事がない事を理解しているためだ。

（となると、やっぱりあからさまな敵対は悪手ツスね。今のアオイさんなら、こつちが意見を言った程度で殺しに来るとは思わないツスけど、ツール君にかなり依存しているのには変わりないツスもんねえ）

機械だから呼吸の必要はないはずなのだが、ヴィレッタは苦しそうにもがいている。

恐らく首に体重をかけている腕をどかそうとしているのだろうが、僅かに腕や足が震えるだけ。

そう。ヴィレッタという個体は、今完全に非力なただの人形なのだ。

「そうツスよねえ」

腰の位置をゆっくりずらして、仰向けのヴィレッタにまたがるテツサ。

首を絞めていた手をゆっくりと撫でるようにずらして、少しずつ服の中へと手を入れて鎖骨へ、胸へと服を広げながら手を伸ばしていく。

「やっぱり最初は話し合いから始めないと、痛い目を見るツスよ」

ろくに抵抗できないヴィレッタの微かな抵抗を楽しむように身体を撫でまわすテツサは、その様子を見て再び軽く鼻で笑う。

「ねえ、ヴィレッタさん？」

完全に見下した態度のテツサに、だがヴィレッタは何も言えず、何もできず、ただテツサが手を止めるのを待つしかなかった。

## 062：結局湖は重要だった件について

「というわけで、ね。とりあえずは食糧の調達にまた力を入れようと思っただ」

結局、あの白い『天使』は完全に姿を消してしまった。痕跡すら一切ないとか怖すぎて泣ける。

ぶっちゃけ、ヴィレッタには感謝している。

あの夜の戦闘、もしヴィレッタが俺を引つ張って回避したりしてくれなかったら、今頃問答無用で吹き飛ばされて即死していた気がする。

現実ではなかったあの世界では何回殺されても自己再生が動いてくれたが、さすがに即死したら多分ダメだろう。

「まあ、その前にツールさんは男の子に戻りましょうよ。明日には戻るんでしよう?」

「戻るよ! ちゃんと戻るから!!」

テッサが繕ってくれた女の時用の服は、やや大きめではあるもののダボダボのままよりはかなりマシである。

……やや大きめに作ったのは、万が一この服のまま男にすぐ戻る事がある可能性を考えたんだらうか?

うーん、ツールくんポイント追加。

「まあ、君の身体が変な事にならないのならそれでいいんだが……つまりはどうするんだ? 罨を増やすとか?」

ここ数日の間でもっとも多くの肉を、その弓矢の腕で持ち帰って来たゲイリーがそう尋ねる。

まあ、それでも小柄なヤギ一匹のみで十分な量とは言えない。

……ぶっちゃけると、ここ数日の唯一の成果と言っている。

「ああ、ゲイリーが獲物を仕留めてくれたおかげでとりあえずはなんとかなってるけど……ぶっちゃけ大分ピンチだ」

当初の予定よりも探索というか調査に時間を割いてしまった事も

そうだし、なにより罨の設置数が足りていない。

ゲイリーやアオイに食糧調達に出てもらったり、罨の増設を頼んでいるのだが……余り成果が上がっていないというのが実情である。

土魔法ならぬ整地魔法で道を作っている時に木の実や山菜を結構見つけたのが幸いだっただか。

「そうですねえ。一応川にもお魚さん用の罨を仕掛けてますけど、あんまり引つかかってませんからねえ」

「というか、先ほどリーダー君が持って帰ったあの小さい小魚だけだろう。肉がほとんどない……」

その通りでございます。

ぶっちゃけ、出汁になれたかも怪しいしな。

湖の時の拠点と同じく、屋根付きの焚火場でグルリと円になって鍋を囲んでいる。

違う点は、湖の頃に比べて食事がシヨボい事か。

……土器をやられたのが痛かった。

それに、茹でて食おうとしていた保存食も結構吹き飛ばされてしまったし。

「まあ、トール君が探索がてら道作りを頑張ってくれたおかげで湖までほぼ一直線で行けるようになったツスから、また向こうに戻る……とまでは行かなくても、罨を設置して時々回収しに行くというのは可能ツスよ」

「そうね。辺りは一応安全だろうって答えが出たんだし、なんなら2グループに別れて活動するのも悪くないんじゃない？」

それな。

というか、脆かったからしゃーないとはいえ水汲みや料理に使う水瓶が全て破壊されたから作り直さなアカンし……。

湖の方の拠点、シエルター以外の設備は残しておいて良かった……。

「とにかく、この拠点を充実させよう。この場所を選んだのは探索に適しているからだし、実際飯のタネは豊富なんだ」

アオイとかゲイリーを伴って探索している時に海の中に対して

サーチを何発かブツパしたのだが、ちゃんと食える魚が泳いでいて、貝や海藻が転がっている。

……今思えば、砂浜に貝とかを意識してサーチかけておけばよかった。

明日から時間があればやっておこう。

「そうね、アタシとしてもここを拠点にするのには異議はない。けど、せっかくなら、やっぱり湖も有効活用したいわね」

「湖を？」

「ええ。ほら、地下の件があるし」

「……ああ」

結局入口が見つからなかった地下空間。

あの後も出来るだけ調べてみたが結局侵入できそうな場所は見つからず。

もうちよつと本格的に調べるかどうかで意見が割れたのだが、結局より広い範囲の地理を把握したほうが全体的に特という流れに。

(まあ、海に凄く期待していたのは確かだけど)

正直、適当な魚くらいすぐに釣れるんじゃないかと思ってた。

ダメ。全然ダメ。まったくもってダメ。

もうね、全然釣れないの。海。

今の所一番の漁場は湖と、その出入り口になる川の辺りだったわ。

「まあ、とにかくそういう訳で、食糧対策に一旦全振りしようと思う。シエルター作製に作業場までは出来た訳だし、本格的な探索に入る前にここを万全の状態にしておこう」

具体的には、飢えたり凍えたりせずに住むくらいには。

移動が失敗だった気がしなくもないが、決めて行動してしまったからには仕方ない。

「さて、作業の分担をしよう。さつきテツサが言ってたけど、湖までの移動時間が当初に比べて確実に短くなってる。それで——」



「楽しみではあるけど中々にキツイんだよなあ、罾作り」

元の湖まで戻ってきた俺たちは、一度は回収した罾を設置し直していた。

以前は魚用のがほとんどだったが、今回はテッサの提案で獣用の罾も増設している。

まあ、実績があるため確実な魚用の罾を仕掛ける方に専念してるけど。

「口よりも手を動かせ」

「いやいやヴィレッタさん。自分も動かしてはいるけどアンタほどの速度では出来ないって」

本気のヴィレッタの作業スピードに追いつけて、それ人間止めるってのとほぼ同義だからな？

……あれ、ひよつとしてスキルで俺もそうなるのか？

「そういえばさ、ヴィレッタ。マジで俺の言う事には全部逆らえないの？」

「……………」一応そういう事も出来るが、この身体が望みか？」

「んなわけあるかあっ!!」

コイツは人をなんだと思ってるやがる！

俺がそういう人間だったらとつくに手を出してるわ!!

……………。

イコール、その場合とつくに俺、死体になってどっかに転がってそうだな。

「そうですよお！ もしトールさんがそういう人だったら、とつくにそこらに転がしてますう♪」

ほら。

(まあ、こういう躊躇のない所は間違いなくアオイの良い所でもあるんだよなあ)

なんというか、言動こそ確かに胡散臭くはあるが信じられる。やると言った事はやるし、やらないと言った事はやらない。

だから、アオイにはなにかと頼りっぱなしな所が多いのだが……。(かといって代わりに何かしてあげようとしても、身体も頭もスペック負けしてるからなあ)

ちよつと前に大きくて重い石を使ってそれぞれの体力というか腕力を比べたのだが、ぶつちぎりで自分がドベだった。

なんとなく納得いかなくてクラウと腕相撲してみたけど……。瞬殺されたなあ。

うん、なんというか……。まあ出来るだけ波風は立てないようにしよう。

スキルで強い力手に入れてくつていうのもなんかアレだし。

状況次第では考えるけど、身内にソレはあんまりやりたくないなあ

……。

「それにしても……。ツールはともかくアオイ、貴様まで私を放置するのは意外だったぞ」

「?。そうですかあ?。まあ、お話を伺った時はたしかに首をはねようと思いましたけどお」

知ってた。

あの説明会の時、なんとなくそう動くんじゃないかなあと思ってお話の時にはさりげなく間に立ってたのは正解だったんだと今確信した。

「まあ、今では完全にツールさんには逆らえないというのは間違いないと、この目で確かめましたし」

まあ、不意打ちで皆の前で土下座させて謝罪させたからなあ。

俺が一通り説明した後「とりあえず、改めて俺と皆に誠心誠意謝るように」って言ったその瞬間、その場に膝付いて土下座したのにはマジでビビった。

テッサは予測していたのか驚かずにいつも通りニコニコしてたなあ。

まあ、テッサ曰くアイツも俺に仕込んでたセキリユティの影響か、

ヴィレッタをある程度は管理できるようになったらしいし

「トールさんに二度と危害を加えられないのなら、まあ……特に、今後またあの怪物と遭遇することがあれば、トールさん同様にあの『声』が効かないヴィレッタさんは貴重な戦力で、便利な道具なんですからあゝ」

さりげなく人扱いしないという意味表示はおやめ下さい。

実質ロボットらしいけど、それでも人だから。人だと俺は思ってるから。

（大体、俺を何度も殺すって意味じゃあクラウドも同じだしなあ。今更というかなんというか）

肉や内臓食われた時点で俺はもう死んでるのと一緒だし。

まあ、悪意の有無ってのはデカイ……いやもう考えるのメンドクせえな。

「はいそこまで。とりあえず、ヴィレッタはハンディっていうかペナルティ背負ってやり直し。それで今回の一件は決着……ということにしてくれ」

アオイが言ったとおり、これから先万が一があつた時にヴィレッタの力が必須になるのは間違いないんだし。

（まあ、確かに危険人物と一緒に生活するのを強制してるっていう形になつてしまふしなあ……）

なんらかの分かりやすいペナルティを追加してもいいというか、そうするべきなんだろうが現状では思いつかん。

精々が飯抜きと労働の追加くらいか。

……一応ロボットであるヴィレッタに飯抜きって有効なんだろうか？

あるいは人間以上に致命的なのか……。

うん、やっぱキリキリ働いてもらう方向にしよう。

「はい！ トールさんの判断に従いますっ！ というわけで、これからも頑張つて働いて下さいね？」

めちやくちやイキイキしてるアオイと、対照的に淡々としているヴィレッタ。



……うん、まあいいや。

なんかかなるなんかかなる。

……なんかかしよう。うん。

「とにかく、罾の設置急ぐ。テツサの言った通りかなり早く来れたし」

まだ目印程度の整地とはいえ、最短ルートを迷わず進めるおかげで予想よりも早く湖に到着できるようになった。

もつとしっかり整地すれば、かつての拠点との行き来もかなり楽になるだろう。

……野生動物の巣になるのが怖くてシエルター壊したけど、今思えばしっかり蓋をすれば、かたても良かった気がする。

「そうですねえ」

そういつてアオイは、魚の罾の目印として立てる長い木の枝を使って、とある場所を差す。

「まあ、ここも期待できる狩り場になったようですしねえ」

そこはなんて事のない地面だ。

だが、そこに転がっている物は俺たちにとって貴重な情報だった。

何かの糞と、蹄の跡。

獲物の痕跡が、確かにそこに残っていた。

## 063…どんな時でも衛生を忘れてはいけません

『んー、多分鹿さんとかですかねえ?』

『分かるのか?』

『蹄の跡とかもそうですけど、この俵状の糞は凄く見覚えあるんですよ。子供の頃、お婆ちゃんにおやつとしてもらってましたしい』

『……………おや……………?』

『はい! 鹿さんって消化が悪いのか糞にもかなりの栄養が残っているので、新鮮なのはトールさんの言葉で言うサプリの感覚で食べてたんですよお♪ あ、良かったら試しにお一つ——』

『ソイツを拾うな! 拾うなよ!? 絶対だぞ!!?』

耳ではなく直接頭に響く声に、テツサは小さく笑う。

『あら、何かあったのかしら?』

『ツス。まあ、ちよつとしたトラブル……………じゃあないツスねえ。まあ、いつも通りツスよ』

アシユリーとテツサの仕事は、シエルターや作業場などの強化である。

以前作った様に、獣が餌の臭いに寄せられても大丈夫なような食糧倉庫を寢床から離れた所に作ったり、茨のような棘のついたツタを集めて寢床周りを覆ったりして簡単な防壁を作ったりしている。

グループとしての仕事は、寢床周りの安全の確保。

それとは別に二人は、兵士の仕事として情報の収集に当たっていた。

『どうする? 今のアナタなら、音声だけじゃなくヴィレッタの口を使ってトール君の行動とかもある程度コントロール出来るんじゃない?』

『正直、あんまり効果は期待できないツスよ? さすがのトール君も、ヴィレッタさんには警戒を持ったでしょうし』

『……………やっぱりそうよね』

アシユリーは小さく舌打ちして、状況をややこしくしたガイノイドを小声で一通り罵倒する。

「まさかAIが思考防壁を超えて成長するなんてね……。元の世界に戻ったらすぐに報告しないと」

「そッスねえ。でも、その情報を得た上でお偉いさん達はどうするんすかねえ」

手ごろな形の石を使って、地面を掘っていくテッサ。

テッサがやっている事は、ようするに窯の再現である。

本来は実際に作ったツールやアオイ達がやるべきだと思ったのだが、これも経験とツールから提案を受けていた。

どちらにせよ、ある程度の広さというか拡張性を持つ範囲を柵や茨モドキで囲うなんて一日や二日で出来る仕事ではない。

(んー、ツール君がグループの中でボクを比較的信じてくれているのは多分間違いないんすよねえ。その上でヴィレッツタさんの方が一の対処役にアオイさんを連れてボクが居残り……)

面白くない。認めたくないと思いつつも、テッサはそれを自覚していた。

既にやらかしている上、今回の事件も科学組がやらかしている以上、個人としてはともかくグループとしては確実に警戒される。

それが分からない程、テッサは馬鹿ではない。

「正直、戦争が長引きすぎていて一般層の生活を余りに長期間圧迫しすぎているッスよ。三等市民が飢え死ぬくらいならまあいいッスけど、それより上の市民を締め付け過ぎると……」

「でも魔術師達との講和は事実上不可能よ。アタシ達はあの大陸の資源を手放すわけにはいかないし、向こうは私達に今の技術を捨てさせたがっている」

「でもAIとの闘いまで始めると二面作戦になるッス。実質内乱をしながらの戦争ッスかね」

「……軍、民。どちらも更に苦しくなるか」

自分達が本来いるべき世界での、大乱の火種。

それは、テッサにとってどうでもいいものだ。

最後に全てをかつさらうのは自分達だ。

いや、違う。

最後に全てを手に入れるのは——塗り替えるのは、

「まあ、どちらにせよ帰らなくちゃ始まらないんすけどねえ」

「……例のアンノウンについて、何かわかった？」

棘だらけの植物を長時間扱うために用意した手袋——というよりはロープを手を巻き付けている手を振りながらアシユリーはテツサに尋ねる。

「なんにもツスねえ。アオイさんやツール君もですけど、クラウさんもアレには見覚えや心当たりがないそうツス」

テツサにとつてもアシユリーにとつても、現状最大の脅威といえるあの翼をもつ怪物は無視できるものではない。

可能な限り情報を集めようとするのは当然である。

「そう……。それじゃあ『テンシ』って言うのは？」

「さあ？　ボクもタイミング見計らって聞こうとしてたんすけど、復興作業やら食糧調達が忙しくて……。こう、タイミング逃したんすよ」

二人は共に、砂浜に横たわる化け物の姿しか記憶にない。

実際にツールと共にアレと交戦したヴィレッタの視覚・音声情報は引き抜いて共有しているが、逆に言えば分かるのはそれだけだ。

唯一残っているヒントは、あの化け物の姿を視認した時ツールが呟いた言葉。

『テンシ』という何かを指し示す言葉だ。

「それで、一応ヴィレッタさんの口を借りたり耳を借りたりして調べたんすけど……。ツール君の世界にある宗教のいくつかに出てくる存在らしいツス」

「いくつか？　……。ひよつとして、ツール君が信仰している訳じゃないのかしら？」

「ツスね。だからちよつと情報があいまいツスけど……」

「いいわ。別にあの化け物のヒントにならなくても、彼の中にある文化の解析は大事だしね」

二人にとって、ツールの懐柔は最優先事項と言える物だ。

帰還の鍵である事もそうだし、なによりもこの集団の要であり、楔でもある存在だ。

二人は共に確信している。

トールという男がいなくなった瞬間、今のグループは殺し合いになる。

「まあ、曖昧な情報ってことを念頭に置いてもらえばいいツスけど……要するにカミサマって人のお使いみたいな存在らしいです」

「? カミサマ?」

「トール君の世界の宗教の大体に存在する……なんて言うんスカね?

世界の創造者だったり調停者だったする信仰の頂点ツスよ」

「? 個人を崇拜してるって事?」

「いや、もつとふわつとしてるって言うか宗教に依るって言うか……まあ、色々あるっぽいツスよ」

「ふうん? なら、とりあえず大体のテンシのイメージは?」

「ちよつと待っててくださいツス。今、大体の視覚イメージと一緒に送るツス」

トールとヴィレッタの間には、スキルホルダー同士の奇妙な繋がりが構築されつつあるようだが、今いる面子の中でもつとも情報のやり取りで強いのはこの二人だ。

その内心はともかくとして、連携力という点では今いるキャンプの面子の中でも最高レベルである。

「……要するに、背中に翼が生えた人型?」

「創作物では女性で描かれる事が多いツスが実質性別はなく、まれに特殊な力を使う事もあるとかいう話ツス」

トールもあやふやな知識や伝聞を元に行っているためにふわつとした情報しかないが、それを元に二人はしばらくそれを煮詰めて、トールの世界に考えをはせる。

「——にしても、性別があやふやで特殊な力を使う人型の生物。翼もないし飛行も今の所できないけど……」

「??」

「つまり、トール君も今はテンシとやらと一部被るんじゃない?」

「……………ああ」

「言われてみれば確かにそツスね」



「湖までの一本道の途中にあるこの小さな川……。邪魔なだけかと思っていたが、どうやらここにも魚が住んでいるようだな。ゲイリー君、ここに罟を仕掛けられるかい？」

「む……。水かさがあまりないから、釣り針と餌を仕掛ける位しか出来んな」

クラウとゲイリーの仕事は、近場の探索と罟の仕掛けである。

要するに、危険な動物などがいないか調べながら、ついでにちよつとでも飯の種になるモノを増やしてこい。ということである。

「湖などで使っていた魚籠は使えないのかね？」

「……。出来ないことはないだろうが、こういう小川だと総取りになってしまうかねないし、魚の通り道を完全に塞ぎかねない。……。この状況下で贅沢を言っているのは分かるが、あまりやりたくないな」

自然の中で育ったゲイリーだから、むやみに大量の生物を捕獲するような事は避けたいのだろう。

「なるほど。……。確かに、この特殊な環境だ。しばらくは腹を満たせても、その後の収穫が激減する真似は避けるべきか。まったく、生きるという事は頭を使うな」

「お前の所はどうだったんだ？ とてつもなく巨大な木の中をくりぬいた所で生きていたと聞くが……」

「少なくとも、働いていれば食うには困らなかつたよ。……。自分の様な技術持ちは、だがね」

錬金術という特殊な技能を持ち、この環境下でもクラウは大変役に

立っている。

アオイやアシユリー達がこの世界に持ちこんで来た刃物の手入れに始まり、以前回収した黒曜石を利用したナイフの作製。強度の補強。

最近では食糧の不足を懸念するツールから、食糧の確保や保存についてあれこれ話し合っている。

食糧確保に使う罫の素材に関することや、シエルターなどの強化や増設について、クラウという女はツールにとって貴重な存在になっていた。

「基本的に食事は野菜がほとんどだった。なにせ木の上だ。家畜を育てるための餌だって育てるのに苦労する」

「……ふと思つたが、魚は食べた事あるのか？」

「少しだけ、だな。我々の所では比較的高級な品だった」

「となると、今の生活は文字通り夢のような物か」

「もちろんさ。最低限の注意だけで簡単に火が使えるなんて夢のようだし、好きな時に嫌というほど日光を浴びて新鮮な空気が吸えるなんて、極楽以外の何物でもない」

ヴィレッタが無表情というかぶつきらぼうな仮面を、そしてテツサやアオイのつけてるニコニコ仮面とは違い、こちらは笑みの仮面を張り付けている。

微笑みを張り付けているクラウは自分達の中でもっとも穏やかな印象のする女だ。

「お前はツールとよく話はしているが、具体的に何か決まっているのか？ 予定というか計画というか……」

「そこまでは行っていないな。とりあえず、何が出来るか何が足りないかの確認という事だ」

「つまり？」

「鉱石資源がないと大したことが出来ないということさ」

「……鉄とか、銅とか？」

「ああ、そんな所だ」

刃物の扱いに慣れていて、かつ手先も器用なクラウは手早く釣り針

付きの紐を数本結びつけたやや長めの紐の端に手ごろな大きさの石を括りつけていく。沈めるためだ。

「もつとも、大したことが出来ないだけで現状いくらでもやることはある」

「罨の強化もそうか……」

「石を削った物とはいえ、十分に使えるだろう？」

「そういったクラウは、釣り下げられている釣り針の一つを摘まみあげる。」

アシユリー達のサバイバルパックに入っていた物と同じ形の釣り針は、彼女達の物よりも輝きが鈍い。

「ああ、骨の釣り針よりも安心できるとツールが喜んでいたな」

「道具があればもつと簡単にたくさん作れるのだが……。まあ、少しずつ増やしていくとするさ」

「道具以外だと？」

「一応、簡単なレンガや瓦なら作れる。君達が以前作っていた壺も、もつと頑丈な物を作れるね」

「……住居の強化は今の所後回しだな」

「ああ。最低限とはいえ、寢床としては機能している。今はそれよりも食糧と、湖までの道の整備の方を優先するべきだと私は考えるね」

クラウの癖なのか、いつものように軽く鼻で笑う彼女は、それでもやや眉間にしわを寄せ、

「優先すべきするものは多々あるが、私としては、まず衛生面は強化しておきたい」

「……ツールか」

納得した顔で頷くゲイリーに、クラウも頷き返す。

「元々の生活環境がいたために、この自然環境に対応しきれていない……だったか」

「あの三人組の話がどこまで本当か信用はできないが……ツールがもっとも身体を壊しやすいのは間違いないからな」

「女性体になってからはなぜか中っていないようだが、それでも油断は出来ないからね。少しでも確率は下げておくべきだろう」



「それは分かるが、対策として何がある？」

「ふむ……そうだな、まずは」

クラウは、音を立てて流れる細い小川のほとりにしゃがみこんで、水を軽く手で掬う。

「まずは、もっとキッチンとした水の浄化から始めるとしよう」

## 064：整地魔法の活用……活用？

「浄水のためのろ過装置？」

「ああ。リーダーさんのスキルなら、前使ってたあの透明な器の奴より効率的な作り方が出来るんじゃないかって『私』は考えてるみてえなんだよ」

ここ数日のテッサ達の頑張りのおかげで少し湖の拠点に似てきた新拠点。

罨の方も徐々に機能し始め、どうにか手に入った魚や野草、果実でお腹を満たして夜の作業をしていると、クラウド：いや、クロウが声を掛けてきた。

俺？ 再び激痛に耐えてとりあえず男に戻って少し休んだ所だ。女になる時よりも痛みが凄くて、今日は碌に動けなかった……。

「そもそもペットボトルは持ちこんだ物だし……。んー、煮沸じゃ足りないか？」

「消毒って意味だと大丈夫だろうけど、いろいろ余計な物が混じっている事には変わりねえから……。ある程度ろ過した水をさらにガツツリ煮沸消毒する方が安全じゃねえかな。現にリーダーさん、最近は大丈夫だけどちよつと前までちよいちよい腹下してたんだらう？」

本来の人格である『クラウド』のトレードマークであるモノクルは、今は鼻の上ではなく彼女のポケットの中に入っている。

クロウなりの合図なのだろう。今は『クラウド』ではないという。

「朝露みてえに綺麗な水ならともかく、川の中じゃ色々いるからなあ。手洗いとかも、湯ざましした水よりも川の水でちよいちよいと済ませる方が多いし……」

「柄杓ひしゃくみたいな物もさっさと作るか」

襲撃によってほぼゼロからのリスタートとなった拠点設営は、当初の計画を大幅に変更し、ここ最近はとにかく運搬に必要な道具と罨に労力を全振りしてた。

なにせ一番頼りにしていた陶器の類は全滅。使いにくくはあった

が頑丈さでは一番だった学生鞆もおしやかだ。

前に洞窟で拾ったバックパックも一つやられたが、まあこちらは補修して今も利用している。

その結果、一緒に拾った服——つまりは貴重な布を使ってしまったが。

「しかし水の浄化か。一応、ペットボトルを使つたらろ過装置もあつたんだけど……」

「大きさに一度に濾せる量も微妙だったし、なによりそれでもリーダーさん腹壊してたんだろう?」

うーん、日頃から魚や肉は可能な限り火を通してているし、野草とかもじっくり煮て……あれ? やっぱり水か?

「俺のろ過装置が失敗だったってことかなあ」

「まあ、自分や『私』なりに考えてみた今度のろ過装置は、前よりは多少安全になると思う。煮沸と組み合わせれば尚更」

「なにか仕掛けを追加するのか?」

「いんや、物を追加する。錬金術をこっちで再現するのに必要だったし、ちようどいいタイミングだった」

「という訳で明日さ、『自分』か『私』で木炭を作ろうと思うんだ」



「おい、クラウ。お前なに作ってんだ?」

「傍から見ると、謎の儀式みたいッスね……」

本日の食糧調達班はアオイとアシユリーの二人。ゲイリーとヴェイレッタは途中まで作業を手伝いながら、その後湖周辺や例の不自然な岩場で黒曜石や使えそうな石を拾い集める役。

特に、道を拡張するための綺麗な白い石は集めておいてもらいたい。

ただの石でも出来なくはないのだが、やっぱり白い道の方が分かりやすくいい。

俺とテツサはもう一度素焼きを作れる環境を作り直してる。

窯は一応形は出来ているので、早速新しい素焼きの壺を作り始めている。

テツサは必要な粘土や水と一緒に回収してから、今は形作った壺を陰干しするための場所を組み立てている。

で、ちよつと離れた所で作業をしているクラウ。

今彼女が何をやっているかというところ、これまでの生活で回収していた薪の中からやや長い物を地面に突き立て、そこに次々に薪をたて掛けて……なんだろう？ 小さな塔？ それっぽい物を作っている。

「リーダー君には昨晚アイ——その、言っただろう？ 木炭を作るのさ。なにせ、使い道が色々あるからね」

作業を始めた時は、突き立てた支柱以外の枝が崩れない様にと慎重だったが、今では割と気軽にポンポンと乗せていつている。

「ひたすら焚火場で燃やし続けるのかと思ってたよ」

「それだと、炭よりも灰が多くなってしまふんだ。まあ、草木灰にも使い道は色々あるがね」

もう十分だと判断したのかクラウはそつと立ち上がる。

そして、今度は用意していた枯れ草や枯れ葉で完成した枝の山を覆い始める。

「木炭を作る作業というのはだね、単純に言えば木材を蒸し焼きにする事なんだ。リーダー君テツサ君、ちよつと手を貸してもらっていいかい？」

「あ、大体は終わったんでいいツスよ！」

「おお、二つ目が出来た所だし別にいいよ」

やはり、ちゃんとした薪ではなくてもそれなりに重量のある木の枝や木片を朝から運んだり積んだりしていたので疲れたのだろう。

いつも涼しげに微笑んでいるクラウが、額の汗を袖で拭っている。

「テツサ君は私と一緒に、おおよそでいいから厚さが均一になる様に枯れ草や落ち葉……要するに火種をかけていってくれ」

「うツス！」

ピツと敬礼して胸を張るテツサに、微笑んで応えるクール系の美人。

絵になるなあ。片方俺を喰ったけど。

「んじゃあ、俺は？」

「泥を作ってほしいんだ。別に素焼きに使うような物でなくていい」

「ってことは、ここら辺に適当な穴掘って水ブチ込んで混ぜ合わせりゃいいか。」

「蒸し焼きって言ってたけど、分量はどうする？」

「水はそこまで多くなくて構わない。ようするに、木材を火種で覆った後にその上から更に泥で包み込みたいんだ。水が多すぎれば、最悪火が消えてしまう事があるから……」

「要するに、ちよつと粘り気がある位のを作ればいいんだな？ オツケ、分かったよ」

とりあえず、湿り気の強い土ってレベルの物を作ればいいのだろう。これなら枯れてる草木をキッチンと押さえられるだろうし。

「で、木炭を作ってそれをろ過機に入れるって事だけど……肝心の器はどうするんだ？ 素焼きを使う？」

以前まで使っていたペットボトルは、学生鞆と共に吹き飛びグシャグシャになってしまった。

今ではただの透明なゴミだ。

「それなんだが……基本ろ過機……特に木炭は度々入れ替える必要があるんだ」

「数日に一回は中身変えなきゃいけないって事ツスか？」

「そこまで頻繁にとは言わないがね。まあ、掃除も含めたメンテナンスをしやすいとした物が必要になると思う。加えて大きさも。そこで、リーダー君」

そういうと彼女は、クロウの方が昨晚作っていた、複数の樹皮を繋ぎ合わせた中の抜けた円柱状の物を取り出す。

「リーダー君、君の土魔法というか石魔法だが……地面ではなくこれの内側か外側を意識して発動させてみてくれないか？」



声が聞こえた。

人の声だ。

そうだと分かった瞬間、自分の体が硬くなるのが分かる。

人はダメだ。

人は怖い。

だけど――

「うぐぬぬぬぬ……っ！」

「あつちやあく。今度は樹皮を押しつぶして石の板にしてしまったツスねえ……」

「型ならいくらでも作れるから問題ないが……やはり難しいかい？」

「ちよつと待て、ちよつと待つてろ！ やつと土魔法に整地以外の道が見えたんだ！ 絶対に成功させて見せる!! クラウ、次の型をくれ！」

「……うーん、ドハマりしてるツスねえ。とりあえずツール君が作った壺は乾燥場に運んでおくツスよ」

男が一人、女が二人。

この数が逆だったら、どう動くのが正解なのか考えが及ばず、ただただ寝た振りを続けて身体を震わせていただろう。

ただ、同性が異性よりも数が多い。

些細なことだが、大事なことだった。

不思議と記憶に残っている自身の感覚よりも軽くなっている体に、力を込め――

——女が、眼を覚ました。

幕間：魔術師とガイノイド（副題：i c u）

「ヴィレッタ、こいつはどうだろう？」

「ん……。そうだな、湖までの道に使っている物よりも多少くすんではいるが、十分ではないのか？」

まるで山が真つ二つになったような、見てるだけで何か不安になる岩場。

道具を作るための石ならば今の拠点や水場周りを探せばあるが、鋭利な刃物に出来る黒曜石が手に入るのはここだけだ。

本来火山帯でしか手に入らない石が、そういう気配がない所で見つかるのは不自然極まりないが……。まあ、そういう世界なのだろうと考えるしかない。

曲がりくねっている割には底がほぼ平らな川や、満ち引きの幅がほぼない海などがあるのだ。

多少の不自然には目を瞑るべきだろう。

「黒曜石に出来るだけ綺麗な白い石、それに石斧に使えるような大きな石。後は野草を摘んで……。クラウドから頼まれていた植物の採取もあつたな」

「貴様は、何も言わんのだな」

手の平サイズの葉っぱの裏にサインペンでメモした走り書きに目を通してチェックするゲイリーに、ヴィレッタが声をかける。

「ん、なにか異変でもあつたか？」

「私に対して、態度を変えないのかと聞いている」

いつも通りの能面顔を向けるヴィレッタに、ゲイリーは軽く息を付く。

「元々仲間だったお前ら三人組とは違う。お前は最初から俺の敵だ。それに、お前が奴らの足並みを乱してくれるのならば我々魔術師にとってはお都合」

手に持っていた白い石をバックバックの中に放り込んで、ゲイリーはまた違う石を拾う。

「確かに、お前は俺たちにとって脅威だったのだろうが……。ツールが



お前を無力化したのだろうか？ なら問題ない」

「あの男を高く評価するのだな。ミスがあるとは思わんのか？」

「あつたらとつくに動いているだろう。お前は、俺たちよりも計算が出来る筈なのに駆け引きが絶望的に苦手と見える」

拾った石は、やや大きめだが普通の石だ。

持ち上げたゲイリーは、拾った時に何かが気に入らなかったのか首を僅かにかしげ、違う石と叩き合わせてその音を確かめる。

「一応ツールが他人に危害を加えない様に命令しているし、いざとなればお前の視界をそのまま見て状況を判断する事もできるらしいじゃないか。正直意味がよく分からないが……まあ、ようするに今のお前は大丈夫なんだろう」

使えないと判断したのか、その石をそつと地面に戻してまた違う石を探すゲイリーは、もうヴィレッタの方を全く気にしていなかった。

「それに、確かに弱くなった気がするしな」

「行動が制限されているのだから当たり前だろう」

「いや、もつとこう……なんと云えばいいのかな」

ここらは木々が少なく、直射日光が真っ直ぐ当たる所だ。

日差しは高くなっており、気温も当然上がっている。

ゲイリーはスカーフのように首に巻いた布で汗を拭う。

「お前とツールがああな化け物と戦った日から、お前には妙に親近感を覚えるんだ」

「……親近感？」

「ひよつとしたら、言葉を間違えてるかもしれないが」

バックパックを一度地面に降ろして中身を確認する。

黒曜石をはじめとする石が、中身の半分ほどを占めている。

湖側の食糧確保が上手くいけば、湖の拠点で一泊してもう少し湖の拠点を強化してから帰ってもいいとなっていた。

向こうの拠点にも野草や木の実、そろそろ泥抜きが終わるあの巻貝があるのでいきなり飢える事はないし、クラウドとテッサの二人がいるのならばツールも安全だし、安心だろう。

別れる前に、アオイとそう話しあっていた。

アシユリーかヴィレッタがいれば、それぞれに通信が可能なのがあった便利だ。

「私に変化が起こったと?」

「そう思う。……あの化け物と戦う前にツールとやり合ったんだらう?」

既にグループの全員に知れ渡っている、ヴィレッタにとっては隠しておきたかった事実。

ヴィレッタは僅かに眉に皺を寄せて「そうだ」と頷く。

「アイツはなんてことのない顔をして、行動で他人に影響を与える男だからな。……自分自身の事には無頓着だが」

元の世界への帰還の鍵になると考えられていたツールの身柄を確保するためにアシユリーが起こした、ある種のクーデター。

(ある意味で、同じなんだよなあ。お前と僕は)

ゲイリーは静かにそう思う。

「俺は、お前はどこかアオイに似ていると思っていた」

「あのイカれた人斬りにか?」

「……確かに、あの時は俺も驚いたが……」

敵対していたアシユリー一派にとつても、人質になっていたゲイリーにしてみても、あの時のツールとアオイの行動は完全に予想の外だった。

あの時、二人を取り押さえようと間近で行動していたヴィレッタにしてみれば、斬り殺されなかっただけ良かったと感じていた。

だからこそ、アオイを押さえられるだろうツールを押さえ、彼女に対する人質にする事も考えていたのだが……。

「なんとかなかな。アオイと同じく、芯がブレない怖さというか……やると思っただけなら行動に出てる。そういう怖さをお前に感じていた」

「……今は違うと?」

「ああ」

ゲイリーはヴィレッタを真っ直ぐ見つめる。

「正確には少し前——ツールやテツサと一緒にこちら側の探索を終えて帰って来てからだが……お前、ブレたな」

「……私が？」

最近よく見せるようになった、やや不満げな表情のヴィレッタを満  
足そうに見るゲイリー。

「ああ、なんというか」

「——お前、こちら側になったんだよ」

「……意味がわからん」



「予想通り、動物の数が増えたわね」

「そうですねえ。予想と違って、結構な大物さんが増えてるみたいで  
すけど」

湖の周辺を本拠地としていた時、対して役に立たなかった罠のポイ  
ントに獲物がかかっている。

もっとも予定していたリスなどの小型動物に対しての物ではなく、  
念のためにと適当に作っておいた、大型動物用の紐罠である。

首に紐が引つかかかって、まるでそこに繋がれているようだった体毛  
が緑色の鹿は、ちょうどアシユリーが内臓を抜いて血抜きをしてい  
る。

「なんか、剥いだばかりなのにこの毛皮良い匂いがしますねえ。血液  
の臭いが薄いというのもありますけど」

「アナタの所の動物じゃないのね」

「……多分？ 自分が住んでる所以外の生態系を調べる事や、他人に  
教える事は禁じられてましたので自信はないですけど」

「それすら駄目だったの!?!」

「異動してきた人材の苦労話のトップ3に入りますからねえ。思い出話が迂闊に出来ないって」

「……誰もそんなルールに異議を唱えなかったの？」

「いやあ、ポカしやすい法律はいざという時政敵の足を引っ張る材料になりやすいのでえ」

「……絶対に行きたくないわね、貴女の国」

解体作業で脂と血にまみれたナイフを干し草で拭いながら、思った事を素直に口にするアシュリーに「ですよねえ？」と本人が肯定する。「だから、正直帰りたくないんですよえ」

「でも、こつちだと生活の基盤が安定しないじゃない？ 寝る所も家と呼べないような所だし、食べ物だって運が悪ければすぐに無くなっちゃおうし……」

「まあ、でも、頑張ればなんとかなるレベルですし」

「元の世界では？」

「頑張ると目を付けられちゃうのでえ……」

アシュリーは、アオイの話を聞けば聞く程、なぜ彼女の国が崩壊していないのか不思議で仕方がなかった。

「アナタはよく生き延びられたわね。それだけ優秀なのに」

「まあ、ぶつちやけお目付け役が色んな意味で無能でしたので、色々と楽をさせてもらってましたあ♪ ……多分、命という意味でも女としての意味でも、そろそろ危なかったと思いますけどねえ」

そう考えると、いいタイミングだったんですねえ♪

アオイはわざとらしくそう言っ、胸をなで下ろす仕草をして見せる。

（これだけわざと胡散臭く振るまつてるのに、よくトール君は信じたわよねえ。結果として正解だったわけだけど）

人当たりの良さに関しては、今いる面子の中で自分が一番好ましいはずだと思っているアシュリーにとって、トールの信頼を一心に受けるアオイは、中々に謎な存在だった。

同様に、似たようなタイプでやはり親交を深めているテッサも。

（好みなのかしら？ この娘やテッサみたいな油断できないタイプ

が)

やはり、ツールに対しての色仕掛けは難しそうだと判断し、また彼が女体になった時に仕掛ける事を静かに決意するアシュリー。

その内心に気付いているのかいないのか、アオイはニコニコしながら罨を仕掛け直している。

「それより、どう思います?」

「……その不自然な落ち葉の事?」

なんてことのない、落ち葉が積もった地面。極々普通の一般人ならばそう言うだろう。

だが、二人の目には違う物に見えていた。

「表面が乾いた葉っぱと少し濡れてる葉っぱが混ざってますねえ。やや広い範囲で、でもそこだけ」

「わざわざ落ち葉を運んではら撒いた。……足跡を隠したのね」

「動物さんに足跡を隠す知恵はありませんよねえ」

「……ないと言い切れないのがこの世界の怖い所よね」

それは、かつてツールがスキルを使つて発見した痕跡と、同じ物だった。

「罨の場所を確認しているのならば、道にも気付いたはずですよねえ」

「でもこちらと接触しようとする気配はなし、か」

アオイはいつぞやの夜の時のようにその場に膝をつけて四つん這いになり、低い視点から辺りを観察する。

着物ではなく作業に適した服を身に付けるようになってから、やはり動きやすさが段違いなのか平然と膝をついたりするようになった。

「私達のようにこつちに来た人でしょうか?」

「……多分。海の周辺にも、人が生活していたような痕跡はなかったし」

「でもこちらに接触する気配はなし。しかも自分の痕跡をわざわざ消している、と」

「少なくとも、食糧や水はありそうね。持ちこんだのかしら?」

「ええ、それなりに余裕があるとみて……いえ、備蓄だけならどうしても不安が残るはず。調達や調理を実戦して自信がついたとか……で

すかねえ？」

消し忘れた足跡がないか辺りを入念にチェックするアオイだが、見つけられないと判断したのかため息を吐いて立ち上がり、パンパンと両手に付いた土を払う。

「それなりにこちらで生活しているって事？」

「その上で、こちらと接触しようと思わずに存在を隠そうとした。つまり、警戒をしているという事ですよねえ」

ひよつとしたら近くに潜んでいるかもしれないと辺りを見回し耳をすますアオイだが、かすかな鳥の鳴き声や風の音がするだけでやはり何も無い。

「やっぱり、他にグループいるのかしら」

「んん、どうですかねえ」

二人は近くにあつた倒木に並んで腰をかけて、以前仕留めた動物の胃袋で作った水筒に口を付けて水分補給する。

こういう携帯する道具がああ戦闘の中で無事だったのは、不幸中の幸いと言えるだろう。

「……やっぱり、植物などはともかく動物の類はツールさんの周り、あるいはツールさんがいた所に現れています」

小川とも言えないような小さな水の流れて洗った鹿の遺体。

現在吊るして余分な血を抜いているソレを見ながら、アオイは続ける。

「スキルという物を持ったツールさんは、この世界に選ばれた人だと私は考えていたんですが……」

「ヴィレッタね？」

「はい。アレがスキルを使うようになったのは予想外でしたねえ」

帰還にせよこの世界に住むにせよ、おそらくそのどちらにとつても重要な要素になるだろうスキル。正確にはそれが使える存在。

それを、人間とは言えない存在が手にした。

この出来事は、アシユリーやアオイにとってはそれなりに衝撃を与える出来事だった。

「探索範囲を広げて、他に動物が集まっている場所があるかどうか調

べてみようかしら?」

「放置でいいのでは? もし本当にいたら無駄に警戒させてしましますし。ただ、今後は万が一に備えて仕事の振り分けには戦力も考慮した方がよさそうですね」

「……襲撃とかあると思ってる?」

「あくまで念のためですよ」

アオイはそう言うが、ジーンズに通したベルトに、紐でくりつけている刀の柄に手を添えている。

分かりやすく、警戒態勢を取っていた。

「……アシュリーさん、一応テツサさんに連絡を入れておいてくれませんか?」

「すぐさま合流はしないの?」

「念のために、湖の拠点警戒しておきたいんですよ。もし相手の数が多くて、かつスキル持ちだった場合ここを占拠されるのは怖いです」

「……そっか。未完成とはいえ、一本道を作っちゃったから」

「ええ。ここは黒曜石の採取地にも近いですし、この間の化け物みたいな災害はともかく、人の集団には取られたくないですよねえ」

アシュリーは、かつての肩書としては裏を含めても精々が特殊警察のような役割であったにも関わらず、軍人のような知識と思考をアオイが持っている事に驚きながら頷いて同意する。

「今日はとりあえず湖の拠点……適当な名前を付けておきたいですねえ。まあ、とにかくここに留まって様子を見ましよう。ひよつとしたら、罠にかかった獲物を狙おうとまた来るかもしれないし」

「……ヴィレッタなら寝ずの番をさせても問題ないわ。それに私達が交代で一人一緒に行動。で、どう?」

「ええ、問題ないと思います」

アシュリーは素早く、今後の作戦をテツサやヴィレッタと共有する。

「海辺側のキャンプは大丈夫かしら?」

「まあ、テツサさんがいるので、いざという時はすぐに連絡取れますし

……なによりトールさんのスキルがあります」

本人はあまり使用しないスキルだが、その効力は非常に強い。

ヴィレッタが身体に組み込んでいた光学迷彩すら問答無用で暴きだすサーチスキルに、その気になればいくらでも応用できそうなトランプースキル。それに魔法。死の直前からでも復活できる自己再生だつてある。

他の知識系のスキルだつて、例えば野草知識を活用すれば野草から毒の抽出だつて不可能ではないハズなのだ。

ただ、トールという男がそういう方向には出来るだけ使わない様にしているだけで。

「……彼が戦う姿つて想像できないんだけど」

「守りを固めるといふ方向ならば迷わず動く人ですよ。テツサさんにそう伝えておいてくださいね？」

この時、アオイは内心自分達が監視されている可能性について考えていた。

もし相手がこちらに張り付いているのなら、先に接触しておきたいと。

もし、わずかでもトールを害する可能性があるのなら——先に斬ろうと。

アオイ本人も気づいていないが、自分が大丈夫だろうと見逃していたクラウがトールに直接的な害を成した事はかなりのショックだったのだ。

自分の気持ちに驚くほど緩んでいたという事実も含めて。

「アナタ、随分とテツサを信頼しているのね」

「トールさんを守る人としては、最適だと思つてます」

いつものニコニコ顔ではない。

笑みを、どこか緊張感を漂わせる静かな笑みを浮かべながら、アオイは続ける。

「まあ、隙を見せたら暗殺されるかもしれないなあとは思つてるので、信頼しているとは言えませんねえ」

「アタシはてつきり、アナタはテツサと手を組んだのだと思つてたん



「だけど」

「そんな分かりやすい人なら、逆に私はあの人を信用できませんよお」  
ふと、取り除いた獲物の内臓——正確には腸はらわたを埋めた所にアオイは目をやる。

狩猟で獲物を捕まえた時にはこれを真つ先にやるのだが、同時に肉食の獣をおびき寄せることにならないか、いつも不安に思っているのだ。

だからか、いつも出来るだけ深く埋めていた。

「ふと思っただんですが、今のテツサさん。このグループ内では何気にトールさんに次ぐ立ち位置なんですよねえ」

「? そう?」

「実質、グループ内で銃火器製造機を直接コントロールできるのはトールさん以外には彼女だけです」

銃火器製造機。つまりはヴィレッタの事だ。

スキルという、原理が良く分からない物で作る物のために数発しか撃てず、当人の身体から離れるとなぜか消えていくが——高火力な銃火器を作りだせるようになったヴィレッタという存在は、その他のスキルの習得が可能という点も含め、極めて重要な存在となっていました。

「人間である私達とは相容れない存在なんですし、どちらもしつかり管理してくださいねえ?」

「アナタこそ、一番信頼されている人間としてトール君のコントロールをお願いね?」

「コントロール? トールさんにそんなことする必要ありますか?」

「人間、追いつめられればなんだってするわ」

「その言葉、お互いに覚えておくべき言葉ですよねえ」

「……そうね」

アオイは、空を見る。

つられてアシユリーも。

「そうですねえ。追い詰められたらなんだってやっちゃいますよねえ」

「……………」

「私も、トールさんも、貴女も、テツサさんも……追いつめられればどう動くか分からない」

「ええ……そのとおりだわ」

小さくつぶやくようにアオイに応えるアシュリー。

しばらく黙って空を見ていたアシュリーは、ふと立ちあがって、血抜きを終えただろう鹿の方へと歩いていく。

何かを考えているのか、眉の皺を寄せながら歩いて行くその背中へと視線を移したアオイは、何を思っているのか、小さく口角を吊り上げて笑っていた。

少し前に鹿の内臓を抜くのに使った、まだ血の臭いがこびり付いている小刀を手を当て、

——ニイ……。

他の誰にも聞こえないような、僅かな笑いを零すアオイ。軽く見える口元と裏腹に、その目は笑っていなかった。



湖側へと旅立ったグループの面子でそれぞれ話し合った結果、まずは湖周辺の再調査を念入りにすべきだという結論が出る。

アオイ達は材料を残していたのを利用して拠点を軽く再建し一夜を明かした。

無論、見張りを立てて周囲の動きに最大限警戒をしながら。

そして昼過ぎまで作業を続けて、すぐに状況が動きそうにない事を確信してから処理した獲物をまとめて本拠地へと帰還した四人。

帰りついたのは夕方前。

拠点で出迎えてくれたのは、留守番していた三人——なのだが、「違う……違うんだリーダー君。確かにキチンとした道具はなかったが、元の世界ならこれでも上手くいっていたんだ……本当なんだ」土を積んで作った小さい山を前に、心なしか半泣きでうなだれているクラウ。

そして、そんな彼女の肩や背中をさすって「まあまあ」と慰めているトールとテツサの姿があった。

「……ねえ、アレ、なにしてるのかしら？」

「さあ？」

## 065：炭焼きとは職人芸である

「つまり、炭焼き自体は作業工程を観察しただけなので、できるだけ同じになる様に工夫したと」

「……うん」

「器具自体は触った事があつたので大体の工程は分かっていて、それを再現したのがあの山だと」

「……うん」

「で実際にやってみたら、木炭になったのは極々わずかで、たくさん灰と燃え残りを作る結果になったと」

「……うん」

とりあえずかなりの食糧を持ち帰ってきてくれたゲイリー達と共に、飯の準備をすることになった我々サバイバルグループ。

とりあえず落ち込んでるクラウはテッサに任せて、俺たちは煙で燻された鹿肉や、近くの川に仕掛けた罫から回収した魚を捌いて調理をして——まあ、いつも通りの食事会に移った訳だ。

「ちよつと貴族様、木炭やら泥炭やらはアンタらよく使うでしょう。原因分かるんじゃないの？」

煮詰めた海水を木匙ですくい、ちよつと鹿肉にかけてからまた少し火で炙るといふ作業を繰り返していたアシュリーが、ようやく肉を口にしながらそう尋ねる。

「無茶言うな。確かに木炭の原料になる木はウチからも多少は伐採されてるが……木炭を作っていたのは後方の山岳領地の連中だ」

「？ ゲイリーさんの領地には炭焼き小屋がなかったんですかあ？」

元々は山育ちだったらしいアオイが首をかしげると、ゲイリーが頷いて応える。

「前にも言ったが、俺たち魔術師にとって自分のテリトリーの保護管理は重要でな。特に戦争状態だったために、いざ戦闘時に不慮の事態でマナ・リソースを減らすような事態は避けねばならない」

「……ん〜〜と、つまり？」

「森林火災を引き起こしそうな物は僅かたりとも許すわけにはいかな

かったのさ」

「最初っからそう言いなさいよ、貴族様」

ゲイリーの発言に対して嫌みったらしく返すのは当然アシユリーだ。

この二人、なんとというか相変わらず相性悪いなあ。

ちよいとしばらくは、俺とかクラウのどちらかを入れた三人で行動するようになるかあ。

ここらのバランスもなんとかしないと……。

「ただ、そうだな……。クラウ、炭材はそこらの物を使ったんだな？」

「ああ。日頃回収している薪を全て使う訳にはいかないし、そこらから集めて来た」

事実だ。テッサと一緒に落ちてる木の枝が渴いているかどうか、ポキポキ折って確かめているのを見ていた。

「炭材の伐採は俺の領地でもやっていたが、時期は大体いつも秋口から冬にかけてだった」

「寒い時期について事ツスか？」

「正確には、樹木の成長が止まる時期にということだろう。木々が成長するということは、中での水分の流動が激しいという事だ。自然、含む水分は多くなる」

ゲイリーは、皆で囲んでいる焚火から、離れた所で焚かれているもう一つの焚火場に目をやる。

簡単な屋根と、細切りにした肉や魚を吊るすための物干し竿とそれを支える支柱二本。

即興で作った燻製場だ。

「そうになると、当然乾燥には時間がかかる。小枝などが主ならまあ、そこまで影響はないと思うんだが……それでも多少は多かつたはずだ。あるいはそれが原因で、炭化する前に火が消えたんじゃないか？」

「……うう……」

ゲイリーの推論に思い当たる節があつたのか、更に小さくなるクラウ。

すると、アオイも静かに手を挙げて。

「あのー、たった今思い出したことなんですけどお……」

「ん？ どったのアオイ？」

「いえ、そういえば山にいたお婆ちゃんが炭焼きやってたなあと思い出しまして、それでその時の工程を思い返してたんですけど……確か地面に穴を掘って、そこで大きな焚火をしていたような気がするんですよお」

「穴掘って？」

「穴掘って」

アオイと並んで首をかしげると、テツサが「ああ……っ」と小さく手を打つ。

「土の中の水分も減らさないと、焼いてる時に水が出てきて、蒸し焼きしてる所の温度下がりますしねえ」

そういうテツサはアシュリーと目を合わせて、時折頷いている。

例の脳内通信でなにか話しているのだろうか？

「科学サイドから見てもなにか意見ない？ その三人組」

アシュリー達ならいい意見があるかも。

そう思っって声をかけると、アシュリーは皮肉っぽい負の笑みを小さくヴィレッタに向ける。

……ああ、お前もヴィレッタを仲間——いや、人間と認めてない訳ね。

いやまあ、仕方ないけどさ。

「詳しい知識があるわけじゃないけど、木材の炭化っていうのは、たしか分解熱に寄るものよ」

「？ 分解？」

「よーするに、一定温度に達するまで燃やし続ければ、あとは勝手に炭になっっていくんすよ」

アシュリーの言葉を、テツサが補足する。

「木の種類によって割合はちよつと変わるツスけど、木材の主成分はセルロース、ヘミセルロース、リグニンの三ツス。後はまあ、数%くらいそれぞれに含まれる色んな成分があるんすけど」

テッサが俺のそばに来て肩に左手を当て、俺の視界の中で火の明るさが届く所にカタカナで、口にした順番に上からそれぞれ書いていく。

「大事なのはセルロースっす」

「セルロースって？」

「一言で言えば炭水化物ツスよ。植物細胞の主成分ツスね」

テッサが、上の二つを大きい丸で囲む。

「熱を加え続けるとヘミの方が早く焼けて分解していくツス。そしてそのまま燃焼していくと今度はセルロースが。で、このセルロースが分解していく時に熱が発生。ここまで行くと燃料加えなくても勝手に燃えていくんすよ。本当の意味での炭化の始まりツスね」

「……ちなみに何℃くらいかわかる？」

「そうねえ、アタシ達と単位が違うけど……水の沸点が100℃だったわよね？　じゃあ……えーと、280℃前後くらい……かしら？」

アシユリーが、今度はいつも通りの小さな頬笑みを浮かべて応える。

「まあ、アタシ達の世界の物理が同じように働くならばって前提だけどね。多分そこまで温度が上がってる前に火種が燃え尽きちゃったんじゃない？」

クラウは、ただでさえ小さくなっている所を、更に両手で真っ赤になった顔を両手で覆う。

「火種の量は間違いなく私のミスだ。それに、地面に大きな穴を掘るといふ発想は私にはなかった」

「……なんで？」

「確かに炭を焼く時は屋外だったが、つまりそれは大きな枝の上に運び出した土を敷いているんだ。なにか物を突き刺したりはしていたが……それなりに厚みはあるとはいえ下には神樹の一部があるんだ。だから、その、穴を掘るといふ行為はだね？」

「——あつ」

クラウが羞恥心全開で口になっている弁解に、テッサが咄嗟にという感じで口を開く。

「クラウさんクラウさん」

出会った当初はえらく警戒していた割に、最近はクラウに対してえらくフランクなテツサ。

なにか心境の変化でもあったんだろうか。

……あるいは、クロウに気がついたか？　アオイが教えたのかもしれない。

「そちらでの雨ってどうだったんすか？」

「む？　普通に雲から落ちていたが？」

「……ひよつとして、結構上の方に住んでたんすか？」

「ああ」

「……水って重力に従うじゃないツスカ」

「……ああ」

「クラウさん、自分が住んでる——いや、外側の作業場でしたっけ？

要は、大きい枝とか葉っぱの上に土をとにかく盛っているって感じツスカよ？」

「……ああ。場合によっては平らになるように削ってからだが」

クラウの額に、汗の粒が浮かびだす。

というか、増えた。

「ひよつとして、ただですら地面の中の水分っていうのが全部下に抜けるようになって、そちらの環境の土ってここと比べてかなり乾燥していたんじゃないか……」

ついに、顔を押しえたままその場にうずくまるクラウ。

なんとというか、ある意味ゲイリー以上に男っぽく見えるクラウが、今は滅茶苦茶可愛く見える。

いいね。

いいよ。

「リーダー君すまない……っ。多くの木材を無駄に消費してしまった……」

「いやまあ何事もトライ&エラーだし、取り返しがつかないってレベルでもないしいんじゃね？」

薪なんて毎日集めてるし、それこそ二、三人で全力で動けば一日で



十分な量を確保できる。

灰だつて使い道はあるし、さつきサーチで調べたらこれでも水の浄化に使えるようだ。

「それに、作業全体で見れば成果はあつたしなあ」

先ほど手先が器用なテツサに頼んでおいた物があつた。

大きめの木材を削つて作った、スコップだ。

俺はそれを左手で掴み、右手で適当な大きさの石を掴んで、魔法を発動させる。

次の瞬間には、掘る部分が石でコーティングされた、比較的頑丈なスコップになつていた。

「ん〜、やつぱりちよつと重いな。いつその事シャベルにした方が良かったか」

「いや、これはこれで使い道は多いツスよ。探索の時なんか超助かるツス」

元々木炭を作ろうとしたのは、浄水装置の作製のため。

そしてその浄化装置作製のために、薄い樹皮を綺麗に石でコーティングして頑丈なパーツにするという訓練は、この二日でようやく形になった。

「ただ、このままじゃあ鋭さに欠けるツスね」

「それこそ、平らな石に水をかけて砥石代わりを試みてはどうでしょうかあ?」

「……それだけでちゃんと磨ける?」

「まあ、刃物みたいにはいきませんがあ……多少は掘りやすくなるんじゃないでしょうか? 石斧と一緒にすよお♪」

とりあえず作つてみたスコップが、グルグルと皆の手で回されていく。

なんか、幼稚園の頃にボールでこんな遊びをやつたような……。

「使えると思うが……いつそのこと全て石で覆うか、あるいはグリップにあたる木材はもうすこし堅い物がいいな」

最後にゲイリーがスコップを受け取り、重さや使い回しを確認する。

「あ、わりツス。とりあえず試しつて事で、削りやすい木を選んだんスよ。大きい木材もそんなにないスから」

「だろ。まあ、これだけでも十分に使える」

「そうしてグルッと一週してスコップが戻ってくる。」

「ナイフとかも作ろうと思えば作れるんじゃないか？」

「あー、実は黒曜石の破片を集めてちよつと試したんだけど、こっちは上手くいかなかったよ。なんていうか、丸みを帯びて貼りついちゃってね、刃物になる様に削ろうとしたら、薄すぎて一気に全部砕けちやっつたんだ」

「あらま、やっぱりそうそう上手くはいかないわね」

「とりあえず石を使った加工についての話題に移ってから、少しはクラウも気を取り直したようだ。」

木炭作りは、錬金術にも使うらしいからまた考えないと悪いけど、まあ、いいチャレンジだったという事で――

――パキツ

「んお？」

後ろの方で、小枝が折れる音がした。

同時に、自分の視界に文字が走る。

ヴィレッタからのスキル使用要請だ。

はい、はいよヴィレッタ。

「おやあ、ようやく目が覚めたんですねえ♪」

アオイがいつもの読めない笑顔でひらひらと手を振った先、俺の後ろの方に、

「……………あ……………あ……………の……………」

あの白い髪の女性が、立っていた。

## 066：女はまだ、話せない。

結局、眼を覚ましてから丸一日は動けなかった。——いや、動かなかった。

動こうとしても身を竦めてしまって、彼らの前に立つのにそれだけの時間を要してしまったのだ。

不思議とお腹は空かず、丸一日彼女達のやり取りを聞きながら寝た振りを続けて様子を窺うかがっていた。

一切罵声がなかった。

一切怒声がなかった。

一切悲鳴がなかった。

一切嗚咽がなかった。

一切嘲笑がなかった。

暴力の気配も、暴言の気配も、拷問の気配も、絶望の気配あざけも嘲りの気配も。

私にとっての日常の気配が、ここにはなかった。

ある女性が何かに失敗したらしいのだが、聞こえてくる男の声は、それを責める物ではなかった。

見られていない事を確信して小さく目を開けてみれば、仕事に失敗したと思われる女性が焚火の近くで項垂れていて、そう周りを一組の男女が囲んでいた。

失敗の罰として顔でも焼かれているのかと一瞬思ったが、苦悶の声一つ聞こえてこない。

耳を澄ませると、どうやら失敗して落ち込んでいる女性を二人が慰めているようだ。

……違う。

自分達がいた所よりも苦しい状況に見えるのに、自分の時より空気が柔らかい。

さらにしばらく耳を澄ましていると、失態を犯した女が男の事を「リーダー君」と呼ぶ。

男。

やっぱり上にいるのは男なのか。  
寝たふりをしようと、呼吸だけは乱さないように頑張ってはみる  
が、どうしても微かに腕が震える。

そうして耳を澄ませて状況を探っている内に、本当に眠くなっ  
てしまふ。

明日こそ、明日こそ。

心の中で何度も繰り返し返しながら、私は目を瞑った。



「まいったな……」

例の女の人起きたので色々聞こうと思つてたら名前を尋ねる所  
で、俺の腕に掴まってずっとグスグス泣きじゃくっている件につい  
て。

ねえ、なんか俺が悪い事してる気分になるんで勘弁してくれませ  
んか。

なんかアオイがすごい目でこっち見てるし。

「まあ、あの化け物に食われてたんすから、恐怖でパニック起こして  
も無理はないんじゃないツスカね」

「おめーらも食われてただろうが」

「いやあ、一切記憶がないツスから」

ああ、まあそうか。

「落ち着くまでそうしてあげなさいな。何か聞いても応えられる状況  
じゃあないみたいだし」

だよなあ。

何が起こったのか、とか。どこから来たのか、とか聞いても応えて  
くれず、名前を聞いても答えられない状況だしなあ。

「ん、まあいつか。とりあえず、話を続けるけどさ」

なんとなくそうした方がいいかと頭を撫でようとすると、すごい勢いで手を掴まれたでござる。

うん、なんか……ごめんね？

「俺らの他に誰かいるってのは間違いない？ ……っ！」

ねえ、なんで君爪立てたの？

……まあそっちは泥とかで汚れてないし、こっちもぬるま湯で洗って汚れは落としたからまあいいけどさ。

「ええ、間違いないわ。結局アタシ達四人がかりで辺りを調べて何も出なかつたけどね」

「ん……相手は複数だと思う？」

相手がこつちより数が多かつたら面倒だなあ。

キッチンとしたグループならまだいいんだけど。

「なんとも言えませんねえ。複数なら、さすがに私が気付くと思うんですけどお……」

「そういえばアオイちゃん、潜伏していたテツサ達の事を察していたわね」

「ええ、まあ。そういうのには敏感でしてえ……」

アオイは、アシユリー達のサバイバルパックの蓋の側面にナイフで穴を開けてY字型の枝に紐でくくりつけた即席フライパンを、小さくなった火の上で振っている。

中に入っているのはただの川の水。

素焼きの壺を失くしたため、とりあえずの処置として俺たちはこうやって調理や煮沸をしている。

なお、回収に成功したスキレットは肉や魚専門の調理道具となっている。

「なんて言うんですかねえ。他にコミュニティがあつてもおかしくないとは思っているんですけど、不思議とそういう気配がまったくしないんですよえ」

泡がぶくぶく立っているフライパンの中を見ながら、アオイは続ける。

「ただ、万が一の事を考えると最大限の警戒が必要かなあと思っ  
ていますう」

「……つまり？」

「湖の拠点を再建しましたがけど、出来るだけ誰かがいる形にしたほう  
がいいと思うんですよ」

もう十分と判断したアオイはフライパンを火から離して、もう一つ  
のサバイバルパックの蓋——何も加工していないそちらに湯を注ぐ。  
冷ましやすいするためだ。

「あー、となると、アシュリー達三人の内の誰かを常に向こうに？」

「ええ。そうすれば緊急の時でも通信が出来ますし、なにより個々の  
能力も確かです」

「確かに。連絡付くのは楽だよなあ……」

一方アシュリーに目をやると、話を聞きながら焼けたサイコロ状の  
鹿肉を一度茹でた野草で包んで口にかけている。

テッサは相変わらずニコニコしてるし、ヴィレッタも相変わらず仏  
頂面だ。

(うーうー、どうしたものか)

正直、出来る事なら消去法でアシュリーを送り込みたい。

テッサは間接的とはいえヴィレッタから守ってもらっているし  
……多分、三人の中で一番信頼している。

ヴィレッタはある意味劇物で、眼の届くところに置いておきたい  
が、同時に今の所暴発の可能性は極めて低い存在だ。

で、残るアシュリーだが、彼女は三人組の代表なのだ。

ある程度立てるように調整しないと、最悪三人組が瓦解しかねな  
い。

ただでさえヴィレッタの件があるのに。

ここに来て内ゲバは勘弁してもらいたい。

「……トール」

「？　なんぞ、ヴィレッタ？」

「人員に困っているならば私を向こうのキャンプに送れ。なんらかの  
緊急事態が起こった場合でも、それなりに対処できるだろう」

「…………ふむ」

まあ、悪くない。

視界すら共有できるし、やろうと思えば操作もできる。

ただ、いざ武器の使用を求められた時の判断はそれでも難しい。

そういうもしもの場合の時は、出来れば周辺全てを自分の目で見たいのだが……。

「それなら私も行って構わないだろうか？」

「クラウも？」

ようやく落ち着いたのか、先ほどまで抑えつけていた自分の手で汚れてしまったモノクルを伸ばした袖で磨きながら、クラウが発言する。

「色々考えた結果、木炭を作るには湖側の拠点の方が都合が良さそうだと考えてね。あそこには開けた場所もあったし、色々試してみようと思うんだ」

(……クラウ、か)

身体が崩壊する可能性があるっていう時限爆弾こそあるが、二回俺の身体を喰って身体の調整をしたおかげでどうにか延命は出来てるみたいだし、そういう意味では当面の間は大丈夫。

大丈夫だが……。

(クラウとヴィレッタ。組み合わせ的に悪くはない)

クラウがクロウになれば、仮に武器を振るうような事になっても大丈夫のハズだ。

前にクロウの時に雑談振ってみたら、そんな感じの事を言っていた。

ヴィレッタも、武器がなくても格闘術はすごいし作った武器なら使える。弓とか、斧とか。

(あれ？ マジで悪くないな)

だが、念のためにもう一人付けておきたい。

残るのはアオイ、ゲイリー、アシユリー、テッサの四人。

ゲイリーは、最近コミュニケーションが不足している感があるの  
で、出来れば残って色々と話しておきたい。アシユリーも同じく。

となると――

(アオイかテッサのどちらかにはいて欲しいけど……日頃から頼りすぎてるからなあ。特にアオイ。偏るのもマズいか?)

少なくとも、依怙贖身と取られかねない行動や選択が積み重なれば、いざ自分達がなんならの形で追いつめられた時に内輪もめを起こしかねない。

それだけは避ける必要がある。

「……アオイ、頼めるか?」

少なくとも向こうには動物の影がある。

つまり、ある意味でここ以上に危険がある。一番の戦力である二人をとりあえず置いておくのがいいだろう。

「はあい、お任せくださいあい♪ 向こう側で基本狩りをしながら、守りを固めればいいんですね?」

「うん。一応俺も定期的にそっち見に行くから」

正直、アオイを向こうに付かせる事を決定した瞬間に、テッサの方が良かったかと思いはじめた。

なにせ、自分の次にヴィレッタへの命令権があるのは彼女なのだ。

つまり、いざという時の判断も任せられる人物――ではあるのだが……。

(とりあえず、今はヴィレッタを『ヴィレッタ』と見ている人間と関わらせた方が良い気がするな)

今の時点で、ヴィレッタを人間――というか『個人』と見ている人間と『道具』として見ている人間の差がある。

元々仲間だったアシュリーとテッサは、特に彼女を『道具』として見ている。

アオイも……うん、仕方がない。仕方はないんだけど……。(どうしたもんかなあ)

仕方がないって放置してたら、後でもっとヤバい事になりそうなんだよねえ。

(とりあえず、割と中立のクラウドがいるなら大丈夫か)



ちよつと卑怯な気もするが、クラウは基本自分の言う事に従ってくれる。

まあ、そりや、もう一つの人格のしたことはいえ俺に対しての罪悪感MAXだからなあ。

(うん、クラウとも後でちよつと話しておこう)

「アオイ、ヴィレッタ、クラウ。とりあえずこの三人で、向こう側の拠点の増強をよろしく頼む。ただ、もし危険な事があった場合、無茶だけはしないように」

ふと、やつぱりもう一人くらい行かせるべきかと悩んだのだが、当の三人はそれぞれ

「了解しましたあ♪」

「仕事はこなす」

「ああ、任せてくれ」

と順々に応える。

……大丈夫なのかなあ。

「……………」

あと、名も知らぬ美人さんや。事あるごとに爪立てるのは勘弁してくださいませんかね。



「それで、私とクラウさんにお話ってなんですかあ？」

飯を食い終わり、白湯やお茶で一息付いた後、俺はアオイとクラウを呼びだしてちよつと離れた所へと来ていた。

例の白髪の美人さんはゲイリーとテツサに預けてきた。

「アオイ、一応紹介しておく。今いるのが俺を喰った奴だ」  
で、クラウは今クラウじゃない。

そうであるとするように、モノクルを外していた。

「さて、どうもどうも。『自分』がリーダーさんを襲った奴だ。リーダーさんには、『クロウ』って名前を付けられたけどね」

「これは……丁寧に、どうぞよろしくお願いしますう♪」

——チャキツ

アオイ君アオイ君、そういう明るい口調のまま刃物を人の首筋に突き付けないように。

「いや、まあ、仕方ねーさ。アオイさんどころかリーダーさんにも、何をされても文句が言えねー身だつてのは分かつてる」

「……トールさんトールさん」

はいはい。

「ホントに斬つちやダメなんですかあ?」

ダメです。

こら、「ぶー」って唇尖らせるんじゃないやありません。

可愛いけどダメ。

メツ。

「クロウのことを知っているのが実質俺だけだったから、一応顔合わせをしておきたかつたんだ」

もしクロウが出る事が合った時に、フォローする人員はいるからなあ。

ああ、一応ヴィレッタにも教えておくか。

「ぶう……。まあ、私もトールさんぶつた斬ってるのでうるさい事は言えませんが……」

「……嫌悪されても仕方ないし、好かれる人間であるとも思っちゃいないけど、リーダーさんに逆らう気はないよ」

クロウは一度言葉を切ると、まっすぐアオイを見る。

「リーダーさんには恩がある。正直、またリーダーさんを喰う事はあ  
ると思うけど……だからこそ、せめて仁義は通したい」

「……………むう」

ずっと突きつけていた刀を鞘に収め、ふかーいたため息を吐くアオイ。

……おい、なんでジト目でこつちを見る。

「いやあ、なんだかんだでこの人にシンパシーを感じてしまった辺り、トールさんは面倒な人だなあと」

「そこでなぜ俺が出てくるのか」

やめなさい。ちくちく手刀しちとうの先で脇腹をチクチクするのをやめなさい。

とりあえずアホ毛を掴んで距離を取るとしばらくうくうく唸りながら抵抗するが、数回脇腹を突つくと満足したのか腕から力を抜く。

「まあ、お話というのはそれだけではないのでしょうか。本題はなんなんですか?」

鋭いな。

いやまあ、お前ならそう察してくれると思ってたけど。

「ああ、これに関してはここにいる二人にだけ話しておいた方がいいと思っただけ」

クラウの事はいずれ説明する必要があるから、ヴィレッタに話して情報が漏れた所で問題ない。

ただし、これに関してはそうも行かないだろう。

アシュリー達に知らせるのは、様子を見てからにしないと……。

最近ではサーチを機動させるばかりだったスマホを操作して、あの画面を表示される。

万が一にも他の人間に見せるわけにはいかない画面だ。

「なんか、ここにいる仲間全員にスキルを習得させられるようになったんだけど……」

「……………は?」

うんうん、その反応が自然だよねえ。  
でつすよねー。  
わっかるー。



「ん、もし寝床が合わなかったら言ってくれ。すぐに建て直す」

「まあ、それはボク達全員に言える事ツスけどねえ。そろそろまともな寝床で寝たいツスよゲイリーさん」

「無茶を言うな、テツサ。まず建材として使える木材を作るのにどれだけ手間がかかると思っている」

あのツールという、このグループの団長の気をなんとか引きつけたのだが口が上手く動かず、泣きながら身体を摺り寄せて媚を売ることしかできなかった。しくじったとしか言えない。

……いや、下手に喋ってボロを出すよりも、あまり喋れない方が都合がいいと考えるべきか。

とにかく、あの男にしがみつきなから話を聞く限り、このグループには大まかに二つの派閥があるように感じた。

団長の派閥と、あのアシユリーという人の派閥だ。

恐らく、同じ服を着ている三人がそうなのだろう。

(一番髪の長い人は、何かしたせいで立場はこのグループで一番下みたい。……優しくすれば取り込めるかもしれない)

どうやら派閥同士で争う気配は今の所ないようだけど、それでも互いに距離を計り合っている節がある。

(強い方に付かなくちゃ……)

きつと、このグループも争う事になる。

そうなる。絶対になる。ならなきやおかしい。

あるいは、分からなかっただけでももう水面下では起こっているのかもしれない。

(強い方に気に入ってもらって、上の人間にならないと……っ)

寢床の様子が大丈夫か聞いてくる、なぜか男の格好をしている女の  
人になんとか笑みを浮かべて答えながら、これから先の事を考える。

(もう、あんなことはイヤ……。あんなことは……)

眠ろうとする振りをしながら、顔に手を当てる。

やけに肌触りが良くなっている。

いやそもそも、なぜか腫れあがっていない。

(髪を燃やされるのも、殴られるのも、茨の上に寝転がされるのも、檻  
に閉じ込められるのも)

自然と身体が震え、歯がかじかむ。

とつさに指を口に入れて噛みしめ、歯と歯がカチカチ鳴るのを防  
ぐ。

今は余り注意を向けられるべきではない。

(強い人に付かなきや。守ってくれる人に付かなきや。怖くない人に  
付かなきや。怖くない人を勝たせなきや。怖い人を追い出さなきや)

歯の震えを押さえようと噛みしめた指を伝って、血が流れる。

だが、気にしていられない。

口の突っ込んだのとは逆の手で手を握りしめ、そして力強く開いて

——驚愕する。

「……スマホが……来ない……っ」



「どう思う、テツサ」

「う〜〜〜〜ん……」

白い髪の女性を彼女のシェルターまで送り届け、再び焚火場まで戻ったゲイリーとテツサ。

ヴィレッタは周辺の見回りに出ていて、アシユリーは焚火以外に光源を作ろうと離れた所で余った木の枝や石、紐を使ってなにかしている。

「最初は風邪引いてるとかかと思っただんすけどねえ」

「ああ、俺もそう思って注意してこっそり色々調べたのだが……」

サバイバルパックの金属製の蓋を利用したフライパンに適当な野草と水、煮詰めた海水少々を入れて、火にかける。

簡単な夜食としてちよつとしたスープを作りながら、本来ならば敵同士である二人は並んで首をかしげている。

「ゲイリーさん、直接確かめました？」

「……男と思われているだろうから、腕を取った時にこっそり手首から……お前は？」

「ボクも同じツス。ツール君からふらついてるあの人渡された時に、なんか違和感を感じて……」

「なら、間違いないか」

「……多分」

「あの人、脈がないツス」

067：水を貯める者。火を付ける者。

「つまりなに？ あの人は、死んでるの？」

アオイとクラウ——じゃない、クロウと共に拠点に戻ると、深刻な顔でヒソヒソ話し合っているゲイリー達に掴まり、そのままこっそり夜中の秘密会議へと移行。またもや拠点から少し離れる事になった。「分からない。彼女が寝ている時は、胸が上下しているから呼吸を——まあ、ようするに生きていると言う事は一目瞭然だったから、様子を見るだけにしていただけののだが……」

先ほどとは違う場所。

アシユリーが森側への警戒のために作ったかがり火の周りや、座るために引つ張ってきた適当な倒木の上にそれぞれポジションを取ってひそひそ話し合っている。

「いや、でも体温はあるんだ。だよな、トール？」

「うん、しがみつかれていた間、確かに熱は感じた。うん……やっぱり生きてる……とは思うよ？」

なお、今この場にテツサとヴィレッタはいない。

ある程度茨の類で囲った上にそこまで離れていないとはいえ、拠点を本当に空っぽにするわけにも行かないので悪いが留守番。

まあ、サブブレインの通信機能で繋がっているけど。

「言われてみりや、これまでずっと眠りっぱなしなのに痩せてないなあ。あんまり食べないってのは分からんでもないけど」

彼女が起きてから口にしたのは、骨の茹で汁に野草をブチ込んだスープだけ。

まあ、栄養だけは十分にある。

少し臭いがキツイけど、慣れると美味しく感じる自分達がよく口にする物だ。

「そういえばトール君。あの子から抜け落ちた髪、例の『テンシ』とやらと同じ物って言うってたけど？」

「ん、ああ……触った感じがちよつと似てたからヴィレッタに分析してもらって判明したって所」

スキルじゃない、元々の技術や機能なら分かる事は多少ある。

まあ、大したことが分かっていた訳ではないが……構成している物質の繊維が酷似しているってだけ。

「あと……」

「あと？」

「あのテンシ同様、サーチかけても何も分からなかった」

ヴィレッタの件があつてから、サーチをかける時にこっそりと仲間の観察をしたりするので、皆キッチンと種族名とか名前、所持する物等が出てくる。

で、あの白い子は――

「やっぱり、血文字書いたのはあの子じゃないかなあ」

あの血文字と同じく、「unknown」という文字が浮かび上がった。

名前から所持品までさっぱりだ。

「まあ、とにかく行動方針は変わらず。出来るだけ単独行動は避けること。接触ではなくこちらの動向を覗こうとしている人間がいると仮定して、用心を怠らない事」

「トールさんトールさん」

なにかねアオイ君。

「トールさんは、あの人はこちらだと思いませんか？」

「……………あの人っていうか、天使に関しての事？」

なんか、もうあの化け物を天使って呼ぶの定着しちゃったなあ。

「はい。あの怪物に取り込まれてああいう身体になったのか、それとも…………」

ああ、うん。

やっぱりその可能性は考えるよね。

「あの人が怪物になったのか」

「うーん……………まあ……………」



(まあ、後者だろうなあ……。多分だけどき)



「というわけで、とりあえずこの拠点の守りを固めつつもっと便利にしていくという方向性で行こうと思う。問題ない?」

アオイ達三人は早朝に出発。道中で罾を確認しながら湖のペースに向かっていく。もし肉を確保したら、中間地点までこちらから二人送って、回収する予定だ。

「ええ、問題ないわ。でも、具体的にどうするの? 君は器作りでしょ?」

「いんや。さつきスキルで調べたらもうちよい乾燥させた方がいいって事だから、今日は俺も拠点の強化に力を入れるよ」

あるいは、防衛か。

トラップスキルを使って、鳴り子の様な物を——つまり、引つかかったら音がする様な罾を辺りに仕掛けようかとも思ったんだけど……。

(獲物も逃げちやうんだよなあ)

いや、いつそ肉系は全部湖側をメインにして、こっちは野草とか、あるいは釣りにも力を入れるか?

今の自分ならある程度自由に『スキルを作れる』んだし、最悪『栽培』とか『農作業』的なスキルだって習得できる。

思うようにいくかどうかかわからんけど。

「で、何をしようって話なんだけど……」

「罾を増やすのはどうツスか?」

「……川に仕掛けるタイプの罾ならともかく、動物用は増やし過ぎて

もなあ」

「? ボクや隊長なら、罾の場所マップピンングしてるんで問題ないスよ? トール君もやろうと思えばできるハズツスけど」

こんな複雑なモンいきなりパーフェクトに使いこなせるハズがねーだろうが!

正直通信機能ですらえらく感覚的で、スマホかガラケーそのまま使わせてくれと何回思った事か!!

「あー、まあ……スマン。とりあえず動物用の罾はそっちに任せるよ」「テツサ達が罾をやるなら、俺は弓で狩りを……あ、いや、今は単独行動は不味いんだったか」

うん、今はね?

それに万が一こんな時に迷子になったりとかで行方不明者が出ると大事だし、搜索にもかなり手間になるし、その間は食糧の調達よりも搜索を重視するから当然備蓄が減るし……。

まあ、つまり大変な事になる。

(この間の天使の一件も、もしあのまま皆が連れ去られてたらどうなってた事か……)

正直あまり想像したくないことだが、皆を助けるためと言ってヴィレッタを完全に道具にしていたかもしれない。

あの時点で、もう完全にヴィレッタは俺の言う事に逆らえない状態だったし、人間追いつめられれば何をしてもおかしくない。

不安や恐怖を解消するために、望むスキルをヴィレッタに詰め込み、道具として酷使し、ひたすらアオイや皆を追い掛ける。

一切休ませず、一切労わらず……追跡のために、身の安全のために、自分の欲望のままにひたすら使い倒す。

あり得た未来だ。

正直、そうなったかもしれないと思っている。

(冷静であるためには、やっぱり力的な余裕は必要なのか……)

武器、そして防備。

狩猟の道具と武器は別だと、正直考えている。というか、思うようにしている。

ただ、万が一、アオイや皆に危害が加えられる可能性を考えると――

（ああ、違う違う。今は行動予定について考えないと）

一回これは置いておこう。

今はとにかく、人数増えた事も踏まえて効率的に物を集めないと悪い。

食糧、水、木材、石、土、粘土、その他。

「……とりあえず、拠点内に大きい穴を掘ろうと思う」

「穴？ 何に使うの？」

「んー、コイツの使い道を色々考えてたんだけど……」

手に取った石を掲げて見せると、白い髪の女性以外は「ああ……」と納得し、昨晚と同じく俺のそばをチョロチョロしている彼女は首をかき上げている。

同性のアシユリーあたりと組ませてみるか。

上手く色々聞き出せるかもしれん。

「ちよつと、水溜められる場所を作ろうと思う」

現状、ある意味で一番の問題だからなあ。



素焼きの器が全壊し、折り畳み傘は針金のゴミになった今、水汲みは今まで以上に厄介な作業になっていた。

端が少しやられたとはいえ、水に強い布である折りたたみ傘の生地。

これらの端をまとめて掴んで袋状になる様にして、えっちらおっちら一番近い水場である小さい泉からここまで汲んできて、そのまま紐で縛って吊るす。

うん、当然すぐに無くなっちゃうけど、これを削った丸太の中に入れて燃やした石使って煮沸。

その水を胃袋水筒に詰めてそれぞれ活動……。

(思い返すと、めちやくちや危なかったな……。アシユリー達は何も言わなかったけど、食べ物よりも水を優先するべきだった)

どうにかなっていたから探索——というか警戒を優先していたけど……。

「それにしても、ただただ穴を掘るというのも結構疲れるものだな」

昨晚試しに作ったスコップを握りしめたゲイリーが、額の汗を拭いながら土を掻き出す。

うん、やっぱりシャベルの方が良かったな。

あと、器ももつと早く作ればよかった。

もう汚れるのは仕方ないとして、バックパックに編んだ草を敷きつけて使ってるけどさ。

ゲイリーと一緒に、俺も堅い木の枝を使って地面を掘って……掘って？

もうこれ耕してると言った方が正しい気がする。

とにかく土を柔らかくして、そしてその土を撤去する作業に没頭する。

「にしてもため池か。確かに、安定した水場が近くにあると便利だ」

「一応今回は試しだけだな。大量の水を運ぶのも大変だし」

「……早く、器が焼きあがればいいんだが」

「もうちよい待ってくれ。ちくしよう、まさか土器が全部お亡くなりになるとは完全に予想外だったぜ」

失くして改めて理解するが、運搬道具って滅茶苦茶大事。超大事。

もうね、スーパーとかコンビニの袋でいいから今欲しいもん。

いつそゴミ袋くらいの大きさのビニールがあれば、リュックサックの中で広げて水の運搬に使うのに。

「とはいえ、水って貯めておいてどれくらいで腐るんだろう？」

「あー……まあ、一応ある程度は流せるようにするし、入れ替えにそこまで苦労することはないだろう」

毎日消費するものだしな、と。

それこそ水筒に口をつけてゲイリーが言う。

「どちらかというと、蓋の方が大事だと思うな」

「蓋……いるか？」

「ほうっっておくと日光で蒸発してしまうし、虫が大量に浮いたり沸いたりするだろうから痛みやすくなるし……まあ、あった方が良好だろう」

「……んじゃあ、雨の時だけ開けておくか。あるいは雨だけ上手い事入る仕掛けとか」

雨水の確保も大事だ。

なにせ川の水よりも信頼できる飲み水。

正直、色んなものを口にしていてるせいかちよいちよい腹を下すので、少しでも安心できる物にしようとして色々工夫している。

あの天使に全部ぶっ飛ばされたが。

「そういえば、ツール。浄水器はどうなった？」

「砂、小石、砂、小石、灰の5段階で一度試すつもり。ペットボトル浄水じゃあ、一度に詰め込めるものに限界あったし、ちよつと大がかりなモノを作ってみた」

ただ単に大きい三角錐を6個作って石でコーティング。

それぞれの先端をちよつぴり砕いた後に抗菌作用のある針葉樹の葉をフィルター代わりに敷き詰め、それぞれに砂やら小石やら灰を詰めて――

まあ、ようするにあれだ。

超シンプルに描いたクリスマスツリーのイラストを逆さにしたような感じだ。

一番上の三角錐は水の注ぎ口、その下の三角錐一つずつに砂や小石をギツシリ詰めて、それぞれ突き刺していく形だ。

一応それぞれ紐と木の枝を使って崩れないように支えたり吊るしたりしているが……今度大がかりなモノを作る時は強度と安定性は課題だな。

いや、もういつそなんとか樽たるのような物を作るべきか。

「今はアシユリー達が、木材集めるついでにちよいちよい水を流し込んで洗ってくれてる」

本当ならばその下に水を貯めておく容器を置いて、ある程度綺麗になった水を回収する仕組みなのだが……。

今はその前の準備段階と言う訳だ。

「あの子、向こうに預けて良かったのか？」

「いやあ、女性陣に預けた方がいいというか……他に選択肢がないというか……」

正直、泣きじゃくる美人には勝てん。

「いやもうホント……ゲイリーがいなかったらある意味で心が折れたわ」

「ん？」

「女所帯に男一人とか、肩身が狭すぎて死ぬる」

それも全員それぞれ綺麗だし可愛いし無防備だし、それぞれ腹に一物隠してて、隙あらば暗躍して、結果俺が斬られたり喰われたり刺されたり……。

「今すぐスキルで皆男にしようかなあ。出来るよなあ、多分。うん、皆男でいいじゃん。なあゲイリーそうは思わないか——」

「落ちつけ」



「——で、一番近い水汲み場はここ。一応トール君がここまで道を引いてくれたけど……今度看板を書いておかないとね。さっきの分かれ道は左が水場、右が湖の拠点よ」

アシユリーは話でしか聞いていないが、かつてトールは大雨の際に流されかかって死にかかっている。

そのため、湖の時といい今の海側拠点といい、出来るだけ水場——特に川や海からは距離を取っていた。

どちらの拠点も、水がある所よりも高い場所を選んで、大雨が降っても安全に逃げられるようにしてある。

この水場は例外で、拠点を築いた後に発見した小さい泉である。

(アオイちゃんが本当に山育ちなら、川の怖さを知らないハズがないわよねえ。まだ出会って間もない頃の話だっていうし……わざと一緒に危険な目に合って、ツール君に自分との連帯感を持たせようとした……つてのが正解かしら)

やはり抜け目がない女だと静かに嘆息しながら、アシュリーは自分の腕にしがみついている白い髪の女の腰を抱く。

白を基調としたスーツ。ドレスほど派手でもないし、色気を漂わせるようなものではないが、セレモニーなどで身につけるような服を着ている彼女は、常に誰かの腕に掴まっている。

最初はツールに、その後はテッサとゲイリーに、そして今はアシュリーに。

「あ……、はい。……大丈夫です、覚えました」

口が上手く動かなかったのか、碌に喋らなかつた女も徐々に喋る様になつていた。

(……ヴィレッタの事で頭が痛いのに、この女からも目を離すわけにはいかないのよねえ)

なにせ、あの怪物と構成が似通った身体を持っている固体だ。

もう一度怪物になるという可能性は十分にあるし、それを強調した上でヴィレッタのように排除を唱えてもよかつた。

実際、自分達が押せばツールも断りづらかつただろうし、上手く立ちまわれればアオイかテッサに処分させる事も可能だつたハズ。

少なくとも、アシュリーはそう考えていた。

(さっさと処分しちゃうには惜しいのよねえ。貴重なサンプルなんだし)

ツールのスキルの特徴が多様性なら、あの怪物の能力は単純に強力だつた。

実際に交戦したヴィレッタの視覚情報を共有しているアシユリーとテツサは、直接対峙したツールとヴィレッタの次に怪物の詳細を把握している。

飛行能力もそうだが、自分達が抵抗できなかつたある種の催眠に近い能力、そして地形が変わる程の衝撃波。

催眠で取り込めなかつた存在は物理的に排除する。

実に分かりやすく、強力な存在。

(もし、この子がもう一度アレになるのなら……なれるのなら……) 危険な賭けになるとはいえ、ちよつかいをかけるだけの価値はある。

アシユリーにとって、ヴィレッタやテツサは完全に信用できる存在とは言い難い。

同胞の振りをしていたガイノイドのヴィレッタは言うに及ばず、テツサも命令に絶対服従するタイプではない。

(問題児を集めた部隊の隊長なんて碌なモノじゃないっていうのは分かっていたけど、ここまで異常な事態で足元が揺らいでるのはマズいわ)

アシユリーは今、便利な道具を欲していた。

最悪、ツール達がこちらに敵意を持ったとしても完全な敵対は避けるような切り札——いや、見せ札をだ。

今は友好的な態度をそれとしているが、このままではいざという時に自分の意見を通す事が難しい。

そういう考えが出るほどに、アシユリーは静かに焦っていた。

ただですら、アシユリーはツールに敗北しているから。

「ねえ、貴女。そろそろ名前くらい教えてくれないかしら」

敵意や悪意を感じさせない笑顔の作り方は慣れていた。

優しい仮面という、アシユリーが磨き続けてきた己の武器は強力だ。

「あ、はい……。グレース……グレースIIミユレーズ」



「フランスという国で、歌手をやってました」

歌手。

歌い手。

——歌を歌う者。

「へえ……」

女は、心の中で舌舐めずりをする。

「もう聞ってるでしょうけど改めて、私はアシュリー。アシュリー  
エア」

「よろしくね?」



これから先、大量の木材が必要になる。

トールの判断にテツサは納得し、アシュリーと共に白い髪の女への  
周辺案内も兼ねて、木材集めやその他の日課を請け負った。

彼女の手には細長い雑草の葉が握られている。

まるで剣のように細長く、そして鋭いその緑の葉は側面が汚れてい  
た。

薄く色がついた液体がこびり付いている。

「浅かったツスカね」

誰に言うでもなく、テツサは眩く。

その目に映っているのは目の前の光景ではなく、『自分』に向けて多少固い笑みを浮かべる、白い髪の女の顔。

テツサは、密かにアシユリーの視界をジャックするために暗躍していた。

万が一に備えて。

この女が、トールに——テツサが可能性を見た男に危害を加える事態に備えるために。

自分の職業——歌手について尋ねられたのが嬉しいのか徐々に口が軽くなる白髪の女の首筋には、うっすらと赤い線がついている。

真っ直ぐ、鋭く、浅く。

(いや、今回は神経毒だし効果はあるはず。まあ、寝たきりの時に口から色んな毒飲ませても効いてなかったから、期待はしてなかったツスけど)

手にしているのは、小さな瓶。

かつて、ヴィレッタがアシユリーを暗殺するために持っていた小瓶。

ゲイリー達魔術師が矢や石に塗る毒物だ。

「……いつそ心臓ぶち抜くか崖から突き落とすツスカね。隊長の内心はともかく、トールくんは説明すれば……いや、無抵抗じゃさすがに駄目ツスよねえ」

アシユリーが焦っていたように、テツサも内心で焦っていた。

「トールくん……。なんでアオイさんを向こうにやつちゃうんスカああ……」

テツサにとってアオイという女は、ある意味競争相手であるのと同じ時に、ある意味で絶対信頼できる女だった。

トールという男の害になることはまずやらない。

甘やかしているように見える所もあるが、それでも彼を絶対に裏切らない存在だ。

(いやまあ、考えてることは分かるツスよ。アオイさんやボクを重用しすぎると、余計な火種になりかねないって判断したんだろうって事

は。でも……)

誰かいる。誰かがいるのだ。

常に警戒をしているテツサや、特別勘の鋭いアオイの目を抜けた何者かが。

出来る事ならば、最低でもヴィレッタはこちらに残して欲しかった。

トールとテツサ。

銃火器という強力な武器を作りだせるアレをコントロールできる二人が揃っていれば、大抵の危機はどうとでもなる。

(ボクなら……ボクだって、君の邪魔をする奴を手にかける覚悟をしているツスよ。トールくん)

テツサの世界は、テツサ達の国は、強固な階級社会だった。

アオイの国よりもかなりマシだとテツサは思っていたが、それでも自由な国と言うには窮屈で、厳しくて、弱者に厳しい国だった。

テツサは最下層の出身だった。

金銭どころか食う物もなく、週に一度の配給だけが頼り。

汚水をすすり、わずかな食糧を奪い合い、奪われない様に隠れ住む。

……あるいは、友人知人を人買いに売る。

それが自分の親や——子供でも。

「トールくん……」

毒を塗った葉を、先ほどメタルマッチで点けた小さい火種の上に置き、燃やしつくす。

細い白煙はすうつと上り、すぐさま立ち消える。

「大丈夫ツス、大丈夫ツスよ」

隠し持っていた拳銃を引き抜き、クルクル回して素早く構える。

テツサの現状唯一の切り札。

本来ならば、アシユリーを暗殺した後にヴィレッタの電腦を破壊するためのモノ。

「君は、ボクにとっての希望なんスから……」

「守らせて欲しいんスよねえ。ボクにも」

## 幕間くサムライガール&カニバル・アルケミストく

湖の拠点とは、ある意味ツール達のグループにとって最初の家と言える場所かもしれない。

最初の上流拠点は、本当に夜を越すだけの場所だった。

しっかりと留まり、新しく何かを作って、暗くなる前に火の用意をして、焚火に当たりながら食事の用意をして、雑談をしながら縄を編んだり木を削ったり……。

本当の意味で生活が始まったのは、やはりこの場所なのだ。

「またここに拠点を作るって最初は二度手間だなあと思いましたけど、意外に悪くないですねえ……」

一度壊してまた建て直したシエルターは、数こそ減っているが、かつての場所とほぼ一致している。

「ああ、アオイ君。回収した獲物の処理は一段落したよ」

出来るだけ真っ直ぐで、それなりに長さのある枝や倒木の先端をナイフで鋭く削っていたアオイに、クラウが声をかける。

「ああ、お疲れ様ですう。ヴィレッタさんは？」

「一通り吊るして乾燥の用意まで終えた所で、念のために周辺の罠の再確認に行くと行っていた。ほら、ええと……『ナリコ』だったか？」

「ああ……」

事前にツールにトラップスキルで調べてもらった、警戒用の罠。鳴り子。

紐に引つ掛ければ、それと繋がった木の板と、そこに当たる様に仕掛けられた複数の枝がカランカランと音を立てる——まあ、それだけの罠である。

「設置したのはこの周辺だけなので、そんなに時間はかからないでしょうねえ」

「ああ。こつちも作業は進んでいるようだね」

「まあ、進んだとはいえ、さすがにまだまだ数が足りませんがね」

「手伝おう。縄も正直、足りていないしね」

アオイがやっているのは、この拠点をしっかりと囲む柵の材料作り

である。

大きな野生動物が簡単に入り込まない様にというのもあるし、ここに確かなグループのテリトリーがあるというアピールになる。

(……あえて、シエルターの数を増やすのも手ですね)

大人数の拠点だという事をアピールすれば、相手も警戒して時間を稼げるかもしれない。

あるいは、表向きは友好的な接触を促せるかもしれない。

(まあ、まだ相手が集団だと決まったわけじゃあないですしねえ)

アオイは、この安定と死守こそ重要だと考えていた。

他に誰もいないのならばともかく、他の人間がいるかもしれないとなれば、ここを渡すわけにはいかない。

(まあ、今のトールさんならどうとでもなる問題かもしれないけど……)

先日の密会。今いる二人とトールの計三人でのやりとりを思い出して、アオイは苦笑する。

「まあ、とりあえずお願いします。二つに枝の山を分けてますけど、とりあえず私から見えて縦にまつすぐ積んであるのが、地面に突き刺す用の物ですのえ……」

「ああ、どちらかの先端を尖らせればいいんだね？」

「あと、反対側は面取りお願いしますねえ？ そのままだと、打ちつけた時に割れちゃうかもしれませんのでえ♪」

「分かった。道具は？」

「先日の鹿さんの肩甲骨で作ったノコギリがありますのでそれで……。断面を出来るだけ綺麗にして角を削れば大丈夫でしょう♪」

後に地面に突き刺し、石でたたいて打ち込むための枝だが、この時に叩く所の断面が綺麗でなければ、石で打ちつけた時に割れてしまう可能性がある。

そのために叩く所を可能な限り平らにして、円周部の角を取り除く。

地味だが大事な作業だった。

「そうだ、食糧の分配はどうする？」

「そうですねえ。まあ、今日一日で燻して明日渡しませしよう。後でヴィレッタさん経由で向こうとの報告会がありますので、その時に改めて相談ですかね」

「……おおよそ、三分の一くらい渡せばいいかな」

「ですなえ♪」

本日の成果は中サイズの魚三匹に兎一羽。

今は全てさばいた上で、適当に作った肉などを吊るす干し竿に吊られて、今は天日干しされている。

水気がなくなれば、今度は煙で燻してとりあえずは完成だ。

「量はそんなにないですからねえ。まあ、向こうには鹿さんのお肉がありますし……それくらいいいでしょう」

「そうだね。こちらは人数が少ないとはいえ蓄えがほぼゼロだから……」

「トールさんも当然それは分かっていますし……。まあ、その分こちらは態勢を整えたら狩猟に力を入れる必要がありますねえ」

もつとも、アオイは食糧に関してはそのままで心配していない。

まだ泥抜き用の器がないし、すぐに食べられるわけではないがあの小さい貝がいる。

加えて、味は酷いらしいが一応食べられる小さい小魚も湖で大量に繁殖しているのを確認している。

「……あ、そうだ」

「ん？」

「クラウさんって一応武器とか扱えるという話でしたが、実際どうなんです？ 獲物のトドメ刺しとかいけます？」

「ああ、そういうえば説明していませんでした」

クラウは腰にぶら下げているナイフを右手で抜き、ポケットに突っ込んでいた左手から針金の束を取り出す。

「私は、私自身で特殊な加工を施した金属を自在に操る事が出来る」

針金を親指の付け根で挟んだまま、人差し指と中指でナイフの切っ先を挟む。

そしてそのまま柔らかい粘土を引き延ばすような気軽さで、ナイフ

を引きのばす。

より細く、より長く。

「このように形状を変えたり、強度をある程度操作したり動かしたりする事が出来るんだ」

ナイフを元の形に戻すと、今度は針金がウニユウニヨと、まるで蛇のようにくねり出し、鎌首をもたげる。

「軽ければ軽い程自在に操れる。まあ、工房どころか材料もないし新しく作ることには出来ないが——」

手元のそれらから、アオイの方へと目を向けるクラウ。  
すると、眼の前にいたはずのアオイが消えていた。

「——っ!!」

咄嗟にクラウは、『私』から『自分』へと切り替わる。

「ちえすとー」

「ふあああああああうっつ!!!」

首筋に薄ら寒い物を感じた『自分』——クラウは、直感に任せて針金を操り、いつの間にか背後に回っていたアオイが自分の首を目掛けて振った刃を何重にも絡め取り、渾身の力で食いとめる。

「うおおおおいアオイさん!! 一応自分はアンタと和解したはずじゃ——」

ギリギリと針金に強度を込めながら反論を試みるクラウの目に入るのは、先ほどまで枝を削っていたナイフの切っ先。

「ちえすとー」

「のおおおおおおうっ!!!」

やはりクラウの首元を狙った鋭い突き。

クラウは咄嗟に鞆に収めかけていたナイフを軽く振るい、長さや強度を調節しながら向かってくる切っ先を受け流す。

「おおく。なるほどお」

「なるほどお、じゃねーんだよなんなんだ一体!!!」

刀に込められた力がわずかに緩んだ瞬間、素早く針金を引き戻して後方に飛び、距離を取るクラウ。

対してアオイはのほくんとした態度で、



「いえいえ、いざという事態が起こった時のために力量を計って  
こうと思ひましてえ」

「すんつつつげえ殺気を感じたが!!!」

「ご安心くださいあい♪ ちゃんと薄皮一枚は残すつもりでしたよお  
?」

「それにしてはえらく殺気がヤバ……え、残す? 皮を?」

「はあい♪」

絶句するクロウ。

ニコニコするアオイ。

「まあ、実力の方は分かりましたあ。クラウさんの方はともかく、クロ  
ウさんは十分戦力として数えられますねえ。何気にアシユリーさん  
やテツサさんよりも強いんじゃないですかあ?」

「い、いや、アイツら力も速さも自分以上だし……」

一歩前に出るアオイ。

一歩後退するクロウ。

「まあまあクロウさん。クラウさんも含めて仲良くやっついていきましよ  
うよお♪」

「お、おう」

「というわけで、お仕事お願いしますねえ? 明日明後日までには、と  
りあえず柵と門くらは完成させたいのでえ♪」

「ああ、分かった。分かったよ全力尽くす。だからその剣から手え離  
せ」

「剣じゃなくて刀ですう」

「知らつつねえよ!!」

「……………」

「……………」

「ちえすとー」

「同じ手を何度も喰らうかあああああああああつっ  
」

!!!!!!!

「おい、鳴り子の動作確認を終えて……なにを遊んでいるんだ貴様ら」

## 068：『はじまり、はじまり』

「あく。あくあくあく、そうか見覚えあると思ったら……」

ヴィレッタを介して向こう側と明日の食糧の分配についての話し合いが終わった所で、ちょうどアシユリー達が戻ってきた。

その時に白い髪の人がアシユリーと会話しているように見えたから、これは色々聞けるかもしれないと思ったが……。

(本当に俺の世界の人間だったかあ)

「そういうえば、君は彼女に見覚えがあるような言い方など言っていたが、わかったのか?」

「何年か前に、日本で初めてのツアーを開催する予定だった外国の人氣バンドが突然マネージャー含めて全員謎の失踪したとかつてニュースで……金髪だったし髪型違うし気が付かなかったな」

「いつくらいだったか。自分が中学……一年の時だった?」

「あなた……日本人?」

「そうです。色々と事情があつて、今はツールと呼ばれてますけど」

……おい、小さく笑ったな?

いや、分かるよ。

うん、凄く分かるよ。

「グレースさんは——」

「グレース。……グレースでいい」

「……わかった。グレースはいつからここに?」

ずっとアシユリーのどこかを掴んでいるグレースは、空いた手で木匙を使って、フライパンから白湯を掬って口にする。

「もう時間の感覚はないけど……多分、三年くらい。……三回冬を経験してるから」

やっぱ冬があるのか。

内心、シエルターの増強——いや、家の建築や暖の取り方の重要度を上げて、差蘭位聞いてみる。

「これまでどうやって? 服がかなり綺麗だけど」

白を基調としたセレモニースーツは滅茶苦茶綺麗だった。

泥どころか土埃の汚れすらない。

「分からない……。この服も、二回目の冬の時に燃やしたから」

「ふむ」

燃やしたってことは、燃料にしたのか。

「二回目の時に燃やしたって事は、一年目の冬は生き延びられたんスねえ」

「……コロニーがあったから」

「？ コロニー？」

小さく頷くだけのグレース。

口を小さく開いては閉じる彼女を見て、アシュリーが苦笑しながら話す。

「アタシ達は完全に森の中に放り出されたけど、彼女達は最初っから建物の中にいたらしいの」

「建物？」

「ええ」

なぜか小さく震えだしたグレースを抱き寄せ、頭を撫でながらアシュリーは続ける。

「とてつもなく大きい透明なドームの中にくつもの建物があって、一応生きていくだけの設備は整ってたらしいわ」

「設備？」

「水の浄化設備、食糧プラント、空気の循環設備。……最低限とはいえ、かなりの物だと思うわ」

「……何人くらい住んでたの？」

「たくさん。でも話を聞く限り、多分200人前後だったんじゃないかって推測してるわ」

「200人、か」

自分のクラスが36人。単純計算で5,6クラス分。ちょうど一学年くらいはいた計算になる。

(そんな設備があれば、遠くからでも分かるはずだ)

自分達が来た方向の反対側にあったのか、あるいは――

「ドームの中に、更に建物があったんだよな？」

「らしいわよ?」

「じゃあ、ドームの外は?」

これに関しては聞いていない事だったのか、アシユリーがグレースに改めて尋ねる。

「え……と……、よく分からない設備がある方向の外には砂漠が広がっていて、反対側は森に覆われていました」

「外には出なかったのかい?」

縄を編んでいるゲイリーが尋ねると、彼女は首を横に振る。

「……出入り口が見つからなくて」

「出入り口がない?」

なんじゃそれ。

「じゃあ、例えばドームの一部を壊して外に出ようとした人とかは……」

またもグレースは、首を横にふる。

「いたかもしれないけど……知らない」

(んー、なるほど。まとまったグループって感じじゃないっぽいなあ) そもそも200人もいりゃあ、仮に一人のリーダーがまとめていたとしてもその中で色んなグループが出来てただろうし当然か。

「最初の一年は上手くいってたんです……。突然知らない所に連れて来られてパニックを起こす人は少なくなかったけど……食糧プラントには機械が育てて収穫や解体している野菜やお肉がたくさんあって、日光がピリピリするほど暑い夏でも、外で雪が降るような冬でも……中の温度は快適で……」

最初の一年は。

つまり、次の年は……。

「最初の秋の時に、食糧プラントの機械が少しずつ調子悪くなって行って……」

グレースが、お茶——恐らく彼女にとって未知のモノだったのだから——の入った不格好な木のカップに恐る恐る口を付ける。

「最初は決まった時間に水を撒くスプリンクラーが止まってしまつて……その時は水やりを当番制にするだけで良かったんだけど……」

今度は収穫してた機械が、その次には家畜の自動解体装置が……他に  
もドンドン動かなくなつて行つて……」

「……食べる手段がドンドンなくなつていつたつて事か」

俺たちは、そもそも手持ちの物以外何も無いスタートだったからある  
意味協力しやすかつたけど、最初から生活が安定してたら、多分す  
ぐにバラバラになつていたと思う。

特に、アシユリーとゲイリーの対立は避けられなかつただろう。

「まあ、大体はわかつたツスよ。大方、設備が信じられなくなつてい  
て人力での管理に移行。だけどそれで派閥争いが激化して食料の独  
占や奪い合いが始まつたつてとこツスカね」

テツサがそう言うのと、グレースは小さく肩を震わせる。

細部はともかく、当たらずとも遠からずといつた所だろう。

「トール君、とりあえず今日の質問はここまででいいんじゃないかし  
ら？ 本人もまだ良くわかつていない所も多いし」

「？ わかつてない所？」

グレースを抱き寄せ、アシユリーは優しく肩を叩きながら、

「ある程度は分かつたんだけど、目が覚める前……つまり、自分がどう  
してここにいるのかがよく分かつていないようなのよ」

アシユリーの腕の中で小さく頷くグレース。

なんとというか、スゲー懐いている。

口が悪いかもしれないが、犬か猫のようだ。

『トール君』

唐突に、頭の中にアシユリーの声がある。

『それで、まだ例の化け物の話はしていないのよ。最後に覚えている  
ことの話から話題を誘導しようとしたらそんな感じで……』

申し訳なさそうなアシユリーの声に、だが返し方が分からずに小さ  
く頷いて答える。

練習相手だったテツサや、多分スキルとかが影響してるんだろう  
ヴィレッタ相手なら苦労しないんだけどなあ。

「とりあえず、事情は分かつた」

やっぱり、探索にも力を入れるべきだろう。

そもそも周辺の状況もわかっていない現状だ。

島なのか？ それとも陸続きの場所なのか？ それすらわかっていない。

それに、グレースのいうコロニーどころか建築物の影すら……

（ああ、いや……例の地下施設っぽいモノがあったか）

調べなきやいけないものがたくさんある。

だが同時に、やっておくべきものもそれなりにあるわけで……。

「食料はともかくとして、さすがにそろそろ寝床もキッチンとした物にしないと限界だよなあ」

「そうねえ。人数増えたし、こういつてはなんだけどほとんど女の子だから……もうちょっとプライバシーは欲しいわ」

「ですよー」

特に今は、急遽作り直した簡単な差し掛け小屋。ぶつちやけ普通に丸見えである。

まあ、風を避けるためにほぼ全員向きは同じなのだが、用を足しに起きた時などにチラツと寝顔を拝めてしまうことがある。

「でも、家ってどうやって作ればいいんだろ？」

「……………」

おうこつちみろや。

「トール君、例の素焼きでレンガみたいなもの作れないんすか？」

「んあ？ 出来ないことは思う……いや、できるみたいだけど」

テツサに尋ねられてとっさにスキルで確認する。

うん、できることにはできるんだけど……。

「これ積み重ねて家ってできるのか？」

よくわからんけど、隙間とか空きそうだし安定する気がしない。

家の作り方って（スキルのための）脳内検索をかけてみるが引つかからない。

あれかな。建築とかそっち方面じゃないとダメなのだろうか。

「んー。粘土を混ぜた泥とか挟めば安定するんじゃないっすかね。サバイバル講習でそんな小話を聞いたような気がするっす」

「ああ、だったわね。寝床づくりなんて急繕いさえ覚えておけば問題

ないし、アタシ達は」

ですよね。

軍だったっていうなら速さの方が重要だろうし、そもそもしつかりした設備とか作るんだったら補給品で立派なテントとか来そうだし。

アシユリー達の世界なら、やたら高性能なのがありそうだ。

「乾けばいい……のかな。屋根はじゃあ藁とかで？」

「こつちも焼き物じゃダメかしら？ 素焼きで使った板をつないでいくか……それか、U字型の瓦を作ってして……こう……交互に合わせ重ねる感じ」

子供が手で再現する恐竜を噛み合わせるような感じのことをするアシユリーに、まあなんとなく言いたい事は分かる。

(となると、それなりに長い瓦を焼くか、あるいはつなぎ合わせるか。さてどうしたものか)

少々工夫はいるだろうが、どうにかなりそうなレベルではある。

問題はそれだけ大量の物を用意するために、どれだけ時間がかかるかということか。

(地下の方も、出入り口見つからないならいつそ穴掘ってヴィレッタが作れる一番強力な銃で壁に穴開けて強硬突破って方法もあるんだが……)

今度向こうに行つた時に、あの障壁の材質も詳しく調べてみるか。

前見たとき新しい発見に興奮しまくって冷静さを失ってたからなあ。

こういうのは絶対どつかに入り口があるはずだというゲーム脳も真つ青な思考の元に周囲を探索したらこれだもんなあ。

「衛生関係にも関係あることだし、明日は建築に関してもいろいろ試行錯誤——いやそうだな、きちんと風や水に耐えられるかどうか、試しにレンガみたいなのを作ってみるか」

うまくいけば、量産した上で積み重ねて簡単な小屋みたいなものを作ってみよう。

問題い当たらなければそれを拡張する形で。

とりあえず水に耐性があるかどうか、浄水器作って試してみるか。



例の円錐を重ねた奴はぶっちゃけ上手いかなかった。もっと大きくしてぎつちり中身詰めた上でしつかり上から押さえないと、ただただ水が上から下へと流れるだけだ。

(やること、多いなあ。考えることも)

例の人の気配も今のところよくわからないし。

(状況が動くまではとにかく基礎固め、か)



それは、人と変わらぬ大きさである。

それは、石や砂で構成されている。

それは、呼吸を必要としない。

それは、命あるものではない。

だが、見ている。

焚火に照らされた男女の姿を。

監視の対象となっているものを。



——対象『???

—— S t p | E | J | 『?????』

を対象とした監視可能

エリアへの到着完了。現在の状況を送信……完了。

——指令の再確認。実験対象『???

—— S t p | E | J | 『?????』

の

データ習得、およびメンタルマップの作成、および送信。  
——了解。

——『第??次??実験』を開始します。

## 069：アピールってすごく大事だよね

一週間。というか七日というべきか。

俺たちが二つのグループに別れてそれだけの日数が経ったが、今のところすべて順調である。

まず、食料の調達がようやく安定する程度には戻った。

湖や川の魚、その周辺や道中に仕掛けた罟やゲイリーの狩猟の成果、日頃の野草採取。

これらの成果の安定によって、ある程度は他のことにもっと労力を割けるようになった。

例えば、ゲイリーの知識と俺の野草スキルで見つけた野生化した野菜の回収と栽培。

つまりは畑を作ろうと色々試していた。

ため池にも水を貯めたり、他にも――

「トール、コイツも上手くいったぞ。草木灰を混ぜて焼いた奴は、一晩水に浸けても大丈夫だ」

「おー、おっけおっけ。それじゃあ早速量産に入るか」

他にも、先のことを考えてちゃんとした家を作る必要があると建材の開発を始めていた。

最初は板を作ろうと思っていたのだが、現状ではちよつと無理がある。

自分がスキルを習得、あるいは誰かに習得させれば大きい刃物とかノコギリくらいすぐに作れそうなのだが……。

(いつでも好きなきときに好きな能力作れて、それを好きな人物に習得させられるとかどう考えてもヤバい奴だ)

ちよつと前のレベルアップ制というか、なんらかの条件を満たすたびにスキルが増えたりするのは、この世界の法則や謎を解くのも兼ねていたからまだアレだったが、ここまで自由度が高くなるとどうしても警戒心が出てしまうのは仕方ないだろう。

(スキルの習得とかは、本当にギリギリの時だけにしよう。習得も、基本は俺かヴィレッタで……うん)

この間、例外としてアオイとテツサにちよつとだけスキルを習得してもらったけど、これ以上は止めておこう。

「トール、浄水のほうはどうだ？」

「んー、とりあえず一晩水を何度もくぐらせたなら、濁りは大分取れるようになった……けど」

グループを分けた時から、水に丈夫なレンガの開発は行っていた。イメージが中途半端なせいか、あるいは対象外だったのかスキルに尋ねたレンガの作り方はおっかなびつくりな始まりだった。

粘土と泥を混ぜて焼いた試作一号を使つて浄水器——最初のお手軽感満載なのではなく、ガツツリと、まるで井戸口でも作るかのようにしつかりと作った浄水装置。

しつかりと中身を詰め込めるように作った三段階の浄水装置。

以前作った円錐を重ね合わせたモノは実際使用してみると役に立たなかった——肝心の濾過するための砂や粘土、小石や灰が溢れて流れていつてしまったのだ。

おそらく、もつとぎつちり詰めた上で余裕を持たせなくてはならなかったのだろう。

ドバドバ流れる水、溢れる器、零れる中身。

急ぐのならば、それこそ石を貼り付ける魔法を駆使してそれっぽいものも作れたのだが……正直、便利すぎる力に段々不信感を抱いている。

いや、結局使うときは使つちやうだろうけどさ。

特に知識系スキル。

「こつちも、出来ればちよつと高いところに同じものを作って二層というか……二巡される形にしたいかな。水を。そうすればもつと安心して使えると思う。まあ、基本的に煮沸すること前提なのは変わらないだろうけど」

「それはそうだろうな。なんだかんだで食あたりは怖いからな」

「サバイバル生活続けた今でも、たまにお腹やられるからねえ。その度にゲイリーには世話になってるけど」

同性のゲイリーには、異性にはちよつと恥ずかしい事を色々お願い

してしまっている。

腹を壊して……その、トイレに付き合ってもらうことで多々ある。昼間の明るいうちとかならば一人でも問題ないのだが、暗くなるとさすがに無理だ。

トイレまでちよつと距離あるもん。暗くて道見えないもん。動物寄ってるかもしれないもん。

「まあ、俺が役に立てているならよかった」

「ただでさえ、狩りではゲイリーの世話になっているからな。いやもうホントマジでありがとう」

マジでゲイリーいなかったら詰んでた可能性あるし、感謝しかない。

一番頼りにしていた海での魚釣りが上手くいってない現状、ゲイリーがたまに大きな動物を狩ってきてきてなければ致命的なたんぱく質不足に陥っていた可能性大だ。

こつち来て最初の頃、アオイ——いや、ゲイリーとアシユリーを加えた四人で過ごしていたころには地味に悩みの種だった。

草だけで人が生きるのは絶対に無理！確信）

せめて豆とかキノコの類がないと死ぬ。

「レンガもそうだが……木の製材にも手を入れたい所だな」

「そつちはアシユリーたち科学組とクラウドに期待だなあ。一応、粗雑なやつなら今でもできなくはないんだけど」

一応、板——として作ったつもりの物はある。

試しに作ってみた、太すぎず細すぎない丸太を真ん中で綺麗に真っ二つにしたものだ。

まあ、手間がかかりすぎて十枚……というか十本と言うべきか。

ただ半分に割って、断面を石や砂で軽く磨いただけだからなあ。

いやホント、労力に見合ってねえ。木材の加工法も早いところ道を見つけておかないと。

「まあ、使えるものはちよつとでも確保しないと。ゲイリー、動物の皮は？」

「肉を取り除いたものは、縮み防止のために枝で作ったフレームに広

げて吊るして乾かしてある」

「……服とかに使えそう？」

「良いところ敷物だな。おそろく、時間が立てば固くなる」

「ですよなあ」

……あんまり。あんまり頼りたくはないのだが。

(色々役に立つようななにか……こう、化学物質とか薬とかを作れるようなスキル。覚えてみるのも考えておくかあ)



「ここらでアタシ達の有用度をツール君に示さなければならぬ。わかるわよね？ テッサ」

「もちろんツスよ。だから色々考えているじゃないツスカ」

グレースと共に使えそうな木材や食料の回収を終えて、一度彼女を拠点まで連れて戻ったアシュリーは、少々離れた川に仕掛けた魚用の罟の確認に向かっていた。

「どうにも、アタシはグレースの子守役にされちゃってから中々自由に動けなくてね」

「ある意味役には立ってるツスね」

「最低限はつてだけよ。このままじゃあ主導権なんて妄想の先にしかあり得ないわ」

「と言っても……ボク達がかしらの技術者っていうのならばともかく、一兵士レベルツスからねえ……」

「せめてデータベースにアクセス出来れば知識どころか技術もロードできるのだけど……」

「ないものねだりになっちゃうツスよ」

「わかってるわよ」

今回のチーム分けは、自分たちを分断する意味合いも多少はあると、アシユリーは読んでいた。

ツール自身は深く考えていないかもしれないが、多少はそういう意図があってもおかしくはない。

「この際、精度には目をつむって工作機械でも作らないと埋もれてしまっただけだわ。ゲイリーちゃんも、狩猟で定期的な肉の確保に貢献してるし」

「あざといツスよねえ。あれ、多分ちよつと手を抜いてるツスよ」

「ええ、でしょうね。自分が罨以外で、それも一度に大量の肉を持って帰れる存在

だという事をアピールするために、当りをつけながら収穫のタイミングを図っている。動植物が違うし魔法が使えないとはいえ、『自然と共に在る者』である彼女にそれが出来ないはずはない」

「ツスよねえ。まあ、逆に言えばゲイリーさんが適度に肉を持ってくる間は安心できるわけツスけど……それならなおさらこっちはどうするかって話ツスよね？」

分かり切っているテツサの言葉に、アシユリーは爪を噛んで苛立ちを抑える。

「発電はできないかしら？」

「現状では……一番簡単な単極式の発電装置でも、キチンと作動する永久磁石と加工した銅は必須ですし」

「……動力だけなら、水力は？」

「ああ、水車つすか。それをやるには、計算とかはともかく最低限キチンとした木材とその加工法が必要ツスねえ」

「やっぱりそこに戻ってしまうわね」

本来ならばアシユリー達が役に立てるだろうことは、ツールが持つスキルの力に寄ってかなりの所が可能である。

自分たちが脳にインストールしている技能は、こちらの世界に来る直前に必要とされていたもの。

格闘術を始めとして、簡単なサバイバル技術や潜伏の技術などこそ十分なものを用意していたが、『生活のための知識』となるとかなり少

ない。

一度経験があればある程度は自然な脳の働きで思い返すこともあるだろうが、生まれる前から兵士になることが決まっていた彼女にはそういう知識や経験はなかった。

「この際、適当でもいいから円盤を作つて、工作装置を自作してみるべきかしら」

「いいんじゃないツスカ？ とりあえず一定精度の物を作れるとなればできることも増えるでしょうし、ボク達なら生身の人よりも正確に作れるツスカよ」

「……加工系の技術を落としておけば良かったわ。今更言つても仕方ないけど」

「ツスカねえ。まあ、どうするツスカ？」

テツサは特に意見がないのか、肩をすくめてため息を吐く。

「まあ、簡単な機械……機械つていうかカラクリ道具なら作れるとは思ふツスカからそれはまあ……一番細かい動作に向いてそうなガイノイドを使つていろいろ試すとして……」

毛局答えらしい答えを出さなのまま、テツサは『うくくくん』と伸びをする。

そして、

「まあ、そつちも試しながらということ……ボク達以外の人間の調査に関してはどうなつてるツスカ？」

調査。まだ確認できていない転移者——おそらく人間だろう——に対しての進歩を尋ねたテツサに、今度はアシュリーが眉に皺を寄せ

る。「痕跡は2パターン。おそらく単独であちこち移動しながら、それでもこの周辺をグルグル回っている痕跡。で、もう片方は——」

「数こそ少ないけど、かなり丁寧に痕跡を消している少数の……いや、単独っぽツスカね」

「……監視か、あるいは様子見か」

「あんまり言葉変わつてくないツスカ？」

「そう？ かなり違いがあると思うんだけどねえ……」



「悪意があるか、ないかの違いって」

## 070：長雨

あれやこれやでいろいろあつて、復興もだいぶ進んだ。

失った土器や容器の数々は前よりも使いやすいものが数を増やし、生活基盤は着実に向上していた。

「……雨、長いですねえ」

「ああ、今日でもう三日目になるな」

そんな俺たちの活動は、今現在最低限のものとなっている。

この長く激しい大雨のせいである。

「念のため皆でこっちに避難して正解でしたかねえ」

湖側の管理を任せていたアオイが、自分の横に座っている。

雨の中でも使えるように屋根を付けて、雨水が流れてこないようにやや深めの溝を周囲に掘った焚火場で体を温めている最中だ。

彼女の膝の上には、テツサの頭が乗っている。

アオイの膝枕で完全爆睡モードである。

そのテツサの少し湿った髪を、まるで猫をあやすかのようにアオイが手櫛で丁寧に梳かしている。

「水場からはそれなりに離れた拠点だったと思うけど……危なかった？」

「さすがにシエルターが壊れたり、全部水びだしになったりすることはないと思いますが……。まあ、予期しない水の流れとか、雨の強さに負けて木や太い枝が倒れてきてもおかしくなかったですしい」

「ああ、まあそうだよな」

先ほどまで、テツサが命綱をつけて水回りの食糧調達のために頑張っていたのだ。

俺とアオイでしつかり、3重に束ねた紐を引っ張っていたが内心冷や汗モノだった。

ちぎれでもしたらエライことになっていたかもしれない。

テツサは万が一の場合を話した時も『大丈夫ツス大丈夫ツス』と言っていたが……。

「まあ、とりあえずそれなりの数のお魚さんは確保できました。痛み  
そんな食べ物から先に食べるとして、残った食糧も念のためにもう一  
回燻しておきましょう。残ってる食糧を腐らせでもしたらもう大事  
ですよ」

焚火台の上で焼いていた石を、先日作った火箸（長さ太さを整え  
た二本の棒の先端を薄く石で包んだだけ）で取り上げ、軽くそこらに  
積んでいる草束で煤を払って、やはり石でコーティングした木製バケ  
ツの中に放り込む。

入れた瞬間「ゴポゴポオッ！」と泡と共に水が暴れて多少がバ  
ケツの外へとこぼれてしまう。

しばらくそうして、泡が出るのが収まったら石を取り出し、乾燥さ  
せるために火から離れたところに置き、また火にくべていた石の煤を  
払って放り込む。

これを二、三回繰り返せば完全に沸騰したお湯の出来上がりだ。  
飲む温度としては最初の一回で程良いのだが、煮沸消毒というこ  
とを考えると十分以上に熱を与えないと怖くて飲めない。

（雨さえ上がれば、土器に合わせたかまどとか作ってみるか。やっぱ  
直火で手早く沸かせる方がいい）

「うい、お湯できたよー。お茶にする？ それとも白湯？」

「あ、白湯で構いませんよ。お茶葉もこれから先貴重になるかもし  
れませんし、どうぞツールさんが楽しんでくださあい」

「……そう言われると飲みにくくなるな」

とりあえず木のカップでぶくぶく泡立つ湯を掬い、軽く回して気休  
め程度に温度を下げてそつとアオイに渡す。

「雨が止んでくれればそれで済む話なんですけどね。どうしてこうも  
ピンポイントに延々と降り続けているのか」

「……そうだな」

山のほうに探索に向かっているアシユリーやヴィレッタもそろそろ  
帰ってくるだろう。

なにせ、暗いところでも問題がないセンサーをそれぞれ内蔵してい  
るとはいえ、ここよりも木々が深い森だ。明るさはともかく、この雨



腕を大きく伸ばして、アオイの腰周りを抱きしめるようにしてまた寝息を立て始めた。

アオイは片手で白湯の入ったカップを傾けつつ、もう片手でテツサをやさしくなで繰り返すことを止めない。

「ちくしよう、あれ貼り直すのはさすがにキツイぞ」

「んくく。それなんですけどお」

アオイは少しあたりを見回し、

「例のアレ、私かクラウさんのどちらかに使ってみませんかあ？」

例のアレが何を指し示すかはわかっている。

とうとう他人に付与できるようにまでなったスキルのことだろう。

「どちらにせよテストは必要だと思えますしい」

「んーーーー。……んーーーー」

言ってることはすぐよくわかるし正しい。

実際スキルというか、この突然変異したスマホで何ができるのか、何が起こるのか。そしてなぜそういうことが出来るようになったのかの解明は必要不可欠と言ってもいい。

が、いざ得体のしれないものを使うとなると不安になってしまいうのも仕方ないだろう。

「私としては自分の方をオススメしますよお。基本的な体の構造が一番近いのは私ですし、クロウさんは体に変化が起こった時にそれがいい方向に行くとは限りませんし」

「クロウは……そうだなあ」

体が崩れかかっているクロウだ。自分の自己再生ほど変に強力ではない、自己保全のスキルなどがあるのならともかく、今のところそれらしいスキルは存在しない。

（突然回復したら却ってボロボロになりそうだしなあ。そうでなくてもモスキルの取得で俺みたいに体に変化が起こったらヤバそうだし……）

「そうだな、明日の森——の中までとは言わないけど、周辺の探索には俺とお前で行こう。具体的な話はその時に」

「はい、了解です」

まあ、すべては雨が止めばの話だ。

仮に止んだとしても、森の中にすぐに入るのは少し怖い。

いまだに湯気を立てるバケツの中の湯を掬い、干した山菜を摘み入れて木匙でかき混ぜる。

味気ないスープの完成だ。

「……海水、もうちよつと汲んでおけばよかったな」

俺たちの生活には、絶望的に調味料が足りていない。



「やっぱり、この雨は……」

森の中に少し入り、アシユリーは手持ちのサバイバルパックのケースの中に降り注ぐ雨水を貯め、そして周囲を見回す。

後ろには一言もしゃべらず、ただ付いてきているヴェレットタが無表情で控えている。

「ヴェレットタ、解析は？」

「雨水の成分は通常の水と変わらない。ほぼ真水……いや純水だ」

もはや隠す必要がなくなったのか、ただ坦々とした物言いのヴェレットタをアシユリーは軽く一瞥し、小さく鼻を鳴らす。

「通常雨には、大気中で水蒸気が凝結・昇華したときに微粒子を核とする。それにここはすぐそこが海。海塩成分がそれなりに含まれているはずなのにそれも無い？」

「ない。繰り返すが純水レベルだ。多少混ざり物は確かにあるが、おそらく降雨時に大気から取り込んだもの。この純度ならば、振り出し始めた時点ではより純度の高い超純水だったと考えられる」

「……ありえない雨、ね」

軽く髪をかきむしり、ナイフで雨に濡れた樹木の表皮を削りヴェ

レットタに渡す。

「それにしても純水レベルか……地表の養分たっぷり含んで流れちゃうのはちよつと面倒ね。すぐにどうこうなるというわけではないでしょうけど」

含むものが少ないということは、これから含んでいくものが多いということだ。

「……この雨、どちらかしら」

尋ねるような口調ではあるが、アシュリーはヴィレッタに尋ねてないなかった。

言葉こそしゃべるか、アシュリーにとってヴィレッタはもはや道具であった。

「この世界そのものの特性、あるいは異常。……あるいは」

アシュリーはそつと手を宙にかざし、天より降り注ぐ水の恵みをその手で受ける。

「魔術師が関わってるのかしら。奴ら、確か水をその場で精製することもできたわよね。ああいうことが出来る術者がそれなりの数いれば、広範囲に狙って雨を降らすことだってできるんじゃないかしら。後で貴族様に確認してみなくちゃ……」

ヴィレッタも同じように手を伸ばし、解析を続ける。

ある意味で安全圏にいるとも言え、そして追い詰められてもいるヴィレッタにとって、情報収集と自らの有用性をアピールすることが大事である。

AIとはいえ自ら思考し、行動するヴィレッタのある種本能と言えるものがそう動かしていた。

「……？」

そして、見落とし一つ無いように念入りに雨やそれが付着した植物や石、泥に異変がないか調べていると、ヴィレッタの頭脳に違和感が出てくる。

解析結果に、気が付けば一種の空白のようなものがある。

そこだけ真っ白というか、念入りに塗りつぶしていたはずなのに気が付いたらどうやっても見落とす空白があるといった所か。

「……アシユリー」エア」

「なによ」

「妙だ」

「だからなにかよ」

「雨の中になにかある」

「……今アンタが分析して純水って言ったじゃない」

「言った。だが、違う」

「はあ？」

「——この雨の中に、我々用にプロテクトをかけた何か仕掛けられている」



## 071：人は『利』のために暗躍する

「クラウド、どう？ なにか分かった？」

雨の中に不審な物あり。

アシユリーとヴィレッタからそう報告を受けた俺は、さっそく他の方向に知識を持っているだろう人間——つまりはクロウに話を持ち掛けた。

「ふむ。ヴィレッタ君が言う『彼女たちが認識できた不純物』以外に、確かに違うものがあるね。しかもやけに精密だ。信じがたいが、目に見えないほどの絡繰り仕掛けの……機械というのだったか？ そういうものがある」

クラウドの手のひらの上にはまるでシャボン玉のように拳大ほどの大きさの『水球』が形を変えながらふよふよ浮いている。

「ヴィレッタ、どうして何かがあるとわかった？」

焚火場の周りでは、アシユリーとテツサが採取した雨の解析をしている。

ヴィレッタが解析できないと言ったのが本当かどうか、自分で確かめるためだ。

「うまく言語化できないが違和感だ。何か避けられている……いや、目や耳を塞がれた……背けられた？ とにかく、自分の五感が『何か』を避けている。そんな感じがした」

「……サーチスキルを取らせただけか？」

互いの物の見方の違いがスキルにも作用するのではないか。

そう考えて先日、ヴィレッタには前々からお願ひしていた通りサーチスキルを取ってもらっていた。

そんなものがなくても口に含めば解析できると本人は言っていたが、やはり取っておいてよかったと考えるべきだろう。

「ダメ。私自身で解析してもやっぱりただの純水ね。いえ、もういろいろ混ぜってしまったって純水とは言えないか」

「ボクもつすねー。クラウドさん、そのナノマシンだけ抽出できるツスカ？」

「ああ、今やっているところだが……」

「雨水に対してサーチスキル使っても駄目だったからな。ナノマシンそのものを引っ張り出してくればどうにかなるかもしれない。……ナノマシンそのものは俺にとっても理解できるものだけど、どういう用途で雨に混ざってんだコレ？」

周囲は完全に真つ暗で、明かりは焚火の明かりと、それを反射して輝く宙に浮いた水球のみだ。

……やっぱり明かりはもつと必要だな。明日は雨除けの屋根と篝火台を増設しよ——いやでも燃料がなあ。

「どういう用途に使われているかはともかくですねぇ……アシュリーさん達に認識できない何かがあるのは間違いないですよね？」

「ええ。ヴィレッツタの証言だけだったら正直信じられなかったけど、こうして第三者に『ある』って断言された以上はね」

自分で確認できないものがあるというためか、アシュリーは少々悔しそうにしている。

テツサも同じくだ。

「……つまり、少なくとも君たち3人に対してなんらかのアドバンテージを持つ存在がいるということになるのでは？ このナノマシンとやらが私たちのような『世界』に呼び寄せられた存在ではなく、あとから誰かに混ぜられたとするのなら、の話だが」

クラウの推測に、今度はヴィレッツタも含めた3人が顔をしかめる。

「わざわざ私達の感覚を避けるように作られている以上、私達を知る人間——とは、断定できないか」

アシュリーは、ジロリと小さくヴィレッツタをにらむ。

「私たちを知るナニカ。つまり、私達の世界からまた何かが来た可能性は十分以上にあるわ」

「それも、ボク達をよく知ってるツスねえ。じやなきやわざわざこういう真似はしませんって」

どれだけ解析しても無駄だとあきらめたテツサが、するくつと俺の背後に寄ってきて後ろからしがみつく。

あの……テツサさん。そのピツチリした服装でそれやられると俺

もう動けないツス。はい。

「まあ、ボク的には雨もやつかいかなあつて思ってるんすよ。結局この雨もおかしいわけツスよね？」

「これも科学的な奴？」

「いやまあ……純水は僕らの暮らしに欠かせなかつたですし、実際精製する施設とかがありますけど、それを広範囲にばら撒くとか無意味すぎるツスよ」

テツサさん、つむじのあたりに顎乗せてカクカクさせるのを止めるのです。

体が微妙に振動するからそれに合わせて胸がですね……。

「クラウさん、ゲイリーさん。魔法的にはどうなんですかあ？」

「私からすると、水に純度なんてものがあつたのかという話なんだが……ゲイリー君はどうだい？」

まあ、純水なんて意識しないよなあ。

身近なところにあるものなんて、使い捨てコンタクトの保存液だけが洗浄液だかがそうだった？ くらいの意識だ。

「水を精製する魔法は確かにある。ついでに言えば、純水かどうかはわからんが作り出した水は不味い。というか、味がしない」

中にミネラル分などがないということだろうか？

それなら純水っぽいけど……

「それをまあ、高所で発動できればできないことはないだろうが……これだけの豪雨を、しかも数日に渡つてとなるとかなりの数の術士が必要になる」

「かなりの数つてどのくらいツスカ？」

「そうだな……最低でも100人前後、といった所か」

「……もしいるとすれば大勢力だなソレ」

100人以上の集団とか……まず食い扶持を考えてしまうな。

それだけの食糧を確保するとなると、狩りとか罫だけじゃあすぐに限界が来る。

農作業をやるにしても、それが形になるまでは狩猟や採取などを大規模にやる必要がある。

「それに加えて、あの雨の中にナノマシンを仕込んだ連中もいるはずツスよ。いるなら、ですけど」

「そんな大所帯なら、もつと簡単に痕跡は見つかると思うわ。ここから離れていたとしても、調理の必要は出てくるし、そうなると火は必ず使うはず。それも大量に」

「となると煙がどっかに立つはずツスねえ。誰か見かけたツスか？」

テツサの問いかけに全員首を横に振る

確かにそういう痕跡は、自分たちの拠点の物以外見たことがない。

「逆にそういうのを隠すことってのはできる？」

「ああ、簡単さ」

森の中の専門家であるゲイリーが、カップ一杯の湯冷ました水を一気に飲み干して答える。

「煙が高いところまでいかないようにするだけだから、適当に葉が生い茂っている枝の下で火を焚けばいいし、火明かりも囲ってしまえば意外と目立たない」

「……隠れようと思えばいくらでも隠れられるか」

もし、本当に隠れている人間がいるとなると面倒だなあ。

少人数なら問題なさそうだが……。

いやいや、油断は禁物か。ウチの面子なんてグレース以外全員が荒事に長けた人間だ。

自分みたくないのがイレギュラーで、本来はそういう技能に長けた人間を集めていたという方が納得できる。

(ヴェレッタの制限全部取っ払って、武装系のスキル全部使用可能にしておくか?)

自分の護衛は正直グレース以外の誰か一人がいればいい。

アオイは、自分もテツサもいないときはクラウ——正確にはクロウを頼れと言っていた。

よくわからんが、多分向こう側にいる間にそれなりの信頼関係を築いたんだろう。

たまに一緒に遊んでるし、互いの力量もその時に確認したんだろう

か。

「ん~~~~」

しばらくアオイはチビチビとお湯を飲みながら考えていたが、考えがまとまったのかカップを机代わりの平らな石の上に置く。

「トールさんトールさん」

「はいはい」

「雨あがり次第片っ端から森に火をつけていきませんか?」

「テツサ、被疑者確保」

「了解ツス!」

「そんな! なぜ!!」

なぜじゃねーよアホウ。



「やあゲイリー君。浮かない顔をしているが大丈夫かい」

そろそろ寝る準備をしようとか皆が火の側を離れ始めたあたりで、まだ火に当たっていたゲイリーにクラウが声をかけた。

「ああ、クラウか。問題ないよ。ちよつと考え事をあつてな」

「この雨の事かい?」

「まあな」

カップの中の湯冷ましに指を入れて軽くかき混ぜる。

小さいナニカが中に混ぜっていると聞いてさすがに煮沸しただけの水を飲むのは怖くなり、クラウが念入りに貯水池の水を調べて除外した。

その上にトールが即席の蓋を作って覆いかぶせたり、周辺に魔法でちよつとした堰せきを作ったりして、雨水が簡単に入つてこないようになっている。

「文字通り命綱の水に得体のしれないものが入っている……というのは気味が悪いものだな」

「まったくだ。アオイ君は全く気にせずガブガブ煮沸して飲んでいたがな」

怖いもの知らずというべきなのか、アオイは「なんだろうと水の色が透明ならば煮沸すれば大丈夫です!!」と言って普通に飲もうとしていた。

トールが一応サーチかけて、その後念のためにクラウドが調べて問題なしとされたが……。

「あれは、君の国が敵対していた国の物……とはまだ断定できないわけだが、近いものではあるのだろうか?」

「一応わ、ね。ただ、そこまで詳しいわけじゃないんだ。連中が目に見えないほど小さな機械を使えるというのは知っていたけど、具体的な使い道なんてほとんど知らなかった」

安全だと一応お墨付きをもらった水をカップの中で揺らすゲイリーの目は、クラウドから見て随分と自信なさげに見えた。

「奴らの中で、特に身体を改造している連中は自分の体の中にアレを大量に飼っているらしい」

「飼う、とは何のためにだい?」

「なんでも、そうすることで体の中から怪我や病を治したり、それに一部の毒を無害化できるとか……どこまで本当かは分らんがそういうことが出来るらしい」

「私の世界でも、体の中に虫を飼っている魔物の話なら聞いたことがあるが、理屈的には同じなのかな。実に興味深い。明日、改めてトール君と一緒に抽出に成功したモノを調べる予定だが、実に楽しみだ」  
クラウドはゲイリーの隣に腰を下ろし、適当な枝を数本火の中に放り込む。

「それに関係することだが……もし、君の世界の魔術師が大勢いればこの雨を降らせるといふのは本当かい?」

「……できないことはない。——と、思う。純度どうこうの話は分からないが……」

「しかし、この世界で君は魔法が使えなくなっているのだろうか？」

クラウの疑問に、ゲイリーは顔をうつむかせ、

「まあ、俺は……な。魔術師としてそこまで強かったわけじゃない。自分よりも優秀な魔術師なら、あるいは魔法の行使も可能なかもしれない」

「そうか、魔術師が君一人しかいないからそういう検証が難しいのか……」

自分も今現在、たった一人の錬金術師であるクラウは苦笑いして肩をすくめる。

「念のために周辺に罫を仕掛けておこう。皆がここに集結している今なら、手持ちの針金や破材だけでなんとかなるだろう」

「そうだな、自分も手伝おう」

そうしてゲイリーは立ち上がり、乾かしておいた木材を紐で束ねた物を背中に簡単に背負った。

そしてクラウと共に、辺りの警戒を強めるために松明のわずかな明かりを頼りに歩きだす。



一組の男と女——いや、二人の女が出かけていく様を、一人の女——グレースⅡミューズがじっと自分のシエルターの中から覗いていた。

(数が多い集団がいるかもしれない、か)

今は使えないが、自分の切り札だった声の力が——いや、それ以外の力も全部失った今、うかつな真似は出来ない。

(どうしよう……。強いのは当然数の多い方だけ……)

重要なのは、自分の身の安否である。

強い方についた結果、ぞんざいに扱われる——あるいは酷い扱いを受けるようになったでは割に合わない。

(この人たちは、女性が多いのはいいけど武闘派が多い)

刀をぶら下げているアオイに軍人であるアシユリーたち三人組、それに敵対していたというゲイリー。

(あのモノクルつけた人は、たまになんだけか男っぽくなるし……)

口調が丁寧な時はどこか中性的な、それでも女性らしさがあるのに対して、たまにモノクルを外しているときはツールとやんちゃな男子同士のようなやり取りをしている所をグレースはしつかりと見ていた。

(ちよつと辺りを歩いてみたけど、自分が歩いた後は足跡が残ってる。隠密スキルも消えちゃってるっていうことは他のスキルも全部消えちゃってる……なんてことっ！)

そして、今この場に集まった面子の中で一番焦り、追い詰められているのも彼女だった。

なにせ、彼女がもつとも頼りにしていた武器がすべて消えているのだから。

(どうしよう。今のままなら安全だけど、ツールとかいう子供一人の動きですぐにグラつく力の強いグループなんて信用できないじゃないかい)

帰る方法。見つければそれに越したことはないが、グレースの中の優先順位は低い。

とにかく身を預けるのに信頼できる状況を作らないと。

それが彼女の第一目標だった。

(女になれるみたいなきとも言っていたけど、人格はさすがにそのままだろうし……)

グレースにとって、男がいるのはそれだけで大きいマイナスだった。

彼女が自分の世界で歌手として輝いていた時も、彼女にとって男は自分の足を引っ張ったり、頭を押さえつけてくるうつとうしい存在だった。



こつちの世界ではもつと酷い。

もつとおぞましくて、凄惨で、陰気で、——グレースにとっての『恐怖』そのものだった。

(トール派閥とでもいう方が過半数を占めていて、かつ強い。付くなら迷わずそつちではあるけど)

逆にいえば、トールがいなくなればバランスは崩れる。

クラウは理性的に行動するだろうし、死因次第ではアオイやテツサもあるいは……。

だが、それでもグループは二つに割れるだろう。

(数が多いグループがいるなら、潰れてもらわないと困る。合流されるのも困る)

つまり、グレースの理想としては——

このグループが他のグループとぶつかり勝利した結果、トールが上手く行方不明になってくれることだった。